31-3191

文學博士 金澤庄三郎 纂編

韓半島林業

東京 三省堂書店 發兌

緒言

國語は思想交換の要具にして、辭書は國語の寶庫たり。故に其内容は直ちに以て其社會の發達を卜し、其文華の程度を窺ふ料とすべし。我言靈のさきはふ國、我言靈の助くる國、古くより辭書に乏しからず。上は和名類聚鈔、新撰字鏡の類より、下は東雅、和訓栞、雅言集覽、俚言集覽等に至るまで、皆、其時代に應じて撰述せられ、後の見るものをして略遺憾なからしむ。世々の學者亦勉めたりといふべし。

明治の昭代、文物燦然として學術の隆興實に前代未聞なるに際し、國語學界の事業の獨り之に伴はざる憾みあり。辭書の如きも、未だ多く德川時代の著作の羈絆を脫せず、中古以往の語にのみ詳にして、現代の生きたる言語に組なりこれ社會全般の風に認むるところにして、實に我學界のために惜まざるを得ず。明治式辭書の編纂は著者年來の希望にして、聊か積年其材料の蒐集に

從事し、今や漸く『辭林』の名を以てこれを公表するに至れり。然れども、由來辭書編纂の業容易ならず、更に改訂を加ふべきところ亦多々あらん。著者は專心一意、身を此事業に捧げ、版を重ぬる毎に改刪增補を怠らざるべし。博雅の君子、若しこの意を諒とせば、幸に指教の勞を吝む勿れ。これ獨り著者の幸のみにあらざるなり。

明治四十年四月、歐米漫遊の途に就かんとする前三日

東都本郷西片町の寓居に於て

金澤庄三郎識

凡例

一、語詞の排列は五十音順に從ひ、促音は「ッ」の部に、撥音「ン」は最後、卽ち和行の後に排置したり。

一、「イギリス」語「フランス」語「ドイツ」語「ロシア」語「スペイン」語「ポルトガル」語「オランダ」語・梵語・「アイヌ」語・琉球語・朝鮮語、及漢字の唐宋音に屬するものは片假字を以て記し、其他のものと區別せり。

一、語詞の排列は歷史的假字遣に從ひ、尙、一般の便宜を計らんがため、其直下に標音的假字遣を記入し、これを表はすに細字の片假字を以てせり。

一、語原に關する事項は著者自ら所見ありと雖も、古來、其說の紛々たるものに至りては、見ん人の紛亂を惹起するを恐れて全くこれを除きたり。而して原義の轉々して漸次其意義を異にするに至りたるものは、(一)(二)(三)の符號によりてこれを區別し、力めて其例證を擧げん事を期したり。

一、語詞の上に冠したる符合の中、＋は古語、〻は俚語、〳〵は字音たることを示し此等の何れをも有せざるものは古今に通じて一般に用ひらるゝものと知るべし。

一、本書は又二種の索引を設けたり、一は發音索引にして、專ら今日の發音より古來の歷史的假字遣を知るためにす。假へば「蝶」なる語の假字遣を知らんとせば先づ今日の發音に從ひ「チョウ」の部につき披見すべし、然る時は其直下に「てふ」なる假字遣を發見すべし。而して本索引に於て使用せる標音的假字遣は大體に於て文部省假名遣改正案に從ひたり、卽ち、「デ」「ジ」は悉く「ジ」「ヅ」「ズ」は悉く「ズ」とし「ワ」に發音せらるゝ「ハ」は「ワ」に收め、「イ」「ウ」「エ」「オ」に發音せらるゝ「ヒ」「フ」「ヘ」「ホ」「非」「エ」「ヲ」等は皆「イ」「ウ」「エ」「オ」にてあらはしたり、例へば「鼓」の假字遣を知らんとせば「ツヅミ」の條にてこれを索むるが如し。

一、本書の編纂に關しては足助直次郎氏終始予を助け刻苦精勵克く其業を完からしめたり、茲に特記して謝意を表す。

略語表

名	名詞
代	代名詞
數	數詞
自	自動詞
他	他動詞
形	形容詞
助動	助動詞
副	副詞
接	接續詞
助	弖爾乎波
感	感動詞
接頭	接頭語
接尾	接尾語
枕	枕詞

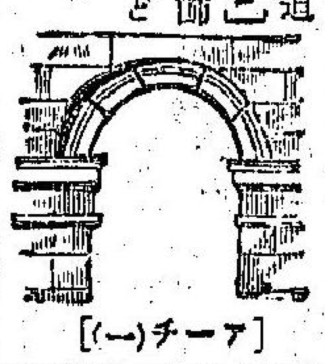
(四)…	四段活用
(下二)…	下二段活用
(上二)…	上二段活用
(上一)…	上一段活用
(下一)…	下一段活用
(か變)…	加行變格活用
(ら變)…	良行變格活用
(さ變)…	佐行變格活用
(な變)…	奈行變格活用
(形一)…	形容詞第一種活用
(形二)…	形容詞第二種活用

【哲】	哲學
【佛】	佛教
【心】	心理學
【論】	論理學
【教】	教育學
【法】	法律
【經】	經濟
【動】	動物學
【植】	植物學
【生】	生理學
【鑛】	鑛物學
【理】	物理學
【化】	化學
【數】	數學

辭林

あ

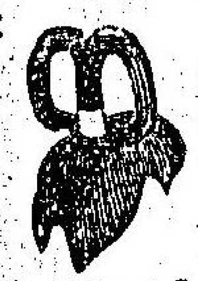
あ 口を濶く開き舌を低くして發する母音。五十音圖にて、安行の第一に位し、假名の加字は、安・太・奈・波・末・也・良・和の韻(ヒビキ)となる。
‡あ[足](名) あし。「—音」「—搔く」。
‡あ[畦](名) 田のさかひ。あぜ。くろ。
‡あ[吾](代) あれ。われ。「—が君」「—妻(アツマ)」。(我)。
‡あ[彼](代) あれ。かれ。「—の人」「—は、六波羅の高平太がとはなはとて」。
あ(感) 應答する聲。「女房—といふ」。(唯)。
あ(感) 「ああ」に同じ。「一同に、—射たり射たりと感じけり」。(噫)。
アーチ(名) ⊖[Arch] 石或は煉瓦等の材料にて、上部を圓く積み立てたるもの。迫持(セリモチ)。(拱)。⊜[Green arch] 杉・檜等の緑葉を以て、包み飾りたる弓形の門。多く祝賀などに建つ。(緑門)。


[アーチ(一)]

アートタイプ[Artotype](名) 一種の寫眞版。膠と重「クロム」酸との混合物の感光性を利用せるもの。

アームストロングはう[—砲＝Armstrong gun](名) 「イギリス」國「アームストロング」會社にて製造する速射砲及鋼線砲の稱。「サー、ウィリアム、アームストロング」が千八百五十四年に創案せし後装施條砲に基因して、漸次諸種の改良を加へたるもの。
アーメン[Amen](感) ⊖「ヘブライ」語、「眞に」の義。⊜「キリスト」教徒が祈禱の終りに唱ふる語。「心願如是」の意を表す。
アール[Are](名) 「フランス」國地積の名。一〇〇平方「メートル」、即ち我國の三十坪二合五勺。
ああ[嗚呼](感) 歎喜・悲哀等の情を表する發聲。「—かなしや」。(噫、嗚呼、於戲)。
(ああ(副) あのやうに。あのくらゐに。(如彼、如斯)。
ああら(感) あら。あれ。「—あやしやな」。
(あい[愛](名) ⊖めづること。好み樂しむこと。⊜慈(イツク)しみ思ふこと。かはゆがり。いつくしみ。あはれみ。
(あい[哀](名) あはれみ傷(イタ)むこと。かなしみ。あはれみ。なげき。——きあい[擧哀] 貴人の逝去したるとき、聲をあげてかなしみ泣くにいふ。
あい[鮎](名)【動】「あゆ」の訛。
(あい(感) 應答する聲。(唯)。
(あい-あい[藹藹](名、副) 茂げるさま又は和やかなるさまにいふ語。
(あい-あい[哀哀](名、副) かなしきさま又はいとほしきさまにいふ語。
(あい-いく[愛育](名) 大切にしてそだつること。
(あい-かう[愛好](名) ちようあい。きにいり。
あい-きやう[歇經](名) 年をこえたる鮎。又、腹消けにしたる子持の鮎。
(あい-きやう[愛鄕](名) 我鄕里を愛すること。

(あい-きやう[愛敬](名) かはゆらしきこと。人ずきのすること。——げ[愛敬毛](名) 顔に愛敬をそふるおくれ毛。——もち[愛敬餅](名) 婚姻後三日目に、男姑におくる餅。「又、其詩歌。」
(あい-ぎん[愛吟](名) つねに好みて吟ずること。
(あい-くるし[愛](形、二) いとかはゆらし。あいきやうこぼるゝばかりなり。
(あい-ぐわん[哀願](名) なげきてねがふこと。
(あい-ぐわん[愛玩](名) 愛してもてあそぶこと。
(あい-けい[愛敬](名) 愛情深くして禮儀厚きこと。
(あい-こ[愛顧](名) なさけをかくること。ひきたて。ひいき。
(あい-ご[愛護](名) ⊖いつくしみて保護すること。⊜芝居にて、女形の用ふる鬘(カツラ)の一種。
(あい-こく[愛國](名) 自國を大切にすること。自國を愛すること。


[あいご(二)]

(あいこく-しゆぎ[愛己主義＝Egoism](名) 「りこしゆぎ」(利己主義)に同じ。
あい-さ[秋沙](名)【動】「あきさ」の音便。
(あい-さう[愛想](名) ⊖もてなしぶり又は應對やさしく、人ずきのすること。「—の好い子」。⊜かはゆく思ふこと。——づかし[愛想盡](名) 愛を捨つること。又、其文句。
(あい-さつ[挨拶](名) ⊖こたへ。こたへ、應對。⊜容禮。返禮。「—に來る」。——にん[挨拶人](名) ⊖あいさつに出る人。⊜仲裁人。
(あい-こ[愛子](名) かはゆき子。いとしご。
(あい-じ[愛兒](名) 前條に同じ。
(あい-じつ[愛日](名) ⊖左傳の註に冬日可愛と

春の花のあした秋の月のゆふべ、おもひをのべ心をうごかさずといふことなし。ある時には糸竹のしらべをとゝのへ、ある時には大和もろこしの歌ことばをあらそふ。敷島のみちのさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、辭の林昔よりもしげし。

(千載和歌集序)

あさに出づる日にいふ語。

(あい-しふ)[愛執](名) 愛情たち難きこと。

(あい-しやう)[哀傷](名) 人の死を悲しむこと。

(あい-しやう)[愛情](名) 父子・夫婦・朋友間などに互に和合して他の幸福安寧を望む慈悲の情。めでいつくしむこゝろ。なさけ。

[アイス](名) (「アイスクリーム」の略語なる氷菓子と音の似通ふより)ふ高利貸の俗稱。

(あい-す)[愛す](他、さ變) ㊀いとほしく思ふ。かはゆく思ふ。なさけをかく。めづ。いつくしむ。㊁たのしく思ふ。このむ。「月を愛す」。㊂大切にす。「身を愛す」。

アイス-クリーム[Ice-cream](名) 一種の食品。最も普通なる製法は、牛乳四合玉子五個と砂糖適宜とを鍋に混入して湯煎にし、これをさまし罎に入れて製氷器にて氷結せしむるなり。「氷菓子」。

(あい-せん)[愛染](名)(佛) (梵語 Raga の譯)明王の一。形像は三目六臂、身色日光の如く、三目忿怒し、六臂に弓・箭・鈴・杵・鉤・索を執り、光焰中に住す。

[あいぜん(一)]

(あい-せふ)[愛妾](名) 氣に入りのめかけ。

(あい-せき)[哀戚](名) かなしみ。なげき。

(あい-せき)[哀惜](名) 人の死をかなしみをしむこと。

(あい-せき)[愛惜](名) をしむこと。をしみ。

(あい-そ)[哀訴](名) 「あいさう」の訛。

(あい-そ)[愛想](名) 「あいさう」の訛。——づかし[愛想盡](名)「あいさうづかし」に同じ。

(あい-ぞう)[愛憎](名) 愛することゝにくむこと。

(あい-たい)[靉靆](名) ㊀雲のたなびきわたるさまにいふ語。㊁めがね。眼鏡。

(あい-だい)[欸乃](名) 舟を棹さして相應ずる聲。ふなうたの節をとる聲。轉じて、ふなうた。

(あい-たう)[哀悼](名) 「あいしやう」に同じ。

(あい-た-しゆぎ)[愛他主義=Altruism](名) 自己の幸福は他人の幸福の中に見出すべしとし、他人の幸福を增進するを以て行爲の標準となす主義。一に利他主義ともいふ。

‡あい-だちなし[間斷無](形) 「あひだちなし」の音便。

‡あい-だる[愛垂](自、ら下二) 愛せられてあまゆ。

‡あいたんどころ[朝所](名) 「あしたどころ」の音便。

(あい-ちやく)[愛着](名) 愛にひかさるゝこと。愛情に執着すること。

(あい-つ)[彼奴](代) あやつ。あのやつ。

‡あい-なし[間無](形) 「あひなし」の音便。

‡あい-なし[愛無](形、二) かはゆげなし。

‡あいなだのみ(名) あてにならぬ頼み。そらだのみ。

(あい-なめ)[鮎並](名) (動)「あゆなめ」の訛。

(あい-にく)[生憎](副) あやにく。あなにく。

アイヌ(名) (アイヌ語 Ainu)北海道土人の稱。もと彼等の語にて人類の義なりしが、今はこれを以て北種族の名とす。

アイノ(名) 「アイヌ」の訛。

(あい-ねん)[愛念](名) 愛するおもひ。

(あい-べつ-りく)[愛別離苦](名) 愛する人と、はなれ離くわかれぐるしく思ふこと。

(あい-ぼ)[哀慕](名) 親しきものに別れ、其人をかなしみしたふこと。

(あい-まい)[曖昧](名) ㊀明白ならざること。たしかならざること。㊁うしろぐらきこと。——や[曖昧屋](名) 怪しげなる女を抱へおきて客を呼ぶ家。

(あい-みん)[哀愍](名) あはれみ。なさけ。

(あい-ゆう)[隘勇](名) 隘勇線を守る蕃地の壯丁。——せん[隘勇線](名) 臺灣にて生蕃の來襲を防禦するため、山谷に亙りて設けたる線路。

(あい-よく)[愛慾](名) 愛著の心。

(あい-らし)[愛らし](形、二) かはゆらし。「とし」。

(あい-れん)[愛憐](名) あはれみ。いつくしみ。

(あい-ろ)[文色](名) (あやいろの約) すぢ。わけ。けぢめ。あやめ。

(あう-あう)[怏怏](名、副) うらみ又は滿足せざるさまにいふ語。「—樂まず」。

‡あう-いく[奥行](自、か四) 人の後につきて行く。

アヴォイルヂュポイス-かう[Avoirdupois](名)「イギリス」國及「アメリカ」合衆國にて普通に用ふる衡量。七千「グレイン」を以て「一ポンド」となすもの。

アヴォガドロ-の-かせつ[——の假說=Avogadro's hypothesis](化)「イタリア」人「アヴォガドロ」の提出せし假說。同温度同壓力に於けるすべての氣體の同容積中には、同數の分子を含有すと說けるもの。

(あう-ぎ)[奥義](名) おくのて。おくぎ。

(あう-さい)[殃災](名) わざはひ。さいなん。

(あう-さつ)[鏖殺](名) みなごろし。

(あう-し)[奥旨](名) 「あうぎ」に同じ。

アウシキナ(名) (「アイヌ」語 Aush-kina)(植) 毛莨科に屬する多年草。北海道などに産す。莖の高さ一尺五寸許、六七月の頃、莖頂に小白花開く。

(あう-しやう)[鞅掌](名) (になひ且さゝぐの意)つかさどりていそがしくはたらくこと。

(あう-しゆくばい)[鶯宿梅](名) ㊀(植) 梅の異種。花の香殊に高し。一重なるも八重なるもあり。紀貫之の女、父の沒後に村上天皇より其愛樹を召し給ひけるに、「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞこたへん」と詠じたりとの故事。

(あう-なう)[懊惱](名) 心をなやますこと。

‡あう-なし[奥無](形、二) あくそこなし。あさはかなり。

(あう-む)[鸚鵡](名) (動)攀木類中鸚鵡科に屬する鳥の總稱。熱帶地方の産にして種類多し。體軀は鳩大乃至鷄大なり。頭は圓く頸短大にして、上嘴は鈎曲して下嘴は短小なり。舌は肥厚肉質にして能く人語をまね、羽色美麗なり。——がひ[鸚鵡貝](名)(動)頭足類中四鰓類に屬する貝。形は鸚鵡の嘴に似る。外套腔中に二對の鰓を具ふ。口の周圍に線狀の觸手數多あり。介殼は螺旋狀をなし、外表に赤褐色の斑文あり。內面は美麗なる眞珠質を以て覆はる。介殼の內腔は許多の隔壁によりて數房に區分せられ、最終の大房に體軀を容る。介殼美しく、酒杯又は花瓶などに製す。

[あうむがひ]

——がへし[鸚鵡返](名) ㊀人より詩歌をかけられたる歌を、僅に語を換へて、直ちに返歌となすこと。㊁人よりいひかけられたる杯を、僅に飲みて、直ちに返杯すること。㊂他人の話などを聞きたるまゝに述ぶること。——せき[鸚鵡石](名) ㊀(礦) 孔雀石の一種。うすき黃綠色を帶ぶ。㊁物の音の反響する石。㊂俳優のせりふを書き抜きたるもの。

‡あうら[足占](名) 古昔のうらなひの一法。足をふみてせしもの。

‡あう-よる[奥寄](自、ら四) 奥の方へ寄る。

アウン[阿吽](名) 氣息の出入。「ア」は一切開口の始め、「ウン」は閉口の終りなればいふ。

‡あえか(形動) かよわきさまにいふ語。

(あえ-もの)[肖物](名) あやかりもの。

(あ-えん)[亞鉛](名) 青白色の脆き金屬。天然には方亞鉛鑛・菱亞鉛鑛等として存在す。適度に熱すれば展性を增し、薄板となすべし。強く熱すれば再び脆くなり、遂に燃えて白色の酸化亞鉛を生ず。濕氣に觸るれば表面は變化すれど內部に及ばざるゆゑに、鐵線・鐵板を鍍ふに廣く用ひられ、又眞鍮・洋銀等の合金を製するにも用ひらる。——くわ[亞鉛華](名)(化)白色の粉末。成分は酸化亞鉛にて、水に溶解せず酸類に溶解し、種々の亞鉛鹽を生ず。顏料及醫藥に用ひらる。——ばん[亞鉛版](名) 一種の印刷版。よく研磨したる亞鉛の面に描畫し、藥品を用ひてこれを腐蝕せしめ、其上に「インキ」を塗りて印刷す。

(あおぎ)[仰](自、他)「あふぐ」の訛。

(あおひ)[葵](名)(植)「あふひ」の訛。

(あおり)[障泥](名)「あふり」の訛。

(あおる)[煽](自、他)「あふる」の訛。

(あか)[赤](名) ㊀七色の一、血の色に似たるもの。

㊁あかがねの略言。

あか—[赤](接頭) 或語に冠して、あきらかなるさまの意を表はす。「—はだか」「—恥」など。

あか[垢](名) ㊀汗あぶらなどの塵とともに肌に附着したる汚物。㊁物に附着したる汚れ。

アカ[閼伽](名)(梵語)㊀佛にたむくる水若しは香水を盛る器の總稱。㊁轉じて、佛に供ふる水又は水にいひ、淸水・井水にもいふ。「山の井の—」。

(あか-あか)[明明](副) 明かなるさま。あかるく。

あか-あしげ[赤蘆毛](名) 馬の毛色、蘆毛に赤みを帶びたるもの。

あか-あづき[赤小豆](名)(植)豆科に屬する栽培草本。花は黃色、種子は通常赤色にして、稀に白色又は黑色のものもあり。食料又は洗粉等に用ひらる。

あか-あは[赤粟](名)(植)禾本科に屬する直立草本。小穗狀花序は穗狀の圓錐花序に排列し、果實を生ずべき花は光澤を有す。種子は食用に供せらる。

あか-あり[赤蟻](名)(動)膜翅類中蟻科に屬する蟲。體長一分弱、體色黃褐色、後胸背の二刺は尖る。腹柄は二節にして腹部は光澤あり。

あかいと-をどし[赤絲縅](名) 鎧の縅の一種。赤き組緒を以て縅したる鎧。

あか-いも(名) 甘藷の一種、皮赤くして、味の佳良なるもの。

あか-いろ[赤色](名) ㊀あかき色。㊁かさねの色目、赤色の狩衣は、表を蘇芳、裏を花田にしたるもの。㊂織物の色、經緯にして緯の赤なるもの。

あゐに出づ)冬の日にいふ語。

(あい-志ふ[愛執](名) 愛情たち難きこと。

(あい-志やう[哀傷](名) 人の死を悲しむこと。

(あい-志やう[愛情](名) 父子・夫婦・朋友間など互に和合して他の幸福安寧を希(コヒ)ふ感情。めでいつくしむこゝろ。なさけ。

[アイス(名) (「アイスクリーム」の略語なる氷菓子と音の似通ふより)高利貸の俗稱。

あい-す[愛](他、さ變) ㊀いとほしく思ふ。かはゆく思ふ。なさけをかく。めづ。いつくしむ。㊁たのしく思ふ。このむ。「景色を—」。㊂おもんず。大切にす「眞理を—」。㊃すて難く思ふ。をしむ。

アイス-クリーム[Ice-cream](名) 一種の食品。最も普通なる製法は、牛乳四合・玉子五個と砂糖適宜とを鍋に混入して湯煎にし、これをさまし置きて製氷器に入れ氷結せしむるなり。(氷菓子)。

(あい-せき[愛惜](名) をしむこと。をしみ。

(あい-せき[哀惜](名) 人の死をかなしみをしむこと。

(あい-せき[哀戚](名) かなしみ。なげき。

(あい-せふ[愛妾](名) 氣に入りのめかけ。

(あい-せん[愛染](名) ㊀[佛](梵語 Raga の譯)明王の一。愛慾を司る、身色日光の如く、三目忿視し、六臂に杵(シヨ)・鈴(リヤウ)・弓・箭・蓮華(レンゲ)を執り、光燄中に住す。㊁役者の顏の隈どりの一。

[あいぜん(一)]

(あい-そ[哀楚](名) かなしみ。なげき。

(あい-そ[哀訴](名) 「あいぐわん」(哀願)に同じ。

(あい-そ[愛想](名) 「あいきやう」の訛。 —づかし[愛想盡](名) 「あいきやうづかし」に同じ。

(あい-ぞう[愛憎](名) 愛するとにくむと。

(あい-たい[靉靆](名) ㊀雲のたなびきわたるさまにいふ語。㊁めがね。眼鏡。

(あい-だい[欸乃](名) 舟を棹(サ)さして相應ずる聲。ふなうたの節をとる聲。轉じて、ふなうた。

(あい-たう[哀悼](名) 「あい志やう」に同じ。

(あい-た-志ゆぎ[愛他主義=Altruism](名) 自己の幸福は他人の幸福の中に見出すべしとし、他人の幸福を增進するとを以て行爲の標準となす主義。一に利他主義ともいふ。

十あい-だちなし[間斷無](形) 「あひだちなし」の音便。

十あいた-どころ[朝所](名) 「あしたどころ」の音便。

十あい-だる[愛亞](自、ら下二) 愛せられてきまゝをなす。あまゆ。

十あいたん-どころ[朝所](名) 「あしたどころ」の音便。

(あい-ぢやく[愛着](名) 愛にひかさるゝこと。愛情に執着すること。

[あ-いつ[彼奴](代) あやつ。あのやつ。

十あい-なし[間無](形) 「あひなし」の音便。

十あい-な-し[愛無](形、二) かはゆげなし。おもしろみなし。

十あい-な-だのみ(名) あてにならぬ頼み。そらだのみ。

あい-なめ[鮎並](名)【動】「あゆなめ」の訛。

[あい-にく[生憎](副) あやにく。あなにく。

アイヌ(名) (「アイヌ」語 Ainu)北海道土人の稱、もと彼等の語にて人類の義なりしが、今はこれを以て北種族の名とす。

(あい-ねん[愛念](名) 愛するおもひ。

アイノ(名) 「アイヌ」の訛。

(あい-べつ-りく[愛別離苦](名) 愛する人と、はなれ難くわかれぐるしく思ふこと。

(あい-ぼ[哀慕](名) 親しきものに別れ、其人をかなしみ志たふこと。

(あい-まい[曖昧](名) ㊀明白ならざること。たしかならざること。㊁うしろぐらきこと。 —や[曖昧屋](名) 怪しげなる女を抱へおきて客を呼ぶ家。

(あい-みん[哀愍](名) あはれみ。なさけ。

(あい-ゆう[隘勇](名) 隘勇線を守る臺灣の壯丁。 —せん[隘勇線](名) 臺灣にて生蕃の來襲を警戒するため、山谷に亙りて設けたる線路。

(あい-よく[愛慾](名) 愛著の心。

あい-らし[愛](形、二) かはゆらし。いとし。

(あい-れん[愛憐](名) あはれみ。いつくしみ。

あ-いろ[文色](名) (「あやいろ」の約)すぢ。わけ。けぢめ。あやめ。

(あう-あう[快快](名、副) うらみ又は滿足せざるさまにいふ語。「—樂まず」。

十あう-い-く[奥行](自、か四) 人の後につきて行く。

アヴォイルヂュポイス-かう[—衡=Avoirdupois](名) 「イギリス」國及「アメリカ」合衆國にて普通に用ふる衡量、七千「グレイン」を以て一「ポンド」となすもの。

アヴォガドローの-かせつ[—の假說=Avogadro's hypothesis]【化】「イタリア」人「アヴォガドロ」の提出せし假說、同溫度同壓力に於けるすべての氣體の同容積中には、同數の分子を含有すと說けるもの。

(あう-ぎ[奥義](名) むくのて。おくぎ。

(あう-さい[殃災](名) わざはひ。さいなん。

(あう-さつ[鏖殺](名) みなごろし。

(あう-志[奥旨](名) 「あうぎ」に同じ。

アウシキナ(名) (「アイヌ」語 Aush-kina)【植】毛莨科に屬する多年草、北海道などに產す、莖の高さ一尺五寸許、六七月の頃、莖頂に小白花開く。

(あう-しやう[鞅掌](名) (になひ且さゝぐるの義)つかさどること。いそがしくはたらくこと。

(あう-しゆく-ばい[鶯宿梅](名) ㊀【植】梅の變種、花の香殊に高く、瓣は一重なるも八重なるもあり。㊁紀貫之の女、父の歿後に村上天皇より其愛樹なりし梅をめされければ、「勅なればいともかしこし鶯の、宿はと問はゞ、いかゞこたへん」と詠じたりとの故事。

(あう-なう[懊惱](名) 心をなやますこと。うらみもだゆること。

十あう-な-し[奥無](形、二) ふくそこなし。あさはかなり。

(あう-む[鸚鵡](名)【動】攀木類中鸚鵡科に屬する鳥、熱帶地方の產にして種類多し、體軀は鶇(ツグ)大乃至鴿大なり、頭は圓く短大にして、上嘴は鈎曲し下嘴は短小なり、舌は肥厚肉質にして巧みに人語をまぬ、羽色美麗なり。 —がひ[鸚鵡貝](名)【動】頭足類中四鰓類に屬する貝、形は鸚鵡の嘴に似る、外套腔中に二對の鰓を具ふ、口の周圍に絲狀の觸手數多あり、介殼は螺旋狀をなし、外表に赤褐色の斑文ありて、內面は美麗なる眞珠質を以て蓋はる、介殼の內腔は許多の隔壁によりて數房に區分せられ、最終の大房に體軀を容る、介殼麗しく、酒杯又は花瓶などに製す。 —がへし[鸚鵡返](名) ㊀人より言ひかけられたる歌を、僅に語を換へて、直ちに返歌となすこと。㊁人よりさされたる

[あうむがひ]

杯を、僅に飲みて、直ちに返杯すること。㊂異說・議論などを聞きたるまゝに述ぶること。 —せき[鸚鵡石](名) ㊀【礦】孔雀石の一種、うすき黃綠色を帶ぶ。㊁物の音の反響する石。「人語をつたふる—の」。㊂俳優のせりふを書き拔きたるもの。

十あう-よ-る[奥寄](自、ら四) 奥の方へ寄る。

十あう-ら[足占](名) 古昔のうらなひの一法、足をふみてせしもの。

ア-ウン[阿吽](名) 氣息の出入、「ア」は一切開口の始め、「ウン」は諸聲合脣の終りなればいふ。

十あえか(名) かよわきさまにいふ語。(孱弱)。

十あえ-もの[肖物](名) あやかりもの。

(あ-えん[亞鉛](名) 青白色の脆き金屬、天然には方亞鉛鑛・菱亞鉛鑛等となりて存在す、適度に熱すれば展性を得、薄板となすべし、強く熱すれば再び脆くなり、遂に燃えて白色の酸化亞鉛を生ず、濕氣に觸るれば表面は變化すれど內部に及ばざるゆゑに、鐵線・鐵板を被ふに廣く用ひられ、又眞鍮・洋銀等の合金を製するに用ひらる。 —くわ[亞鉛華](名)【化】白色の粉末、成分は酸化亞鉛にして、水に溶解せず酸類に溶解し、種々の亞鉛鹽を生ず、顏料及醫藥に用ひらる。 —ばん[亞鉛版](名) 一種の印刷版、よく研磨したる亞鉛の面に描畫し、藥品を用ひてこれを腐蝕せしめ、其上に「インキ」を擦して印刷す。

[あ-おぐ[仰](自、他) 「あふぐ」の訛。

[あおひ[葵](名)【植】「あふひ」の訛。

[あおり[障泥](名) 「あふり」の訛。

[あおる[煽](自、他) 「あふる」の訛。

あか[赤](名) ㊀七色の一、血の色に似たるもの。

㊁「あかがね」の略稱。㊂あかあづき。「—の飯」。

あか—[赤](接頭) 或語に冠して、おほひなきさま又はあらはなるさまを表はす。「—うそ」。「—はぢ」。

あか[垢](名) ㊀あせあぶらなどの塵とまじりて肌に附着したる汚物。(垢膩)。㊁物に附着したる流動體のかす。「鐵瓶の湯—」。

アカ[閼伽](名) ㊀(梵語)佛にたむくる水若しくは香水を盛る器の總稱。㊁轉にて、佛に供ふる香水又は水にいひ、池水・井水にもいふ「山の井の—」。㊂船中にたまりたる水(淦)。

あか-あか-と[明明](副) 頗るあかるく。

あか-あしげ[赤葦毛](名) 馬の毛色、葦毛に赤みを帶びたるもの。

あか-あづき[赤小豆](名)【植】荳科に屬する栽培草本、花は概ね黃色、種子は通常帶赤色にして、稀に白色なるもあり、食料又は洗粉等に用ひらる。

あか-あは[赤粟](名)【植】禾本科に屬する直立草本、小穗狀花序は穗狀の圓錐花序に排列し、果實を生ずべき花は光澤を有す、種子は食用に供せらる。

あか-あり[赤蟻](名)【動】膜翅類中蟻科に屬する蟲、體長一分弱、體色黃褐色、後胸背の二刺は尖る、腹柄は二節にして腹部は光澤あり。(黃蟻)。

あかい-と-おどし[赤絲縅](名) 茜(アカ)にて染めたる赤絲を以ておどしたる鎧。

あか-いも(名)【植】(い)さつまいもの一種、皮赤くして、味の佳良なるもの。(甘藷)。(ろ)さといもの一種、葉柄紫赤色なるもの。たうのいも。(紫芋)。

あか-いろ[赤色](名) ㊀あかき色。㊁かさねの色目、赤色の狩衣とは、表を蘇芳、裏を花田にしたるもの。㊂織物の色、經紫にして緯の赤なるもの。

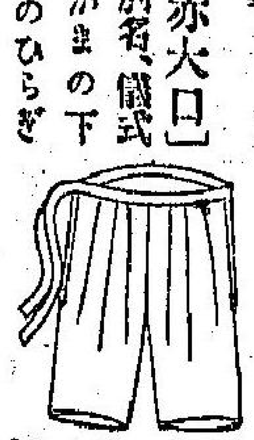
あか-いわし［赤鰯］(名) ㊀こぬかをまぶせたる鰯を、鹽漬けとなし又は乾したるもの、節分の日これをひゝらぎに貫きて戸口に插し、おにやらひの儀式に用ふ。㊁錆(サ)びたる刀を嘲りていふ語。

(あ-かう)［阿衡］(名)（殷の伊尹の故事に起る）攝政又は宰相の異名。

あか-うなぎ［赤鰻］(名)【動】圓口類中めくらうなぎ科に屬する魚、脊鰭なく、口唇に數條の鬚を生ず、鼻腔は口腔と通じ、眼は甚だ不完全にして皮下に隱る、體長一尺許、海に產し口を以て他の魚體に吸着し、時には其體腔内に穿入して内部寄生を營むとあり。

あか-えひイーエ［赤鱝］(名)【動】橫口類中鱝科に屬する魚、胸鰭頗る擴張して、體軀は圓扇形をなし、扁くして長き尾を有す、尾の中央に劍狀の鋭き棘ありて、背の中央に砂粒狀の突起簇生す、體色は背淡黃にして腹白し、鰓孔は口と共に下面に開く、我國西南海に多く產す。

あか-おほくちーオホクチ［赤大口］(名)「おほばかま」の別名、儀式などのときにうへのはかまの下に著用するもの、すゞのひらぎぬを以て製す、色は緋を用ふるを常とすれど、老人は白張りを用ふ。


［あかおはくち］

あか-かうぢウーコ［赤麴］(名) 色赤き麴、料理にて玉子などを染むるに用ふ。

†**あか-かがち**(名)【植】「ほゝづき」の古名。

あか-かげ［赤鹿毛］(名) 馬の毛色、鹿毛の赤みを帶びたるもの。（赤騮）。

†**あか-かさ**［赤瘡］(名)「はしか」の古名。

あか-がし［赤樫］(名)【植】殼斗科に屬する喬木、葉は楕圓形にして尖り、長き葉柄を有す、十分に成長すれば平滑となる、木材は帶赤色を呈し、種々の用に供せらる。（赤樫、血櫧）。

あか-がしはシハ［赤柏］(名)【植】「あかめがしは」に同じ。

あか-かすげ［赤糟毛］(名) 馬の毛色、糟毛の赤みを帶びたるもの。

あか-かたばみ［赤酸漿］(名)【植】酸漿草科に屬する小草本、酸味を有し、葉は三箇の小葉より成る、莖は傾臥し、花は黃色なり、葉は食ふべく、又、鏡を磨ぐに用ひらる。

あか-ガッパ［赤合羽］(名) 紅がら色の桐油紙にて製したる合羽、德川時代にもに卑賤なる者これを用ひたり。（「カッパ」の條參照）。

あか-がに［赤蟹］(名)【動】蟹の一種、形小にして山谷溪間又は河堤等に穴居し、北甲(ハサ)赤色なり。べにがに、べんけいがに。

あか-がね［銅］(名)（赤金の義）淡赤色の光澤を帶びたる金屬、天然には純銅・赤銅鑛・硫銅鑛又は黃銅鑛等となりて存在す、展性及延性に富み、銀に次ぎて熱及電氣の良導體なり、濕氣中にては綠色の鏽を生じ、空氣中にて熱すれば黑色の酸化銅を生ず、種々の器具を作り、又種々の合金を作るに用ひらる、用途甚だ廣し。——**ぶき**［銅鳴］(名)【動】涉禽類中さぎ科に屬する鳥、鶫(ツグ)大にして、嘴脚共に長く、體の上部は暗色にして腰尾共に白し、胸色の橙黃色或は赤色なるより此名あり。

あか-がひイーガヒ［赤貝］(名)【動】同柱類中あかゞひ科に屬する貝、介殼は心臟形にして膨(フク)れ、ひだ數三十五内外あり、外面は淡褐色にして、内面は白色なり、我國にては多く東海に產し、淡水混和せる淺海の泥中に棲息す、肉色赤くして食用に供せらる、古名は、きさ。

あか-がへるエル［赤蛙］(名)【動】無尾類中尖指類に屬する兩棲動物、體色淡赤色にして暗褐色の斑點あり、指趾の末端尖りよく跳躍す、肉は小兒の疳藥として効ありといふ。

†**あか-がり**［皸］(名)「あかぎれ」に同じ。

あか-ぎ［赤木］(名) ㊀【植】「くわりん」に同じ。㊁皮をけづりたる材木。

あ-がき［足掻］(名) あがくと、「駒の—はやく」。

あかき-こころ［赤心］(名) いつはりなきこゝろ。まごゝろ。（丹心）。

あか-ぎじ［赤雉］(名)【動】「きんけい」の別名。

†**あか-ぎぬ**［緋袍］(名) 緋色の袍(ハウ)。

あか-ぎれ［皸］(名)（赤切の義）さむさにあたりて手足の皮の裂けたるもの。

あが・くかきくけけ［足掻］(自、か四) ㊀あくせくす。㊁前足にて地をかく。（跑）。㊂さまざまの方法を以て、氣をもみはたらく。

あか-くさ［赤草］(名)【植】藜(アカザ)科に屬する草本、葉は細長にして全邊なり、花は萼を有せず、莖は帶とし葉は食用に供せらる。

あか-くちば［赤朽葉］(名) かさねの色目、うす紅に黃を帶びたるもの。

あか-ぐま［赤熊］(名)【動】食肉類中熊科に屬する獸、毛は茶褐色にして、喉に月の輪なく、大なるは八九尺に至る、性あらし、北海道に產す。（羆、熊）。

あか-くりげ［赤栗毛］(名) 馬の毛色、栗色に赤みを帶びたるもの。（黃騮）。

あか-げ［赤毛］(名) ㊀赤ばみたる髮の毛。㊁緋に似たる馬の毛色。

あか-と［赤子］(名)【動】毛足類中みゝず科に屬する細蟲、絲狀にして赤色を帶び、溝渠などの泥中に群棲す、採りて金魚の餌食とす。

あか-ご［赤子］(名) 生まれてほどへぬ小兒。嬰兒。

あか-ごけ［赤苔］(名)【植】地衣類に屬する下等植物、紫色を帶ぶ。

あか-ごめ［赤米］(名) ㊀薄き赤斑のある米。㊁ひねて赤みを帶びたる米。㊂「ダイタウマイ」。

あかさ［赤］(名) あかき度合。

あかざ［藜］(名)【植】藜科に屬する大草本、葉は長き葉柄を具して、緣邊に缺刻及少數の鋸齒を有し多少卵形をなす、秋の頃粒狀の花を開く、葉は食用に供せらる。あをあかざ・しろあかざ・のあかざ等の種類あり。（灰藿）。

あかし［燈］(名) ともしび。あかり。

あかし［證］(名) あかすこと。證據。——**ぶみ**［證文］(名) ちかひのふみ。

あか・しくしきけれ［赤］(形、二) ㊀あか色なり。㊁光りあきらかなり、曇りなし。㊂心にうしろぐらき事なし、いつはりなし。（丹）。

あかし-くらすさしすせせ［明暮］(他、さ四) 夜をあかし日をくらす。月日をおくる。

あかし-だま［明石珠］(名) さんごじゅに摸擬して、人工を以てつくれるもの、はじめ播磨國明石地方より出でしゆゑに此名あり。にせさんご。

あかし-ちぢみ［明石縮］(名) 播磨國明石地方より產出するちゞみ織物。

あか-じみ［垢染］(名) 垢にしみたるよごれ。あかのしみ。

あか-じ・むまみむむめめ［垢染］(自、ま四) 垢にしみてよごる。

あか-しらが［赤白髮］(名) あかみを帶びたるしらが。

あか・すさしすせせ［明］(他、さ四) ㊀うちあく。㊁あきらかにす。㊂秘密をあらはす。㊃うたがひを正して、事實を分明ならしむ。㊄とほす。經過す。「夜を—」。

あか・すすするすれせよ［飽］(他、さ下二) あかしむ。

あか-すな［赤砂］(名)【礦】こんがう砂。

あか-ずみ［朱墨］(名) しゆずみ。

あか-すり［垢磨］(名) 絹・吳絽などの巾(キレ)、湯に入りて、身のあかをすりおとすに用ふるもの。

あか-ぜみ(名)【動】「あきぜみ」に同じ。

あか-そ［赤苧］(名)【植】からむしの一種、莖赤くして葉對生す。

あがた［縣］(名)（上り田の義）㊀上代は、諸國にある朝廷の御料地。㊁後には、あがたぬしの支配せる土地。㊂中古以後は、國守の任國。㊃都に對して、ゐなか。

あか-だいこん［赤大根］(名) 大根の一種、果實は細長くして裂開せず、花は帶紫色を呈し、葉は羽狀に分裂す。（紅菜菔）。

アカ-だな［閼伽棚］(名) 佛に水又は供物などをそなふる棚。

あがた-ぬし［縣主］(名) ㊀古昔、あがたを支配せし官人。㊁姓(カバネ)の名の一。

あか-だひイーダヒ［赤鯛］(名)【動】硬鰭類中たひ科に屬する魚、體は楕圓形にして側扁なり、色は深緋にして體側に濃き同色の斜線あり、我國沿岸これを產せざる處なし、食用に供し味頗る美なり。古言は、あかめ。

あか-だま［赤玉］(名) ㊀赤色の玉。㊁こはく玉の古名。㊂瑪石の一種、佐渡より產出する純赤色のもの。

†**あがた-み**［縣見］(名) ゐなかけんぶつ。

あがた-めし［縣召］(名) 上古、每年正月十一日より十三日までの間に、官人を縣の任に命ぜしを。——**の-ぢもく**［縣召除目］(名)「あがためし」に同じ。

あか-ぢさ［赤萵苣］(名)【植】萵苣(サ)の變種、さんごじゅ菜ともいふ。

†**あがち**［分］(名) わかつこと。わかち。

†**あが・つ**たちつつてて［分］(他、た四) わかつ。くばる。

あか-つき［曉］(名)（明時の義）夜の明くるすこしまへの時。よあけ。あけがた。（曙天）。——**ぐさ**［曉草］(名) 鐘の異名、「舟人の、—に馴れぬれば」。

あか-つきげ［赤月毛］(名) 馬の毛色、月毛にあかみを帶びたるもの。

あか-つ・くかきくくけけ［垢附］(自、か四) あかにまむ。あかおむ。よごる。

あか-つ・くけけくくるくれけよ［垢附］(他、か下二) 物にあかをつく。

あか-つち［赤土］(名) ㊀赤黃色を帶びねばり氣ある土、酸化鐵の地表にしみ込みてなれるもの、古言は、はに。（赭土）。㊁烟草の一種、氣つよし、葉色あかつちに似たれば名とす。あかまひ。

あか-つら［赤面］(名) ㊀あかゞね色の顏色、おもに人を罵りていふ語。（赭面、赧顏）。㊁芝居にて、敵役又は惡形の稱、其多くは顏を赤く塗りて登場するよりいふ。

アカデミー［Academy］(名) 古昔、「ギリシア」の哲學者「プラトー」氏が、子弟を敎へし雅典(アテン)府内の遊園の名に因(チナ)みて、後世西洋諸國にて高等なる學校又は學士會院の稱に用ふ。

†**あか-とき**［曉］(名) あかつき。

アカ-とり［淦取］(名) 船の淦水を汲み出だす具。

あか-とんぼ［赤蜻蛉］(名) ㊀【動】とんぼの一

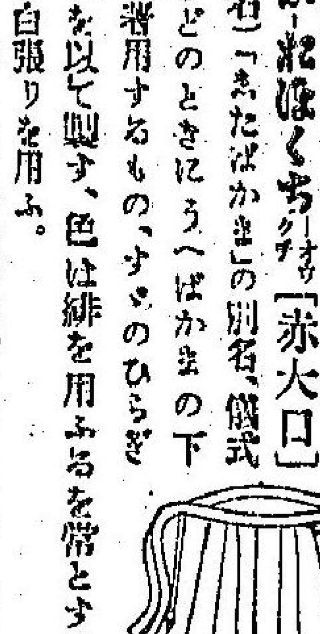
あか-いわし[赤鰯](名) ㊀こぬかをまぶせたる鰯を、鹽漬けとなし又は乾したるもの、節分の日これをひゝらぎに貫きて戸口に插し、おにやらひの儀式に用ふ。㊁鏽(サ)びたる刀を嘲りていふ語。

(あ-かう)ヨ[阿衡](名) (殷の伊尹の故事に起る) 攝政又は宰相の異名。

あか-うなぎ[赤鰻](名) 【動】圓口類中めくらうなぎ科に屬する魚、脊鰭なく、口唇に數條の鬚を生ず、鼻腔は口腔と通じ、眼は甚だ不完全にして皮下に隱る、體長一尺許、海に產し口を以て他の魚體に吸着し、時には其體腔內に穿入して內部寄生を營むとあり。

あか-えひ[赤鱏](名) 【動】橫口類中鱝科に屬する魚、胸鰭頗る擴張して、體軀は圓扇形をなし、扁くして長き尾を有す、尾の中央に劍狀の鋭き棘あり、背の中央に砂粒狀の突起體生す、體色は背淡黃にして腹白し、鰓孔は口と共に下面に開く、我國西南海に多く產す。

あか-おほくち[赤大口](名) 「あかばかま」の別名、儀式などのときにうへばかまの下に着用するもの、すゞしのひらぎぬを以て製す、色は緋を用ふるを常とすれど、老人は白張りを用ふ。


[あかばかま]

あか-かうぢ[赤麴](名) 色赤き麴、料理にてゆで玉子などを染むるに用ふ。

✝**あか-かがち**(名) 【植】「ほゝづき」の古名。

あか-かげ[赤鹿毛](名) 馬の毛色、鹿毛の赤みを帶びたるもの。(赤驃)。

✝**あか-がさ**[赤瘡](名) 「はしか」の古名。

あか-がし[赤樫](名) 【植】殼斗科に屬する喬木、

葉は楕圓形にして尖り、長き葉柄を有す、十分に成長すれば平滑となる、木材は帶赤色を呈し、種々の用に供せらる。(赤椆、血櫧)。

あか-がしは[赤柏](名) 【植】「あかめがしは」に同じ。

あか-かすげ[赤糟毛](名) 馬の毛色、糟毛の赤みを帶びたるもの。

あか-かたばみ[赤酸漿](名) 【植】酸漿草科に屬する小草本、酸味を有し、葉は三個の小葉より成る、莖は傾臥し、花は黃色なり、葉は食ふべく、又、鏡を磨ぐに用ひらる。

あか-ガッパ[赤合羽](名) 紅がら色の桐油紙にて製したる合羽、德川時代におもに卑賤なる者これを用ひたり。(「カッパ」の條參照)。

あか-がに[赤蟹](名) 【動】蟹の一種、形小にして山谷溪間又は河堤等に穴居し、其螯(ハサミ)赤色なり。べにがに。べんけいがに。

あか-がね[銅](名) (赤金の義) 淡赤色の光澤を帶びたる金屬、天然には純銅・硫銅鑛又は黃銅鑛等となりて存在す、屈性及延性に富み、銀に次ぎて熱及電氣の良導體なり、濕氣中にては綠色の銹を生じ、空氣中にて熱すれば黑色の酸化銅を生ず、種々の器具を作り、又種々の合金を作るに用ひらる、用途甚だ廣し。——しとゞ[銅鵐](名) 【動】渉禽類中あをぎ科に屬する鳥、鶫(ツグミ)大にして、嘴脚共に長く、體の上部は暗色にして腰尾共に白し、脚色の橙黃色或は赤色なるより此名あり。

あか-がひ[赤貝](名) 【動】同柱類中あかゞひ科に屬する貝、介殼は心臟形にして膨(フク)れ、ひだ數三十五內外あり、外面は淡褐色にして、內面は白色なり、我國にては多く東海に產し、淡水混和せ

る淺海の泥中に棲息す、肉色赤くして食用に供せらる。古名は、きさ。

あか-がへる[赤蛙](名) 【動】無尾類中尖指類に屬する兩棲動物、體色薄赤色にして暗褐色の斑點あり、指趾の末端尖りよく跳躍す、肉は小兒の疳藥として効ありといふ。

✝**あか-がり**[皸](名) 「あかぎれ」に同じ。

あか-ぎ[赤木](名) ㊀【植】「くわりん」に同じ。㊁皮をけづりたる材木。

あが-き[足掻](名) あがくこと、「駒の——はやく」。

あかき-こゝろ[赤心](名) いつはりなきこゝろ。まごゝろ。(丹心)。

あか-きじ[赤雉](名) 【動】「きんけい」の別名。

✝**あか-きぬ**[緋袍](名) 緋色の袍(ハウ)。

あか-ぎれ[皸](名) (赤切の義) さむさにあたりて手足の皮の裂けたるもの。

あが-く(かきくく、けけ)[足掻](自、か四) ㊀あくせくす。㊁前足にて地をかく。(跑)。㊂さまざまの方法を以て、氣をもみはたらく。

あか-くさ[赤草](名) 【植】藜(アカザ)科に屬する草本、葉は細長にして全邊なり、花は苞を有せず、莖は帶とし葉は食用に供せらる。

あか-くちば[赤朽葉](名) かされの色目、うす紅に黃を帶びたるもの。

あか-ぐま[赤熊](名) 【動】食肉類中熊科に屬する獸、毛は茶褐色にして、喉に月の輪なく、大なるは八九尺に至る、性あらし、北海道に產す。(羆、羆)。

あか-くりげ[赤栗毛](名) 馬の毛色、栗色に赤を帶びたるもの。(黃騮)。

あか-げ[赤毛](名) ㊀赤ばみたる髮の毛。㊁褐に似たる馬の毛色。

あか-ご[赤子](名) 【動】毛足類中みゝず科に屬する細蟲、絲狀にして赤色を帶び、溝渠などの泥中に群棲す、採りて金魚の餌食とす。

あか-ご[赤子](名) 生まれてほどへぬ小兒。嬰兒。

あか-ごけ[赤苔](名) 【植】地衣類に屬する下等植物、紫色を帶ぶ。

あか-ごめ[赤米](名) ㊀薄き赤斑のある米。㊁ひねて赤みを帶びたる米。㊂「ダイタウマイ」。

あか-さ[赤](名) あかき度合。

あか-ざ[藜](名) 【植】藜科に屬する大草本、葉は長き葉柄を具して、緣邊に鈍到及少數の鋸齒を有し多少卵形をなす、秋の頃粒狀の花を開く、葉は食用に供せらる。あをあかざ・まろあかざ・のあかざ等の種類あり。(灰菜)。

あか-し[燈](名) ともしび。あかり。

あか-し[證](名) あかすこと。證據。——ぶみ[證文](名) ちかひのふみ。

あか-し(くしき、けれ)[赤](形、二) ㊀あか色なり。㊁光りあきらかなり。曇りなし。㊂心にうしろぐらき事なし。いつはりなし。(丹)。

あかし-くら-す(さしす、せせ)[明暮](他、さ四) 夜をあかし日をくらす。月日をおくる。

あかし-だま[明石珠](名) さんごをゆに摸擬して、人工を以てつくれるもの、はじめ播磨國明石地方より出でしゆゑに此名あり。にせさんご。

あかし-ちぢみ[明石縮](名) 播磨國明石地方より產出するちゞみ織物。

あか-じみ[垢染](名) 垢にしみたるよごれ。あかじみ。「のしみ」。

あか-じむ(まみむ、めめ)[垢染](自、ま四) 垢にしみてよごる。「らが」。

あか-しらが[赤白髮](名) あかみを帶びたるしらが。

あか-す(さしす、せせ)[明](他、さ四) ㊀うちあく。㊁あきらかにす。㊂秘密をあらはす。㊃うたがひを正して、事體を分明ならしむ。㊄とほす。經過す。「夜を——」。

あか-す(せせすすれせよ)[飽](他、さ下二) あかしむ。

あか-すな[赤砂](名) 【礦】こんがう砂。

あか-ずみ[朱墨](名) しゆずみ。

あか-すり[垢磨](名) 絹・吳絽などの巾(キレ)、湯に入りて、身のあかをすりおとすに用ふるもの。

あか-ぜみ(名) 【動】「あきぜみ」に同じ。

あか-そ[赤苧](名) 【植】からむしの一種、莖赤くして葉對生す。

あがた[縣](名) (上り田の義) ㊀上代は、諸國にある朝廷の御料地。㊁後には、あがためしの支配せる土地。㊂中古以後は、國守の任國。㊃都に對して、ゐなか。

あか-だいこん[赤大根](名) 大根の一種、果實は細長くして裂開せず、花は帶紫色を呈し、莢は羽狀に分裂す。(紅萊菔)。

アカ-だな[閼伽棚](名) 佛に水又は供物などをそなふる棚。

あがた-ぬし[縣主](名) ㊀古昔、あがたを支配せし官人。㊁姓(カバネ)の名の一。

あか-だひ[赤鯛](名) 【動】硬鰭類中たひ科に屬する魚、體は楕圓形にして側扁なり、色は淡樺にして體側に濃き同色の斜線あり、我國沿岸これを產せざる處なし、食用に供し味頗る美なり。古言は、あかめ。

あか-だま[赤玉](名) ㊀赤色の玉。㊁こはく玉の古名。㊂庭石の一種、佐渡より產出する純赤色のもの。

✝**あがた-み**[縣見](名) ゐなかけんぶつ。

あがた-めし[縣召](名) 上古、每年正月十一日より十三日までの間に、官人を縣の任に命ぜしと。——のぢもく[縣召除目](名) 「あがためし」に同じ。

あか-ぢさ[赤苣](名) 【植】萵苣(チサ)の變種、さんごなゆ菜ともいふ。

あがち[分](名) わかつこと。わかち。

✝**あが-つ**(たちつ、つてて)[分](他、た四) わかつ。くばる。

あか-つき[曉](名) (明時の義) 夜の明くるすこしまへの時。よあけ。あけがた。(曙天)。——ぐさ[曉草](名) 鐘の異名、「舟人の——に馴れぬれば」。

あか-つきげ[赤月毛](名) 馬の毛色、月毛にあかみを帶びたるもの。

あか-つ-く(かきくく、けけ)[垢附](自、か四) あかにまむ。あかぬむ。よごる。

あか-つ-く(けけくくるくれけよ)[垢附](他、か下二) 物にあ「かなつく」。

あか-つち[赤土](名) ㊀赤黃色を帶びねばり氣ある土、酸化鐵の地表にしみ込みてなれるもの。古言は、はに。(赭土)。㊁煙草の一種、氣つよし、葉色あかつちに似たれば名とす。あかまひ。

あか-つら[赤面](名) ㊀あかゞね色の顏色、おもに人を罵りていふ語。(赭面、赧顏)。㊁芝居にて、敵役又は惡形の稱、其多くは顏を赤く塗りて登場するよりいふ。

アカデミー[Academy](名) 古昔、「ギリシア」の哲學者「プラトー」氏が、子弟を教へし雅典(アデ)府內の遊園の名に因(チナ)みて、後世西洋諸國にて高等なる學校又は學士會院の稱に用ふ。

✝**あか-とき**[曉](名) あかつき。

アカ-とり[淦取](名) 船の淦水を汲み出だす具。

あか-とんぼ[赤蜻蛉](名) ㊀【動】とんぼの一

種、身・翅共に赤く、形小さし、春秋二季の中旅に秋多し。あかゑんば。(赤卒)。㊁徳川時代に、鐵砲を負ひて巡邏せし人足。

あか-ね[赤菜](名)【植】十字花科に屬する一年生或は二年生の栽培草本、種子は一列に相並ぶ、葉は食用に供せられ、種子より油を搾(シボ)るべし。

あがなひ[贖](名) あがなふこと。あがなふ志ろ。

あがな・ふ[贖](他、は四) ㊀金錢又は物品を出だして、罪過の罪をまぬかる。㊁うめあはせをなす。

あがな・ふ[購](他、は四) ㊀買ひ求む。㊁貨物などをうけ出だす。㊂價をかけて募る。つのる。

あか-なまづ[赤鯰](名)【動】有脚類中なまづ科に屬する魚、頭部は扁大にして尾部は側扁なり、全體赤茶色、體長三寸許、胸鰭の刺は硬骨性にして、觸ふれば人を螫(サ)す、溪流などに棲む。

あか-にし[赤螺](名) ㊀【動】前鰓類中ほねがひ科に屬する貝、介殼は獨樂狀をなして螺級は著しく突起し、外面は暗褐色にして内面は鮮紅色なり、我國東海地方に多く産し、肉は食用に供せらる。(赤辛螺)。㊁きはめて吝嗇なる人の稱、其金錢を握れば放たざるを、あかにしの蓋をとづればたやすく開かざるにたとへていふ。

あか-ぬけ[垢拔](名) あかぬくると。あかとれてきれいになる姿「—のした藝者肌」。

あか-ぬ・ける[垢拔](自、か下一) 垢とれてきれいになる。若ろうとげなくなる。

あか-ね[茜](名) (赤根の義)。㊀【植】茜草科に屬する上昇草本、莖は方形にして葉と共に刺あり、葉は長卵形或は長心形にして、四個づゝ輪生し長き葉柄を有す、花は淡黄色にして七八月頃に開く、根は染料又は藥劑として用ひらる。㊁茜草の根を粉にしたる暗赤色の染料。㊂「あかねいろ」の略言。

—**いろ**[茜色](名) 赤の稍や沈みたる染色。茜草の根にて染めたる色。—**さす**[茜刺](枕)「日」「晝」「紫」「きみ」に冠らする詞。—**ぞめ**[茜染](名)「あかねいろ」に同じ。—**もめん**[茜木綿](名) 茜色に染めたる木綿。

あか-ねぶり[垢舐](名)【動】(い)「ゐもり」の異稱。(ろ)一種の細蟲、風呂場に生ず、人の垢を舐るより此名あり。

あか-ねり(名) ねり絹の赤色なるもの。

あか-の-ごぜん[赤御膳](名) 米に小豆(アヅキ)を混じて炊(カシ)ぎたる飯。あかのまんま。(赤飯)。

あか-の-たにん[赤他人](名) 全くの他人。

あか-の-まんま[赤飯](名) ㊀あかのごぜん。㊁蓼(タデ)の花の稱。

あか-ばう[赤帽](名) ㊀赤色の帽子。㊁汽車停車場にて、乘客の依頼を受け、荷物の持運びをなすもの、其赤色の帽子をかぶるよりいふ。

あか-ばうず[赤坊主](名)【植】小麥の變種、芒の色の赤きもの。

あか-はだ[赤肌](名) ㊀皮膚むけて充血し赤色を呈したる跡。㊁衣服を脫ぎ肌をあらはすを。

あか-はだか[赤裸](名) ㊀まるはだか。すはだか。㊁【植】「はだかむぎ」の一名。

あか-はぢ[赤恥](名) あらはなる恥辱。

あか-ばち[赤蜂](名)【動】蜂の一種、大形にして黑く、翅は赤褐色を呈し、第三腹節に普通二個の赤黄紋を有すれども、合して一帶となるとあり、觸角の上部は黄色を呈す。あかすぢばち。

あか-はつだけ[赤初茸](名)【植】初茸の早く生じ、頭に赤色を帶びたるもの。

あか-ばな[赤花](名) ㊀【植】柳葉菜科に屬する小草、葉は長卵形にして鋸齒を有し、花は帶紫紅色にして四瓣なり、種子は一端に長毛を有す。(柳葉菜)。㊁「あかいろ」(二)に同じ。

あか-ばな[赤鼻](名) ざくろばな。

あかば・む[赤](自、ま四) あかみつく。あかみばしる。あからむ。

あかば・む[赤](他、ま下二) あかくなす。

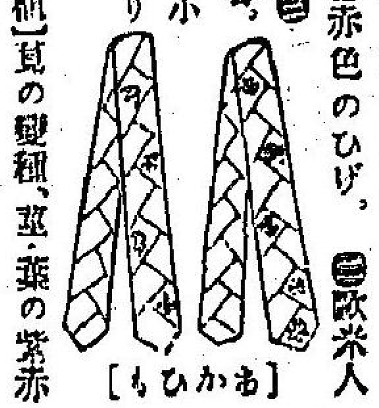
あか-はら[赤腹](名)【動】(い)燕雀類中鶇(ツグミ)科に屬する鳥、ふとさも形も共に鶇に似る、嘴は中央大にして上稜稍々彎曲す、頭より體の上部にかけては一體に橄欖色にして、胸及腹部の兩側は濁き赤茶色なり、よく鮮飛す。(ろ)「ゐもり」の異稱。(は)「うぐひ」の異稱。

あか-はら[赤腹](名) せきり。りびやう。

あか-ひき[赤蟾蜍](名)【動】(い)蟾蜍(ヒキガヘル)の一種、赤色を帶びたるもの。(ろ)「あかがへる」に同じ。

あか-ひげ[赤髯](名) ㊀赤色のひげ。㊁歐米人をいやしめて呼ぶ語。㊂【動】「てうせんごま」の一名。

あか-ひも[赤紐](名) 小忌衣(ヲミゴロモ)に着けしかざり紐。


[あかひも]

あか-ひゆ[赤莧](名)【植】莧の變種、莖・葉の紫赤色なるもの「シヤウエンジ」。

廿**あが・ふ**[贖](他、は四) あがなふ。

あか-ぶち[赤斑](名) 赤色の斑毛ある毛。

あか-ぼうふら(名)【動】「あかぼうふり」の訛。

あか-ぼうふり[赤孑孑](名)【動】あかいろのぼうふり。

あか-ぼし(名) (明星の義)金星の稱。—**の**(枕)「あく」に冠らする詞。

あか-ほ-しほ[赤穗鹽](名) 播磨國赤穗附近より産する鹽、苦汁(ニガリ)少くして、質頗る良し。

あか-ほん[赤本](名) 草雙紙(クサザウシ)の異名、享保頃、江戶にて出版せられし草雙紙の表紙赤かりしより此名あり。

あか-ま-いし[赤間石](名) あづき色の石、最上のものは紫色を帶ぶ、長門國厚狹郡邊より産す、赤間關より積み出だす故に此名あり、硯材とし又は庭石とす。

あか-ます[赤鱒](名)【動】有腹鰭類中さけ科に屬する魚、體形は鱒(マス)に類す、眼は較や大にして齒は鋤骨にも生ず、體色は黯にして肉は紅色を帶ぶ。べにます。

あか-まつ[赤松](名)【植】松の一種、山野に自生す、樹皮は赤褐色を帶ぶ、二葉一所より生ず、葉質固からず、木材は種々の用に供せられ、葉より樹脂を採るべし、又觀賞植物として栽培せらる。

あか-まひ[赤舞](名) 烟草の名、あかつち。

あか-み[赤味](名) あかき色の度合ひ。

あか-み[赤身](名) ㊀材木の中心の赤きところ。(心材)。㊁肉のあかきところ。

あか-ま・る(自、ら四) あかむ。あからむ。

あか-ミソ[赤味噌](名) 麥麴にてつくりたる味噌。

アカ-みづ[閼伽水](名)「アカ」に同じ。

あかみ-ばし・る[赤味走](自、ら四) あかばむ。あからむ。

あかみ-さす。

あか-・む[赤](自、ま四) あかばむ。あからむ。

あか-・む[赤](他、ま下二) あかくす。

あが-・む[崇](他、ま下二) あそれあふぐ。

あか-め[赤女](名)【動】㊀硬鰭類中ほら科に屬する魚、體の背部は蒼色に赤色を帶び、腹部は暗白色なり、體長鯔(ボラ)に略同じ、西海地方に産す、此魚の卵巢は甚だ大にして、これを乾製したるものを「からすみ」と稱す。㊁「たひ」の古名。

あか-め[赤目](名) ㊀あたまぶちを指にて引きのばし、裏の赤き肉を見せて話せざる意を示すにて、人を侮りのゝしるあそうち。あかんべい。㊁一種の眼病、眼球虹彩の色素が先天的に缺乏せるもの。

あかめ-がしは[赤芽柏](名)【植】大戟科に屬する喬木、山野に生ず、芽の色甚だ赤し、葉は掌狀に分裂す、花は雌雄異株に生じ、雄蕊は多數、花序は圓錐狀なり、木材は種々の用に供せらる。あづさ。(梓)。

あかめ-だひ[赤目鯛](名)【動】硬鰭類中べにめばる科に屬する魚、體は稍圓形をなし、鱗は甚だ小なり、體色紅にして長一尺三寸許に達す、近海に産す。

あかめ-ふぐ[赤目河豚](名)【動】固顎類中ふぐ科に屬する魚、顎每に二齒を具へこれを裸出す、空氣を吸入して體を膨脹せしむる性あり、肉美味なれど卵巢に毒あり、其毒劇し。

廿**あかめ・る**[赤](他)「あかむ」の訛。

廿**あがめ・る**[崇](他)「あがむ」の訛。

廿**あか-もがさ**[赤痘瘡](名)「はしか」の古名。

廿**あが-もの**[贖物](名) 罪をあがなふ料に獻除(ハラ)への時出だせしもの。

あから—[赤](接頭) 或語に冠して赤色にてあるさまを表はす。「—がほ」。

あから-か[赤](名) 赤みを帶びたるさまにいふ語。

あから-がほ[赤顏](名) 赤みを帶びたる顏。

あから-け・し[赤](形、二) 赤くあり。

あから-さま[倏忽](名) にはかなるさま又はかりそめなるさまにいふ語。

あから-さま[明地](名) (明様の義)あらはなるさま又は物をつゝみかくされさまにいふ語。

あから-ひく[赤羅引](枕) (赤き氣引くの義)「日」「朝」に冠らする詞。(朱引)。

廿**あから・ぶ**[赤](自、は四) あかばむ。あからむ。

廿**あから・ぶ**[赤](他、は下二) 赤くなす。

あから・ぶ[明](自、は下二) あきらかに究め知る。あきらむ。

あから・む[赧](自、ま四) おのづからあかみをおぶ。あかくなる。(顏色又は果實などにいふ)。

あから・む[赤](他、ま下二) あかみをもばしむ。あかくなす。

あから-め[他見](名) (倏忽目の義) わきみ。よそみ。

あかり[明](名) ㊀物を見得る光り。ひかり。「蠟燭の—」。㊁身に暗きことのなき證據。「—を立つ」。

あがり[上](名) ㊀あがると。のぼると。㊁學問技術などの上達。「うでの—」。㊂事物の成就。「仕事の—」。㊃仕事の結果。でき。「細工の—」。㊄物價の騰貴。「ねの—」。㊅をはり。あまひ。「雨の—」。㊆蟲魚などの死ぬると。㊇神佛などに供ふると。㊈物を貸し又は賣りて得る利益。「家作の—」。㊉すごろくの勝負を決する最後の場所。又、札の其場所に入りたること。

廿**あがり-うま**[跳馬](名) 跳ね上がる馬。跳ねくるふ馬。

あがり-おり[上下](名) のぼるとくだると。(昇降)。

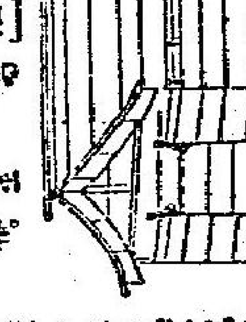
あがり-くち［上口］(名) ❶たてものゝ入り口。のぼりぐち。❷盛んなるものゝおとろふる端緒。
あかり-さき［明前］(名) あかりの來る方向。
あがり-ざしき［揚座敷］(名) あがりやの座敷。
あかり-しやうじ［明障子］(名) 細き木を格子に組みて骨となし、これに紙をひとへ貼りつけたる障子。今は略して、しやうじといふ(疏䆫)。
あがり-だん［上段］(名) 高所に昇る階段。のぼりだん。(階)。
＋あがり-たる-よ［上世］(名) 遠き昔。
あかり-とり［明取］(名) 室内に光線をとる爲めの窓。あかりまど。
あがり-ば［上場］(名) 水面より陸上に上るべき處。(埠)。
あかり-まど［明窓］(名) あかりとり。
あがり-もの［上物］(名) ❶長者の食物を敬ひていふ語。❷神佛の供物。❸物を貸し又は賣りて得たる收入。❹ほふりになりたるもの。廢物。
あがり-や［揚屋］(名) 德川時代に、身分ある人を監禁せし牢獄。
あがり-やしき［揚屋敷］(名) 德川時代に、罪を受けたるものより、官に沒收せし屋敷。
あか-る(らりるれ)［明］(自,ら四) ❶光りかがやく。あかくなる。❷夜明けてあかるくなりゆく。
あか-る［赤］(自,ら四) 赤くなる。あからむ。
あか-る［開］(自,ら四) 戸などのひらく。
＋あか-る［別］(自,ら下二) わかる。はなる。
あが-る(らりるれ)［上］(自,ら四) ❶高きに到る。下より上へゆく。のぼる。❷官職などのぼりすゝむ。❸技藝などたくみになる。❹ほむるなどの意をあらはす。うだつす。❹仕事終結す。「うけおひごとが—」。❺またひ勝負す「米が—」。❻をはる。なくなる。をさまる。「雨が—」。❼鳥魚など死ぬ。❽馬跳り狂ふ。❾官中・役所又は目上の人の許(もと)に詣(いた)る。まゐる。❿沒收せらる。とりあげらる。「扶持が—」。⓫古くあり。「あがりたる世」。⓬果實など熟す。「柿が—」。
＋あがる(らりるれ)［上］(他,ら四) 「くらふ」の敬語。
あかる-し(きかれけれ)［明］(形,一) ❶光線によりて物よく見ゆ。あきらかなり。❷ゆきわたりてくらきところなし。「學問の道に—」。
あかる-み［明］(名) あかるき處。あかるき方。
＋あかれ［別］(名) わかれ。べつ。——あかれ-あかれ［別別］(副) べつ/\。わかれ/\。ちり/\。
アカ-ゐ［閼伽井］(名) 佛に供ふる水を汲む井戸。
あか-ゑ［赤繪］(名) 陶器にかきたる赤色の畫。
＋あか-ゑんば(名)【動】あかとんぼの古名。
あか-を［赤魚］(名)(赤魚の義)【動】「あこう」に同じ。
アカ-をけ［閼伽桶］(名) 佛に供する水をくみ入るゝをけ。「を、桶」。
(あかん-ばう)［赤坊］(名) あかご。みどりご。
(あかん-べい)［赤目］(名) 「あかめ」の(一)に同じ。
あき［秋］(名) 夏のつぎ冬のまへ、即ち一年四時の第三次にあたる。天文學上にては、秋分より冬至までを其季節とし、氣象學上にては、九十十一の三ケ月を其季節とす。
あき［商］(名) あきなひ。
あき［明］(名) ❶なすこともなくしてあそぶとき。すきま。ひま。いとま。(閒隙)。❷ふさがりて居らぬこと。から。(空虛)。
あき［厭］(名) あくこと。いやになること。「—が來る」。
あぎ［顎］(名) あぎと。あご。
＋あぎ(代) わが子を愛して呼ぶ語。
(あ-ぎ)［阿魏＝Asabetida］(名) ❶【植】繖形科に屬する多年生の草木。中央アジアに産す。❷一種の藥品。おもにあぎ草の根を截傷し其流出せる乳液を採取したる護謨樹脂様のもの。不快なる臭氣を有す。おもにヒステリー患者などに用ふ。
あき-あづき［秋赤小豆］(名) 晩種の赤小豆。秋成熟するもの。
あき-あふひ［秋葵］(名)【植】錦葵科に屬する植物。高さ六七尺、葉は掌狀にて深裂し、花は大形にして、花瓣は黃色を呈し、下部は紅色を帶ぶ。肥大せる根は製紙の糊料に用ひらる。

〔あきあふひ〕

あき-いへ［明屋］(名) 人の住みて居らぬ家。空家。
あき-うど［商人］(名) 物品を賣買するを業とする人。あきびと。あきんど。あきうにん。
あき-かぜ［秋風］(名) ❶秋の頃ふく風。❷秋を「厭き」に寄せて、男女の情交冷かになるにいふ語。
あき-がはり［商變］(名) 一旦賣買せしものを心變りしてかへすこと。
あき-ぎり［秋霧］(名) 秋の頃に立ちのぼる霧。
あき-ぐさ［秋草］(名) 秋に花さく草の總稱。
——の-はな(名)【植】菊の異名。
——の-むすび(名) 古昔、草をむすびて、後の紀念となすことありしより、「むすび」に冠らする詞。「—のむすび紐を」。
あき-ぐみ［秋茱萸］(名)【植】胡頽子科に屬する植物。通常葉腋に數花を生じ、殆んど球形にして赤色なる果實を生ず。
あき-さ［秋沙］(名)【動】水禽類中扁嘴類に屬す

る鳥に似て小さく、嘴端曲がりて嘴緣に齒あり。…白の斑を交へ蹊光あり、北地にて生殖し、冬期は南地に來る。一名は、こがも。
＋あき-さ-す(さしすせ)［贖］(他,さ四) 買ひ主より賣り主にてつけをわたす。
あき-さき［秋先］(名) 秋のころ。
あき-さめ［秋雨］(名) 秋の候にふる雨。
＋あき-さり-ごろも［秋去衣］(名) 秋になりて着る着物。
＋あき-しく-の-はな［秋敷花］(名)【植】菊の異名。
あき-しとり(名) 商賈の失敗。しくじり。
＋あき-しひ［明盲］(名) 外觀は見ゆるらしくして、見えぬ目。あきめくら。(清盲)。
あき-しやう［飽性］(名) 物事にあきやすき性質。
あき-しらず［秋知草］(名)【植】「なぎ」の異名。
あき-す［明巣］(名) ❶鳥の居らぬ巣。❷人の居らぬ住家。——ねらひ［空巣狙］(名) 人の居らぬ住家に入りて、物品を竊取する盜賊。
あき-ぜみ［秋蟬］(名)【動】蟬の一種。我國の特産にして形大きく、赤褐色の翅あり。夏より秋にかけて見ゆる最も普通のものなり。雄は腹部に鳴器を具へよく鳴く。(蚱蟬)。
あき-た［秋田］(名) 稻の成熟せる頃の田。
あきた-をり［秋田織］(名) 羽後國秋田地方より産出する織物。
あきた-じやう-の-すけ［秋田城介］(名) 古官。出羽の介にしてかねて秋田城を守りし者の稱。
あき-だな［明店］(名) 人の居らぬ店。あきみせ。
あきた-ぶき［秋田蕗］(名)【植】ふきの變種。羽後國秋田地方に産す。莖の高さ七尺、葉の大きさ傘のほどあり。
あき-だ-る(らりるれ)［飽足］(自,ら四) 十分にあく。「滿足す」。
あき-ち［明地］(名) たてものなき地所。空地。
＋あき-つ［秋津］(名)【動】「とんぼ」の古名。
あき-つ-かみ［明津神］(名)(現在の神の義) 主上をたふとびて申し奉る語。
あき-づ-く(かきくけ)［秋付］(自,か四) 秋の時候となる。
＋あき-つ-くに［秋津國］(名) 「あきつしま」に同じ。
あき-つ-しま［秋津島］(名)(神武天皇國見をなし給ひて、「あきつのとなめせるごとし」とのたまひしより出づ)。大日本國の稱。
＋あき-つ-は［秋津羽］(名) 蜻蛉の羽の如く、綾羅などのうすものをいふ語。「—のそでふるいも」。
あぎと［顎］(名) ❶あぎ。あご。❷魚の鰓。
あぎと-ふ(はひふへ)(自,は四) ❶小兒がたことにて物いふ。❷魚水面に浮かびて呼吸す。(唅喁)。
あきなひ［商］(名) 物品の賣買。あきなふこと。
——はじめ［商始］(名) 新年の商賣はじめ。
——ぶね［商船］(名) 商品を載せて運ぶ船。
あきな-ふ(はひふへ)［商］(他,は四) 物品を賣買す。あきなひをなす。
あき-にれ［秋楡］(名)【植】楡科に屬する木。葉は小形にして稍圓形をなし、周圍に鋸齒あり。花は九月末或は十月初に開く。果實は翅果にして、柄を有す。木材は種々の用に供せらる。(榔楡)。
あき-の-あふぎ［秋扇］(名)(漢の武帝の妃なる班婕妤が、紈扇に託して、秋扇の賦を作りし故事より出づ) 婦人の寵を失ひて顧みられざることを、扇の秋になりて用ひられざるにたとへていふ語。
あき-の-かた［明方］(名) 太陰曆にて歲德神のあきたまふ方。萬福此方に集まるといふ。えはう。
あき-の-ななくさ［秋七草］(名) 秋に花さく七種の草。即ち「はぎ」「をばな」「くず」「をみなへし」「ふぢばかま」「なでしこ」「あさがほ」をいふ。
あき-の-みや［秋宮］(名) 皇后宮を申す語。
あき-はぎ［秋萩］(名)【植】荳科に屬する植物。山野に自生し、初秋花を開く。葉は羽狀三出、花は紅紫色或は白色を呈し、莢は扁平なり。果實は莢中に唯一つ種子を藏す。觀賞用として栽培し、或は牛馬の食料に供し、又、葉は茶の代用に供せらる。(胡枝子)。
あき-は-つ(つるつれ)［厭果］(自,た下二) いやになりはつ。
＋あき-びたげ［秋二毛］(名) 鹿の毛色。秋に至りて新しき短毛を殘し、古き長毛を失ひたるもの。「—のむかばき」。
あき-びと［商人］(名) あきうど。あきんど。
あき-みせ［明店］(名) あきだな。
あき-めくら［明盲］(名) ❶あきしひ。清盲。❷文字をえよまぬもの。文盲。
＋あき-もの［商物］(名) あきなひすべき品物。
あき-もの［明物］(名) 不用なるもの。
あき-もも［秋桃］(名) 秋になりて熟する桃の實。普通のものよりも大にして味美し。
あき-や［明家］(名) 人の居らぬ家。(空屋)。
あきら-か［明］(名) ❶はっきりとしたるさま。❷うたがはしきことなきさまにいふ語。判然たるさま。
あきらけ-し(きかれけれ)［明］(形,二) あきらかなり。
あきら-む(むるむれ)［明］(他,ま下二) ❶あきらかにす。❷おもひきる。「仕官を—」。

あきら・むる〔明〕(他、ま下二) つまびらかに事の由をさばむ。「道理を—」。
あきらめ〔明〕(名) あきらむること。おもひきり。(斷念、觀念)。
あきらめる〔明〕(自) 「あきらむる」の訛。
あきる〔厭〕(自) 「あく」の訛。
あき・るる〔呆〕(自、ら下二) 思ひのほかなるものごとに遭遇して、なす所をしらずにあり。もつての外にて言も出でず。(惘)。
あきれ〔名〕(呆) あきるること。あきれたること。——**かへる**〔呆返〕(自、ら四) あきれてものがいへぬ。甚だしくあきる。
あき-をさめ〔秋收〕(名) 秋になりて田のものを收穫すること。あきのとりいれ。
あき-んど〔商人〕(名) 「あきうど」の轉。——**かたぎ**〔商人氣質〕(名) 商人らしきこゝろ。些細の利をもあらそひにせぬならはし。——**ぶね**〔商船〕(名) 商品を載せてはこぶ船。——**や**〔商人屋〕(名) あきんどの家。——**やど**〔商人宿〕(名) たび商人を宿泊せしむる宿屋。



〔くあ〕

あく〔幄〕(名) 假屋などの、まはりと屋根とに張り圍へる幕。あげはり。
あく〔灰汁〕(名) ❶灰を水に浸したる黃色のうはずみ。❷植物類より出づる澁味を帶びたる液。
あく〔惡〕(名) ❶好ましからざること。快からざること。みにくきこと。粗末なること。めでたからざること。いやしきこと。❷良心に於て否認し又は道德又は法律に違背したることなるとを。

なる事、つみ。とが。あやまち。不道德。不正義。❸芝居にて、惡人のわざを行ふと。かたきやく。
あ・く〔明〕(自、か四) ❶ひまになる。すること少くなる。❷中の物なくなる。からになる。❸自然に開く。あく。❹始まる。「芝居が—」。
あ・くる〔明〕(自、か下二) ❶經過す。たつ。すぐ。「年期—」。❷あきらかになる。明くる。「夜—」。
あ・くる〔明〕(他、か下二) ❶ひまになす。❷からになす。❸とざされたるものを開く。❹穿つ。「穴を—」。❺曙つ。「雨を—」。❻始む。「幕を—」。
あ・く〔飽〕(自、か四) 十分に足る。滿足す。
あ・く〔厭〕(自、か四) 十分にすぎていとはしくなる。いやになる。あぐむ。
あ・ぐる〔上〕(他、か下二) ❶上へやる。たかくのぼす。❷あたひを高くす。❸こゑを高くす。❹弘めつたふ。あらはす。「名を—」。❺登用す。「あらたに官府に—」。❻手に持ちて高くす。「旗をさし—」。❼官職又は秩祿などをうばふ。「扶持を—」。❽獻上す。たてまつる。❾成効す。をあげる。❿貴人の堤を結ぶを敬ひていふ語。「髮をしを—」。⓫神佛に添へて崇敬の意を表はす。「申し—」。⓬へどつく。吐く。⓭藝妓などを客席に招く。
あく-あく・し〔惡惡〕(形、二) 兇惡らし。わるきさうなり。
あく-い〔惡意〕(名) ❶人を害せんとはかる念慮。誠實を缺ける精神。わるきこゝろ。❷〔法〕民法にては、或法律行爲をなすに當りて、其法律上の效力に影響を及ぼすべき事實の存在を知ると、例へば第三者に權利の移轉せるとを知りながら、其權利の移轉を當事者と約するが如きをいふ。
あく-うち〔灰汁打〕(名) 灰汁をひき打ちたる紙。

あく-うん〔惡運〕(名) あくじをなせど、惡報なくしてさかゆると。
あく-えき〔惡疫〕(名) あしきはやりやまひ。
あく-えん〔惡緣〕(名) ❶男女の間、とかく思ふ儘にならねど、深く離れがたきと。❷あしき因緣。
あく-か-の-ざ〔幄下座〕(名) 周圍に幄をめぐらしたる坐所。
あくがら・す(他、さ四) あくがれしむ。あこがらす。
あくが・るる(自、ら下二) あこがる。
あく-かん〔惡漢〕(名) よからぬ事をするもの。あばれもの。わるもの。
あく-かんじやう〔惡感情〕(名) こゝろよからずおもふと。うらみをふくむと。
あく-き〔惡鬼〕(名) たゝりをなす魂。害をなす鬼。惡魔。魔鬼。
あく-ぎ〔惡戲〕(名) いたづら。わるふざけ。
あく-ぎやう〔惡行〕(名) ❶惡しき行爲。❷みだらなるふるまひ。不品行。
あく-ぎやく〔惡逆〕(名) ❶道德にもとれる極めての惡行、即ち、臣の君に叛き、子の親を虐ぐるが如き無道をいふ。❷古の刑名、八虐の一。
あく-きん〔惡金〕(名) ❶質の粗惡なる黃金。❷にせがね。❸道ならぬ事によりて得たるかね。
あく-く〔惡口〕(名) 「あくこう」に同じ。
あく-くわ〔惡果〕(名) あしき果報。
あく-くわ〔惡貨〕(名) 實質の價格が法定の價格と非常の差異ある貨幣、即ち、原質の甚だ粗惡なるもの。——**へい**〔惡貨幣〕(名) 前條に同じ。
あくけ-な・し〔飽氣無〕(形、一) 滿足にてなし。はかなし。「すぐに消えて—」。

〔惡口〕(名) 人の惡聞を害する言。まにいふ言。わるくち。
あくごふ〔惡業〕(名) 惡事をなしたるむくい。いかなる惡業の—にて。
あく-さう〔惡相〕(名) 面相の兇惡なること。
あく-さう〔惡瘡〕(名) たちのわるいかさ。人の忌みきらふかさ。
あく-じ〔惡事〕(名) ❶あしき行爲。「—は、千里に傳はる」。❷わざはひ。厄災。
あく-しう〔惡臭〕(名) あしきにほひ。
あく-じう〔惡獸〕(名) 猛くして人畜に害をなす獸類、即ち、虎、狼の類。
あく-しつ〔惡疾〕(名) わるきやまひ。なほらぬ病氣。人の忌み嫌ふ病。
あく-じや〔惡蛇〕(名) 毒ありて人を害する蛇。即ち、はぶ・まむし・うはばみの類。
あく-しやう〔惡性〕(名) ❶惡しき性質。❷惡しき行爲。❸いたづら。淫奔。「しき酒」。
あく-しゆ〔惡酒〕(名) 混和物など多くして、味惡しき酒。
あく-しゆ〔惡趣〕(名) 【佛】「あくだう」に同じ。
あく-しゆ〔握手〕(名) ❶にぎりこぶし。にぎりたる手のうち。❷西洋の禮式上、相會ふて互に手をにぎりあふと。❸交りを結ぶと。好(ヨシ)みを通ずること。
あく-しよ〔惡所〕(名) ❶けはしき場所。❷遊蕩をなす場所。いろざと。——**おち**〔惡所落〕(名) あくしよに行くと。——**ぐるひ**〔惡所狂〕(名) あくしよにて、はうたうすること。(遊蕩)。
あく-しよ〔惡所〕(名) 「あくそよ」の訛。
あく-しん〔惡心〕(名) 人を害せんとするこゝろ。ねぢけたるこゝろ。

あく-じん〔惡神〕(名) 禍をなす神。
あく-せうねん〔惡少年〕(名) 性質よからず品行をさまらぬ少年。
あく-せく〔齷齪〕(名) 小さき事にかゝづらひて、あせりにつとむるさま。又は事にかゝはりて、ひまなきさまにいふ語。
あく-せん〔惡錢〕(名) 不正なる事をなして得たるきんせん。「—身につかず」。
アクセント〔Accent〕(名) 發音の調子。音調。
あく-そう〔惡僧〕(名) 佛教の戒を守らず、道にそむきたる行爲をなす僧侶。
あくぞもくぞ〔芥藻屑〕(名) 《あくたもくづの訛》何の役にもたゝぬ物事をあざけりていふ語。
あくた〔芥〕(名) 塵(ゴミ)りたる雜物。ごみ。(塵芥)。
あく-たい〔惡對〕(名) 惡口を以て返答すること。人を賤しめのゝしると。
あく-たう〔惡黨〕(名) わるもの。あだども。
あく-だう〔惡道〕(名) 【佛】惡業を爲し、衆生の墮つる所、即ち、地獄・餓鬼・畜生の三道の稱。或は修羅を加へて、四惡道又は四惡趣といふ。
†**あくた-び**〔芥火〕(名) あくたを燃す火。
†**あくた-ふ**〔芥生〕(名) ちりづか。塵堆。
あくた-むし〔蠊〕(名) 【動】「あぶらむし」の一名。「訛」。又「ごきぶり」ともいふ。
〔**あくた-もくた**〔芥藻屑〕(名) 「あくぞもくぞ」の
〔**あく-たれ**(名) あくたれること。あしきいたづら。(惡行)。——**ぐち**(名) にくまれぐち。惡口。——**もの**(名) あくたれたる所業をなすもの。あばれもの。(暴人)。
〔**あく-た・るる**(自、ら下一) 惡しき所業をなす。いたづらをなす。(暴)。

あく-ち〔惡血〕(名) 病毒を含有する血。「毒」。
あくち(名) 口の邊に生ずるちひさきかさ。(口瘡)。
〔**あく-ぢよ**〔惡女〕(名) ❶容貌みにくき婦人。(醜婦)。❷性質よからぬ婦人。(惡婦)。
〔**あく-と**〔惡徒〕(名) こゝろのよこしまなる人。あくたう。わるもの。
〔**あく-どし**(形、一) ほどに過ぎてうるさし。くだくだし。くどくどし。まつこし。
〔**あく-にん**〔惡人〕(名) 道にはづれしことをなす人。こゝろねぢけたる人。
あくね-せうちう〔阿久根燒酎〕(名) 薩摩國阿久根より出だすせうちう。
〔**あぐ・ぬる**〔厭〕(自、な下一) あぐむ。
〔**あく-ねん**〔惡念〕(名) ねぢけたるこゝろ。よからぬおもひ。
〔**あく-ば**〔惡婆〕(名) こゝろよからざる老婆。
あくび〔欠〕(名) 疲勞せる時又は眠氣(ネムケ)の萌(キザ)せるときなどに口をのづから開き氣の大に出づると。「き罪跡」
〔**あく-ひつ**〔惡筆〕(名) ❶粗造なる筆。❷つたなき筆跡。
〔**あく-びやう**〔惡病〕(名) 不治の疾病。「す」
あく・ぶ〔欠〕(自、は四) あくびを發す。あくびす。
〔**あく-ふう**〔惡風〕(名) ❶人家・草木などをそこなふかぜ。❷道德に背きたるならはし。
〔**あく-ま**〔惡魔〕(名) 善事に障害をなす鬼類。人の心を亂す惡靈。
あく-まで〔飽迄〕(副) 十分に、いとはしくなるまで。はてのはてまで。
†**あ-ぐみ**〔足組〕(名) あぐらをかくと。(趺)。
〔**あぐみ**〔厭〕(名) わが力に及ばずもてあますと。
〔**あく-みやう**〔惡名〕(名) よからぬ風評。

あきら・む[めめむむれ・めよ]「明」（他、ま下二）つまびらかに事の由をきはむ。「道理を―」。

あきらめ「明」（名）おもひとまること。おもひきり。（絶念、斷念）。

あきらめる「明」（自）「あきらむ」の訛。

あきる「厭」（自）「あく」の訛。

あき・る[れれ・る・るれ・れよ]「呆」（自、ら下二）思ひのほかなるものごとに遭遇して、なす所を志らずにあり。もっての外にて言も出でず。（惘）。

あきれ「名」（呆）あきるゝこと。あきれたること。

―かへる[らりる・るれれ]「呆返」（自、ら四）あきれてものがいへぬ。甚だしくあきる。

あき・をさめ「秋收」（名）秋になりて田のものを收穫すること。あきのとりいれ。

あきんど「商人」（名）「あきうど」の轉。

―かたぎ「商人氣質」（名）商人らしきこゝろ。些細の利をもむさぼりかにせぬならはし。

―ぶね「商舩」（名）商品を載せてはこぶ船。

―や「商人屋」（名）あきんどの家。

―やど「商人宿」（名）たび商人を宿泊せしむる宿屋。

あく「幄」（名）假屋などの、まはりと屋根とに張り圍へる幕。あげはり。

［あく］

あく「灰汁」（名）㊀灰を水に浸したる黄色のうはずみ。㊁植物類より出づる澁味を帶びたる液。

あく「惡」（名）㊀好ましからざること。快からざること。いやしきこと。みにくきこと。粗末なること。めでたからざること。㊁良心に於て否認し又は道德又は法律に違背したること。つみ。とが。あやまち。不道德。不正義。㊂芝居にて、惡人のしわざを行ふこと。かたきやく。

あ・く[かきくくけけ]「明」（自、か四）㊀ひまになる。すること なくなる。㊁中の物なくなる。からになる。㊂自然に開く。あく。㊃始まる。「芝居が―」。

あ・く[けけくくれけよ]「明」（自、か下二）㊀經過す。たつ。すぐ。「年期―」。㊁あきらかになる。改まる。「夜―」。

あ・く[けけくくるくれけよ]「明」（他、か下二）㊀ひまになす。㊁からになす。㊂とざられたるものを開く。㊃穿つ。「穴を―」。㊄隔つ。「間を―」。㊅始む。「蒔を―」。

あ・く[かきくくけけ]「飽」（自、か四）十分に足る。滿足す。

あ・く[かきくくけけ]「厭」（自、か四）十分にすぎていとはしくなる。いやになる。あぐむ。

あ・ぐ[げげぐぐるぐれげよ]「上」（他、か下二）㊀上へやる。たかくのぼす。㊁あたひを高くす。㊂てうしを高くす。㊃弘めつたふ。あらはす。「名を―」。㊄登用す。「あらたに官府に―」。㊅手に持ちて高くす。「旗をさし―」。㊆官職又は秩祿などをうばふ。「扶持を―」。㊇獻上す。たてまつる。㊈成功す。まあげる。㊉擧ぐ。㊀人の堤を結ぶを敬ひていふ語。「婚儀をを―」。㊁動詞に添へて崇敬の意を表はす。「申し―」。㊂へどつく。吐く。㊃藝妓などを座席に招く。

あく・い「惡意」（名）㊀人を害せんとはかる念慮。わるさうなり。㊁【法】民法にては、或法律行爲をなすに當りて、其法律上の効力に影響を及ぼすべき事實の存在を知ること。例へば第三者に權利の移轉せるを知りながら、其權利の移轉を當事者と約するが如きをいふ。

あく・あく・し[しくしきけれ]「惡惡」（形、二）兇惡らし。

あく・うち「灰汁打」（名）灰汁をひき打ちたる紙。

（あく・らん）「惡逆」（名）あくぎやくをなせど、惡報もそくしてさかゆること。

（あく・えき）「惡疫」（名）あしきはやりやまひ。

（あく・えん）「惡緣」（名）㊀男女の間、とかく思ふ儘にならねど、深く戀ひあたふこと。㊁あしき因緣。

（あく・か・の・ざ）「幄下座」（名）周圍に幄をめぐらしたる坐席。

あく・がら・す[さしすすせせ]（他、さ四）あくがれしむ、あこがらす。

あく・が・る[れれるるるれれよ]（自、ら下二）あこがる。

（あく・かん）「惡漢」（名）よからぬ事をするもの。あばれもの。わるもの。

（あく・かん・じやう）「惡感情」（名）こゝろよからずおもふこと。うらみをふくむこと。

（あく・き）「惡鬼」（名）たゝりをなす魂。害をなす鬼。惡靈。厲鬼。

（あく・ぎ）「惡戲」（名）いたづら。わるふざけ。

（あく・ぎやう）「惡行」（名）㊀惡しき行爲。㊁みだらなるふるまひ。不品行。

（あく・ぎやく）「惡逆」（名）㊀道德にもとれる極めての惡行、即ち、臣の君に叛き、子の親を虐ぐるが如き無道をいふ。㊁古の刑名、八虐の一。

（あく・きん）「惡金」（名）㊀質の粗惡なる黃金。㊁道ならぬ事によりて得たるかね。㊂にせがね。

（あく・く）「惡口」（名）「あくこう」に同じ。

（あく・くわ）「惡果」（名）あしき果報。

（あく・くわ）「惡貨」（名）實質の價格が法定の價格と非常の差異ある貨幣、即ち、原質の甚だ粗惡なるもの。

―へい「惡貨幣」（名）前條に同じ。

あく・け・な・し[くしきけれ]「飽氣無」（形、二）滿足にてなし。はかなし。「すぐに消えて―」。

（あく・こう）「惡口」（名）人の感情を害する言。わるくち。

（あく・ごふ）「惡業」（名）惡事をなしたるむくいにいふ言。いかなる過去の―にて」。

（あく・さう）「惡相」（名）面相の兇惡なること。

（あく・さう）「惡瘡」（名）きやうのあしきかさ。人の忌みきらふかさ。

（あく・じ）「惡事」（名）㊀あしき行爲。「―は、千里に傳はる」。㊁わざはひ。禍災。

（あく・しう）「惡臭」（名）あしきにほひ。

（あく・じう）「惡獸」（名）猛くして人畜に害をなす獸類、即ち、虎・狼の類。

（あく・しつ）「惡疾」（名）わるきやまひ。なほらぬ病氣。人の忌み嫌ふ病。

（あく・じや）「惡蛇」（名）毒ありて人を害する蛇、即ち、はぶ・まむし・うはばみの類。

（あく・しやう）「惡性」（名）㊀惡しき性質。㊁惡しき行爲。㊂いたづら。淫蕩。

（あく・しゆ）「惡酒」（名）混和物など多くして、味惡しき酒。「しき酒」。

（あく・しゆ）「惡趣」（名）【佛】「あくだう」に同じ。

（あく・しゆ）「握手」（名）㊀にぎりこぶし。にぎりたる手のうち。㊁西洋の禮式上、相會ふて互に手をにぎりあふこと。㊂交りを結ぶこと、好（ヨシ）みを通ずること。

（あく・しよ）「惡所」（名）㊀けはしき場所。㊁遊蕩をなす場所。いろざと。

―おち「惡所落」（名）あくしよに行くこと。

―ぐるひ「惡所狂」（名）あくしよにて、はうたうすること。（遊蕩）。

（あく・しよ）「惡所」（名）「あくしよ」の訛。

（あく・しん）「惡心」（名）人を害せんとすることゝろ。ねぢけたるこゝろ。

（あく・しん）「惡神」（名）禍をなす神。

（あく・せう・ねん）「惡少年」（名）性質よからず品行をさまらぬ少年。

（あく・せく）「齷齪」（名）小さき事にかゝづらひて、こせこせとむるさま。又は事にかゝはりて、ひまなきさまにいふ語。

（あく・せん）「惡錢」（名）不正なる事をなして得たるきんせん。「―身につかず」。

アクセント「Accent」（名）發音の調子。音調。

（あく・そう）「惡僧」（名）佛敎の戒を守らず、道にそむきたる行爲をなす僧侶。

あく・ぞ・もくぞ「芥藻屑」（名）（あくたもくづの轉）何の役にもたゝぬ物事をあざけりていふ語。

あくた「芥」（名）腐（クス）りたる雜物。ごみ。（塵芥）。

（あく・たい）「惡對」（名）惡口を以て返答すること。

（あく・たう）「惡黨」（名）わるもの。あたども。人を賤しめのゝしること。

（あく・だう）「惡道」（名）【佛】惡業を爲し、衆生の墮つる所、即ち、地獄・餓鬼・畜生の三道の稱、或は修羅を加へて、四惡道又は四惡趣といふ。

十あくた・び「芥火」（名）あくたを燃す火。

十あくた・ふ「芥生」（名）ちりづか。蔿堆。

あくた・むし「蠊」（名）【動】「あぶらむし」の一名。又、「ごきぶり」ともいふ。

（あくた・もくた）「芥藻屑」（名）「あくぞもくぞ」の「訛」。

（あく・たれ）（名）あくたれること。あしきいたづら。（惡行）。

―ぐち（名）にくまれぐち。惡口。

―もの（名）あくたれたる所業をなすもの。あばれもの。（暴人）。

（あく・た・れる）[れれれるるれれよ]（自、ら下一）惡しき所業をなす。いたづらをなす。（暴）。

あく・ち「惡血」（名）病毒を含有する血。「―痛」。

あく・ち（名）口の邊に生ずるちひさきかさ。口瘡。

（あく・ぢよ）「惡女」（名）㊀容貌みにくき婦人。醜婦。㊁性質よからぬ婦人。（悍婦）。

（あく・と）「惡徒」（名）こゝろのよこしまなる人。あくたう。わるもの。

（あくど・し）[くしきけれ]（形、二）ほどに過ぎてうるさし、くだくだしく、くどくどし。あつこし。

（あく・にん）「惡人」（名）道にはづれしことをなす人。こゝろねぢけたる人。

あくね・せうちう「阿久根燒酎」（名）薩摩國阿久根より出だすせうちう。

（あぐ・ねる）[ねねねるるれねよ]「厭」（自、な下一）あぐむ。

（あく・ねん）「惡念」（名）ねぢけたるこゝろ。よからぬおもひ。

（あく・ば）「惡婆」（名）こゝろよからざる老婆。

あくび「欠」（名）疲勞せる時又は眠氣（ケム）の萌（キザ）せるときなどに口おのづから開き氣の大に出づること。「き罪跡」。

（あく・ひつ）「惡筆」（名）㊀粗造なる筆。㊁つたなき筆跡。

（あく・びやう）「惡病」（名）不治の疾病。

あく・ぶ[ばびぶぶべべ]「欠」（自、は四）あくびをなす。あくびす。

（あく・ふう）「惡風」（名）㊀人家・草木などをそこなふかぜ。㊁道德に背きたるならはし。

（あく・ま）「惡魔」（名）善事に障害をなす鬼類。人の心を亂す惡靈。

あく・まで「飽迄」（副）十分に、いとはしくなるまで。はてのはてまで。

十あご・み「足組」（名）あぐらをかくこと。（趺）。

（あぐ・み）「厭」（名）わが力に及ばずもてあますこと。

（あく・みやう）「惡名」（名）よからぬ風評。

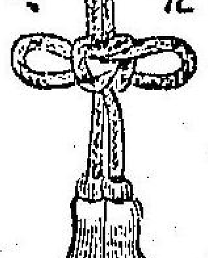
‡あぐみ-ゐ[足組居](名) 足をくみてすわること。(趺坐)。
‡あぐ-む[足組](自、ま四) 兩足を組みてすわる。あぐらかく。(趺)。
(あぐ-む[倦](自、ま四) 事をなすに力足らで倦む。もてあます。つかれあく。
(あく-め[惡馬](名) くせあしき馬。
あく-や[幄屋](名) 幕にて圍ひたる假り屋。
あ-ぐら[胡床](名) (足座の義) ㊀こしをかくる具。こしかけ。(縄床)。㊁足をくみてすわること。——ばな[胡床鼻](名) ひらきて大なる鼻。——ゐ[胡床居](名) 胡床に坐すること。——を かく (い)あしくみなす。あぐむ。安居す。(ろ)人の鼻のひらきて、大なるをあざけりていふ語。「鼻が—」。
(あく-りやう[惡靈](名) たゝりをなす死人の靈魂(マウ)。
‡あくる-あさ[明朝](名) 其日のつぎの朝。よくてう。
‡あくる-けふ[明今日](名) 夜あけたる其日。
あくる-とし[明年](名) 或年のつぎの年。よくねん。
あくる-ひ[明日](名) 或日のつぎの日。みやうにち。よくじつ。(厥明)。
(あ-くわい[亞槐](名) (三槐、即ち、三公に亞ぐ官の義)大納言の異稱。
(あ-くわんぼく[亞灌木](名) 【植】灌木と草本との中間植物の稱、半灌木ともいふ、萩、躑躅の類。
あけ[朱](名) (赤の轉)あかきこと。あかきいろ。
あけ[明](名) ㊀あくること。㊁よあけ。(天明)。
あげ[揚](名) ㊀あぐること。㊁小兒の着物の肩・腰などを縫ひあぐること。又、其部分。㊂「あぶらあげ」の略言。

‡あげ-あし[擧足](名) 柔術・相撲などにて身體の地を離れて足のあがること。——を とる 人のいひあやまれるところに、つけいりて責めなじる。
あげ-あぶら[揚油](名) あげものに用ふるあぶら、即ち、ごまの油・なたね油の類。
あげ-いし[上石](名) 圍碁にて對手の石を圍みて取りたるもの。(死子)。
あげ-いた[上板](名) 板の間のゆかを開閉すべきやうにつくりたる板。(揚板)。
(あ-げう[阿膠](名) 膠の一種、精製したるものにして、主として藥劑に用ふ。
‡あげ-おとり[上劣](名) 元服して髪をあげ、却て前よりかはだち劣りて見ゆること。
あげ-おろし[上下](名) ㊀あぐるとさぐること。㊁荷物のつみおろし。
あげ-かす[揚滓](名) あげものをなしたるあぶらの中に殘れる滓(カス)。
あげ-かすがひ[擧鎹](名) あげ戸をとむるかすがひ。
あけ-がた[明方](名) 夜のあけんとするほど。あかつき。よあけがた。(昧爽、昧旦、黎旦)。
あげ-く[擧句](名) ㊀連歌の下の七七の二句。㊁物事の最終。をはり。しまひ。(揚句)。
(あげ-くだし[上下](名) はきくだし。(吐瀉)。
あげく-の-はて[擧句果](名) をはり。しまひ。
あけ-くらす[明暮](他、さ四) 夜をあかし日をくらす。年月をおくる。
あけ-くる[明暮](自、ら下二) 夜あけ日くれて、月日たつ。
あけ-くれ[明暮](名) よあけとゆふぐれと。あさばん。(旦暮、朝暮)。

あけ-くれ[明暮](副) 朝に夕に。つねに。ひゞに。
‡あけ-ぐれ(名) 夜明けがたのなほ少し暗き時。
あげ-ごし[上輿](名) 肩にて擔(カ)く輿。
‡あげ-ごと[獻事](名) 神佛に物を供ふること。
あけ-ごろも[緋袍](名) 緋色のうはぎ。
あげ-さげ[上下](名) ㊀あぐるとさぐること。㊁ほむるとそしること。
あけ-さる[明去](自、ら四) 夜あけはなれて朝になる。あけはなる。
あげ-じとみ[上蔀](名) うへにつりあぐるやうにつくれるしとみ。
(あげ-しほ[上潮](名) さしくる潮。さししほ。
(あげ-すけ(名) おくそこ淺き人。秘密を守る能はざる人。
あげ-せん[上錢](名) ㊀物を貸し又は預りて得たる錢。㊁日がけ又は月がけのかけせん。「むぶんの—」。㊂人を勞したる報酬としてつかはす錢。
あげ-だい[揚代](名) 遊女をよぶ代。
あげ-だし[揚出](名) あげあぶらにて、豆腐・茄子などをかろくあげたるもの。
あげ-だたみ[上疊](名) たゝみの上におきて、貴人の座となす疊、其兩面に表と緣とをつけたるもの。(重席)。
あけ-たて[開閉](名) 戸をあくるととづること。
あげ-だま[揚玉](名) かぶとの頂座のかざり。
‡あけつげ-どり[明告鳥](名) 【動】「にはとり」の異名。
あげつち-もん[上土門](名) 屋根の上に土をおきたる門。あづち門。
あげ-づめ[揚詰](名) 藝妓などをあげつゞくること。(包住)。

‡あげ-つらひ[論](名) あげつらふこと。辯論。
‡あげ-つら-ふ[論](他、は四) すぢみちをあげ說く。よしあしをいひ爭ふ。ろんず。
あげ-どうふ[揚豆腐](名) あぶらにてあげたる豆腐。あぶらあげ。
あけ-に[明荷](名) つゞらの一種、むしろにて作り、かどに竹をあみつけたるもの。
あけ-の-こ-る[明殘](自、ら四) 夜あけて、なほ星などのこり見ゆ。
あけ-の-みやうじやう[曉明星](名) 金星が太陽の西にありて、日出前に東天に見ゆるときの稱。
あげ-ば[揚場](名) 船より物を陸に上ぐる處。(埠頭)。
あけ-はなし[明放](名) あけはなすこと。(開放)。
あけ-はな-す[明放](他、さ四) 戸などをのこりなく開く。あけてあるまゝにしておく。
あけ-はな-る[明離](自、ら下二) 夜あけさる。夜まったくあく。
あけ-はなれ[明離](名) 夜のあけはつること。又、其時。「夜の—がはやい」。
あげは-の-てふ[揚羽蝶](名) 【動】蝶の一種、普通にいふ蝶これなり、體長およそ八分乃至一寸、體色は綠黄又は黄色、前翅は長三角形にして後翅は半圓形をなし、共に黑色の地色に黄色の斑紋あり、物にとまるときは翅をあげ合はす、幼蟲は扁蠋(イモムシ)にして、蛹は蝸蟲(オキクムシ)なり。(鳳蝶)。
あけ-はら-ふ[明拂](他、は四) ことごとくあけはなす。
あげ-ばり[揚張](名) 假り屋などの四方・上部をかこふ幕。(幄)。

あけ-ばん[明番](名) 宿直を終へて退出すること。宿直せし次の日に休息すること。
あけ-び(名) 【植】木通(アケビ)科に屬する蔓草、山野に生ず、葉は掌狀複葉にして數個の小葉より成る、夏の初め花を開く、萼片三個あり、雄蕊は六個ありて離生す、果實は長楕圓形にして食すべく、わか葉も食用に供せらる。(山女、木通、丁翁)。——かづら(名) 【植】「あけび」に同じ。(通草)。
あげ-びさし[上庇](名) つきあげびさし。(活擶)。
あけ-ひろ-ぐ[開擴](他、か下二) あけてひろぐ。
あげ-ぶた[上蓋](名) あげいた。
あけ-ぼの[曙](名) あかつきより朝までの間の、少しくらき頃の稱。ほのぼのあけ。「春は—。山ぎはすこしあかりて」。‡——ぐさ[曙草](名) 【植】「さくら」の異名。——さう[曙草](名) 【植】龍膽(リンダウ)科に屬する草、葉は長卵形にして尖る、花は複聚繖花序に排列し秋の頃に開く、花冠は白綠色にして淡黄色を帶び、暗色の細點を有す。よしのしづか。ほたるさう。(獐牙菜)。——ぞめ[曙染](名) 染色の名、紅・白・紫・藍などにて、あけぼのゝ空色の如くに、ぼかしてそめたるもの。
あげ-まき[揚卷](名) ㊀小兒の髮のゆひかた、髮を左右兩方にわかちて結びたるもの。(總角)。㊁髮をあげまきに結ぶ幼時。こども。「—の頃」。㊂紐の結びかた、輪を右左に出だし、中をいしだゝみに結びたるもの、みす・よろひなどのかざりとす。㊃【動】斧足類まてがひ科に屬する貝、介殼は稍や長方形をなして前後に開き、表皮は薄くして前後に於て少しくひだをなす、外面は淡茶褐色にして內面は白色なり、頭より紐の如きもの二すぢを出だし、あげまき結びに似たるゆゑに此名あり、我國西南海及內海等に多し。——むすび[揚卷結](名) あげまき㊂に同じ。


[あげまき(三)]

あげ-まく[揚幕](名) (い)能舞臺の橋掛りの出入口に垂下せる幕。(ろ)芝居の舞臺の花道の出入口に垂下せる幕。
‡あげ-まさり[上優](名) 元服してかみをあげ、顏だち以前よりよく見ゆること。元服ばえ。
あげ-まど[上窓](名) つきだしまど。つきあげまど。
あげ-まんぢゆう[揚饅頭](名) 油にてあげたる饅頭。
あけ-むつ[明六](名) あけがたの六つ時。卯の刻。
あげ-もち[揚餅](名) あぶらにてあげたる餅。
あげ-もの[揚物](名) ㊀一種の料理、水にてとかしたるうどん粉を、野菜又は魚介などにまぶし、これをあげあぶらにてあげたるもの、野菜なるを「しやうじんあげ」といひ、魚介なるを「テンプラ」といふ。㊁ぬすみもの。(贓物)。
あげ-や[揚屋](名) 遊女を招きて遊ぶ家。(娼館、青樓)。
あけ-ゆ-く[明行](自、か四) 東方よりほのかにあからみゆく。夜あけゆく。
(あける[明](自) 「あく」の訛。
(あげる[上](他) 「あぐ」の訛。
(あ-げる[揚](他、か下二) ㊀あぶらに浸(ヒ)して投る。㊁遊女・藝妓などのたぐひを、呼びてあそぶ。
あけ-わたし[明渡](名) あけわたすこと。

あけ-わた-す{きしすせせ}[明渡](他、さ四) 家又は城などあけて、人手に渡す。

あけ-わた-る{らりるるれれ}[明渡](自、ら四) 夜まったく明けはなる。

あげ-まき[上繼](名) かむりの緒。(上緒)。

†あ-こ[吾子](名) ㊀わが子を呼ぶ語。㊁人の子を親しみ呼ぶ語。

アーコ[下火](名) (字の唐音) 禪宗にて火葬のとき、屍體に火をつくる法師の役名。(下炬)。

あ-こ[網子](名) あみを引く人。

あご(名)【動】「あこう」の略言。

あご[腭、顎](名) ㊀人類及其他一部の動物が發聲と食物の咀嚼とを營む器官。上顎と下顎とより成り、多くのもの、下顎は可動關節にして上顎は不動關節なり。あぎ。あぎと。おとがひ。㊁下顎の外面の專稱。したあご。おとがひ。㊂うをのえら。(鰓)。——でひとをつかふ 自らたかぶり、人を見下げて指圖するにいふ。——をはづす 大いに笑ふにいふ。

[あ-こ][彼處](代) あしこ。あそこ。

あこう[赤魚](名)【動】硬鰭類かさご科に屬する魚。體側扁にして口大く、下顎稍や隆起す。體色は背部紅色にして腹部淡し、體長九寸餘に達す。あかを。

アコウ[榕](名)【植】桑科に屬する木。葉は革質にして、葉柄は細長なり。暖溫地方等に繁茂し、氣根を出だして横に平かに成長繁茂す。大なるは一樹の廣さ三町四方に至るものありといふ。觀賞用として栽培す。

あこがら-す{さしすすせせ}[憧](他、さ四) あくがれるやうにす。あこがらしむ。

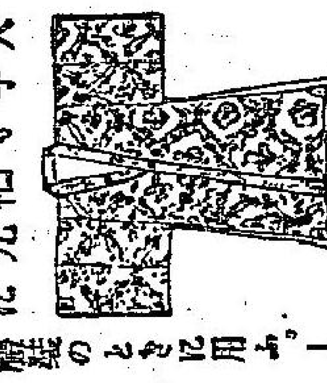
あこが-る{れれるるるれれよ}[憧](自、ら下二) ㊀心そゞろにうきたつ。魂身にそはず。㊁思ひをなやます。ものひこがる。あくがる。(憬)。

あ-こぎ[阿漕](名) (「逢ふ事を、あこぎの浦に引く網の、たびかさならば、人も知りなん」といふ歌より出づ) ㊀事の度のかさなること。㊁際限なくむさぼること。

あこだ(名)【植】「あこだうり」、又、「あこだがた」の略言。——-うり(名)【植】葫蘆科に屬する蔓草、果實は形小さくして圓く、皮赤くしておもてに條なし。(紅南瓜)。——-がた(名) ㊀まるがた。圓形。㊁一種の兜、十代目宗安のつくりはじめしもの、形圓くしていたゞき凹む。

あご-ひげ[腭鬚](名) ㊀下あごに生ずるひげ。㊁芝居にて、役者の用ふる鬘(カツラ)の一種。

あこめ(名) 𥿻づのめ。賤婦。


[あこめ]

あこめ[衵](名) 中古、婦人の身に近く着る衣。又、男子の裝束の下に着るものをもいふ。——-あふぎ{ウギ}[衵扇](名) 一種の扇。三十九枚の薄き檜扳を彩絲(イト)にて綴りたるもの、貴婦人の禮裝のときに用ふ。——-ぎぬ[衵衣](名)「あこめ」に同じ。

あこや-がひ{イガ}[阿古屋貝](名)【動】異柱類中あこやがひ科に屬する貝。介殼は稍や四角形をなし、殼頂は一方に偏在す。外面は粗くして暗褐色にし、少しく靑色又は黑色を帶ぶれど、內面は眞珠色にして閃光を帶ぶ。我國にては肥前・志摩・能登等に多く產す。世に貴重せらるゝ眞珠は、此貝の病的產物なり。しんじゆがひ。そでがひ。たまがひ。(珠母)。

あこや-だま[阿古屋玉](名) あこやがひより出づるたま。即ち、しんじゆ。

アゴン[阿含](名) (梵語、教又は法歸と譯す) 釋迦牟尼佛の說けりし敎法をいふ。又、特に小乘を指していふとあり。

あさ[朝](名) 夜あけてより正午までの間。あした。

あさ[大麻](名) ㊀【植】桑科に屬する草、莖は喬狀殺葉にして對生す、花は雌雄異種花を有す、莖の皮の纖維を採りて絲を製す、其用途甚だ多し、種子もまた食用とすべし、廣く各地に栽培せらる。㊁「あさいと」の略言。㊂「あさぬの」の略言。

あさ—[淺](接頭) 或語に冠してあさき意を表はす。「—みどり」、「—あさ」。

あざ[痣](名) 皮膚に異常の色をあらはしとゞむる部分、血液病又は外傷によりて生ず。(天疵・疵)。

あざ[字](名) 一村の內の小區。「あざな」の略言。

あさ-あけ[朝開](名) (朝明の義) ㊀あさぼらけ。あけがた。㊁まばゆきばかりなる朝日の影。「障子まばゆき—に」。

あさ-あさ[朝朝](副) まいあさ。あさごとに。

あざ-あざ[鮮鮮](名) はっきりしたるさまにいふ語。あざやか。たしか。

あさ-あさ-し{しくしくしきしけれ}[淺淺](形、二) あさはかなり。おくそこ見ゆ。

あざ-あざ-し{しくしくしきしけれ}[鮮鮮](形、二) あざやかなり。たしかなり。

あさ-あめ[朝雨](名) 朝のほどよりふりいだす雨。又、朝降りて速に晴るゝ雨。

†あさ-い[朝寢](名) あさね。

あさ-いと[麻絲](名) あさの莖の皮を剝ぎ其纖維を採りて製したる絲。需用極めて多し。

あさう-ら[麻裏](名) 「あさうらざうり」の略言。——-ざうり{ゾウリ}[麻裏草履](名) 一種の草履、あさいとの平うちを裏につけたるもの。

[あさ-うり][淺瓜](名)【植】(い)「しろうり」の一名。(ろ)「へちま」の一名。

あさ-おき[朝起](名) あさ早くおくること。あさ早くおくる性質。

†あさ-かげ[朝影](名) ㊀あさひに照らされて映(ウツ)る影。㊁人の痩せたるすがた。

あさ-がけ[朝駈](名) ㊀朝早く敵陣に馳せ向かふこと。㊁朝早く外出すること。

あさ-がすみ[朝霞](名) 朝のほど、たなびくかすみ。

あさ-かぜ[朝風](名) あさふくかぜ。

あさ-がた[朝方](名) あさのほど。

あさ-かたち[朝形](名) あさのすがた。

あさ-がひ{イガ}[阿座貝](名)【動】はまぐりの變種、大形にして肉の色白し。

†あさ-がへ-す{エス}{さしすすせせ}(他、さ四) 心を入れて見る。くりかへして行ふ。(熟閱)。

あさ-がほ{ガオ}[朝顏](名) ㊀【植】旋花科に屬する蔓草、變種多し、葉は心臟形にして通常三裂す、花は大形美麗にして種々の色を有し、夏より秋にかけて、朝早くひらき日中に至りてしぼむ。ゆふかげぐさ。かゞみぐさ。けにごし。しのゝめぐさ。(牽牛花)。㊁朝、臥床より出でゝ程へぬほどの顏。ねおき顏。㊂【動】「かげろう」に同じ。——あはせ{ワセ}[朝顏合](名) 種々の牽牛花を持ち寄りて、其優劣をあらそふあそび。——がひ{イガ}[朝顏貝](名)【動】腹足類に屬する貝、介殼は形狀稍や蝸牛の介殼に似て厚く、美麗なる紫色を呈す、體躯は介殼の內にありて球狀をなす、深海に棲息し、時に群集して大なる一帶となり、海面に浮游するとあり、我國小笠原島等に多く產す。——-ぞめ[朝顏染](名) 染模樣の名、紺又は紫を以て、大形に染めたるもの。——-なり[朝顏形](名) 器物の形の牽牛花の形に似て、上方開き下方窄(スボ)みたるもの。——-やき[朝顏燒](名) 牽牛花の花の形に燒きたる陶器の稱。

[あさがほがひ]

あさ-がみ[朝髮](名) ねおきのまゝにて、理(ツク)ろはざるほどの髮。あさねがみ。——-の[枕]「おもひ亂れて」に冠らする詞。

あさ-がみしも[麻上下](名) 武家時代の一種の服裝、麻布にてつくりたる上下。

あさ-がら[麻殼](名) 皮を剝ぎ取りたる麻の莖。をがら。あさぎ。(麻幹、麻稭)。

あさ-がら[白辛樹](名)【植】齊墩果(エゴノキ)科に屬する灌木、春の末白き花を綴け實を結ぶ、花序は複性にして雄蕊は通常十箇あり、實は四五の稜を有す、これより油を採るべし。

あさ-がり[朝獵](名) 朝のほどはやく行ふ獵。

あさ-がれひ{レイ}{ガ}[朝餉](名) ㊀朝の食事。あさめし。㊁天子の朝の供御。㊂主上の朝食を召し上がる所。清涼殿の內にあり。

†あさ-ぎ[淺木](名) (惡木の義) 麁惡なる材木。そまつなる木。(惡材)。「—のはしら」、「—のいろき」。

あさ-ぎ[麻木](名) あさがら。

あさ-ぎ[淺黃](名) ㊀かりやすにて染めたる色。うすき黃色。㊁かさねの色目、表も裏も共に薄き紺色のもの。

あさ-ぎ[淺葱](名) うすきあゐいろ。みづいろ。そらいろ。(淺縹)。——-ざくら[淺葱櫻](名) 櫻の變種、花瓣は一重にして色は白なれど、萼の色萌葱(モエギ)なるにより、花も靑色をおびて見ゆ。

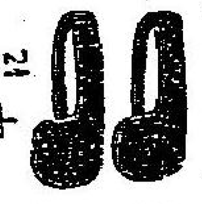
あさ-ぎぬ[麻衣](名) 麻布の衣服、喪服に用ふ。

あさ-ぎよめ[朝潔](名) 庭などを朝掃きてきよむること。「此春ばかり—すな」。

あさ-ぎり[朝霧](名) 朝のほど、たちわたる霧。——の[枕]「おもひまどふ」に冠らする詞。「—思ひまどひて」。

あさくさ-がみ[淺草紙](名) 一種の紙、古紙・襤褸(ボロ)等を水中に浸漬し、これを春きて抄造す、紙の最も下等なるものにて、落紙(オトシガミ)として用ふ。東京淺草より多く出だす。すきがへし。

あさくさ-のり[淺草海苔](名) ㊀【植】「あまのり」に同じ。㊁一種の食品、あまのりを紙の如く漉きたるもの、色黑く紫色を帶び香氣あるを良しとす、武藏國大森邊より產す、古昔、多く武藏國淺草川邊より出だしゝより此名あり。


[あさぐつ]

あさ-ぐつ[淺沓](名) 一種の沓、桐にて造る、もとは革なりしといへり、平常裝束著用の時にはく。

あさ-ぐも[朝雲](名) 朝のほど、空にたつ雲。

あさ-ぐもり[朝曇](名) 朝のほどのくもり。

あさくら-ざんせう{ショウ}[朝倉山椒](名)【植】山椒の一種、實・葉共に普通の山椒より大きく香氣つよし、もと但馬國養父郡朝倉村より多く出でしによりて此名あり。(蜀椒・巴椒・漢椒)。

†あさ-げ[朝餉](名) ㊀あさがれひ。あさめし。㊁あさめしをかしぐを、「—の烟」。

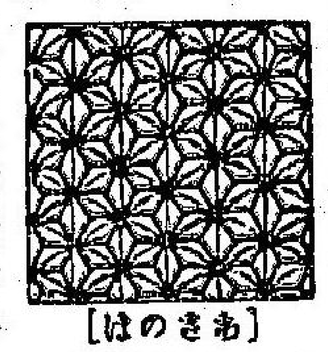
あさ-けぶり[朝烟](名) あさのほど、飯を炊(カシ)ぎなどするよりたちのぼる烟。

あざけり[嘲](名) あざけるを。わらひ。そしり。

あさけ・る[嘲](他、ら四) ㊀さげしみいふ。あざみわらふ。㊁ものおもひを述べて慰む。「月に―」。
あさ-ごろも[麻衣](名) 麻ぬのにてつくりたる服、多くは喪服として用ふ。あさぎぬ。
あさざ[荇](名) 【植】龍膽(リンダウ)科に屬する水草、葉は圓狀心臟形にして、葉腋に二三梗を出し、夏の頃花を水上に開く、花冠は絲狀に細裂せる緣邊を有して色深黃なり、嫩(ワカ)きものは食用に供せらる。はなじゆんさい。(莕菜、鳧葵)。
†あさ-ざけ[朝酒](名) 朝のほどにのむ酒。
あさざ-ゆふざ(ーユフザ)[朝座夕座](名) 法華八講などのとき、朝夕につとむる勤め又は說敎。
†あさ-さ・る(自、ら四) 夜あけはなれて、朝となる。
あさ・し[淺](形、一) ㊀底ちかし。奧近し。㊁うすし。あはし。「色―」。㊂いやし。ひくし。
†あさ-ぢぬ-はら[淺篠原](名) さゝの、疎生せるはら。さゝはら。
あさ-じほ(ーシホ)[朝潮](名) 朝の程さしくる潮。
あさ-じみ[朝凍](名) 大地の朝凍りてあると。
あさ-じも[朝霜](名) ㊀朝おきたる霜。㊁「あさざけ」の異名。――の(枕) 「消」に冠らする詞。
†あさ-ず[不餘](名) (殘し餘らさぬ義) 酒などを飲みつくして盃をおかぬを、「―をせく」。
あさ-すがた[朝姿](名) ねおきすがた。
あさ-すず[朝涼](名) 夏季に朝のほどあつくならぬ間。
あさ-すずみ[朝涼](名) 夏季に朝はやく起きてすゞむを、「―のほどに、出たまひけれど」。
あさ-せ[淺瀬](名) 水あさき瀬。
あさ-だ[淺田](名) 底淺き田。
あさ-だち[朝立](名) 朝早く出立すると。

あさ-ぢ[淺茅](名) みじかくして繁茂せざる茅。――ざけ[淺茅酒](名) 肥後國より產出する一種の酒、色白く味濃厚なり。――なは(ーナハ)[淺茅繩](名) 祓除(ハラヘ)の時用ふる繩、茅にてつくれるもの。――はら(ーハラ)[淺茅原](名) 茅のみじかき原野。――はら[淺茅原](枕) 「つばらつばら」に冠らする詞。――ふ[淺茅生](名) あさぢの生ひたる處。
あさ-つき[淺葱](名) 【植】百合科に屬する栽培植物、葉は細くして空洞を有し食用に供せらる、花莖は帶紫色を呈し、形狀稍やらつきやうに類す、鱗莖の表皮は紅紫色を帶ぶ。せんばんわけぎ。せんぶき。(胡葱、苳葱)。――なます[淺葱鱠](名) 一種の料理、あさつきを茹ゆて、これにあさりのむきみを加へ、酢味噌にてあへたるもの。
†あさ-づく-ひ[朝附日](名) 朝さしのぼる日影。
あさ-づく-ひ[朝附日](枕) 「むかふ」に冠らする詞。「―むかふつげくし」。
†あさ-づく-よ[朝月夜](名) 曉方に夜未だあけはなれず、月のなほ殘りてあるほど。
あさ-づけ[淺漬](名) 大根を干して、麴又は糠と鹽とにつけたるもの。
†あさって(名) あすのつぎのひ。(明後日)。
†あさっぱら(名) あさはやきほど。きうてう。
あさ-づま-ぶね[朝妻船](名) 近江國坂田郡朝妻といふ處のわたしぶね。又、北船中にて媱賣する女。
あさ-つゆ[朝露](名) 朝のほどにおきたる露。――の(枕) 「置く」「消」に冠らする詞。「―けやすきわが身」。
あさて[明後日](名) あすのつぎの日。あさって。みやうごにち。

あさ-で[淺手](名) 輕少なる負傷。すこしのてきず。(微傷)。
あさ-で[麻手](名) (あさたへの義) あさぬの、きもの。(麻衣)。――こぶすま[麻手小衾](名) 麻ぬのをもて作れる衾。あさぶすま。
†あさ-ど[朝戶](名) 朝のほど、まだ開かぬ戶。
†あさ-どこ[朝床](名) 朝起きいでぬほどのねどこ。
†あさ-とで[朝戶出](名) 朝はやく、戶をあけて出づると。
†あさ-どり[朝鳥](名) あさのほどに、塒(ネグラ)をたつ鳥。――の(枕) 「かよふ」に冠らする詞。
あざな[字](名) ㊀支那にて、實名の外の名。㊁我國にて、學者文人が、支那風を學びて、實名以外に附したる名。㊂あだな。諢名。㊃一村のうちの小區域。
あさな-あさな[朝朝](副) 朝ごとに。まいあさ。
あさ-なぎ[朝和](名) 海のおもての、朝おだやかに風なき景色。朝、海風と陸風と交代するとき、一時間ばかり海上の靜穩なるありさま。
†あさな-けに[朝爾來](副) 朝ごとに。日々。
あさ-なは(ーナハ)[麻繩](名) 麻をなひつくりたる繩。
あさなは・る(自、ら四) あざはる。
あざな・ふ[糾](他、は四) 絲などをからみあはす。なふ。よる。まとふ。
あさなゆふな(ーユフナ)[朝夕](副) (もとは、朝魚夕菜の義) 朝にゆふに。あけくれ。あさばん。
あさ-ぬの[麻布](名) 麻絲にて織りたる布。
あさ-ね[朝寢](名) 朝おそくまで睡りてあると。――がみ[朝寢髮](名) 朝起きいでしまゝのみだれたる髮。――ばう[朝寢坊](名) あさねする人。

あさ-のは[麻葉](名) 模樣の名、麻の葉より取りたる形。

[あさのは]
あさ-の-み[麻實](名) 苴麻(サァ)の實、色黑く形圓し、噛みつぶせば一種の芳香あり、藥用又は食用とす。
あさ-はか[淺](名) 思慮のとゞかぬと。考へのあさきこと。(淺薄)。
†あさ-は・る(自、ら四) あざなはる。
あさ-はん[朝飯](名) あさめし。あさげ。
あさ-ばん[朝晩](名) あさとゆふべと。朝夕。
あさ-ばん[朝晩](副) あさにばんに。ひゞに。
あさ-ひ[朝日](名) 朝昇る太陽。あさてるひ。(旭、暾)。――かうがい(ーコウガイ)[朝日笄](名) 一種の笄、鼈の甲をすはうにてそめて造る、元祿以前あさひぐしと共におこなはれたるもの。――かげ[朝日影](名) あさひのひかり。あさひの色。――がに[朝日蟹](名) 【動】蟹の一種、甲は適度の厚さを有し、縱肩の部に巨大なる扁棘を列生す、兩側は極めて鋭き弧を畫き、甲尻に向ひて傾出す、甲色は朱紅にして美麗なり。べにがに。しやうじやうがに。――がひ(ーガイ)[朝日貝](名) 【動】瓣鰓類中異柱類に屬する貝、介殼は薄く、蓋は扁く、色薄赤くして雲母の狀あり。ひさがひ。よめがひ。――かまぼこ[朝日蒲鉾](名) 背のうへを紅にてそめたる蒲鉾。――ぐし[朝日櫛](名) 一種の櫛、あさひかうがいに同じきこしらへのもの。――のみはた[朝日御旗](名) 日本の國旗の敬稱。につしやうき。

あさ-ひこ[朝彥](名) あさひ。
†あさ-びらき[朝開](名) 朝、船の帆を開きて港を出づると。
†あさ-ぶ(自、は下二) ふんべつもなくあさ〳〵しくあり。あさはかにてあり。
†あさ-ぶ(他、は下二) よりあはす。くみあはす。あざなふ。
†あさ-ぶ[淺](他、は四) あさむ。あなどる。
†あさ-ぶ[淺](自、は四) あさくあり。
あさ-ぼらけ[朝開](名) 夜のあくる時。あけがた。
あさ-ま[朝間](名) あさのうち。あさのあひだ。
あさま-し(形、二) ㊀あさはかにてあり。たのみがひなし。㊁きもつぶる。おどろくばかりなり。「―きまで、目を驚かしたまふ」。㊂興さめたり。あきるゝばかりなり。㊃さもし。みすぼらし。
あさ-まだき(名) (朝未の義) 夜のあけぬ前。まいさう。さうてう。(明朱)。
あさま-つげ[朝熊黃楊](名) 【植】伊勢國朝熊(アサマ)山に產するつげの木。をはりつげ。からつげ。
あさみ[淺](名) ㊀あさきところ。㊁あさき度合ひ。㊂芝居にて、俳優に扮する役者の用ふる鬘(カツラ)の一種。
あざみ[薊](名) 【植】菊科に屬する草本、たけ低くして葉は針狀の鋸齒を有す、莖は針狀の尖端を具し、總花托は剛毛狀の小苞を有す、萼は冠毛を帶ぶ、山野所在に自生し、夏秋の頃、紅紫色の花を開く。
†あざみ-あ・ふ(ーアフ)[嘲合](自、は四) 相互にかろしめあふ。相互にそしりあふ。
あさ-み-ぐさ[淺見草](名) 【植】松の異名。
あざみ-ぐは(ーグワ)[薊桑](名) 【植】桑の變種、葉は薊に似る。

あさ-みどり[淺綠](名) うすきみどりいろ。うすきもえぎ。
†あさ・む[嘲](他、ま四) あさはかなりとかろしむ。あざけりおとす。
あさ・む[惘](自、ま四) あきる。おどろく。
あざむき[欺](名) たぶらかし。すかし。いつはり。
あざむ・く[欺](他、か四) ㊀いつはりて、人をたぶらかす。たばかる。だます。㊁そしる。わらふ。
あさ-めし[朝飯](名) あさの食事。あさげ。
あさめし-まへ(ーマエ)[朝飯前](名) ㊀朝いまだ食事をせざるほど。㊁仕事のてまひまを要せざると。――のしごと[朝飯前仕事](名) てまひまを要せざるいとやすき仕事。
あざやか[鮮](名) うるはしくあきらかなるさまにいふ語。はつきり。あきらか。
†あざや・ぐ[鮮](自、か四) あざやかにてあり。はつきりす。
あさ-やけ[朝燒](名) 「ゆふやけ」の條を見よ。
あさ-ゆ[朝湯](名) 朝入浴する湯。又、朝入浴すると。
あさ-ゆふ(ーユフ)[朝夕](名) あさとゆふと。あさばん。
あさ-ゆふ(ーユフ)[朝夕](副) あさゆふごとに。まいにち。
あさらか[淺](名) あさ〳〵しきさまにいふ語。あさはか。
あざらけ・し[鮮](形、一) あざやかなり。
あざらし(名) 【動】鰭脚類中あざらし科に屬する水產動物、前後の兩肢は共に短小にして五趾に蹼あり、軀幹長く頭圓く、尾に至るに從ひ漸々細し、全身に毛密生し蒼黑にして

[あざらし]

光澤あり、黒斑あるものは殊に麗し、北海道・千島等の寒き海に多く産し、常に水面に游泳す、毛皮は取りて服飾に用ひられ、又、脂肪より油を製せらる。(海豹)。

あさり[淺蜊](名)【動】有管類中はまぐり科に屬する貝、介殼は稍ゝ三角形にして外面は多少輭(ウ)(子)及輪層をなし、淡蒼色にして白色又は淡黒色の斑紋あり、肉は食用に供せらる、我國東海・内海に多く産す。(蛤仔)。

あさり[漁](名) うをとり、いさり、すなどり。

アザリ[阿闍梨](名)【佛】(梵語 Acarya の略、軌範師の義)(い)師となるべき僧の稱。(ろ)僧の官名。

あさ・る(ら、り、る、る、れ、れ)[撈](他、ら四) ㊀尋ねさがす。求めありく。㊁餌をさがす。食を求む。(鳥獸にいふ)。㊂魚貝などをたづね取る。すなどる。いさる。(漁)。

†あさ・る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)(自、ら下二) 人と人とのあひだ、不和になる。(有隙)。

あざ・る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[戲](自、ら下二) たはぶる。たはむる。ざる。

あざ・る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[餒](自、ら下二) 魚肉などくさる。くさる。すゆ。

あざれ-がま・し(しく、し、しき、しけれ)(形、二) 戲れがまし。みだりがまし。

あざ-わら・ふ(は、ひ、ふ、ふ、へ、へ)[嘲笑](他、ら四) せゝらわらひす。あざけりわらふ。

あさん-くわ-ちっそ[亞酸化窒素](名)【化】無色にして甘味を有する氣體、冷水に解け易し、暫時吸入すれば人をして笑ひを催さしむるゆゑに、笑氣の名あり、續けて吸入すれば、一時感覺を失するに至る、齒科醫は多くこれを痲醉劑として用ふ。

アーさん-れん[下三連](名) 漢詩にて、一句の下の三字が平ならば平三つ、仄ならば仄三つ、共に同じきものが揃ふを、近體にては、忌むべきものとす。

あし[足、脚](名) ㊀動物の下方の肢、地に立ち又は歩むためのもの。㊁人類のあしのくるぶしより下の稱、趾骨十四對より成り、これに諸種の筋肉附着して其部局の運動を主どる。㊂あしのゆび、あしゆび。(趾)。㊃あゆむと。あゆみ。㊄山のすそ。ふもと。㊅もの丶下につきて、其物をさゝふる用をなすもの。「―つきの膳」。㊆餅などのねばり。「餅の―がつよし」。㊇垂れさがりて見ゆるもの。「雨―」。㊈船の水に沒する部分の稱。㊉【數】一つの直線に、垂線の出合ふ點。――**がつく** 行き方知らる。――**があがる** たよる所なくなる。――**をあらふ** 賤業を止めて正業に就く。

あし[錢](名)(めぐりありく如く通用するもの丶義)「ぜに」の異名。「おはくの―を賜ひて」。

あし[蘆](名)【植】禾本科に屬する水草、春宿根より生ず、枝なくして莖葉共に竹に似る、秋白き穗の花を著く。よし。なにはぐさ。たまえぐさ。

あ・し(しく、し、しき、しけれ)[惡](形、二) 好ましからず。宜しからず。快からず。めでたからず。粗末なり。いやし。みにくし。わるし。わろし。

あし-あと[足跡](名) 地に足の形を殘せるあと。

あし-あぶり[足炙](名) 火を貯へて足をあたゝむる器。アンくわ。

あし-あらひ(ライ)[足洗](名) ㊀あしだらひ。㊁あしをあらふこと。

あし-うち[足打](名) 器にあしをつけたるもの。

あし-うら[足占](名) 足を踏み見て占ふ古法。あうら。

あし-うら[蹠](名) 足のそこの地にむかふ所の稱、歩行の際には、全身體の重量を此平面に支ふ。足の下面。あしのうら。

あし-おし[足押](名) 一種の遊戲、ふりゐして、互にすねとすねと押しあひて、勝負するを。

あし-おと[足音](名) あるく足の音。

あし-か[葦鹿](名)【動】鰭脚類中あざらし科に屬する水產動物、性狀最もあざらしに近し、體色は茶褐、體長は殆んど二丈に達するものあり、或は海中に群泳し、或は岩上に起居す、岩上に睡眠するも必ず一頭の警戒をなすあり、東海・北海に多く產す。毛皮は種々の用具に製せらる。(海驢)。

あじか[簣](名) 土などを運ぶ農具、形ざるかごに同じ、もしに竹又は藁にてつくる。

あしかが-じだい[足利時代](名) 室町時代に同じ。

あし-がかり[足掛](名) ㊀高處へのぼるとき、足をかくるもの。あしば。あしまゐ。あなゝひ。㊁事に着手する因緣。たより。

あし-がき[葦垣](名) 葦にてつくりたる垣。――**の**(枕)「ふる」「おもひみだる」「まぢかし」に冠らする詞。

あし-かけ[足掛](名) ㊀あしをかくる所。あしがゝり。㊁精密に月日を計算せずに、某年より某年までを概算していふを。「―三年」。㊂器械體操にて、鐵棒に兩手と片足とをかけてあがる技。

あし-かし[足枷](名) 足にはむるかせ、古昔、罪人を拘留する爲めに用ひしもの。あしかせ。

あし-かせ[足枷](名)「あしかし」の訛。

[あしかし]

あし-がため[足固](名) 足をすこやかにするを、足を歩行にならすを。

あし-がちる[葦散](枕)「難波」に冠らする詞。「―なにはに、年はへぬべくおもほゆ」。

あし-がなへ(ナエ)[足鼎](名) 足ある鼎。「すむ鼎」。

あし-がに[葦蟹](名) 葦のはえたる海邊などにすむ蟹。

あし-かのばん[葦鹿番](名) 代りあひて睡ると。

あし-がは(ワ)[足革](名) 鷹狩につかふ鷹のあしにつくる革ひも。あしを。

〔**あし-かび**[葦芽](名) あしの芽。

あし-がひ(イ)[葦貝](名)【動】はまぐりの變種、介殼は黄褐色にして、葦に似たるあやあり。

あし-がも[葦鴨](名)【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、頸長く、嘴は軟皮を被り末端のみ硬し、脚短くして後方に位し、前三趾間に蹼ありて游泳に適す、頭はやゝ赤く、眼上に赤又は白のすぢあり、胸は蒼色にして腹は灰色、つばさに青き羽まじり、嘴と脚とは黑し、海川・池沼に棲む候鳥なり。

あし-がら[足搦](名) 相撲・柔術にて、他の足に我の足をからみてうち倒す技。「―をかけて倒す」。

あし-がらみ[足搦](名) ㊀「あしがら」に同じ。㊁かまきり蟲の卵。おほぢがふぐり。

あし-がる[足輕](名) ㊀合戰のとき、徒步にて出て立つ賤卒。ざふひやう。ほそつ。㊁徳川時代にて、士分の下に屬する一階級、卒族。

あし-ぎぬ[絁](名)(惡帛(アシキヌ)の義) ふとき絲にて織りたるきぬ。

あし-き・る(ら、り、る、る、れ、れ)[刖](他、ら四) 膝蓋骨(ヒザザラ)を切り去る刑に處す。(支那古昔の刑)。

あし-くせ[足癖](名) ㊀あしにつきたるくせ。「―が惡い」。㊁相撲にて、敵の足に我の足を掛けてうち倒す技。

あし-くび[足首](名) 足の踝(クルブシ)のあたりの稱。

アじ-くわん[阿字觀](名)【佛】一切の言語は、阿字より出づといふより、一切諸法本不生の義を觀じて、諸法の空に達し一切の障を斷つと。坐禪觀法。

あし-げ[葦毛](名) 馬の毛色、白に黑みのさしげあるもの。古昔は、靑馬といへり。

あし-げ[惡氣](名) あしきありさまにいふ語。

あし-げ[足蹴](名) 足にてけると。

†あしげ・し(く、し、き、けれ)[惡](形、二) わろきさまなり。

あしげ-ひばり[葦毛雲雀](名) 馬の毛色、あしげに雲雀毛のまじりたるもの。

あしげ-ぶち[葦毛斑](名) 馬の毛色、あしげにぶちあるもの。

あ-しこ[彼處](代) かしこ、あのところ。――**こ**[彼處此處](代) かしここゝ。あそこもここも。處處。

あし-さ[惡](名) 惡しくある度合。

あじ-さし(名)【動】鷗(カモメ)に似たる一種の水禽、鷗よりは形小し、嘴は細くして末端曲がる、尾は燕に似て分岐す、常に海の上に飛びかふ、種類多し。

あし-ざま[惡樣](名) わろきやうなると。あしきさま。

あし-しろ[足代](名) 高處へのぼる足がゝり。あしがゝり。あしば。

あし-すだれ[葦簾](名) 葦にてつくりたる簾。よしず。

あし-ずり[足摩](名) 憤怒・悲痛などのとき、身をもがきて足を踏みならすと。ぢだんだをふむと。あがき。(跳踉)。

あし-ず・る(ら、り、る、る、れ、れ)[足摩](自、ら四) もがきて足をする。ぢだんだをふむ。

あし-ずまふ(モウ)[足相撲](名) 一種の遊戲、兩人相尻居して、互に足のさきにてはねあひをなすと、倒れたるを負けとす。

あし-ぞろへ(エ)[足揃](名) 人馬の足なみをそろふると、軍隊の進行を整ふると。せいぞろへ。

あした[朝](名) ㊀あさ。㊁あす。明日。

あした[足駄](名)(足高の義) みちわろきとき用ふる下駄、臺はおもに樫にて齒は櫟・樺などにて造り、はなをゝすげて足にはく。

あし-たか(名)【動】「みづすまし」に同じ。

あしだか-ぐも[足高蜘蛛](名)【動】節足類中長脚類に屬する蟲、脚細く長く、これを高くして步行す、離脫し易し、大槪晝間は隱伏し夜間出て、徘徊す。あしながぐも。(蠨蛸)。

あした-ぐさ[鹹草](名)【植】繖形科に屬する草、海濱に生ず、うどに似たる葉ありて、夏白き花を開く、八丈島の民專ら食用とすといふ。あしたば。

あし-たづ[葦田鶴](名)【動】普通の鶴の稱、其多く葦の生じたる水邊に居るよりいふ。

†あした-どころ[朝所](名) 中古、太政官にありし一局の名。あいたどころ。あいたんどころ。

あしだ-の-はいれ[足駄齒入](名) 足駄の齒を入れかふると、又、足駄の齒入れをする人。

あした-ば(名)【植】「あしたぐさ」に同じ。

あし-だまり[足駐](名)(足溜りの義) ㊀軍隊の暫時とゞまる處。㊁すべて、足をとゞむる處の稱。

あし-だらひ(ライ)[足盥](名) 足をあらふたらひ。せんそくだらひ。

あしだ-を[足駄緒](名) 足駄のはなを。

〔**あし-ついで**[足序](名) あるくついで。みちついで。途次。

あし-つき[足付](名) ㊀足のかたち。足のやうす。㊁器具に足をつけあると。「―の膳」。

あし-つぎ[足繼](名) 高き所へ手をとゞかせん

ための足のだい。ふみだい。ふみつぎ。

あしゾの[葦角](名) 葦の新芽。(茂)。

あしで[葦手](名) 一種の書體。文字をくづして蘆の生えたるやうに書きなすもの。多くは蒔繪などの歌のもちしがきに用ふ。「―の蒔繪」。 ――**うたゑ**[葦手歌繪](名) 古昔は、繪の上又は側に、蘆手にて歌を書くものなりしが、後世に至り、其體變じて、蘆を用ひて詞に代へ、詞に蘆を混ふるやうとなれり。(右圖は、あしびきの、山さくら戸をあけおきて、我まつ人もたれかせいむらむといふ歌の意なり)。 ――**かき**[葦手書](名) 「あしでゑ」に同じ。 ――**がた**[葦手形](名) あしでの書體。

[あしでゑ]

あしてがらみ[足手搦](名) 手足にまとひつきて自由ならぬこと。又、妻子など身のほだしとなるにもいふ。あしてまとひ。ほだし。

あしてまとひ[足手纏](名) あしてがらみ。

あしどめ[足留](名) 人の通行を止むること。

あしどり[足取](名) ㊀あしびやうし。あしぶみ。㊁あるきぐあひ。あゆみのはこび。

あしとる[猗](他ら四) ㊀他のかた足を執る。㊁敵の後面を衝す。

あしなか[足半](名) 一種の草履。踵のくつの如くにて、人の足の裏のなかばまでなるもの。

あしなが[足長](名) 古昔の想像上の人種。脚の非常に長きもの。 ――**ぐも**[足長蜘蛛](名)[動]「あしたかぐも」に同じ。 ――**だこ**[足長蛸](名)[動]蛸の一種。八腕手の中二本は非常に長し、食用に供せらる。

あしなふ[蹇](自は下二) 足のはたらき自由ならず。足きかず。(跛)。

あしなへ[蹇](名) あしなへたること。又、其人。(跛)。

あしなべ[足鍋](名) 一種の鍋。三足ありてふに酒のかんをするもの。

あしなみ[足並](名) あしどり。あしぶみ。

あしなへぐ[蹇](自が四) あしなふ。

あしなゆ[蹇](自や下二) あしなふ。

あしならし[足馴](名) 足のはたらきをならすこと。あしがため。

あしぬぐひ[足拭](名) あしを拭ふ布。あしふき。

あしのけ[脚氣](名) 病の名。かくけ。

あしのね[葦根](枕) 「根」「分」「夜」「みじか」に冠らする詞。

あしのはぶえ[葦葉笛](名) 葦の葉を巻きてつくりたる笛。

あしのまろや[葦丸屋](名) あしにてふきたる假舍。

あしば[足場](名) ㊀あしもと。あしがかり。㊁あしもとのわるい道。

あしばや[足早](名) あゆみの早きをいふ語。 ――**こぶね**[足早小舟](名) よく走る小舟。

あしはら[葦原](名) 葦の生えたる原。 ――**がに**[葦原蟹](名)[動]蟹の一種。はさみに毛ありて、足には毛なし。

あしび[馬醉木](名)[植]石南(シャクナゲ)科に屬する小木。山野に自生す。葉は楕圓形にして常に緑色を有す。牛馬これを食へば中毒す。春小白花を開く。(馬醉木。梫木)。

あしび[葦火](名) 葦をたく火。

あしびきの[足引](枕) 「山」「峯」に冠らする詞。

あしびやうし[足拍子](名) 舞樂・演劇などにて、樂人・俳優の足踏みして云ふ拍子。

あしぶち[足斑](名) 馬の毛色、四足共に白色なるもの。よつじろ。

あしふき[足拭](名) あしぬぐひ。

あしぶみ[足踏](名) ㊀あしどり。あしびやうし。㊁體操にて、一定の場所にとゞまり、左右兩足にて交互に地を踏む動作。

あしべ[葦邊](名) あしの茂生したる水邊。

あしへん[足偏](名) 漢字の偏の名。跳・踏などの如く字の左方にある足の字の稱。

あしぼね[足骨](名) ㊀あしのほねぐみ。㊁足の力量。

あしま[葦間](名) 葦の生ひ茂りたる間。「―の小舟」。

あしまかせ[足任](名) 足に任せてありくこと。足のつゞく限り歩むこと。

あしまつひ[蜱](名)[動]線蟲類に屬する蟲形動物、形は線狀をなす、幼時かまきりの腹内に寄生し、終りに水中に出で、老成す。

あしまとひ[足纏](名) あしてまとひ。あしがらみ。

あしまゐり[足參](名) 貴人の足を撫でさすること。足の按摩。「右近を、御―に召す」。

あしもと[足下](名) ㊀現下の狀態。「―を見て、つけあがる」。㊁足のもと。足のあたり。㊂自家に最近なる場所。㊃足のはこびやう。「あぶない―」。 ――**から とり が たつ** 遠きにありと思へる物事が、却つて自己に近接したる場所にあらはるゝにいふ。 ――**の あかるい うち** 行くてのよく見ゆるうち。進退の自由なるうち。

あじやう[亞相](名) (大臣、即ち、相に亞ぐ官の意)大納言の異名。

あじや[啞者](名) 聲音の機能の缺けたるもの。多くは先天的に聽覺を缺く。

あしや[葦屋](名) 葦にて葺きたる家屋。 ――**がま**[葦屋釜](名) 足利時代に、筑前國葦屋村より鑄出したる釜。土佐光信等の下繪にて繪模樣を鑄出したるものもあり、茶道にて最も貴重す。

アジャリ[阿闍梨](名)[佛]「アザリ」に同じ。

アシュラ[阿修羅](名)[佛](梵語Asura)非天又は無端正の義。六道又は六趣の一。猛惡鬪諍を好むもの、生處を擇する所にして、常に鬪戰絶えず怖畏無極なり。四種ありて、普通には其第三なる變化生のものを指す。即ち、天と權を爭ふものといふ。 ――**かい**[阿修羅界](名)[佛]阿修羅の住する所。 ――**だう**[阿修羅道](名)[佛]阿修羅界へ趨く道。 ――**わう**[阿修羅王](名)[佛]力つよくたくましく、梵天・帝釋とあらそひて、正法をほろぼさんとしたる猛魔。

「アシュラ」

あしよわ[足弱](名) ㊀婦女・老・幼の稱。㊁歩行の遲き者なること。

あしらひ(名) あへしらひ。もてなし。

あしらふ(他は四) あへしらふ。

あじろ[網代](名) ㊀(あみしろの略言)冬期に、水中に竹又は木を組みならべて網の代りとし、魚を捕るに用ふるもの。㊁檜の木又は竹を組みて簾の如く編みたるもの、用途甚だ多し。㊂あじろぐるまの略言。

[あじろ]

――**あみ**[網代編](名) ㊀あじろを編み造る人。㊁あじろがたに編みたるもの。 ――**がき**[網代垣](名) あじろにて造りたる垣。 ――**かご**[網代籠](名) あじろにて張りたる籠。 ――**がさ**[網代笠](名) あじろ張りのかぶり笠。 ――**がた**[網代形](名) あじろの組み目の形に出來たるもの。 ――**ぎ**[網代木](名) 魚をとるあじろをかくるために立つる木。 ――**ぐるま**[網代車](名) やかたをあじろにて張りたる車。 ――**こし**[網代輿](名) 竹のあじろにて張りたる輿。 ――**ばり**[網代張](名) ㊀あじろにて張りたるもの。㊁あじろ笠の一種。徳川時代に小身のものぞ用ひたるもの。

あしわけ[足別](名) 足のとりはづしの出來るやうに、製作したる器物。「―の机」。

あしわけをぶね[葦別小船](名) あしまをわけて漕ぎ行く船。

あしを[足緒](名) 狩獵用の鷹の足につなぐ緒。

あす[明日](名) 今日のつぎの日。みやうにち。あくる日。よくじつ。

あす[淺](自さ下二) ㊀川、海など底あさくなる。㊁色褪めてうすくなる。さめてかはる。うすらぐ。

あすかがはのふちせ[飛鳥川淵瀬](名) 山城國あすか川の流れの變遷多きを、人生の變遷常なきにたとへていふ。

あすこ[彼處](代) 「あそこ」の訛。

あすならう[翌檜](名)[植]「あすはひのき」に同じ。

あすは(名)[植]「あすはひのき」の略言。 ――**ひのき**(名)[植]松柏科に屬する香木、直立十丈餘直徑二尺餘に及ぶものあり、樹皮は粗にして赤褐色を帶び、葉は鱗片狀をなして對生し、表面深緑色にして裏面粉白色なり、花は單性雌雄同株なり、材は白色にして淡黄を帶び、木理直く脂氣多くして濕氣に堪ふ、用途甚だ多し、最もよく深山陰濕の地に繁殖す。ひば。あすひ。あすなろ。(羅漢柏)。

あすひ[檜](名)[植]「あすはひのき」に同じ。

あすび[遊](名) 「あそび」の訛。

あすぶ[遊](自ば四) 「あそぶ」の訛。

アスラ[阿修羅](名)[佛]「アシュラ」に同じ。

あせ[汗](名) 人又は他の動物の體表に出づる分泌液、鹹味と臭氣とを有す、絶えず分泌すれど、少量なれば直ちに蒸發するを以て認むるを得ず、體溫發するときなど多量に分泌す。 ――**を にぎる** 危く思ひていらだつにいふ。

あせ[我兄](代) 男子を親しみて呼ぶ稱。

あぜ[畦](名) 田と田とのさかひのほそみち。くろ。

あぜ[綜](名) 織物の經絲をすくひ持つために用ひらるゝ具。

あせい[亞聖](名) 聖人に亞(つ)ぐほどの大賢人の稱。儒學にて、孟子・顔淵などをいふ。

あぜいと[綜絲](名) あぜの中にて機(ハタ)の上下のたていとをすくひ持つ絲。

あぜおり[畦織](名) 織物の名、緯に太絲と細絲とを交ぜかはせ、たかびくをあらはし織りたるもの。

あせかき[汗掻](名) 汗にあゆる質。又、あせを多くかく人。

あせぐむ[汗含](自ま四) あせをもよほす。あせばむ。

あぜくら[校倉](名) 古代の建築の一、横に角木を組みあげて造りたる倉庫。

あせ-ゴロウ[唯吳絽](名) 吳絽の一種、あぜおりに織りたる吳絽服。
{あせ-おばん(名) 「あせおゆばん」の訛。
あせ-おみ[汗染](名) あせおむこと、汗にしみたるあと。
あせ-お-む[汗染](自、ま四) あせ出でゝ物にしむ、あせにしむ。
あせ-おゆばん[汗襦袢](名) 衣服に汗の染みざるために、肌に着るもの。あせとりのはだぎ。あせはだぎ。
あせ-たなごひ[汗手巾](名) 汗を拭ふに用ゐる小き巾。あせてぬぐひ。あせのごひ。あせのごひ。あせふき。
あ-ぜ-ち[按察使](名) 古昔、諸國の風俗・敎化などを觀察せし官職の名。
アセチレン[Acetylene](名) 【化】無色の氣體、特種の臭氣あり、點火し易く、光輝ある焰をあげて燃ゆ、炭化カルシウムに水を加ふれば發生す。
あせ-てぬぐひ[汗手拭](名) 汗を拭ふ手ぬぐひ。あせのごひ。あせぬぐひ。あせふき。(汗巾)。
アセト-アルデヒド[Acet-aldehyde](名) 【化】普通の「アルデヒド」、其條を見よ。
あせ-とり[汗取](名) 肌着の一種、うはぎに汗の拔けぬために襦袢の下に著る服。
アセトン[Aceton](名) 【化】無色の液體、一種の香氣あり、木材を乾溜するとき、「メチル、アルコール」と共に生ず、其少量は尿中にあり、溶劑として用ひらる。
あせながし-の-あな[汗流穴](名) 甲冑の附屬具なるめんぼうの下に、あけたる穴。
あせ-ぬぐひ[汗拭](名) あせをぬぐふ布のきれ。あせふき。あせてぬぐひ。あせたなごひ。

あせ-ば-む[汗](自、ま四) 汗をもよほす。あせぐむ。(發汗)。
あせ-ふき[汗拭](名) あせぬぐひ。
あせ-ぼ[汗疣](名) (あせいぼの義)多量なる汗のために皮膚ながく濕くるとき、肌に發する粟粒の如き赤色の細瘡。あせも。(熱沸瘡)。
あせ-み(名) 【植】「あしび」に同じ。
あせ-みち[畦道](名) あぜの道、なはて。
あせ-みづ[汗水](名) あせ。 ――-ながす 勞苦を厭はず、力を盡くしてはたらくにいふ。
あせ-も[汗疣](名) 「あせぼ」に同じ。
十あせ-も(名) 【植】「あぜみ」に同じ。
{あせ-る[急](自、ら四) 望みを遂(と)げんとして急ぐ。いらだち思ふ。せく。
十あせ-を[吾兄](名) 男を親しみて呼ぶ稱。
{あせん-やく[阿煎藥](名) 一種の藥品、越幾斯(エキス)體のものなり、褐色にして無臭なるも苦味あり、收斂劑として用ひらる。
十あそ[朝臣](名) 「あそみ」に同じ。
アソウギ[阿僧祇](名) 【佛】梵語、無數又は無央數と譯す、無限の長時間をいふ。
あ-そこ[彼處](代) あのところ。かしこ。あすこ。あしこ。 ――-ここ[彼處此處](代) あのところこのところ。あそここゝ。
十あそ-そ-に[淺淺](副) ほのかに。おぼろげに。わづかに。
あそばか-す[遊](他、さ四) 遊ばしむ。あそばす。
あそば-す[遊](他、さ四) ㊀あそぶやうにす。㊁「為(な)す」「爲す」などの敬語。
{あそばせ-ことば[遊言葉](名) 「かう遊ばせ」「あゝ遊ばせ」などゝ、すべてあそばせを用ひて言ふ丁寧なる言葉遣ひ。

あそび[遊](名) ㊀あそぶこと。なぐさみ。たはむれ。㊁十あそびめ。遊女。㊂十音樂。管絃。㊃酒色のたのしみ。㊄ばくち。博奕。 ――-あひて[遊相手](名) あそぶ友。 ――-ぐさ[遊草](名) あそぶ種、遊戲の材料。 ――-しごと[遊仕事](名) 力をこめず、ゆるゆるとする仕事。 ――-ずき[遊好](名) あそびをすくこと、遊びがちなる性質。 ――-だうぐ[遊道具](名) 小供のもてあそぶもの。おもちや。 ――-とぎ[遊伽](名) あそびのとも。あそびのとも。 {――-にん[遊人](名) ㊀一定の業なき人。㊁ばくちを以て生業とする者。ごろつき。 ――-め[遊女](名) うかれめ。妓女。 ――-もの[遊物](名) ㊀あそびだうぐ。おもちや。㊁うかれめ。 十――-を[遊男](名) 伶人。樂人。
あそ-ぶ[遊](自、は四) ㊀好むことをしてたはむる。なぐさみごとす。㊁山野などにいたりて心をなぐさむ。㊂職務なくして居る。ひまにてあり。㊃音樂を奏す。㊄へめぐる。經歷す。旅行す。「千里の外に―」㊅敎を受く。「先生の門に―」㊆はなるゝ。㊇たのしむ。なぐさむ。㊈博奕す。ばくちをうつ。㊉酒色にふける。はうたうす。㊉一人をあざわらふ。人をもてあそぶ。
あそみ[朝臣](名) ㊀姓(かばね)の名、第二等に位す。あそ。㊁四位以上の爵位ある人の敬稱。「源義家―」。
あそん[朝臣](名) 「あそみ」の音便。
あた[仇](名) ㊀我にたてつき爭ふもの。我に害をなすもの。恨みあるもの。かたき。てき。(讐)。㊁攻め入し來たる敵兵。てき。(讎)。㊂うらみ。怨恨。㊃えがくし。復讐。「―をなす」

十あた[咫](名) 太古の尺度の名、今の四寸。
あだ[徒](名) ㊀いたづら。むだ。無益。㊁はかなきこと。かりそめ。
{あだ[仇](名) ㊀あたの訛。㊁うはき。浮氣。㊂なまめきたる風情「―な姿」(婀娜)。
あだ-あだ-し[仇仇](形、二) なまめかし。
あだ-うち[仇討](名) ㊀親屬若しくは朋友を殺したる人を殺して、怨みをかへすこと。かたきうち。㊁怨みをかへすこと。
あだ-がたき[仇敵](名) あだ。かたき。
あだ-かも[恰](副) さながら。ちやうど。そつくり。そのまゝ。まさしく。(宛然)。
あだ-く[仇](自、か下二) そはそはす。心定まらず。
あだ-ぐち[徒口](名) 無益なる言語。むだぐち。あだごと。へらずぐち。
{あだ-くらべ[仇競](名) ㊀互に浮薄を競ふこと。㊁互になまめきたる風情を競ふこと。
あだけ[徒](名) もろくはかなき様。
あだ-け[仇氣](名) あだあだしきこと。いろごのみ。 ――-もの[仇氣者](名) あだけたる人。
{あだ-ける[仇](自、か下一) わざと暴行す。つらあてに亂暴す。あくたれる。いたづらす。あばる。
あたご-ごけ[愛宕苔](名) 【植】卷柏科に屬する隱花植物、莖細く、葉は檜木に似て冬褐色に變ず、山城國愛宕山に多きより此名あり。
あだ-ごころ[他心](名) うはきなるこゝろ。
あだ-ごと[徒言](名) あだぐち。
{あたし[私](代) 「わたし」の訛。
十あだ-し[他](形、二) ことなり。別なり。
あだ-し[徒](形、二) はかなし。もろし。

{あたじけ-な-し(形、二) やぶさかなり。きはし。(吝嗇)。
あだし-ごころ[他心](名) 移りやすき心。あだごころ。ふたごころ。
あだし-の[徒野](名) なきがらを葬るところ。葬地。
あだし-ちぎり[徒契](名) 末のとげられぬ契。はかなきちぎり。
あだし-びと[他人](名) ほかのひと。たにん。
あだし-よ[徒世](名) 生きて居て益なき世。はかなき世。
あた-す(他、さ變) ㊀あたなふ。てきたふ。はむかふ。(仇)。㊁兵を加ふ。せめいる。(寇)。㊂十強く譏る。あつ。
あた-たか[暖](名) ㊀あつくなくさむくなき温度。ぬくきこと。㊁資財豐かなること。㊂愛情深きこと。 ――-さ[暖](名) あたゝかなる度合。 ――-し[暖](形、一) あたゝけし。あたゝかなり。 ――-み[暖](名) あたゝかなる度合。
あたたけ-し[暖](形、一) 寒からず暑からず。あたゝかくあり。
あたたまり[暖](名) あたゝまること。あたゝかになること。又、あたゝかなる氣。
あたたま-る[暖](自、ら四) あたゝかになる。ぬくまる。
あたた-む[暖](他、ま下二) あたゝかにす。あたゝむる。
十あた-たむら[仇屯](名) 仇の屯所。敵營。
{あたた-める[暖](自、ま下一) ㊀あたゝかにす。㊁人に秘して、自身ひとり利を取る。
あだ-な[徒名](名) うはきの名。むだの名。
あだ-な[綽號](名) 人の面貌・性質・擧動などにより、實名の外に他人の負はせ呼ぶ名。

十あた-なふ[寇](自、は四) あたをなす。あだす。
あだ-なみ[徒浪](名) あだし浪。人心の浮きうきして定まらぬに喩へいふ語。(仇浪)。
あだ-ね[徒寢](名) ひとり空しく寢ること。あだぶし。
十あたは-す[illegible](他、さ四) 男女の交合にいふ語。
あだ-ばな[徒花](名) さきて實のらざる花。むだばな。
十あた-はら[癪](名) 病の名。せんき。
あたひ[價、値](名) ㊀賣買の金額。ねだん。ねうち。㊁勞働の報酬。ちんぎん。ねだん。㊂ねだんにあたる金錢。㊃人又は物の品格。たふとさ。「―ある人」。㊄【數】演算を經て得たる數。數値。 ――-ふたつにせず[不二價] かけねなきにいふ。
あだ-びき[徒彈](名) 正しき音律によらず、戲れごとに、琴・三味線の類をひくこと。
あだ-びと[徒人](名) ㊀心のさだまらぬ人。うはきもの。㊁他人。
あた-ふ[能](自、は四) ㊀(當り合ふ義)。適合す。かなふ。「十德なき人は、判者にあたはず」。㊁爲し得。できる。
あた-ふ[與](他、は下二) わがものを人にわたして、其所有となさしむ。くれる。やる。つかはす。あくる。
十あた-ふ[戲](自、は下二) 放蕩に亂戲す。禮儀作法に缺けたるおわざす。ふざける。あたける。
あだ-ぶし[徒臥](名) ひとりね。あだね。
{あだ-ふた(名、副) ㊀たくさん。ぎやうさん。㊁驚きて心の動揺するさまにいふ語。

あたへ[直](名) 上古の姓(かばね)の名。
〔あたへ・る[與](他) 「あたふ」の訛。
あたま[頭](名) ㊀かしらのいたゞき。なうてん。㊁首より上又は前の稱。かしら。㊂物事のはじめ。㊃物事のうへ。㊄頭髮。かみ。「―をゆふ」。㊅一人前。「―わり」。㊆思想。かんがへ。「―をなやます」。 ―かくし[頭隱](名) 一種の頭巾、元祿の頃、比丘尼・老女などの冠りしもの。 ―かず[頭數](名) ひとかず。人數。「―十一人」。 ―かち[頭勝](名) ㊀釣り合ひをはづれて頭大なること。㊁はじめの終りより大きなること。 ―わり[頭割](名) あたまかずに應じて割りつくること。 ―をあぐ 世に出づ。あらはる。 ―をかく 失敗す。又、こまる。 ―をさぐ 屈從す。したがふ。 ―をはる うはまへをかすりとる。
あだ・まくら[徒枕](名) いたづらぶし。あだぶし。
‡あだ・む[仇](他、ま四) 敵視す。あたす。てきたふ。
あだ・め・く[仇](自、か四) ㊀婀娜に見ゆ。㊁情に溺れやすきさまに見ゆ。「とりなせば―」。
あだ・もの[徒物](名) つまらぬもの。はかなきもの。
〔あだ・もの[仇物](名) うつくしくなまめかしき「―人」。美人。
あだ・や[徒矢](名) まとに中らざる矢。
‡あだ・ゆまひ[仇忌](名) 仇に向ふことを忌むと、或は婀娜の戲にて、賄賂のとなりともいふ。
あたら[可惜](名) をしむべきこと。をしきこと。
‡あたら・し[可惜](形、二) をしむべし。をし。
あたら・し[新](形、二) ㊀舊くなし。㊁はじめなり。㊃腐りてあらず。㊂あらたまりたり。

‡あたらし・む[惜](他、ま四) をしむ。
あたり[當](名) ㊀あたること。㊁事の思ふ如くなりたること。㊂てがゝり。「―が付く」。
あたり[邊](名) わたり。ほとり。きんじよ。「春風は、花の―をよきて吹け」。
あたり[頃](名) ころ。とき。「去年―」。
‡あたり・あたり[邊邊](名) こゝかしこ。處々。
あたり・あ・ふ[當合](自、は四) たゝかふ。わたりあふ。きりあふ。
あたり・きんじよ[邊近處](名) そのちかまはり。わが居る處の近處。
あたり・さはり[當障](名) さしひゞき。影響。
あたり・どし[當年](名) ㊀田畠のとりいれの多き年。㊁たくめる事のよく成功する年。
あたり・ぶるまひ[當振舞](名) 事の成功したる祝ひとして、人を饗應すること。
あたり・まへ[當前](名) ㊀是非ともあるべきこと。當然。㊁通例。尋常。なみ。
あたり・もの[中物](名) 食物のために、中毒を起したること。
あた・る[當](自、ら四) ㊀さはる。觸る。㊁ぶつかる。衝突す。㊂目的どほりに成就す。「まとに矢が―」。「出版が―」。㊃光りが達す。㊄であふ。㊅對す。むかふ。㊆敵す。はりあふ。㊇比す。くらぶ。㊈のぞむ。たふ。「局に―」。㊉あてはまる。かなふ。「藥が病に―」。⑪或方面にあり。「薩陀峠は南に―」。⑫火にあたゝまる。⑬さしひゞく。⑭つらき仕向をなす。いかりを遷す。⑮さぐる。試みる。「値を―」。
あた・る[中](自、ら四) 惱ませらる。いためらる。さはる。「毒に―」。

あ・ち[彼方](代) あなた。かなた。あちら。あっち。
あぢ[鰺](名) 【動】硬鰭類中あぢ科に屬する魚。體は長楕圓形をなし腹底は水平なり。鰓下より尾まで一條の刺あり、背部は蒼色にして微赤色を帶び、腹部は白くして紅色を含む。北海道より西南に至る沿海諸所に産す。まあぢ。
あぢ(名) 【動】「あぢがも」に同じ。
あぢ[味](名) ㊀食物に對する舌の感覺。あぢはひ。(風味)。㊁物事の趣味。おもむき。「風流の―」。㊂手際よきこと。うまく行くこと。ぢやうず。㊃怪しむべきこと。わけのありげなること。
〔あぢ・うり[味瓜](名) 【植】「まくはうり」に同じ。
あぢ・がも[味鳧](名) 【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、形は鴨に似て鴨より小し、頭は黃赤を帶びたる青綠色、翅は灰色、胸は黃赤色に小黑點を混へ、腹は白く、背は灰白の中に赤黑き毛雜る、數百群をなして生棲す。
あぢき・な・し[味氣無](形、一) ㊀あかたなし、益なし。㊁面白くなし。興なし。㊂つらし。なさけなし。
あち・こち[彼方此方](代) あちらこちら。かなたこなた。
‡あぢさ(名) 【植】「ちさのき」に同じ。
‡あぢ・さけ[味酒](名) 味の佳良なる酒。
あぢさゐ[紫陽花](名) 【植】虎耳草(ユキノシタ)科に屬する灌木。葉は平滑にして卵形をなし、光澤ありて周圍に鋸齒を有す、花は美麗にして四瓣碧色、簇生す、觀賞用として栽培し、又、花を藥用に供す。あぢへんげ。てまりばな。(白繡毬)。
あぢはひ[味](名) ㊀あぢはふこと。あぢ。㊁うまみ。㊂おもむき。
あぢは・ふ[味](他、は四) ㊀飲食物の味を試みる。㊁おもむき又は意味を思ひ考ふ。「―に從ひて興あり」。

あぢは・ふ(他、は下二) 前條に同じ。
‡あぢ・まさ(名) 【植】「びらう」(蒲葵)に同じ。
‡あぢ・まめ[味豆](名) 【植】「ふぢまめ」に同じ。
〔あぢやら・づけ(名) 一種の漬物、はすの根・ずゐき・ごばう・大根などを細かにきざみて、酢・酒・醬油に漬けたるもの。
あ・ち・ら[彼方](代) あち。あなた。かなた。 ―こちら[彼方此方](代) あなたこなた。
あ・つ[當](他、た下二) ㊀さはらす。うちつく。㊁あてはまらす。㊂あてがふ。(充)。㊃むかはす。㊄つかさどらしむ。㊅あはす。㊆正しく判斷す。「身のうへを―」。㊇目的どほりに成す。「まとに―」。
あつ―[厚](接頭) 或語に冠しあつき意を表はす。「―いた」。
あつ―[熱](接頭) 或語に冠しあつき意を表はす。「―かん」。
〔あつ・あつ[熱熱](名) 男女間の愛情極めて深きさまにいふ語。
あつ・いた[厚板](名) ㊀ぶのあつき板。㊁織物の名、絹のねりいとを經とし、生絲を緯として織りたるもの。
‡あつえ・びと[篤癃人](名) 惡疾又は不具の人。
あつ・えふ[厚葉](名) 鳥の子紙の一種。
あつ・かは[厚皮](名) ㊀皮膚のあつきこと。㊁恥を知らぬこと。あつかましきこと。(厚顏、鐵面皮)。
あつかは・し[煩](形、二) うるさし。わづらはし。むつこし。
‡あつかは・し[暑](形、二) あつぐるし。
あつか・ひ[扱](名) ㊀あつかふこと。㊁爭ひの仲裁。 ―だて[扱立](名) あつかひのまなし。氣に入らぬあつかひ。

あつか・ふ[扱](他、は四) ㊀世話をす。めんだうを視る。㊁とりはからふ。とりさばく。㊂つかふ。もちふ。「刀を―」。㊃當惑す。あぐむ。「もち―」。
‡あつか・ふ[噯](自、は四) 身に熱ありて惱む。
あつかま・し(形、二) 恥を知らずしてまつこし。つらのかはあつし。
あつ・がみ[厚紙](名) はり合せたる厚き紙。
〔あつがり(名) 暑さにおそるゝ性質、又、其人。
あづかり[預](名) ㊀あづかること。㊁あづかりまもる人。㊂留守番。㊃一局部の官長。「御船藏―」。㊄あづかりの證書。㊅相撲の勝負の曖昧なるとき、行司これを決せずにおくこと。 ―きん[預金](名) ㊀他よりあづかりたる金。㊁政府・銀行等が、一定の法規に從ひ、他より受託したる金、銀行のは定期預金と當座預金とあり、政府のは通常預金と定期預金とあり、何れも利子を付するを例とす。 ―にん[預人](名) ㊀あづかりて居る人。㊁他へあづかりとなりて居る人。㊂金錢其他物品の保管者。 ―しようけん[預證券](名) 金錢其他のものを保管する證として、預主に交付する證書。 ―しようしよ[預證書](名) 「あづかりしようけん」に同じ。
〔あつが・る[暑](自、ら四) 暑さをおそる。暑氣をつよく感ず。
あづか・る[與](自、ら四) かゝはる。かゝる。關係す。被むる。
あづか・る[預](他、ら四) 引き受けて守る。

あつ・かん[熱燗](名) 酒の燗のあつきこと。
あつ・ぎ[厚着](名) 衣服を多く重ねて着ること。
あづき[小豆](名) ㊀【植】豆科に屬する栽培草本、葉は複數羽狀をなし、花は黃色なり、種子は、通常帶赤色なれど稀に白色のものあり、食用とし又洗粉の原料とす、あかあづき・やへなりあづき・くろあづき等種類多し。㊁「あかあづき」の專稱。㊂「あづきいろ」の略言。 ―いろ[小豆色](名) 赤にすこしく黑を帶びたる色。 ―がは[小豆革](名) あづき色に染めたるなめしがは。 ―がゆ[小豆粥](名) 赤小豆をまじへて炊ぎたる粥。さくらがゆ。 ―めし[小豆飯](名) 赤小豆をまじへて炊ぎたるうるちごめの飯。あかのまんま。あかのめし。 ―もち[小豆餅](名) 赤小豆の餡をつけたる餅。あんころもち。あづきもち。(黑兒)。
あづ・く[預](他、か下二) 假りに人手に渡して保護せしむ。保管をたのむ。(委託、寄託)。
あつくる・し[熱苦](形、二) 苦しきほどあつし。
あつ・け[暑氣](名) ㊀あつきはてり。炎天の氣。㊁炎天の氣に犯されたること。
あづけ[預](名) ㊀あづくること。㊁德川時代に、罪過ある人を、他にあづけて守らしめしこと。「親類―」。 ―きん[預金](名) ㊀寄託したる金。㊁政府又は銀行のあづかりきんを、預主よりいふ稱。「あづかりきん」の條を見よ。 ―ぬし[預主](名) ものをあづけたる本人。
〔あっけ[呆氣](名) おどろきてあきること。 ―にとらる いたくあきれて、我をうしなふ。

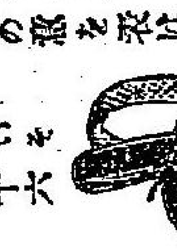
†あつけ・し けし [熱](形、一) あつし。
あつ-けしやうしゃう [厚化粧](名) べにおしろいを濃くつけたるけしやう。
{あつけ-なし (形) 「あへけなし」の音便。
{あつけらかん (名) ぼんやり。うつけ。
{あづける [預](他) 「あづく」の訛。
あつ-さ [熱・暑](名) ❶あつき度合。❷夏の時候。
あつ-さ [厚](名) ❶厚くある度合ひ。❷立體の長さ及幅にあらざる第三方の經。平たき物體の最短なる邊の長さ。平たき物體數層重なるとき其二面間の距離。
あづさ [梓](名) 【植】「あかめがしは」の別名。——みこ [梓巫](名) あづさの弓をひきて、神おろしをするみこ。——ゆみ [梓弓](名) あづさの木にて造りたる弓。——ゆみ [梓弓](枕) 「張る」「引く」「射る」「よる」「もとすゑ」「おと」に冠らする詞。
(あつ-さく [壓搾](名) おしちゞむること。——くうき-ポンプ [壓搾空氣——Condensing pump](名) 空氣若しくは他の氣體を壓搾して凝縮せしむるに用ふる「ポンプ」。自轉車「ポンプ」は其一なり。(壓搾空氣喞筒)。
{あつさり (名) まつこくなきさま又はてがるきさまにいふ語。たんぱく。けいべん。
{あつさり (副) まつこくなく。てがるに。たんぱくに。けいべんに。
†あつさゐ (名) 【植】「あぢさゐ」に同じ。
アツシ [厚子](名) ❶織物の名。「アツニ」の樹皮より製したる絲にて織りたるもの。「アイヌ」人の常用衣服に用ひらる。❷織物の名。和泉國より産出せる厚き平地の木綿。其質きやうぶなるを以て、多く勞働者の仕事着に用ひらる。

あつ・し けし [熱](形、一) ❶はげしくほとほる。❷發熱強し。(暑)。❸熱心なり。
あつ・し けし [厚](形、一) ❶あつさ薄からず。あつみ多し。❷ゆたかなり。❸こまやかなり。こし。❹まこと深し。なさけ深し。(篤)。❺あさはかならず。かるがるしからず。(敦)。❻風邪深し。(渥)。
あつ・し けし [篤](形、一) 病熱しておもし。やまひ重し。
(あつ-し [壓死](名) おしてころすこと。おされてしぬること。
(あつ-し [遏止](名) とゞむること。
(あつ-しゆく [壓縮](名) おしちゞむること。——ポンプ [壓縮——Condensing pump](名) 「あつさくくうきポンプ」に同じ。(壓縮喞筒)。
あつ・す せするさすろ [壓](他、さ變) ❶上より押へつく。おす。おしつく。おさへつく。❷下風に立たす。屈服せしむ。❸ゆづる。とりあさふ。❹おし下す。おし倒す。おし迫る。❺備くぎるに迫る。「敵をあつして即す」。
(あつ-せい [壓制] ❶けんぺいづくにふるまふこと。むりにおしつくること。❷公力を利用して、自由を束縛し言動をおさへつくること。「一政府」。
(あつ-せん [斡旋](名) ❶めぐらすこと。めぐらかへること。❷とりもち。せわ。
(あつ-たう たう [壓倒](名) ❶おしたふすこと。❷他を凌駕すること。まのぐこと。
{あつたか [暖](名) 「あたゝか」の訛。
{あつたまり [暖](名) 「あたゝまり」の訛。
{あつたまる [暖](自) 「あたゝまる」の訛。
{あつためる [暖](他) 「あたゝめる」の訛。
{あつたら [可惜](名) 「あたら」の訛。

(あつち [彼方](代) 「あち」の訛。
あづち [垜](名) (あむつちの義) 土を堺の如くに築きて、弓を射る的をかくるもの。いくはどころ。——まくら [垜枕](名) 庭の匠き枕、形垜に似たるより名づく。こまくら。——や [垜屋](名) あづちの上をおほふ假屋。

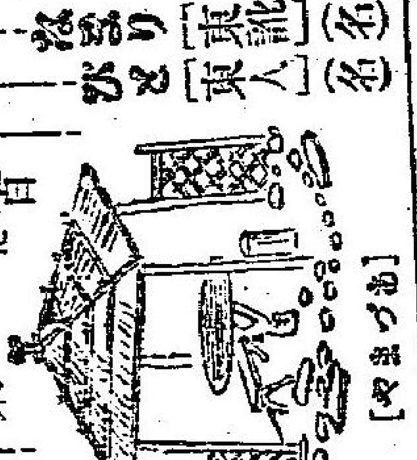
「と」[あづち]

あづち-もん [安土門](名) 「あびづちもん」に同じ。
あつ-と (副) 「喝と」の音便。——ばかり-に (副) あつと聲立てたるばかりに。(いたく驚きて)。
†あつなひ ひ (名) 二人一處に謡ること。(合謡)。
アツニ (名) (「アイヌ」語 At-ni) 【植】榆科に屬する喬木。高さ十丈に達す。葉は裏面に毛を生じ、卵形又は長楕圓形にして尖頂をなし鋸齒を有す。花は單性、北海道に産し、木材は種々の用に供せらる。「アイヌ」は此樹の皮にて「アツシ」を製す。
(あつ-ぱく [壓迫](名) おしせまること。おすこと。
あつ-ぱひ ひ [熱灰](名) 火氣の冷却せざる灰。
あつぱれ [遖](感) 讚美・感歎の意を表はす語。あはれ。(天晴)。
あつ-びたひ ひ [厚額](名) いたのあつき一種の冠。古昔、男子十六歳以上より用ひしもの。


[あつびたひ]

あつ-びん [厚鬢](名) あつくつくりたるびんの形、古昔、神主などのよそほひしもの。
(あつぷく [壓伏](名) おしつくること。おさへつくること。
あつ-ぶさ [厚總](名) ふさを多くかざりに付けたる馬のおしかけ。「ま。(厚・)。
あつ-ぶすま [厚衾](名) 綿の多く入りたるふす

†あ-づま [吾妻](名) わが妻。
あづま [東、東國](名) ❶(日本武尊東征の歸路碓氷嶺に登り東望して、弟橘媛を追懐して「吾嬬者耶(アヅマハヤ)」とのたまひしに起る)箱根山以東の國々の總稱。❷「あづまごと」の略言。†——あそび [東遊](名) 六人にて舞ふ上古の歌曲。†——うた [東歌](名) 萬葉集・古今集などに載せたる東人のよみたる歌。†——うど [東人](名) あづまびと。——からげ [東縢](名) 衣の裾を高くからげること。——ぎく [東菊](名) 【植】菊科に屬する草。春の頃、淡紅色若しくは白色の花開く。——ぎぬ [東絹](名) 東國より織り出だすあづま絹。——げた [東下駄](名) 一種の女下駄。櫻の樹の下駄に疊表をつけたるもの。——コート (名) 一種の被服、形は被布に似て長さ踵に及ぶ。羅紗・「セル」などにて仕立つ。(東外套)。——ごと [東琴](名) ことの一種。六絃のもの。やまとごと。あづま。——じあ [東路](名) あづまびとの甲(カ)ぱしりたること。——ぢ [東路](名) 畿内よりあづまへ行く道。又、あづまの路。「一の」勿來の關のよそどりし。——なまり [東訛](名) 東國のことばのなまり。——びと [東人](名) あづまの人。あづまうど。——ひやくくわん ひゃく [東百官](名) 關東武士の用ひたる名。伊織・求馬などの類。京都禁延の百官に似たればいふ。——まひ まい [東舞](名) 東國の舞踊。——や [東屋](名) 屋根を四方にふきおろしたる質素なる小屋。壁なくして


[あづまや]

柱は四本あり。(四阿)。†——わらは ワラ [東豎子](名) 古昔、内侍司に屬せし女官。
あつまり [集](名) あつまること。集まりたる團體。まとゐ。むれ。——せい [集勢](名) 紀律なき團體。鳥合の衆勢。
あつま・る るらりれ [集](自、ら四) 多くのもの一所に寄りつどふ。よりまとまる。よる。むらがる。
あつ・む めむむるれ [集](他、ま下二) 多くの物を一つ處により來らしむ。まとむ。あはす。よす。
あつ-むぎ [熱麥](名) うどん又は索麵(サウメン)を熱くしたるもの。ひやむぎの對。
あつ-もの [羹](名) (熱物の義) 菜肉にてこしらへたる汁。すひもの。——にこりてなますをふく [懲レ羹吹レ膾] 或事に失敗したるために疑懼心を起し、何事につけても、除計なる苦心をするにたとへいふ。
あつもり-さう さう [敦盛草](名) 【植】蘭科に屬する多年草。母衣(ホロ)形の紫色の花を開く。
あつもり-そば [熱盛蕎麥](名) もりそばをあたゝめたるもの。あつもり。
†あつ・ゆ ゆゆゆる [篤](自、や上二) 病あつくなり行く。
あつ-ゆ [熱湯](名) あつき湯。煮えかへる湯。
あつら・ふ ふへふふ [誂](他、は下二) 謀りごとを頼む。注文す。(誂)。「たる品。
あつらへ エラ [誂](名) あつらふること。又、あつらへ
あつらへる [誂](他) 「あつらふ」の訛。
(あつ-りよく [壓力](名) 【理】物體が他の物體を壓迫する力。圍壙にいれたる液體の器底に及ぼす壓力は、其液體の重さに等し。——けい [壓力計] 氣體の壓力を計る裝置。其形種々あり。普通なるはU形の曲管に水銀を入れ、其一脚を壓力を計らんとする氣體に入れたる器に繫ぎ、兩脚内の水銀面の高さの差によりて計るものなり。又、蒸汽機關に用ふるものは、金屬製の彎曲管にして、これに蒸汽を導くときは、其壓力は曲管を伸長せんとして指針を動かすを以て、指針の位置により、盤面上の目盛りを讀みて、壓力を知るを得。——へんしつ [壓力變質=Dynamoment amorphism](名) 【地】地殼の變動によりて生ずる壓力のために、岩石の變質すること。
あて [貴](名) 身分の貴きこと。上ひん。
あて [宛](名) ❶わりあつること。あてがひ。❷其人と指すこと。なざし。
あて [當](名) ❶當つること。❷もくてき。まと。めど。みこみ。❸たのみ。たより。❹物を打ちなどするとき其下にしくもの。——いし [當石](名) 貴金の眞否をためす石。試金石。——うま [當馬](名) 牝馬の牝遊の徵候不明なるときに行ふ一法。牝馬を柵内に入れ牡馬を柵外に置けば、牝遊の期到れるものは牡を慕ひ、然らざるものは牡を避くるの狀あり、よりてこれを知るを得。
あて-おこな・ふ オコナフ [充行](他、は四) あてがふ。
あてがひ ガイ [宛行](名) あてがはすこと。あてもとなふ物。——ぶち [宛行扶持](名) ❶あてがひてわりわたす米金。❷先方の望に應ぜず、此方の心のまゝに與ふる物。
あてが・ふ ガウ [充行](他、は四) ❶あてゝわりわたす。❷心まかせにくばる。❸あてはめ匿く。❹こゝろみにあはせて見る。
(あて-くち [當口](名) あてこすり。「る言。
(あて-こすり [當擦](名) あてこすること。あてこす

「あて-こす・る［當擦］(自、ら四) 其人の面前にて、他事にかこつけ遠まはしに惡しくいふ。
あて-こと［當事］(名) あてにする事、賴みにする事。
あて-じ［當字］(名) 其字の意義に拘はらずして、よみごゑなどによりて當つる字。
「あて-ずっぽう［ズッポウ］(名) むちやくちや、でたらめ。
あて-ずゐりやう［當推量］(名) よりどころもなきにおしはかること。(臆測)。
あて-つ・く［宛付］(他、か下二) あてがふ。
「あて-つ・ける［當付］(自、か下一) あてこすること。
あて-ど［當所］(名) めど。めあて。たのみ。
あて-な［宛名］(名) 手紙・願書などにて、宛てやるべき先方の名。
あて-に［貴］(副) 上ひんに。品よく。あてやかに。
「あて-の-み［當飲］(名) 他人の酒をあてにして飲むこと。
あて-はか・る［當量］(他、ら四) おしはかる。
あて-はま・る［當嵌］(自、ら四) ほどよくはまる。適當す。
あて-は・む［當嵌］(他、ま下二) あてあはす。あてはまらしむ。
あて-ば・む［貴］(自、ま四) 上ひんめく。よき人ぶる。
「あて-はめる［當嵌］(他) 「あてはむ」の訛。
あて-びと［貴人］(名) 身分ある人。きにん。
「あて-ぶり［當振］(名) でたらめに行ふをどり。あてずっぽうのをどり。
あて-み［當身］(名) 柔術にて、こぶしを人の急所に突きあて、一時呼吸をとゞむること。
あて-もの［中物］(名) ❶かくせる物をいひあつること。又、其あそび事。❷當て物に射當つること。

あて-やか［貴］(名) みやびやか。高貴。上品。
「あて-る(他) 「あつ」の訛。
あと［跡］(名) (足所の義) ❶踏みたる所にのこる足の形。あしあと。「人—の絶えし山路」。❷ゆくへ。ゆくて。「—をつける」。❸ゆきゝ。わうらい。❹過去にありし物事のあるし。「故郷の—」。❺流傳せる事功又は威德。「先王の—」。❻ためし。ぜんれい。❼あとめ。かめい。「—を嗣ぐ」。——をくらます［晦レ跡］のがる。にぐ。出奔す。
あと［後］(名) ❶のち。❷うしろ。❸えりへ。すゑ。❹以前。「三年—」。❺以後。「—が大事」。❻死後。「—を弔ふ」。❼子孫。「—絶ゆ」。——をひく 其事ながくつゞく。かぎりなくむさぼる。
「あと［阿堵］(名) 金錢の異名。「あとぶつ」に同じ。
あと(名) ❶能狂言のわきき。❷能狂言の拍子をとること。
あと-あし［後脚］(名) けものゝえりへの脚。——ですなをかく 其人の許を去るにのぞみて、仇をなして行くにいふ。
廿あとう-がたり(名) など〳〵がたり。「—の心をとりて、かくなん申しける」。
廿あと-う・つ(自、た四) ❶能狂言のあとをなす。❷人の話しに拍子を取りて、はづみをつく。
あと-おさへ［後押］(名) しんがりすること。行列などの殿後。
あと-かた［後肩］(名) 輿・擔架等にて後方の鞆を擔ふもの。あとぼう。さきかたの對。
あと-かた［跡形］(名) 物事の見るべき形跡。
あと-かたづけ［後片付］(名) 物事の終りを片付くること。
あと-かた-な・し［跡形無］(形、二) ❶ありたる痕見えず。❷わけわからず。

あと-がね［後金］(名) 契約の金額の內、幾分を返濟したる殘金。のこりきん。
廿あと-かばね［後姓］(名) 血統をひきたる子孫。ちつゞき。後裔。
あと-がへり［後翻］(名) 俳優の技の一種、うしろむきに身を空に一轉して、復び立つこと。とんぼがへり。
「あと-がま［後釜］(名) 前のかはりとなるべき人。即ち、候補者。あとがはり。
あと-きよめ［跡淸］(名) 葬式のとき、棺を送り出だせしあとにて、巫僧を請じ室內を祓ひ淸むること。
あと-きん［後金］(名) あとがね。のこりきん。
あと-くち［後口］(名) ❶殘りたる部分。のこりぶん。「仕はらひの—がまだ百兩」。❷物を飲食したるあと。❸話しの末まひ。
あと-げつ［後月］(名) 去月。先月。
あど-けな・し(形、二) わるぎなし。無邪氣なり。
あと-さき［後先］(名) あと、さきと。ぜんご。まへうしろ。(前後)。——みず［後先不レ見］(名) ぜんごの思慮なく事を行ふこと。むてっぽう。
あと-しき［跡式］(名) 父又は兄などの後を承けて、家主となること。あとめ。家督相續。
あと しらなみ［跡白浪］ ゆきしあとの分明ならざるにいふ。
あと-おさり［後退］(名) ❶あとへ退くこと。あとずさり。あとびさり。(逡巡、却走)。❷【動】「あとびさり」に同じ。
あと-ずさり［後退］(名) あとおさり。
あと-ぞなへ［後備］(名) 戰列隊の後方にある軍兵。あとおさへ。(後拒、後軍)。

廿あと-た・る［垂跡］(自、ら下二) 神佛の靈永く此世にとゞまる。
あと-つぎ［跡繼］(名) ❶先代のあとをつぐべき人。よつぎ。あととり。あとめ。(嗣子)。❷前官・前職の跡をつぎて、其事務・職權を掌る人。❸學問・技藝などの系統をうけつぐもの。
あと-とり［後取］(名) あとつぎ。よつぎ。
あと-の-まつり［後祭］(名) ❶常例の祭典終りたる其翌日。❷機會を失して事に効なきにいふ語。
あと-のり［後乘］(名) ❶後列に從ふ騎馬。❷時機に後れたること。
あと-ば［後齒］(名) 下駄の齒の後方のもの。
あと-ばら［後腹］(名) ❶産後の腹痛み。(兒枕痛)。❷事の過ぎたる後。
あと-ばらひ［後拂］(名) 葬送又は儀式などの果てたる後を片付くること。
「あと-ひき［後引］(名) 愈よ得て愈よ食ふこと。(多くは飲食にいふ)。——じやうご［後引上戸］(名) あとひきの強き性質。又、其人。
あと-びさり［後退］(名) ❶あとへ退くこと。あとずさり。❷【動】うすばかげろうの幼蟲、脫皮したる砂中に、すりばち形の穴を穿ちて潛伏し、小蟲の陷るを待ちてこれを食ふ、後へ退く特性あり。
廿あと-ふ［聘］(他、は下二) 妻をむかふ。
廿あと-ふ［誂］(他、は下二) あつらふ。
〔あと-ぶつ［阿堵物］(名) (こんなものゝ義にして、晉の王衍が錢を見て婢に「擧ケ—去」といひたる昔より出づ) 金錢の異名。
あと-ぼう［後棒］(名) 擔架などの後棒を擔ふもの。さきぼうの對。

あと-まく［後幕］(名) ❶あとの狂言。❷あとのいくさ。
あと-まくら［後枕］(名) あとさき。まへうしろ。
あと-まはし［後廻］(名) 延ばして他事の後に爲すこと。
あと-め［跡目］(名) ❶のち。うしろ。あと。❷先代の家督相續。あとまき。
あと-もどり［後戾］(名) 後へ返ること。❷事物の退歩すること。
廿あと-も・ふ［率］(他、は四) ひきゐる。いざなふ。
あとり(名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、形はほゝぶろに似て、頸・嘴は樺色、背は靑く、頭は淡藍鼠色なり、背・頭に黑斑あり。(猾子鳥)。
廿あな(感) 喜怒哀樂等凡て驚歎の意を表はす聲。あゝ。
あな［穴］(名) ❶くぼみたる所。うがてる所。(竅穴、孔、竅)。❷あやまち。きず。(過失、缺點)。❸損失。
あ-ない［案內］(名) 「あんない」の略言。
あな-いち［穴一］(名) 錢うちの一種、地に穴をあけ、錢を打ち込む小兒の遊戲。(胡投)。
廿あな-うら［足裏］(名) 足のうら。(蹠)。
あな かしこ［穴賢］ ❶あゝ恐れ多し。愼むべし。❷恐惶謹言にかへて用ふる語。
あな-がち［強］(副) 無理に。強ひて。
廿あな-かま［噫喧］ やかまし。かしまし。(人のさわぐを制するにいふ)。
あな-かんむり［穴冠］(名) 漢字の冠りの名、空、穿の如き字の頭にあるものをいふ。
あな-ぐま［穴熊］(名) 【動】食肉類中鼬鼠科に屬する獸、大さ狸の如し、穴居す、走ること遲かなり、我國深山に産す。

あな-ぐも［穴蜘］(名) 【動】蜘蛛類中眞正蜘蛛類に屬する蟲、地を管狀に穿ちて巢となし、絲を以て其內面を張ひ、戶を造りて巢口を塞ぐ。
あな-ぐら［穴藏］(名) 地中に穴を鑿ちて、其底に品物を藏する用となすもの。(窖、土窖)。
あな-ぐ・る(他、ら四) ❶穿つ。❷探索す。
あな-ご［穴子］(名) 【動】喉鰾類中あなご科に屬する魚、體形うなぎに似る、鱗なくして胸鰭よく發達し、尾端は尾鰭によりて圍まる、近海魚にして、晝間は泥底に潜み夜間は出でて食餌を求む。
〔あな-さがし［穴探］(名) 人の過失を搜索すること。
廿あなし(名) 西北の風。あなぜ。
廿あな-すゑ［足末］(名) ❶足のさき。❷子孫。後
〔あな-ぜ(名) 「あなし」の訛。
あ-なた［彼方］(代) ❶あのかた。むかふの方。あちら。かなた。❷貴下。ごへん。——こなた［彼方此方］(代) あっちこっち。あちこち。
あな-ぢ［穴痔］(名) 痔の名、肛門のかたはらに穴のあく痔。
廿あなづらは・し［可侮］(形、二) 輕々し。人に侮蔑せられやすし。
廿あなづり［侮］(名) あなどり。
廿あなづ・る［侮］(他、ら四) かろしむ。あなどる。
あなどり［侮］(名) あなどること。けいべつ。
あなど・る［侮］(他、は四) みさぐ。かろしむ。いやしむ。かろんず。けいべつす。
〔あな-なし［穴無］(名) 女の不具者。とつぎの道に通ぜざるもの。([illegible])。
アナナス(名) [Ananas] 【植】鳳梨科に屬する熱帶植物、實は松の實に似て、食用に供せらる。まつりんご。(鳳梨)。

†あななひ イナ (名) ㊀高き處にのぼるあしがゝり。あしば。あしまろ。
†あななふ ウナ [はひふへ] (他、は四) ㊀たすけ。あぎなひ。補助。㊁あぎなふ。補助す。
あなにく[憖憎] (感) あゝ、にくや。
あなはじかみ (名) 【植】「まやうが」の古名。
あなばち[穴蜂] (名) 【動】膜翅類中細腰蜂科に屬する蟲、我國に產する細腰蜂中にて、最大なる種なり、全體黑色を呈し、前頭及後胸背に金色毛を密生す、常に花間に多し。(地蜂)
†あなひら[蹠] (名) 足の甲。(跌)。
†あなへぐ ゲエ [がぎぐぐげげ] [窶] (自、か四) ㊀あしなゆ。
あなほり[穴掘] (名) ㊀穴を掘ること。㊁「あなほりだいく」の略言。㊂葬りの穴を掘るを業とするもの。㊃【動】「あなぐま」の別名。——だいく[穴掘大工] (名) ㊀穴を掘るを職とする大工。㊁技の拙き大工を嘲りていふ語。
あなもん[穴門] (名) 忍びの門。いぬくゞり。
あに[兄] (名) ㊀同胞にして年長なる男子。え。せ。いろせ。このかみ。せうと。あにき。はらから。せな。㊁妻の兄。夫の兄。又、姊の夫。㊂男子を親しみて呼ぶ稱。
あに[豈] (副) 何として。いかに。どうして。「わが戀に、——まさらめや、沖津白浪」。
〔あにい[兄] (名) 「あに」の轉。——かぶ[兄株] (名) 人に推戴せらるゝ身分の男。「町內の——」。
あにき[兄貴] (名) 兄の尊稱。あにざみ。
あにご[兄御] (名) 他人の兄に對する敬稱。あにさま。
†あにずゑ[兄季] (名) すゑの兄。(末兄)。
あにぢゃひと[兄人] (名) (兄である人の意)兄に同じ。

あにでし[兄弟子] (名) 我より前に師に就きたる人。(學兄)。
あにぶん[兄分] (名) 假りに定めたる兄。(義兄)。
あによめ[嫂] (名) 兄の妻。
アニリン[亞尼林＝Aniline] (名) 【化】無色油狀の液體、石炭を乾溜するとき發生する一物質にして、工業上多量に製するには、「ニトロベンゼン」を鐵及稀鹽酸にて還元するなり、無色にして特異の臭氣を有す、其水溶液に漂白粉の溶液を加ふれば、紫色を呈す、染色の原料として多く用ひらる。
あね[姊] (名) ㊀同胞にして年長なる婦人。あねき。あねい。あねご。㊁妻の姊。夫の姊。又、兄の妻。㊂女子を親しみて呼ぶ稱。
〔あねい[姊] (名) 「あね」の轉。
〔あねえ[姊] (名) 「あね」の轉。——かぶ[姊株] (名) 或一部分の女輩の人に推戴さるゝ身分の女。
〔あねき[姊貴] (名) 姊の敬語。
あねご[姊御] (名) 他人の姊に對する敬稱。
〔あねったい[亞熱帶] (名) 【植】森林植物帶の一、熱帶と溫帶との中間にありて、二十七乃至三十六南北緯度中に位するもの。——しよくぶつ[亞熱帶植物] 亞熱帶に屬する森林植物の總稱、即ち常綠のかし・くす・のき・すぎ等の類。
あねはづる[姊羽鶴] (名) 【動】つるの一種。
あねぶん[姊分] (名) 假りに定めたる姊。
あねむこ[姊聟] (名) 姊の夫。
アネロイドせいうけい[——晴雨計＝Aneroid barometer] 金屬の袋より成り攜帶に便なる晴雨計、袋の表面は襞狀をなし、外氣に觸るゝ面を大きくなし、內部は稍や空氣を除去したるものにして、外氣の壓力大なるときは表面を壓し、壓力弱くなるときは彈性により表面膨出し、指針を左右に動かすを以て、盤面の目盛りを讀みて、大氣の壓力を知るべし。

あの[彼] (代) かの。
アノード[Anode] (名) 【理】陽極に同じ。
アノクタラサンミャクサンボダイ[阿耨多羅三藐三菩提] (名) 【佛】(梵語、无上正偏知又は无上正等正覺と譯す)諸佛所證の最上の妙道をいふ。无上道。涅槃界。
アノクボダイ[阿耨菩提] (名) 【佛】「アノクタラサンミヤクサンボダイ」に同じ。
あののもの (副) 何の彼のと。
あは ワア [淡] (接頭) 或語に冠して淡き意を表はす。「—雪」。
あは ワア [粟] (名) 【植】禾本科に屬する一年生の栽培草本、おほあは・こあはの二種ありて、二種ともに糯(モチ)・粳(ウル)の別あり、瘠地にもよく生育して旱魃に堪へ、穀粒は長年の貯藏に堪ふ。
あはあはし アワアワシ [しくしきけれ] [淡淡] (形、二) ㊀きはめて淡し、ごくうすし。㊁おもしろみなし。
あはいひ アワイイ [粟飯] (名) 粟を炊ぎたる飯。
〔あはう ワホ [阿房] (名) おろかもの。ばか。——どり[阿房鳥] (名) 【動】水禽類中長翼科に屬する鳥、嘴端鉤狀をなし、頸は至つて長くして末端尖れり、前三趾は蹼を以て相連なる、熱帶產の海鳥なり。(信天翁)。——ばらひ[阿房拂] (名) 德川時代に行はれし一種の刑罰、武士の腰に帶べる兩刀をうばひて追放すること。

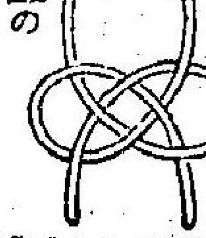
[あはうどり]

あはおこし アワ [粟粔籹] (名) 一種の菓子、粟を蒸して煎(イ)り、砂糖汁にて固めたるもの。

あはがら アワ [粟稈] (名) ㊀粟の穗をとりたるあとの莖。㊁【動】「やがら」に同じ。
†あはく アワ [かきくくけけ] (自、か四) 馬勞る。つかる。
†あはく アワ [けけくくるくれけよ] (自、か下二) 油斷す。
あばく [かきくくけけ] [發] (他、か四) ㊀土を掘り開きて、物を出だす。㊁人の密事などをさぐりだして、世にあらはす。
あはし アワ [しくしき] [淡] (形、二) ㊀濃からず。しつこくなし、あつさりしてあり。㊁味うすし。㊂趣すくなし。㊃色あさし。㊄情濃せず。
あはどけ アワ [粟苔] (名) 【植】水馬齒(ミヅハコベ)科に屬する一年生の小草、隨處陰濕の地に生ず。
あはしようろ [粟松露] (名) 【植】松露の一種、色黃なり。
あはす アワ [せせすするすれせよ] [合] (他、さ下二) ㊀一つにす。㊁同じくす。㊂あつむ。かさぬ。㊃めあはす。たぐはす。㊄着く。結ぶ。㊅藥品を配劑す。㊆音律を調ふ。㊇やはらぐ。むつましむ。㊈對す。㊉比ぶ。「照し—」。
〔あばずれ[阿婆擦] (名) 婦人の世路を歷て猾かしこくあつかましくなりたるを。
あはせ アワセ [袷] (名) 裏を着けたる衣服。
†あはせいひ アワセイ (名) 飯にあはせて食する菜。
あはせいと アワセイト [合絲] (名) よりあはせたる絲。
あはせかがみ アワセ [合鏡] (名) 二つの鏡を前後にして、うしろ姿を見ること。
あはせぐすり アワセ [合藥] (名) 數種の藥劑を調合せるもの。
あはせざより アワセ [合鱠] (名) 一種の料理、鱠の肉を菜に包みて、味をつけて燒きたるもの。

あはせたきもの アワセ [合薰物] (名) 數種の香を煉りて練り合はせたるもの。ねりかう。
あはせつち アワセ [合土] (名) 石灰と細石・黃土とを混じて、たゝきかためたるもの。たゝき。
あはせど アワセ [合砥] (名) 一種の砥石、刀・かみそりなどを磨く時に用ふるもの。
あはせばおり アワセ [袷羽織] (名) 裏の付きたる「羽織」。
あはせびん アワセ [合鬢] (名) 男の髮のゆひ方、髻の下髮をおくり込み、太き元結にて結びたるもの。
あはせめ アワセ [合目] (名) ものを合はせたる筋目。
あはせもの アワセ [合物] (名) ㊀合はせたる物の總稱。㊁一つの器物に、數品もりたるものゝ稱。——はなれもの 夫婦若しくは相愛の男女の間に、風波別離の生じ易きにいふ。
〔あはせる (他) 「あはす」の訛。
あはせわうど アワセワウド [合黃土] (名) 黃土に似たる「色」。
あはだ アワダ [膕] (名) 膝ぼね。ひざのかはら。
†あはだ [粟田] (名) 「あはだやき」の略言。
〔あばた (名) 痘瘡のあと。じやんこ。も。(痘痕)。
あはたけ アワ [粟茸] (名) 【植】菌類の一、秋生ず、黃色にして稍や黑色を帶ぶ、食ふべからず。
†あはくす アワクス [さしすすせせ] [淡] (自、さ四) (淡くする意)おとしめ見くだす。
あはだつ アワ [たちつつてて] [粟起] (自、た四) ㊀雲などのおほく起つ。「雲の—山の端に」。㊁恐怖又は寒氣のため、身の毛いよだつ。さうけだつ。
あはたやき アワタ [粟田燒] (名) 京都粟田口より燒き出だす陶器の總名、釉にひゞありて薩摩燒に類す。
あはちぢみ アワ [阿波縮] (名) 阿波國より產出する木綿ちゞみ。

あはぢむすび アワヂ [淡路結] (名) 緒の結び方、左右にわなを二つならべ、互に緒を通はしたるものにして、物のかざりに用ふ。
あはつ アワツ [てててつつるつれてよ] (自、た下二) 「あわつ」の轉。
†あはつけし アワツケシ [くしきけれ] [淡] (形、二) ㊀あはくしくあり。㊁不遠慮なり。
あはつぶ アワ [粟粒] (名) 粟の實のつぶ。
あはひ アワイ [間] (名) 物と物とのあひだ。人と人との交りの間。あひだ。あひま。みち。ま。なか。
あはび アワビ [鰒] (名) 【動】腹足類中前鰓類に屬する軟體動物、介殼は卵圓形にして中央少しく高し、外面には多少不正なる渦紋狀の線條及瘤狀の突起あり、外面は褐色又は蒼紫色にして、內面は眞珠色を帶ぶ、我國伊勢・伊豆・相模・安房・上總等に產す、潮流佳良なる近海に棲息し、槪ね海藻を食とす、肉は食用に供せらる。(石決明)。——しらたま[鰒白玉] (名) あはびだま。——だま[鰒珠] (名) 鰒の中にある珠。しんぢゆ。あこやだま。——むすび[鰒結] (名) 鰒の形に似たる紐の結びかた、總角の緒餘りなどを結ぶ。

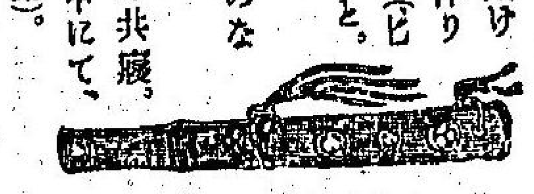


[あはびむすび]

あはぶ アワ [粟麩] (名) 黃色の麩。
†あばふ アハフ [はひふふへへ] (他、は四) 庇護す。かばふ。
あはみづあめ アワ [粟水飴] (名) 水飴の一種、粟より製したるもの。
†あはむ アワム [めめむむるむれめよ] [淡] (他、ま下二) 淡くす。うとくす。うとむ。冷淡にす。
あはめし アワ [粟飯] (名) 粟を炊ぎたるいひ。
あはめん アワ [粟麵] (名) 粟にて製したる麵。
あはもち アワ [粟餅] (名) もち粟を蒸して搗きた

る餅。——いし[粟餅石](名) 粟餅の如き黃色なる一種の石、園庭などに用ふ。
あは-や!アワ(感) 甚しく驚きたる時の發聲。「——といふ間もあらばこそ」。
あは-やき!アワ[粟燒](名) ㊀粟おこし。㊁粟をふかし餡を包みたる餅。
あばら[荒](名) 荒れさびたるさまにいふ語。
あばら[肋](名)「あばらぼね」の略言。——ぼね[肋骨](名) 左右合して十二對の骨より成り、背面は脊柱に、前面は胸骨に連接して、弓形の曲行をなし、柔軟なる諸內臟を保護す。肋間の筋は呼吸に大なる關係を有す。
あばら-や(名) ㊀途上に旅人などのやすみ所に設けたるかこひなき亭舍。(亭)。㊁あれはてたる家。(荒屋、敗宅)。
あ-ばり[網針](名)「あみばり」の略言。
あば-る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[荒](自、ら下二) ㊀荒れはつ。㊁暴行す。あばれさわぐ。(暴)。㊂放蕩す。
あはれ!アワレ[哀](名) いたはしきこと。あはれむべきこと。びんぜん。
あはれ!アワレ[天晴](感) あっぱれ。
[あばれ[荒](名) ㊀あばれさわぐこと。らんばう。(暴)。㊁强盜などの荒れくづれたるさまにいふ語。
あはれ-がひ!アワレガイ(名) 賤に餌を與ふること。
あはれ-が-る!アワレガル(ら、り、る、る、れ、れ)(他、ら四) あはれに思ふ。あはれむ。
あはれ-さ!アワレサ[哀](名) あはれなる度合。
あばれ-たんぜん[暴丹前](名) ㊀芝居にて、あばれものに扮する役者の着るたんぜん。㊁芝居の囃子の名、笛と太鼓とにてこれを奏す。
あはれ-び!アワレビ[憐](名) あはれみ。

あはれ-ぶ!アワレブ(ば、び、ぶ、ぶ、べ、べ)[憐](他、は四) あはれむ。
あはれ-み!アワレミ[憐](名) なさけをかくること。ふびん。
おひ。
あはれ-む!アワレム(ま、み、む、む、め、め)(他、ま四) ふびんに思ふ。いとしがる。なさけをかく。
[あばれ-もの[暴者](名) 亂暴狼藉なる者。又、酒色に狂へる者。
[あば-る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)[暴](自、ら下二) ㊀無法なる事を行ふ。亂暴す。㊁遊樂をなす。放蕩す。
あは-を!アワ[合緒](名) よりあはせたる絲。あはせいと。
あひ!アイ[遇](名) 面會。であひ。
あひ!アイ[間](名) あひだ。あはひ。ま。あひま。すき。
あひ!アイ(名)[動]「あひる」の略言。
あひ!アイ[相](副) ㊀かれもこれも。互に。㊁書狀文に、動詞の上に用ふる意識なき語。「——濟む」。
あひ!アイ(名) あひのつち。かけや。
アビ[阿鼻](名) 阿鼻地獄の略言。
あひ-あか!アイ[間赤](名) 德川時代に、奥女中の禮服の下に着し紅色の小袖。
あひあひ-がさ!アイアイ[相相傘](名) 二人にて一本の傘をさすこと。あひがさ。
あひ-いん!アイ[合印](名) 割符などのまたしに押す印。
あひ-うち!アイ[相擊](名) 戰などにて、互にうちあひたること。
あひえん-きえん!アイ[合緣奇緣](名) たがひに心あひて、えんのむすぼれたること、轉じて、緣づくの戲にいふ語。
あひ-おい!アイ[相老](名) 夫婦もろともにとしよること。
あひ-おひ!アイ[相生](名) もろともに同時に生ひ出づること、又、おない年。
あひ-かぎ!アイ[合鍵](名) 定まりたる鍵の外に、それと同じくあはせ造りたる鍵。

あひ-かご!アイ[相駕籠](名) 諸共に一挺の駕籠に乘ること。
あひ-がさ!アイ(名) あひ〳〵がさ。
あひ-かた!アイ[相方](名) ㊀あひて。㊁客に對する遊女。
あひ-かた!アイ[合方](名) 芝居のはやしかた。
あひ-かた!アイ[合肩](名) 物をかつぐ兩人のうちの一方のもの、稱。
あひ-がも!アイ[相鴨](名)[動]「あひる」の異名。
あひ-ぎ!アイ[間黃](名) 德川時代に奥女中の禮服のうちかけの下に着し黃色の小袖。
あひ-ぎ!アイ[間着](名) 禮服の綿入れの下に著る衣服。
あ-びき[網曳](名)「あみびき」の略言。
あひ-ぎり!アイ[間切](名) 竹の節と節との間を切りて拵へたる笛。ひとよぎりの類。
あひ-きやく!アイ[相客](名) ㊀二人以上の客が、同室をかり合はすこと。又、其人。㊁同時に其家の客となりたること。又、其人。
あひ-くぎ!アイ[合釘](名) 兩端の尖りたる釘、板と板とを繼ぎ合はすに用ふるもの。
あひ-くち!アイ[合口](名) ㊀鍔を附けず、鯉口と柄の緣とよく合ふやうに作りたる短刀。くすんごぶ。たんたう。(匕首)。㊁口を張りて齒をあらはすこと。(齦脣)。㊂話のよくあふこと。

[あひくち(一)]
[あひ-こ!アイ[相子](名) 互に勝負のなきこと。(互角)。
十あひ-ごと!アイ[逢事](名) 男女の共寢。
あひ-ことば!アイ[合詞](名) 軍中にて、豫め作りおきたる合圖の語。(暗號語)。
あひ-さ!アイ[相仕](名) てつだひ。てがはり。

あひ-しやう!アイシヤウ[相性](名) 男女の生れ年を五行に配當したる其性(シャウ)の相合へること、即ち、男女の性が火と木、水と木、火と土、土と金、金と水となるをいふ。かくあれば、其緣組などは吉なりといへり。
あひ-しらひ!アイシライ(名) あへしらひ。あいさつ。
あひ-しら-ふ!アイシラウ(は、ひ、ふ、ふ、へ、へ)(他、は四) 應接す。待遇す。點綴す。あへしらふ。あしらふ。
あひ-し-る!アイシル(ら、り、る、る、れ、れ)[相知](他、ら四) たがひにまじはる。つきあふ。
あひ-じるし!アイ[合印](名) ㊀軍中にて、敵・味方のまぎれぬために、味方に付くるしるし。㊁順序を違へざるために、其物に付くる目じるし。
あひ-じろ!アイ[間白](名) 德川時代の奥女中が、禮服のうちかけの下に着し白の小袖。
あひ-ずみ!アイ[相住](名) 長屋などの一棟の中に、一處に住むこと。(同棲)。
[あびせる[浴](他)「あぶす」の訛。
あひ-だ!アイダ[間](名) ㊀かれとこれとの中。うち。なか。あはひ。㊁すきま。ひま。たえま。㊂へだたり。ちがひ。㊃とき。をり。また。
あひだ!アイダ[間](副) によりて。ゆゑに。(手紙の文に用ふ)。
あひ-たい!アイ[相對](名) 二人差し向ひにて、事を行ふこと。——じに[相對死](名) しんじう。情死。——づく[相對盡](名) 相談の上になしたること。
あひ-たがひ!アイタガイ[相互](名) おたがひ。きやうだい。
あひだ-がら!アイダガラ[間柄](名) ㊀つゞきあひ。しんるゐ。㊁彼我の關係。
十あひたけびと!アイ[相宴人](名) 饗應の相伴人。
あひ-だち!アイ[相太刀](名) 互に打ち合はす太刀。
一あひだち-な-し!アイ(く、し、き、けれ)[間斷無](形、二) わけへだて無し。差別なし。

あひ-だな!アイ[相店](名) 一つ店にて物を賣りあふこと。
あひだ-もの!アイダモノ[間物](名) 三度の食事のほか、あひだに食する物。(間食)。
アビ-ぢごく[阿鼻地獄](名) 八熱地獄の一、無間地獄。
あひ-づ!アイヅ[合圖](名) あらかじめ定めたる仕方によりて、事を知らすること。
十あひ-づくり!アイ[相作](名) てつだひ。
あひ-づち!アイ[相槌](名) 互に打ち合はす槌。むかひづち。——をうつ 他のいふ所に、調子を合はすにいふ。
あひづ-らふそく!アイヅロウソク[會津蠟燭](名) 岩代國會津地方よりいづる蠟燭、質良好にして、花模樣などを描きたるもの。
あひ-て!アイテ[相手](名) ㊀事を共にする人。㊁相鬪ふ人。——かた[相手方](名)〔法〕法律行爲に關する一方の當事者を他の一方の當事者より呼ぶ稱。例へば、貸借事件にては、貸主の相手方は借主にして、借主の相手方は貸主なるが如し。
あひ-でし!アイ[相弟子](名) 同じ先生に就きて、共に學ぶ人。
あひて-しだい!アイ[相手次第](名) 相手のでやう如何により、これに應じて、我の爲す所を異にすることをいふ。
あひて-ど-る!アイ(ら、り、る、る、れ、れ)[相手取](他、ら四) あひてとす。あひてがたとす。
あひて-ほしや!アイ[相手欲] 相手あれかしと思ふさま。
あひ-でん!アイ[相殿](名)「あひどの」に同じ。
あひ-どの!アイ[相殿](名) 同じ社に、二柱以上の神を合はせ祀ること。
あひ-ども-に!アイ[相共](副) 諸共に。とも〴〵に。

あひ-なげ!アイ[相投](名) 相撲四十八手の一、敵が投げを掛けたるとき、すりよりて背負投げにすること。
十あひ-な-し!アイ(く、し、き、けれ)[間無](形、二) へだてなし。區別なし。
あひ-なめ!アイ[相嘗](名)「あひなめまつり」の略言。——まつり[相嘗祭](名)「あひむべのまつり」に同じ。
あひ-の-きやうげん!アイノキヤウゲン[間狂言](名) 能にて、前の一番終りて後の一番未だ始まらざる間に行ふ、一種の滑稽劇。
あひ-の-くさび!アイ[間楔](名) ㊀材と材との間にうつくさび。㊁或事のひまに、他事をなすこと。㊂あひのすさび。
あひ-の-こ!アイ[間子](名) ㊀異種の間に生れたる牛馬など。㊁異人種の間に生れたる子。㊂兩者の間のもの。「——船」。
あひ-の-しゆく!アイ[間宿](名) 宿場と宿場との間にある家里。(站)。
あひ-の-すさび!アイ[間樂](名) 定まりたるつとめのひまに、たのしみにするわざ。
あひ-の-つなぎ!アイ[間繫] ㊀物と物との間をつなぐもの。㊁「あひのくさび」の(二)に同じ。
あひ-の-て!アイ[合手](名) 音曲にて、歌聲しばらく中絶するとき、絃器のみを吹彈すること。
あひ-の-やま!アイ[間山](名)「あひのやまぶし」の略言。——ぶし[間山節](名) 古昔、行はれし俗謠の一、伊勢國古市の間山の乞食が謠ひ出したるもの、伊勢音頭はこれより出づといふ。
あひ-のり!アイ[相乘](名) 二人一車に乘ること。又、其車。
あひ-はん!アイ[合判](名) ㊀わりふに捺(オ)す印。㊁連帶にて捺す印。

あひばん[相番](名) 二人以上、一處に番を務むること。又、其務むる人。

あひびき[逢引](名) 男女のひそかに相逢ふこと。

あひびき[相引](名) ㊀雙方共に陣を引き退くこと。㊁なれあひ。㊂袴のまち。——**のを**[相引緒](名) 袴のひきあはせの緒。

あひぶぎやう[相奉行](名) 德川時代に、同役の奉行。

あひぼう[相棒](名) ㊀駕籠の前と後となりてかつぐ人。㊁かごかきなどが、互に相手を呼ぶ稱。㊂仲間。

あひぼれ[相惚](名) 男女互に深く相慕ふこと。

あひま[間](名) すきま。てすき。かんげき。

あひみたがひ[相身互](名) 互に扶けあふこと。(相扶)。

あひむこ[相聟](名) ㊀妻の姉妹のむこ。㊁姉妹の夫の互に呼ぶ稱。(婭)。

あひむべ[相嘗](名) 「あひむべのまつり」の略。——**のまつり**[相嘗祭](名) 古昔、十一月の上の卯の日に行はれし神事、新稻にて釀せる酒を、天子と神と相共に饗したまふの意にして、かねて神祇官より幣物を各神社に分ちおき、當日其各社に奉事せる神官をして執行せしめしとなり、延喜式などには、其神社を七十一座と定められたり。

あひやけ[相舅](名) 嫁婿雙方の舅姑。

あひやど[相宿](名) 一つ宿に、共にやどること。

あひやどり[相宿](名) 「あひやど」に同じ。

あひやり[相槍](名) 敵一人に、味方二三人の槍合はせ。

あひよめ[相嫁](名) ㊀夫の兄弟の妻。㊁兄弟の妻の互に呼ぶ稱。(娌)。

あひる[鶩](名)【動】水禽類中鴨類に屬する鳥、まがもの變種にして、嘴は軟皮を被り末端のみ硬し、頭は長く、脚は短かくして後方に附く、前三趾間に蹼を張り、後趾は小にして自在なり、古來より多く家に飼ふために、飛力退化せり。(家鴨)。——**のきやはん** 物の短かきをたとへいふ。

あびる[浴](自)「あぶ」の訛。

あひろ[鶩](名)【動】「あひる」の古名。

あ・ふ[會、遇、逢](自、は四) ㊀互に相見る。めんくわいす。たいめんす。㊁でくはす。であふ。あたる。「困難に—」。

あ・ふ[合](自、は四) ㊀一つになる。㊁同じくあり。㊂あつまる。かさなる。㊃つく。むすばる。㊄適當す。かなふ。㊅配す。たぐふ。㊆敵す。あたる。㊇やはらぐ。むつぶ。㊈音律調ふ。

あ・ふ[和](他、は下二) 食物に味噌・酢などを合はす。まず。

あ・ふ[饗](他、は下二) 馳走す。饗應す。ふるまふ。

あ・ふ[敢](他、は下二) ㊀強ひて爲す。㊁爲し遂ぐ。「隱しあへず」。

あぶ[虻](名)【動】雙翅類に屬する蟲、大形なる灰黑色の種類にして、胸背に三個の黃色の縱毛條を有し、腹背の中央に太き縱線を有す。うしあぶ・はなあぶ・あをあぶ等の種類あり。

あ・ぶ[浴](他、は上二) 水などを體に注ぐ。

あふぎ[扇](名) ㊀あふぎて風を起すに用ふる具、竹の條を骨として、本を要にてとぢあはせ末を廣くし、これに紙を張りたるもの。㊁あふぎの形。——**あはせ**[扇合](名) 古昔、行はれし一種の遊戲、互に扇子に詩歌を書き、左右より合せて勝負を定むること。——**かけ**[扇懸](名) 扇をひろげて掛け置くもの。——**がた**[扇形](名) ㊀本狹く末廣くして、扇のかたちをなすもの。あふぎなり。㊁【數】圓弧を其兩端に於ける半徑にて圍める形。——**がひ**[扇貝](名)【動】「あげまき」の一名。——**がみ**[扇紙](名) 扇にはる紙。——**ぞめ**[扇染](名) 染模樣の名、あふぎ形其他いろ〳〵の形の中に、花鳥人物などを染め出だすもの。——**なり**[扇形](名) あふぎがた。——**ばこ**[扇函](名) 扇を入るゝ細長き箱。——**びき**[扇引](名) 扇を拇指と食指とに挾みて、引きあふこと。——**びやうし**[扇拍子](名) 扇をうち鳴らして、謠曲の拍子をとること。

[**あふきやう**][凹鏡](名)【理】反射面がなかくぼなる鏡、球面凹鏡にありては、物體が若し其中央點より、其球の半徑の半より遠き距離にあるときは、倒立の實像を結べども、其以内にあるときは、正立の虛像を作る。

あふ・ぐ[仰](自、が四) ㊀上へ向く。あふぬく。あをむく。あをのく。㊁たふとぶ。敬ふ。㊂上に對して請ふ。

あふ・ぐ[扇](他、が四) 扇子・團扇などをつかひて、風を起す。「うちはにて—」。

あぶく[泡](名) あわ。——**ぜに**[泡錢](名) 勞せずして得たるかね。

あふご[朸](名) 兩端にものを掛けてになふ棒。てんびん棒。

あふご[會期](名) めんくわいする時。

あふさきるさ(名) ㊀あちらこちら、行きかへり。㊁一方善ければ一方惡しく、又は一方に適せば一方に適せざるさまなどにいふ語。

[**あふしう**][押收](名) 人民の所有物件を差押へ、これを官府に沒收すること。

[**あふじやう**][壓狀](名) おどして、我心のまゝに認めさする書狀。——**ずくめ**[壓狀諫](名) おどして、我思ふまゝにならしむること。

あぶ・す[餘](他、さ四) あます。のこす。

あぶ・す[浴](他、さ下二) ㊀身體に注ぎかく。㊁強ひて人に負はす。

[**あふそう**][押送](名) 囚人若しくは刑事被告人を、或官衙より他官衙へ送ること。

あふち[楝](名)【植】楝科に屬する木、高さ丈餘に達す、葉は複葉をなし、雄蕊は與體に姉合す、子房の各室は二個の重なりたる胚珠を含み、花は淡紫色にして果實は核果なり、觀賞用として栽培し、木材は種々の用に供せらる。せんだんのき。

[**あふちやく**][押着](名) 人を懾らさること。狹なること。

[**あふてい**][押丁](名) 監獄署の最下級の官屬。

アプトしきてつだう[——式鐵道＝Abt rack railway](名) 汽車の峻路を上下するに設くる鐵道、二條の軌鐵の中間に、更に齒のある一條の軌鐵を敷設し、其齒と機關車の車軸の中央部に裝置せる齒車の齒との相くひあひて進行するもの。

[**あふとつ**][凹凸](名) たかひく。

あぶな・し[危](形、こ) あやふし。(浮雲)。

あふぬ・く[仰](自、か四) あふむく。

あふぬ・く[仰](他、か下二) 上へ向かす。

あふのき[仰](名) あふのくこと。

あふの・く[仰](自、か四) あふぬく。

あふの・く[仰](他、か下二) 上へ向かす。あふむかす。

あふひ[葵](名) ㊀【植】錦葵(ゼニアフヒ)科に屬する草本の總稱、莖高くして枝を生ぜず、葉は皺を有す、花は大形にして短き柄を具し、紅・紫・白色等を呈す、觀賞用として栽培せらる、種類に、ぜにあふひ・たちあふひ・つゆあふひ・はなあふひ・からあふひ等あり。㊁かさねの名目、表うす青にして、裏のうす紫なるもの。㊂紋所の名、德川氏の定紋。——**かづら**(名)【植】「はきひるがほ」の異稱。——**ぐさ**[葵草](名)【植】「かもあふひ」の異稱。——**ざ**[葵座](名) 兜の八幡座の形の名。——**つば**[葵鐔](名) 葵の形に作りたる刀の鐔。——**まつり**[葵祭](名) 「かものまつり」に同じ、其まつりに、人々葵かづらの藁をかくるよりいふ。

[**あふへい**][押柄](名) 尊大なること。驕りたかぶること。おほふう。

あぶみ[鐙](名) (あしぶみの義) 馬具の名、鞍より馬の脇腹の右左にさげ、乘者の足を踏み掛くるもの。

[あぶみ]

あふみおもて[近江表](名) 近江國より出づる疊表、備後表よりは下品なるもの。

あぶみがしら[鐙頭](名) 後腦の出ばりたる頭。さいづちあたま。

あぶみガハラ[鐙瓦](名) からくさの模樣ある瓦。花瓦。

あふみかぶら[近江蕪](名)【植】かぶらの一種、近江國大津邊より產出す、塊根扁くして圓し、最も大形のものなり。

あふみがや[近江蚊帳](名) 近江國より出だす蚊帳。

あぶみぐは[鐙鍬](名) 鐙の形に似たる鍬、雜草を除くに用ふるもの。

あふみさらし[近江晒](名) 近江國より出だすさらしぬの、上品なるもの。

あぶみずり[鐙摩](名) ㊀馬の脇ばらの、あぶみにて磨れる邊の稱。(永鏡肉)。㊁あふりの一種。

あぶみつり[鐙釣](名) 馬具の名、鐙をつる物。

あふみはつけい[近江八景](名) 近江國琵琶湖の南西岸にある勝景、卽ち、比良の暮雪・矢橋の歸帆・石山の秋月・瀨田の夕照・三井の晚鐘・堅田の落雁・粟津の晴嵐・唐崎の夜雨。

あふみぶし[近江節](名) 「ごさいぶし」に同じ。

あふむ・く[仰](自、か四) 上へ向く。

あふむ・く[仰](他、か下二) 上へ向かす。

[**あふめんきやう**][凹面鏡](名)【理】凹鏡に同じ。

[**あふよう**][阿芙蓉](名)【植】「けし」の一名。——**ゆ**[阿芙蓉油](名) 阿芙蓉より取りたる油。

あぶら[油](名) 燃燒しやすき一種の中性物質にして、通常溫度にては水に溶解せず、製出の原料によりて、動物油・植物油及鑛物油の別あり、動物油・植物油は其性質によりて、精油及不揮發油に分つ、精油は植物油に多くして揮發性に富み、おもに炭化水素の化合物より成る、香油の如きこれなり、不揮發油は揮發し難きものにして、紙に點せば點痕容易に消滅せず、植物の種より搾出したるもの、(亞麻仁油・菜種油など)、又は動物の脂肪分より搾出したるものこれなり、不揮發油には酸素を吸收して固形狀をなすものあり、これを乾油といひ、然らざるを不乾油といふ、鑛物油は、鑛物を蒸溜して得るものにして、又地下より湧出するものあり、石油の如きこれなり、油は點火用・醫藥・塗滑料・化粧用・食用等用途甚だ廣し。†——**うる** 自家の擔當せる仕事の間に、ひそかになまけるにいふ。†——**しぼる** 人をなじり苦しむるにいふ。

あぶら[脂、膏](名) 「しばう」(脂肪)に同じ。

あぶら（名）【動】「あぶらぎつちよ」の略言。
あぶら-あげ「油揚」（名）あげどうふ。あぶらげ。
あぶら-あし「脂足」（名）脂の多く出づるたちの足。
あぶら-あせ「脂汗」（名）脂のまじりたる汗。苦しきときに出づる汗。
あぶら-いし「油石」（名）㊀色黑くして光りある石。㊁【鑛】石炭の一名。㊂米の中にまじれる油色の小石。
あぶら-いため「油煠」（名）食品を油にていりつくること。あぶらいり。
あぶら-いり「油熬」（名）あぶらいため。
あぶら-いろ「油色」（名）ともしあぶらの色、黃に赤みを帶びたる色。
あぶら-かす「油粕」（名）胡麻・蕓薹（アブラナ）などの種子より油を搾り採りたる殘滓（カス）、窒素燐酸に富み、我國にては魚肥に次ぐ貴重の肥料なり、家畜の飼料としてもまた大に効あり。
あぶら-がみ「油紙」（名）油を引きたる紙。とうゆ「がみ」。
あぶら-がや「油茅」（名）【植】莎草科に屬する小草、葉は狹長にして黃綠色を帶び、滑かにして油の臭を有す、花序は穗狀をなす。
あぶら-からだ「脂體」（名）脂肪の多き身體。
あぶら-ぎく「油菊」（名）【植】菊科に屬する草、莖は微尖頭を有し淺綠色をなす、花は黃色にして、舌狀花冠卽ち舌狀瓣は花柱より長きこと數倍なり、多く山野に生ずれど、觀賞用として栽培す。のぎく。せんぼんぎく。いはやぎく。
あぶら-ぎつちよ（名）【動】蟲斯（ギリス）の油色をおびたるもの、機織の如き聲して鳴く。
あぶら-ぎり「油桐」（名）【植】大戟（タカトウダイ）科に屬する木、葉は往々裂狀に分裂し、花は單性にして花瓣を有す、木材は種々の用に供し、種子より油を製す、此油は毒性を有すれど、燈火用其他種々の用に供せられ、樹皮はまた染料に供せらる。やまぎり。（荏桐、罌子桐）。
あぶら-ぎ-るらりるれれ（自、ら四）油にてぎらつく。脂多くあり。
あぶら-け「油氣」（名）油の氣。
あぶら-げ「油揚」（名）あげどうふ。
あぶら-こき「油扱」（名）麻絲を染めて、油を引きたるもの。
あぶら-こ-しくしきけれ「油濃」（形、二）油氣多し。脂多し。
あぶら-ごま「油胡麻」（名）【植】油の多き黃色の「胡麻」。
あぶら-さし「油差」（名）㊀ともし油を油皿に注ぐに用ふるもの。あぶらつぎ。㊁油の量をはかるものさし。
あぶら-ざら「油皿」（名）陶器又は金屬の小皿、燈油を盛るに用ふるもの。
あぶら-しば「油芝」（名）【植】「あぶらがや」に同じ。
あぶら-しめぎ「油搾木」（名）油をしぼりとる轆轤づくりの器械。

［あぶらしめぎ］

あぶら-しやうじ「油障子」（名）雨を防ぐため、紙に油を引きたる障子。
あぶら-しり「腴」（名）鳥の尾の部分の脂肉。
あぶら-ぜみ「油蟬」（名）【動】「あきぜみ」に同じ。
あぶら-だま「油球」（名）あぶらが玉の如くになりて、水などに浮きあがりたるもの。「一の浮く鯨汁」。（脂珠）。

あぶら-だる「油樽」（名）油を入るゝたる。
あぶら-ちやせん「油茶筅」（名）芝居にて役者の用ふる髷（カツ）の一種。
あぶら-つき「油坏」（名）「あぶらざら」に同じ。
†**あぶら-つぎ**「油注」（名）「あぶらさし」に同じ。
あぶら-づ-くかきくくけけ「脂着」（自、か四）體に脂肪みつ。
あぶら-で「脂手」（名）脂の多く出づるたちの手。
〔**あぶら-でり**「油照」（名）空曇り風なく、日光の照りつくること。
あぶら-な「油菜」（名）【植】十字花科に屬する一年生或は二年生の草本、種子は一列に相並ぶ、種子を菜種といひ、これより油を搾り、葉は食用に供せられ、廣く各地に栽培せらる。（蕓薹）。
あぶら-び「油火」（名）ともし火。（燈火）。
あぶら-み「脂肉」（名）肉に脂の多き部分。
あぶら-むし「油蟲」（名）㊀【動】直翅類中蜚蠊科に屬する蟲、通常廚房爐邊に見る所のもの、前翅は褐色、後翅は扇狀にたゝみて淡褐色なり、脚は稍や扁平にして步行極めて迅速なり、觸るれば惡臭を放つ。ごきぶり。（蜚蠊）。㊁【動】「ありまき」の別名。㊂人につきまとひて、妨げをなすものを嘲りていふ語。㊃「ひやかし、すけん」。
あぶら-め（名）【動】「いたちうを」の一名。
あぶら-ゑ「油繪」（名）亞麻仁油を混和したる繪具にて描ける畫、今日、西洋畫の主位を占むるもの、繪具の乾きたる後、つやを塗ることあり。
あふりリアフオ「煽」（名）あふること。
あふりリアフオ「障泥」（名）馬具の名、鐙と馬の脇腹との間に垂れて馬の兩傍を覆ひ、泥のはねあがるをふせぐもの、革又は毛皮にて製す。――いか「障

泥烏賊」（名）【動】烏賊の一種、體軀は稍圓形、體色は淡紫色にして中央部最も濃し、我國南洲珠に隱壁に多し、平素は遠洋に棲息すれども、五六月の頃、産卵のため內海に來る。
あぶり-こ「炙子」（名）㊀衣服などをあたゝむるための竹籠、中に火を置きて用ふ。㊁餠などを燒くに用ふる鐵の網。
あぶり-だし「炙出」（名）白紙に酒又は明礬などにて、畫又は文字をかきて乾かし、これを火にて炙れば、其畫又は文字が明かに現はるゝもの。
あぶり-どうふ「炙豆腐」（名）「やきどうふ」の一名。
あぶり-もの「炙物」（名）やきもの。やきざかな。
あふりやうしヨウリオウ「押領使」（名）古昔、諸國の兇賊を抑へ鎭むるため朝廷より派遣せし官吏。
あふ-るるれれるるろ「溢」（自、ら下二）㊀滿ちあまる。㊁「手を空しくして歸る。利を得ずして止む。あまりて出ず。こぼる。「桶に―る水」。
あふ-るルアオ（らりるるれれ）「煽」（自、ら四）うごきひるがへる。風に吹かる。（翻）。
あふ-るルアオ（らりるるれれ）「煽」（他、ら四）㊀吹きうごかす。ひるがへす。（翻）。㊁火を吹き起す。風をあくりて火氣をさかんにす。㊂馬上にて、あぶみを動かしあふりを打つて、馬をいそがす。「馬をいたくあふりければ」。㊃おだつ。そゝのかす。㊄酒を一氣に飮む。
あぶ-るらりるるれれ「炙」（他、ら四）火にあてゝ火氣をとほす。火にあつ。「魚の肉を―」。「手を―」。
†**あぶ-る**れれるるるれよ（自、ら下二）おちぶる。零落す。
〔**あぶれ**（名）手を空しくして歸ること。利なかりしこと。
〔**あぶれ-もの**（名）（溢者の義）やくざもの。ぶらいかん。あるものゝならずもの。（暴人）。

〔**あふれる**「溢」（自）「あふる」の訛。
〔**あぶれる**「溢」（自）「あふる」の訛。
あふ-レンズオウ「凹―」＝Concave lens」（名）【理】中央薄く、周緣に至るに從ひて厚き「レンズ」、物體より出づる光線が、此種の「レンズ」を通過するときは、擴散して實像を作ることなし。
あへエア「韲」（名）韲ふること。又、あへ物。
†**あへ**エア「饗」（名）饗應。馳走。
あべ-かはワカ（名）「あべかはもち」の略言。――もち「安倍川餠」（名）駿河國安倍川邊の名物、燒きたる餠を、砂糖を混じたるきなこにまぶしたるもの。きなこもち。
あへ-ぐグアエ（がぎぐぐげげ）「喘」（自、か四）つかれて呼吸烈しくなる。いきぎれす。いきせく。
〔**あべ-こべ**（名）うらうへ。反對。
あへ-しらひイラシエア（名）あしらひ。もてなし。
あへ-しら-ふウラシエア（はひふふへへ）（他、は四）㊀挨拶す。應答す。㊁待遇す。もてなす。㊂取り繕へて體裁をつくろふ。點綴す。
あへ-づくりリクヅエア「韲作」（名）肉を切りて揉（モ）み合せたるもの。あへもの。
あへ-てテエア「敢」（副）おし切つて。強ひて。無理に。
あへ-な-しシナエア（くしきけれ）「敢無」（形、二）賴みなし。はりあひなし。
†**あへ-ぬ-く**クヌエア（かきくくけけ）「相貫」（他、か四）撤へてつらぬく。「さつきのたまにあへぬくまでに」。
あへ-ものノモエア「韲物」（名）㊀野菜と魚肉とをまぜあはせ、酢にて味を付けたるもの。（韲物）。㊁饗應の物。（饗物）。㊂ひりを。乾魚。（臓）。
〔**あへる**「韲」（他）「あふ」の訛。
アヘン「阿片＝Opium」（名）一種の罌粟、罌粟の未だ熟せざる果實に切傷を附け、これより流出せる乳液を乾燥せしめたる褐色の粉末、苦味ありて特異の臭氣を有し、痲醉性の毒を有す。――タバコ「阿片煙草」（名）阿片を加へて製したる煙草。
アボス（名）吸出しの膏藥。
†**あほひ**イフアオ「葵」（名）【植】「あふひ」に同じ。
あほ-ダラ-きやうウヤキ「阿呆陀羅經」（名）一種の俗謠、小形の木魚二つを打合せて節をとるもの。
あま「天」（名）「あめ」の轉。「―の川」。
あま「雨」（名）「あめ」の轉。「―雲」。
あま「海」（名）うみ。うなばら。「―の原」。
あま「海人」（名）海濱に住み魚介をとることを業とするもの。れふし。（白水郎）。
アマ「尼」（名）㊀世を捨て頭髮を剃りて、佛門に入りたる女。ビクニ。㊁婦人をのゝしりて呼ぶ語。
アマ「亞麻」（名）【植】亞麻科に屬する栽培草本、細き莖と帶紫色の花とを有す、莖より纖維を採り種子より油を搾る、用途多し。
〔**あま-あがり**「雨上」（名）雨のはれたるあと。「あまやみ」。
あま-あし「雨脚」（名）雨の降り來り降り往くもの。「やう」。
あま-いぬ（名）「コマいぬ」に同じ。
†**あま-うけ-ばな**「雨承鼻」（名）上を仰ぎたる鼻。あをつぱな。
あま-うち-ぎはキーワ「雨打際」（名）軒端の雨のおちかゝり落るきは。あまおち。
あまえ-た-るれれるるるれよ「嬌垂」（自、ら下二）甕（ナ）れ媚ぶ。あまゆ。
〔**あまえたれる**（自）「あまえたる」の訛。
〔**あまえる**（自）「あまゆ」の訛。
〔**あま-おさへ**サエーオ「雨押」（名）板べいなどの上に、雨をふせぐために打ちつけたる板。かさぎ。

あまおち[雨落](名) あまだれを落す處。あまだれおち。

あまおほひ(ーオオイ)[雨覆](名) 雨濕の防ぎに覆ふもの。

あまがさ[雨傘](名) 雨天に用ふるからかさ。

あまかす[甘糟](名) 酒のかす。とめかす。

あまかぜ[雨風](名) 雨をふくみたる風。

十あまがつ[天兒](名) 古昔、幼兒の傍に置き、わざはひを負はするために用ひし人形。

あまガッパ[雨合羽](名) 雨をふせぐに用ふる衣服。「カッパ」の條を見よ。

あまかは(ーカワ)[甘皮](名) 樹木又は果實の内部にある薄き皮。

十あまがは(ーガワ)[雨皮](名) のりものなどに、雨をふせぐためにつけたる具。

あまがべに[天紅](名) (天の紅の義) 夕陽のかがやく赤雲。ゆふやけ。

あまがへる(ーガエル)[雨蛙](名) 【動】かへるの一種、體形は小、體色は淡緑又は茶褐色、指趾の末端に圓形の吸盤を具し、以て巧(タク)に樹木の枝葉に攀緣す、叫囊ありてよく鳴く。

十アマがほ(ーガオ)[尼顔](名) 扮飾せざる顔容。すがほ。

アマカワ[亞瑪港](名) 淸國廣東省澳門(マカオ)即ち古昔の亞瑪港より、舶來せしといふ上品の珊瑚。

十あまき[甘木](名) 【植】「かんざう(甘草)」の古稱。

あまぎ[雨着](名) 雨を防ぐための衣服。あましやうぞく。あまぎぬ。

十あまぎぬ[雨衣](名) 「あまぎ」に同じ。

十あまぎらす(さしすすせせ)(自、さ四) あまぎる。

十あまぎらふ(ーラウ)(はひふふへへ)(自、は四) あまぎる。

あまぎり[雨霧](名) 雨の降る如き濃き霧。

十あまぎる(らりるるれれ)(自、ら四) 雲霧にて空くもる。

あまぐ[雨具](名) 雨天の外出に著用する具。

あまくさ[甘草](名) 【植】「かんざう」に同じ。

あまくさど[天草砥](名) 肥後國天草より出づる砥。

十あまくだす(さしすすせせ)[天降](他、さ四) 天上より人間界へくだす。

十あまくだる(らりるるれれ)[天降](自、ら四) 天上より人間界へくだる。

あまくち[甘口](名) 一酒などの甘味あるもの。二人の氣に入るやうな言辭。(甘言)。——**ねずみ**[甘口鼠](名) 【動】「はつかねずみ」に同じ。

あまぐも[雨雲](名) 雨滴より成る雲、始めは層雲にして後には淡灰色となる、一定の形狀なく、位置低くして概ね雨となりて落下す。雨ふらんとする雲。

十あまぐも[天雲](名) そらにあるくも。

あまけ[雨氣](名) 雨を催ほす空。

あまけ[甘氣](名) あまみ。あまさ。

あまごひ(ーゴイ)[雨乞](名) ひでりの時、神佛に雨の降らんことを祈(イノ)ること。

あまごもり[雨籠](名) 雨にふりこめられて、家に居ること。

十あまごろも[天衣](名) 天人のきる衣。羽衣。

十アマごろも[尼衣](名) 尼のきる衣。

十あまごろも[雨衣](名) 雨ふりの外出にきる著物。あまぎぬ。

十あまごろも[海人衣](名) 海人のきる著物。

あまさ[甘](名) あまくある度合。

あまさうぞく(ーソウゾク)[雨裝束](名) あまじたく。

アマさぎ[尼鷺](名) 【動】さぎの一種、大いさも形も普通の白鷺にひとし、たゞ背に赤茶色の羽あるを異なりとす。

あまざけ[甘酒](名) 一種の飲料、糯(モチ)米の飯に麴を入れて醸(カモ)したるもの、一夜にて成熟す、味甘し。ひとよざけ。(醴)。

あまさへ(ーサエ)[剰](副) (餘り添への義) 一つ有るが上に添へ加へて。あまっさへ。

あまざらし[雨曝](名) 覆ふものなく雨にぬるゝこと。雨にさらすこと。

あまし(くしきけれ)[甘](形、二) 一砂糖・飴などの味あり。(甜)。二鹽氣少くなし。(淡)。三にぶし。のろし。四きびしからず、ゆるし。五心に逆はず。「あまき言につけあがる」。

十あましし[餘肉](名) 瘤・疣などの如き贅肉。

あましたく[雨支度](名) 雨天に外出するときの用意。

あましだり[雨滴](名) あまだれ。

あましほ(ーシオ)[淡鹽](名) 輕く鹽漬けにすること。

あましめり[雨濕](名) 雨のために、濕氣を帶ぶること。

あましやうじ(ーショウジ)[雨障子](名) 「あぶらしやうじ」に同じ。

あましやうぞく(ーショウゾク)[雨裝束](名) 「あまさうぞく」に同じ。

あます(さしすすせせ)[餘](他、さ四) あまるやうにす。のこす。

十アマぜ[尼前](名) (尼御前の略) 尼を敬ひて呼ぶ稱。

十あまそそぎ[雨注](名) 雨だれの落つること。

あまた[許多](副) 數多く。たんと。どっさり。おびただしく。(數多)。——**たび**[許多度](名、副) たびたび。など、いくたび。

あまだひ(ーダイ)[甘鯛](名) 【動】硬鱗類中あまだひ科に屬する魚、體形は側扁にして、額骨隆起し頭部稍や鈍角形をなす、體色は背部紅にして濃淡の斑あり、腹部白し、我國東海・西海に多き近海魚なり。(方頭魚)。

あまだり[雨滴](名) 雨だり。あまだれ。

あまたるし(くしきけれ)[甘弛](形、二) 過度に甘し。

あまだれ[雨滴](名) 軒にまたゝるあま水。あまだり。(點滴)。——**おち**[雨滴落](名) あまだれを落すところ。あまおち。

あまちや[甘茶](名) 一【植】虎耳草(ユキノシタ)科に屬する小木本、花は二樣ありて、外圍のものは大形の萼を有す、色は始め青にして後紅に變ず。きあまきちや。(土常山)。二あまちやの葉を煎じたる汁、四月八日の灌佛會に用ふるもの。——**づる**[甘茶蔓](名) 【植】葫蘆科に屬する草本、卷鬚を以て他物に倚り登る、葉は複葉にして粗なる鋸齒あり、葉腋に總狀の花梗を抽き、數多の細花を綴る。つるあまちや。(絞股藍)。

あまつかぜ[天津風](名) そらの風。「ー、雲のかよひぢふきとぢよ」。

あまつかみ[天津神](名) 天にましまず神。

あまつくに[天津國](名) 日の神のましまず國。

あまづけ[甘漬](名) 鹽をあまくして漬くること。

あまつさへ(ーサエ)[剰](副) 此事のあるが上に、他事を加へ添へて。おまけに。

あまつしるし[天津璽](名) 天上界のものといふ確かなる證據、即ち、三種の神器。(天璽)。

あまつそら[天津空](名) 一おほ空。二朝廷・禁裏の敬稱。三うはのそら。うちやうてん。「ーなり、ともはふめども」。

あまづつみ[雨包](名) 一あまおほひ。二あまごもり。(雨隱)。

あまつばめ[雨燕](名) 【動】一種の鳥、形は甚だ普通の燕に似て大きく、腰部は白色なり、尾短くして分叉せず、夏日群をなして深山の懸崖に營巢し、秋に至りて南方へ去る。

あまつひつぎ[天津日嗣](名) 天皇の御位。みくらゐ。(寶祚)。

あまつら[案摩面](名) 器物の取手などに用ふる形、舞樂安摩の假面に似てふくらみたるもの。

あまづら[甘葛](名) 【植】「あまちやづる」に同じ、今時に於ける砂糖の如くに、古昔は、甘味を和するに煎じて用ひたり。

あまつをとめ[天津乙女](名) 一天人。てんによ。二五節の舞姫。

アマデラ[尼寺](名) 尼の住む寺。

あまてらす(さしすすせせ)[天照](自、さ四) 一そらより照らしわたる。二天が下をしろしめし給ふ。

あまど[雨戸](名) 家の外面又は出入の口の、雨を防ぐため又は夜を戒しむための戸。

あまどころ[甘草薢](名) 【植】百合科に屬する草本、莖は多少傾斜し、葉の下面は帶白色を呈す、種々の變種あり、根莖は食用に供せられ、又、澱粉を製すべし。からすゆり。(萎蕤)。

あまどり[雨鳥](名) 【動】一種の鳥、形は燕に似て稍や大きく、腹は黄にして斑文あり、「ボルネオ」島などの海岸にある暗黑なる大洞穴の内に巣喰す、舌の兩側にある腺の分泌液は、粘着力甚だ強く、これを吐出して絲となし、以て巣を作る、淸國人は好みて此巣を食す。

あまな[甘菜](名) 一味の辛からぬ菜の總名、辛菜の對。二【植】百合科に屬する草本、莖は細長く、花蓋の片は白色にして外面に暗紫色の縱線紋を具す、鱗莖は食用に供せらる。むぎぐわゐ。(山慈姑)。

あまなっとう[甘納豆](名) 一種の菓子、あづきを砂糖にて煮つめ、白砂糖にまぶせたるもの。

十あまなふ(ーナウ)(はひふふへへ)[甘](自、は四) 心にかなふ。

十あまなふ(ーナウ)(ふへへふるる)[和](他、は下二) 交際を親密にす。承知す。あまんず。

アマにゆ[亞麻仁油](名) 亞麻の實より製したる油、黄色又は褐黄色を帶び、一種の臭氣を有す、「ペンキ」・印肉等を製するに用ひらる。

あまねく[遍](副) ひろく。ことごとく。及ばぬくまなし。

あまねし(くしきけれ)[遍](形、二) 行きわたりてあり。

十あまねはす(ーワス)(さしすすせせ)[遍](他、さ四) あまねく及ばす。

あまのいはと(ーイワト)[天岩戸](名) 「あめのいはやど」に同じ。

あまのうきはし[天浮橋](名) 神代に、天と地との間に掛かれりといふ橋。

あまのおもて[案摩面](名) 案摩といふ樂曲に用ふる面、紙にてつくり山形に鰐形を畫きたるもの。

[あまのおもて]

あまのがは(ーガワ)[天河](名) 【天】晴夜に天空を取卷きて河の如く見ゆる灰白色の條帶、幅十度乃至十五度にして、無數の微光を放てる恒星の集合より成る、夏秋の交最もよく見ゆ。(銀河、天漢)。

あまのさかて[天逆手](名) 上古、物をまじなふときに打ちし拍手の名。

あまのさかほこ[天逆鉾](名) 神代の鉾の名。

あまのさけ[天野酒](名) 河内國錦部郡天野邊より出だす酒。

あまの-ざこ[天邪鬼](名) ㊀故意に人の言にさからひて、かたいぢを張るもの。㊁轉じて、兩金剛の踏まへたる邪鬼の稱。
あまの-じゃく[天邪鬼](名) 「あまのざこ」に同じ。
あまの-じゃこ(名)【動】「ぢむし」に同じ。
†あまの-すてぐさ[海人捨草](名) 海人が鹽を燒きてすつる灰。
あまの-はごろも[天羽衣](名) ㊀神の服。㊁天人の服。㊂古昔、天皇が神事のために、湯にて聖體を淨めたまひしときの御衣。
あまの-はら[天原](名) おほぞら。(大空)。
あまの-まなこ[天眼](名) 天の照覽。
†あまの-むらぎみ[天邑君](名) 神代の邑長。
あま-のり[甘海苔](名)【植】(苔味無き海苔の義)紅色藻に屬する海藻、概ね海洋の淺處に生ず、蕃殖は有性生殖なり、武藏國品川沖にては盛んにそだを植ゑてこれを繁殖せしむ、食用に供せらる。むらさきのり。(紫菜)。
あま-ばおり[雨羽織](名) 昔時、雨をしのぐに着し羽織。
†あまはせ-づかひ[天馳使](名) ㊀そらをはしらする使。㊁早く行くつかひ。
あま-はだ[甘肌](名) 檜木などの薄き皮、舟などの漏をふさぐに用ふるもの。うすかは。まいはだ。
あま-ばたいし[雨畑石](名) 甲斐國富士川の川筋に産する粘土板岩、古來、硯材として用ひらる。
あま-はれ[雨晴](名) 雨の晴るゝこと。
あま-びこ[天彦](名) 音聲の空に反響すること。——の(枕)「おと」に冠らする詞。「—の音羽の山」。
あま-びこ[雨彦](名)【動】「やすで」に同じ。
あま-びと[蜑人](名) あま。(海人)。
あま-びと[天人](名) 天人。天女。天津乙女。

†あま-ふ[(へ、へ、ふ、ふる、ふれ、へよ)][謝](他、は下二) 罪をゆるされんと謝ふ。わぶ。
あま-ぶね[海人船](名) 魚とる船。いさり船。
あま-ぼし[甘干](名) 皮を去り日に輕く干したる柿。(烏柿)。
アマ-ほふし[尼法師](名) 比丘尼。アマ。
あま-ま[雨間](名) ㊀雨の晴れ間。あまあひ。あめのあひま。㊁雨の降る間。
あま-み[甘](名) あまきあぢはひ。あまき度合。
あま-みづ[雨水](名) 雨降りて溜りたる水。
あま-も[海藻](名)【植】眼子菜(ヒルムシロ)科に屬する草、海に生ず、莖は細長く、幅五分内外ありて縱脈を有し、莖は肥料・織席料又は椅子・蒲團などの心に用ひらる。もあはぐさ。
あま-もり[雨漏](名) 屋根などより雨のもること。
アマ-や[尼屋](名) 尼のゐる家。
あま-やかし[嬌](名) あまやかすこと。
あま-やか-す[嬌](他、さ四) 小兒を、ゆるく育てゝ、我儘ならしむ。あまえしむ。
あま-やどり[雨宿](名) 雨のはるゝまで、宿りて脚を止むること。
あま-やみ[雨止](名) 雨の降りやむこと。又其間。
あま-ゆ[嬌](自、や下二) 親しみ過ぎてわがまゝになる。なれてきまゝをなす。
あま-よ[雨夜](名) 雨の降る夜。
あま-よけ[雨避](名) ㊀あまおほひ。㊁あまやどり。
あま-よそひ[雨裝](名) 雨をふせぐよそひ。
あまよ-の-つき[雨夜月](名) 雨天に見る月、即ち、たゞ想像すべくして現實ならざるものにたとへいふ詞。「形みえぬ君は—なれや」。
あまり[餘](名) あまること。あまりたるもの。のこり。

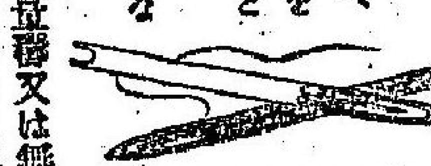
あまり[餘](副) あまりに。——に[餘](副) 法外に。度を過ぎて。
あまり-さへ[餘](副) 「あまつさへ」に同じ。
あまり-もの[餘物](名) 無用のもの。のこりもの。
あまり-よう[雨龍](名) 龍の類、角無く尾細く、とかげの形したるものといふ。
あま-る[餘](自、ら四) ㊀充ちて殘る。程を過ぐ。のこる。すぎる。㊁超過すると能はず。力及ばず。「手に—」。
アマルガム[Amalgam](名)【化】水銀と他の金屬との合金、鉛「アマルガム」・錫「アマルガム」・銀「アマルガム」等なり。——はふ[—法]=Amalgamation](名)【化】「アマルガム」より水銀を蒸溜し去りて、金屬を析出すること。
あま-をとめ[海少女](名) 少女の海人。
あま-をとめ[天少女](名) 天津をとめ。
あま-をぶね[海小舟](名) ㊀いさりぶね。漁船。㊁【動】一種の貝、形はあさりに似て、介殼は内外白く線は紫紅色を呈す。
あまん-ず[甘](自、さ變) こゝろに足れりとす。まんぞくす。
あみ[網](名) ㊀魚類又は鳥獸を捕ふるに用ふる具、絲を打ち違ひに編み結びて作れるもの、其形種々あり。㊁すべて絲又は針金などを、網の目の如くに編み結びて作りたるもの、稱。「金—」。㊂とがめ。刑罰。「天の—」。㊃人を捕ふる手段。「—を張つて待つ」。
あみ[醬蝦](名)【動】裂足類中あみ科に屬する節足動物、形狀・構造共に蝦の幼蟲に類似す、胸部第六環節の内枝に聽囊を有するを以て著名なり、多く泥海に産す、しほからなどゝなして食用に供せらる。

あみえび。ぬかえび。(糠蝦)。
アミーバ[Amaeba](名)【動】原生動物の一、極めて微細なる蟲にして、池沼などに生息す、體軀甚短、たゞ原形質の一塊に過ぎず、其體表より自在に突起を出沒して、移行又は捕食を營む。
あみ-いし[網石](名) ㊀網の重しの石。㊁【地】古生代の石炭紀等に多き蕾蟲の類。
あみ-いた[編板](名) あみ栗物のたぐひにて、古昔、罪人をのせしもの。
あみ-うち[網打](名) 投網をもて魚を取ること。又、其人。
あみ-えび[醬蝦](名)【動】「あみ」に同じ。
あみ-がさ[編笠](名) 編みて作りたる笠、むしろ菅などを用ふ。——がひ[—貝](名)【動】一種の貝、介殼黑くして、形あみがさに似る。——ぎさう[—草](名)【植】大戟(タカトウダイ)科に屬する小草本、莖は互生して稈の頭に類似す、花は單性にして黃色、莖は大形にして莖頭に着く。えのきぐさ。——もち[—餅](名) あんこを丸く薄く延ばし、中に餡を入れ、二つに折りたるもの。——ゆり[—百合](名)【植】百合科に屬する草本、花は春早く開き、淡黃色にして、内面は淡綠線條に紫色細點を交へたる網狀紋を有す、觀賞用又は藥用として栽培す。ばいも。(貝母)。

[あみがさ]

あみ-がひ[網貝](名)【動】苔蘚蟲類に屬する蠕形動物、群體をなして生活す、群體共有の骨骼は直立し、許多の孔を以て開通す、其狀網の如く白色又は暗紅色なり、海底に産す。(雞冠介)。
あみ-ざこ[醬蝦雜魚](名)【動】「あみえび」に同じ。

†あみ-す(せ、せ、す、する、すれ、せよ)[浴](他、さ下二) あぶす。
あみ-すき[網結](名) 網を作ること。又、其人。——ばり[—結針](名) 網を作るに用ふる針、竹・木又は鯨の骨などにてつくる。あみばり。


[あみすきばり]

あみ-そ[網苧](名) 網を作る材料となす麻絲。
アミダ[阿彌陀](名) ㊀【佛】梵語、無量壽又は無量光と譯す、西方淨土にありといふ佛の名號。㊁あみだくじの略言。㊂車の、輪の周圍の木、これに輪金を箝む。㊃「あみだかぶり」の略言。——かぶり[—被](名) 帽子を後頂にづらしてかぶること。——くじ[—籤](名) 一種の遊戲、金額の多寡をまるしたる籤を引きて、其まるしある金額を出しあひ、物を買ひてこれを等分すること。——だう[—堂](名) ㊀あみだ佛を安置したる堂。㊁茶の湯に用ふる釜の名。
あみ-づな[網綱](名) 網につけたる綱。
あみ-ど[編戶](名) 竹又は木を編みて作りたる戶。
あみ-ど[網戶](名) かなあみを張りある戶。
あみ-どり[網鳥](名)【動】「ほとゝぎす」の異名。
あみ-なは[網繩](名) 「あみづな」に同じ。
あみ-の-き(名)【植】「あふち」に同じ。
あみ-の-め[網目](名) ㊀網の絲と絲との間のすきま。㊁刑律のぬかり。㊂【植】石竹科に屬する草本、圃圃に自生す、莖は卵形或は楕圓形にして、萼片は通常花瓣より大きく、花柱は三個あり。(雀舌草)。
あみ-のりもの[網乘物](名) 網をかけたる乘物、德川時代に、重き犯罪人を護送するに用ひたり。
あみ-ばり[網針](名) 「あみすきばり」に同じ。

あみ-め[編目](名) 物と物とを編み合はせたる目。
†あむ[虻](名)【動】「あぶ」に同じ。
あ-む[編](他、ま四) ㊀【動】絲・竹・藤などの類をくみあはす。㊁書史を纂きつゞる。
†あ-む[浴](他、ま上二) 「あぶ」に同じ。
†あむ-しろ[編代](名) 「あじろ」の古言。
†あむ-す[浴](他、さ四) 「あぶす」に同じ。
†あむ-す[浴](他、さ下二) 前條に同じ。
†あむ-づち(名)(編む土の義)「あづち」に同じ。
あめ[天](名) ㊀あをくとして高く大地をおほひ、日月星辰其間にかゝる所。てん。こくう。そら。㊁日の神のゐます所。造化の神のゐます所。人間以上の靈力あるものゝ住める所。
あめ[雨](名) 雲の水分子凝集して水滴漸く增大し、遂に空中に浮遊する能はずして、地上に降下するもの。
あめ[鯇](名)【動】「あめのうを」の略言。
あめ(名)【動】「みづすまし」に同じ。
あめ[飴](名) 一種の食品、餅米を蒸し大麥のもやしを入れ、熱湯を加へて搾り、釜に入れて練りたるもの。——をくはす 勝つべき技倆あれど、先づ負けて相手を喜ばすにいふ。
あめ-あと[雨跡](名) ㊀雨のあとづくのあと。㊁【地】岩面に存する雨滴の跡、即ち、岩石の未だかたまらざる時に、雨ふりて凹みを殘したるもの。
あめ-いし[飴石](名) 一種の石、割れば中の色水飴の如し。
あめ-いろ[飴色](名) 水飴のごとき色あひ。
あめ-うし[飴牛](名) あめいろの牛。(黃牛)。
あめ-うり[飴賣](名) 街上に飴を賣り歩く商人。

あめ-が-した[天下](名) あまのしたなる所、即ち、世界・國土の總稱。
あめ-く[叫](自、か四) 高く聲をあげて叫ぶ。わめく。
あめ-ざいく[飴細工](名) ㊀かた飴にて、鳥獸人物などをつくりたるもの。㊁外形いたづらに觀るべくして、實質の虛疎なるを嘲りていふ詞。
あめ-あづく[雨零](名) 雨のしづく。
†あめ-あら-す[天知](他、さ四) 天に神上りして天上を治め賜ふ、皇太子などの薨じ給ふにいふ。
あめ-ちまき[飴粽](名) 飴をなすりたる粽。
あめ-つち[天地](名) 天と地と。――の-ふくろ[天地袋](名) 天地を縫ひ合はす趣にて、初春に袋をぬひて、すべての幸福を入るゝといふ祝ひ事。
あめ-の-いは-と[天岩戶](名) 「あめのいはやど」に同じ。
あめ-の-いはや[天岩屋](名) 天上にありし岩屋、又、祭殿との說あり。――ど[天岩屋戶](名) 天上にある岩屋の戶口。
あめ-の-うを[鯇](名) 【動】喉鰾類中さけ科に屬する魚、體は延長にして多少側扁なり、體長四五寸許、體色は背部暗蒼色にして黑色の小點散在し、腹部銀白なり、我國東北地方の溪流・湖川に產す。
あめ-の-おしかみ[天壓神](名) 神武天皇を稱へ奉りし詞。
あめ-の-した[天下](名) 國土の總稱。あめがした。
あめ-の-ゑん[筵](名) ゑのまきをつくる細き竹。
†あめ-の-ますびと[天益人](名) 天つ神のめぐみを受けて、日々に殖え增すもの、卽ちひと。人間。(蒼生)。

†あめ-の-みかげ[天御蔭](名) 主上の在らせらるゝ御殿の敬稱。
あめ-の-みかど[天御門](名) 「みかど」に同じ。
あめ-の-むらくも-の-つるぎ[天叢雲劍](名) 三種の神器の一、素盞嗚尊がやまたの大蛇(ヲロチ)を切りきたひしとき、其尾より出でたりといふ劍、後に日本武尊が、駿河にて叛臣の詭計にかゝり火攻にあひたまひしとき、これを以て草を薙ぎ難を脫れたまひしより、草薙劍といふ。
あめ-の-もち[飴餠](名) 水飴を塗りたる餠、遠江國小夜中山の名物。
†あめ-びと[天人](名) ㊀天上の人。㊁都の人。
あめ-ふらし[雨降](名) 【動】(い)腹足類中後鰓類に屬する軟體動物、海中に產し、形狀は蚯蚓に似る、鰓を右側に具し外套を以てこれを蔽ふ、體に觸るれば紫色の液を放つ。うみうさぎ。うみうし。(雨虎)。(ろ)薩摩の山中に、雨中に出づる、形の石決明に似て殼なきもの。

[あめふらし(い)]

あめ-ふり[雨降](名) 雨の降る日。
あめ-ます[鯇鱒](名) 【動】「あめのうを」に同じ。
あめ-もやう[雨模樣](名) 雨の降りそうなる氣色。
アメンドウ(名) 【植】(葡萄牙語 Amendoa より出づ。)(い)瓜哇地方より來る一種の桃核にして、其仁食ふべし。(ろ)樗桃(カラモモ)の一名。
(あめん-ばう[飴坊](名) 【動】「みづすまし」に同じ。
(あめん-ぼう[飴棒](名) 棒形につくりたる飴。
†あも-る[天降](他、ら四) 天上より下界へくだる。あまくだる。

あや[文](名) ㊀さま〲に顯はれたる色合ひ又は模樣。㊁あくみ。てだて。㊂文章の修飾。㊃うまみ。おもむき。㊄すぢみち。けぢめ。
あや[綾](名) あやを織り出したる絹。
†あや(感) あな。あなや。(咄嗟)。
あや-かし(名) ㊀海に出づといへるばけ物。㊁【動】「こばんざめ」に同じ。
あや-かり[肖](名) よく似ると。――もの[肖者](名) ㊀似たるもの。㊁まあはせもの。
あや-か-る[肖](自、ら四) ㊀感じて似る。にる。㊁感じて似んとねがふ。
あや-ぎり[文桐](名) 【植】「あをぎり」に同じ。
あや-し[怪](形、二) ㊀不可思議なり。くすし。㊁めづらし。ことなり。㊂いぶかし。うたがはし。㊃賤し。
あや-しび[怪](名) ふしぎ。不分明。
あや-し-び[怪火](名) ㊀其もとの不分明なる火。㊁放火。
あや-し-ぶ[怪](他、は四) 「あやしむ」に同じ。
あや-しみ[怪](名) あやしむと。ぎねん。いぶかり。
あや-し-む[怪](他、ま四) あやしと思ふ。ふしぎとなす。うたがふ。いぶかる。
†あや-す(他、さ四) 血又は汗などを出だす。ながす。もらす。
(あや-す(他、さ四) 嬰しなぐさます。(慰)。
あや-すぎ[文杉](名) ㊀【植】杉の一種、葉は杉に似て裏白し。㊁人の字の如き形を連ねたる模樣、刀劍の中心(ナカゴ)などにほりつくるもの。
あや-ち[綾地](名) あやおりの地合ひ。
†あ-やつ[彼奴](代) かやつ。
あや-つき[文槻](名) 槻の木理の綺麗なるもの。

あやつり[操](名) ㊀あやつると。㊁「あやつりにんぎやう」の略言。――にんぎやう[操人形](名) 人形に絲をつけ、かげよりあやつりて所作をなさしむる戲。
あやつ-る[操](他、ら四) ㊀絲をつけかげよりひきて、其物を動かす。㊁かげにありて、其物をさま〲にはたらかす。㊂あやなす。
あやどり[綾取](名) 絲を手指に纏ひ、さま〲に組み合はすと。
†あやどり-の-し[文取師](名) 古昔、織部司に屬し、織物の事をつかさどりし技手。
あやど-る[操](他、ら四) ㊀あやつる。㊁あやなす。
あや-な-し[文無](形、二) ㊀不分明にあり。㊁筋道立たず。
あや-な-す[操](他、さ四) 巧にあしらふ。ほどよくあつかふ。
あや-に[奇](副) ㊀きたいに。めうに。㊁はなはだしく。きはめて。
あや-にく[嘆憎](副) ㊀おもはず。意外に。㊁をりあしく。まあはせわろく。――ごころ[嘆憎心](名) 意地の惡しきこころ。
あや-ぬの[綾布](名) 綾おりのぬの。(文帛)。
†あや-の-し[挑文師](名) 「あやとりのし」に同じ。
あや-は-がさ[文羽笠](名) やまぶしの被る笠。
あや-はとり[漢織](名) 古昔、漢國より渡來したるはたおりの稱。
あや-ひ-がき[文檜垣](名) 檜の薄片を以て編みたる垣。
あや-ふ-し[危](形、一) ㊀危難近し。わざはひ及ばんとす。㊁むづかし。かたし。
あやぶみ[危](名) あやぶむと。けねん。

あやぶ-む[危](他、ま四) あやふしと思ふ。かたしとす。うたがふ。
(あや-ぶ-む[危](他、ま下二) あやふくす。
(あや-ふや(名) 曖昧にして、事態を明白ならしめざるさまにいふ語。
あやまち[過](名) あやまつと。まちがひ。あやまり。「過失」。
あやま-つ[過](他、た四) ㊀まちがひをなす。仕損ず。あやまる。㊁罪を犯す意なくして、罪を犯す。
あやまり[誤](名) あやまると。――しようもん[誤證文](名) わびじやう。
あやま-る[誤](他、ら四) ㊀仕損じて筋道たゞず。㊁人にあやまりをなさしむ。まどはす。「君王を―」。㊂罪を謝す。わびをなす。㊃病みて心亂る。
あや-む(他、ま下二) ㊀あやしく思ふ。不審をたつ。いぶかる。㊁人を殺傷す。ころす。
あや-むしろ[綾蓆](名) 織物にてつくりたるむしろ。
あや-め[文目](名) あやべつ。もやう。すぢわけ。「―も知らず」。
†あや-め[文女](名) 綾を織る女。(衣縫女)。
あや-め[菖蒲](名) ㊀【植】古昔は「あやめぐさ」の略言。後世は「はなあやめ」の略言。㊁かさねの色目、表は青にして裏は紅梅なるもの。㊂【動】蛇の異名。――がたな[菖蒲刀](名) あやめを束ねて劒の如くにつくりたる小兒の玩具、古昔、五月五日男兒の節句の祝ひに用ひしもの。――がひ[菖蒲貝](名) 【動】蛤の類、色紫にして、これを三つ弱すれば、還孩(ハナアヤメ)の花に似たり。――かぶと[菖蒲兜](名) あやめにてつくりたる兜、古昔、

五月五日、男兒の節句の祝ひに用ひしもの。――ぐさ[菖蒲草](名) 【植】薺尾(イチハツ)科に屬する多年生草本、葉は細長し、花蓋の內層の片は、花柱の花瓣樣の部分より長くして廣く、花蓋の外層の片は、下部の內面に網狀の斑紋を有す、山野に自生す、又、觀賞用として栽培す。あやちうぶ。――だんご[菖蒲團子](名) ㊀竹を四頭(ヨツマタ)に灑し、頭每に小さき團子を四つ宛つらねたるもの。㊁絲切り團子に餡をつけたるもの。
あやめ-たむ(名) 【植】「われもかう」に同じ。(地榆)。
(あやめ-る(他) 「あやむ」の訛。
あやゐ-がさ[綾藺笠](名) 藺草にて編みたる笠。

[あやゐがさ]

あゆ[鮎](名) 【動】有腹鰭類中さけ科に屬する魚、體軀は多少側扁なり、體色は背部蒼黑にして腹部黃白、吻頭は稍や淡紅色を帶ぶ、體長大なるものは一尺に達す、我國にては、全國の河川概ね產せざるはなく、殊に西南地方のもの大なりとす、海中に棲息し、三四月頃より河川に遡(ノボ)る、性敏捷にして、よく品列なる急湍に游泳す、肉甚だ美味なり。
†あ-ゆ(自、や下二) 血又は汗などあえたゝりおつ。
†あ-ゆ[肖](自、や下二) あやかる。
†あ-ゆ[熟](自、や下二) 果實成熟す。
(あ-ゆ[阿諛](名) おもねりしたがふと。へつらひ。
†あゆ-か-す[搖](他、さ四) 物を動搖せしむ。ゆるがす。うごかす。
†あゆ-ぐ[搖](自、か四) ゆるぐ。うごく。
†あゆ-ぐ[步](自、か四) あゆむ。
あゆ-なめ[鮎並](名) 【動】硬鰭類中あゆなめ科

に屬する魚、全身淡黑色にして濃黑色の斑紋あり、鱗多くは微黄色を帶ぶ、體長大なるものは七寸許に達す、我國にては、多少産せざる所なく、殊に西南洲に多し、近海魚にして水の中層以下に游泳し、概ね一定の居處ありて遠く去ることなし、肉甚だ美味なり。(鯰身魚)。

廿**あゆ-の-かぜ**[東風](名) ひがし風。(古昔、越後の方言)。

廿**あゆ-ひ**[足結](名) 古昔、足に纏ひたるもの、鈴などつけたり、今時のきやはんの類。

あゆび[歩](名) あゆみ。 ——**あひ**[歩合](名) 雙方讓りあひて、をり合ひをつくること。

廿**あゆ-ふ**[足結](自、は四) あゆひをはく。

あゆ-ぶ[歩](自、は四) あゆむ。

あゆみ[歩](名) あゆむこと。あし。歩行。 ——**いた**[歩板](名) 物の上にわたして其上を渡る板。「陸奥の小川の瀬の—」。

あゆ-む[歩](自、ま四) 足を運びてすゝみゆく。あるく。

廿**あよ-ぐ**[搖](自、か四) あゆぐ。

廿**あよ-ぶ**[歩](自、は四) あゆむ。

あら[阿羅](名) 【動】硬鱗類中すゞき科に屬する魚、體形は側扁、鱗甚だ小くして頭部をも蓋ふ、體色は褐色にして腹部のみ銀白色をなす、體長大なるものは三尺許に達す、深海の岩礁間に常棲す。(鮫魚)。

あら[粗](名) ㊀ほね。㊁魚などを料理したるあとの骨に、肉のなほ少し附着せるもの。㊂選つべき殘餘。㊃米穀の上皮。㊄天然のまゝにして未だ人工の加はらざること。㊅きず。あやまち。缺點。

あら[新](名) 新らしきもの。

あら[荒](名) ㊀粗暴。㊁馴れざること。

あら(感) あな。あゝ。「—かなしや」。

あら—[粗](接頭) 成語に冠して未だ人工を經ざる意を表はす。「—玉」。

あら—[疎](接頭) 成語に冠して密ならざる意を表はす。「—垣」。

あら—[新](接頭) 成語に冠してあたらしき意を表はす。「—身の刀」。

あら—[荒](接頭) 成語に冠して粗暴又は馴れざる意を表はす。「—浪」「—馬」。

あら-あら[粗粗](副) 大凡。大略。おほよそ。ざっと。ほぼ。「—目出度し」。

あら-あら(副) 驚歎・悲痛の意を表する發聲。あな。あら。(嗚呼)。

あら-あら-し[粗粗](形、二) 甚だ粗末なり。いとあらし。

あら-あら-し[荒荒](形、二) 甚だ粗暴なり。たけし。はげし。

あら-いそ[荒磯](名) 荒浪の打ちよする磯邊。ありそ。 ——**なみ**[荒磯波](名) 荒磯に打ちよする波浪。

あら-いみ[荒忌](名) 神事にあづかる人の、前かたより齋戒すること。眞忌(マイ)の對。(散齋)。

あら-う-ま[荒馬](名) 人に馴れぬ馬。

あら-う-み[荒海](名) 波浪のたちあるゝ海原。 ——**さうじ**[荒海障子](名) 古昔、淸凉殿のひろびさしの北に、たておかれし布障子、荒海の畫を畫きたるより此名あり。

あら-えびす[荒夷](名) 王化に服せざる蠻族。

あら-がき[疎垣](名) あらくつくりたる垣根。 ——**の**(枕) 「よそ」に冠らする詞。

あらかじめ[豫](副) 其前より。かねてより。かねがね。かねて。まへもって。

あら-かせぎ[荒稼](名) あら仕事。ちから仕事。

あら-かた[粗方](名、副) おほかた。大抵。大概。

あら-がね[粗金](名) ㊀山より掘り出だしたるまゝの金屬。(鑛)。㊁鐵の異稱。 ——**どうふ**[粗金豆腐](名) 一種の料理、豆腐を酒と醬油とにていりつけ、これにさんしやうの葉又は實をすりたるをまぜあはしたるもの。 ——**の**(枕) 「つち」に冠らする詞。

あら-かは[粗皮](名) ㊀獸類などの上皮。毛皮。㊁米穀の類の外皮。もみがら。

あら-がひ[諍](名) けんくわ。いひあひ。爭論。

あら-が-ふ[諍](他、は四) あらそふ。抵抗す。

あら-かべ[粗壁](名) また中塗りをなさぬ壁。あら土をぬりたるまゝの壁。

あら-がみ[荒神](名) ㊀あきつかみ。㊁あらくしき神靈。

アラカン[阿羅漢](名) 【佛】(梵語 Arhan 不生・殺賊又は應供の義) 見思の惑ひを斷じて三界の生を受けず、智斷の功德已に具足して、人天の供養を受くる聖者の位地。略して「ラカン」。

廿**あら-き**[荒城](名) 人の屍體を假りに埋葬しておく處。(殯宮)。

あら-き[粗木](名) 伐採せるまゝの材木。

アラキ[阿刺吉=Arak](名) 古昔、和蘭より舶來したる飲料、「アルコホル」に香氣を付けたるもの。

あら-きだ[荒木田](名) 武藏國豐島郡荒川沿岸の荒木田原より出づる土。

廿**あらき-はり**[墾](名) 新に田を開墾すること。

あら-ぎやう[荒行](名) 修行者などの甚だ苦しき修業をなすこと。

あら-く[疎](自、か下二) 間あく。あらくなる。はなる。ちりぢりとなる。(散)。

あら-く[荒](自、か下二) 荒れ立つ。さわぐ。

あら-ぐし[粗櫛](名) 齒のあらき櫛。

あら-くま[荒熊](名) たけきくま。

廿**あら-くま-し**[荒](形、二) あらあらし。あらし。

あら-くる[荒](自、ら下二) あらあらしくなる。あれだつ。

あら-くる[粗](自、ら下二) 粗末になる。あらくなる。

あらくれ[荒](名) あらくれること。 ——**もの**[荒者](名) 亂暴する人。

[**あら-くれる**[荒](自) 「あらくる」の訛。

廿**あら-こ**[疎籠](名) 編み目のあらき籠。

あら-こ[疎粉](名) 糯米のあらき粉。

あら-ごと[荒事](名) 芝居にて、役者が鬼神のものに扮して行ふ仕業(シワザ)。 ——**し**[荒事師](名) あらごとをむねとする役者。

あら-ごも[粗菰](名) あらく編みたる菰。

あら-さ[荒、粗](名) あらくある度合ひ。

あら-し[嵐](名) 風雨のあれたつもの。(暴風雨)。

あら-し[粗](形、二) ㊀くはしからず。めんみつならず。㊁きめこまかならず。なめらかならず。㊂そまつなり。ざつなり。㊃まばらなり。(疎)。

あら-し[荒](形、二) 亂暴なり。はげし。たけし。

あら-しこ[粗扱](名) あら削りをなす鉋(カンナ)。

あら-しこ[荒子](名) ㊀農家などに奉公する卑賤のもの。農事の勞働者。㊁雜兵。せこ。

あら-しごと[荒仕事](名) ㊀ほねをりわざ。㊁やまだち又は強盜のわざ。人を殺傷し又は毆打するなどのわざ。

あら-しよたい[新世帶](名) 新に構へたる一家。

廿**あら-しを**[荒男](名) ますらを。たけを。あらをとこ。

あら-す[荒](他、さ四) ㊀破壞す。そこなふ。「住み—」。㊁害す。さわがす。

あら-ず[否](副) さにあらず。しからず。いな。

廿**あら-ずみ**[荒炭](名) かた炭。

あら-そひ[爭](名) あらそふこと。いさかひ。こうろん。抵抗。衝突。

あら-そ-ふ[爭](他、は四) ㊀衝突す。抵抗す。さからふ。はりあふ。㊁前後をきそふ。㊂優劣をくらぶ。

廿**あら-ぞめ**(名) 淺紅に染めし布。(桃花染)。

あらた[新](名) 新しきこと。

あら-た[荒田](名) 耕作をなさぬ田。

あらた(名) 「あらたか」の略言。

あらたか(名) 神佛などの靈驗のいちじるしきさまにいふ語。(灼然)。

あらた-し[新](形、二) 新にてあり。

あら-だ-つ[荒立](自、た四) あらくなる。

あら-だ-つ[荒立](他、た下二) 激動せしむ。あらくならしむ。激發す。立腹す。

[**あら-だ-てる**[荒立](他) 「あらだつ」の訛。

あら-たへ[荒妙](名) 織り目のあらき麻布。(粗栲)。 ——**の**(枕) 「ころも」「ぬの」に冠らする詞。

あら-たま[荒魂](名) 勇武・猛健などの德をつかさどる靈魂。

あら-たま[粗玉](名) 掘り出だしたるまゝの玉。(璞)。

あら-たま-の[新玉](枕) 「年」「月」「日」「夜」「春」に冠らする詞。

あら-たま-る[改](自、ら四) ㊀新規になる。あたらしくなる。㊁更はる。變ず。

あら-た-む[改](他、ま下二) ㊀あらたにす。新規にす。變更す。かふ。㊁檢閲す。ぎんみす。しらぶ。

あら-ため[改](名) ㊀えんぎ。なほし。㊁ぎんみ。

[**あら-ため-る**[改](他) 「あらたむ」の訛。

あら-ちを[荒男](名) あらしを。あらくれ男。

あら-づくり[粗造](名) ㊀またこしらへ。㊁あらあらしくつくれるもの。

あら-づもり[粗積](名) あらかたのつもり。大抵の見當。(概算)。

あら-て[新手](名) ㊀戰場にて、まだ戰はぬ強者なる兵士。(生兵)。㊁同一の仲間にて、まだ其仕事にたづさはらず控へ居るもの。

あら-で[荒手](名) 仕事の荒々しきこと。(垣をくむなどにいふ)。

あら-と[粗砥](名) 一種の砥石、粗粒狀の砂岩にて作りたるものにして、質粗し。(麁礪)。

あら-どこ[新床](名) 新しき臥の床。

あら-どこ[荒床](名) 死人を假りにおく所。

あら-なは[荒繩](名) おもに藁にて綯(ナ)ひたる太き繩。

あら-なみ[荒波](名) 荒れ立つ浪。

あら-ぬか[粗糠](名) もみぬか。

あら-ぬり[粗塗](名) 壁などを初めにあらくぬること。またぬり。

あら-の[荒野](名) 荒れはてたる野邊。あれの。あらの。(曠野)。

あらは[陽](名) おもてむき。うはべ。

†あらは-か-す[顕はかす][現](他、さ四) あらはす。

あらは-す[顕はす][著](他、さ四) ❶秘密をあきらかにす。隠れたるものを出だす。(現)。❷いちじるしからしむ。さはだてしむ。(顕)。❸書物を述作す。あらはすす。(著)。

あらは-に[顕](副) ❶かくさずに。あらはして。あきらかに。❷おもてむきに。人前はかりに。

†あらは-に-ごと[顕露事](名) 現世の事。

†あらはへ(名) 五月に吹く霖風(中國地の方言)。

あらは-る[現、著、顕](自、ら下二) ❶表へ出づ。あきらかになる。おもてむきになる。❷いちじるしくなる。さはだつ。❸露顕す。もれる。

あらはれる[現](自) 「あらはる」の訛。[俚]。

あらひ[洗](名) ❶洗ふこと。❷一種の料理。魚の生肉をそぎて、冷水にてあらひて、肉にちりめんあみを寄せたるもの。

アラビア-うま[亜刺比亜馬=Arabian horse](名)【動】「アラビア」種の馬。馬匹中最も優秀なる體格を具へたるもの。頭小さく、胴廣く、丈四尺八寸乃至五尺三寸あり。性長稍や遅緩なれど長驅を保つ。

アラビア-ゴム[亜刺比亜護謨=Gum arabic](名) 「ゴム」の一種。もと「アラビア」に産するを「アカシヤ」屬の植物より採収したる白色乃至赤褐色の固體にして、冷水・温水に容易に溶解し粘状となる。種々の用に供せらる。

アラビア-すうじ[亜刺比亜數字=Arabic figures](名) 數字の1・2・3・4・5・6・7・8・9をいふ。「アラビア」に創まりし故に此名あり。

あらひ-がは[洗革](名) 薄紅に染めたる革。

あらひ-がみ[洗髪](名) 洗ひたる髪。

あらひ-こ[洗粉](名) 白あづきを粉末とし、物を洗ふに用ふるもの。

あらひ-ごひ[洗鯉](名) 鯉のあらひ。

あらひ-ざらし[洗晒](名) 衣服などをたびたび洗ひて、染色あせて白くなりたるもの。

あらひ-ざらひ[洗浚](名、副) 何から何まで。ことごとく。悉皆。

あらひ-たて[洗立](名) 行為・挙動の得失をぎんみすること。

†あらひと-がみ[現人神](名) 現世に於て人の形を成して居る神。天皇を称し奉る。

あらひ-のり[洗海苔](名) 甘海苔の雙種。出雲國より産す。

あらひ-はり[洗張](名) 衣を着物を洗濯して、板にはりつけ皺を延ばすこと。

あらひ-よね[洗米](名) 神などに捧ぐるため、清く洗ひたる白米。せんまい。かしよね。

あら-ふ[洗ふ][洗](他、は四) ❶物を水にすすぎきよむ。❷吟味す。まうす。❸恥辱をすすぐ。

あら-ぶ[荒ぶ][荒](自、は上二) ❶亂暴す。あばる。❷騒動す。あれだつ。「―る波」❸とをざかる。ひらけず。❹疎遠となる。うとくなる。

あら-ぼね[骼](名) 枯れたる骨。

あら-ぼねをり[荒骨折](名) 荒仕事。あらがせぎ。

あら-まき[縮](名) たがやしもせずして、種を蒔くこと。

あら-まき[荒巻](名) 藁又は竹の皮などにて、魚を包みて贈物となすもの。つと。(苞苴)。

†あら-まし[豫](名) 心あて。心だのみ。豫期。

†あらまし[荒](形、二) あらし。「騒」。

あら-まし[粗増](名、副) あらかた。およそ。(大て。)

†あらまし-ごと[豫事](名) 心だのみ。こころあてにす。

†あらま-す[豫](他、さ四) 心あてにす。預期す。

あら-ま-ほ-し(形、二) 事を預期して、かくあれかしと思ふ。かくありたし。

あら-み[新身](名) 新規にきたひたる刀。(新刀)。

†あら-みかげ[荒御蔭](名) あらみさき。

†あら-みさき[荒御前](名) 人の仲を裂く神。

あら-みたま[荒御魂](名) あらき神靈。勇武なるたましひ。あらたま。

あら-むしゃ[荒武者](名) ❶あらき武士。❷荒荒しきわかぞう。

あら-むしろ[粗筵](名) あらき筵。

あら-め[荒布](名)【植】褐色藻門に屬する海藻。莖の長さ一尺乃至三尺に達す。さきに扁平なる主莖を出だし、更にこれより幾多の副莖を生じ、兩面滑かにして縦に皺あり、色は黒褐色にして長さ四五尺に達す。温暖なる地方の稍や深き海に産す。食用・肥料に供せらる。(海帶・滑海藻)。

あら-め-おどし[荒目縅](名) 三色の組のおどしの一。おどしかたのあらき故に此名あり。

†あら-もと[糲](名) 搗くとき碎けたる米。

あら-もの[新物](名) 新規のもの。

あら-もの[荒物](名) 粗末なる家具。即ち、箒・塵取などの類をいふ。

あら-やすり[粗鑢](名) めのあらきやすり。

あら-ゆる[所有](副) あるだけ。のこりなく。

あら-らか(名) あららきにいふ語。

あららぎ[蘭](名)【植】(い)にんにくの雙稱。ぎやうじやにんにく。(蒜葱)。(ろ)「いちゐ」の一名。

あららぎ(名) 塔の異名。(齋宮の忌み詞)。

あられ[霰](名) ❶雲の水分子急激に氷結して、地上に降下するもの。不規則なる結晶をなす。雪よりは小片なり。❷さいのめに刻みたる細かき餅。――いし[霰石](名)【鑛】透明若しくは不透明なる鑛物。種々の晶形をなし、色もまた一定せず。――がひ[霰貝](名)【動】蝸の類。あられの如きぼつぼつが、介殻の外面に列れるより此名あり。――がま[霰釜](名) 茶の湯に使ふ一種の釜。あられの形を外面に出だしたるもの。――こもん[霰小紋](名) 小紋の名。あられのつぶを細かく表はしたるもの。――ざけ[霰酒](名) 麹の粒とけずして、あられの如くなりたるにごり酒。――そば[霰蕎麦](名) つゆそばの一種。ばか貝のはしらを其上にふり掛けたるもの。――ぢ[霰地](名) 織物の名。あられのやうなる細かき小紋をおりだしたるもの。――ばしり[霰走](名) 古昔、正月十六日に行ひし踏歌。「たふかの節」を見よ。

あら-れうぢ[荒療治](名) ❶外科醫者のてあらき療治。❷人を殺傷すること。

あられ-も-な-し(形、一) 普通にありうべくもあらず。ありさうも無し。

あり[蟻](名)【動】膜翅類に屬する昆蟲。觸角は絲状若しくは棍棒状をなす。群棲して一社會を成し、地中或は朽木に巣を營む。雌雄二蟲の外に職蟲と稱する中性のものあり。又、其一社會中、雌は通常一匹にして女王と稱す。冬日、地中に眠食して越年するものは、雌と職蟲とのみなり。あかあり・くろあり・くまあり・とびあり・くろおほあり等の種類あり。

あり(名) 扁平なる板を反らさぬために、溝を掘りて細き木を嵌むること。

あり[有](名) 物事の有ること。實在。現實。

あ-り[有り][有](自、ら變) ❶現に存す。❷とどまる。すむ。❸いきながらふ。(在)。

あり-あけ[有明](名) ❶空に月の残りながら夜の明くること。❷「アンドン」を夜あけまで點(とも)しおくこと。――アンドン[有明行燈](名) 夜あけまで點(とも)しおく行燈。

あり-あは-す[有合はす][有合](自、さ下二) 其場に現存す。ありあふ。

あり-あはせ[有合](名) ありあふこと。ありあひ。

あり-あひ[有合](名) 其場にありあふこと。又、其もの。ありあはせ。

あり-あ-ふ[有合ふ][有合](自、は四) 丁度其場にある。そこにありあはす。

あり-あま-る[有餘る][有餘](自、ら四) 入用よりも多くあり。

あり-あり[在在](副) あざあざと。鮮明に。分明に。――と[在在](副) ありにありたる其上に。

(あ-りう)[亜流](名) 第二位に立つ人。

あり-う[有得](自、あ下二) 永く世に生き在り。世に在ることを得。

(あ-りうさん)[亜硫酸](名)【化】無水亜硫酸を水に溶解するときに生ずる不安定の化合物。其分子式は硫酸分子式の中酸素一原子の少きもの。

あり-か[在處](名) 物の在る處。

†あり-か(名) わきが。わきくそ。(腋臭)。

あり-かず[有數](名) ❶世に經る年のかず。❷其場にある物のかず。

あり-がた-し[難有](形、一) ❶世に在ること稀なり。❷めったになし。❸感謝すべし。かたじけなし。

ありがた-なみだ[難有涙](名) たふとく又は嬉しく思ひて出づる涙。

ありがた-めいわく[難有迷惑](名) かたじけなきやうにて、却て自己の爲めに不利益なること。

あり-がね[有金](名) 手許にあるだけの金錢。あるだけのかね。

ありき[歩](名) あゆむこと。――ぞめ[歩初](名) 小兒のあるきはじむること。

あり-きたり[在來](名) 元のまゝなること。もとよりあること。

(あり-きり)[有切](名、副) あるだけ。

†あり-く[歩く][歩](自、か四) あるく。

†あり-くる-し[在苦](形、二) 此世にあること苦し。

あり-さま[有樣](名) あるさま。やうす。ありやう。ようだい。

アリザリン[Alizarine](名) 一種の染料。茜根より製したる赤色の結晶體にして、水に溶解せず水酸化アルカリに溶解し、金屬酸化物と化合して不溶解性物を作る。

あり-しよくぶつ[蟻植物](名) 蟻と共生の關係を保ち互に相利益をなす植物の稱。即ち、さくら・そらまめ・あをぎり等の如く、蜜を分泌して蟻を誘引し、餌食を與へ、それにより他の害蟲の襲來を防禦せしめて護衛の用となすものをいふ。

†あり-す[在巣](名) 巣。「―の鳥は」。

あり-すひ[蟻吸](名)【動】攀木類に屬する鳥。嘴は直くして堅く、四趾中の二趾は前に向ひ二趾は後に向ふ。形は啄木鳥(ケラ)より小さく、體は茶色なり。森林に棲息し舌長くして蟻などの小蟲を舐(ね)ぶり食ふ。

†あり-そ[荒磯](名) 「あらいそ」の略言。――う

み[荒磯海](名) あらいそうみ。――なみ[荒磯浪] あらいそによするなみ。――まつ[荒磯松](名) あらいそに生じたる松。
ありだか[有高](名) 現在あるだけの高。「金の[ー]」。
(ありだけ)[有丈](名、副) 其場にある限りの數。
†ありたつ[在立](自、た四) 立つ。
†ありたもとほる[在廻](自、ら四) 此世にありて經めぐる。
ありぢごく[蟻地獄](名) 【動】「すりばち」蟲の一名。あとびさり。
ありづか[蟻塚](名) 蟻の塚。ありのたふ。(垤)。
†ありつかはし(形、二) 似つかはし。
ありつき[有付](名) ありつくこと。ありつく所。よすが。よるべ。「身の―が定まる」。
ありつく[有付](自、か四) ㊀につかはしくあり。にあふ。㊁住みつく。えんづく。㊂より所を得。
ありつく[有付](他、か下二) ㊀住み付かす。えんづかす。㊁より所を得しむ。
ありてい[有體](名) うそいつはりの無きこと。「―のまゝ」。
(ありどほし)[在通](名) 常に在ること。間斷なく存在すること。ありつゞけ。
ありどほし(名) 【植】茜草科に屬する小灌木、山中の陰地に自生す、莖は直ければ高さ二三尺に達するは稀なり、葉は長さ四五分にして、卵形又は長楕圓形にして鋭く尖り、葉本ごとに長き刺あり、花は小くして白く、實は紅にして美なり。(虎刺)。
ありなし[有無](名) ㊀あるとなきと。存すると存せざると。㊁あるかなきか、極めて微にして目に立たぬさまにいふ語。――に[有無](副) かすかに。ほのかに。†――のひ[有無日](名) 中古、五月二十五日の稱、即ち、村上天皇崩御の日にて、緊要事件の外は、政治の執行なきよりいふ。
†ありなむ[有否](他、ま四) いなむ。
ありならひ[有習](名) ありならふこと。習慣。
ありならふ[有習](自、は四) 習慣となる。なる。
†ありのすさび(名) ありてすさぶるに任ずること。
ありのたふ[蟻塔](名) 蟻の巣を地中につくるに、職蟻の地中を穿ち、其土を地上に堆積したるものにして、高さ二尺に及ぶものあり。ありづか。
――ぐさ[蟻塔草](名) 【植】蟻塔科に屬する小草、山野に生ず、莖細くして地上に延び、每節鬚根を出だす、葉は長さ二分許にして對生し、卵形尖頭にして鋸齒を有す、花は大さ二分許、莖頭に簇り着き淡黄にして褐色を帶ぶ。
ありのとわたり[蟻門渡](名) ㊀一列になりて行く蟻の行列。㊁陰部と肛門との間。會陰(エイン)。
(ありのまま)[有隨](名) あるそのまゝのありさま。あからさま。ありてい。
ありのみ[有實](名) 梨の實の稱。「なし」を忌みていふ。
†ありはつ[有果](自、た下二) をはりまで存在す。
†ありふ[有經](自、は下二) 世に在りて、年月を過ごす。
ありふる[有觸](自、ら下二) 至るところに存す。常にあり。
(ありふれる)[有觸](自) 「ありふる」の訛。
アリヘイ(名) 「アルヘイ」に同じ。
ありまい[有米](名) ありあひの米。現米。
ありまき[蟻卷](名) 【動】有吻類中蚜蟲科に屬する蟲、草木の新芽又は綠葉等に寄棲し、其寄棲する所によりて、種類・形態及體色等を異にすれど、何れも小形にして僅かに五厘内外なり、脚は細くして長けれど、微弱にして疾行する能はず、後に羽化すれど、また微弱にして巧に飛翔する能はず、此蟲の味甘きが故に、蟻多くこれを舐る。あぶらむし。(蚜蟲)。
ありまさう[有馬草](名) 【植】蘭科に屬する小草、黄又は白き花を開く。
ありまつしぼり[有松絞](名) 尾張國有松より出づる絞纈(シボリ)染め。なるみしぼり。
ありまふで[有馬筆](名) 一種の筆、筆毫を筆管より出入するやうに作る、攝津國有馬より出す。
†ありもどく[有戻](他、か四) 世にありて人に逆(サカ)らふ。
(ありや)(感) あれは。
ありやう[有樣](名) ㊀ありさま。樣子。㊁まこと。ありてい。㊂あり得る理由。あるべきはず。
(ありやとりや)(名) あれなるべきものとこれなるべきものとを顚倒すること。あべこべ。はんたい。
――に(副) かれとこれとに。あべこべに。
†ありわたる[在渡](自、ら四) 存在して、年月を經つゝあり。
†ありわぶ[在詫](自、は上二) 居兼ぬ。
(ありりんさん)[亞燐酸](名) 【化】無水亞燐酸の水と反應して生ずる無色の結晶體、酸素を吸收して燐酸に變じ易し。
†ある[生](自、ら下二) うまる。
あ・る[荒](自、ら下二) ㊀あらくなり騷ぐ。烈しくなる。(暴)。㊁荒廢す。破れすたる。㊂手足にあぶら乏しくなる。
ある―[或](接頭) 他語に冠し確定せざるものゝ意を表はす。「―人」「―日」「―所」。

あるかぎり[有限](名、副) あるだけ。
アルカリ[亞爾加里=Alkali](名) 【化】鹽基の中にて水に溶解するもの、水酸化「ナトリウム」・水酸化「カリウム」の如し。――きんぞく[―金屬=Alkalimetal](名) 【化】著しく鹽基性を有する金屬、「ナトリウム」「カリウム」「リチウム」「セシウム」「ルビヂウム」等これなり、其水酸化物は最も強き鹽基酸類に作用して、安定なる鹽類を作る。――せいはんおう[―性反應=Alkaline reaction](名) 【化】赤色「リトマス」溶液又はこれに類似せる植物色素を靑色に變ずる作用。――どきんぞく[―土金屬=Alkaline earth metal](名) 【化】「カリウム」又は「アルミニウム」に類似する金屬、多くは土砂中に存在す、「カルシウム」「ストロンシウム」「バリウム」これなり。
アルカロイド[Alkalodi](名) 【化】植物中に存在する鹽基性化合物、其種類甚だ多し、何れも窒素を含み、多くは烈しき毒物にして、又、有用なる藥劑なり。
あるき[歩](名) あゆみ。ありき。――ぞめ[歩初](名) ありきぞめ。
アルキメデス の げんり[―の原理=Archimedean principle] 【理】物體が流體中にありて、受くる壓力に關する原理、「ギリシア」人「アルキメデス」氏の發見にかゝる、物體が流體中にあるときは、其物體と等容積の流體の重量に等しき壓力を以て、押しあげられてあるものといふこと。
あるく[歩](自、か四) あゆむ。ありく。
アルコホル[亞爾箇保兒=Alcohol](名) 酒類の主成分をなす無色の液體、一種の芳香と甘味とを有す、點火し易く、靑色の焰を擧げて燃ゆ、種々の有機物を溶解するを以て、溶劑として化學上・醫學上・工業上等に廣く用ひらる、これを製するには、馬鈴薯又は穀類に、發芽したる大麥を加へて糖類に變じ、酵母を加へ溫所に放置し、氣體の發生するに至り、其液を蒸溜するなり、水を吸收し易きを以て、無水のものは得難し。(酒精)。――ランプ[Alcohol-lamp](名) 油の代りに「アルコホル」を用ふる「ランプ」、理化學の實驗に用ふるもの。
アルゴン[Argon](名) 大氣中に僅かに存する氣體、無色無味にして他の物質と化合し難し、熱したる銅により、空氣の酸素を除きて後、熱したる「マグネシウム」により窒素を除けば、これを集むることを得。
あるじ[主](名) ㊀一家の主人。ぬし。ていしゆ。㊁主人となりて、人を饗應すること。(馳走)。
†――まうけ[饗設](名) 馳走の支度。
アルデヒド[Aldehyd](名) 【化】揮發し易く刺戟性の臭氣を有する液體、「アルコホル」の不充分なる酸化により生ず、還元性甚だ強し。
あるは[或](副) あるひは。
アルハベット[Alphabet](名) 歐米各國に使用せらるゝ寫音文字。西洋字母。
あるひは[或](副) ㊀これとかれと二つ以上のものを取り合はせていふときに用ふる語。または。㊁もしくは。おそらくは。「―然らん」。
アルヘイ[有平](名) 「アルヘイたう」の略言。――ざいく[有平細工](名) 「アルヘイ」にて色々の形に拵へたる菓子。――たう[有平糖](名) 「アルヘイル」(氷絲糖)。
アルヘイル(名) 《葡萄牙語 Alfeloa より出づ》砂糖を煎じつめ練りて、飴のやうに固めたる物。
アルミ[Aluminium bronze](名) 銅九と「アルミニウム」一とより成る合金、質堅く空氣中にて變色せず、金色の光澤を放つ、裝飾品に用ひらる。――どう[―銅](名) 「アルミ」に同じ。
アルミニウム[Aluminium](名) 靑白色の金屬、天然には長石・雲母・鋼玉等となりて存在し、又、粘土の主成分を成す、質堅くして強く、延性・展性に富み、又、輕くして空氣中にて光澤を失はず、器物を製するに用ひらる。
あれ[阿禮](名) 四月、加茂の祭りに、色々の布を榊に垂れ飾りたるもの。
あれ[荒](名) 風雨のあらきこと。あらし。暴風雨。
†あれ[吾](代) われ。
あれ[彼](代) あの。かれ。
あれ(感) 驚愕の意を表する發聲。あゝ。
(あれい)[啞鈴](名) 「ダンベル」に同じ。
あれこれ[彼是](代) かれこれ。いろいろ。
あれた[荒田](名) 荒れてある田。
あれち[荒地](名) 荒れたるまゝに、手を入れざる土地。
†あれつぐ[生繼](自、か四) うまれて受け繼ぐ。
あれの[荒野](名) 荒れたる野。
あれのみ[荒飲](名) 酒を暴飲すること。
あれば[荒場](名) 芝居にて、たてのある場所、即ち、修羅場。
†あれはたれどき(名) 明けがた又は夕暮などの薄暗くして人形の定かならぬ時。ほのぐらあけ。かはたれどき。
あれはつ[荒果](自、た下二) 殘らず荒る。
(あれはてる)[荒果](自) 「あれはつ」の訛。
あれひき[阿禮引](名) 加茂の祭日に、阿禮の榊の綱を引くこと。

†あれ-まーす [生在](自、さ四)「うまる」の敬語。「を經る。
あれ-ゆ-く [荒行](自、か四) 荒れて、年月
†あれる [荒](自)「あるる」の訛。
†あろじ [主](名)「あるじ」の古言。
あわ [泡](名) ❶空氣の氣體を包含して、丸くふくれたるもの。❷液汁中の空泡。❸口の端に噴くつばきのたま。(沫)。——をくふ あわてふためく。——をふく 不意を打たれて驚愕す。
†あわ [沫緒](名)「あわを」の略言。
あわ-たけ [泡茸](名)【植】きのこの一種、おもに秋田の、霜降色にて裏にひだなし。
あわただ-し [慌](形、二) あわてたる様なり。騒ぎて擾動きわがし。
あわ-つ [周章](自、た下二) あわてふためく。つつむたくさわぐ。驚愕す。「らぎる人。
あわて-もの [周章者](名) 驚きやすき人。沈着な
†あわてる [周章](自)「あわつ」の訛。
あわ-もり [泡盛](名) 燒酎に類似する一種の酒、原料は以前專ら粟を用ひたれど、近時多く唐米を用ふ、醱酵の後、これを蒸餾し、其中に取りたる粟を擣りたる布袋を入れおく、やがて粟の色素及脂油析出して泡を生ずるより此名あり、酒味強烈なり、もとは琉球より產出す。——さう [泡盛草](名)【植】虎耳草(ゆきのした)科に屬する草本、葉は深綠色にして光澤あり、花は淡紅白色にして春夏の間に開く、花瓣は倒卵形或は箆形をなす、觀賞用として栽培す。——しょうま [泡盛升麻](名)【植】「あはもりさう」に同じ。——だい [泡盛鯛](名) [illegible] 卵の蛋白の[illegible] 鯛の身に [illegible]

あわ-ゆき [泡雪](名) ❶春季降る雪、殆んど泡の如く消え易き故にいふ。❷鯛の異の一種、水分多くして味甘美なり。❸一種の菓子、卵の蛋白の部分を原料として製造したるもの。——どうふ [泡雪豆腐](名) 一種の豆腐、質至つて柔し。
†あわわ (名) 子供の遊戯、口を開き掌をあてて、叩きながら聲を出すこと。
†あわ-を [沫緒](名) 紐の結び方、「玉の緒を一によりて、結べれば」。
あゐ [藍](名) ❶【植】蓼(たで)科に屬する栽培草本、莖は二三尺にして枝多し、葉は長楕圓形にして互生し、花は夏開き密生して下垂す、花序は比較的短き總狀をなす、藍色染料の原料として著名なる植物なり、種類多く、我國にてもつとも栽培するは蓼藍なりとす。❷一種の染料、藍草の葉を製造したるものにて、製研したるものを藍澱(あゐ)といひ、醱酵せしめたるものを藍蒅(すくも)といひ、春きて固めたるものを藍玉といふ。❸「あゐいろ」の略言。——いろ [藍色](名) 青よりは濃く紺よりは薄き色。あゐにて染めたる色。
あゐ-がへし [藍返](名) 模樣の上を、更に藍にて染めたるもの。
あゐ-がみ [藍紙](名) 染草の汁にて藍いろに染めたる紙。とんがみ。そめがみ。
あゐ-がめ [藍瓶](名) 藍をとかしたる汁を貯へておく瓶。あゐつぼ。
あゐ-け [藍氣](名) 藍色の樣子。——ねずみ [藍氣鼠](名) 染色の名、鼠色に藍色を帶びたるもの。あゐねずみ。あゐねず。
あゐ-とびちゃ [藍鳶茶](名) 染色の名、とびいろ茶色を帶びたる[illegible]もの。

あゐ-ざめ [藍鮫](名)【動】板鰓類中樹口類に屬する魚、皮膚は細小なる砂粒狀の鱗を密生し、背部は藍色にして、腹部に至るに從ひ漸く黃白色となり、腹下に及びては全く白色となる、體長大なるものは一丈許に達す、胎生にして、八九月頃胎兒を產す、我國沿海に多し、皮を劍の柄又は鞘に用ふ。
あゐ-しる [藍汁](名) 藍の染料をとかしたる汁。
あゐ-ずみ [藍墨](名) 藍を固めて造りたるもの。あゐずみ。
あゐ-ずり [藍摺](名) 藍にて模樣を摺りたるもの。又其布。「―のひたゝれに、たてえぼし」。
あゐ-ぞめ [藍染](名) 藍にて染めたるもの。
あゐ-たけ [藍茸](名)【植】きのこの一種、莖の藍色なるより此名あり、上野國の山中に生ず。
あゐ-たで [藍蓼](名)【植】(い)「あゐ」の異名。(ろ)たでの一種、葉楕圓形にしてあゐに似る。
あゐ-だま [藍玉](名) 一種の染料、藍草の葉を舂つきて丸く固めたるもの。
あゐ-つぼ [藍壺](名)「あゐがめ」に同じ。
あゐ-ねずみ [藍鼠](名)「あゐけねずみ」に同じ。
あゐ-ばな [藍花](名) ❶つゆくさの花。❷あゐに生ずる泡。
あゐ-みるちゃ [藍海松茶](名) 染色の名、もえぎ色の濃くして黑みを帶びたるもの。
あゐ-らふ [藍蠟](名) 藍がめの上に浮かべる藍汁の泡を取りて、乾かしたる一種の繪具。
あを [靑](名) ❶七色の一、晴天の日の空の色。❷馬の毛色、「くろ」に同じ。
あを [襖](名) 袍の一種、脇は開き袖はくゝり緒をつけて、[illegible]たるもの。あをし。すあを。
あを— [靑](接頭) 成語に冠していまだ成熟せざ

あを-あかざ [靑藜](名)【植】あかざの紅色ならざるもの。
あを-あらし [靑嵐](名) 靑葉の頃に吹き渡る風。
あを-あを [靑靑](名) 一體に靑き色のさまにいふ語。「にいふ語。
†あを-いき [靑息](名) 苦痛のときに發する氣息。
あを-いろ [靑色](名) ❶あをき色いろ。❷主上の袍(ほう)の麴塵、麴塵(きくぢん)。
あを-うきくさ [靑萍](名)【植】萍の一種、水上に浮生する扁平靑色なる小植物にして、池沼又は水田等に多く繁殖す。「る海面。
あを-うなばら [靑海原](名) あを〳〵と見え渡
あを-うま [靑馬](名) ❶白き馬。❷普通に、黑色の馬。——の-せちゑ [白馬節會](名) 古昔、正月七日、左右の馬寮より二十一匹の白馬を庭中に引き出だし、天皇の御覽に供せし式。
あを-うみ [靑海](名) あをうなばら。(蒼海)。
あを-うめ [靑梅](名) 生にて靑き梅の實。
あを-うり [靑瓜](名)【植】葫蘆科に屬する栽培植物、蔓細多し、果實は長楕圓形にして刺なく、果肉は甘味なし。
あをえ-ぬまさか [靑江下坂](名) 備中國より鍛ひて出だす刀劍の總名。
あを-かすげ [靑粕毛](名) 馬の毛色、かすげの靑ばみたるもの。
あを-かづら [靑葛](名)【植】泡吹科に屬する纏繞草木、綠色の枝を有し、花瓣は黃色にして五個あり、雄蕊五個ありて完全なり、觀賞用として栽培す。「がは。
あを-がは [靑革](名) あをく染めたるなめし

[illegible]【動】「あをがへる」に同じ。
あを-がひ [靑貝](名) 鸚鵡貝・夜光貝等の介殼を用ひて、種々の物象を作り、器物の面に嵌めこめたるもの。——ざいく [靑貝細工](名) 靑貝にて細工したるもの。
あを-かび [靑黴](名)【植】下等菌類の一種、餅及其他の食物等に發生す、全體白色の細き菌絲なれど、頂に綠色の胞子を生じ、其數夥しきが故に、後には全體綠色をなすに至る。
あを-がへる [靑蛙](名)【動】かへるの一種、綠色にして水中に住み、喧しく鳴く。
あを-がみ [靑紙](名) あをき紙。
あを-からかみ [靑唐紙](名) かさねの色目、經うすあをく緯もえぎの表にて、靑き裏のもの。
あを-き [靑木](名)【植】山茱萸科に屬する常綠木、葉は對生し卵形尖頭にして粗なる鋸齒を有す、平滑にして光澤あり、花は雌雄異株にして、枝端に簇り紫暗紫色を呈す、實は長楕圓形にして紅色なり、觀賞用として栽培す。
†あを-ぎた [北風](名) 八月頃の風(畿內・中國など船人の語)。「粉。
†あを-ぎなこ [靑黃粉](名) 靑粉をまぜたる豆
あを-ぎり [靑桐](名)【植】梧桐科に屬する落葉喬木、樹幹直立して高さ三丈許周圍三四尺に及ぶ、樹皮は白色にして纖維強し、葉は闊大にして深き缺刻あり、梢頭に集まり靑き色深綠なり、花は夏日梢頭に簇がり着く、五瓣にして黃白色なり、觀賞用として栽培し、木材は種々の用に供せらる、又、樹皮より纖を採り油を製すべし。(梧桐)。
あを-くさ [靑草](名) あをき草。

あを-くさ-し [靑臭](形、一) ❶靑草などの臭氣あり。❷未熟らし。
あをくさ-ずり [靑草摺](名)「あをずり」に同じ。
あを-くちば [靑朽葉](名) かさねの色目、表は靑く、裏は朽葉色なるもの。
あを-くび [靑頸](名)【動】「まがも」に同じ。
あを-ぐも [靑雲](名) 靑く見ゆる空。靑く見ゆる雲。
あを-ぐろ [靑黑](名) ❶あをばみたる黑色。(黯)。❷かさねの色目、表は濃き靑にして、裏はうすの靑なるもの。
あを-げら (名)【動】啄木鳥の一種、體色は上部濃綠色下部淡綠色にして、眼下に深紅を交へたる斑條あり、頭と頰と尾とは赤く、嘴と足とは黑し。(綠啄木鳥)。
あを-こ [靑粉](名) 古昔は靑海苔の粉をいひ、後には「あをばがらし」の葉を乾かし粉末としたるものをいふ、食物の染料に用ふ。
あを-ごけ [靑苔](名)【植】靑色の苔。
あを-さ (名) ❶【植】綠色藻門に屬する海藻、形扁平にして細き莖を有し、色は鮮綠色なり、葉の廣さは普通二三寸、我國沿海此れを産せざる所なし、食用とすべきも味美ならず。(礒菜、石蓴)。❷【植】「かはあをのり」の一名。❸鰹をぬきたる鰹節。
あを-さぎ [靑鷺](名) ❶【動】鷺の一種、體は灰靑色の部多く頭頸は白く、眼邊に長き黑羽を生じ、所々に濃黑き斑點を帶ぶ、肉は味美なり。みとさぎ。❷馬の毛色、つき毛の靑ばみたるもの。
あを-ざし [靑緡](名) あをぜにて作りたる錢さし、又其錢。
あを-ざし (名) 一種の食品、靑麥を煎りこれを臼

にてひきて、縒の如くにしたるもの。
あを-さば「青鯖」(名)【動】「さば」に同じ。
あを-ざ・む(め、め、む、むる、むれ、めよ)「蒼冷」(自、ま下二) ㊀青く變はる。あをばむ。㊁顔色青くなる。
あを-ざむらひ(イ)「青侍」(名) 年若きさむらひ。
あを-ざめ「青鮫」(名)【動】青ばみたるさめ屬。
〔あを-ざめる(自)「あをざむ」の訛。
あを-さんごじゆ「青珊瑚珠」(名) 緑色の珊瑚。
†あを-し「襖子」(名) 襖(アヲ)に同じ。
あを-し(く、し、き、けれ)「青」(形、一) ㊀色あをなり。㊁未熟なり。
あを-じ「青磁」(名) 青磁(セイジ)に同じ。
あを-じ(名)【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、嘴は圓錐形にして、體色青黄色を帶ぶ、秋の頃、群り來りて囀る、肉食ふべし。あをしとゞ。(蒿雀)。
あを-じし「青兕」(名)【動】羚羊(カモシカ)の一名。
あを-じとど「青鵐」(名)【動】「あをじ」に同じ。
あを-すだれ「青簾」(名) あを竹にてあみたるすだれ。
あを-すぢ「青筋」(名) 皮膚を透して見ゆる靜脈。——を-たつ 怒氣盛んにして、面にあをすぢをあらはすにいふ。
あを-ずみ「青墨」(名) 一種の繪具、藍蠟にて墨の形に製したるもの、磨りて青き汁を出だすに用ふ。
あを-すもも「青李」(名) 紅熟せずして食ふに堪へざる李の實。
あを-ずり「青摺」(名) 祭事に用ふる一種の服、青き色又は藍にて模様を摺りたるもの。(小忌衣)。
あを-せきれい「青鶺鴒」(名)【動】鶺鴒の一種、形小し。
あを-そ「青麻」(名) 麻の粗皮、あさ細などにするもの。
あを-そ-でら [illegible]

あを-た「青田」(名) あを〳〵と見え渡る田。
あを-だ「從與」(名)「あんだ」に同じ。
あを-だいしやう(ダイシヨウ)「青大將」(名)【動】蛇の一種、我國普通見る所のもの、體色は少しく緑色を帶び、長大なるものは六尺餘に達す、害をなさず、人家に入りて鼠などを捕り食ふ。(黄頷蛇)。
あを-だけ「青竹」(名) ㊀青き竹。㊁笛の異名。「—を、雪のうへ入ふきたて〳〵」。
あを-ぢく「青軸」(名)【植】梅の變種、萼は緑色、嫩枝もまた緑色にして、花の色は白し。
あを-・つ(た、ち、つ、つ、て、て)「媚」(自、た四) あをる。
あを-つづら「青葛」(名)【植】「あをかづら」の一名。
あを-と「青砥」(名) 砥石の一種、色青くして質緻密なるもの。
あを-とかげ「青石龍子」(名)【動】石龍子(トカゲ)の一種、色青し。
あを-どさ「青土佐」(名) 土佐國より出だす一種の紙、厚くして紺色なるもの。こんどさ。
あを-とんぼ「青蜻蛉」(名)【動】蜻蛉の一種、色青し。
あを-な「青菜」(名) ㊀野菜の總名。菘菁。㊁【植】「すずな」の一名。
あを-なし「青梨」(名)【植】梨の一種、果實の皮青くして早く熟す。
あを-なみ「青波」(名) 青々と見ゆる波。(碧浪)。
あを-なめし「青革」(名) 青く染めたるなめし革。
あを-に「青丹」(名) かされの色目、表裏共に青に黄を帶ぶるもの。
†あを-に「青土」(名)【鑛】「いはろくしやう」の一名。
†あを-にさい「青二才」(名) 年若き男を卑しめていふ語。(乳臭兒)。
あを-にび「青鈍」(名) 青ばみたるはなだ色。
あを-にぶ「青鈍」(名)「あをにび」に同じ。

あを-にようばう(ニヨウボウ)「青女房」(名) とし若く未だ物事に慣れざる女房。
†あを-に-よし「青丹吉」(枕)「なら」に冠らする詞。
あを-ね-かづら(名)【植】水龍科に屬する羊齒植物、古木又は危岩に寄生す、常緑なり、根・莖互に交錯して塊をなし、或は間々して枝を分つ、葉は細長にして長き葉柄を具す。(水龍骨)。
あを-のき「仰」(名) あをのくこと。
あを-の・く(か、き、く、く、け、け)「仰」(自、か四) あをむく。
あを-の・く(け、け、く、くる、くれ、けよ)「仰」(他、か下二) あをむけにす。あをのける。
あを-のけ「仰」(名) あをのくこと。
あを-のり「青海苔」(名)【植】緑色藻門に屬する淡藻、形狀絲の如く細管狀をなし圓盤狀の根を有す、長さ二三寸より一尺に及ぶ、生處によりて色を異にすれど通常鮮緑色なり、外洋又は内海にも產すれど、河口に產するもの上品なり、食用に供せらる。(石髪・乾苔・海苔菜)。
あを-ば「青葉」(名) ㊀樹木の青き葉。㊁樹木の嫩き葉。わかば。㊂わかばのあを〳〵としたる頃、新緑。
あを-ば「青羽」(名) 鳥の羽の青きもの。
あを-はだ「青肌」(名) ㊀毛を剃りたるあとの青々としたるはだ。㊁【植】冬青(ソヨゴ)科に屬する落葉喬木、山中に生ず、幹の高さ三四丈圍り三尺餘に及ぶ、外皮は平滑にして灰白色に緑色を帶ぶ、葉は互生して楕圓形をなし、葉緣に鋸齒ありて長き葉柄を有す、六七月頃、葉腋に小白花を綴る、雌雄異株にして、果實は球形をなす、木材は種々の用に供せらる。いぬけやき。
あを-ばた「青畑」(名)【植】「あをまめ」に同じ。

[illegible] 屬する蟲、全體黑色なり、腹柄細長にして二節より成り、第三腹節は赤色なり。
あを-ばと「青鳩」(名)【動】鳩の一種、きじばとより少しく大きく、體の上部は濃緑色なれど、頭上及下部は黄緑色にして、風切羽及尾の外側は黑く、脚赤し。
あを-ばな「青鼻」(名) 子供などの垂る、青き鼻みづ。
あを-ばな「青花」(名)【植】(い)鴨跖草(ツユクサ)科に屬する草本、葉は長楕圓卵狀にして通常鈍頭を有し、佛談狀の苞は殆ど平滑なり、花は通常青色を呈す。つゆくさ。(ろ)「うつしばな」の一名。——いんこ「青花鸚哥」(名)【動】「いんこ」の一種。
あを-ばへ(エ)「青蠅」(名)【動】蠅の一種、大形にして、色青黑く聲高し。
あを-はんめう(ハンミヨウ)「青斑猫」(名)【動】芫菁科に屬する小形の甲蟲、體色濃緑にして觸角黑し、藥用に供せらる。
あを-び「青火」(名) あをび。燐火。
†あを-ひとぐさ「青人草」(名) (人の年々生れ出づるを草の生え茂るにたとへていふ)蒼生。庶民。たみ。
あを-び・る(れ、れ、る、るる、るれ、れよ)「青」(自、ら下二) 青くなる。「青ざむ。」
あを-びれ「青」(名) 青びれたること。
†あを-ふしがき「青柴垣」(名) 青葉の柴にて編みたる垣根。
あを-ぶち「青淵」(名) 水深くして青くみゆる淵。
〔あを-べうし(ヒヨウシ)「青表紙」(名) 論語・孟子など經書の稱。
〔あを-べうたん(ヒヨウタン)「青瓢箪」人の病みて顔色の青きをあざけりていふ語。

あを-まめ「青豆」(名)【植】大豆の一種、緑色に微暗を帶びたるもの。あをはだ。あをばた。
あを-み「青」(名) あをき度合ひ。あをき色合ひ。
あを-み「青味」(名) 吸物又は炙物などに添へて、形容を點綴する野菜もの。
あを-み「青海」(名) あをうなばら。
あを-み-い・づ(で、で、づ、づる、づれ、でよ)「青出」(自、た下二) 草など青々と生ず。
あを-みかん「青蜜柑」(名)【植】橘の一種、果實は皮青きときより食ふべし。
あを-みどり「青緑」(名) ㊀濃き緑色。㊁【植】接合藻門に屬する單細胞植物、一列の多細胞より成りたる纖維狀のものにして、螺旋狀の葉緑體を有し、淡水に生殖す。あをみどろ。
あを-みどろ(名)【植】「あをみどり」に同じ。
†あを-みなづき「青水無月」(名) 六月の異名。
あを-みやうばん(ミヨウバン)「青明礬」(名)【鑛】ろうは。綠礬。
あを-み-わた・る(ら、り、る、る、れ、れ)「青亘」(自、ら四) 草木など、一般に青々と見えわたる。
あを-・む(ま、み、む、む、め、め)「青」(自、ま四) 青くなる。
あを-・む(め、め、む、むる、むれ、めよ)「青」(他、ま下二) 青くす。
あを-むき「仰」(名) あをむくこと。
あを-む・く(か、き、く、く、け、け)「仰」(自、か四) 上へ向く。あふむく。
あを-む・く(け、け、く、くる、くれ、けよ)「仰」(他、か下二) 上へ向かす。
あを-むけ「仰」(名) あをむくること。上にむかしむること。
〔あを-むける「仰」(他)「あをむく」の訛。
あを-むし「青蟲」(名)【動】蝶蛾類の仔蟲の菜の葉などにつくもの、總稱。(螟蛉)。
あを-め-じま(オウメイ)「青梅縞」(名) 武藏國青梅より產出する織物。

あを-め-わた(オウメイ)「青梅綿」(名) 上等なる入れ綿。
あを-もち「青餅」(名) くさもち。
あを-もの「青物」(名) 野菜の總名。——うり「青物賣」(名) 青物を賣り歩く人。八百屋。
あを-もみぢ「青紅葉」(名) ㊀かされの色目、表は青く裏は朽葉なるもの。㊁未だ色づかぬ紅葉。
あを-やか「青」(名) 青々としたるさまにいふ語。(蒼然)。
あを-やぎ「青柳」(名) 青々としたる柳。——の(枕)「絲」「かづら」に冠らする詞。「—葛木山に、たなびける」。
あを-やなぎ「青柳」(名)「あをやぎ」に同じ。
あを-やま「青山」(名) 樹木の青々としげれる山。
あを-やまぶき「青山吹」(名) かされの色目、表裏共に黄なるもの。
あを-ゐ「青藺」(名)【植】「ふとゐ」に同じ。(莞)。
あを-ゑ「青繪」(名) ごすやきの陶器にある繪。
あを-んぞ(名) 青々として血の氣なき面相。
(あん「案」(名) ㊀つくゑ。だい。㊁未だ決行するに至らざるも、已に成立したる考慮。かんがへ。あゆかう。㊂未だ實施するに至らざるも、已に成立したる文書。あたがき。さうかう。
(アン)「餡」(名) (字の宋音)㊀一種の食品、小豆を煮て擂り潰し、これに砂糖を混ぜて煮たるもの。㊁一種の食品、葛粉に酒・醬油を和し煮て粘(ネバ)き汁となし、食物にかくるもの。くずだまり。
(あん「庵」(名) いほ。いほり。
(—あん「庵」(接尾) 人又は家の雅號に用ふる語。
あん-あん-り-に「暗暗裏」(副) 人に知らせずに。又、とはまはしに。

(あん-い)[安意](名) あんきん。

(あん-いつ)[安佚](名) 骨ををらずあそびくらすこと。(安樂)。

(アン-か)[行火](名) 「アンくわ」の訛。

(あん-が)[晏駕](名) 天子の崩御を申し奉る語。

(あん-かう)[安康](名) 異變なきこと。安らか。

(あん-かう)[鮟鱇](名) 【動】硬鱗類中あんかう科に屬する魚、頭部扁平にして裸皮なり、刺多し、眼は上面に在りて口は甚だ廣く、體色は背部淡褐にして腹部較や淡し、性鈍愉にして游泳拙劣、徐々に匍匐す、東北諸國の海に多く産す。

(あん-がう)[暗號](名) あてう。あひことば。かくしことば。――でんしん[暗號電信](名) 隱語又は符牒語を以て記載したる電信。

アン-かけ[餡掛](名) 食品に、くずだまりをかくること。――うどん[餡掛饂飩](名) くずだまりを掛けたるうどん。――どうふ[餡掛豆腐](名) くずだまりを掛けたる豆腐。

(あん-がふ)[暗合](名) 期せずして物事の相同じきこと。互に相知らずして物事一致すること。(偶中)。

(あん-かん)[安閑](名) 一泛然として居ること。二無事にくらすこと。身心やすらけきこと。

(あん-き)[安危](名) 危きと安きと。「國家の―」。

(あん-き)[諳記](名) 一そらんずること。そらおぼえ。きおく。二【心】一旦經驗したる寫象が、時を經て、器械的に再び心意に現出すること。

アン-ギャ[行脚](名) (字の宋音) 一諸國を巡りありく僧。二轉じて、車馬によらず徒歩遊歷すること。

(あん-きよ)[暗渠](名) 停滯水を排除するために、地下に設けたる水路。

(あん-ぐ)[…](名) …くおろかなること。

(アン-ぐう)[行宮](名) (「アン」は、字の宋音)天子のかりみや。あんざい。離宮。

(あんぐり)(名) 茫然自失して、覺えず口をひらくさまにいふ語。あんごり。

(アン-くわ)[行火](名) (「アン」は字の宋音) 火を入れて手足などを暖むる具。(脚爐)。

(あん-くわい)[暗晦](名) 一くらきこと。やみ。くらがり。二かくるゝこと。くらますこと。

(あん-ぐわい)[案外](名) 思の外。ぞんぐわい。意外。

(あん-くん)[暗君](名) おろかなるくんしゆ。

(あん-げら)(名) 惘然自失のさまにいふ語。

(あん-けん)[按驗](名) とりしらべ。ぎんみ。

(あん-けん-さつ)[暗劍殺](名) 九星の方位の一、方位は一定せずして、中宮に居る九星の異なるに從ひて變ず、最も凶なる方位にして、これを犯せば、多く生命を喪失する事に遭遇すといふ。

(あん-ご)[安居](名) 僧侶の、夏時に遊行を息み、家に籠り居て靜かに業を修すること。

(あん-こく)[暗黑](名) 一くらがり。やみ。二精神上若しくは生活上に、惡德又は惡德のおほはれあること。――じだい[暗黑時代](名) 世態の混亂せる時代。文物道德の墮落腐敗せる時代。罪惡又は戰爭の多き時代。――めん[暗黑面](名) 罪惡又は惡德の存在せる方面。

(あんごり)(名) 「あんぐり」に同じ。

アン-ころ[餡轉](名) 「あんころもち」の略言。――ばし-もち[餡轉餅](名) あんころもち。――もち[餡轉餅](名) 小片の餅に餡をまぶせたるもの。

(あん-ざ)[安坐](名) 一安かに坐りたること。二あぐらをかくこと。

(アン-ざい)[行在](名) (「アン」は字の宋音) 巡幸のときなどの假り宮。あんぐう、あんざいしよ。――しよ[行在所](名) 前條に同じ。

(あん-さつ)[暗殺](名) 人の不意に乘じて、これを殺すこと。やみうち。だましうち。

(あん-さつ)[按察](名) 吟味、取り調べ。――し[按察使](名) 「あぜち」に同じ。

(あん-ざん)[暗算](名) 心のうちにてかずをつもること。めのこざん。むなざん。目算。

(あん-ざん)[安産](名) 子を安く産むこと。(平産)。

(アンざん-がん)[安山岩](名) 【地】(「アンデス」山系に發見せる火山岩の義)火山岩の一種、火山の熔岩の斜長石・角閃石・輝石の主たるものが、内部にて固結せるもの。(富士山岩)。

(あん-ざん-し)[案山子](名) かゝし。

(あん-ざん-じゆ)[安産樹](名) 【植】十字花科に屬する熱帶植物、高さ六七寸、薺形よめなに似る。

(あん-じ)[暗示](名) 理由又は意旨を、明瞭に顯示せず擧動・容貌等によりてこれを他人に傳へ、他人をして、自發的に其意想に影響を生ぜしむること。或刺戟のため自己の思想上に、何等かの注意を喚び起すこと。

あんじ[案](名) かんがへ。あんばい。

(あん-じち)[庵室](名) 「あんじつ」に同じ。

(あん-じつ)[庵室](名) 小さき假りの住家、おもに僧の住むところ。(草庵)。

(あん-じつ)[暗室](名) 密塞して光線の透入せざるやうつくりたる室。くらきへや。

(あん-しゆ)[庵主](名) あんじゆ。

(あん-じゆ)[庵主](名) いほりのぬし。あんしゆ。

(あん-じゆ)[諳誦](名) 「あんしよう」に同じ。

(あん-しよう)[諳誦](名) 文章文句などを、そらに覺えて讀むこと。

(あ)んじる[案](他) 「あんずる」の訛。

(あん-しん)[安心](名) 一心やすまること。あんど。あんい。二知見若しくは信仰によりて、心の歸向を決定し、これに安住すること。――りつめい[安心立命](名) 信念確立し、身世の安危に處して、何等の疑惑畏怖なきこと。

(あん-じん)[安心](名) 【佛】「あんしん」の(二)に同じ。

(アンズ)[杏子](名) 【植】(字の宋音)薔薇科に屬する木本、葉は稍圓形或は卵形にして尖り、花は淡紅色にして春開く、果實は梅より大きくして味甚だ少しく甘し、核は藥用に供せられ、木材もまた種々の用に供せらる。――うめ[杏子梅](名) 【植】梅の變種、果實は酸味少なし。

アンズ[按司](名) 維新前、琉球の王子に次ぎし高官。

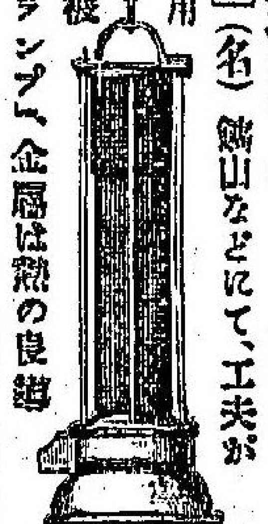
あん-ずる[案ずる](他、さ變) 一かんがふ。おもふ。二心配す。きあんにきづむ。

(あん-せう)[暗礁](名) 海波にかくれてある岩石、航海上危險なるもの。

(あん-せき)[暗射](名) 物を見ずにいひあつること。

あん-せん[暗線](名) 【理】「スペクトル」中に現はるゝ暗黑なる線、白光が或液體若しくは氣體を通過するとき、特種の色の光これに吸收せらるゝによりて生ず、日光の「スペクトル」には夥多の暗線あり。

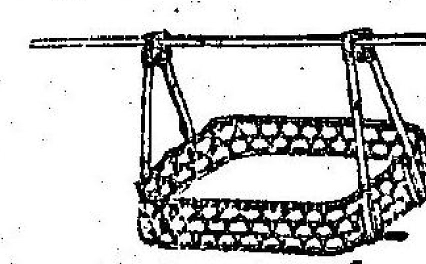
(あん-ぜん)[安全](名) 恙なきこと、安きこと。――とう[安全燈](名) 鑛山などにて、工夫が坑中を照らすに用ふる燈、即ち、金網を以て被ひたる提げ「ランプ」、金屬は熱の良導體なるを以て、これを熱すれば忽ち其熱を散せしめ、反對側に熱氣を及ぼさしめざる故に、此燈を提げて坑中に入るときは、點火し易き瓦斯ありとも、内部の火氣外部の瓦斯に移らず、たゞ内部に溜入せる瓦斯のみ點火するを以て、直ちに危險を知りて通知することを得。――べん[安全瓣](名) 汽罐などに設けたる蒸汽排出口、汽罐の破裂する虞を防ぐために、蒸汽が規定以上の壓力を生ずるときは、此排出口より脫出するを得しむる裝置なり。



[あんぜんとう]

(あん-そく)[安息](名) やすむこと。――かう[安息香](名) 一【植】齊墩果(エゴノキ)科に屬する喬木、樹皮は茶褐色、葉は長形尖頭、花は小さく實は圓し、「マライ」諸島に産する熱帶植物なり。二一種の藥品、安息香樹の樹皮を切傷し流出する液を凝結せしめたる香油質の樹脂にして、特異の芳香を有す。――さん[安息酸](名) 【化】種々の樹脂殊に安息香を徐熱するとき昇華する白色狀の結晶體、これを熱せば蒸汽を發生し、咽喉を刺激し咳を起さしむ、醫藥に用ふ。――にち[安息日](名) 基督教徒が、聖日として俗事を廢し宗教的儀式を行ふ日、多くは日曜日を以てこれに充つれど、中には土曜日を以てするもあり。

あん-だ(名) 竹にて造りたる輿の一種。「あみいた」の訛。(箯輿)。



[あんだ]

(あん-たい)[暗體](名) 【理】自ら光りを放たざる物體の稱。

(あん-たい)[安泰](名) あんぜん。やすらか。

(アン-だう)[行堂](名) (「アン」は字の宋音)寺の建物、本堂の次ぎの室。

(アンダ-ヱ)[安陀會](名) 梵語、中宿衣又は下衣と譯す、三衣(エサン)の一、五條の袈裟の稱。

(あん-ち)[安置](名) 一すゑおくこと。据うること。二佛像などをまつり納むること。

アンチモニー[安質母尼=Antimony](名) 脆くして白色の光澤を有する金屬、天然には硫安礦として産す、鉛との合金は活字を作るに用ひらる。

アンチモン[Antimony](名) 「アンチモニー」に同じ。

(あん-ぢゆう)[安住](名) 安らかに住まふこと。又、安んじとゞまること。

(あん-ぢゆう)[庵住](名) 庵に住むこと。又、其人。

(あん-てい)[安定](名) 一おちつくこと。やすらか。二やすんずること。三物質の分解容易ならざること。

(アン-でん)[行殿](名) (「アン」は字の宋音) あんぐう。かりみや。

(あん-ど)[安堵](名) 一居處に安んずること。二知行の地を賜はること。「本領―」。三安心すること。

(アン-ドウ)[行燈](名) (字の宋音)燈火をとぼして掲ぐる具。アンドン。

アンドン[行燈](名) 「アンドウ」に同じ。

あんな(副) あのやうな。

(あん-ない)[案内](名) 一實情。内實。二嚮導。みちびき。てびき。三しらせ。通知。四「留書」「先例書」。――しや[案内者](名) みちびきをする人。てびき。(先導者)。――じやう[案内狀](名) 事を知らする狀、通報書。招待狀。

(あん-なか)[足半](名) 一種の草履。あしなか。

(アン-ニン)[杏仁](名) (字の宋音)杏の核。

(あん-ねい)[安寧](名) 一やすらかなること。事變なきこと。平和。二社會の人々が共同生存に關する條件を守りて相犯さゞること、即ち、社會の秩序正しく、生命財産等の安全なる狀態をいふ。三【倫】倫理學者の一派にては、道德の最高目的たる至善にかな

る主觀・客觀の狀態をいふ。
(あん・ねっせん[暗熱線](名)【理】赤外線に同じ。
(あん・ばい[鹽梅](名)❶五味を調和すること。❷ほど良く物をならぶること。❸ぐあひ。程度。❹消息。「―がわるい」。――ず[鹽梅酢](名) さんばいず。
あん・ばこ[暗箱](名) 寫眞器械の一部分、内部を黑く塗り、側壁は皮或は布にて伸縮するやう作る。これを蛇腹といふ、前壁に「レンズ」を取りつけ後壁に磨硝子及取枠(トリワク)をはめ得るもの。
(あん・ばふ[罨法](名) 身體の患部を溫め又は冷やす治療法。
(あん・ぷく[按腹](名) 腹に按摩を施すこと、筋肉をもみやはらぐるのみならず、更に内部の治療にも及ぼすものとす。
(あん・ぴ[安否](名) 安らかなると否ざると。
(あん・ぷ[安否](名)「あんぴ」に同じ。
(あんぶん・ぴれい[按分比例](名)【數】比例分配に同じ。
アンペーア[Ampere](名)【理】電流の強さの單位、一秒につき一「クーロン」の電氣の量を送る電流。
――の きそく[―の規則]=Ampère's law【理】電流の磁氣に作用する方向を定むる規則、人若し磁石に而し電流に沿ひて游泳するとせば電流の方向は、即ち足部より頭部に向ひ、磁石の北極は、其人の左手の方に偏すといふこと。
アンペラ(名)❶【植】莎草科に屬する多年生の草本、莖の高さ一尺五寸乃至三尺に達す、節なくして直立す、印度諸島等に產す。❷一種の筵、「アンペラ」草の莖にて編みたるもの。
あん・ぽう(名) 羅紗の一種、のりもの。
あん・たん[案本丹](名)❶【動】「かさご」の類。❷語をのゝしりていふ語。

(あん・ま[按摩](名)❶一種の醫術、身體を或は敲打し或は撫摩し、器械的方法によりて筋肉の緩急を調へ、血液の循環を助けなどすること、もみれうぢ。あんまとり。❷按摩を業とする者が、多く盲者なるより、轉じて、盲者の稱、めくら。――とり[按摩取](名) 按摩をとること、又、按摩の業を行ふ人。
(あん・まり[餘](副)「あまり」の訛。
(あん・みん[安眠](名) こゝろやすらかにねむること、うまい、やすい。――ばうがい[安眠妨害](名)【法】夜深けて喧擾をほしいまゝにし、自然に他の安眠をさまたぐること。
(あん・めい[安命](名) 勝のうらなひの一法。
(あん・めい[闇冥](名) くらがり、やみ。
アン・もち[餡餅](名) あんをつけたる餅。又、あんをつゝみたる餅。
アンモニア[諳謨尼亞=Ammonia](名)【化】特種の刺戟性の臭氣を有する無色の氣體、鹽化アンモニウムに、二倍の生石灰を加へて熱すれば發生す、十分の酸素を得て燃燒し、よく水に溶解す。――すゐ[―水=Liquid ammonia]「アンモニア」の水溶液、「アルカリ」性强く、醫藥及化學上に多く使用せらる。
アンモニウム[Ammonium](名)【化】窒素及水素より成る一個根、一價の金屬根と同じく種々の酸根と化合して鹽類を生ず、鹽化アンモニウム、硫酸アンモニウムの如し。
(あん・もん[案文](名) ゑがきの文書。
(あん・や[暗夜](名) やみよ、くらきよ、やみの夜。
(あん・やう・じやうど[安養淨土](名)【佛】極樂淨土に同じ。
(あん・らく[安樂](名) こゝろ安くして樂しきこと。

――イス[安樂椅子](名) 一種の椅子、普通のものよりは大形にして、よりかゝりて前後に動くことを得べき裝置のもの。――じやうど[安樂淨土](名)【佛】極樂淨土に同じ。
(あん・をん[安穩](名) 安く穩かなること、無事。

い

い 口を扁平に開き、舌の前部を高めて發する母音。五十音圖にて、安行第二に位し、伊列の綫・志・知・耶・比・美・以・利・井の韻(イン)となる。
い[膽](名) 膽囊(タンノウ)に同じ。
††い(名) 蜘蛛の巣、「蜘蛛の―かきたるに」。
(い[意](名)❶心に好むところ。心に望むところ。こゝろばせ。❷おもひ。おもはく。かんがへ。❸わけ、いみ、わけ。❹私慾、私心。❺【心】模擬又は決行する心的作用。
(い[醫](名)❶疾病を治療すること。❷病を治療することを業とする人、いしや、くすし。
(い[異](名) ことなること。ふしぎ。「―な事」。
(い[移](名) 官府又は公共の團體より發する公文書、即ち、廻章又は照會狀などをいふ。いぶみ。
††い[五](數) いつ、いつつ。
††い(數) 五十、いそ、「五十日(イカ)」「五十鈴(イスズ)」。
い―(接頭) 語調を整ふるために用ふ。「―向ふ」。
††―い(接尾) 多く人名の下に添へ用ふ。「朝臣麿い」など。
い・あ・ふ[射合](他、は四) 互に矢を射る。

(いゝ・いゝ[奕奕](名、副) 物事の美しく盛んなるさま。
(いゝ・いゝ[依依](名、副) 木のしげるさま、たをやかなるさま又はものゝあとに殘るさまにいふ語。
(いゝ[怡怡](名、副) よろこばしくたのしきさまにいふ語。
††い・い[唯唯](感) 敬意ある應答の聲。
(いいえ[否](感) いや、いや、いな。
(いいぎり(名)【植】「あかきこぼぎ」に同じ。
い・いづ[射出](他、た下二) 矢を射出す。
(いいや[否](感) いや、いゝえ、いな。
(いう[優](名)❶品よきこと、やさしきこと、みやびやか。❷すぐれたること、まさりたること。❸のびやか、ゆるやか。❹やくしや、わざをぎ。
(いう・あい[友愛](名) 朋友又は兄弟間の愛情。
(いう・あく[優渥](名) なさけぶかきこと、めぐみのあつきこと。又、北堅物の深きこと。
(いう・あん[幽闇](名) くらがり、やみ。
(いう・いう[悠悠](名、副)❶いそがざるさま、又はゆるやかなるさまにいふ語。❷時久しきさまにいふ語。❸はるかにしてかぎりなきさまにいふ語。――かんかん[悠悠閑閑](名、副) 物事にいそがず、ゆつたりとしたるさまにいふ語。
(いう・いう[優優](名、副) ゆたかなるさまにいふ語。
(いう・いう[優游](名)「いういう(優優)」に同じ。❶閑暇あるさまにいふ語。――ふだん[優游不斷](名) 因循して決定せざること。

(いう・いとざう[有意故造](名) わたくしありて、わざと構へてなしたること。
(いう・いん[誘引](名) いざなふこと、さそひ。
(いう・いん[誘因](名) 或物事のなりたつやうになる近因。
(いう・う[友于](名) 兄弟なかのむつまじきこと。
(いう・うつ[憂鬱](名) 氣の晴れやらでむすぼるゝこと、きふさぎ。――びやう[憂鬱病](名) 氣のむすぼるゝ病氣の稱にして、「ヒステリー」などにいふ。婦人に多し。
(いう・えい[游泳](名)❶およぎ。すゐれん。「―術」。❷處世のてだて。「官海の―」。
(いう・えき[有益](名) 役に立つこと。利益あること。
(いう・えき[郵驛](名) えきでん、えきつぎ。
(いう・えき[誘掖](名) 人をみちびきたすくること。
(いう・えん[優艶](名) うるはしきこと、つやゝか。
(いう・かい[幽界](名) あの世、よみぢ、めいど。
(いう・かい[誘拐](名) かどはかし。――はん[誘拐犯](名)【法】未成年者を略取し又は誘拐して、之を藏匿し若しくは他人に交付したる罪。
(いう・かう[有效](名) きゝめあること。――すうじ[有效數字](名)【數】一より九までの數字の稱、0と區別するために名づく。
(いう・かく[優角](名)【數】共軛角(キョウヤクカク)の中の大なるもの。
(いう・がく[遊學](名) 遠方に行きて、修業すること。――せい[遊學生](名) いうがくする書生。
(いう・かしようけん[有價證券](名) 權利の利用に就き、證券の占有を必要とする證券、時價に

より授受せらるゝ證券、例せば、手形・公債・株券などの如きもの。
(いう・かぶつ[有價物](名) 金錢上の價格を有する物件。
(いう・き[有機](名) 生活機能を具備し、生活力を有するものなること、内部より發展して、生活の目的を遂ぐるものなること。
(いう・ぎ[友誼](名) 朋友間の情誼。とものよしみ。
(いう・ぎ[遊戲](名)❶あそびたはむれ。❷一定の方法に從ふ興味ある運動。
(いう・き・がん[有機岩](名)【鑛】有機化合物によりて成りたる岩石、分って動物岩・植物岩とす、介殼の化石などを動物岩といひ、植物の炭化したるを植物岩といふ。
(いう・き・くわうぶつ[有機礦物](名)【鑛】朽腐したる有機物が地中にて自然の分解により炭化したる礦物、即ち、石炭・石腦油・琥珀等これなり。
(いう・き・くわがく[有機化學](名)【化】有機化合物につきて研究する科學。
(いう・き・くわがふぶつ[有機化合物](名)【化】炭素を主成分とする化合物、多くは炭素・水素・酸素より成りて窒素を含むもの、又、炭素・水素より成るものも數多あり、以前は、生活體内に存する物質は、生活力の作用によりてのみ生じ、人工にては製すること能はずと信じ、かゝる物質のみを有機化合物と稱したりしが、動物の排出せる尿素が、人工によりて製せらるゝを發見せられし以來、有機・無機の界は自然的に存在せず、たゞ便宜的に設くることとなれり。
(いう・き・こうさい[有期公債](名) 償還の期限を豫定したる公債、永久公債の對。
(いう・き・たい[有機體](名) 有機物の組成體、生

活機能を具備するもの。生活體。有生物。
(いうき-てき)[有機的](形) 有機體の如くに、分子と個體とが、互に關係を有するさまにいふ語。即ち國家・社會等の狀態これなり。
(いうき-とけい)[有期徒刑](名)[法] 十二年以上十五年以下の徒刑。
(いうき-ぶつ)[有機物](名) 生活體の組成分。有機化合物。
(いうきふ-りゐん)[有給吏員](名) 自治體の吏員の給料を受くるもの。
(いうきゆう-けい)[優弓形](名)[數] 優弧(ユウコ)にて圍まれたる弓形。
(いうきよ)[幽居](名) 奥づかなる地のすまひ。
(いうきよう)[遊興](名) 遊び興ずること。
(いうき-りうけい)[有期流刑](名)[法] 十二年以上十五年以下の流刑。
(いうく)[憂懼](名) 憂ひおそるること。
(いうくわん)[遊觀](名) ㊀遊覽。㊁ものみ。
(いうくん)[遊君](名) あそびめ。いうぢよ。
(いうぐん)[遊軍](名) 戰列外にあり時の勢を見て、味方を援助する軍勢。
(いうげ)[遊戲](名) 「いうぎ」に同じ。
(いうけい)[有形](名) 形をそなへたるもの。かたちの見ゆべきもの。無形の對。
(いうげい)[遊藝](名) あそびに屬する藝能。即ち、香茶の湯・歌舞・音樂等。
(いうけい-ざいさん)[有形財産](名)[經] 信用に基く無形財産に對して、貨幣・商品等の如き形體ある財産の稱。有形の富。
(いうけい-しほん)[有形資本](名)[經] 一定の價格を有する資本、即ち、商品・貨幣・土地・建物の如きもの、稱。無形資本の對。

(いうけい-じん)[有形人](名)[法] 自然人の稱。無形人なる法人の對。
(いうげき)[遊擊](名) 豫め攻擊すべき敵を定めずして、臨機應變に攻擊すること。——たい[遊擊隊](名) 遊擊を行ふ部隊。
(いうげん)[幽玄](名) 深くして、容易に探り知るべからざること。「歌は—なるを尚ぶ」。
(いうげん)[有限](名) かぎりあること。——すう[有限數](名)[數] 普通の數の稱。無限大に對していふ。——せきにん[有限責任](名)[法] 會社の債務に對する社員の責任は、其出資額に限るものなること。——ちよくせん[有限直線](名)[數] 兩端の中止したる部分。「もの。
(いうこ)[優弧](名)[數] 共軛弧(キヨウヤクコ)の中大なるもの。
(いうこう)[有功](名) てがらのあること。りえきのあること。——しやうはい[有功賞牌](名) 製造したる物品が、世上に利益を與ふるものと認めたるもの、博覽會などより與ふる賞牌。
(いうこう-せい)[有孔性](名)[理] 物質の有する性質の一、即ち、物質が無數の小孔を有すること。固體液體が氣體を吸收し、或は固體が液體に浸潤する事は、其小孔に進入するが故なり。
(いうこく)[憂國](名) 國家の事を憂慮すること。
(いうこん)[幽魂](名) 死したる人の靈魂。なきたま。
(いうざい)[有罪](名) 罪あること。——はさん[有罪破産](名)[法] 破産宣告を受けたる債務者が、支拂停止又は破産宣告の前後を問はず、不正の義務を負擔し又は財産の隱匿、帳簿の僞造變造等の詐僞行爲ありたる場合の稱。
(いうし)[幽思](名) ふかき思ひ。しづかなる思ひ。

(いうし)[遊子](名) 旅路にあるもの。
(いうし)[有司](名) つかさびと。官吏。役人。
(いうし)[有志](名) 其事に志深きこと。又、志の深き人。——しや[有志者](名) 有志の人。
(いうし)[猶子](名) ㊀兄弟の子。㊁人の子を我が子の如くなしたるもの。義子。「うし。
(いうしやう-けいやく)[有償契約](名)[法] 當事者雙方が利益を受くる契約。「ある物。
(いうしゆ)[遊手](名) 何をなすともなしに、衣食して居ること。又、其人。
(いうしゆ-ぶつ)[有主物](名) 確定せる所有主あるもの。
(いうしよ)[郵書](名) 郵便にて發送する書狀。
(いうしよ)[由緒](名) 傳來のわけ。らいれき。
(いうじよ)[宥恕](名) ㊀寬大に取り扱ふこと。ゆるして責めざること。㊁[法] 減刑の一、犯罪の要件はことごとく具備すれど、犯人の情狀によりて、宥恕して刑罰を減輕すると、法律上の規定に基づくものにして、裁判上の任意のものにあらず、例せば、未成年者の犯罪の如きこれなり。——げんけい[宥恕減輕](名)[法] 「いうぢよ」の㊁に同じ。
(いうしよう-れつぱい)[優勝劣敗](名) まさるものはかちおとるものはまくること。強者榮えて弱者滅すること。身邊の狀況に適したるものは勝を制し、適せざるものは敗を取ること。
(いうしよく)[遊食](名) 「いうえう」に同じ。
(いうしよく)[有職](名) 古實などの事を取り調ぶる學問。いうそく。——か[有職家](名) 古實の事をよく知りたる人。
(いうじん)[友人](名) ともだち。ほういう。
(いうじん)[幽人](名) しづかなる地に世を避け

てすまひする人。
(いうすゐ)[幽邃](名) 景色などの、おくふかくしていとしづかなること。
(いうすゐ-るゐ)[游水類](名)[動] 鳥類の一目。水邊に棲息し、常に水面又は水中に游泳して、魚類を捕へ食ふ。頭短く趾間に蹼膜(ミヅカキ)を有し、步行甚だ拙し、即ち、がん・かも等の類これなり。
(いうせい)[遊星](名)[天] 太陽の周圍を各自の軌道に沿ひて周行する星。其主なるものを太陽よりの距離の順に列擧すれば、水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星これなり。其他火・木二星の間に散在する四百有餘個の小さき遊星あり、これを小遊星といひ、これに對して上に列擧せるを大遊星といふ。遊星は自ら光りを放たず、太陽の光りを受けて輝くものなり。一に行星又は惑星ともいふ。
(いうせい)[有生](名) 生活をたもつこと。
(いうぜい)[肬贅](名) ㊀こぶ。(瘤肉)。㊁むだなもの。(冗物)。
(いうぜい)[遊說](名) 四方に說きまはること。
(いうぜい)[郵稅](名) 「いうびんれう」に同じ。
(いうせい-せいしよく)[有性生殖](名) 雌雄二性の生殖、通常は雌雄の各異なりたる個體によりて、生殖作用をなすを、雌元素(卵)と、雄元素(精子)とが、合一して新しき個體を成すこと。
(いうせい-ぶつ)[有生物](名) 自ら生活をたもつもの、即ち、動植物。
(いうぜん)[悠然](名、副) おちつきていそがざるさまにいふ語。
(いうぜん)[油然](名、副) 雲の湧くさま又はすみ出づるさまにいふ語。
(いうぜん)[友禪](名) 「いうぜんぞめ」の略言。

(いうせん-かぶ)[優先株](名) 一種の優先權ある株式。會社が資本增加の際に發行するもの。
(いうせん-けん)[優先權](名)[法] 其物に對して、後に權利を得たるものに先んじ、且常に普通の債權者に先んじて、權利を實行し得ること。
(いうぜん-ぞめ)[友禪染](名) 染め方の名。地質の緻密なる絹布に、種々の染料を用ひて、人物花鳥等の模樣を鮮明に染め出すものにして、京都祇園町の畫工宮崎友禪の創始にかゝるといふ。古來京都の特占なりしが、近來大阪にて「モスリン」に此染方を應用して、次第に擴大に赴く。
(いうそく)[有職](名) 古實の事を取り調ぶること。又、其よくしりたる人。ものしり。學者。
(いうだ)[遊惰](名) なまけあそぶこと。
(いうたい)[優待](名) 厚く人をもてなすこと。
(いうたい-ぶつ)[有體物](名)[法] 吾人の感官に觸接するものにして、權利の目的となり得べき物。
(いうたい-るゐ)[有袋類](名)[動] 哺乳類中無胎盤類に屬する一目。牝は腹部に一個の囊を有し、幼兒は極めて小さきとき、其囊中に哺育せらる。濠洲に多く產す「カンガルー」は其一例なり。
(いうたう)[遊蕩](名) 遊びに耽(フケ)ること。はうたう。だうらく。「びき。
(いうだう)[誘導](名) いざなひすゝむること。みちびき。
(いうだう)[遊道](名) まじはり。つきあひ。
(いうちやう)[悠長](名) ㊀氣の長きこと。㊁おちつきて物事にあわてざること。
(いうぢよ)[遊女](名) うかれめ。いうくん。あそびめ。女郎。——や[遊女屋](名) 遊女をかゝへおく家。ぢよらうや。(靑樓)。

(いうてい-るゐ)[有蹄類](名)[動] 哺乳類に屬する一目。凡て大形の食草獸にして、四肢は强健に發達し、各肢一二の趾を有するのみ、爪は蹄の如き形をなして全く趾端を包む、これを蹄(ヒヅメ)といふ。馬・牛などの類これなり。
(いうと)[幽都](名) よみぢ。
(いうとう)[優等](名) 他にすぐれたること。拔群。
(いうに)[優](副) ㊀やさしく。品よく。㊁あまるところなく、十分に。
(いうはい-るゐ)[有肺類](名)[動] 軟體動物中腹足類に屬する一目、螺旋殼を有するといへども、時には全く無殼のものもあり、主として陸上或は淡水に產し、肺を以て空氣を呼吸す、雌雄同體なり、蝸牛・なめくぢ等これなり。「比。
(いうひ)[優比](名)[數] 前項が後項より大なる比。
(いうび)[優美](名) 優にうつくしきこと。品よくたかきこと。みやびやか。やさしさ。あいらしさ。
(いうひつ)[右筆](名) 貴人の傍に侍りて、物を書くことを司る書吏。(祐筆)。
(いうび-るゐ)[有尾類](名)[動] 兩生類に屬する一目。生長の後は、大なる尾を有し水中を游泳す、肺呼吸をなし、四肢短小なるにより、陸上にては運動甚だ鈍し、ゐもり・さんせううを等これなり。
(いうびん)[郵便](名) 公共の通信を取り扱ふ業務。信書其他一定の物品を集配遞送するものにして、內國郵便・外國郵便の二種あり。現今の制度にては、遞信省の管理に屬す。——かはせ[郵便爲替](名) 郵便局の爲替事務によりてなす送金の方法。金額は五十圓以下に限られ、通常爲替・小爲替(五圓以下)及電信爲替の三種あり。現金を郵便

局に拂ひ込み、其額に對する爲替證劵を受け取りて先方へ送附す。先方はこれにより、通常爲換及電信爲換は指定の郵便局にて、小爲替は隨處の郵便局にて、證劵引き換へに現金を受け取ることを得。——かはせ-けん[郵便爲替劵](名) 郵便爲替の證劵。現金拂ひ込み人に對して、其爲替取り扱ひの郵便局の渡せるもの。——かはせ-しよう-しよ[郵便爲替證書](名) 郵便爲替劵に同じ。——きよく[郵便局](名) 郵便物の遞送集配及郵便貯金・郵便爲替等をつかさどる局。——きつて[郵便切手](名) 郵稅拂ひ濟みの證として郵便物に貼用するもの。もと郵便印紙と稱せり。——しふはい-にん[郵便集配人](名) 郵便物を各所の郵便函より取りあつめ、又、到達せし郵便物をそれ〳〵へ配達する使丁。——せん[郵便船](名) 郵便物を遞送し、かねて航海中は、船中にて郵便事務を取り扱ふ船。——ちよきん[郵便貯金](名) 郵便局の取り扱ふ預金。——ばこ[郵便函](名) 郵便物を投入するために各處に設けある函。「ポスト」。——ぶつ[郵便物](名) 郵便によりて遞送する信書其他の物品。——ふりかへ-ちよきん[郵便振替貯金](名) 振替貯金に同じ。——れう[郵便料](名) 郵便物の遞送に對する賃錢。

(いう-ふ-かん[有夫姦](名) 夫ある婦人が、夫にあらざる他の男子と姦通すること。

(いう-ぶつ[尤物](名) ㊀すぐれたるもの。㊁美しき婦人。美女。

(いう-へい[幽閉](名) ㊀とぢふさぐこと。㊁おしこめ。

(いう-ほ[遊步](名) そぞろあるき。さんぽ。

(いう-ぼく[遊牧](名) 牧畜を業とし水草を逐ひて居を移すこと。

(いう-む[有無](名) 有ると無きと。「—相通ず」。

(いう-めい[幽冥](名) ㊀かすか。くらがり。ほのかにやみ。㊁よみぢ。(幽界)。

(いう-めい[幽明](名) よみぢとこのよと。

(いう-めい[有名](名) 名の高きこと。なあること。——むじつ[有名無實](名) 名ばかりにて、それに副(ソ)ふ實なきこと。

(いう-めん[宥免](名) 罪咎をなだめゆるすこと。

(いう-や[遊冶](名) あそびにふけり、容貌の姿をつくろひかざること。——らう[遊冶郎](名) 放蕩もの。やさをとこ。だうらくもの。

(いう-よ[有餘](名) あまりあること。

(いう-よ[猶豫](名) ㊀疑惑して決せざること。㊁ためらふこと。時日を延ばすこと。

(いう-よう[有用](名) 役に立つこと。用をなすこと。——かかく[有用價格](名) 【經】其物の價格をこれを得んと欲する人を本として定めたるもの。例せば、藥品の如きもの。

(いう-らく[遊樂](名) 遊びたのしむこと。遊びまはること。(行樂)。

(いう-らん[遊覽](名) 遊びながらの見物。

(いう-り[遊里](名) 遊女の居る土地。いろざと。

(いう-り-くわおよう-すう[有理化乘數](名) 【數】無理式に乘ずるとき、これを有理式となす式。

(いう-り-しき[有理式](名) 【數】根號を含まざる代數式。無理式の對。

(いう-り-すう[有理數](名) 【數】整數又は分數の稱。無理數の對。

(いう-りよ[憂慮](名) くろう。心配。

(いう-りよく[有力](名) 力あること。勢ひあること。

(いう-れい[幽靈](名) ㊀死者の靈。亡魂。㊁死者の姿を現はしたるもの。

(いう-れき[遊歷](名) 諸國をめぐりありくこと。

(いう-れつ[優劣](名) まさるとおとると。

(いう-れふ[遊獵](名) 山林をあそびめぐりて、獵りすること。

(いう-わく[誘惑](名) 惡徳にみちびくこと。惡計におとしいること。いざなひまどはすこと。

(いう-ゐ[有爲](名) 役に立つこと、才能あること。「—の人材」。——の-し[有爲士](名) 役に立つ人。

(いえ[否](感) いいえ。あからず。

(いえる[癒](自) 「いゆ」の訛。

イオン[Ion](名) 【理】電解物の電流によりて解離したる各部分。

いか[烏賊](名) 【動】二鰓類に屬する軟體動物。十腕手を具し、中二本は長し。體軀の側緣は多少扁平に擴張して鰭狀をなす、背部に、海螵蛸(イカノカフ)を藏す。海產なり。

(い-か[衣架](名) いかう。みぞかけ。

(い-か[以下](名) これより下。これから後。

(い-か[醫家](名) いしや。(醫師)。

†い-か[五十日](名) ごじふにち。

いか—[嚴](接頭) 或語に冠して、いかめしき意を現はす語「—ものづくり」。

いが[毬](名) 栗の實の外部を包める殼斗、總苞の成長せしものにして、外面に長刺密生す。(毬殼)。

(い-かい(形) たくさんな。たいそうな。——こと(名) 數多きこと。たくさんなること。

いか-いか-し(形、二) 甚だ嚴し。

(い-かう[衣桁](名) 着物を掛けおく具。みぞかけ。いか。

(い-かう[異香](名) 普通ならぬ好き香氣。

(い-かう[意向](名) こゝろのむかふ所。こゝろばせ。

(い-かう[移項](名) 【數】等式の一邊にある項を、符號を更へて他邊に移すこと。

いか-が[如何](副) どのやうに。どんなに。——は-し[如何](形、二) ㊀覺束なし。疑はし。㊁忌むべし。みぐるし。

いか-き[笊](名) 竹を以てつくりたる籠。

†い-かき[網結](名) 蜘蛛の巣を結ぶこと。

†い-かき[忌垣](名) 「いみがき」に同じ。

い-かく[射掛](他、か下二) 向ひて矢を放つ。

い-かく[沃懸](他、か下二) そゝぎかく。

(い-がく[醫學](名) 醫療の事を研究する科學。

いが-ぐり[毬栗](名) いがに包まれたる栗實。

い-かけ[沃懸](名) 「いかけぢ」の略言。——ぢ[沃懸地](名) 漆塗りの上に、金粉又は銀粉をまきかけたるもの。

い-かけ[鑄掛](名) 銅器・鐵器などのわれめに、まるめなどを鑄解しそゝぎかけて、接(ツ)ぎあはすこと。——し[鑄掛師](名) いかけを職とする人。

(い-か-さま[如何樣](名) 其物らしき形をまたること。にせ。まがひ。「—の品」。

(い-か-さま[如何樣](副) ㊀なるほど。まことに。いかに。㊁どのやうに。いかやうに。

い-か-し[嚴](形、二) ㊀いかめし。嚴重なり。㊁あらし。たけし。㊂はなはだし。ふとし。おほし。

い-か-す[活](他、さ四) ㊀蘇生せしむ。よみかへらす。(起死回生)。㊁助けて生命を全うせしむ。㊂殺さずにおく。㊃活用す。「金をいかしてつかふ」。

い-かだ[筏](名) 竹木をあみて、水上に泛ぶるもの。

い-がた[鑄型](名) 金屬にて器を鑄る模型。多くは土を用ひて、其中に鑄るべき器の形を空虛につくり、これに鎔かしたる金屬をそゝぎて器を作る。

†い-が-たら-め[伊賀專女](名) ㊀【動】狐の異名。㊁媒(ナカダチ)の稱。(伊賀伊勢の方言)。

いかつ-し[嚴](形、二) いかめしくあり。

いかづち[雷](名) なるかみ。かみなり。

いか-で[爭](副) ㊀いかにして。どうして。なんとして。㊁何とかして。どうぞ。なにとぞ。——か[爭](副) いかで。

いかな-いかな(副) どうしてどうして。なんでふ。

いか-なご[如何兒](名) 【動】軟鰭類中いかなご科に屬する小魚。體狹長にして全身粘液を以て被はる。鱗は微少なり。體は稚小なる中は白色なれど、成長すれば淡蒼色となる。我國の近海處せざる所なけれど、殊に西海に多し。

(いかな-こと[如何事](副) どういふ譯で。どういふもので。

いか-に[如何](副) どのやうに。どんなに。どれほど。いかほど。「—ちれとか風のふくらむ」。——ぞ[如何](副) いかにしても。どうしても。——も[如何](副) どうしても。どう考へても。

いか-のぼり[風幟](名) 小兒の玩弄物。竹を骨としこれに紙を張り、絲にてつりを取り、風の勢によりて空中に揚ぐるもの。たこ・いか・はた・たつ等地方によりて樣々の稱呼あり。(凧)。

いが-ばかま[伊賀袴](名) 裾をくゝりたる袴。たちつけ。

いか-ばかり[如何計](副) どのくらゐに。どれほどに。

い-がひ[貽貝](名) 【動】異柱類中いがひ科に屬する貝。介殼は不等にして長き三角形をなし、殼方圓し、外面黑色にして內面は眞珠色を呈す。我國東海・內海・西海等に多く產す。

い-かへ-す[射返](他、さ四) ㊀矢を射かけて、敵を退りぞく。㊁敵より射たる矢を取りて、敵へ射る。

いか-ほど[如何程](副) どのくらゐ。いくばく。どれほど。

いがみ[啀](名) いがむこと。

(いがみ[歪](名) 「ゆがみ」の訛。

いがみ-あひ[啀合](名) いがみあふこと。

いがみ-あ-ふ[啀合](自、は四) ㊀獸互に怒りあふ。㊁人互に言ひ爭ふ。

いが-む[啀](自、ま四) 獸など怒りはゆ。齒をあらはしてたけり向ふ。

(いがむ[歪](自) 「ゆがむ」の訛。

いかめ-し[嚴](形、二) 威ありていかし。おごそかなり。

いが-もち[毬栗餅](名) 糝(シン)に餡を包み、餅米を上面につけて、これを蒸したるもち。

いか-もの[嚴物](名) いかめしき作りの品物。

(いか-もの[僞物](名) にせもの。まがひもの。

(いか-もの-ぐひ[嚴物食](名) 妄りに食ふこと。あらものぐひ。

いか-もの-づくり[嚴物造](名) いかめしきさまの製作。又、其劍。

いか-やう[如何樣](名) いかなる樣。どのやう。

いから-か-す[怒](他、さ四) いからす。

いから-し[嚴](形、二) 極めていかめし。

いから-す[怒](他、さ四) ㊀いからしむ。おこらす。㊁眼に勢を付く。「目を—」。(瞋)。㊂肩を作す。角(カド)を立つ。

いからせる（他）「いからす」の訛。
いかり【怒】（名）いかること。はらだち。――ごゑ【怒聲】（名）はらだちて發する聲。
いかり【錨・碇】（名）一種の船具。船を一所にとゞむるため、綱を付けて水底に沈めおくもの。――づな【碇綱】（名）いかりに付くる綱。いかりなは。――なは【碇繩】（名）錨に付くる繩。――さう【碇草】（名）【植】小蘗科に屬する草。數莖一根より生ず。高さ一尺餘、葉は卵形にして鋸齒を有す。夏時花を莖頭に開く、四瓣にして色は淡紫・淡黃等種々あり。〔錨草〕。
いかる【怒】（自、ら四）❶激して氣あらだつ。いきどほる。はらだつ。❷うらみて心平かならず。❸かど立つ。そびゆ。「肩―」。❹にかどだつ。にらむ。❺勢强く、氣盛んなり。「波―」。❻勢を作す。ふるふ。「いかりて飛ぶ」。
いかる【活】（自、ら四）瀕死にさゝれて、生を保つ（花などにいふ）。
いかるが【斑鳩】（名）【動】燕雀類に屬する鳥。嘴は小にして少しく膨大し、末端のみ角質なり。翼長大にしてよく飛翔し、足は赤色にして短小なり。形狀は普通の鷽に似て大にして、頭部に白色の羽毛を混生す。まめわり。いかるが。まめどり。
いかん【如何】（副）「いかに」の音便。――ぞ【如何】（副）「いかにぞ」の音便。
いき【氣息】（名）動物の呼吸する空氣。又、其呼吸。――きる　あへぐ。――をつく　やすむ。
いき【生】（名）❶いのちあること。❷圍碁にて、一目以上ある石の、如何にしても敵に殺されざるもの。
いき【行】（名）「ゆき」の轉。

いき【意氣】（名）❶きもちやう。きだて。心だて。❷心ひきて居ること。あかぬけして居ること。
いき【依稀】（名）さもにたるさま。はつきりと見分かぬさま。ほのか。
いぎ【異儀】（名）常にかはりたるさまかたち。
いぎ【意義】（名）ことわけ。意味。趣意。
いぎ【異議】（名）他の意見若しくは決定に異なりたる意見若しくは決定。
いきあひ・きやうだい【行合兄弟】（名）母同じければ父異なる兄弟。ゆきあひきやうだい。
いきあふ【行逢】（自、は四）「ゆきあふ」に同じ。
いき・いき【生生】（名）勢盛んにして活動せんとするさまにいふ語。
いき・いづ【息出】（自、だ下二）よみがへる。いきかへる。
いきうす【行失】（自、さ下二）ゆくへ知れずなる。
いきうつし【生寫】（名）❶生きて居るまゝの姿を寫し取ること。（寫生）。❷物の甚しく類似して、見分け難きこと。（酷肖）。
いきうめ【生埋】（名）活きながら人を地中に埋めて殺すこと。
いきかくる【行隱】（自、ら下二）行きて隱る。ゆくへ知れずなる。
いきかけ【行掛】（名）いきついで。いきがけ。
いきかへる【生返】（自、ら四）一旦絶息せるものゝ再び蘇生す。よみがへる。
いきぎも【生膽】（名）生存せるものゝ內臟よりきりとりたる膽。――をぬく　おどろかす。
いきぎれ【息切】（名）呼吸烈しくして、息のつゞかぬこと。あへぎ。

いきごみ【意氣込】（名）いきごむこと。
いきごむ【意氣込】（自、ま四）勢ひをこむ。いきはふ。きばる。
いきざし【息差】（名）いきづかひ。呼吸。
いきさつ（名）ゆきがゝりのわけ。なりゆきの事情。
いきしに【生死】（名）いくこととしぬること。
いきすぎ【行過】（名）❶目的地の外までゆくこと。❷分を過ぎたるわざ。――もの【行過者】（名）いきすぎの行爲をなすもの。
いきすぎる【行過】（自、が上二）❶ゆきすぐ。❷分に超えたる事をなす。
いきすだま【生靈】（名）生存せる人の怨靈が、祟りをなすこと。いきりやう。
いきせい【息精】（名）呼吸と精力と。――はる【息精張】（自、ら四）氣張る。烈しく競ふ。いきごむ。
いきせき【息急】（名）いきせきこむこと、いと急ぐこと。――きる【息急切】（自、ら四）いきせききて急ぐ。
いきたつ【活立】（自、た四）事業など進みて成立す。
いきたなし【寢穢】（形、二）❶容易に目さめず。ねぎたなし。❷ね姿苦し。ねざまあし。
いきだふれ【行斃】（名）傷病又は病氣により、路傍に倒るゝこと。又其人。ゆきだふれ。
いきだはし【喘】（形、二）呼吸烈しく息切す。
いきち【生血】（名）生存せるものゝ體中よりいづる血液。なまち。
いきぢ【意氣地】（名）他に對する面目上、これぞと思ひこみたる念慮。いぢ。

いきちがひ【行違】（名）物事のゆきちがふこと。
いきちがふ【行違】（自、は四）ゆきちがふ。
いきちる【行散】（自、ら四）分れ分れになる。
いきづかひ【息遣】（名）呼吸をなす樣子。
いきづき【息衝】（名）はたらきたるあとにて、休息すること。
いきつく【行着】（自、か四）❶いたる。達す。❷事を繼續する資力盡く。回復の望み絶ゆ。
いきづく【息衝】（自、か四）ながき息をつく。ためいきをつく。
いきつまり【行詰】（名）いきつめ。
いきづまる【息詰】（自、ら四）呼吸をつめる。
いきづまる【行詰】（自、ら四）❶物の終局にまで到達す。❷行くべき道絶ゆ。
いきづめ【行詰】（名）いきつめたること。
いきづら【生面】（名）なまみの顏。
いきづゑ【息杖】（名）肩に物を擔ぐ人の其天秤棒を支へ、物品の重みを防ぎて息をやすむる杖。
いきどころ【行處】（名）行くべき處。
いきどほり【憤】（名）いきどほること。いかり。
いきどほる【憤】（自、ら四）❶心平かならず、なげく。うらむ。❷敵に對するの憤懣起こる。いかる。
いきどほろし【憤】（形、二）心中に鬱屈して快からず思ふ狀なり。
いきどまり【行止】（名）いきどまりたること。いきどまりたる所。

いきどまる【行止】（自、ら四）生きながらへて此世にとゞまる。ゆきどまる。
いきなり【行形】（副）❶事の成りゆきの儘にまかせて。其まゝに。❷唐突に。だしぬけに。――さんばう【行形三寶】（名）いきなりのまゝになげやりなること。
いきにへ【生贄】（名）いけにへの訛。
いきによらい【生如來】（名）道德極めて高き僧をたふとびていふ語。
いきにんぎやう【生人形】（名）いきたる人のごとくに、微妙に作りたる人形。
いきのこる【生殘】（自、ら四）生きとまる。
いきのした【息下】（名）臨終のとき、息の絶えんとするときの呼吸のかすかなること。
いきのね【生根】（名）呼吸の根元。即ち、生命。――をとめる　ころす。
いきのを【息緒】（名）玉の緒。いのち。
いきはぢ【生恥】（名）現世にての恥。「―さらす」。
いきはり【意氣張】（名）意氣地のはりあひ。――づく【意氣張盡】（名）意氣地をはりあふこと。
いきはる【息張】（自、ら四）いきをつめて腹を張る。いきむ。
いきぶれ【行觸】（名）けがれたるものに行き會ひて觸るゝこと。
いきほひ【勢】（名）❶人を壓服せしむる威力。❷物を行動せしむる動力。

❸ありさま。やうす。「天下の―」。❹はずみ。「―に乘じて進む」。❺意氣。氣焰。縱橫―當るべからず。――こむ【勢込】（自、ま四）いきほひこむ。勢を加ふ。
いきほふ【勢】（自、は四）いきほひつよく進む。
いきまく【息卷】（自、か四）憤怒して、呼吸はげしくなる。
いきみ【生身】（名）生存せる身體。なまみ。
いきみたま【生御魂】（名）陰曆七月八日より十三日までの間に於て、日を撰び、生存せる父母に祝ひものを贈る式禮。
いきむ【息】（自、ま四）いきをこめ、はらをはる。
いきもの【生物】（名）生存せる動物。（氣形）。
いきやう【異鄕】（名）たこく。たきやう。
いきやう【異形】（名）よのつねにかはりたるさま。あやしむべき風姿。
いぎやうだう【易行道】（名）【佛】念佛三昧を以て彌陀の願力により、往生決定するとの義。難行道の對。
いきやすめ【息休】（名）息を休めていこふこと。
いきよ【依據】（名）よりどころ。
いきりやう【生靈】（名）生存せる人の怨念が他にたゝりをなすもの。いきすだま。
いきる【生】（自）「いく」の訛。
いきる【熱蒸】（自、ら四）むしあつくなる。
いきれ【熱蒸】（名）いきれること。むしあつきこと。――くさし【熱蒸臭】（形、二）物のいきれて一種のにほひあり。いきれてくさし。
いきれる【熱蒸】（自）「いきる」の訛。

いきわか・るれれ、るる、るれ、れよ[行別](自、ら下二)「ゆき
わかる」に同じ。
いきわか・るれれ、るる、るれ、れよ[生別](自、ら下二) いき
わかれをなす。 「と。
いきわかれ[生別](名) 生きながら永く別るゝ
いきわたり[行亘](名) いきわたること。(周到)。
いきわた・るらりる、るれ、れ[行亘](自、ら四) ㊀あまねく
及ぶ。殘るくまなくとゞく。㊁物事に注意とゞく。
いきをさめ[息收](名) いきやすめ。いきつぎ。「一
のもの」。
い・くかきく、くけけ[行](自、他、か四)「ゆく」に同じ。
い・くかきく、くけけ[生](自、か四) 次條に同じ。
い・くききくくるくれきよ[生](自、か上二) ㊀命をたもちて
あり。生存してあり。㊁生きかへる。よみがへる。
い・くけけくくるくれけよ[生](他、か下二) 生存せしむ。蘇生
せしむ。いかす。
い・くけけくくるくれけよ(他、か下二) ㊀花卉を花瓶に挿して、
生を保たしむ。㊁物を埋めおく。㊂立て植う。
いく―[幾](接頭) ㊀或語に冠して數の知れぬ意
を表はす。「―歳」。㊁或語に冠して數の多き意を
表はす。「―千歳」。 「いふ語。
(いく-いく[郁郁](名、副) 文物の盛んなるさまに
いく-かイッカ[幾日](名) どれ程の日數。なんにち。
‡いく-く・むまみむむむめめ(自、ま四) 心中に憤怒す。心平
かならず。いきどほる。
いくさ[軍](名) ㊀へいたい。ぐんたい。(師)。㊁
たゝかひ。せんさう。――がみ[軍神](名) いく
さの勝利を獲んがために祈るかみ。――ぐるま
[軍車](名) 軍陣にありて、兵粮などを運搬する
車。――だち[軍立](名) 戰場に出發すること。
しゆつぢん。――ならし[軍習](名) 軍隊をね

ること。てうれん。――にん[軍人](名) 軍職に在
る人。いくさびと。‡――のよぼろ[軍丁](名)
へいたい。へいそつ。――ぶね[軍船](名) いく
さをなすに用ふる船。ぐんかん。‡――よばひバイヨ
[軍呼](名) ときのこゑ。
‡い-ぐし[齋串](名) 神をまつるとき、幣などをか
くる榊の類。
いく-せ[幾瀨](名) いくばくの瀨。どれ程の瀨。
いく-そ[幾十](副) なにほど。どのくらゐ。「―の
代々に、年を經て」。――ばく[幾十許](副)
いくらほど。なにほど。
いく-たり[幾人](名) どれほどのひと。なんにん。
(いくぢ[意氣地](名)「いきぢ」の訛。 「(兎唇)
いくち(名) 上唇裂けたる不具なる人。みつくち。
(いくぢ-な・し(くしく、しき、けれ)[意氣地無](形、二) 氣力な
くして役にたゝず。
いくつ[幾個](名) ㊀いくばくの數。㊁多くの數。
(いく-どうおん[異口同音](名) 異なりたる口
より同じ聲を發すること。いくばくの人の同じ說をな
すこと。
‡いくは[的](名) 矢を射るに用ふる目標。――ど
ころ[的所](名) あづち。(射垜)。
いく-ばく[幾許](副) どれくらゐ。なにほど。
――もなく[無幾](副) 多く時日を經ずに。
ほどなく。まもなく。
‡いく-ひ[生日](名) 儀式祭禮などある日を祝ひて
いふ語。 「代。
い-ぐひイグ[齋杙](名) 神事に物を掛けて奉る料の
いぐひイグ(名)[動]「うぐひ」に同じ。
いく-ひさ・し(しく、しく、し、しき、けれ)[幾久](形、二) いつまでも
變らず。ながく久し。

‡いくひ-の-たるひ[生日足日](名)「いくひ」に
同じ。
‡いく・ふイクウ[(はひふふへへ)][射込](他、は四) 矢を射込む。
いく-へエ[幾重](名) どれほどか重なれること。多く
重なれること。――にも[幾重](副) ひたすら。ひ
いく-へん[幾遍](名、副) いくたび。 「とへに。
‡いく・むまみむむむめめ[射組](他、ま四) 互に弓を射あふ。
いく-よ[幾夜](名) いくばくの夜。おほくの夜。
いく-よ[幾世](名) いくばくの世。おほくの世。
いくら[幾等](副) なにほど。どれほど。
いぐるみ[繳](名) 矢に細又は絲をつけて、鳥を射
ること。(矰繳)。 「みあひ。
(い-くわい[醫會](名) 醫者のあつまり。醫者のく
(い-ぐわい[以外](名) 其外。
(い-ぐわい[意外](名) 思ひの外。あんぐわい。
(い-くわん[衣冠](名) ㊀ころもとかんむりと。
㊁文物開け禮儀整ひたる
義にいふ語。「―の民」。㊂
常の袍に指貫(サシヌキ)を
着くること。

「いくわん(一)」

(い-くわん[醫官](名)
㊀醫師の官職。㊁軍醫。
(い-くわん[以還](副) 此かた。
いけ[池](名) 地を掘り水をたゝへてある所。
いけ[活](名) いかしおくこと。
(いけ―(接頭) 意味を強めて、惡みのこゝろを表は
す。「―ばかゞしい」。「―どうよく」。
(い-げ[以下](名)「いか」に同じ。
(い-けうイキヨウ[異教](名) 我奉ずる所の教へと異な
る教へ。ことなるをしへ。 「しおける魚。
いけ-うを[活魚](名) たゝへたる水の中に、いか

いけ-がき[生垣](名) 木を植ゑつらねた
る垣根。

「いけがき」

いけ-す[籞](名) 魚を
いけおく所。
いけ-ずみ[活炭](名)
灰に埋めおく炭火。
いけだ-ずみ[池田
炭](名) 攝津國池田地方より出だす櫟(クヌギ)の炭。
いけ-づくり[活作](名) 活きたる魚をつくりて、
あらひにしたるもの。
いけ-どり[生捕](名) 生きながら捕ふること。生き
ながら捕へたるもの。 「ふ。
いけ-ど・るらりる、るる、るれ、れ[生捕](他、ら四) 生きながら捕
いけ-にへエ[生贄](名) ㊀獸を生きながら、神に
奉りてにへとすること。又、其獸。㊁或物事のために、
名利生命等をすつること。又、其人。(犧牲)。
いけ-はぎ[生剝](名) 獸の皮を生きながら剝ぐこと。
いけ-ばな[活花](名) 草木の花枝を花器にいかせ
おくこと。又、其技。
(い-げふギヤウ[醫業](名) 醫術を職業とすること。いし
やの業。 「ぶね。
いけ-ぶね[活船](名) 生魚をいけおく水槽。みづ
いけ-ま[生馬](名)[植]蘿藦(ガガイモ)科に屬する蔓
草。莖は綠にして紫色を帶び、葉は對生し圓形にし
て薄し、夏の末に、白き小花を開く、馬の病を醫する
に用ふ。(牛皮消、白兎藿)。
いけ-み-ぐさ[池見草](名)[植]蓮の一名。
(い-け・るけけれ、けれ、けよ(自、か下二) ㊀ゆくゑを得。㊁
なすことを得。
(い-けん[意見](名) ㊀考案の結果。みこみ。ぞんじ
より。㊁己の思ふところを告げて、人を諫むること。

(い-けん[異見](名) 人と違ふ考へ。いぞん。
(い-ご[以後](名) 其のち。これよりのち。
(い-ご[吚唔](名) 讀書の聲。 「の。
(い-ごう[已講](名) 僧の職名、論議を決判するも
(いごかす[動](自)「うごかす」の訛。
(いごき[動](名)「うごき」の訛。
(い-こく[異國](名) よそぐに。ぐわいこく。――じ
ん[異國人](名) よそのくにのひと。――せ
ん[異國船](名) よそのくにのふね。――ばり
[異國張](名) 故衣を洗ひ張りして、新きもの、
如くにすること。
(いごく[動](自)「うごく」の訛。
‡いご・ずじじずずるずれじよ(他、さ上二) 植物などを根こぎ
に堀る。ほる。
‡いどの・ふ[(はひふふへへ)](他、は四) の、しる。
いこ・ふ[(はひふふへへ)][息](自、は四) ㊀仕事を中止し
て、息をつぐ。きうそくす。やすむ。㊁くつろぎて、
家に居る。㊂つかへずして、野に處る。
いこ・ふ[(へへふふるふれへよ)][息](他、は下二) 息はしむ。
安んず。やすます。
いこ・むまみむむむめめ[射込](他、ま四) 矢を射て、中に入
る。
‡いこやか(名) 身のたけのたかきさまにいふ語。
(岐嶷)。 「んか。
いさ(副) いやどうして。どうであらうか。いかなら
いざ(感) 人をいざなふとき又はなしはじめんとす
るときに發する聲。さあ。どれ。どりや。「―立よりて
見て行かん」。 「いろ。
(い-さい[異彩](名) 異なるひかり。きはだちたる
(い-さう[意想](名) おもひ。かんがへ。――ぐ
わい[意想外](名) おもひもそめざること。おもひ

のほか。
いさ-がに(名)[動]「あしはらがに」に同じ。 「ひ。
いさかひイーカ[諍](名) いひあひ。こうろん。あらそ
いさか・ふ[(はひふふへへ)][諍](自、は四) 互にいひあ
らそふ。いひあふ。こうろんす。
いさき(名)[動]硬鰭類中いさき科に屬する魚、體は
楕圓形にして背高からず、鱗は大にして齒は微小
なり、背部は暗蒼褐色にして腹部は白し、體側に綠
褐色の縱線あり、我國多少產せざる所なし。(雞魚)。
い-さき(名)[植]あをぎりの一種、木本にして無瓣
花、樹皮は綠色を呈し、葉は掌狀に分裂し、果實は放
線狀に裂開す、觀賞用として栽培す。つしまぎり。
いさ-ぎよ・し(くしき、けれ)[潔](形、二) ㊀甚だきよし。
きれいなり。㊁汚行なし。たゞし。㊂未練なし。わ
るびれず。
いさ-ご[砂](名) (石子の義) 小さき石。すなご。ま
さご。すな。――ぢ[砂地](名) すな多き處。すな
ぢ。まさごぢ。――むし[砂蟲](名)[動]毛翅類
に屬する細蟲、二雙の翅を具し、前翅に細毛若しく
は細鱗あり、後翅は廣くして皺襞(ヒダ)あり、頭小にし
て鞭狀の觸角を具す、腰部に剛毛多し、幼蟲は水中
に棲息し、草片又は小石を以て巢を作る。(石蠶)。
いささ―[小](接頭) 或語に冠していさゝかなる
意を表はす。「―小川」。
いさざ(名)[動]軟鰭類中たら科に屬する魚、體は
延長して鱗なく粘液あり、體色は全身白くして腹側
に七個の黑點あり、體長は二寸弱、我國にては多く
東海に產する近海魚なり、十月頃、大群をなし河川
に溯りて產卵す。おろうを。おらす。(鱩)。 「へ
いささか[聊](名、副) ㊀すこし。すこしばかり。㊁
かりそめ。ちよと。

‡いささけ・し（形、一）[聊] すこしばかりなり。すくなし。ちひさし。
‡いささめ（名） わづか。かりそめ。――に（副） かりそめに。わづかばかりに。「―に吹く風にやはなびくべき」
いざ-さらば（感） 人を誘ひ又は己が事をはじめんと思ふときにいふ語。それなら。さやうならば。
‡いさ-つ（自、た上二） 甚しく泣く。
‡いさ-と[寝聡]（名） 目ざめの疾きこと。めざときこと。
‡い-ざと・し（寝聡）（形、一） 目さめやすし。めざとし。
いさ-せ-よ[感] いなく。さにあらず。
‡いさ-な[勇魚]（名）【動】「くぢら」の古名。――とり（枕）「うみ」「はま」に冠らする詞。
いざなひ[誘]（名） いざなふこと。さそひ。つれだち。
いざな・ふ[誘]（他、は四） ❶さそふ。つれだす。つれゆく。ひく。みちびく。すゝむ。 ❷なしふ。さとす。 ❸誘惑若しくは訛謬にかゝらしめんと試みる。「敵を―」
いさ-は[蒴藋]（名） 草木の葉の、黄・白などの斑文は斑點・條紋などのあるもの。ふいり。
いさ-は[五十葉]（名） ひゝの又はまはものなどを言ふ。
‡いさ・ぶ[嘶]（他、は四） なかる。
いさほし[勳]（名）「いさをし」の訛。
いさま・し[勇]（形、二） いきほひ強し。たけし。をゝし。
いさみ[勇]（名） ❶いさむこと。いきほふこと。 ❷坊間にて俠氣をてらふもの。又、其人。（市虎）。――はだ[勇肌]（名） 俠客の風。いさみのふり。
いさ・む[勇]（自、ま四） 氣滿ち張る。心躍り起る。すゝむ。いきほひこむ。はげむ。
いさ・む[諫]（他、ま下二） 人に其非を告げて改めしむ。言ひて其人の行ひを止む。いけんす。
いさめ[諫]（名） いさむること。いけん。かんげん。
‡いさめ[寝覺]（名） ねざめ。
‡いさ・める[諫]（他）「いさむ」の訛。
‡いさよひ（名） いさよふこと。ためらひ。ちゆうちよ。躊躇。
いざよひ[十六夜]（名） ❶「いざよひのつき」の略言。 ❷陰暦にて、月の十六日又は十六夜の稱。――ざくら[十六夜櫻]（名）【植】さくらの變種。陰曆正月十六日頃に開く。伊豫國道後にあり。――ばら[十六夜薔薇]（名）【植】薔薇の變種。葉は細小にして、花は夏開く。――のつき[十六夜月]（名） 陰曆十六日の夜の月。
‡いさよ・ふ[猶豫]（自、は四） 進まんとして進み得ず、行かんとしてとゞまる。ためらふ。（徘徊。躊躇）。
‡いささら-[些]（接頭） 或語に冠していさゝかなる意を表はす。「―なみ」「―みづ」
い-さらへ[錆淡]（名） 錆たる金器に磨きを掛けて、滑かにさらふこと。
‡いさら-ゐ[些井]（名） 水の少き井。
いさり[漁]（名） すなどること。――び[漁火]（名） いさりをするときに、魚をよせんためにたく火。――ぶね[漁船]（名） いさりするふね。れふせん。
いさ・る[漁]（他、ら四） 魚貝を取る。すなどる。（漁）。
いさ-を[勇雄]（名） いさましきをのこ。ますらを。
いさを[勳]（名） 善良なる成績。名譽ある成功。てがら。こうせき。こう。くんこう。いさをし。（功績）。
いさをし[勳]（名）「いさを」に同じ。
‡いさを・し[功]（形、二） ❶勇猛にして事に當たる。勞を折る。せいを出だす。つとむ。きんべんす。 ❷てがらを成せり。功あり。――びと[功人]（名） いさをある人。
いし[石]（名） ❶岩石の小片の砂より大なるもの、稱。 ❷石材。 ❸碁に用ふる黒白の石。ごいし。
(い-し[醫師]（名） 醫術を開業してある人。醫を業とする人。いしや。くすし。
(い-し[意志]（名） ❶こゝろざし。かんがへ。おもひ。こゝろ。 ❷【心】思慮し選擇し決行する心的作用。
(い-し[異志]（名） ふたごゝろ。そむかんとするこゝろ。
(い-し[頤使]（名） あごで人をつかふこと。人を見下げてつかふこと。
‡い-し[椅子]（名） 四角にて手すりある高座。天子御座の具なり。
‡い・し[美]（形、二） ❶よろし。このまし。 ❷あぢよし。うまし。 ❸てぎはよし。たくみなり。 ❹殊勝なり。けなげなり。
(い-じ[異事]（名） 普通ありうべからぬ事。非常の事。
(い-じ[異時]（名） ほかのとき。のち。他時。某日。
いし-あはせ[石合]（名） 一種の遊戯。いしなごの石を左右あはせて、かちまけを決すること。
いし-あやめ[石菖蒲]（名）【植】「せきしやう」に同じ。
(いし-いし（名）「だんご」の異稱。（女房詞）。
いし-いも[石芋]（名）【植】天南星科に屬する植物。山野に自生す。さといもに似たる塊根あれど、食用に適せず。

いし-うす[石臼]（名） 石にてつくりたるひきうす又はつきうす。（碓）。
いし-うち[石打]（名） 小石を互に打ちつけあふこと。小石を打ちあふ爭闘。
いしうち-の-そや[石打征矢]（名） いしうちのはねにてはぎたる矢。
いしうち-の-はね[石打羽]（名） 鷲の尾の羽の左右の端より第一第二にあたれるものゝ稱にして、極めて強きが故に、矢にはぎて珍重す。
いしうち-の-やなぐひ[石打胡籙]（名） いしうちのそやをいるゝやなぐひ。
‡いし-うら[石占]（名） 石を踏み數へて、吉凶を占ふこと。又、石を蹴りて占ふをもいふ。
いし-がき[石垣]（名） 石を積みあげて造りたる垣。いしがけ。
いし-がけ[石崖]（名） ❶いしがきに同じ。 ❷岩石より成りたるきりぎし。――[石崖紋]（名） 紋の名。いしがけの合せ目にかたどり、六角形をならべたるさまなるもの。
いし-がに[石蟹]（名）【動】蟹の一種。胴甲は幅廣く腹部は至つて小さく且扁平なり。第一對の脚は必ず螯（はさみ）に變ず。其色赤し。山谷溪間又は河堤に穴居す。やまがに。
いし-かは[石川]（名） 石の多くある河。
いし-がひ[石貝]（名）【動】「みそがひ」に同じ。
(い-しかへし[意趣返]（名）「いしゆがへし」の訛。
いし-がめ[石龜]（名）【動】龜鼈類に屬する爬蟲。圓狀の背腹兩甲を有し、背面は穹窿にして腹面は平かなり。此甲は下皮の化骨したるものと、脊椎及肋骨の癒合したるものとにして、外面は上皮角質の鱗を以て覆はる。我國到る處の池沼に産す。（秦龜）。
いし-がれひ[石鰈]（名）【動】軟鰭類中ひらめ科に屬する魚。體形は頗る側扁にして卵形をなし、背鰭は眼の直上より起る。口は小にして甚しく仰向す。體色は濃灰又は淡褐なり。體長は二尺許に達す。東海・東北地方に多く産す。
(い-しき[意識]（名）【心】心的作用の一切の稱。知覺・情意等即ち心の事實は、意識の現象なり。
‡いし-き（名） 石にて畳み、死人の棺を入るゝ處。
いし-ぎく[石菊]（名）【動】珊瑚蟲類中多放腔類に屬する腔腸動物。許多の觸手を具ふ。其數は必ず六の乘數にして對稱なり。骨格ありて狀恰も菊花の滿開に似る。
いし-きり[石切]（名） ❶石を切ること。又、石を切る業。 ❷石を切る職人。――のみ[石切鑿]（名） 本まるく末尖りたる鑿。石を彫り又は切るに用ふるもの。（石鑿）。
(い-しきり[意趣斬]（名）「いしゆぎり」の訛。
‡いし-く[石工]（名） 石を切る職人。いしきり。
いし-ぐら[石藏]（名） 石を積みあげて造りたる倉庫。
いし-ぐるま[石車]（名） 大石を運搬する車。四輪を附く。
いし-くれ[石塊]（名） 小さき石又は石のかけ。いしころ。
いし-けり[石蹴]（名） 一種の遊戯。地上に幾多の區劃を設け、一箇の小石を片足にて蹴りつゝ、區劃を送り行くこと。
いし-けん[石拳]（名） 一種の遊戯。手を開きたるを紙、指を二本出だしたるをはさみ、こぶしを石とさだめて、勝負をつくるもの。
いし-こ[石粉]（名） 玻璃を作る材料となるべき石の粉。
いし-ご[石子]（名） 石のつみかさなりたること。――づめ[石子詰]（名） 古昔の罰刑の一。罪人を生きながら、小石にて埋むること。
いし-ごひ[石鯉]（名）【動】「りようりよ（鯪鯉）」に同じ。
いし-ころ[石塊]（名） 小さき石。こいし。さゞれいし。いしくれ。（礫）。
いし-ざか[石坂]（名） 石の多き坂。いしだゝみにしたる坂。
いし-ずみ[石炭]（名）【鑛】「せきたん」の一名。
いし-ずり[石摺]（名） 石碑などの字を、油ずみなどを用ひて紙に摺り取ること。又、其摺り取りたる地黑く字白きもの。（石搨刻）。
いし-ずゑ[礎]（名） ❶家など建つる下のどだいの石。どだいいし。つかいし。つめいし。 ❷或物事の主腦たる人の稱。「まことに、國の―ぞや」
いし-だたき[石敲]（名）【動】「せきれい」に同じ。
いし-だたみ[石疊]（名） ❶方形・長方形或は三角或は六角なりの、ひら石を敷きならべたるもの。（甃）。 ❷いしだんに同じ。 ❸紋模樣の名。方形をならべ一つづゝ置きて、白黑の色など入れちがへたるもの。
いし-だん[石段]（名） 石にて作りたるだん。いしばし。（石階段）。
いし-ぢ[石地]（名） ❶石の多き土地。 ❷「いしぢぬり」の略言。――ぬり[石地塗]（名） 漆塗りの灰色にして光澤なきもの。
いし-づき[石突]（名） ❶かたなのこじり。（鐏）。 ❷鉤・なぎなた・ほこなどの地にあたる方のさきを包

みたる金具。(鍛鐵)。

いしづき[石付](名) 土中にてくちたる竹の根。

いしづくり[石造](名) ㊀石細工の職人。㊁石を用ひて、物をつくること。石細工。又其細工物。

いしどうろう(名)[石燈籠] 石にて造りたるとうろう。

いしどこ[石床](名) 川の底などが、石より成りたるをいふ。

いしなぎ(名)【動】硬鰭類中すずき科に屬する魚。體は側扁にして鱗甚だ小なり。體色は蒼黑にして體長は三尺五寸許に達す。深海の礁間に棲す。味美なり。

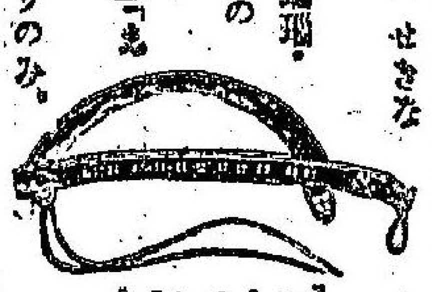
いしなげ[石投](名) 石をなぐること。又石を投げてあそぶたはむれ。

いしなご[石投子](名) ㊀一種の遊戲。石を撒きて、中の一個を空に投げ、其石の落ちぬうちに、下の石をさらひて、これとうち合はすこと。㊁小き石。(石子)。

‡いしなどり(名) (いしなごに同じ。(投石))。

‡いしのあぶら[石油](名) 石油。せきゆ。くさうづのあぶら。

‡いしのおび[石帶](名) 束帶の時、玉石にて飾りたる革の帶。



[いしのおび]

‡いしのち[石乳](名) (鍾乳石)。

いしのみ[石鑿](名) いしきりのみ。

‡いしはし[石階](名) いしだんになりたる路。いしだん。

いしばし[石橋](名) 石にて造りたる橋。

‡いしはじき[石彈](名) ㊀一種の兵器。古昔、敵陣へ石を投ぐるに用ひしもの。(砲)。㊁一種の遊戲。盤石を指先にて彈き、中りたる敵の石を取りて、勝負を爭ふもの。(彈碁)。

いしはなび[石花火](名)【動】「いそぎんちやく」に同じ。

いしばひ[石灰](名) 白色なる一種の粉末。即ち、酸化カルシウムにして、石灰石を灼熱すれば得。我國各處これを製すれど、遠江・土佐・美濃最も盛んなり。海濱に近き處にては、介殼を燒きて、多少不純なるものを製するもの少からず。漆喰・セメントの原料又は肥料等に用ひられ、用途多し。くすりと。せきくわい。——いし[石灰石](名)【鑛】炭酸と石灰とより成る鑛物。多少結晶組織を有し塊狀をなす。灼熱して石灰を製す。せきくわいせき。——のだん[石灰段](名) いしばひを固めて造りたる階段。淸涼殿の庭の南にあり。——やき[石灰燒](名) 石灰石を燒きて石灰を製するを業とする人。

いしはら[石原](名) 小石の多くある處。

いしばり[砭](名) 石にて造りたる鍼。鍼術に用ふるもの。鍼術の支那に創始せられしは、極めて上古の事に屬し、恰も石器時代なりし故に、石を以て鍼となしたるならん。後世尚これを因襲したるものなるべしといふ。

いしびや[石火矢](名) おほづつの類。中古に使用せられたる武器にして、當時は石片を以て彈丸となしたり。

いしふぐ[石河豚](名)【動】固顎類中硬皮類に屬する箱狀の硬骨魚。上顎の齒骨は頭蓋と相固着す。堅牢なる甲鱗を被り、頭に二角あり。

いしぶし[石伏](名)【動】「かじか」の一名。(鰍)。

いしぶみ[石碑](名) 後世に事實をのこすために、ふみを石にほり付けたるもの。ひ。せきひ。

いしぶろ[石風呂](名) 石造の湯桶。すゑふろ。

(いゐへうじ)[意思表示](名)【法】當事者が自己の意思を外部に發表して、他人の認め得べきものとなしたること。法律行爲の基本なりとす。

いしへん[石偏](名) 漢字の偏の名。砥・硯などの如き字の左方にある字の稱。

いしぼたん[石牡丹](名)【動】珊瑚蟲類中多放腺類に屬する腔腸動物。通常海濱の岩上に生ず。單體にして骨骼を具有せず。綠色のものと紅色のものとあり。觸手を開くときは美麗なり。いそぎんちやく。

いしボトケ[石佛](名) 石にて造りたる佛像。

‡いしま[鑢](名) うちはもののゆがみ。

‡いしみ[笥](名) かたま。たけかご。ふご。(笭)。

いしみかは(名)【植】蓼科に屬する一年生の蔓草。莖と葉と共に刺あり。花は紅色又は白色にして形蕎麥に似る。實は圓し。(杠板歸)。

‡いしむ[?](自、四) ゆがむ。くねる。いがむ。かしぐ。まがる。

いしめ[石目](名) 彫刻物などの表面に打ち出だす細點。なゝこ。

いしもち[石持](名)【動】硬鰭類中いしもち科に屬する魚。體は側扁にして眼小く口濶し。小き楕形の鱗を有す。體色は灰銀にして、體長は一尺許。近海の泥底に棲息する定着魚なり。其頭中に石の如きものある故に名づく。(鯢、石首魚)。

いしや[石屋](名) 石を賣る家。又、石を細工して活計をたつる者。

(いゐや)[醫者](名) 醫術を行ふ人。くすし。いし。

(いゐやう)[意匠](名) ㊀こゝろのたくみ。かんがへ。㊁工藝上の物品に應用すべき形狀・模樣・色彩又は其の結合に關する新規の考案。其工藝上の發達進歩に裨用なるを以て、特別の保護及恩典あり。——とうろく[意匠登錄](名) 意匠登錄者又は其承繼人の請求によりて、特許局長が必要の事項を原簿に記すること。——せんようけん[意匠專用權](名) 意匠登錄者又は其承繼人の請求に基きて、これに附與する特權。此特權あるものは、十年間該考案の專用を得るものとす。

(いゐやう)[衣裝](名) 衣服の總名。——かた[衣裝方](名) 芝居にて、俳優の扮裝に要する衣裳の事を世話するもの。——どのみ[衣裝好](名) 美服又は華物をえりごのみすること。又、其人。

(いゐやう)[以上](名) ㊀これから上。これから前。㊁文書又は目錄などの末尾に記して、終結の意を表する語。㊂聯答文の末尾に用ひて敬意を表する語。中世、官家よりの下し文の終りに「以下」と書しるしに對し、敬意を表はせしなりといふ。㊃德川時代に將軍に謁見することを得たる士分の稱。

(いゐやう)[異常](名) つねの物事にあらざること。

(いゐやう)[異狀](名) ひごろにことなりたるさま。つねにあらざるやうす。

いしやき[石燒](名) 陶器の燒き方、あうちの粉に栗かき土をまぜて水に浸し、其なか澄みを火にかわかし、搗ねつかねて燒くこと。土燒の對。——どうふ[石燒豆腐](名) 鍋に油を塗り、其上にてつけ燒きにしたる豆腐。

いしやだふし[醫者倒](名)【植】「せんぶり」の一名。

いしやま[石山](名) ㊀石多き山。㊁石を切り出す山。

(いゐゆ)[異種](名) 種類のことなること。

(いゐゆ)[意趣](名) ㊀心の趣向。こゝろばせ。㊁うらみを含むこと。うらみ。ゐこん。——がへし[意趣返](名) うらみをむくゆること。——ぎり[意趣斬](名) うらみに因りて、人をきり殺すこと。

(いゐゆう)[異宗](名) ことなりたる宗旨。他宗。

(いゐゆつ)[醫術](名) 醫療の術。——かいげふ[醫術開業](名) 醫術の營業をなすこと。

いゐゆばらし[意趣晴](名) 「いゐゆがへし」に同じ。

いしゆみ[石弓](名) 古昔用ひし一種の兵器。石を敵陣に投げやるもの。(弩)。

(いゐよ)[醫書](名) 醫學又は醫術の事を書き述べたる書物。

(いゐよく)[移植](名) 苗をうつしうゑること。樹木などを處をかへてうゝること。

(いゐよく)[衣食](名) ㊀衣服と食物と。㊁衣るとくふと、即ち生活の義にいふ語。「——足りて、禮節を知る」。

(いゐよく)[異色](名) いろの相同じからざること。相同じからざる色。——じんゐゆ[異色人種](名) 皮膚の色に因りたる人種の區別上、他人種を指していふ語。白皙人種よりは黃色人種をいひ、黃色人種よりは白皙人種をいふが如し。

いしらます[射白](他、四) 矢を射て敵をしりぞく。

いしわた[石綿](名)【鑛】蛇紋石又は角閃石の變種、纖維狀をなして、軟きこと恰も綿又は絲の如し。

いしわり[石割](名) ㊀「ひくひどり」の一名。㊁「いしわりがひ」の略言。——がひ[石割貝](名)【動】「かうすがひ」に同じ。

いしゐ[石井](名) ㊀岩石に穿ちたる井。㊁かはらなる井。

(いゐん)[倚信](名) たより。たのみ。

(いゐん)[異心](名) ふたごころ。むほんのこゝろ。

(いゐん)[異人](名) ㊀普通の人間以上の不思議なる術を附へたる人。仙人。㊁凡庸ならぬ人。英雄。豪傑。㊂異國の人。

(いゐんでんゐん)[以心傳心](名) 言文に擧げて説かず、心を以て心につたふること。

イス[椅子](名) (字の宋音)腰をかくる具。後ろによりかゝりあるもの。

いす[柞](名)【植】金縷梅科に屬する喬木。葉は常綠にして花瓣は存在せず、雄蕊は二個乃至八個あり。觀賞用として栽培せられ、又、木材は種々の用に供せらる。ひよんのき。ゆず。(蚊母樹)。

(いすう)[異數](名) ことなれるとりあつかひ。つねならぬためし。「人以て—となす」。

いすか[鶍](名)【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥。形大にして體色は紫色を帶ぶ。嘴は交叉して、巧みに松毬の内部にある種子を取り食ふ。(交嘴)。——のくちばし[鶍嘴](名) 物事のくひちがひて、思の如くならざるにいふ語。

‡いすゝぐ[?](自、四) おどろきさわぐ。うろたふ。

いすぶる[搖](他) 「ゆすぶる」の訛。

いする[搖](他、四) ㊀ゆりうごかす。㊁脅迫して、金錢又は財物などを取る。

‡いするぎふ[?](自、四) そゞろに心迷ふ。競ひさわぐ。

‡いせ[五十瀨](名) おほくの瀨。

(い-せい[異姓](名) 己と異なりたる姓。他姓。

(い-せい[異性](名) ㊀性質を異にすること。「雌雄—」。㊁(化)物質は同一の分子式を有すれど、性質は相異なるを。——たい[異性體](名) ㊀(化)異性の物質、例せば「メチル、エーテル」と「アルコホル」との如し、前者は攝氏零下二三度にて液化する氣體にして、後者は沸騰點七八度の液體なり。㊁性質異なるもの、泛稱。

いせ-えび[伊勢海老](名)【動】胸甲類中いせえび科に屬する節足動物、體は圓筒形をなして堅牢なる甲殼を有す、基部の環節は厚くして刺棘を有し、腹部は長く後方に至りて狹し、大なる尾を具ふ、體色は暗褐紫にして、體長は殆んど七寸許、體は成長するに從ひ脱皮す、常に潮流の流通する深さ六十尺以下の岩礁間に棲息し、夜間出て、食物を攝取す、我國東海の近海に多し。かまくらえび。ゑまえび。(龍蝦)。

いせ-おしろい[伊勢白粉](名)「はらや」に同じ。

いせ-おんど[伊勢音頭](名) 一種の俗曲、伊勢國古市にて盛んに行はる、もと其近傍なる川崎よりはじまり、川崎おんどと稱せり、一說に、あひのやま節より出づともいふ。

いせ-ごひ[イセゴヒ][伊勢鯉](名)【動】「あかめ」に同じ。

(い-せつ[異說](名) 普通と違ひたる說。

いせ-どうふ[伊勢豆腐](名) 一種の料理、やまのいもをすりおろして、鯛のすりみを混ぜ、卵の白身を加へてよくすりあはせ、これにくずたまりをかけたるもの。

いせ-ばうふう[イセボウフウ][伊勢防風](名)【植】「はまばうふう」に同じ。

い-せる[せせるせれせよ](他、さ下二) ちゞめて縫ひ合はす。くゝり縫ひにす。

(いぜん-げん[已然言](名)【文法】動詞・助動詞の活用の一、助辭「ば」「ど」などを添へて過去を表はすもの、例へば「行けば」「押せど」の「行け」「押せ」の類。

いそ[磯](名) ㊀湖海の邊の石ある所。湖海の波うちぎは。ちみぎた。はまべ。㊁冠りの額際(ヒタヒギハ)の稱。

い-そ[五十](數) 十の五倍。ごじふ。

いそ-あゆなめ[磯鮎並](名)【動】硬鱗類中かんだひ科に屬する魚、全體紅色にして褐紫色の條線あり、脊鰭の兩鰭は淡黄なり、體長四尺に及ぶ、近海に棲息し、五六月頃に産卵す。

いそ-いそ(名、副) 勇むさま又は急ぐさまにいふ語。

いそい-そがに(名)【動】「まめがに」に同じ。

いそ-いり[磯熬](名) 芹を加へたる鯛の吸ひ物。

いそ-がき[磯牡蠣](名)【動】かきの一種、きはめて小形なるもの。こがき。

いそが-し[しくしくしきしけれ][忙](形、二) ㊀事繁し。用多し。せはし。㊁餘裕なし。急迫なり。きぜやし。——がる[らりるるれれ](自、ら四) いそがはしく思ふ。

いそが-す[さしすすせせ][急](他、さ四) うながしていそがしむ。いそぐ。せく。

(いそがせる[急](他)「いそがす」の訛。

いそが-はし[しくしくしきしけれ][忙](形、二) いそがし。

いそ-がひ[イソガヒ][磯貝](名) 波のために磯に打寄せられたる貝殼。又、鮑の殼につきたる貝殼。——の(枕)「かたおもひ」「かたこひ」に冠らする詞。

いそぎ[急](名) ㊀いそぐこと。あせりせくこと。㊁準備。仕度。——あし[急足](名) 足をはやめてあるくこと。はやあし。——もの[急物](名) 急速に製作し又は施行すべきもの。

いそぎんちやく[磯巾着](名)【動】「いしぼたん」に同じ。「菟葵」。

(い-そく[夷則](名) ㊀十二律の一、七月にあたる律。㊁七月の異名。

いそ-ぐ[がぎぐぐげげ][急](自、か四) ㊀速かに爲す。急に行く。せく。㊁仕度す。

いそ-ぐ[がぎぐぐげげ][急](他、か四) 速かになさしむ。急に行かしむ。せく。

いそ-ざんせう[イソザンシヨウ][磯山椒](名)【植】薔薇科に屬する小灌木、暖地の海邊に生ず、葉は山椒に似て小く、冬凋まず、夏の頃、五瓣の白花を開く、實小くして圓し。(小石積)。「なり。

†いそ-し[しくしくしきしけれ][勤](形、二) よくつとむるさま。

†いそし-む[まみむむめめ][勤](自、ま四) ㊀つとめはげむ。ほねをる。はたらく。㊁功を立つ。事をなす。

いそ-ぢ[磯路](名) 磯邊のみち。

いそ-ぢ[五十年](名) 歳の五十頃なれること。

いそ-ちどり[磯千鳥](名) いそべに居るちどりの稱。

いそ-つぐみ[磯鶫](名)【動】鶫(ツグミ)の一種、ひよどりに似て大し、尾長く、色青黑し。

いそ-な[磯菜](名) 磯に生ずる菜の食用とすべきもの、泛稱。——どり(名)【動】「ちどり」の一名。

いそ-ね[磯根](名) いそ。いそべ。

いそ-ね[磯寐](名) 磯邊にやどりて寐ること。

いそ-の-かみ[石上](枕)「ふるき」「降る」等に冠らする詞。

†いそは-く[かきくくけけ](自、か四) ㊀勵みつとむ。いそしむ。㊁爭ふ。

†いそば-ふ[ハ][はひふふへへ](自、は四) うかれて遊び戯る。あそぶ。たはむる。そばへる。

いそ-ひよどり[磯鵯](名)【動】「いそつぐみ」に同じ。

†いそ-ふ[イソフ][はひふふへへ][挑](他、は四) ㊀いどむ。㊁爭ふ。競ふ。

いそ-ふぐ[磯河豚](名)【動】「まはさいふぐ」に同じ。

いそ-べ[磯邊](名) 磯のほとり。

いそ-ま[磯間](名) 磯のほとり。

いそ-まくら[磯枕](名) 磯邊にたびねすること。なみまくら。かぢまくら。

いそ-まつ[磯松](名) ㊀磯邊に生ふる松の稱。㊁【植】磯松科に屬する灌木、葉細く、花は五瓣にして紅色又は黄色なり。

いそ-まめ[磯豆](名)【植】荳(マメ)科に屬する蔓草、暖地の海邊に自生す、形なたまめより小し。はまなたまめ。

いそ-むし[磯蟲](名)【動】海の淺處に棲息するちいさき蟲の總稱。

†いそ-め-く[かきくくけけ][急](自、か四) いそ〳〵す。

いそ-めばる[磯目張](名)【動】「もうを」に同じ。

いそ-もと[磯本](名) 磯の波うちぎは。

いそ-もの[磯物](名) かいさう。海藻。

いそ-や[磯屋](名) 磯邊にある家。

いそ-やかた[磯館](名) いそや。「あれはてゝ、人もなぎさの—」。

いそ-わし[磯鷲](名)【動】鷲の一種、海邊に多く棲む。

(い-ぞん[異存](名) 人と異なりたる意見。

い-そん-ず[ぜじずずるずれぜよ][射損](他、さ變) 射たる矢まとを外る。

いた[板](名) ㊀材木を薄く扁くひき割りたるもの。㊁金又は石などを薄く扁くなしたるもの。「—がね」。㊂「いたのもの」に同じ。

(い-たい[衣帶](名) ㊀ころもとおびと。㊁裝束。「束帶」。

(い-たい[異體](名) つねにかはりたる姿。又、からだのことなること。——どうしん[異體同心](名) からだはことなれども心のおなじきこと。即ち、極めて親密なるあひだがらにいふ語。

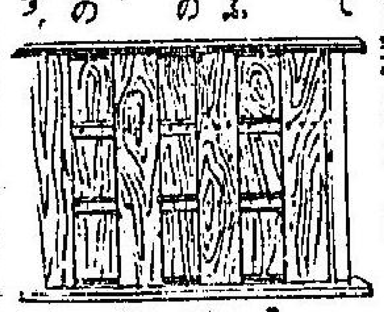
いた-いけ(名) (稚氣の義) 小兒などのいた〳〵しく、あはれむべきさまにいふ語。(幼氣)。

いた-いた-し[しくしくしきしけれ][傷](形、二) はなはだあはれむべし。

(い-だう[イドウ][醫道](名) 醫療の道。醫者の道。

いた-がき[板垣](名) 板にて造りたるかき。

いた-がこひ[ガコイ][板圍](名) ふえん場などの外がこひ。假りの板屏。


［きがたい］

いた-がす[板糟](名) いたのごとくに、かためたる酒のかす。

いた-がね[板金](名) 金屬を板のごとくにうすくしたるもの。

いた-がひ[イガイ][板飼](名) 馬をつながずして、廐の中に放ちがひすること。(櫪飼)。

†いだか-ふ[イダカウ][へへふふれへよ][抱](他、は下二) だきかゝふ。

いた-ぎれ[板切](名) 板の斷片(レキ)。

(い-たく[依託](名) たよること。たのむこと。

いた-く[痛](副) はなはだしく。ひどく。

いだ-く[かきくくけけ][抱](他、か四) ㊀腕の内に物をかゝへもつ。かゝふ。だく。㊁なかに囲む。「山を—」。㊂心中に藏す。「怨恨を—」。

いた-ぐら[板藏](名) 板を壁として造りたる倉。

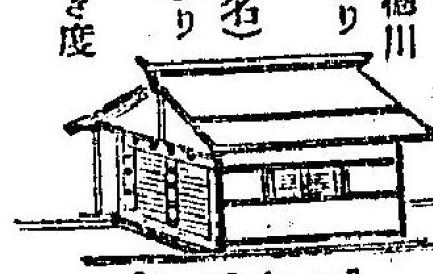
†いたけ-し[しくしくしきしけれ][痛](形、二) はなはだし。

いた-ご[板子](名) 舟の中にあるあげいた。

いた-ごし[板輿](名) 三方を板にて張り、前にみすを掛けたる輿。

いたこ-ぶし[潮來節](名) 徳川氏の末年に、下總の潮來(イタコ)より流行し初めたる俗謠。

いた-こんがう[イタコンゴウ][板金剛](名) 板を裏に付けたるざうり。ざうりげた。いたつけ草履。


［しごたい］

いたさ[痛](名) いたきこと。いたき度合。

いた-し[しくしきしけれ][甚](形、二) ㊀はなはだし。きつし。㊁いと甚し。

いた-し[しくしきしけれ][痛](形、二) ㊀身體にいたみを感ず。いたみあり。㊁ものなやまし。いたまし。㊂憫むべし。いたはし。——かゆし[痛痒](名) (掻けば痛く、掻かねばかゆきの義)當面何とか處置せざるべからざれど、分別のつきかぬるにいふ語。

いだし-うた[出歌](名) 五節の舞ひのときにうたふ歌。

†いだし-うちき[出袿](名) 衣のうへに著るもの。うちぎ。

いた-じき[板敷](名) 板のま。

いだし-づま[出褄](名) 衣服の褄の外にあらはれたる部分。

†いだし-ぬ-く[かきくくけけ][出拔](他、か四) 人をして油斷せしめ、其虚に乘じてせんをこす。だしぬく。

いた-じめ[板締](名) 染め方の名、ちりめん其他の絹物の類を、板にてしめ、花卉・蝶鳥などの模様を染め出だしたるもの、專ら婦人の帶下に用ふ。

いた-す[さしすすせせ][致](他、さ四) ㊀及ばしむ。到らしむ。おくる。とゞく。はこぶ。㊁來らしむ。まねく。あ

つむ。「賢者を―」。㊂ゆだぬ。まかす。「命を―」。㊃極む。審かにす。「理を―」。㊄行ふ。爲す。

いだ・す さしせせ[出](他、さ四) ㊀內より外へやる。此より彼へやる。㊁現はす。「見―」。㊂行ふ。作す。「奇計を―」。㊃吐く。言ふ。

いただき[頂](名) ㊀あたま。頭上。㊁みね。山巓。㊂物の最高處。――もち[戴餅](名) 糕(シン)を圓く扁くして、中に餡を載せたるもの。‡――もちひ ―モチイ[戴餅](名) 古昔、元日の祝賀に、兒女の頭上に餅を戴しゝこと。

いただ・く かきくけけ[戴](他、か四) ㊀頭上に戴す。のす。㊁高くさしあぐ。さゝぐ。㊂君長として敬ひ仕ふ。㊃恵んでもらひ受く。

いただたみ[板疊](名) まんに板を入れてつくりたる疊。

いたち[鼬鼠](名)【動】肉食類中鼬鼠科に屬する哺乳動物。蹠行にして指趾五あり、尾長く、其基部に肛門腺ありて、窮したる場合には惡臭を放つ、これを「いたちの最後屁」といふ。――うを[鼬鼠魚](名)【動】一種の魚。頭は大にして、體は延長し、尾に至るに從ひ次第に小となる、全身は細鱗を以て覆はれ、體色は褐色にして體長一尺五寸に達す。深海に棲息す。‡――ごっこ(名) 小兒の遊戲。二人互に手の甲を抓みあひ、順々に重ねゆくこと。――のめかげ[鼬鼠目翳](名) 手を目上に翳(カザ)して、遠方を見ること。――のみちきり[鼬鼠道切](名) 全く往き來の絕ゆるにいふ語。

‡いたつ・がは・し ―ガワシ[しくしくしき][しけれ][勞](形、二) ㊀いたく勤勞するさまなり。ほねをりてあり。㊁わづらはし。なやまし。

いたつき[板付](名) 矢じりの一種、多く弓術を學ぶときに用ふ、形小にして鋒扁し。(平題箭)。

いたつき[勞](名) ㊀ほねをり。勤勞。㊁なやみ。びやうき。

いたづ・く かきくけけ[勞](自、か四) ㊀ほねをる。つとむ。㊁やむ。つかる。

いたづ・く かきくけけ[勞](他、か四) いたはりあつかふ。ねぎらふ。なぐさむ。

いた・つけ[板付](名) 釘の一種、長さ四分以上六分以下のもの、板を打ち付くるに用ふ。――ざうり ―ゾウリ[板付草履](名) ざうりの裏に板を付けたるもの。ざうりげた。

いたって[至](副) ぢごく。もつとも。きはめて。

いたづら[徒](名) ㊀無益にして惡しきたはむれ。むだなるあそび。(惡戲)。㊁益なきこと。用なきこと。むだ。むえき。むよう。㊂みだら。淫奔。――いね[徒寢](名) あだね。ひとりね。――ごと[徒言](名) 無益なる言語。むだぐち。――ごと[徒事](名) いたづらなるわざ。――じに[徒死](名) 死にても其かひなきこと。むだじに。――に[徒](副) 無益に。むだに。――ね[徒寢](名) たゞひとり寢ること。いたづらぶし。――びと[徒人](名) 何の役にもたゝぬ人。――ぶし[徒臥](名) いたづらね。――もの[徒者](名) ㊀役にたゝぬもの。㊁惡戲をなすもの。㊂淫奔なるもの。㊃【動】「ねずみ」の異稱。――こ[徒子](名) いたづらをする小兒。

いた・で[痛手](名) 重き負傷。ふかで。おもで。おゆうきやう。

いた・ど[板戶](名) 板にて造りたる戶。

いた・どり[虎杖](名)【植】蓼(タデ)科に屬する草本、酸味を有し、莖は帶赤色にして二尺內外の高さに達す、葉は長楕圓形狀をなし、夏の頃、紅白の小花を開きて實を結ぶ。(酸模)。

いた・の・ま[板間](名) 床に板をしきて、疊をしかざる所。――かせぎ[板間稼](名) 湯屋にて、他人の所有物を竊かに取る盜人。

いた・の・もの[板物](名) 板をしんに入れて、たゝみたる織物。

いた・ばさみ[板挾](名) ㊀板と板との間にはさまること。「―のふみ」。㊁甲乙兩者の間にたちて、去就を決しかぬること。

いたは・し ―ワシ[しくしくしき][しけれ][勞](形、二) ㊀いとし。いとをかし。㊁いたまし。ふびんなり。(可憐)。㊂なやまし。やまし。(病、痛)。

いた・ばし[板橋](名) 板にて造りたる橋。

‡いた・はじかみ(名)【植】「さんせう」の古名。

いたはり[勞](名) ㊀功あること。ほねをり。㊁あはれみ。ねぎらひ。㊂やまひ。いたづき。

いたは・る ―ワル[らりるる][るれれ][勞](他、ら四) ㊀いたはしく思ひて愛憐す。㊁なぐさめて優待す。ねぎらふ。

いたは・る らりるる[るれれ][勞](自、ら四) ㊀やむ。つかる。㊁勤勞す。ほねをる。つとむ。

いたび[木蓮子](名)【植】桑科に屬する蔓草、葉はもくせいに似て鋸齒なく、冬凋まず。――かづら[木蓮子葛](名)【植】「いたび」に同じ。

いた・ひき[板挽](名) 材木をひきわりて板となすこと。又、其工人。

いた・びき[板引](名) 紐をつけたる綢を板に張りて、光澤をいだしたるもの。

いた・びさし[板廂](名) 板にて作りたるひさし。

‡いた・ぶ ばびぶぶ[べべ][傷](自、は四) ふかくかなしむ。いたむ。かなしぶ。

‡いた・ぶ ばびぶぶ[べべ][甚振](自、は上二) ㊀はなはだしくなりゆく。㊁あらくなる。

いた・ぶき[板葺](名)「いたぶきやね」の略言。――やね[板葺屋根](名) 板片を以て葺きたる屋根。

いた・ぶね[板舟](名) 板を以てかりにつくりたるふね。

いた・ぶ・る らりるる[るれれ][搖](他、ら四) ㊀脅迫して物を求む。㊁物を動搖せしむ。ゆすぶる。

いた・ぶ・れる れれるるれれれよ[搖](自、ら下一) ゆれうごく。

いた・べい[板屛](名) 板にて造りたる屛。(板障)。

いた・べう・し ―ビョウシ[板表紙](名) 板にて造りたるへうし。主に折り手本などに付く。

いた・ま[板間](名) ㊀「いたのま」の略言。㊁屋根のふき板の間。

いたま・し しくしくしき[しけれ][傷](形、二) いたむべし。可憐なり。氣なり。いたはし。かなし。

いた・まへ ―マエ[板前](名) まないたをつかさどる人。れうりにん。

いたみ[傷](名) ㊀哀しむこと。(傷)。㊁身體に傷など受けてなやむこと。いたしと思ふ感覺。(痛)。㊂ものの破損又は瑕疵。

いたみ・い・る らりるる[るれれ][痛入](自、ら四) ふかくいたみ恐ふ。おそれいる。

いたみ・ざけ(名)[伊丹酒] 攝津國伊丹より出す酒。(丹醸)。

いた・む まみむむ[めめ][痛](自、ま四) ㊀いたみを感ず。(疼痛)。㊁もだゆ。うれふ。㊂やぶる。こはる。

いた・む めめむむ[むれめよ][傷](他、ま下二) ㊀いたみを感ぜしむるに至らしむ。㊁苦しむ。なやます。㊂こはす。やぶる。

いた・む まみむむ[めめ][悼](自、ま四) 人の死亡せるをかなしみなげく。(傷)。

いた・む めめむむ[むれめよ][撓](他、ま下二) 革を打ちかたむ。たはむ。ねる。

いた・め[板目](名) ㊀板と板とのあはせめ。㊁板の木理のあらくして、直く揃はぬもの。

いため・がは ―ガワ[撓革](名) いためて練りたる革。

いため・がみ[板目紙](名) 紙を糊にて、いくへも張り重ねたるもの、板に張りてつくる故に板目あり、書物の表紙などにつくる。

いため・ぼり[板目彫](名) いための板に彫刻をなすこと。こぐちぼりの對。

〔いため・つ・く くけけくくるこ[痛付](他、か下二) まのあたり責めなじる。

〔いため・つける (他)「いためつく」の訛。

〔いた・める めめめるるれろ[煠](他、ま下一) 食物を油にていりつく。

〔いためる[傷](他)「いたむ」の訛。

いた・もの[板物](名)「いたのもの」の略言。

いた・や[板屋](名) 板にて屋根をふきたる家。――がひ ―ガイ[板屋貝](名)【動】瓣鰓類中單柱類に屬する貝、肉柱即ち後肉柱は一本にして味美なり、脚はこれを缺き、兩殼は大小不同にして、杓子などに用ひらる、南海に多く產す。いたらがひ。(文蛤)。

いた・や・ね[板屋根](名) いたにてふきたる屋根。

‡いた・やぐし[痛矢串](名) 身に徹して重傷を負はしめたる矢。(流矢)。

いたら・がひ ―ガイ(名)【動】「いたやがひ」の一名。

いたり[至](名) 物事の極度。きはまり。(ろ)「さきさがひ」の一名。

いた・る らりるる[るれれ][至](自、ら四) ㊀到着す。とゞく。(到)。㊁到來す。きたる。㊂及ぶ。㊃極まる。

いた・ゐ[板井](名) 板を以て圍ひたる井戶。

〔い・たん[異端](名) ㊀其道にあらざること。㊁正しき道に反したること。

いち[市](名) ㊀多數の人集まりて賣買すること。又、其場所。㊁市街。まち。――を・なす[爲市] 人多くあつまるにいふ。

〔いち[一](名) ㊀物の數。㊁對なきこと。最上。㊂其ものゝみなること。ひとり。㊃ひとたび。いちど。㊄まじりけなきこと。もっぱらなること。㊅ひとしきこと。同じきこと。㊆三味線の絃の最も太くして最も上にあるもの。㊇鬢を結びたる元結より後方の部分。

〔いち[一](數) 數のはじめ。ひとつ。

〔いち―[一](接頭) ㊀或語に冠して確定して指ささる意を表はす。ある。「―日」。㊁或語に冠して全體の意を表はす。すべての。みな。「―座大いに驚く」。

〔いち―[逸](接頭) 或語に冠してすぐれてはやき意を表はす。「―あし」、「―はやく」。

〔い・ぢ[意地](名) ㊀こゝろね。根性。㊁思ひこみたることをつらぬかんとすること。㊂ことさらに人にさからふこと。

いち・あし[逸足](名) 速かに步行すること。いそぎあし。

いち・いち[一一](名、副) ひとつひとつ。めいめい。

〔いぢ・いぢ(名、副) いぢけたるさまにいふ語。「まいっこ故に―して」。

〔いち・う[一宇](名) 一つの家屋又は殿堂。

〔いち・う[一宇](副) 殘らず。悉く。

〔いち・えふ ―ヨウ[一葉](名) ㊀一枚の木葉。㊁こぶね。小船。――らん[一葉蘭](名)【植】蘭科に屬する小草、深山に生ず、莖一本葉一枚にして小花を開く。

〔いち・おう[一應](副) ひとゝほり。「―ごもっとも」。

(いちがいに[一概](副) ❶いち度に。同時に。❷もしなべて。ひきくるめて。
(いちがう[一毫](名) ❶一本のけすぢ。❷少許のもの。
いちがのながれ[一河流](名) 斯世に於て多少の關係あるものは、總て他生の緣あるにいふ。
いちがふます[一合枡](名) 量一合を入るゝます。内方二寸一分、深さ一寸四分五厘。
(いちがん[一眼](名) めっかち。かため。どくがん。(獨眼)。
(いちぎ[一義](名) 一つのことわり。いちり。
(いちぎ[一議](名) たゞ一度の評議。
(いちぎ[一儀](名) ひとつの事。一件。
(いちぎたなし[意地穢](名) むさぼりてのみくひすること。(卑俗)。
(いちぐさ(名)[植] まんねんぐさに同じ。
いちぐさしかけ[一具差懸](名) いちぐゆがけに同じ。
いちぐゆがけ[一具弽](名) 左右の手に掛くる革のゆがけ。古昔、軍陣に用ひしもの。
(いちぐら[市座](名) 市の商品を陳列せる處。
(いちぐらずみ[一庫炭](名) いけだずみ。
(いちげ[一芥](名)(他)「いちがう」に同じ。
(いちげ[一夏](名)[佛] 僧家にて、四月十五日より七月十五日までの稱。其間を安居の期とす。
(いちげい[一藝](名) 一つの技藝又は才能。
(いちげつ[一月](名) ❶ひとつき。❷年の初めの月。むつき。しやうぐわつ。
(いちげする[一下](自、カ下二) ❶おそれちゞむ。ひくく、(俗語)。❷聚ざにかゝる。
(いちげんきん[一絃琴](名) 一條の絃を張りたる琴。すまごと。

いちげんろん[一元論＝Monism](名)[哲] 宇宙の現象の本體は唯一なりとする說。又、唯一の原理を立て、一切を演繹する說。
いちこ[市子](名) くちよせ。あづさみこ。(巫女)。
いちご[苺](名)[植] 薔薇科に屬する灌木。莖蔓共に刺多し、花托の中心高く突起し、其上に許多の子房ありて多漿なる假果をなす。(莓)。——もどき[苺擬](名) 一種の料理。大根をおろし、酢にて蜜柑の實とあへたるもの。
(いちご[一期](名) 一生。いちごう。
†いちこつ[壹越](名)「いちこつてう」の略。——てう[壹越調](名) 十二律の一、宮音なり。
(いちごん[一言](名) ひとことば。すこしのことば。——はんく[一言半句](名) すこしのことば。
(いちざ[一座](名) ❶第一番に位する坐席。かみざ。❷其座全體。❸おなじ座席。❹一つの座位。「一の佛」。
(いちじ[一時](名) ❶ひとゝき。「一は、ときめきたりしが」。❷かつてありしころ。あるとき。❸第一時。——しきん[一時賜金](名) 官吏退職の時の下賜金。
(いちじせんきん[一字千金](名) 一字の價の千金にもあたるを。人の筆跡又は文章などを賞美していふ詞。
(いちじつ[一日](名) ❶いちにち。❷あるひ。❸月のはじめの日。ついたち。——さんしう[一日三秋](名)(わづか一日も三年を經たる心地する義) 物事をまちわぶるをいふ語。——せん

しう[一日千秋](名)(わづか一日も千年を經たる心地する義) 前條に同じ。——のちやう[一日長](名) すこしくまされる所あるを謂ふ。
いちじのし[一字師](名)(唐の鄭谷の故事に出づ) 詩文にて、一字の教を施すもの。
(いちじはうていしき[一次方程式](名)[數] たゞ一つの未知數の第一冪のみある方程式。即ち、3x+17=32の如し。
(いちじふさいり[一事不再理](名)[法] 已に判決を經たる事件は、更に審理せずといふ原則。
いちじゆく(名)[植] 桑科に屬する木。葉は大形にして分裂し、果實は五月頃葉間に結ぶ。無花果。天仙果。
いちじゆのかげ[一樹蔭](名)「いちがのながれ(一河流)」に同じ。
いちじるし[著](形、二) あきらかに知れわたる。かくれなし。ちよめいなり。
†いちしろし[著](形、二) いちじるしに同じ。
(いちぜんめし[一膳飯](名) 飯を椀にもりて一杯づゝ價を定めて賣るもの。——や[一膳飯屋](名) いちぜんめしを賣る店。
(いちぞく[一族](名) 同じ族。血族。
(いちぞん[一存](名) おのれひとりの考へ。
(いちだい[一代](名) ❶人のいつしやう。❷一家の戶主。——き[一代記](名) 人一代の事跡をかきあらはしたる記錄。(傳)。
(いちだいじ[一大事](名) ひとつの大なる事。容易ならぬ事。「身の—」。
(いちだん[一團](名) ひとかたまり。ひとくみ。「一の和氣」。
(いちだん[一段](名、副) ❶ひときり。❷ひときは。いっそう。——くわ

つよう[一段活用](名)[文法] 動詞の語尾變化の一。——らく[一段落](名) ひときり。「文章の—」。
(いちぢやう[一定](名) 確定して動かすべからざること。一つに定まること。いつてい。「一もなきこと」。「に」なれば、ゆるし玉ふ」。
いちぢやう[一定](副) ❶ひとまきり。❷かならず。たしかに。
(いちぢん[一陣](名) ❶戰陣の備へ立ての一の隊。❷すべての軍隊。「一の風」。
(いちづ[一途](名) ひとすぢ。ひたすら。
(いちづく[意地盡](名) いぢのかぎりをつくすこと。はりあひ。いきはり。
(いちでう[一條](名) ❶ひとすぢ。❷一つの事。「御話しの—」。延引して、
(いちど[一度](名、副) ひとたび。いつぺん。
(いちどう[一同](名) ❶同じきこと。❷全體。
(いちどう[一同](副) みな。いづれも。
(いちどき[一時](名) ひとゝき。いちど。
(いちどく[一讀](名) いつぺんよむこと。——くわい[一讀會](名) 第一讀會に同じ。
(いちなん[一男](名) そうりやう。ちやうなん。
(いちに[一二](名) ひとつふたつ。わづかの數。——さんくわちつそ[一二酸化窒素](名)[化]「あさんくわちつそ」に同じ。
(いちにち[一日](名) ❶朝より夜までの間。ひとひ。ひめもす。❷朝より次ぎの朝までの間。一晝夜。❸あるひ。❹月の第一の日。いちじつ。——ていへん[一日程](名) 一日にあゆみ得るみちのり。——へんじ[一日片時](名) ひとひ。かたとき。ごくしばしの間。
(いちによ[一如](名) ❶相異ならざること。二なら

ざること。「邪正一」。❷[佛] 眞如實相の理。
(いちにん[一任](名) ❶まかせきり。❷官職にあること。
(いちにん[一人](名) ❶ひとり。❷主權者。天子。「一慶あれば」。——たうせん[一人當千](名) 一人の力よく千人にも當たること。——まへ[一人前](名) ❶人一人に供すべきだけの分量。❷人一人の負擔額「一の一額」。❸人一人としての價値を有すること。
(いちねん[一年](名) ❶陰曆にて、三百六十日の稱。陽曆にて三百六十五日の稱。❷世紀又は年號の第一の年。❸ある年。
(いちねん[一念](名) ❶ひとすぢに思ひこみたること。又、ちよつと思ひ出だしたること。❷極めて短かき時間。
いちねんさう[一年草](名)[植] 一年ごとに新芽を出だす草の總名。いちねんさう。
いちねんこん[一年根](名)[植] 一年ぎりにて枯死する根。稻などの如きもの。
いちねんさんぜん[一念三千](名)[佛] 吾人の一念のうちに、三千の法界を具有することをいふ。
(いちねんしぐわんへい[一年志願兵](名) 滿十七歲以上滿二十六歲以下の男兒にして、中學程度或は中學程度以上の學校を卒業するか、若しくは定規の試驗に及第したるものにして、現役中の諸費を支辨し、一個年間陸軍に服役する者の稱。
(いちねんせい[一年生](名) ❶[植]「いちねんこん」に同じ。❷學校の第一年級に屬する生徒。——しよくぶつ[一年生植物](名)[植] 一年間に、播種し成長し更に開花結實に至る迄の生

活を了する植物。稻などの如し。
(いちねんぢゆう[一年中](名) 一年の始めより終りまでのあひだ。ねんぢゆう。ひとゝせのうち。
(いちねんふしやう[一念不生](名)[佛] 惡邪欲の所生にして、心性上に一念をも生ぜざる境界の稱。即ち、頓悟の證果。
(いちのう[一能](名) ひとつの技藝又は學術に通達すること。
†いちのかみ[一上](名) 左大臣の異稱。太政官の事を總理せし故に名づく。
†いちのかみ[市正](名) 古昔のいちのつかさの長官。
†いちのきさき[一后](名) 皇后宮を申し奉る「語」。
†いちのこ[一五](名) ぬひばりの一種。一寸五分のたけのもの。
†いちのだいじん[一大臣](名) 左大臣の異稱。
†いちのつかさ[市司](名) 古昔、京都の市の事をつかさどりたる官。東と西とに分る。
†いちのて[一手](名) 第一番の仕方。
†いちのひと[一人](名) 攝政又は關白の異稱。
いちのみこ[一皇子](名) 最初に生まれ給へる皇子。
いちのみや[一宮](名) ❶いちのみこ。❷諸國にある第一位の神社。
いちば[市場](名) 商人のあつまりて賣買をなす所。
(いちはつ[一八](名)[植] 鳶尾科に屬する草本。葉は劍狀鋸齒にして突起を有す。花は夏始に開く、花蓋の外層の片は細裂せる突起を有す。花蓋の内層は單一なると分岐せるとあり、花蓋の片は毛狀の鬚齒を有す。觀賞用として栽培せらる。
いちはやし[逸速](形、二) いきほひ烈し。とくしとし。(素馴、疾風)。

いきほひ強し、するどし、とし、はやし。

‡いちはやぶ【逸速】(自、ば上二) するどくなる。はげしくなる。

いぢばる【意地張】(自、ら四) いぢを張りて、我思ふまゝをたてとほす。

いちばん【一番】(名) ❶ひとくみ。❷第一。❸第一に。❹物品の中にて最も大なるもの。——がけ【一番駈】(名) ❶第一ばんに、敵陣にかけ入ること。❷人に先んじて事をなすこと。——ぞなへ【一番備】(名) 第一番目にそなへたる軍隊。——て【一番手】(名) 第一番目の人數手勢。——でし【一番弟子】(名) 弟子の中にて第一位にあるもの。——どり【一番鷄】(名) 曉に、まづ第一に鳴くにはとり。——のり【一番乘】(名) 先陣又は先頭となり、敵陣に向ひて第一に乘り入ること。——め【一番目】(名) ❶第一番。❷芝居の興行にてはじめに演ずる狂言。——やり【一番鑓】(名) 人より先に敵陣へかけいりて、鑓をいるゝこと。

いちばん【一番】(副) ❶こゝろみに。かりそめに。「—やって見やうか」❷このうへもなく。ことに。「—のたかいもの」

いちひ【櫟】(名)【植】公孫樹科に屬する常綠喬木。葉は披針狀をなし互生す。花は單性雌雄異株なり。飛驒・下野國等の高山に產す。木材は種々の用に供せらる。いちひがし。(石櫧)。

いちび(名)【植】錦葵科に屬する一年生草本。高さ六七尺許。葉は心臟形にして尖り、

〔いちび〕

花は葉腋に單生し、花瓣は黃色を呈す。雄蕊は花瓣より短し。莖の皮より纖維を採り、これを綿又は絲に製し種々の用に供す。きりあさ。(莔麻)。

いちび(名)【植】田麻科に屬する一年生草本。高さ二三尺許。葉は長楕圓形にして尖る。花は莔麻に似て小く、果實は無花果に似て小し。種子は胡麻に似る。莖の皮より纖維を採り繩又は絲に製し種々の用に供す。多く海邊に栽培す。つなそ。(黃麻)。

いちひ・おし【櫟壓】(名)【植】いちひに同じ。

いちび・がら【莔麻稈】(名) いちびの莖の皮をはぎたるもの。これを燒きて炭となし、ほくちを製す。

いちびと【市人】(名) 市に居る人。市に居て商賈に從事する人。あきうど。えやうにん。

いちび・はばき【莔麻脛巾】(名) 莔麻の皮にて作りたるはゞき。

〔いちびはばき〕

いちひめ【市姬】(名) 市街を守護する女神。

いちぶ【一分】(名) ❶古昔、國司の下官なる史生の稱。❷一分銀の略言。❸一尺の百分一。❹一を十又は百に分ちたるもの、一。❺こわけ。せうぶん。——ぎん【一分銀】(名) 德川時代の銀貨幣の一。一兩の四分一にあたりたるもの。

いちぶ(名)【植】いちびの一名。

いちぶ【一部】(名) ❶ひとくみ。ひとこわけ。❷書籍のひとくみ。一卷若しくは數卷よりなる書物の一組。——しじゅう【一部始終】(名) ❶書物の始めより終りまでをいふ。❷物事の始めより終りまでをいふ。

いちぶつ・じゃうど【一佛淨土】(名)【佛】同じ佛界に生まれあふこと。

いちぶ・はんけつ【一分判決】(名)【法】其事件の一部分のみの判決。

いちぶ・めし【一分召】(名) 古昔、式部省にて、諸國の史生を任命せしこと。

いちぶん【一分】(名) 其人の面目又は職責。「—が立たぬ」

いちべつ【一瞥】(名) ちらとみること。ちよつとみること。

いちべつ・いらい【一別以來】(名) いちどわかれてよりこのかた。

いちまい・かんばん【一枚看板】(名) ❶俳優又は其他遊藝人の技術のすぐれたるが、他と連名にせず、特に一枚の看板に其名を掲ぐること。❷俳優又は其他遊藝人の魁の稱。❸一團隊の領袖。❹衣類のよきもの、たゞ一枚の外に所有せざるをあざけりいふ語。

いちまい・だな【一枚棚】(名) 稻などを積み乾せる田の中を通り行く小舟。たぶね。

いちまい・ゑ【一枚繪】(名)「にしきゑ」に同じ。

いちまつ【市松】(名)「いちまつもやう」の略言。——こもん【市松小紋】(名) いちまつもやうの小紋。——もやう【市松模樣】(名) 一種の地紋。いしだゝみに同じ。元文の頃、役者佐野川市松といふもの、此模樣の服を着せしに起る。

いちみ【一味】(名) ❶たゞ一つの品(多く藥品にいふ)。❷我にひとしくみかたせるもの。——どうしん【一味同心】(名) 心を一にして、深く託してあること。又、其人。

いちみやう【一名】(名) 又の名。別名。異名。

‡いちめ【市女】(名) 市に住居する女。又女の商人。

いちめい【一命】(名) ❶人一人のいのち。❷支那の上古にて、士となること。「一命僕」

いちめ・がさ【市女笠】(名) 中高なるぬりがさ。古昔、婦人の多く用ひしもの。「あめふるひの—」

〔いちめがさ〕

いぢめる【苛】(他、ま下一) 弱者を虐待す。さいなむ。

いちめん【一面】(名) ❶ひとかた。一方。❷ひとつら。總體。——しき【一面識】(名) ひとたびおもてを合はせて、知己となりたること。「—の無いものに、むたいな無心。」

いちもく【一目】(名) ❶たゞ一個の目。❷ひとわたりみること。❸圍碁にて、一個の目。——さん【一目散】(副) ひたすら急ぎて、脇目もふらずに。いつさんに。——おく (圍碁の語より出づ) 強きものに讓る。

いちもち【逸物】(名) ❶拔群の人物。❷駿足なる駿馬。又、鷹、犬などにもいふ。「これ屈竟の—なり」

いちもつ【逸物】(名) いちもちに同じ。

いちもつ【一物】(名) ❶ひとつのもの。❷胸中に、何か一種の惡しき計算を抱くこと。

いちもん【一門】(名) 一家族又は同姓の一族。

いちもん【一文】(名) ❶一錢の十分の一。❷一つの字。一つの文。——じ【一文字】(名) ❶一つの字。❷一といふ文字。❸一といふ文字の如くに、眞直なること。❹かけもの、裝飾の一、掛物の上下に、橫につくるもの。——ぜに【一文錢】(名) たゞ一文のぜに。わづかの金錢。——なし【一文無】(名) 一もんの錢をも所持せぬこと。すかんぴん。——ふつう【一文不通】(名) ❶字一字をもよみ得ざること。すこしも字を知らざること。❷耳に一つのてがみのとりやりもなきこと。——をしみ【一文惜】(名) わづかなる錢をも惜むこと。

いちや【一夜】(名) ❶日ぐれより夜明けまで。ひとばん。❷あるばん。

いちやう【一樣】(名) ひとつさま。同じさま。

いちやう・らいふく【一陽來復】(名) ❶〔易の語〕陰曆にて、十一月又は冬至の稱。❷冬至の日より陽氣さかりかへるの意。

いちや・ぐさ【一夜草】(名)【植】いちやくさう。

いちやく・さう【一藥草】(名)【植】鹿蹄草科に屬する常綠草本。葉は圓形にして深綠色を呈し、葉脈は白綠色なり。花瓣は六個にして多くは白く、稀には紫なるもあり。花柱は長くして總狀花序を生ず。觀賞用として栽培せらる。(鹿蹄草)。

〔いちやくさう〕

いちや・けんげう【一夜檢校】(名) にはかに檢校の身分となるが、數時の榮華にあふこと。

いちや・ざけ【一夜酒】(名) 一夜のほどにかもしたる酒。ひとよざけ。(醴酒)。

いちや・づくり【一夜造】(名) たゞ一時の間にあはせにつくること。

いちや・づま【一夜妻】(名) 遊女などの類。

いちゅう【意中】(名) ❶心のうち。❷心のうちにおもふこと。——のひと【意中人】(名) あふ人。こひしき人。

いぢゅう【移住】(名) 土地をかへて住居すること。外國にうつり住むこと。——みん【移住民】(名) 本國より他國に移りすむ人民。

いちらく【一樂】(名)「いちらくあみ」の略言。——あみ【一樂編】(名) 和泉の人、土屋一樂の編み出したる編細工。——おり【一

樂織】(名) ❶いちらくあみ。❷絹物の名。精好なる絹絲にして浮き織りにしたるもの。

いちら・し(形、二) いちしるし。しるし。いたいけなり。

いちらす【射散】(他、さ四) 矢を射て敵をおひちらす。

いちらふ【一臈】(名) 年功によりて長たる人。「—の藏人」「—の老僧」

いちらん【一覽】(名) いちど目をとほすこと。ひとわたり見ること。——ごていきばらひ【一覽後定期拂】(名) 手形支拂人が手形所持人の呈示により、手形を一覽したる後、確定せる期間を經過して、支拂ふこと。——ばらひ【一覽拂】(名) 手形支拂人が手形所持人より手形を呈示すれば、直ちに支拂ふこと。

いちり【一里】(名) 里程の名。普通三十六町をいふ。ところによりては、五十町又は七十町をいふ。

いちり【一理】(名) ひととほりの道理。

いちり・いちがい【一利一害】(名) 利と害と相伴ふこと。

いちりう【一流】(名) 他に異なりたる一派の流儀。「自家一流をきはめたり」

いちり・づか【一里塚】(名) 古昔、街道に一里ごとに土を高く盛り、榎樹などを植ゑし目標。(里堠)。

いちりふ・まんばい【一粒萬倍】(名) ひと粒をまけば、萬粒となる義。僅かなるものゝ、多數に增殖するにいふ語。

いちりやう【一兩】(名) ❶一つ又は二つ。❷「兩」の條を見よ。

いちりん・さう【一輪草】(名)【植】毛茛科に屬する草。高さは五六寸內外、小葉は深裂す。三四月の頃、白色の花を開く。萼片は大形にして五個あり。觀賞用として栽培せらる。(鵝瓶梅)。

いちりん-ざし【一輪挿】(名) 一輪又は二三輪の花ある枝をいくるを、又、其ための小さき花瓶。
いぢ-る【弄】(他,ら,四) 手にて物を玩弄す。もてあそぶ。
いち-るゐ【一類】(名) ⊖どうぞく。⊜なかま。
いち-れい【一禮】(名) 一回禮を行ふを。
いち-れつ【一列】(名) ⊖ひとならび。ひとつら。⊜なかま。くみ。——いったい【一列一隊】(名) みなひとしなみ。
いち-れん-たく-しやう【一蓮託生】(名) ⊖【佛】念佛を称ふれば、死後、もろ共に極樂の蓮臺の上に生るゝといふを。⊜人と共に、善くもなれば惡しくもなるを。
いち-ろく【一六】(名) ⊖すごろくなどにて、さいの目に一と六との出づるを。⊜明治九年以前の休日、即ち、月の中にて、一日十一日二十一日及六日・十六日・二十六日の稱、其當日は休暇と定まりたり。——しようぶ【一六勝負】(名) ⊖すごろく。ばくち。⊜運任せに、冒險なる事を爲ふを。
いち-ゐ【一位】(名) ⊖位階に即ける位階の第一。⊜【植】いちひに同じ。(櫟木)。
いち-ゐ【一葦】(名) こぶね。小舟。——たいすゐ【一葦帶水】(名) はゞ狭き河海にいふ語。
いち-ゐん【一院】(名) ⊖二人以上の上皇ましましとき、第一番めの上皇を申す語。⊜一つの寺院又は官廳。——せい【一院制】 國會が、國民の選舉に係かる議員を以て、組織したる一院のみなると、二院制の對。
いち-ゑん【一圓】(名) ⊖そうたい。ぜんたい。⊜我國貨幣の單位、一圓の百倍。
いち-ゑん【一圓】(副) ⊖ことごとく。みな。「たえて」一向。⊜ひ

†いつ【稜威】(名) 尊嚴なる威光。
いつ【何時】(名) まだ定まらぬ時。
いつ【何時】(副) いづれの時に。「―行くか」。
いつ【五】(數) 二と三とを合せたる數。いつゝ。ご。
いつ【一】(數) 「いち」に同じ。——を きいて じふ を しる【聞一知十】 知解の極めて敏捷なるにいふ。
いづ【沍】(自,た,下二) こほりて凍結す。「いてつく」。
いづ【出】(自,だ,下二) ⊖うちより外へ行く。⊜あらはる。⊜發生す。おこる。四まぬかる。のがる。五ぬきんづ。すぐる。
いづ【何】(接頭) 或語に冠していづれの意を示す語。「―方」。
いつ-いう【佚遊】(名) あそびにふけるを。たのしみあそぶ。
いづ-いし【伊豆石】(名) 伊豆國より出だす石材。
いつ-か【五日】(名) 月のついたちより第五日目にあたる日。
いつ-か【何時】(副) ⊖いつともなく。いつのまにか。⊜おそかれはやかれ。早晩。⊜いづれの時か。いつごろか。四かつて。いつぞや。
いっ-か【一價】(名) 【化】水素一原子と化合し或はこれと入れ換はるを、原子又は根に關していふ。——げんそ【一價原素】(名) 【化】當量と原子量と同一なる原素、例せば、水素・鹽素の如し。
いっ-か【一家】(名) ⊖一つの家屋。⊜一家族。「一の騒ぎ」。⊜學術・技藝など、他と異なりて一流をなすもの。「一の學風」。——き ちよ を なす【機杼】 一家一派の意輪又は獨創などをつくりだす。
いっ-かう【一向】(名) ひとむきに心を注ぎ、他を顧みざるを。——しゆう【一向宗】(名) 【佛】淨

土宗より分派したる眞宗の稱、親鸞上人の創始にかゝる。一向に無量壽佛を念ずるを以て宗旨となすよりいふ、十一代蓮如上人より門跡と號す。ぼやうどうしゆう。もんとしゆう。
いっ-かう【一向】(副) ⊖ひとむき。ひたすら。⊜いっさい。すべて。
いっ-かく【一角】(名) ⊖【動】游水類に屬する哺乳動物、腹部白く背部黒斑にして、二本の牙あり、藥劑に用ひらる、北極の海に産す。⊜いっかくの角。⊜ひとかど。ひとすみ。
いっ-かく【一格】(名) あのれみづから一つの格式を立つるを。
いっ-かけ【沃懸】(名) ⊖いかけの音便。⊜器物の縁などを金屬を以て被ふを。「鈿裏」。——ぢ【沃懸地】(名) 「いかけぢ」の音便。
いっ-か-げん【一家言】(名) 自家主張の論説。
†いつかし【嚴】(形,二) たふとし。いつくし。
いづ-かた【何方】(代) どちら。どこ。
いっ-か-ちゆう【一家中】(名) 武家時代に、一家の臣僕をこぞりていふ語。「赤穂一の浪人ども」。
いっ-かど【一角】(名,副) ひときはすぐれたるさまにいふ語。
†いつか-の-せち【五日節】(名) 古昔、五月五日に、天皇武德殿に出御ありて、行はれし宴會。
いっ-かゝる【繫】(自,ら,四) つながる。
いっ-かん-ばり【一閑張】(名) 一種の漆塗り細工、机・茶筒などを紙にて張り、それを漆塗りにしたるもの、飛來一閑の創始にかゝるをいふ。
いつき(名) 【植】山茱萸科に屬する木、白色花瓣樣の四個の苞より成れる花を有す、木材は種々の用

に供せられ、果實は食すべし。やまぼうし。からくは。「華嚴」四照花。
†いつき【齋】(名) ⊖いつくを。⊜いつきのみこ。
いっ-き【一揆】(名) ⊖暴徒の兵。暴徒。⊜土民蜂起して、所在を掠奪するを。
いっ-き【一氣】(名) ひといき。「一の跡」。
いっ-き【一騎】(名) ひとりのうまのり。——うち【一騎打】(名) ⊖一騎づゝ列なりて行くを。(單列)。⊜敵方一人づゝ、鋒を交へて勝負を爭ふを。
いっ-き-かせい【一氣呵成】(名) ひといきに、文章をかきあぐるを。
いっ-き-たう-せん【一騎當千】(名) 一騎の力よく千人にあたるを。
いつ-きぬ【五衣】(名) 衣服の五品、即ち、表衣・下襲・半臂・單・引倍木の稱。
†いつき-の-みこ【齋御子】(名) 古昔、天皇即位のとき、伊勢の大神宮又は加茂の神などにつかへ奉らしめられし未婚の女王又は内親王。
†いつき-の-みや【齋宮】(名) ⊖伊勢大神宮のいつきのみこ。又其居所。——のつかさ【齋宮寮】(名) いつきのみやの事をつかさどりし官。
†いつき-の-ゐん【齋院】(名) 加茂のさいいん。——のつかさ【齋院司】(名) いつきのゐんの事をつかさどりし官。
†いつき-むすめ【齋娘】(名) たいせつにして、かしづきそだつる娘。秘藏娘。
†いつき-め【齋女】(名) 神に奉仕する少女。
いっ-きよ【一擧】(名) ⊖ひとたびあぐるを。⊜ひとたびなすを。「一して功を奏す」。⊜ひとたび出兵するを。「天兵一して」。——しゆ-いっとう-そく【一擧手一投

足】(名) ひとたび手をあげひとたび足をふみだすを。わづかばかりのはたらきにいふ語。——りやう-とく【一擧兩得】(名) ひとつのことにて二様の利益を收め得るを。
いっ-きよう【逸興】(名) おもしろみ。たのしみ。
いっ-きよう【一興】(名) 一つの興あるを。「これも一」。
†いつく【齋】(自,か,四) ⊖心身を清めて神につかふ。⊜かしづきまもる。たいせつにす。
いづ-く【何處】(代) 「いづこ」に同じ。
いっ-く【射付】(他,か,下二) 射て中つ。
†いつくし【嚴】(形,二) ⊖いかめし。いかめしく。(嚴)。⊜うつくし。うるはし。(美)。
†いつくしび【愛】(名) いつくしみ。
いつくしみ【愛】(名) いつくしむを。
いつくしむ【慈】【愛】(他,ま,四) ちようあいす。たいせつにす。あはれむ。いとほしむ。めぐむ。あいす。
いっ-く-どう-おん【異口同音】(名) 多くの人が、皆をそろへて、同じ言葉を云ふを。
いっ-くわ【一花】(名,副) 暫しの間。
いっ-くわい【一回】(名,副) ⊖ひとたび。⊜ひとまはり。⊜一年。——き【一回忌】(名) 死にて後、翌年の其日に行なふ佛事。
いっ-くわく-せんきん【一攫千金】(名) 一仕事に千金をつかむをいふ。(冒險事業にいふ)。
いっ-くわん【一貫】(名) ⊖錢一千文又は九百六十文の稱。⊜貫目千匁の稱。⊜首尾始終をつらぬくを。ぬきとほすを。
いづくん-か【安】(副) 何處にかの義。どうして

か。「一知らん」。
いづくん-ぞ【焉】(副) 何處にぞの義。どうして。「一知らん」。
いっ-け【一家】(名) おなじ家のもの。親族。「一一門」。
いっ-けつ【一決】(名) ひとたびきまるを。
いっ-けん【一見】(名) ⊖ひとたび目をとほすを。ちよっとみるを。——きうのごとし【一見如舊】 一見して意氣相投じ、むかしからの友の如くに、親密なる間柄となるを。
いっ-けん【一件】(名) ⊖ひとくだりの事。⊜あの事。「例の一」。
いっ-けん【一間】(名) ⊖家の柱と柱との間。「家屋一」。⊜六尺の長さ。(殿俗云南殿九間四面)
いっ-けん-や【一軒屋】(名) 近隣のないいへ。
いづ-こ【何處】(代) どこ。いづく。
いっ-こ【一己】(代) われ一人。
いっ-こう【遜口】(名) いひあやまり。いひすぎ。
いっ-こく【一國】(名) ⊖一國を限りて。⊜頑固にして人の意見をいれぬもの。——もの【一國者】(名) 頑固にして人の意見をいれぬ、他の事を知らぬもの。
いっ-こく-せんきん【一刻千金】(名) 蘇東坡の詩に、「春宵一刻直千金」とあるに出づ。一刻の間にも千金の價値あると、其時間の興味大なるにいふ。
いっ-こ-にん【一箇人】(名) 國家社會其他團體に對して、それを組織せる各人の稱。
いっ-こん-ぞめ【一斤染】(名) べにの花一斤を以て、一匹の絹をそめたるもの。其色ほのかにして薄し。
いっ-さい【一切】(名,副) ⊖みな。すべて。のこらずのもの。全體。一般。——きやう【一切經】(名) 【佛】佛教の經典の總名、經・律・論の三藏をいふ、凡て七千餘卷。

宇治黄檗山に板木あり。——**おゆおやう**[一切衆生](名)[佛]世に生存せるもの、總稱。

(いっ-さく)[一昨](名)年月日にて、中一つ置きて過ぎ去りたるを、いふ。——**おつ**[一昨日](名)をと、ひ。——**てう**[一昨朝](名)をと、ひのあさ。——**ねん**[一昨年](名)をと、とし。——**ばん**[一昨晩](名)をと、ひのばん。——**や**[一昨夜](名)をと、ひのよる。

(いっ-さつ)[一札](名)一通の文書。「一差入れ」

(いっ-さん)[逸散](名)にげちること。——**に**[逸散](副)ひたすらにいそぎて。「——かけゆく」

(いっ-さんくわたんそ)[一酸化炭素](名)[化]木炭若しくは炭素化合物の燃燒の際、空氣の供給不充分なるとき生ずる無色の瓦斯、火氣に觸るれば淡青色の焰を發して燃え、二酸化炭素となる。炭火を煽ぐとき見ゆるものこれなり。

(いっ-サンマイ)[一三昧](名)[佛]一念をこめて事をなすこと。一心不亂。

(いっ-し)[一子](名)ひとりご。

(いっ-し)[一紙](名)❶一枚の紙。❷又、同じ紙。❸一枚の文書。

(いっ-じ)[逸事](名)世に多くあらはれざる事柄。

(いづ-ち)[何地](名)「いづち」の訛。

(いっ-しう)[一週](名)❶ひとまはり。❷七日間。

(いっ-しう)[一周](名)❶ひとまはり。❷滿一年。——**き**[一周忌](名)いっくわいき。「一周忌辰」

いつ-しか[何時](副)いつのまにか。「——秋も過ぎゆきぬ」

(いっ-しき)[一式](名,副)ひとそろひ。そうたい。

(いっ-しき)[一色](名,副)ひといろ。ひとしな。

(いっ-し-さうでん)[一子相傳](名)學術・技藝などの奧秘を、我子の中ひとりに傳ふるのみにて、他にもらさゞること。又、其傳ふる奧秘、「一の術」。

(いっ-しおん)[一私人](名)國家又は其統治機關に對して、其統治を受くる各人の稱。

(いっ-しつ)[一室](名)あなじ室。ある室。ひとま。

いっ-しどうじん[一視同仁](名)世人に對し彼此親疎の差別を置かず、あなじく仁愛をつくすこと。

(いっ-しはんせん)[一紙半錢](名)紙一枚錢半文、轉じて、わづかなるもの。

(いっ-しやう)[一生](名)人のうまれてより死ぬるまでの間。[終身]。——**がい**[一生涯](名)いっしやう。——**けんめい**[一生懸命](名)命にかけて物事をすること。

(いっ-しやうさんたん)[一唱三歎](名)詩文をとなへて三たびこれに嘆ずる、轉じて、詩文の巧妙なるを稱するにもいふ。

(いっ-しやうぞく)[一裝束](名)甲胄の五品、即ち、「こて」「はいだて」「かぶと」「はちまき」「すねあて」の總稱。

(いっ-しゅ)[一種](名)❶同類屬中の一物又は別異なる物。ひといろ。ひとくさ。❷「いつもの」に同じ。

(いっ-しゅつ)[逸出](名)はなれいづること。

(いっ-しょ)[一書](名)❶ある書物。❷一通の文書、「一差上げ候」。❸一冊若しくは一部の書物。

(いっ-しよ)[一所](名)ひとゝころ。——**けんめい**[一所懸命](名)一個所たまはりたる知行をいのちにかけてたのみとなすこと。——**ふぢゆう**[一所不住](名)住所不定にして、永く同じ處に住まぬこと。

(いっ-しょ)[一緒](名)一まとめ、又、同一。——**に**[一緒](副)ひとまとめに、あなじく、ともに。

(いっ-しょうます)[一升枡](名)物一升を量る

器、内方四寸九分、深さ二寸七分一厘。

(いっ-しん)[一身](名)❶我身ひとつ。❷からだいっぱい。「一是膽」

(いっ-しん)[一新](名)たびあらたまること。全くかはること。

(いっ-しん)[一審](名)[法]其事件の裁判をなす最初の裁判所が、事實及法律の裁判をなすこと。

(いっ-しん)[一心](名)一方にのみむけたる心。——**ふらん**[一心不亂](名)心を一方にこらして、他をかへりみざること。

(いっ-しんけう)[一神教]=Monotheism](名)造化の神は惟一なりとする宗教、即ち、基督教・猶太教の如きをいふ。

(いっ-しんとう)[一親等](名)[法]親等の一、或人と其人の配偶者より、一世を隔つるものゝ關係、例せば、或人と其親若しくは子との關係、又は其人と配偶者の親若しくは子との關係これなり。

いっ-す[逸す](自,サ變)❶はなる。すぐる。❷そる。はしる。❸にぐ。のがる。

いっ-す[逸す](他,サ變)[逸](自,サ變)の他。❶はなつ。ゆるす。❷のがす。にがす。

いつ-すゐ[一水](名)❶ひとすぢの水流。「——をめぐる」❷すこし。「酒が——もない」。

いつすもの[一種物](名)酒宴などを催すとき、各自に一種宛の肴をもちよること。

(いっ-すん)[一寸](名)❶尺の十分一。❷わづかの間。「——前は暗」——**のがれ**[一寸逃](名)暫時責任を免れんとすること。——**ぼふし**[一寸法師](名)矮小なる人を嘲りていふ語、[矮人]。

(いっ-せ)[一世](名)いっせい[一世]に同じ。

(いっ-せい)[一世](名)❶一期の世。いちだい。いつまや。❷其當時。其時代。「一に傑出す」。❸父子唯一

代移れること。❹歐洲に於ける同一名の帝王中、其第一の人を呼ぶ稱。

(いっ-せい)[一齊](名,副)同時。又、等一。——**しやげき**[一齊射擊](名)其部隊が同時にひとしく敵に對して射擊をなすこと。

(いっ-せいちだい)[一世一代](名)❶一生涯。一世。「一の大出來」❷遊藝者などが、一生涯の中にて、これを限りと技も晴れの所作をすること。

(いっ-せう)[一笑](名)ひとわらひ。わらひぐさ。——**に ふす**氣にとめず又は眼中におかずして、其場の事をやりすごす。

(いっ-せき)[一夕](名)ひとばん。ある夜。

(いっ-せつ)[一說](名)ひとつの說。又、ある說。

(いっ-せつ)[一切](副)いつさい。いつこう。「一知らぬ」

(いっ-せつ-たおやう)[一殺多生](名)[佛]一人を殺して、多くの人をたすくること。

(いっ-せのげんじ)[一世源氏](名)皇子の臣下となりたる方に、源氏を賜はりたるもの。

(いっ-せん)[一錢](名)❶一圓の百分一。❷いちもんせん。一文。——**ぎり**[一錢切](名)中古、錢一文の窃盜をも、斬に處せしこと。一說に、罰料として、犯人の持てる金は、一文たりとも取上ぐるをいふなりといふ。——**あたひ せず**[一錢不直](名)いちもんのねうちもなし。

いつせんどばらひ[一千度祓](名)祓ひの詞を千たび奏して祓禊をなすこと。

いつ-せんねんりう[伊豆仙蓼](名)[植]うばがねもちに同じ。

(いっ-そ)[副]❶むしろ。❷どうしても。❸かへって。

(いっ-そう)[一層](副)ひきとは。ひとかさ。さらに。

いっ-ぞや[日外](副)いつの頃なりしか。かつて。さきごろ。

(いっ-たい)[一體](名)❶あなじ身體。ひとつのからだ。❷あなじみち。ひとつの關係。

(いっ-たい)[一體](副)❶すべて。おしなべて。❷もともと。がんらい。

(いっ-たう)[一刀](名)❶一本のかたな。❷ひとたち。「一に斬りすてたり」——**さんれい**[一刀三禮](名)佛像をきざむに、ひとかたなゐるたびに三たび禮拜すること。——**りう**[一刀流](名)劍術の一派、伊東一刀齋の創めしもの。——**りやうだん**[一刀兩斷](名)❶一刀にて物の體を二つにきりわること。❷果斷裁決を神速にすること。

(いっ-たん)[一端](名)かたはし。「一を以て推測す」

(いっ-たん)[一旦](副)いちど。ちよっと。

(いっ-だんし)[一彈指](名)指にてはじきみる間。極めて短き時間。一彈指頃六十五刹那。——**きやう**[一彈指頃](名)前條に同じ。

(いっ-ち)[一致](名)❶ひとつになること。「人心一」❷同じきこと。合ふこと。

いづち[何地](代)いづこ。いづかた。どこ。

(いっ-ちはんかい)[一知半解](名)物事に就いて識る所の極めて淺薄なること。

(いっ-ちゃうらう)[一帳羅](名)たゞひとかさねの外は、所有せざる晴れ着。

(いっ-ちゃくしゅはん)[一挾手半](名)あやかひとなかびとを張りたる間の長さを加へたるの長さ。其中の長さ。「一の彌陀の三尊」。

いっちゅうぶし[一中節](名)淨瑠璃節の一種、都一中の創めしもの。

(いつつ)[五](名)古昔の時刻の名、今の八時。

いつつ-う[五箇](數)二と三とを合はせたる數。

いつつ-あこめ[五袙](名)五枚かさねてあこめを着ること。

いつつ-ぎぬ[五衣](名)五枚重ねたる様に仕立てたる唐衣、古昔の婦人の服。俗に十二單といふ。

いつつ-の たなつもの[五穀](名)五穀。即ち、粟・稗・麥・豆・稻をいふ。

いつつ-の をしへ[五教](名)儒學にて、仁・義・禮・智・信をいふ。

いつつ-を-の-くるま[五緒車](名)くるまの一種、くるまの簾の邊と、編み目の緣を覆ひたる革との間に、二條の風帶を垂れたるもの。昔のまゝ五緒車ともいふ。

いつ-て[五手](名)「いつてふね」の略言。

(いっ-て)[一手](名)ひとて。「一に引き受く」

(いっ-てう)[一朝](名)❶あるあさ。❷あなじ朝。❸あるとき。——**いっせき**[一朝一夕](名)ひとあさとひとばん。❶須臾の間。暫時。

(いっ-てつ)[一徹](名)ひとすぢに思ひこみたる事を、容易に動かさぬ人。

いつて-ぶね[五手船](名)古昔、伊豆より造り出だせし船、又、五挺立の船なりともいふ。

(いっ-てん)[一點](名)❶ひとつの點。❷わづかばかりなる箇所。❸點ひとつ。「一の曇りなし」❹漏刻の時刻。夜を五更に分ち、一更を又五分して一點と云ふ。

(いっ-てん)[一天](名)大空の全體。——**か**[一天下](名)あめのしたの全體。

(いっ-てん-こう)[一點紅](名)❶妓女の異稱。❷すぐ

いうあ―いうふ

いうあ【遊女】(名) 昔、宴席などで歌舞を演じ、客の相手をした女。

いうえん【優艶】(形動) 上品であでやかなこと。

いうえん【幽艶】(形動) 奥深くあでやかなこと。

いうえん【優婉】(形動) 上品でしとやかなこと。

いうえん【遊宴】(名) 遊び楽しむ宴会。

いうえん【幽遠】(形動) 奥深くて遠いこと。

いうえん【優遠】(形動) 上品で奥深いこと。

いうえん【優縁】(名) 仏 仏の教えによって結ばれる縁。

いうえん【有

一種。――あし[銀杏脚](名) 膳などの足の末ひろくして、いてふの葉の形したるもの。――がへしエシ―ガ[銀杏返](名) 婦人の結髮の一種。髻の上を兩分して左右に曲げてむすびたるもの。――だいこん[銀杏大根](名) だいこんを縱に四つ切りになし、横に薄くいてふ形にきざみたるもの。――ば[銀杏羽](名) をしどりの兩脇にありて、いてふの形したる羽。おもひば。――ば[銀杏齒](名) いてふの葉の如くに、末のひろがりたる下駄の齒。

いでまし[出座](名) 天皇のみゆき。おなり。

いでま・す さしすせ[出座](自、さ四) 出でたまふ。

いでゆ[温泉](名) 土中より自然にわき出づる湯、即ち、地中を流動する水の地熱を受けて湧出するもの。なんせん。

[いて・る てててるてれてよ[沍](自、た下二) こほりて破壞す。

いでゐ[出居](名) 表向きの間の客を通すところ。きやくでん。きやくま。

[いてん[移轉](名) ㊀うつりかはること。うつりかはり。㊁物事の所在をうつすこと。自己の住所をかふること。

いと[絲](名) ㊀綿・麻・繭等を細くながくひきのばして、よりをかけたるもの。㊁細長くしていとの如きものをすべていふ。㊂琴又は三絃などに張りて鳴らす絲。㊃琴又は三絃などの稱。

いと(名) ㊀みどりご「―宮」「―ひめ君」。㊁小姫(京阪地方の方言)。

いと[最](副) 甚しく。きはめて。もっとも。

いと・いり[絲入](名) もめんいとの中に、きぬいとをまじへて織りたるもの。

いと・いんげん[絲隱元](名) いんげんのさやを、絲の如くに細くきざみたるもの。

(いどう)[移動](名) うつりかはり。うごき。

(いどう)[異同](名) 異なると同じきと。

いと・うち[絲打](名) きぬいとにて組みたるもの。

いと・うを[絲魚](名)【動】「いとよりだひ」に同じ。

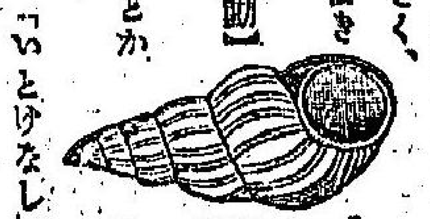
いと・おり[絲織](名) 織物の名、よりたる絹絲にて織りたるもの。

いとかけ・がひイ―ガ[絲掛貝](名)【動】前鰓類中櫛鰓類に屬する貝、にないに似て小さく、外面のたてすぢふとくして、恰も白き絲をまとひ付けたるが如くに見ゆ。

[いとかけ・ほら[絲掛螺](名)【動】「いとかけがひ」に同じ。

いと・がひイ―ガ[絲貝](名)【動】「いとかけがひ」に同じ。

‡いときな・し くしきけれ[幼](形、一)「いとけなし」に同じ。


[ひがけかとい]

いと・きり[絲切](名) 陶器の底、即ち、ろくろより絲にてきりとりたるもの。いとぞこ。ひとりどめ。いとおり。――だんご[絲切團子](名) 絲にてくゝり切りたる團子。――ば[絲切齒](名) 人類の牙齒。(犬齒)。

いと・ぐち[絲口](名) ㊀絲の端。㊁物事のなりはじまり。たんちよ。「―がつく」。

いと・ぐら[絲座](名) 三味線のさをの上のいとまきを貫く處。

‡いと・くらべ[絲競](名) 琴などをひきくらべすること。

いと・くり[絲繰](名) ㊀いとをくること。㊁絲をくる女。㊂【植】「をだまき」の一名。――うを[絲繰魚](名)【動】「いとよりだひ」に同じ。――ぐるま[絲繰車](名) 繭より絲を引き出し、これを繰る車。

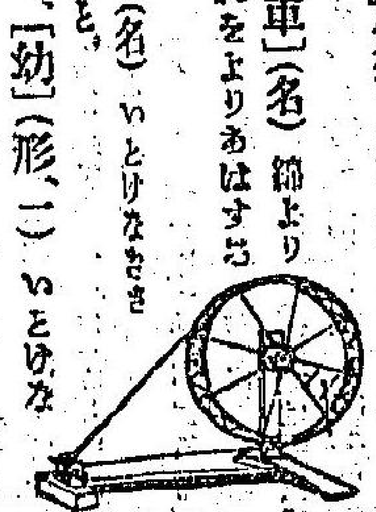
いと・ぐり[絲栗](名) 栗の實をほそくきざみたるもの。

いと・ぐるま[絲車](名) 綿より絲をとり又はこれをよりあはする車。

‡いと・げ[幼氣](名) いとけなきさま。をさなげなること。

‡いとけ・し くしきけれ[幼](形、一) いとけなし。をさなし。

いとけ・な・し くしきけれ[幼](形、一) 年未だ長ぜず。あどけなし。をさなし。


[まるぐとい]

いとげ・の・くるま[絲毛車](名) 古昔の一種の牛車、車のやかたに、よりいとをふきおろして簾の如くに垂れ、靑絲毛・紫絲毛などありて官女等の用ひしもの。又、葬式に死人を乘するとありしともいふ。(絲葬車)。

いと・こ(名) 父又は母のをひ又はめひ。(從兄弟、從姉妹)。――おほをぢオホ―オ(名) 祖父母のいとこ。(族伯祖父)。――おほをばオホ―オ(名) 祖父母のいとこめ。(族伯祖母)。――ちがひガイ―チ(名) 父のいとこ。――に(名) (追々(甥々)に煮(似)る義なりといふ) あづき・ごんにやく・やきどうふ・にんじん・いも等をまぜて煮たる味噌汁。(從弟煮)。――め(名) いとこにあたるべき婦人。(從姉妹)。――よめ(名) いとこのつま。(堂姉妹)。――をぢ(名) 父のいとこ。(從祖父)。――をば(名) 父のいとこめ。(從祖母)。

いと・こんにやく[絲蒟蒻](名) 絲の如くに細くしたるこんにやく。

いと・ざくら[絲櫻](名)【植】薔薇科に屬する木、枝は狀條にして下垂し、葉は長楕圓形或は披針形にして尖頭を有し、蕚の筒部は圓筒形或は上部にくびれを有し、花柱の基部は毛を生じ、花柄は花と同長或は花より長し、觀賞用として栽培し、又、木材を種々の用に供せらる。しだりざくら。しだれひがん。(狀條海棠)。

いと・さめ[絲雨](名) こまかき雨。こさめ。

いと・し しくしきしけれ[愛](形、二) いとほし。かはゆし。

いと・しば[絲芝](名)【植】しばの一種、細くして絲狀をなす。

いと・しり[絲尻](名)「いとぞこ」に同じ。

いと・すぎ[絲杉](名)【植】すぎの一種、幹は直立して、枝葉下に垂る。

いと・すげ[絲菅](名)【植】莎草科に屬する草本、山麓又は陰地に生ず、葉は長くして、比較的大形なる花序を生ず。

いと・すすき[絲薄](名)【植】すゝきの變種、葉・莖・根共に細くして、穗は紫赤色を呈す。

いと・すぢ[絲筋](名) 絲のすぢ。又、細長なるものにいふ語。

いと・ぞこ[絲底](名) 陶器のそこ。いときり。いとぢり。

いと・たけ[絲竹](名) ㊀樂器の總名、琴・笛の類。㊁轉じて、音樂。

いと・だて[絲立](名) 絲を入れて置くしぶかみのふくろ。

いと・だて[絲經](名) 經を麻の絲、緯をわらにて織りたるむしろ、旅行などのときにゐなかもの〻着用するもの。

いと・だひイ―ダ[絲鯛](名)【動】「いとよりだひ」に同じ。

[いとど(名)【動】「こほろぎ」に同じ。(竈馬)。

いと・ど[最最](副) いよ〳〵。はなはだしく。ことさらに。

‡いと・ど・し しくしきしけれ[最最](形、二) いよ〳〵はなはだし。

‡いとな・し くしきけれ[忙](形、一) いそがはし。いそがし。

いと・なます[絲膾](名) 膾をこまかくきりたるもの。

いとなみ[營](名) ㊀いとなむこと。しわざ。㊁ようい。支度。

いとな・む まみむむめめ[營](他、ま四) ㊀こしらふ。とゝのふ。つくる。なす。㊁したくす。よういす。

‡いと・の・くつ[絲鞋](名) 絲にて編みて作りたるくつ。古昔、はきたるもの。

いと・はぎ[絲萩](名)【植】枝の細き萩。

いと・は・し シ―ワ しくしきしけれ[厭](形、二) いとふべし。いむべし。きらはし。

いと・ひイ―ト[厭](名) いとふこと。いむこと。きらひ。

いと・ひば[絲檜葉](名)【植】さはらの變種、葉は小形鱗片狀にして、莖は下垂せる枝を有す、觀賞用として栽培せらる。

いと・びん[絲鬢](名) 德川時代の中頃に行はれたる男子の髮の結ひ方、頭の髮を剃りさげて、兩のびんを細くせまく結びたるもの。――やっこ[絲鬢奴](名) いとびんに髮を結びたる男子。

いと・ふウイ はひふへ[厭](他、は四) ㊀いやに思ふ。いみきらふ。いやがる。にくむ。㊁つかる。おこたる。㊂いたはる。かばふ。

いと・へん[糸偏](名) 漢字の偏の名、紙・經等の字の左にある字をいふ。

いと・ほ・し シ―オ しくしきしけれ[愛](形、二) あはれなり。いたはし。ふびんなり。いとし。かはゆし。

いと・ほし・む シム―オ まみむむめめ[愛](他、ま四) いとほしく思ふ。いとしむ。あいす。あはれむ。

いと・ま[暇](名) ㊀用のなきとき。かんか。ひま。㊁休暇を賜はること。㊂官を辭すること。㊃別れ去ること。

いと・まき[絲卷](名) ㊀絲をまきておく道具。㊁三味線の頭に、貫き絲を卷きつくるもの、琵琶にては、轉手(テンジュ)といふ。――ひとで[絲卷人手](名)【動】海盤車類に屬する棘皮動物、體は五稜形をなして諸腕短かし、背面は綠色にして赤色の斑紋を有し、腹面に步足帶を有す、海底泥沙の上に棲息し、性食を貪り好んで貝類を食ふ。(海燕)。――ゆば[絲卷湯婆](名) 方形に切りたるゆば。

いとま・ごひイ―ゴ[暇乞](名) わかれをつぐること。いとまを乞ひ求むること。

‡いとま・し しくしきしけれ[挑](形、二) はりあふ狀なり。きそひあらそふ狀なり。

‡いとま・ぶみ[暇文](名) いとまを求むる願書。まへうら。(辭表)。

いど・む まみむむめめ[挑](他、ま四) ㊀きそひあらそふ。きそひせまる。はりあふ。㊁戀慕をしかく。㊂敵を誘ふ。戰をしかく。

いと・むし[絲蟲](名)【動】「こほろぎ」に同じ。

いと・め[厭目](名) いとひ。えんぱい。けれん。「金に―はつけぬ」。

いと・め[絲目](名) ㊀いとすぢ。㊁瓜の表面に付くる絲。

いと・やなぎ[絲柳](名)【植】楊柳科に屬する木、枝は下垂し、雄花は通常雄蘂を有し、雌花は甚だ短き柄を具へたる子房を有す、柳屬中最も普通なるものにして、線狀披針形の葉を有す、木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。

‡いと・ゆふウ―ユ[絲遊](名)「かげろふ」に同じ。

いと・より[絲撚](名)【動】「いとよりだひ」の略言。――ぐるま[絲撚車](名)「いとぐるま」に同じ。

に同じ。――だひ[イ]「絲撚鯛」(名)【動】硬鰭類いとより科に屬する魚、體は紅色にして黄色なる六條の縱線あり、尾は黄色を帶び、背鰭及臀鰭は其基端に黄色の泥線あり、體長一尺に及ぶ、深海の泥狀なる場所に棲息す、形は鯛に似る。いとより。いとよりだひ。いとくりうを。――め「絲撚女」(名) 絲をよるを業とする女。

い・とる[射取](他、ら四) ⊖的に射あて、賭け物を取る。⊜射あて、獲物となす。

いとわく「絲簍」(名) 絲をまきとひつくるわく。いとくり。

いな(名)【動】「みな」に同じ。

いな「鯔」(名)【動】「ぼら」の幼期の名。

いな「稲」(名)【植】「いね」の轉。

いな「否」(副) 人の云ふことに不同意を表して打ち消す語。いや。いゝえ。いゝや。

いなき「稲城」(名) 刈りたる稲をかけてほす具、竹又は木にて造りたるもの。

いなぎ「稲置」(名) ⊖古昔は、邑長の名。むらをさ。⊜稲世は、姓(カバネ)の名、第八位に居る。

††いなくゝ「嘶」(自、か四) 馬つかれてなへぐ。

いなぐら「稲倉」(名) いねを入れておく藏。

いなご「稲子」(名)【動】直翅類中蝗蟲科に屬する蟲、體長は七八分、體色は淡若しくは褐、後肢は膨大にして跳躍に適し、背翅は廣大く、前肢の前縁は桁ぐりたるが如し、雄蟲は後肢を以て前肢の翅側を摩りて聲をなす、我國にて最も有名なる稲の害蟲なり、いなばつた。(蝗)。――まろ「稲子麿」(名)「いなご」に同じ。

いなこき「稲扱」(名)【動】稲の穗をこく道具、齒を鐵にてつくり、形櫛の如し、いねこき。

いなさ(名) ひがしみなみの風。(東南風)。

いなす「往」(他、さ四) ゆかしむ。さらしむ。かへらしむ。

††いなせ(名) 否と諾と。

いなせ「鯔背」(名)(近古、江戸魚河岸のいさみはだの人々が、髷(マゲ)を魚のいなのかしらに似せて結びたるより出づ) いさみはだ又はきほひはだの通稱。

いなだ(名)【動】「ぶり」の幼期の稱。

いなだき「頂」(名)「いただき」の古言。

いなづま「稲妻」(名) 空中電氣の放電する際に發する火光。いなびかり。(電)。――がた「稲妻形」(名) いなづまの形をとりたる模樣。

††いなつるび「稲交」(名)「いなづま」に同じ。

††いなゝく「嘶」(自、か四) 馬聲高く鳴く。いばゆ。

††いなのみ・のうらべ「稲實卜部」(名) 古昔、大嘗會のとき、齋郡に發遣せられしうらべ。

いな・の・め(名) あけがた。しのゝめ。(黎明)。

いなはき「稲掃」(名)「いなはきむしろ」の略言。――むしろ「稲掃莚」(名) 稲の穗を取り扱ふむしろ。

いなびかり「稲光」(名) いなづま。いなつるび。

††いな・ぶ「辭」(他、は四) いなむ。ことわる。

††いな・ぶ「辭」(他、は上二) 前條に同じ。

いなほ「稲穗」(名) いねの穗。

いなむ「辭」(他、ま四) ⊖辭退す。ことわる。⊜不承知をいふ。はゞむ。

いなむし「稲蟲」(名)【動】(い)直翅類に屬する禾本植物を害する昆蟲の總稱、後翅は膨大にして跳躍に適し、第一腹節に聽器を備ふ、觸角短く三個の

單眼あり、雄蟲は後翅を以て前翅の兩側を摩擦して聲を發す、雌蟲は晩秋地に卵を産む、卵は翌春に至りて孵化す。(蝗蟲)。(ろ)「いなごまろ」に同じ。

††いなむしろ「寝莚」(名) ねどこに敷くむしろ。ふとん。

いなむら「稲叢」(名) あらのまゝに積みたる稲。

いなや「否」(副) すぐに。たゞちに。「聞くや――」。

い・なり「稲荷」(名) ⊖稲生(イナリ)の神、五穀の神として倉稲魂(ウカノミタマ)神を祀りたるもの。――ずし「稲荷鮨」(名) 煮たる油揚の中に、酢を和したる飯をつゝみたるもの。――まうで「稲荷詣」(名) 中古の風俗、二月初午に稲荷のやしろに參詣すること。――まち「稲荷待」(名) いなりまつりの稱。――まち「稲荷町」(名)「へやゝおやま」の異稱。――まつり「稲荷祭」(名) 二月初午の日に行ふ稲荷神の祭事。

††いぬ・る「唸」(自、ら四) うめく。うなる。

いにしへ「古」(名)(往過の義) 過ぎ去りし時。むかし。

いぬ「犬」(名) ⊖【動】哺乳類中肉食類に屬する獸、世界至る所に家畜として飼養せらる、性怜悧にして、觀官は鈍けれど、聽官と嗅官とは最も鋭敏なり。⊜まはしもの。間者。

いぬ「戌」(名) ⊖十二支の第十一位。⊜西北の方位。にしきた。⊜古昔の時刻にて、五つ、今の午後八時より九時までの間。

††い・ぬ「寝」(自、な下二) ねる。

い・ぬ「往」(自、な變) ⊖ゆく。さる。⊜ふ

いぬ・あららぎ「犬若蕙」(名)【植】「いぬえ」の一名。

いぬ・いたどり「犬虎杖」(名)【植】「いたどり」の類。種高さ尺餘に過ぎず。

いぬ・うど「犬獨活」(名)【植】「しゝうど」に同じ。

いぬ・え「犬荏」(名)【植】唇形科に屬する一年生草、大種のもの、葉は荏(エ)の如く、小種のもの、葉は細長なり、秋季に小形にして紫色なる花を開く。

いぬ・おふもの「犬追物」(名) 古昔、行はれし射術の演習、竹垣にて馬場をかこひ、中に犬を放ちこれを追ひ射て勝敗を競ふ、矢は蟇目、服は素袍直垂、一手十二騎なるを正式とす、源賴朝の時代に始まりたりといふ。

いぬ・かうじゆ「犬香薷」(名)【植】唇形科に屬する草、原野に生ず、高さ一二尺、葉は對生す、夏の頃、莖頭に三四寸の花穗を生ず。

いぬ・かはたけ「犬革茸」(名)【植】かはたけの一種。叢生し、秋生ず。

いぬ・がし「犬樫」(名)【植】樟科に屬する喬木、やぶにつけいの類、春の頃紅色の美花を開く。

いぬ・かひ「犬飼」(名) 鷹狩のときに、鳥を追はしむる犬を飼ひならす人。――ぼし「犬飼星」(名) けんぎう。ひこぼし。(牽牛星)。

いぬ・がみ「犬神」(名) 犬の靈(タマ)を使ふ妖しき術。――つき「犬神憑」(名) 犬の靈のゝりうつりたりと稱する一種の精神病、中國邊に多し。

いぬ・がや「犬榧」(名)【植】かやの一種、葉は濃綠色にして二縱列をなす、仁より燈油を取る、材は種々の用に供せらる。

いぬ・がらし「犬辛子」(名)【植】十字花科に屬する草、花は黄色にして下部の葉は羽狀に分裂し、果實は狹長なり。のがらし。きつねのからし。(山芥菜)。

††いぬき(名) 家のいりぐちの石だゝみ。(砌)。

いぬ・ぎり「犬桐」(名)【植】「あぶらぎり」に同じ。

いぬ・くぐり「犬潜」(名) 垣塀などにある穴、犬の出入りのためにつくれる穴。

いぬ・くす「犬樟」(名)【植】樟科に屬する喬木、葉は楕狀の下部を有し下面に密生毛を具す、花房は有柄なり、種子より油を搾り、樹皮は染料、木材は種々の用に供せらる。あをくす。からだも。やまくす。たぶのき。

††いぬ・くひ「犬食」(名) 犬をかみあはすたはむれ。(鬪犬)。

いぬ・ごま「犬胡麻」(名)【植】唇形科に屬する植物、山中に生ず、葉は鋸齒をなして粗き皺文を有し、胡麻に似る臭氣あり、花は小形にして白く、夏の頃、稍頭に穗をなして開く。

いぬ・ころ「犬ころ」(名) 犬の子。

いぬ・じに「犬死」(名) 死にて益なきこと。むだじに。(徒死)。

††いぬ・じもの「犬自物」(名) 犬に似たるもの。

いぬ・そらまめ「犬蠶豆」(名)【植】「からすのゑんどう」に同じ。

いぬ・たで「犬蓼」(名)【植】蓼科に屬する草、葉は長楕圓形にして小しく、花は莖頭に生じ、花序は穗狀にして密生せる花より成る。あかまんま。(馬蓼)。

いぬ・たら「犬楤」(名)【植】「はりぎり」に同じ。

いぬ・つげ「犬黃楊」(名)【植】冬青(モチ)科に屬する植物、高さ一丈余に達す、葉は橢圓形又は倒卵形にして少數の鋸齒を具ふ、實は紫黑色にして小しく、觀賞用として栽培し、木材は印版、櫛等の料に供せらる。

いぬ・のふぐり(名)【植】玄參科に屬する草、莖は平臥し、葉は小卵狀心形にして葉柄を具し、鋸齒を帶ぶ、花は葉腋に單生して、殆んど葉と同

長なる柄を有す、花冠は小形にして淡紅色なり。(婆婆納)。

††いぬ・はこ「犬張子」(名)「いぬはりこ」。

いぬ・ばしり「犬走」(名) ⊖城又は築地などの塀外と溝との間に設けある、犬の通ひ得べきほどの處。⊜小走りに疾歩すること。

††いぬ・ばへ「犬蠅」(名)【動】雙翅類中蜜蠅科に屬する蟲、體色は帶び、翅に褐色の紋あり、犬に著きて血を吸ふ。

いぬ・はりこ「犬張子」(名) 一種の張子細工、古昔は、面は小兒に似せ體は臥せる犬に似せたるものにして、小兒誕生のとき其傍に置き魔除けとせしものなりしが、今は面共に犬に似せて、玩弄物とす。

いぬ・ひえ「犬稗」(名)【植】ひえの條を見よ。

††いぬ・ひと「犬人」(名) 古昔、宮城にて、いぬぼえをしたる人。

いぬ・びは「犬枇杷」(名)【植】桑科に屬する灌木、葉は橢圓形にして殆んど平滑なり、夏秋の交に無花果に似て小さき實を結ぶ、食ふべし。

いぬ・ふせぎ「犬防」(名) 佛堂の前にかまへたるひくき格子。

††いぬ・ぼえ「犬吠」(名) 古昔、外蕃の參朝せしとき、隼人(ハヤト)が宮城の御門にて、犬のとほぼえに類したる聲を出だしこと。

いぬ・ほうづき「犬酸漿」(名)【植】(い)茄科に屬する有毒草本、花は白色にして繖形花序に排列し、果實は球形にして黑色を呈し、葉は卵形なり。(龍葵)。(ろ)「いぬびは」の一名。

いぬ・まき「犬槇」(名)【植】公孫樹科に屬する常綠喬木、葉は細長くして一箇の中筋を有す、木材は用途廣からず、又、觀賞植物として栽培せらる。らか

んまつ。くさまき。

いぬ‐むぎ［犬麥］（名）【植】「とうぼふむぎ」に同じ。

いぬ‐よもぎ［犬蓬］（名）【植】「ひきよもぎ」に同じ。（菲蕳）。

いぬゐ［戌亥］（名）方角の名、戌と亥とのあひだ、即ち、西北の間。

いぬ‐ゑんじゆ［犬槐］（名）【植】ゑんじゆの一種、葉は大形にして厚し、夏の頃、黄花を開く。

いね［稲］（名）【植】禾本科に屬する草本、高さ三四尺、葉は細長にして齒頴は甚だ小く、花頴は殆んど摺合して頴果を被包す、禾本科中最も要用なるものにして、種子は、食用又は麥酒の原料とし、藁及葉は、縄席其他種々の用に供せらる。――**かり**［稲刈］（名）秋に熟したる稲を刈り取ること。――**きび**［稲黍稷］（名）【植】「ろうるきび」に同じ。――**こき**［稲扱］（名）「いなこき」に同じ。――**つきこまろ**［稲搗子麿］（名）【植】「きりぎりす」に同じ。――**むし**［稲蟲］（名）【動】「いなごまろ」に同じ。

‡**い‐のこし**［射殘］（名）古昔、正月の射禮のとき、參り來らざりしものに、翌日また射させしこと。

いのち［命］（名）㊀動植物の生活する元力。いきのを。たまのを。せいめい。㊁動植物の生活する期間。よはひ。とし。「―は、風前の燈の如し」。――**がけ**［命掛］（名）いのちを失ふこともかへりみずして、事をなすこと。――**がへ**［命換］（名）一命にかへばるべき重大なる物事。――**ごひ**［命乞］（名）いのちの永くあらんを、神佛にいのること。又、殺さるべき人の爲に、其命の助からんを乞ふこと。――**しらず**［命不知］（名）いのちを重ぜざること。生命の危險なることをもかへりみず、押し切つて事をする性質。又、其人。――**の‐おや**［命親］（名）已に死すべき場合を救ひくれたる人。――**の‐せんたく**［命洗濯］（名）平生の勞を慰むること。「きばらし」。――**びろひ**［命拾］（名）已に一命を失はんとしたる場合を免れたること。九死に一生を得たること。――**みやうが**［命冥加］（名）死すべきほどの場合に、ふしぎに助かりたること。

いのり［祈］（名）神佛に祈願をすること。いのること。（祈禱）。――**の‐し**［禱師］（名）祈禱する法師。

いの・る［祈］（他、ら四）（ら、り、る、る、れ、れ）自己又は他人の禍福吉凶に關して、神佛に願をかく。

いは［岩］（名）㊀石の大なるもの。いはほ。㊁岩土の凝固したるもの。

い‐ば［射場］（名）弓を射るひろには。（射的場）。

いはう‐やう‐な・し［言様無］（形、二）言はんすべなし。

いは‐うら［岩占］（名）「いしうら」に同じ。

いは‐おこし［岩粔籹］（名）一種の菓子、おこしごめを飴にて固めたるもの。

いは‐おもだか［岩澤瀉］（名）【植】水龍骨科に屬する草、葉は蘭の如く細長くして、芽胞の房嚢は圓形なり、觀賞用として栽培せらる。

いは‐がく・る［岩隱］（自、ら下二）（れ、れ、る、るる、るれ、れよ）㊀（なきがら石棺の中に入る意）貴人の崩じたまふにいふ。㊁いはのかげにかくる。

‡**い‐はかせ**［醫博士］（名）古昔、典藥寮の博士。

いは‐かど［岩角］（名）㊀岩石の角。㊁門の如く左右に岩石の聳えたてるところ。

‡**いは‐がね**［岩根］（名）㊀岩のねもと。㊁【植】蕨類科に屬する植物、夏季花を開く。――**さう**［岩根草］（名）【植】水龍骨科に屬する隠花植物、葉は方形にして厚し。

いは‐き［岩木］（名）㊀いしと木と。ぼくせき。㊁薄情なること、感覺の遅鈍なること。「人の心の―なるらん」。㊂石灰の一名。

いはき‐がみ［磐城紙］（名）磐城國より出す「半紙」。

いは‐きつつき［岩啄木鳥］（名）【動】「いはげら」に同じ。

‡**いはく**［曰］（名）いはれ。わけ。きさい。「―のあること」。

‡**いはく**［曰］（自、か下二）（け、け、く、くる、くれ、けよ）子供らしくあり。

いはく［曰］（副）いふやう。いへらく。

いは‐くぐり［岩潛］（名）【動】一種の鳥、形ははほおろに似て大く、頭は灰色にして背に黒褐色の斑を有し、翅は黒色にして端末赤褐色なり。

‡**いは‐くすぶね**［岩樟船］（名）神代に用ひしふね。

‡**いは‐ぐつ**（名）「をぐつ」に同じ。

いはくに‐ちぢみ［岩國縮］（名）周防國岩國地方より製出する木綿ちぢみ、夏衣に適す。

いはくに‐はんし［岩國半紙］（名）周防國岩國地方より製出するはん紙。

‡**いは‐ぐも**［岩雲］（名）夏の空に出づる雲、岩石の屹立したるさまにみゆる故に名づく。

‡**いはけ‐な・し**［稚］（形、一）をさなげなり。こどもらし。あどけなし。

いは‐げら［岩啄木鳥］（名）【動】きつゝきの一種、深山に棲む、體は緑色にして頭部と腹部とは紅色なり。

いは‐こけ［岩苔］（名）【植】「いはひば」に同じ。

‡**いは‐こす**［岩越］（名）ことぢの先の緒のある所。

いは‐さか［磐境］（名）榊の枝に鏡をかけて神をまつる所。又、神社の兆域。

いは‐しみづ［石清水］（名）岩石の間より湧き出づる清水。

（**いば‐しんえん**［意馬心猿］（名）煩惱情慾さかんにして、心中靜定せざるさまにいふ語。

‡**いは‐すき**［齋鋤］（名）「いむすき」に同じ。

いは‐すずめ［岩雀］（名）【動】「いはくぐり」に同じ。

いは‐せきしやう［岩石菖］（名）【植】百合科に屬する草、谷間の岩石などに叢生す、花莖は短毛を有し粘質を分泌す、花は白色なり、觀賞用として栽培せらる。

いはた‐おび［岩田帶］（名）姙娠したる婦人が腹に纏ふ布、姙娠して五個月目より結ぶ。（姙帶）。

いは‐たけ［岩茸］（名）【植】地衣類に屬する菌、深山の岩石に生ず、平面狀にして表面灰色をなし、裏面は帶黑色にして黑色粉狀の短纖維を密生す、食用に供せらる。

いは‐ちどり［岩千鳥］（名）㊀【動】ちどりの一種、尾はつばめの如く裂け、身極めてかろく、河上に群飛す。㊁【植】蘭科に屬する草、深山の岩に生ず、一莖に一葉をいだす、蘭に似て小花を開く。

（**い‐はつ**［衣鉢］（名）「えはつ」に同じ。

いはつき‐ねぎ［岩槻葱］（名）武藏國岩槻地方より出すねぎ。

いはつき‐もめん［岩槻木綿］（名）武藏國岩槻地方より織り出す木綿。

いは‐つぐみ［岩鶫］（名）【動】「いそつぐみ」に同じ。

いは‐つつじ［岩躑躅］（名）㊀岩石の間に生ずるつつじの稱。㊁かさねの色目、表は紅にして裏は紫なるもの。

いは‐つぼ［岩壺］（名）㊀がんせきの間の、ひくゝ壺になりたるところ。㊁内の空虚なる一種の石、大小一ならず、鈴石・缝石・壺石ともいふ。

いは‐つらら［岩垂氷］（名）【鑛】鍾乳石の稱、つららの形に似たるよりいふ。

いはと‐かぐら［岩戸神樂］（名）天照大神があまのいはとに籠り給ひしとき、他の神々のかぐらを奏せられたること。又、其かぐら。

いはと‐がくれ［岩戸隱］（名）天照大神が素盞鳴尊の暴狀を憎り、天のいはとにかくれたまひければ、天地晦冥となりたりとの故事。

‡**いは‐とこ**［岩床］（名）㊀岩の平かなる所。㊁人を葬りたる所。

‡**いば‐どの**［射場殿］（名）古昔、宮廷に設けられたりし射場。

いはな［岩魚］（名）【動】喉鰾類中さけ科に屬する魚、鱗は圓滑にして細小なり、皮膚は粘液に富む、體色は背部蒼黑、腹部灰白にして淡黑色の斑點あり、體長一尺二三寸に達す、我國東北及北海道の溪流に多し。（嘉魚）。

いは‐なし［岩梨］（名）【植】石南(シャクナゲ)科に屬する小灌木、富士・日光などの高山に、地を匍ひて蔓生す、葉は楕圓形をなし、花序は總狀にして少數の花より成り、花冠は壺より長からず、實は大豆の如くにて圓く、味酸く甘し。

［いはなし］

いは‐にし［岩螺］（名）【動】腹足類中前鰓類に屬する貝、介殼の外面は黑くして圓疣あり、海濱に多し。からにし。いぼにし。ぼろくにし。

いは‐ね［岩根］（名）㊀いはのねもと。㊁いはほ。がんせき。――**かへで**［岩根楓］（名）【植】かへでの一種、日光・木曾などの山中に生ず、葉大形なり。

いは‐ば［言］（副）たとへて見れば。いひてみれば。

いは‐はざま［岩峽］（名）岩と岩との間隙。

いは‐はし［岩橋］（名）淺瀨に石をおき並べ飛石としたるはし。――**の**（枕）「よる」「まぢかし」「あふみ」に冠らする詞。

‡**いば‐はじめ**［射場始］（名）古昔、宮中に行はれし儀式、射場殿にて弓を射はじむること。

‡**いはひ**［齋］（名）㊀いみ愼むこと。いみ。㊁かしづきまもること。

いはひ［祝］（名）いはふこと。ことほぎ。ことぶき。――**ぐそく**［祝具足］（名）武家の子息の元服の祝ひにそなふる甲冑。

‡**いはひ‐そ・す**［祝過］（自、さ四）（さ、し、す、す、せ、せ）いはひすごす。

‡**いはひ‐びと**［家人］（名）いへびと。

‡**いはひ‐どの**［齋殿］（名）神をまつる殿閣。

いはひ‐の‐いと［祝絲］（名）よろひのたくぼくおどしの緒。

‡**いはひ‐の‐かがみ**［齋鏡］（名）㊀いはひろやまふ鏡。神鏡。㊁三種神器の一、八咫鏡。

‡**いはひ‐の‐つゑ**［祝杖］（名）「うづゑ」に同じ。

‡**いはひ‐の‐ぬし**［齋主］（名）神につかふる人。かんぬし。

‡**いはひ‐の‐みや**［齋宮］（名）かしづきいはひまつる宮。いはひみや。いつきのみや。

いは-ひば　イハ［岩檜葉］（名）【植】卷柏科に屬する隱花植物、深山陰濕の岩石上に着生す、又、觀賞用として栽培せらる。（卷柏）。

‡いはひ-びと　イハヒ［齋人］（名）　神につかへまつる人。かんぬし。

‡いはひ-べ　イハヒ［齋瓮］（名）　古昔、神酒を神にたてまつりしとき用ひたる陶器の甕。いんべ（忌瓮）。

［いはひべ］

‡いはひ-もとほ-る　イハヒモトホル［這回］（自、ら四）（い這ひ回るの義）はひまはる。はひめぐる。

‡いは-ふ　イハフ［齋］（他、は四）❶けがれをいみつゝしみて、神を祭祀す。❷守護す。かしづく。まもる。

いは-ふ　イハフ［祝］（他、は四）❶吉事を祝す。❷ことほぐ。ことぶく。❸未來の吉事をねがふ。

いは-ぶき　イハ［岩欺冬］（名）【植】ゆきのしたの一種。葉は腎臟狀をなして綠色なり、花小さし。

いは-ふぢ　イハ［岩藤］（名）【植】豆（マメ）科に屬する落葉灌木、山中に生ず、花は小形にして藤より長き穗をなす。觀賞植物なり。

‡いは-ふね　イハ［岩船］（名）　神代に、神々が乘りたまひしといふ船。

いは-ほ　イハホ［巖］（名）　大なる石。いは。

いは-ま　イハ［岩間］（名）　いはといはとのあひだ。

‡いは-まほし　イハ［言欲］（形、二）　言はんと欲す。いひたく思ふ。いひたくあり。

{いはみ-ぎんざん　イハミ［石見銀山］（名）　鼠ころし藥の一種、石見國邇摩郡の銀山より出づる礬石にて製したるもの。

‡いは-む　イハム［充滿］（自、ま四）　充滿す。みつ。

いは-もと　イハ［岩本］（名）　岩の根もと。

いは-もみぢ　イハ［岩楓］（名）【植】石南（シヤクナゲ）科に屬する灌木、高山に生ず、葉細く、淡紅色の小花を開く。

いは-や　イハ［岩屋］（名）❶岩をうがちて造りたる居所（室）。❷岩の間の洞穴。——あな［窟］（名）　あなぐらの一名。

いは-やなぎ　イハ［岩柳］（名）【植】楊柳科に屬する灌木、葉も莖もやなぎに似て、二三月の頃、白き花をひらく。にはやなぎ。こゆきやなぎ。（珍珠花）

‡いば-ゆ　イバユ［嘶］（自、や下二）　いなゝく。

いは-ゆる　イハユル［所謂］（副）　世に云ふところの。ふつうにいふところの。

いばら　イバラ［茨］（名）　とげある小木の總名。うばら。

いばら　［薔薇］（名）【植】薔薇科に屬する灌木、大形の美花を生じ、葉は複葉にして葉柄に刺を生ずる托葉を具ふ、雌蕊は多數ありて壺狀の萼筒内に隱在す。ばら。

いばり　［尿］（名）　ゆばり。——ぶくろ［膀胱］（名）　ゆばりぶくろ。ばうくわう。

{い-ば-る　イバル［威張］（自、ら四）　たけき姿をよそほふ、きまゝをふるまふ。いきほひを張る。

いは-れ　イハレ［謂］（名）　いはるべきわけ。いふべきゆゑ。「無ヨ、理由。」

いは-れんげ　イハ［岩蓮華］（名）【植】景天（ベンケイサウ）科に屬する草、古き瓦屋根などに生ず、花瓣は互に結合し、雌蕊は五個あり、觀賞用として栽培せらる。

［いはれんげ］

いは-ろくしやう　イハロクシヤウ［岩綠青］（名）【鑛】[illegible]きやうの一名。

いは-ゐ　イハヰ［岩井］（名）　岩のあひだより湧き出づる井戸。又、石を疊みてつくりたる井戸。

{い-ばん　イバン［夷蠻］（名）　えびす。

いはん-かた-な-し　イハン［言方無］（形、二）　言ふべき方なし、言語に上されぬほどなり。

いはん-や　イハンヤ［況］（副）　まして、其上に。

いひ　イヒ［飯］（名）　米を蒸したるもの。米を炊きたるもの。めし、かたかゆ、ごぜん、まんま。

‡いひ　イヒ［樋］（名）　板にて箱を作り、地中に埋めて水のかよひ路とするもの。又、池の内より外へ水の出づる樋。ひのくち。とひ。

いひ　イヒ［謂］（名）❶いふこと。となへ。❷わけ。ことわり。

いひ-あ-つ　イヒアツ［言當］（他、た下二）　考へいひて、物事をあつ。

いひ-あは-す　イヒアハス［言合］（他、さ四）　約す。申し合はす。

{いひ-あ-てる　イヒアテル［言當］（他、た下二）「いひあつ」の訛。

いひ-あはせ　イヒアハセ［言合］（名）　言ひあはすこと。くちやくそく。

{いひ-あはせる　［言合］（他）「いひあはす」の訛。

いひ-あ-ふ　イヒアフ［言合］（他、は四）❶いひかはす。こたふ。❷互に物をいふ。耳に言をかはす。❸くちあらそひす。さうろんす。とうろんす。いさかふ。

いひ-あらそ-ふ　イヒアラソフ［言爭］（他、は四）　いさかひす。いひあふ。

いひ-あり　イヒアリ［飯蟻］（名）【動】膜翅類中蟻科に屬する小蟲、地球上廣く傳播し、微小にして赤褐色をなす、家屋に入り來りて廚房の貯藏物を食害す。いへあり。

いひ-いだ-す　イヒイダス［言出］（他、さ四）　言を發す。いひはじむ。「いひだす」

いひ-い-づ　イヒイヅ［言出］（他、だ下二）　いひいだす。

いひ-い-る　イヒイル［言入］（他、ら下二）　いひこむ。

{いひ-い-れる　イヒイレル［言入］（他）「いひいる」の訛。

いひ-お-く　イヒオク［言置］（他、か四）　いひのこす。ことばをのこす。

いひ-おと-す　イヒオトス［言落］（他、さ四）❶いひもらす。いひそこなふ。❷わるくいふ。くさす。

いひ-がかり　イヒ［言掛］（名）❶はなしかけ。いひかけ。❷もとかたの無き事を誣ふること。❸いひかけて窮地となること。

いひ-か-く　イヒカク［言掛］（他、か下二）❶いひかけて人に向かひてことばをかく。はなしかく。❷いひだす。

いひ-かけ　イヒ［言掛］（名）❶いひかくること。はなし。❷あとかたなき事を誣（シ）ひいふこと。

{いひ-か-ける　［言掛］（他）「いひかく」の訛。

いひ-かけ　イヒ［言掛］（名）❶一語にて二語の意をかけて言ふ修辭法。例せば「聞く」に「菊」の意をかけていふが如し。❷誣（シ）ひいふこと。

いひ-かた　イヒ［言方］（名）　ことばづかひ。いひやう。

いひ-かた-む　イヒカタム［言固］（他、ま下二）　堅く約束す。

{いひ-かため-る　［言固］（他）「いひかたむ」の訛。

いひ-かは-す　イヒカハス［言交］（他、さ四）❶ことばをかはす。❷たがひにいひ合ふ。かたりあふ。❸ことばにてちかふ。くちやくそくをなす。

{いひかはせ-る　［言交］（他）「いひかはす」の訛。

‡いひ-かひ　イヒカヒ［飯匙］（名）　釜よりめしをとるかひ。しやくし。めしがひ。

いひ-かひ-な-し　イヒカヒナシ［言甲斐無］（形、二）❶口をそへて言ふほどのねうちなし。❷あくびやうなり。ひきようなり。

いひ-かへ-す　イヒカヘス［言返］（他、さ四）❶くちごたへをする。さからひいふ。❷幾度も言ふ。

いびき　イビキ［鼾］（名）　眠りたるときの鼻息。

いひぎり　イヒギリ［飯桐］（名）【植】獼猴桃科に屬する木、葉は心臟形をなし、莖片は通常五個あり、花瓣は存在せず、花序は圓錐狀をなす、觀賞用として栽培せられ、木材は種々の用に供せらる。（椅）

いひ-き-る　イヒキル［言切］（他、ら四）❶いひはる。❷だんげんす。

‡いびく-む　イビクム［[illegible]］（自、か四）　いびきを發す。

いひ-くゝ-む　イヒクヽム［言含］（他、ま下二）　いひふくむ。

{いひ-くゝめる　［言含］（他）「いひくゝむ」の訛。

いひ-ぐさ　イヒ［言草］（名）　言ふべきたね。いひごと。

いひ-くさ-す　イヒクサス［言腐］（他、さ四）　あしざまに言ふ。わるくいふ。

いひ-くだ-す　イヒクダス［言下］（他、さ四）　いひくさす。

いひ-くら-す　イヒクラス［言暮］（他、さ四）　言ひて日をくらす。

いひ-くろ-む　イヒクロム［言黑］（他、ま下二）　まことらしくいひなす。ことばにてごまかす。

{いひ-くろめる　［言黑］（他）「いひくろむ」の訛。

‡いひ-げ　イヒゲ［飯笥］（名）　古昔、飯をもりたるうつは。めしびつ。

いひ-け-す　イヒケス［言消］（他、さ四）❶人の言をうちけす。❷いひかへす。

‡いひ-け-つ　イヒケツ［言消］（他、た四）　いひけす。

いひ-けらく　イヒケラク［言］（副）　言ふには。言ふやう。

いひ-ごと　イヒ［言事］（名）　いひぐさ。

いひ-こ-む　イヒコム［言込］（他、ま四）　いひいる。まうしこむ。

いひ-こ-む　イヒコム［言籠］（他、ま下二）　論じて屈服せしむ。いひやぶる。

いひ-さ-す　イヒサス［言差］（他、さ四）　いひかけてやむ。

{いひ-とめる　［言止］（他）「いひとむ」の訛。

いひ-しろ-ふ　イヒシロフ［言爭］（他、は四）　あらそひいふ。

いひ-したみ　イヒ［飯籮］（名）　古昔、飯を蒸すときにこしきのそこにおきし竹かご。（箪）

{いひ-すぎる　［言過］（他）「いひすぐ」の訛。

いひ-す-ぐ　イヒスグ［言過］（他、が上二）　いひすごす。

いひ-すごし　イヒ［言過］（名）　いひすごすこと。

いひ-すご-す　イヒスゴス［言過］（他、さ四）　いふに度を過ごす。程をこえていふ。

いひ-ずし　イヒ［飯鮨］（名）　すし飯もてつくる故に名づく。

いひ-す-つ　イヒスツ［言捨］（他、た下二）　[illegible]

〜をもとめずものをいひはなす。
いひ-すてイ[言捨](名) いひすつるを。
{いひすてる[言捨](他) 「いひすつ」の訛。
いひ-そこなひイ[言損](名) いひそこなふを。いひあやまり。
いひ-そこな・ふイ[はひふへ][言損](他,は四) いふべき事をあやまる。いひあやまる。いひそんず。
‡いひ-そ・すイ[さしすせ][言過](他,さ四) いひすごす。「我だけくいひそし侍るに」。
いひ-そや・すイ[さしすせ][言囃](他,さ四) いひたてゝもてはやす。いひはやす。
いひ-だこイ[飯蛸](名) 【動】二鰓類中蛸魚(たこ)科に屬する海產動物、形小さくして體驅は楕圓形なり。第一對の觸腳は他に比すれば短く、唇瓣は殴し、左方の第三腳は樹形の交接器に變ず、體色茶白なり、近海に產し食用に供せらる。

[いひだこ]

いひ-た・つイ[てちつて][言立](他,た下二) ❶まうしたつ。まうしあぐ。❷ふしたてゝいふ。とりあげていふ。いひはる。
いひ-たてイ[言立](名) おしていひたつるを。いひたつべきたね。こうじつ。
{いひたてる[言立](他) 「いひたつ」の訛。
い-ぴたり[寢尿](名) (寢溲の義)ねむり居て小便をもらす疾。ねせうべん。いばり。
いひ-ちら・すイ[さしすせ][言散](他,さ四) ❶いひひろむ。いひふらす。❷いひやぶる。いひまかす。
い-ぴつ[飯櫃](名) (いひびつの略) ❶めしびつ。❷こばんがた。だえん。❸圓き形のひずみたるもの。

‡いひ-つが・ふイ[はひふへ][言繼](他,は四) いひつぐ。いひつたふ。
いひ-つぎ[言繼](名) いひつたへ。でんごん。
いひ-つ・くイ[けけくくる][言付](他,か下二) ❶命ずる。まうしつく。❷あばきつげ。つげぐちす。
いひ-つ・ぐイ[がぎぐげ][言繼](他,か四) ❶いひつたふ。いひつたへ。❷でんごんす。
いひ-つく・すイ[さしすせ][言盡](他,さ四) いふべきかぎりは、殘りなくいふ。
いひ-つけイ[言付](名) いひつくるを。めいれい。まうしつけ。「―にそむく」。
{いひつける[言付](他) 「いひつく」の訛。
いひ-つた・ふイ[へへふふる][言傳](他,は下二) ❶言を以て傳へ來る。はなしに殘る。❷いひ觸らす。❸でんごんす。
いひ-つたへイ[言傳](名) ❶言ひ傳へ來たること。(口碑)。❷いひふらし。❸でんごん。
{いひつたへる[言傳](他) 「いひつたふ」の訛。
{いびつたれ[寢溲](名) 「いびたり」の訛。
いひ-つの・るイ[らりるれ][言募](他,ら四) わが思ふ事をはげしく言ひはる。
いひ-つ・むイ[めめむむる][言詰](他,ま下二) ❶論言す。かまびすくいふ。❷なじりて閉口せしむ。
{いひつめる[言詰](他) 「いひつむ」の訛。
いひ-つらひイ[言論](名) あげつらひ。
いひ-つら・ふイ[はひふへ][言論](他,は四) いひあらそふ。とかくいふ。あげつらふ。
いひ-と・くイ[かきくけ][言解](他,か四) べんかいす。せつめいす。
いひ-とほ・すイ[さしすせ][言通](他,さ四) いひはる。まけもやうす。「自説を―」。

‡いひ-とほ・るイ[らりるれ][言通](自,ら四) とどこほりなく言ふ。べんぜつさはやかにいふ。
‡いひ-とよイ(名) 【動】ふくろふの古名。(鵂鶹)。
{いひ-と・るイ[らりるれ][言取](他,ら四) ことばにうつしていふ。
いひ-な・すイ[さしすせ][言做](他,さ四) ❶然らざる事をそれらしくいふ。❷とりなしていふ。
いひ-なづけイ[言名付](名) 幼時よりあらかじめ婚姻を約しておくもの。(許嫁)。
いひ-なほしイ[言直](名) いひなほすを。
いひ-なほ・すイ[さしすせ][言直](他,さ四) いひかふ。いひあらたむ。
いひ-なや・むイ[まみむめ][言難](他,ま四) ❶いふをはばかる。❷いふにこまる。「ぐち」。
いひ-ならはしイ[言習](名) いひつたへ。くちぐせ。
いひ-ならは・すイ[さしすせ][言習](他,さ四) ❶ならはしにて、言ひつたふ。❷くちぐせにいふ。
いひ-な・るイ[るれれるる][言習](自,ら下二) 其事をいふになる。
いひ-にく・しイ[くかし][言惡](形,一) いふになやまし。いふに難し。
いひ-ぬ・くイ[けけくくる][言拔](他,か下二) いひぬけてのがる。いひくるむ。
いひ-ぬけイ[言拔](名) いひぬくるを。
{いひぬける[言拔](他) 「いひぬく」の訛。
いひ-のこしイ[言遺](名) いひのこすを。
いひ-のこ・すイ[さしすせ][言遺](他,さ四) ❶はなすべき事をはなし終へずして止む。はなしのこす。❷のちにいひおく。あとへいひおく。
いひ-のこりイ[言遺](名) いひのこるを。

いひ-のこ・るイ[らりるれ][言遺](他,ら四) いふべき事あとにのこる。
いひ-ばちイ[飯鉢](名) めしびつ。めしばち。
いひ-はな・すイ[さしすせ][言放](他,さ四) いひはなつ。
いひ-はな・つイ[たちつて][言放](他,た四) 心に思ふがまゝをいひ切る。
いひ-はや・すイ[さしすせ][言囃](他,さ四) ほめていふ。いひそやす。さんびやうす。
いひ-は・るイ[らりるれ][言張](他,ら四) いひとほす。
いひ-びつイ[飯櫃](名) めしびつ。めしばち。
いひ-ひらきイ[言開](名) べんかい。いひわけ。べんめい。
いひ-ひら・くイ[かきくけ][言開](他,か四) 仔細を明かにせんがためにいふ。いひて仔細を明かにす。べんかいす。べんめいす。
いひ-ふく・むイ[めめむむる][言含](他,ま下二) ❶合點のゆくやうによくいふ。❷其人の言ふべき事又は行ふべき事を、いひ聞せおく。
いひ-ふくめイ[言含](名) いひふくめおくを。
{いひふくめる[言含](他) 「いひふくむ」の訛。
いひ-ふ・すイ[さしすせ][言伏](他,さ下二) いひて屈從せしむ。いひやぶる。
{いひふせる[言伏](他) 「いひふす」の訛。
いひ-ふらしイ[言觸](名) いひふらすを。うはさ。ひやうばん。
いひ-ふら・すイ[さしすせ][言觸](他,さ四) ❶いひひろむ。いひちらす。❷世間にてうはさす。ひやうばんす。
いひ-ふる・すイ[さしすせ][言古](他,さ四) 言ひなれて、めづらしからざるやうになる。

{いひ-ぶんイ[言分](名) ❶いふべきを。いふべきかど。❷いひぐさ。こうじつ。
{いひ-べたイ[言下手](名) いひかた拙きを。
‡いひ-ぼイ[飯粒](名) ❶めしつぶ。❷疣(いぼ)の古名。
いひ-ほど・くイ[かきくけ][言解](他,か四) いひとく。
いひ-まぎら・すイ[さしすせ][言紛](他,さ四) いひてまぎらかす。
いひ-ま・ぐイ[げげぐぐる][言曲](他,か下二) 然るべきことを然らざるやうにいひなす。理を非にまげていふ。
{いひまげる[言曲](他) 「いひまぐ」の訛。
いひ-まはしイ[言回](名) いひまはすを。「―がうまい」。
いひ-まは・すイ[さしすせ][言回](他,さ四) いひかたをたくみにいふ。
{いひ-まへイ[言前](名) ❶言ふべきたね。こうじつ。いひぐさ。❷いひわけ。いふところ。
いひ-もらしイ[言漏](名) いひもらすを。
いひ-もら・すイ[さしすせ][言漏](他,さ四) ❶ひみつを人にもらす。❷いひのこす。
いひ-やうイ[言樣](名) いふことばのさま。いひまはし。
いひ-やぶ・るイ[らりるれ][言破](他,ら四) いひまかす。いひふす。ときふす。
いひ-や・むイ[まみむめ][言止](他,ま四) ❶いふを止む。❷いひかけてやむ。
いひ-や・るイ[らりるれ][言遣](他,ら四) 他につげやる。いひつかはす。
いひ-よ・るイ[らりるれ][言寄](他,ら四) ものをいひかけて、またしみ近づく。

{いびり(名) いびるを。
{いび・る(他,ら四) ❶わづらはしきほどになやます。えくだく。さいなむ。せびる。❷あぶり燒く。煎りつく。
いひ-わ・くイ[かきくけ][言分](他,か四) 次條に「同じ」。
いひ-わ・くイ[けけくくる][言分](他,か下二) 理非をときわけていふ。いひて理非をときあかす。べんかいす。べんめいす。(分疏)。
いひ-わけイ[言分](名) べんめい。べんかい。
{いひわける[言分](他) 「いひわく」の訛。
いひ-わたしイ[言渡](名) ❶いひわたすを。めいれい。ふれ。❷裁判の宣告。
いひ-わた・すイ[さしすせ][言渡](他,さ四) ❶めいれいをつたふ。おほせを告げまはす。いひつたふ。❷判決の旨を宣告す。
いひ-わた・るイ[らりるれ][言渡](他,ら四) ❶いひつゞけて年月を經。❷いひふらす。
いひ-わづら・ふイ[はひふへ][言煩](他,は四) いひにくく思ふ。いひなやむ。
いひ-わ・ぶイ[ばびぶべ][言詫](他,は上二) いひにくく思ふ。
いひ-わんイ[飯椀](名) めしわん。ちやわん。
(い-ふイ[揖](名) ❶物をとりて拜する禮。❷手をこまぬきて行ふ禮。
(い-ふ[異父](名) 兄弟共に生母を同じうして父を異にするもの。
い-ふイ[はひふへ][言](他,は四) ❶ものをいふ。ことばにいだす。ことばにのぶ。❷なづく。となふ。よぶ。❸はなす。かたる。「いふ」
い-ふイ[はひふへ][言](自,は四) くちをきく。ものを

(いふ-いふ) イフイフ [悒悒](名、副) 心むすぼるゝさまにいふ語。
いふ-いふ イフイフ [言言](副) いひつゝ。いひながら。
(い-ふう)[異風](名) 異なりたる風俗。ことなりたるすがた。
いぶか-し しく しき しけれ [訝](形、二) うたがはし。不審なり。ふしぎなり。あやし。
いぶかしみ[訝](名) ふしん。うたがひ。
いふかた-な-し イフ [言方無](形、二) いはんやうなし。
いふ-がひ イフガイ [言甲斐](名) 言ふだけのりえき。
——な-し しく しき しけれ [言甲斐無](形、二) ㊀いひても其甲斐なし。㊁いくぢなし。ふがひなし。
いぶか-る ら り る る れ れ [訝](他、ら四) いぶかしくおもふ。不審におもふ。あやしむ。
いぶき[伊吹木](名) 【植】松杉科に屬する喬木、幹は直立し、葉は杉葉の如く尖りたるものと小形鱗片狀なるものとあり、陸地に適す、木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。
++いぶき(名) ㊀いき。(氣息)。㊁かぜ。
いぶき-とらのを[伊吹虎尾](名) 【植】蓼(タデ)科に屬する草、葉は狹小にして深綠、夏初に花を開く、花瓣は六個にして淡紅色なり、近江國伊吹山より出でしが故に名づく。(金線草種)。
いぶき-ばうふう [伊吹防風](名) 【植】繖形科に屬する有毛草本、原邊に自生し、又、栽培す、複葉を有し、嫩葉は赤色を帶ぶ、花は白色小形なり。(細葉邪蒿)。
いぶき-びやくしん[伊吹柏槇](名) 【植】「いぶき」に同じ。
(いふ-きやうだい) [異父兄弟](名) たねがはりの兄弟。

いぶき-よもぎ[伊吹蓬](名) 【植】よもぎの一種、うらに白毛多きが故に、うらじろと名づく、もぐさを製す。(艾蒿)。
(い-ふく)[衣服](名) きぬ。ころも。きもの。いしやう。ふく。
(い-ふく)[異服](名) かはりたる着もの。よのつねならぬ服。
(い-ふく)[異腹](名) はらちがひ。はらがはり。ことはら。
(い-ふく)[畏服](名) おそれしたがふこと。(畏伏)。
いぶし[燻](名) ㊀いぶすこと。㊁硫黃を燃して亞硫酸瓦斯をつくり、鐵のさびはなどに煤色をつくること。「ーをかける」。㊂蚊遣り火。かいぶし。
(いふ-じやう) イウジヤウ [揖讓](名) 耳に禮式をなしてゆづりあふこと。
いぶ-す さ し す す せ せ [燻](他、さ四) ㊀ものを燒きて煙をおこす。くすべる。ふすべる。㊁あぶりてやく。「蛤をー」。㊂金屬の類にいぶしをかく。㊃蚊遣り火をたく。
いぶせ-し く し き けれ (形、二) ㊀おぼつかなし。いぶかし。㊁心むすぼる。氣はれず。(鬱悒)。
(い-ぶつ)[異物](名) 普通ならざるもの。つねにかはりたるもの。(道說)。
いふ-ならく イウ [言](副) いふところには。いふやう。
いふばかり-な-し イウ [言計無](形、二) いひつくされぬほどなり。
(いふ-め) イウ [言目](名) 言ふとほりのこと。言ふがまゝのこと。
いふ-も-おろか [言愚] いふまでもなし。
いふ-も-さら-なり [言更] いふまでもなし。
いふ-やう イフヤウ [言樣](副) いふには。いはく。
いぶり[燻](名) ㊀けぶること。㊁人をいびること。㊂心強くなさけなきこと。(殘忍、不忍)。

いぶ-る ら り る る れ れ [燻](自、ら四) けぶる。くすぶる。
(い-ぶん)[異聞](名) 異なりたる風聞。
(い-ぶん)[移文](名) ㊀おほやけの照會文。㊁處々にまはす廻狀。くわいぶん。くわいぶやう。「北山のー」。
(い-ぶん)[以聞](名) まうしあげ。上申。
(い-ぶんぼ)[異分母](名) 【數】二項以上の分數式にて、其の分母の同量ならざること。
いへ エイ [家](名) ㊀人の住むための建てもの。㊁つま。㊂わがうち。わがや。㊃やがら。うがら。㊄先祖より傳はり來たる代々のみやうせき。「ーをつぐ」。㊅いへがら。もんち。㊆【法】戶主が支配統轄する親族團體の稱、即ち、戶主と共に同一の戶籍に登錄せられてあるものをすべていふ。
(い-へう) ヘウ [意表](名) おもひのほか。あんぐわい。「ーに出づ」。(意外)。
——ぐわい[意表外](名) 「いへう」に同じ。
いへ-がら イエ [家柄](名) ㊀貴きいへすぢ。もんばつ。名家。㊁家の格式。家の地位。「ー低し」。
++いへ-ごと イエ [家言](名) 家のたより。家の傳言。
++いへ-ざかり イエ [家離](名) 家をとほくはなること。
++いへ-ざか-る ら り る る れ れ [家離](自、ら四) 家を遠くはなる。
いへ-ぢ イエ [家路](名) ㊀其家の方へ行く路。㊁我家へかへる路。
いへ-ぢ イエ [家地](名) よろひの下地につくる布、巾一尺二寸餘、地はおもに錦にて染め、これに金箔にて紋又は模樣をおす。
++いへ-づかさ イエ [家司](名) 家事を取り扱はする人。けいし。かれい。かでゆう。かふ。

いへ-つき イエ [家附](名) まへ方より、其家につきて居ること。「ーの娘」。
いへ-つぎ イエ [家繼](名) 「かとく」に同じ。「つぐ」。
++いへ-づ-く く き く く け け [家著](自、か四) 家に近づく。
++いへ-づくり イエ [家造](名) 家の造りかた。やづくり。やがまへ。いへがまへ。かさく。
いへ-つゞき イエ [家續](名) 家々のたてつらなりてあること。又、其所。
++いへ-づと イエ [家裹](名) 家へもちかへるみやげ。
++いへ-つ-どり イエ [家鳥](名) 【動】「にはとり」の古名。
いへ-で イエ [家出](名) ㊀ひそかに家を拔け出づること。㊁法師になること。
++いへ-とうじ イエ [家刀自](名) いへとじ。「ーに、盃さゝせて」。
++いへ-どころ イエ [家處](名) すみか。すまひ。ぢゆうきよ。ぢゆうしよ。
++いへ-とじ イエ [家刀自](名) ㊀家の主人の妻。內儀。㊁家の主人の母。
いへ-なみ イエ [家並](名) 家々のならびたること。又、其所。
いへ-にれ イエ [家楡](名) 【植】「しうぶんさう」に同じ。
いへ-ぬし イエ [家主](名) ㊀其家の主人。いへのあるじ。㊁貸し家のもちぬし。又はとりしまりをする人。やぬし。さはいにん。
++いへ-の-いも イエ [家芋](名) 「さといも」に同じ。
++いへ-の-いも イエ [家妹](名) おのれの妻。
++いへ-の-きみ イエ [家君](名) 主人。だんな。
いへ-の-こ イエ [家子](名) ㊀良家に生まれ出でたるもの。家門の子。㊁ぶんけ。いちもん。㊂家につかふもの。らうたう。

いへ-の-もん イエ [家紋](名) 中古より始まりたる一種の徽章、武家がはたさるしに付けたるより起り、衣服調度等にまでつくる其家々の徽號。もんどころ。もん。
++いへ-ばえ-に 言はんと欲していふ能はず。いふにいはれず。
++いへ-ばち イエ [家蜂](名) 家に飼ふ蜜蜂。
いへ-ばと イエ [家鳩](名) 【動】鳩の一種、嘴は短くして少しく膨大せる末端の角質なり、翼長大にして飛力強し、足は短小にして赤色を帶ぶ、毎歲二回產卵す、多く家に飼ふ。
++いへ-びと イエ [家人](名) ㊀家につかふる人。けにん。かじん。㊁貴族の家に出入する人。
いへ-もち イエ [家持](名) ㊀一家を立てゝ居る主人。こちゆ。家長。㊁家計のやりかた。
いへ-もと イエ [家元](名) ㊀嫁ぎたる婦人の里方。㊁遊藝などの流儀の本家。
いへ-らく イエ [言](副) いふには。いふやう。「欺きてー」。
いへ-ゐ イエ [家居](名) ㊀すまゐ。ぢゆうきよ。㊁わが家に居て休息すること。
++いへ-ゐ-る [家居](自、わ上一) ㊀家に居て休息す。㊁家をつくりてすまふ。いへゐす。
(い-へん)[異變](名) 異なりたること。つねにかはりたる事件。
いほ イオ [庵](名) 草木を結びて造りたるかりや。いほり。(廬)。
++い-ほ イオ [五百](名) ㊀ごひやく。㊁數の多きにいふ語。「ーのりの船」。「ーとせ」。
++い-ぼ[疣](名) 一種の皮膚病、筋肉凝塊をなして皮膚の飯粒ぐらゐの大きさに高くなること。いひぼ。えぼひ。(疣)。

(い-ぼ)[異母](名) 兄弟にして、父同じけれど母異なること。はらちがひ。
いぼ-じり(名) 【動】「いぼむしり」の俗稱。
いぼ-がへる エル [疣蛙](名) 【動】かへるの一種、形頗る大にして、背にいぼ多く、一種の臭氣あり。えぼがへる。くそがへる。
いぼ-くさ[疣草](名) 【植】鴨跖草(ツユクサ)科に屬する草、水邊に生ず、細長なる尖葉と帶紫白色の花とを有す。(水竹葉)。
++いほ-さ-す さ し す す せ せ [庵](自、さ四) いほりをつくる。
いぼ-ぬめぢ[疣茸](名) 【植】「いぼたけ」に同じ。
いぼ-むしり[疣毟](名) 【動】「いぼむじり」に同じ。
——まき[疣毟卷](名) (い)婦人の髮の結ひ方、たゞくる/\とまきつけたるもの。(ろ)そくはつの一種。
++いほしろ-をだ イオ [五百代小田](名) 多くの田。
いぼ-た[疣取](名) ㊀「いぼたらふ」の略言。㊁【植】木犀科に屬する小木本、葉は長橢圓形をなし、通常五分內外の幅を有す、花梗は多數の毛を具し、花冠の裂片は反捲せず、此木に蠟蟲を發育し、それより蠟を採る。(水蠟樹)。
いぼ-たけ[疣茸](名) 【植】きのこの一種、始めて生え出でたる時、恰もいぼを寄せあつめたるが如きさまなる故に此名あり。
いぼ-だひ イ [疣鯛](名) 【動】硬鰭類中まながつを科に屬する魚、頭部は縮小して背部は隆起し、腹部は側扁にして略方形をなす、體色は背部蒼色にして腹部は淡し、體長大なるは二尺に達す、我國西南部に中國の近海に多し。
いぼた-らふ ロウ [疣取蠟](名) 一種の蠟、いぼたらふのむしの幼蟲が、分泌せる白色の蠟質を採集し

たるもの。器具などを滑かにするに用ふ。(水蠟樹蠟)。——の-むし[疣取蠟蟲](名)【動】有物類中鱗翅科に屬する細蟲。幼蟲は老成して無翅の雌と有翅の雄とを生ず、雄は交尾の後直ちに死すれど、雌蟲は分泌する白蠟を身に塗りて越年す、いぼたの木に寄きて被覆を損すれど、幼蟲が分泌せる白蠟質は、これを採集して利用するを得。

++いぼ-あし[五百箇](名) ごひやく。いぼつ。

++いぼ-あし[疣痔](名) 肛門の邊に、疣の如きもの、生ずる病。

++いぼ-つぶ[五百箇](名) いぼたごひやく。——づめ[五百箇集](名) 多くのもの、あつまりたること。

++いぼとり-ぐさ[疣取草](名)【植】「いぼぐさ」の一名。(土佐の方言)。

いぼ-むし[疣蟲](名)【動】「いぼにしの一名。

いぼ-むし(名) 灸のあとのただるゝこと。いぼり。

いぼ-ゆひ[疣結](名)「いぼゆひ」に同じ。

++いぼ-むしり[疣摘](名)【動】(昆の蟲にて肉の疣を賜摘すれば、消失すといふ俗習よりいふ)「かまきりの一名。

いぼゆはひ[疣結](名)「いぼゆひ」に同じ。

いぼゆひ[疣結](名) 物の結び方、繩又は紐のさきを中へ出だし、またはより筋をまとはして引きとほして結ぶと、其狀疣に似たれば名づく。いぼゆはひ。いぼひ。

++いぼり(名) 聖靈などの、もやく〳〵と起ること。

++いぼり[庵](名) ①いほり。②隱者などの住家。いほ。(圖)。③いほりかんばんに同じ。——

かんばん[庵看板](名) ①古昔、俳優の名を書きて芝居の門に出だす木札の上に、屋根の形を簡略に施したるもの、いほりの形に似たれば名付く。②いほりかんばんを占め得べき俳優。

++いぼる(名) いぼり。

++いぼる(自、ら四) ①いほりをつくりてすまふ。②いほりを建てゝ住む。

++いぼる[庵](自、ら四) 「いぼる」に同じ。

いま(名) 目前の時。現在の時。このとき。いまどき。

いまいまし[今忌忌](形、シク) ①憎(にく)みても猶あまりに。②はどたゝぬうちに。やがて。もの——。——しげ(形、二)

いまいまし-ふり[今忌忌振](名) いまいましげなる樣子。

いまいまし-む[今忌忌](動、マ四) いまいましと思ふ。

いまいまし-め[戒](他、マ下二) ①懲らしめて、誡めて、きらに。

++いまいまし-めらる[戒](自、ら四) ①いましめを受く。

いまいまし-めん[今時分](名) いまごろ。「去年の——」。

いまし[今](副) ①まのあたり。②はどたゝぬうちに。やがて。もの——。——て。きらに。

いまいまし[今今](副) ①いまかく。②ぢきに。

いまいまし[忌忌](形、シク) ①憎(にく)みても猶あまりに。②はどたゝぬうちに。やがて。もの——。——しげ(形、二)

いまいまし-ふり[忌忌振](名) いまいましげなる樣子。

いまいまし-む[今今](動、マ四) いまいましと思ふ。

いまいまし-め[戒](他、マ下二) 「いましめ」の訛。

++いまいまし-めらる[戒](自、ら四) ①居たまふ。②行きたまふ。③來たまふ。

++いまいますせ[在座](他、さ下二) 「ゐます」の敬語。

++いまいますかり[御座](自、ら變) おいでなさる。いらせらる。いまします。

いまいまそかり[御座](自、ら變) 「いまします」に同じ。

いまいまだ[未](副) なほ其ときに至らずして。まだ。——し(形、シク) まだそれに達せず。

いまいまだ[今](副) 「いまだに同じ。——かた[今方](副) いまがた。

いまいまだ-の-ま[今間](名) 今の間。「——は、思ひ出さだめんに。

いまいまし-く-は[今者](副) 今となつては、今は。

いまいまし-む[戒](他、マ下二) ①懲らしめて過ちなからしむ。②警備を嚴にす。不慮に備ふ。③非行過失のなからんことをつとむ。「自ら——」。④人を禁縛す。ばばる。

いまいまし-め[戒](名) ①いましむること。いましめ。②いましむるもの。いましめ。こゝろづけ。ちゆうい。いひきかせ。つゝしみ。そなへ。③ばばること。ばばりたるなほなめ。

++いまいますせ[在座](自、さ四) ①居たまふ。②行きたまふ。③來たまふ。

++いまいますかり[御座](自、ら變) おいでなさる。いらせらる。いまします。

いまいまそかり[御座](自、ら變) 「いまします」に同じ。

++いまいまそかる[御座](自、ら四) 「いまします」に同じ。

いまいまだ[未](副) なほ其ときに至らずして。まだ。——し(形、シク) まだそれに達せず。

いまいまだ[今](副) 「いまがた。

いまいまだ-の-ま[今間](名) 今の間。「——は、思ひ出さだめんに。

いまいまし-く-は[今者](副) 今となつては、今は。

いまいまし-む[今時分](名) いまごろ。「去年の——」

‡いむ・はた・どの【忌機殿】(名) 天照大神の御衣を織るはたどの。
‡いむ・び【忌火】(名) 淸めたる火、神にたてまつる物を調理するに用ふ。——にはびのまつり【忌火庭火祭】(名) 古昔、六月、行はれし祭事、内膳司にて行へり。——や【忌火屋】(名) いむびを鑽(キ)りいだし、家屋。
‡いむ・べ【齋部】(名) ㊀神を祭るに用ふる品々を作り、又、潔齋して神事にあづかりし職。㊁姓(カバネ)の一。(忌部)。
‡いむ・べ【忌瓮】(名) いはひべ。いんべ。
‡いむ・をの【忌斧】(名) 神殿を造作し、或は神に奉る材木を切りとるに用ふる淸めたる斧。
‡いめ【夢】(名) ゆめ。「—に見ゆ」。
‡いも【妹】(名) ㊀男子より女子を親しみ呼ぶ稱。㊁いもうと。女弟。
いも【芋】(名) 【植】天南星科に屬する栽培草本、塊狀の地下莖を有す、葉は楕圓形にして葉柄長く、肉穗花序は長き佛焰の狀をなし、子房は一室を有す、地下莖及葉は食用に供せらる。さといも・たうのいも・はすいも・やつがしら等變種多し。
いも【藷】(名) 【植】(い) 纏繞草本にして莖に子を結び食用とすべきもの、總稱。つくねいも・かしういも等なり。(ろ) やまのいも。(は) さつまいも。(甘藷)。
いも【疱】(名) 顔面にあるいもがさのあと。あばた。(疱痕)。
いも・アン【藷餡】(名) さつまいもを蒸して磨りつぶし、これと砂糖とまぜたるもの。
いも・うと【妹】(名) ㊀同胞にて後に生まれたる女子。㊁己より年少の婦人を親しみて呼ぶ稱。——ぶん【妹分】(名) 假りに妹と定めたるもの。(義妹)。——むこ【妹婿】(名) 妹の夫。
いもかけ・どうふ【藷掛豆腐】(名) 豆腐の汁に、やまのいものすり汁をかけたるもの。やまかけどうふ。とろゝどうふ。
‡いも・がさ【疱瘡】(名) はうさう。もがさ。
いも・がしら【芋頭】(名) さといもの根。おやいも。(蹲鴟)。
いもかはうどん(ワ|カ)(名) 尾張國鳴海邊にてはじめて製したる平うちのうどん。
いも・がひ(イ|ガ)【芋貝】(名) 【動】腹足類中前鰓類に屬する小螺、白色に紅斑ありて脣なく、殼形は頂部平坦にして、腹部及足部は廻旋せず、近海に產す。
いも・がほ(オ|ガ)【痘顔】(名) 痘痕のあるかほ。あばたづら。ぢやんこづら。
いも・がら【芋幹】(名) 芋の莖を干したるもの、食用に供す、なまなるを「ずゐき」といふ。(芋莖)。
いも・がり【妹許】(名) 妹の居る所。
いも・ごみ【藷籠】(名) 一種の食品、米の粉にやまのいもをすりまぜ、これを昆布につゝみて、小口切りにしたるもの。
いも・ざけ【藷酒】(名) やまのいもを擂り入れたる酒。(山芋酒)。
‡いも・し【耿】(名) いもがら。
‡いも・じ【鑄物師】(名) 「いものし」の略言。
⌐いも・じ【い文字】(名) 【動】烏賊の異稱。
⌐いも・じ(名) 「ゆもじ」に同じ。
‡いも・じうとめ【妹姑】(名) 妻の姉妹。
いも・じり(名) 【動】「いぼむしり」の轉。
いも・じる【藷汁】(名) 「とろゝじる」に同じ。
いも・ぜんぜよ【藷樓羹】(名) 一種の食品、やまのいも又はつくねいもをおろし、これに豆腐を入れてゆでたるもの。
いも・せ【妹背】(名) ㊀女と男と。㊁夫婦の稱。めをと。㊂兄と妹と。姉と弟と。——どり【妹背鳥】(名) 【動】「ほとゝぎす」の一名。
いも・ちびやう(ヒ|ビヤウ)(名) 稻の病の一、稻生長して一尺許となりたる頃、葉に黴菌發生して白斑を現し、次第に衰弱して抽穗せざるもの。(稻熱病)。
いも・でんがく【芋田樂】(名) 一種の料理、さといもを串にさして味噌をぬり、これをやきたるもの。いものおでん。
いもと【妹】(名) いもうと。
‡いも・なね【妹】(名) (「なね」は愛する意)妹又は妻の稱。
い・もの【鑄物】(名) 金屬を溶かして、鑄造せる器物の總名。——し【鑄物師】(名) いものを作る職人。いもじ。(冶人)。
いも・の・こ【芋子】(名) おやいもに附きたる小塊。こいも。
いも・の・やま【芋山】(名) 連歌にて、「山の芋」を轉倒していふ語。
いも・ばたけ【芋畑】(名) 芋を植ゑたるはたけ。(芋田)。
‡いも・ひ(イモヒ)【齋】(名) いむこと。しやうじん。「—の椀にまゐれる」。
‡いも・ふ(イモ|ハヒフフヘヘ)【齋】(自、は四) 「いむ」の延言。
いも・むし【芋蟲】(名) 【動】蛾類の幼蟲の總稱、形は蠶に似て、長さ一二寸より三四寸、後に蛹となり更に羽化して成蟲即ち蛾となる、種類甚だ多し、とこよむし。(扁蠋)。
⌐いも・めいげつ【芋名月】(名) (いもを供ふるより名づく)陰暦八月十五夜の月の稱。
‡いも・ゐ【齋居】(名) ものいみをして居ること。——のみや【齋居宮】(名) 伊勢のさいぐう。
いや【彌】(副) だんだんかさなりて。しだいにすゝみて。いよいよ。ますます。

⌐いや【否】(名) このまぬこと。欲せざること。「—なり」。
いや【否】(副) いゝえ。いな。「—さうで無い」。
いや(感) おどろきたるときの發聲。「—、これは」。
⌐いや・いとこ【彌從兄弟】(名) 父のいとこの子。またいとこ。ふたいとこ。(再從兄弟)。
⌐いや・いや【否否】(名) 「いや」をかさねて厭ふ意味を強めたる語。「—ながら」。
⌐いや・いや【否否】(副) ㊀いな決して。「—、それはさうでない」。㊁いやとはおもひながら。——さんばい おふさんばい いやとはおもひながら、恐ろず知らず酒を飲み過ごす。又、いやとはおもひながら、つい深入りするにいふ。
(い・やう(ヤウ)【異樣】(名) かはりたるさま。
⌐いや・おう【否應】(名) いなむとうけがふと。——なし(くしき/しけれ)【否應無】(形、二) 是非を言はず。違背なし。——なしに【否應無】(副) 無理に。むしつけて。
‡いや・おひ(イ|オ)【彌生】(名) ㊀草木のおひかさなること。㊁陰暦三月の異稱。やよひ。——のつき【彌生月】(名) 陰暦三月の稱。
いや・がうへ・に(ウ|ホ)【彌上】(副) いよいよ有る其上に。
(い・やく【醫藥】(名) ㊀醫術と藥品と。㊁藥品。くすり。
いや・し(しくしき/しけれ)【賤、卑】(形、二) ㊀くらゐひくし。みぶん高からず。たふとからず。㊁げひんなり。おとりたり。いやしむべし。㊂いさぎよからず。こゝろけがらはし。㊃價少し。やすし。
‡いや・しく(かきくくけけ)【彌重】(自、か四) いよいよしげくなる。「いやしきふれる夜半のしら雪」=續拾」。
いやしくも【苟】(副) ㊀かりそめにも。かりにも。㊁もしも。もし。「蒙兵—退かば」。㊂たゞ。たゞに。「—、これを知るのみにあらず」。
いやしみ【賤】(名) さげすみ。あなどり。けいべつ。
いやし・む(まみむむめめ)【卑、賤】(他、ま四) みくだす。かろしむ。みさぐ。あなどる。かろんず。さげすむ。
いやしん・ず(ぜじずずるずれぜよ)【卑】(他、さ變) いやしむ。
いや・す(さしすすせせ)【療】(他、さ四) やまひをなほす。
いやちこ(名) 神佛などの利益のいちじるしきこと。あらたか。「れいげん—なり」。(灼然)。
‡いや・つぎつぎ【彌次次】(名) ながくあとをけいぞくすること。
‡いや・としのは【彌年每】(名) まいねん。れんねん。「—に見つゝ」。
いや・まさり【彌增】(名) いよいよまさると。
いや・まさ・る(らりるるれれ)【彌增】(自、ら四) いよいよ多くなる。だんだんまさる。
‡いや・まし(しくしき/しけれ)【否】(形、二) いやなる樣子なり。
いや・まし【彌益】(副) いやがうへに多く。いよいよ多く。
⌐いや・み【否味】(名) 相手に不快の感をなさしむる言語又は態度。
‡いや・む(まみむむめめ)【否】(他、ま四) いなむ。きらふ。いみきらふ。
‡いや・め【否目】(名) 憂へたる目つき。涙ぐみたる目つき。「—のけしき」。
⌐いや・らし(しくしき/しけれ)【否】(形、二) ㊀きらふべし。きらはし。㊁いろめかし。みだりがまし。
い・ゆ(えええゆゆるゆれえよ)【癒】(自、や下二) 病なほる。ぜんくわいす。ほんぷくす。
‡い・ゆ・く(かきくくけけ)【行】(自、か四) 行く。
いよ【彌】(副) 「いや」の轉。
⌐いよ(感) 人をほめはやすときの發聲。「—、えらい」。
いよ・いよ【愈】(副) 其上に。ますます。
(い・よう【異容】(名) 普通ならざるかたち。をかしき形。いぎやう。
いよ・がすり【伊豫飛白】(名) 伊豫國より產出するかすり織。
いよ・かづら【伊豫葛】(名) 【植】蘿藦(カガイモ)科に屬する草、葉は廣楕圓形或は倒卵形にして、花冠は暗黃色なり、觀賞用として栽培せらる。
(い・よく【意慾】(名) 心の欲する所。意のえらぶ所。
いよ・ござね【伊豫小札】(名) よろひのこざねの一種、形は鉢附けのこざねに似て、一文字に切り其末を丸くしたるもの。
いよ・しろめ【伊豫白味】(名) (初め、伊豫より出だし、が故に名づく)「アンチモニー」の一名。
いよ・す【伊豫簾】(名) 「いよすだれ」に同じ。
いよ・すだれ【伊豫簾】(名) ㊀伊豫國より產するすだれ、篠極めて細く、長さは七八尺ありて、上品なり。㊁【動】「のしがひ」の一名。
いよ・ぞめ【伊豫染】(名) 模樣の名、伊豫簾を二枚以上重ねてすかしながむれば、木目の如き一種の模樣の見ゆるものなるが、此模樣を取りて、絹などに染めたるをいふ。
いよ・だ・つ(たちつつてて)【彌竪】(自、た四) 寒さ又は恐怖などにて身の毛立つ。「身の毛—」。
いよ・ど【伊豫砥】(名) 一種の砥石、伊豫より出づ、色白くして質軟し。
いよ・まさ【伊豫柾】(名) 「いよまさがみ」の略言。——がみ【伊豫柾紙】(名) 一種の紙、伊豫國より出す、多くは錦繪などに用ふ。まさめがみ。
⌐いよめ(名) 【動】「にほ」の一名。(阿波の方言)。
‡いよやか(名) 木などの高くそびえたるさまにいふ語。いよよか。(森然)。

‡いよ-よ［愈］(副) いよ〳〵。
いよよか(名) 「いよやか」に同じ。
いら［刺］(名) ❶草木の莖、葉などにあるとげ。❷魚の背にあるひれ。
いら［蕁］(名) 【植】「いらくさ」に同じ。
(い-らい［以來］(名) ❶このかた。❷この〳〵ち。
(い-らい［依賴］(名) たのみ。たより。
いら-いら［刺刺］(名,副) ❶とげなどの膚にふれたるときの感覺にいふ語。❷心のせきたつさまにいふ語。「心が―す」。
いら-いら・し［苛苛］(形,二) 心いら立つさまなり。いら〳〵しくあり。
いらか［甍］(名) ❶屋根に葺く瓦。❷瓦葺きの屋根。
いら-くさ［刺草］(名) 【植】蕁麻科に屬する草、莖・葉共に刺を有す、葉は心臟形にして邊緣鋸齒を有し、纖維甚に結合す、皮より纖維を採りて絲に製す。いら。(蕁麻)。
‡いらし［擧］(名) 貸して利息をとること。
‡いら・す［擧］(他,さ四) 貸して利息をとる。
いらたか-あぢ［刺高鰺］(名) 【動】あぢの一種。大さ三四寸、皮あつくとげ多し。
いらたか-ずず［刺高珠數］(名) つぶの平たき念珠。
いら-だ・つ［苛立］(自,た四) 心いら〳〵す。せきたつ。ぢれこむ。いらつ。
いら-だ・つ［苛立］(他,た下二) いら〳〵せさす。ぢれこます。せかす。
(いらだてる［苛立］(他) 「いらだつ」の訛。
いら・つ［苛］(自,た四) いらだつ。「―てうつ大刀」。
‡いらつ-こ［郎子］(名) ([illegible])子の義 かはゆき男子。「わが―」。

‡いらつ-ひめ［郎姬］(名) かはゆき女子。いらつめ。
‡いらつ-め［郎女］(名) いらつひめ。かはゆき女。
いら-な［刺菜］(名) 【植】からしの一種、葉は太く帶紫色にして、緣邊に細かき鋸齒を有す。
‡いらなげ・し［苛甚］(形,一) いらなし。
‡いら-な・し［苛甚］(形,一) いら〳〵し。はげし。ことごとし。
‡いら-ひど・し［苛酷］(形,一) きはめてひどし。
‡いら・ふ［擧］(他,は四) かして利息をとる。いらす。
‡いら・ふ［應］(自,は下二) へんたふす、こたふ。
‡いら・ふ［弄］(他,は四) もてあそぶ。
いらへ［應］(名) こたへ。へんじ。
いら-ぼ［伊羅保］(名) 朝鮮古渡りの陶器の一種、茶道にて珍重す。
いら-むし［刺蟲］(名) 【動】鱗翅類中蛾類の仔蟲、體長七八分にして、おもに柿及梅等の新芽を食害す、綠色卵大の繭をつくりて蛹となる、體に刺毛多し、人これに觸るゝときは刺痛を感ず。おこぜ。ばんきやうし。
いら-め・く［苛］(自,か四) ❶いら〳〵するやうに見ゆ。❷かど〳〵しくあり。
‡いらら-か・す［苛］(他,さ四) いからす。
いらら・ぐ［苛］(自,か四) ❶かどだつ。いかる。❷寒さに、鳥肌の立つにいふ。
いらら・げ［苛］(他,か下二) いらゝかす。
いら・る［焦］(自,ら下二) 我がむねを煮るが如く焦る。
いり［圦］(名) 樋のくち。埋め樋。(樋)。
いり［入］(名) ❶いること。はいること。❷見えずなる

こと「日の―」。❸いりよう。つひえ「金の―が多い」。❹あがり。收入。❺いりでき。いり仕掛。
いり-あげ・る［入揚］(他,下一) 其人のために、少からぬ浪費をなす。
いり-あひ［入相］(名) 日がいるとき。にちぼつの時。くれがた。ひぐれ。――の-かね［入相鐘］(名) 日沒の頃、寺院にてつく鐘の音。(晚鐘)。
いりあひ-けん［入會權］(名) 【法】或村落の住民が、一定の山林又は野地に於て、共同して收益を爲すの權利。
いり-あや［入文］(名) 舞ひの手、一曲舞ひ終りて復た[illegible]て舞ひかくすこと。
いり-うど［入夫］(名) 寡婦の夫となる人。
いり-うみ［入海］(名) 陸に入りこみたる海の部分。(海灣)。
いり-え［入江］(名) 湖にいりこみたる湖海の部分。(內江)。
いり-がく［入角］(名) 模樣の名、かどかくの角にひとつづゝの線のそくるもの。いりずみ。
いり-ガハラ［炒瓦］(名) 「いりなべ」に同じ。
いり-かはり［入代］(名) いりかはること。かうたい。
いり-かは・る［入代］(自,ら四) いりて他にかはる。かはりあふ。(交代)。
‡いり-かよ・ふ［入通］(自,は四) 立ち入りて往來す。
いり-がら［炒殼］(名) ❶鯨肉をいりて油を取り乾かしたるもの、食用に供す。❷豆腐のからをいりたるもの。
いり-ぐち［入口］(名) ❶はいりぐち。門戶。❷物事の端緒。
いり-く・む［入組］(自,ま四) みだれまじる。いりまじる。

いり-こ［海參］(名) 一種の食品、なまこの腸を去り、これを煮(ニ)て、日にほしたるもの。ほしこ。からこ。(乾海鼠)。
いり-こ［炒粉］(名) 米の粉をいりたるもの、菓子の原料として用ひらる。くわしだね。たね。
いり-ごひ［煎鯉］(名) 一種の料理、鯉の肉を細切となし、これを蒸したるもの。
いり-こみ［入込］(名) ❶くべつなく入りまじること。❷芝居の下等棧敷。
いり-こ・む［入込］(自,ま四) ❶まひている。あしわけてはいる。❷其中にはいる。❸いりくむ。
いり-ごめ［炒米］(名) 「やきごめ」に同じ。
(いり-ごろ(名) 「いりなべ」に同じ。
いり-ざけ［煎酒］(名) 酒に醬油又はかつをぶしを加へて、煎じ出だしたるもの、なます・さしみなどに用ふ。(煮酒)。
いり-しごと［入仕事］(名) いれてまにてなすしごと。
‡いり-しほ［入潮］(名) ひきしほ。
いり-しほ［炒鹽］(名) いりたる鹽、やきしほ。
いり-ずみ［炒炭］(名) 火にあぶり濕氣を去りて、火のうつりやすきやうにせる炭。
いり-すみ［入角］(名) 「いりがく」に同じ。
‡いり-たち［入立］(名) ❶入り込むこと。入りびたること。❷古昔、許されて殿中に入り込みて、女房と同座せしこと。たちいり。「昔は、女房の―なりし人の」。
いり-た・つ［入立］(自,た四) ❶たちいる。いりこむ。❷他家にゆききす。
いり-だひ［煎鯛］(名) 鯛の肉をあぶりて、細末にせるもの。ふくめだひ。
いり-たまご［煎玉子］(名) たまごに醬油と酒又はみりんとを加へて、いりたるもの。

いり-ちがひ［入違］(名) いりちがふこと。(錯雜)。
いり-ちが・ふ［入違］(自,は四) ❶我いりて彼いで又は彼いり我いでゝゆきあはず。❷互ちがひにいりこむ。
いり-つ・く［煎付］(自,か四) 水分がなくなりて、鍋にひつつく。煮つまる。
いり-つ・く［煎付］(他,か下二) 煮て水分をなくす。
いり-つけ［煎付］(名) ❶いりつけたる食物。❷「にざかな」の一名。(京阪地方の方言)。
(いりつける［煎付］(他) 「いりつく」の訛。
いり-どうふ［煎豆腐］(名) 一種の料理、豆腐を湯煮にして其水分を去り、醬油・味醂などにていりつけたるもの。
いり-どり［煎鳥］(名) 一種の料理、鳥の肉に蓮根・牛蒡などを切りて加へ、これを醬油・味醂などにていりつけたるもの。
いり-なべ［煎鍋］(名) 物をいるときに用ふる鍋、鐵又は土にてつくり、形平たし、はうろく。いりがはら。(鏊)。
いり-に［入荷］(名) 港などに遠方より貨物の到着すること。
いり-ひ［入日］(名) 日暮れとなりて、西方に入らんとする太陽。――を かへさんず いきほひ 威權いと盛んにして、物事心のまゝになるにいふ。
いり-びたり［入浸］(名) ❶水につかりてひたること。❷絕えず他家に起臥すること。
いり-ふね［入舟］(名) 港に入り來る船。
‡いり-ほが(名) いりこみすぎたること。こみいりたる心。
いり-まじ・る［入雜］(自,ら四) いりこむ。いりてまじる。さくざつす。

いり-まめ［炒豆］(名) ❶いりたる大豆。❷「まめいり」に同じ。
いり-み［入身］(名) 相撲・柔術にて、對手の方に我身體を入れこむこと。
いり-むぎ［炒麥］(名) 麥をいりて、細末にせる粉、むぎこがし。いりこ。(麨)。
いり-むこ［入婿］(名) 女のある家にいりて、婿となること。(贅)。
いり-め［入目］(名) 金錢の消費、ひよう。にふひ。にふよう。
‡いり-め・く［苛］(他,か四) いらだちて、人をいそがす。
いり-もの［炒物］(名) ❶肉類などをいりつけたるもの。❷米豆などをいりて、砂糖を掛けたるもの。まめいり。いりごめ。
‡いり-もみ［煎揉］(名) もむがごとく烈しき風。
‡いり-も・む［煎揉］(他,ま四) はげしく揉む。もみにもむ。
いり-ゆ［炒湯］(名) 飯をこがして、湯を注ぎ其香を移したるもの。
いり-よう［入用］(名) いりめ。にふよう。ひよう。
いり-わけ［入譯］(名) すぢみち。事の由。
(い-りん［彝倫］(名) 人生の名分、人生の道義、すぢ。みち。のり。
い・る［入］(自,ら四) ❶うちへ行く。うちへ到る。❷かくる。おつ。きえる。「日―」。❸すゝむ。いたる。「技術に―」。❹納まる。❺要す、用ひらる。「金が―」。❻中に生ず。いでく。「ひゞが―」。❼動詞の下に付け、其意を強むるに用ふる語。「ふそれ―」「かんじ―」。
い・る［炒］(他,ら四) 物を土鍋又は鐵皿などに入れ、煮つめて水分を去る。(煎、熬)。

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

い・る[入](他、ら下二) ❶うちへゆく。なかへ進む。❷いたす。すゝむ。❸かくす。おとす。去さむ。❹納む。「利息を―」。❺賢やす。用ふ。「ちからを―」。❻受けがふ。承知す。「いさめを―」。❼中へ挟む。「疑を―る餘地なし」。

い・る[沃](他、ら上一) そゝぎかく。

い・る[鑄](他、ら上一) 金屬を熔解し鑄型にいれて、器物を作る。「鐵瓶を―」。

い・る[射](他、ら上一) ❶矢又は彈丸をはなちやる。❷放出す。そゝぐ。はなつ。❸中つ。❹弓を用ひてはなちやる。「弓を―」。

いるか(名)【動】游水類中有齒類に屬する哺乳動物、體長六七尺、頭部長くして上下の顎に圓錐形の小齒あり、背鰭は背の正中にありて鎌状をなす、何れの洋海にも遊し、群集して游泳す、肉は食用に供せられ、油及革も種々の用に供せらる。(海豚)。

いるかせ[忽](名)「ゆるがせ」に同じ。

いる-さ[入方](名) いる方。「―の山」。

イルミネーション[Illumination](名) 多くの燈火を點じて裝飾すること。

(**い-るゐ**[衣類](名) 身に着るものゝ總稱。きもの。いふく。いしやう。

(**い-るゐ**[異類](名) ❶尋常普通ならぬもの。類にはづれたるもの。❷人類に異なりたるもの、即ち、禽獸・變化(ゲ)。――**いぎやう**[異類異形](名) さまざまのかたちのもの。よのつねならぬもの。妖怪。變化。

いれあ・げる[入揚](他、か下一)「つぎこむ」に同じ。

(**い-れい**[異例](名) ❶ためしなきこと。❷つねならざること。びやうき。

(**い-れう**[醫療](名) いしやうつを以て、疾病を治すること。ちれう。れうぢ。「一機械」。

{**いれ-かけ**[入掛](名) 相撲(スマフ)などにて、其日の興行を中途にて止むること。

いれ-かたびら[入帷](名) 着物などを、箱に入るゝときに包む服紗(ザフ)の如きもの。

{**いれ-かはり**[入代](名)「いりかはり」の訛。

{**いれ-かはる**[入代](自)「いりかはる」の訛。

いれ-か・ふ[入替](他、は下二) かへている。いりかはらしむ。

いれ-かへ[入替](名) ❶いれかふること。❷抵當に入れたる品物を、他の品物といれかふること。

いれ-がみ[入髪](名) 髮を結ぶに添へ入るゝ毛髮。そへがみ。いれげ。(髱髮)。

いれ-ぎ[入木](名) 彫刻のなほしをするに、他の木をうめこむこと。

いれ-げ[入毛](名)「いれがみ」に同じ。

いれ-こ[入子](名) ❶一つの器の中に、順次に小なるを重ねてくみいれたるもの。❷外部にあらはれずして、内部にかくれてあること。(内子)。――**さけ**[内子鮭](名)【動】はらゝごを持ちたる鮭。――**まくら**[内子枕](名) 枕の中に、別の枕のいりてあるもの。

いれ-ごみ[入込](名) 多數の人のいりこみたること。又、其所。

いれ-ずみ[入墨](名) ❶昔時の刑罰の一、腕にきずつけて墨を刺し、後日の目標となしゝもの。(黥)。❷ほりもの。(刺青)。

{**いれちがひ**[入違](名)「いれちがへ」の訛。

いれ-ちが・ふ[入違](他、は下二) ❶あやまりてとりちがふ。いるべき所をあやまる。❷かれを出だしこれを入る。

{**いれちがふ**[入差](自)「いりちがふ」の訛。

いれ-ちがへ[入違](名) いれちがふること。いれまちがひ。

{**いれちがへる**[入違](他)「いれちがふ」の訛。

いれ-ぢゑ[入智慧](名) 他人よりをしへられたる謀略又はかんがへ。

{**いれ-でま**[入手間](名) てつだひてを入るゝこと。

いれ-ば[入齒](名) 人造の齒を以て、脱(ヌ)け齒のあとに入るゝこと。又、其入れたる齒。(義齒)。――**し**[入齒師](名) 入齒を業とするもの。

いれ-ひも[入紐](名) 狩衣・直衣(ナホシ)・狩衣(カリギヌ)などの紐、雌紐と雄紐とをとりあはせ、輪にさし入れて掛けおくもの。

いれ-ふだ[入札](名) にふさつ。とうへう。

いれ-ブツじ[入佛事](名) ❶佛事のいとなみの施物又は費用。❷入費を出だしたるのみにて、其利益なきこと。

いれ-ぼくろ[入黒子](名) 腕に人名などを細くいれずみにすること。(刺青)。

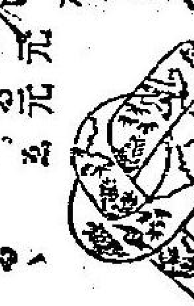
いれ-ま・ぜる[入雜](他、さ下二) 入りまじらしむ。混ず。

{**いれまぜる**[入雜](他)「いれまず」の訛。

いれ-め[入目](名) ガラスなどにてつくりたる眼球。眼球なきものが、これを眼孔に嵌め入れて、明を粧へるもの。(假眼、義眼)。

いれ-もじ[入文字](名) 歌の中に、かくし入れし文字。

いれ-もとゆひ[入元結](名) 元結をまきて更に其上に結びかざる元結、童子の髮を結ふに用ふるもの。ふともとゆひ。おはもとゆひ。



[ひゆともれい]

いれ-もの[入物](名) ものを入るゝうつは。(容物)。

{**いれる**[入](他)「いる」の訛。

{**い・れる**(自、ら下一) ❶炒(イ)られてあつくなる。❷心いらだつ。「いら」。

いれ-わた[入綿](名) 衣服などにいれおくわた。

いろ[色](名) ❶發光體より發射する光り又は暗體より反射する光りが、眼に刺戟を與ふるによりて經驗する一種の現象、其主なるは、赤・黄・青の三、混じて紫・綠などの間色を生ず。❷婦顏のにほひいろ。❸きんぎん。「一許さる」。❹つや。かざり。いろどり。❺かはいろ。がんきよく。「―を變ず」。❻容貌のうるはしきこと。又、其人。❼男女の情愛。おもひやう。❽いろめかたること。いろごのみ。❾まだ。たとひ。「十人十―」(種)。❿きざし。やうす。(候)。⓫てつき。ひゞき。「音―」(調)。⓬毛髮の色のうるはしきこと。⓭戀する男又は女。情人。⓮遊廓の異名。

†**いろ**―[愛](接頭) 或語に冠して親愛の意を表はす。「―ね」。「―と」。「―せ」。

(**い-ろ**[倚廬](名) 喪中にこもり居る假り屋。

いろ-あ・げる[色上](他、か下二) いろあげす。(潤色)。

いろ-あげ[色揚](名) 古き布などの色あせたるを、更に染めなほして鮮かになすこと。

いろ-あそび[色遊](名) 遊里にてのあそび。

いろ-あひ[色合](名) 色のほどあひ。いろの加減。いろみ。

いろ-いと[色絲](名) ❶さみせんのいと。又、さみせん。❷種々のいろに染めたる絲。(綵絲)。

†**いろ-いろ**(名、副) 啼泣するさまにいふ語。

いろ-いろ[色色](名) ❶さまざまの色。❷さまざま。くさぐさ。「―手をつくす」。

いろ-いろ[色色](副) かれこれと。さまざまに。

†**いろ-え**(名) 兄を親しみて呼ぶ稱。(親兄)。

いろ-か[色香](名) ❶いろとかをりと。❷容色の艶麗なること。

いろ-がはり[色革](名) 染めがは。

いろ-がはり[色變](名) ❶種類のかはりたるもの。❷又色のかはりたるもの。❸婚禮のときに着かふる色のかはりたる着物。(色直)。

いろ-がひ[色貝](名) さまざまの介。

いろ-がみ[色紙](名) 色染めにせる紙。(花紙)。

{**いろ-きちがひ**[色狂](名) 色情に因りて、精神錯亂せること。又、其人。(花風狂)。

†**いろくづ**[鱗](名) ❶いろこ。こけ。うろこ。❷魚の總名。「るい」。

いろ-くるひ[色狂](名) 色慾におぼれ放蕩すること。

いろ-け[色氣](名) ❶いろあひ。「―のいゝそめかた」。❷きやうさう。(春心)。

いろ-けし[色消](名) ❶【理】色收差を消すこと。❷不風流。不粹。――**レンズ**[色消―＝Achromatic lens](名)【理】色收差のなきレンズ。

†**いろこ**[鱗](名) ❶「うろこ」に同じ。❷人の頭部にある垢。ふけ。ふけ。(頭垢)。――**がた**[鱗形](名)「うろこがた」に同じ。

†**いろ-と**[色子](名) 役者などの稱。

{**いろ-ごと**[色事](名) ❶男女間のみだらなる行ひ。❷芝居のぬれ事。――**し**[色事師](名) ❶ぬれ事の役をなす役者。❷遊冶郎。

いろ-このみ[色好](名) 色事を好むこと。「―の」うはれつき」。(好色家)。

いろ-ごろも[色衣](名) ❶種々の色に染めたる衣服。❷うるはしき着物。

いろ-こひ[色戀](名)【動】にしの類、殻色うるはし。

いろ-ざし[色差](名) ❶いろあひ。いろけ。❷いろどり。さいしき。

いろ-ざと[色里](名) 遊女・藝者などの集まり住居する處。いうり。くるわ。(花柳巷)。

いろ-ざめ[色様](名) 色合ひ。

いろ-さ・めむ[色褪](自、ま下二) ❶色あす。光澤うす。(褪色)。❷顏色青ざむ。

いろ-しうさ[色收差](名)【理】白き光りがレンズを通過するとき、分散するため、物像の周圍に色つきて見えて鮮明ならざること。

いろ-しな[色品](名) 種々の物。

いろ-しろ[色白](名) 人の肌の色の白きこと。(皙)。

いろ-ずり[色摺](名) さいしきせる摺り物。――**のゐ**[色摺衣](名) 鳳凰・桐又は鑾龍などの模樣を、いろどりて摺りたる衣。

†**いろ-せ**(名) あに。(家兄)。

いろ-そ・ふ[色添](自、は四) ❶物の種類增す。❷在來のものより、一層色はゆ。

いろ-だ・つ[色立](自、た下二) ❶いろ生ず。❷顏色變ず。❸きざす。

いろ-だま[色玉](名)【植】「だいだい」の一名。

いろ-づ・く[色着](自、か四) ❶色生ず。❷成熟す。うむ。❸いろけづく。

いろ-つけ[色着](名) 色をそむること。彩色。

いろ-つや[色艶](名) ❶色とつやと。❷かはいろ。❸おもしろみ又はかざり。「―のない話」。

†**いろ-と**(名) おとうと。(家弟)。

(**いろ-どうき**[異路同歸](名) みちはそれぞれことなれど、おちつくさきはことならざること。

いろ-どり[色取](名) ❶さいえき。ちやくしよく。❷けしやう。化粧。❸かざり。裝飾。

はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

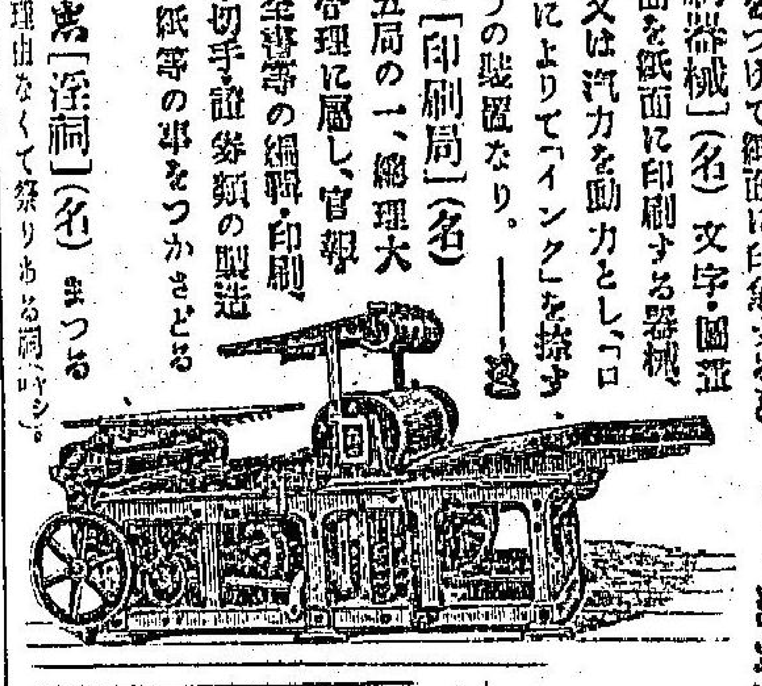
†古語　～俚語方言　一字音

†いろどり[色鳥](名) 種々の鳥。
いろとりのとがみ[色鳥子紙](名) 越前のいちばうゑ上、大阪のごゑきがみ、修善寺のかきいろがみの類をすべいふ。
いろどる[彩る](他、ら四) ❶さまぐの色を以てきいあそす。さまぐの色をとりあはせてかざる。❷顏に、紅・おしろい・まゆずみなどを塗りて化粧す。❸つやをつく。かざる。潤色す。——つき[色取月](名) 九月の異名。木葉のいろづく月。
いろなぐさ[色無草](名) 【植】松の一名。
†いろなほし[色直](名) 結婚の後、三日まで着たる白小袖を、色ある小袖に着かふること。今は、結婚の當夜に行ふ。
†いろね[色音](名) ねいろ。こわね。「一ゆかしき想夫戀」。
いろね(名) はゝ。(家母)。
いろは[伊呂波](名) ❶ひら假名四十七文字の稱。初めの三字を取りてこれに名づく。❷兒童に初めて書を學ばしむるに、ひら假名四十七文字を授くる事。轉じて、學びの初步。初學。❸初步の平易なる事。——うた[伊呂波歌](名) いろは四十七文字の歌。四十七文字を同一文字を重用せざる今樣歌に組立てあり。弘法大師の作にて、涅槃經中有名なる諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の四句の意を述べたるものといふ。即ち、色はにほへど散りぬるを、我世誰ぞ常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢見じ醉ひもせずなり。——がな[伊呂波假名](名) ひらがな四十七字の稱。——ガルタ[伊呂波骨牌](名) 一種の骨牌。一枚ごとに、伊呂波短歌一首づゝの趣を畫き、これに首字をあるし、都合四十七枚あり、歌に合せて取るもの。——たとへ[伊呂波譬](名) 「いろはたんか」に同じ。——たんか[伊呂波短歌](名) いろは四十七文字をもの〳〵首におきて、兒童の教訓とせる譬の歌。——ぼたん[伊呂波牡丹](名) 【植】ぼたんの一種、花普通の牡丹より劣る。
†いろふ[綺](他、は四) ❶関係す。あづかる。❷いらふ。もてあそぶ。
†いろふ[色](自、は四) ❶ゆらぐ。❷色まして潤しくなる。
いろふ[綺](他、下二) ❶色どりつかふ。❷いろどる。
†いろふし[色節](名) 取り立てゝいふべき晴なる事。
いろふみ[色文](名) 戀愛の情をかきたてたる書状。えんぶん。(艶書)。
いろほうしよがみ[色奉書紙](名) ほうしよがみの一種。色を付けてすきたるもの。筑前又は越前より出す。
いろめ[色目](名) ❶古昔、衣服の色合ひの名目。❷ながしめに見ること。又、其めつき。「一をつかふ」。(秋波)。❸色のほどあひ。
いろめかし[色](形、二) いろごのみらし。いろめきて見ゆ。
いろめく[色](自、か四) ❶色生ず。❷戰勢崩れ始む。❸いろごのみらしく見ゆ。
いろり[色利](名) 物を煮るに加へて、其味を添ふるもの。「かつを一」。
いろわけ[色分](名) ❶地圖などに、彩色して區劃をなすこと。❷物事の區別。
いろゑ[色繪](名) ❶彩色をほどこせる繪畫。「彩畫」。❷刀劍のふちかしらなどに、金銀を嵌め入れたるもの。
いわう[以往](名) いご。このかた。こののち。
いわう[醫王](名) やくし。(藥師)。
いわう[硫黃](名) 「ゆわう」に同じ。——さう[硫黃草](名) 【植】「ゆわうさう」に同じ。
†いわく[稚](自、下二) 幼稚にして、かよわくあり。
†いわけ[幼稚](形、二) いとけなし。あはつ。
いわし[鰯](名) 【動】硬鱗類中にしん科に屬する魚。體は紡錘形にして鱗は稍大なり。色は背部青色にして腹部銀白色なり。脂肪を搾りて燈油となし、又、干しかとなし肥料に用ふ。沖繩地方より東北及北海道に至る沿岸に産すれど、安房上總地方を最とす。——くぢら[鰯鯨](名) 【動】くぢらの一種。胴と腹との皮に縱線ありて、編みたる竹の如し、鰯を好みて食す。かつをくぢら。
いゐ[依違](名、副) 決斷する能はざるさまにいふ語。「一決せず」。
いゐき[異域](名) ぐわい國。いこく。——のおに[異域鬼](名) 他國にて死にたるもの。
いゐぢゆうぎやう[異位重行](名) 古昔、公事儀式などのとき、内裏の庭に公卿のたちならびたる配列。
いを[魚](名) 「うを」に同じ。——うり[魚賣](名) うをうり。さかなうり。——ぐし[魚串](名) 魚をやくに使用する串。——すき[魚鋤](名) 【植】「やまごばう」に同じ。(商陸)。——つり[魚釣](名) 魚をつること。又、其人。——とり[魚捕](名) 魚を捕ること。又、其人。

†いをぬ(自、な下二) 寢ぬ。熟眠す。ねる。
いをのふえ[魚鰾](名) 魚類の脊柱の下にある薄皮稍圓形の氣嚢。魚は其伸縮によりて身體の比重を加減し游泳するを得。(魚胞)。
いをのめ[魚目](名) うをのめ。(疣眼)。
いん[印](名) ❶文字を木・竹・牙・角・石・玉・金などに彫刻し、これを文書に押捺して信となすもの。❷眞言宗の僧侶が、呪文を唱ふる時手を結ぶこと。「一をむすぶ」。❸古昔、支那にて、官位の表象として佩びしもの、金石などに彫刻を施し、位階に應じて其品を類別せり。❹顯證する所の意義。「取肉心一」。
いん[因](名) 事の成り立つもと。
いん[音](名) 「おん」に同じ。
いん[引](名) 樂曲の一種。
いん[陰](名) ❶陰陽の陰。❷前裏。
いんあ[瘖啞](名) あし。おふし。
いんあく[陰惡](名) あらはれざる惡事。
いんイオン[陰—](名) 【理】陰電氣を帶ぶイオン。アニオン。(Anion)
いんいつ[隱逸](名) 世をのがれかくるゝこと。——くわ[隱逸花](名) (周茂叔の愛蓮の説より出づ)菊の異稱。
いんいん[殷殷](名、副) 雷のひゞき又は音の盛んなるさまにいふ語。「殷殷たる雷」。
いんいん[陰陰](名、副) 空陰りて物の寂しきさま。
いんう[陰雨](名) ❶そらかきくもりて雨降ること。❷ながあめ。(淫雨)。
インヴァーネス[Inverness](名) 形二重廻に似て袖狹く、丈短き衣。羅紗などにて仕立つ。
いんえい[胤裔](名) 子孫。
いんえい[陰影](名) かげ。
いんえい[印影](名) 印を押捺したるもの。
いんえん[因緣](名) ❶【佛】物事の成立のもと定められたる人生の關係。ちなみ。ゆかり。たより。❷いはれ。
いんえん[姻緣](名) たより。つて。
いんか[印可](名) 師が弟子に、其教ふる物事を能く爲し得ることを認めて證明を與ふること。ゆるし。
いんかう[印行](名) 文書圖畫等を印刷して發行すること。
いんかん[印鑑](名) ❶印形のみほん。印の眞僞を判ずる基となすもの。❷印を押したる符券。
いんかん[殷鑑](名) (詩經に「殷鑑不遠在夏后之世」とあるより出づ)戒めとすべき前人の跡。
いんき[陰氣](名) ❶物に覆はれて、はれ〴〵せざること。❷鬱々として心の快活ならざること。
インキ[Ink](名) 西洋諸國にて用ふる墨汁。(洋墨)。
いんきふ[飮泣](名) 聲を立てずして泣くこと。
いんきやう[陰莖](名) 男子の生殖器。
いんぎやう[印形](名) 印(一)に同じ。
いんきよ[隱居](名) ❶官又は世にたづさはらずして、閑居すること。(隱棲)。❷戸主が自己の自由意思により、一定の條件に從ひて、戸主たる地位より退くこと。
いんきよく[陰極](名) 【理】電池又は電解器若しくは眞空管に於て、電池の陰極と繋ぎたる端。陽極の對。——はうしやせん[陰極放射線](名) 【理】眞空の度の高き眞空管内に於て放電するとき、管の陰極より發出する放射線。管の壁光を放つによりてこれを認む。
いんきん[印金](名) 紗綾などに、うるしと糊とを以て紋を押し、其上に金箔をおきたるもの。
いんぎん[慇懃](名) ❶ねんごろ。ていねい。❷よしみ。なじみ。❸男女の關交。「一を通ず」。
いんく[印矩](名) 印を捺すに用ふる小さき曲尺のごときもの。
インク[Ink](名) 「インキ」に同じ。
インクライン[Incline](名) 傾斜面に鐵軌を敷設し、或動力によりて、船舶・荷物等を渡渠の上に載(ノ)せて昇降せしむる裝置。
いんくわ[陰火](名) 夜に燐などの燃ゆる火。妖怪に伴ひて起る火。おにび。
いんぐわ[陰畫](名) 寫眞の種版の畫像。
いんぐわ[因果](名) ❶原因と結果と。❷原因と結果とを連結したる關係。即ち、一が他に對して變化の基因となり、他が一に對して變化の結果となる状態。❸前世の惡報。むくい。❹ふしあはせ。
いんくわしよくぶつ[隱花植物](名) 【植】羊齒類・菌類・藻類・バクテリヤ等の總稱。雌雄兩蕊を有する花なくして、概ね微細なる子實の如きものを生じて蕃殖す。これを胞子といふ。胞子とは全く性質を異にし、胚を有せざるが故に、發育機關の高等なるものは、根莖葉の區別明かなれど、下等なるものは、全體一樣の形狀を有す。
いんぐわてきめん[因果覿面](名) 惡事のむくいは、めのまへにあらはるゝこと。
いんくわてん[引火點](名) 燃料の點火しはじむるときの温度。

(いんぐわりつ)[因果律=Causality](名) 原因結果の關係に於ける自然の規定、此關係は無限の連鎖にして、必然的に規定せられ、一現象の起るには、必ず此原因ありて、又、同一なる原因よりは、必ず同一なる結果を生ずといふ。
(いんくんし)[隱君子](名) ㊀世にあらはれず、山林などに隱れすむ有德の人。㊁【植】菊の異稱。
(いんけつ)[引決](名) 責を引き自殺すること。
(いんげつ)[隱月](名) 琵琶の撥をさむる所。
(いんけん)[引見](名) よびよせて對面すること。
(いんけん)[隱見](名) 見えかくれすること。ほのかに見ゆること。
(いんけん)[隱劍](名) わきざし。
(いんけん)[隱險](名) うはべは柔和にして、心中のねぢけたること。
(いんげん)[隱元](名) 【植】「いんげんささげ」の略言。——ささげ[隱元大角豆](名) (隱元禪師が、始めて明國より持ち來りたるより此名ありといふ) 【植】豆(マメ)科に屬する栽培植物、花序は總狀にして莢より短く、花は白色或は帶紫色なり、種子及嫩莢は食用に供せらる。——な[隱元菜](名) 【植】(い)菜の一種、あぶらなに似て、色うすく光白し。(ろ)「はぼたん」の一名。——まめ[隱元豆](名) 【植】(い)いんげんささげ。(東京の方言)。(ろ)ふぢまめ。(京阪地方の方言)。
(いんげん)[隱現](名) 或はかくれ或はあらはること。——はう[隱現砲](名) 低位置にて裝塡し、發射の際に、砲身を高位置にのぼして障壁の上に現はし、發射終れば再び低位置に降下せしむる裝置の砲架を有する大砲。——はうだい[隱現砲臺](名) いんげんはうを据ゑつけたる砲臺。

いんこ[鸚哥](名)【動】攀木類中鸚鵡科に屬する鳥、頭は圓く短大にして上嘴は鉤曲す、舌は肥厚肉質にしてよく人語を眞似す、羽色は紅・白・綠ありて美麗なり、熱帶地方に產す。
+いんご[忌火](名) いむひ。
(いんご)[隱語](名) かくしことば。なぞ。ふちやう。あひづ。
(いんこう)[咽喉](名) ㊀のど。㊁人體ののどにもたとふべき要害。「—の地」。
(いんこく)[印刻](名) いんばんをほること。
(いんごふ)[因業](名) ㊀【佛】因緣ある惡業。㊁ざんこく。無情。「—なおやぢ」。
(いんざい)[印材](名) 文字を彫刻して印とすべき材、即ち、木・石・玉・竹・牙・角・金屬など。
(いんさつ)[印刷](名) 文字・圖畫等の版面に「インク」をつけて紙面に印寫すること。——きかい[印刷器械](名) 文字・圖畫の版面を紙面に印刷する器械、人力又は汽力を動力とし、「ロール」によりて「インク」を塗する裝置なり。——きよく[印刷局](名) 內閣五局の一、總理大臣の管理に屬し、官報・法令全書等の編輯・印刷・印紙・切手・證券類の製造及抄紙等の事をつかさどる所。


[いんさつきかい]

(いんし)[淫祠](名) まつるべき理由なくて祭りある祠(ホコラ)。

(いんし)[印紙](名) ㊀印を押捺せる文書。㊁手數料・稅金等を支拂ひたるを證明するために、文書などに貼用する切手、政府これを發行して賣り下ぐ。しうにふいんし。㊂「いうびんきつて」の俗稱。
(いんし)[因子](名) 【數】「いんすう」に同じ。
(いんじ)[淫辭](名) みだらなることば。理にあはぬことば。
(いんじ)[陰事](名) かくしおく事。祕事。密事。
+いんし[往](名) 「いにし」の訛。「—年」。
(いんじや)[隱者](名) 世にあらはれずしてかくれ居る人。
(いんしやう)[隱症](名) 內部に熱こもりて、發せざる病。「—のまやうかん」。
(いんしやう)[印象](名) ㊀物の面に印したる形跡。㊁【心】對象の意識せられたる狀態。
(いんしやう)[印章](名) 「いんぎやう」に同じ。
(いんじゆ)[印綬](名) 支那にて官印を佩ぶるくみひも。——をとく[解印綬] 官を辭すること。
(いんじゆん)[因循](名) ㊀孜孜の氣象なく、物事にためらひなづむこと。㊁進步の知識なく、舊弊を固守すること。
(いんじよ)[隱所](名) ㊀かくれたるところ。㊁かはや。(廁)。
(いんしよう)[引證](名) 證據をひくこと。ひきごと。
(いんしよく)[飮食](名) 飮むと食ふと。又、飮みものと食ひものと。——てん[飮食店](名) 飮食をあきなふみせ、料理屋・そば屋の類。
(いんしん)[音信](名) おとづれ。たより。
(いんしん)[殷賑](名) さかんなること。にぎはふこと。
(いんすう)[因數](名) 【數】一數が數個の數の相

乘積なるとき、元數に對する各數の稱。
インスピレーション[Inspiration](名) 神の靈を吹きこまれたるかの如くに感ずること。精神奮興して訛非となること。(神來、感激)。
(いんぜい)[印稅](名) 著者が、其書の賣價の幾分を出版者より受け取ること。
(いんせき)[姻戚](名) えんぐみのみうち。えんつゞき。
(いんせふ)[引接](名) 【佛】彌陀の弘願力により念佛の行者を來迎して、安樂界に往生せしむるといふこと。
(いんせん)[院宣](名) 上皇若しくは法皇の宣旨。
(いんぜん)[隱然](名、副) はつきりと世ざれど、何處となく其勢を現すさまにいふ語。
(いんぞく)[姻族](名) ㊀婚若しくは婚に關する親族。㊁【法】婚姻によりて、配偶者の一方と他の一方の親族との間に生ずる親族關係、例せば、夫が妻の父母・祖父母に對する如き關係これなり。
(いんそつ)[引率](名) ひきゐること。つれだつこと。
(いんだう)[引導](名) ㊀みちびくこと。㊁死人を葬るとき、冥土にゆくべきをなすとて、僧侶が行ふ式。
(いんたく)[隱宅](名) ㊀隱居したる人の住宅。㊁「べつさう」。
インチ[吋=Inch](名) 英國にて用ふる長さの單位、「フート」の十二分の一、我國の八分・三八一。
(いんち)[印池](名) 印肉をいるゝ器。
(いんち)[引致](名) ひきゆくこと。つれゆくこと。
(いんぢ)[印地](名) 「いんぢうち」の略言。——うち[印地打](名) 小石を打ちあふたはむれ。(石戰)。
インヂウム[Indium](名) 純白色の稀有なる金屬、鉛より較々軟く、赤熱すれば氣體となる。

インデン[印傳](名) 「いんでんがは」の略言。——がは[印傳皮](名) なめしがはの一種、羊又は鹿のかはを以て作り、袋物などにす。
(いんでんき)[陰電氣](名) 【理】樹脂を毛皮にて摩擦したるとき、樹脂にあらはるゝ如き類の電氣。陽電氣の對。
(いんどう)[引頭](名) 大法會のとき出づる僧の職名。
(いんとく)[隱慝](名) ㊀かくして祕密にすること。㊁あらはれざる罪惡。
(いんとく)[陰德](名) 恩德を施したれど世に知れざること。——やうはう[陰德陽報](名) 陰德あるものは、顯れたるむくいありて、吉慶來ること。
(いんとん)[隱遁](名) 世を捨てゝ、山林などにかくるゝこと。
(いんなう)[陰囊](名) 睾丸及精系の包被器狀をなす。きんたま。
(いんにく)[印肉](名) 印を押すに用ふる肉、艾にひまし油を和し、練りて色つけたるもの、朱・黑・青など種々の色あり、青肉は凶事に用ふるを習慣とす。
(いんねん)[因緣](名) いんえん。——づく[因緣盡](名) いんねん。
(いんのくそ)[犬糞](名) 犬のくそ。又、きたなきものを譬へいふ語。——でかたきをとる 些細なる事を恨みて、心ぎたなく復讐をなす。
(いんのこ)[犬子](名) いぬのこ。
(いんばん)[印判](名) いんぎやう。——し[印判師](名) いんばんをほる事を職業とする人。(印匠)。——や[印判屋](名) いんばんや。
(いんび)[隱微](名) ㊀かすかにしてあらはれざること。㊁おくぶかくして知りがたきこと。

(いんび)[淫靡](名) みだらなること。風儀正しからざること。
(いんぴ)[蔭庇](名) 恩惠を蒙ること。おかげ。「長官の—の下」。
(いんぴ)[隱祕](名) かくれたること。祕密。
(いんぷ)[陰符](名) ㊀兵法又は謀計の書。㊁まじなひのふだ。おふだ。
インフリュエンザ[Influenza](名) 一種の傳染性の病、惡寒惡熱を生じて身體の違和を感ずるもの。流行性感冒。
インフルエンザ(名) 前條に同じ。
+いんべ[忌部](名) 「いむべ」に同じ。
(いんぺい)[隱蔽](名) おほひかくすこと。
いんべやき[伊部燒](名) 一種の陶器、備前國伊部(インベ)より製出するもの。
(いんぼう)[陰謀](名) ㊀ひそかに計畫する謀略。㊁反逆內亂又は他國を略取せんとする謀略。㊂【法】二人以上、互に犯罪の意思を表示決定して、一致結合したる狀態。
(いんぽん)[印本](名) 印刷せる書冊。
(いんぽん)[淫奔](名) いたづら。だらく。みだら。
(いんま)[今](名) いま。(京阪地方の方言)。
(いんみやう)[因明](名) 印度に行はるゝ五明學の一にして、即ち、一種の論理學、宗・因・喩・合・結の五段の形式を立てゝ物事の眞僞を判定するもの。
(いんめつ)[湮滅](名) あとかたのほろびたること。
(いんめつ)[隱滅](名) ㊀かくれて見えざること。㊁【天】一の天體が他の天體に掩はれて、全く見えざること。
(いんもつ)[音物](名) 好意を通ずるために、贈與する物品。おくりもの。

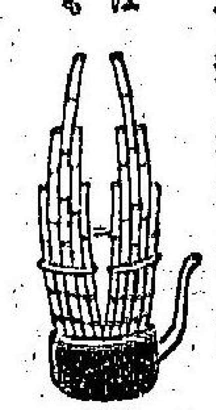
(いん-もん[陰門](名) 婦人の生殖器。
(いん-やう[陰陽](名) ㊀支那の易學の語、天地の元氣判れて相反對の性徳を有する二樣の氣となる、一を陰といひ一を陽といふ、萬物の化育は此兩氣の消長によるものとす、これをものに就きていへば、日は陽、月は陰、火は陽、水は陰、男は陽、女は陰、南は陽、北は陰、春は陽、秋は陰、夏は陽、冬は陰、上は陽、下は陰、晝は陽、夜は陰、天は陽、地は陰等なり。㊁【理】電氣又は磁氣の消極と積極との稱。
廿いん-やう-くわく[淫羊藿](名)【植】「いかりぐさ」の一名。
(いん-やく[隱約](名) ㊀かすかにして知りがたきこと。㊁世にあらはれずして困窮すること。
(いん-よう[引用](名) 他の事例を引きて考證となすこと。ひきごと。——しよ[引用書](名) 引用に供する書籍。
(いん-らく[淫樂](名) みだらがましきたのしみ。
(いん-らん[淫亂](名) みだらなる行爲をほしいまゝにすること。色情にすさむこと。
(いん-りよく[引力](名)【理】物質の相牽引する力、其種類により重力・磁氣力・電氣力・凝集力・附著力・毛細管引力・親和力等の名あり。
(いん-れい[引例](名) ひきごと。
(いん-れう[飮料](名) のみもの。のみしる。——すゐ[飮料水](名) のみみづ。
(いん-れき[陰曆](名) 太陰曆の略言。
(いん-ろう[印籠](名) 藥をいれ腰に佩ぶる細小の匣、もとは印判肉を入れたるより此名あり、三重或は五重にし、蒔繪・堆朱(ツヰシユ)など精巧なる細工を加ふ、德川

[いんろう]

時代の禮服の裝飾品に用ひられたり。(香箱)。——し[印籠師](名) いんろうをつくる職人。(香師)。——づけ[印籠漬](名) 胡瓜又は白瓜などの瓤を去り、紫蘇などを入れて鹽漬けとせるもの。——ぶた[印籠蓋](名) かぶせぶたの一種、いんろうのふたの如くふたとみと平面となれるもの。——ゆば[印籠豆腐皮](名) いんろうの形につくれるゆば。
(いん-わい[淫猥](名) みだらなること。風儀のほしいまゝなること。

う

う 脣を圓く尖らせ、舌の後部を高くして發する母音、五十音圖、安行の第三に位し、宇列の久・須・都・奴・不・武・由・留・宇の頭(ヲヒ)となる。
う[兎](名)【動】うさぎ。
う[卯](名)(うさぎの義) ㊀十二支の第四位。㊁方角の名、東方。㊂時刻の名、今の午前六時。
う[鵜](名)【動】水禽類中蹼足類に屬する鳥、後趾内方に向ひ、他の三趾と共に蹼を以て相連綴せらる、形からすに似て黑く、背と肩とは茶色、嘴は長くして末端曲がる、能く水を潛り巧みに魚を取る。㊁まつどり。(鸕鷀)。
(う[羽](名) ㊀はね。つばさ。㊁五音の一、最も高音なるもの。
(う[竽](名) 一種の樂器、管を參差し鳥翼に象りて


[う]

排列す、形狀笙に似る、古昔は三十六管なりしが、後世に至り二十六管又は十九管となりたりといふ、管ごとに簧(シタ)あり、うのふえ。
(う[宇](名) ㊀のき。やね。家構へ。㊁家屋を數ふるにいふ語。㊂天地四方の稱、無限の空間、「一宙」。
(う[有](名) ㊀宇宙間に實在するもの。あるもの。㊁【佛】愛・取の煩惱によりて業果を後生に續生せしむること。
う え・え・う・うる・うれ・えよ[得](他、あ下二) ㊀わがものとなす。所有とす。をさむ。うく。㊁なしあたふ。よくす。「物を書き—」。㊂成す。遂ぐ。㊃捕獲す。とらふ。㊄さとる。志る。「我已にこれを—」。
う え・え・う・うる・うれ・えよ[得](自、あ下二) ㊀あふ。あたる。かなふ。「兩者相—」。㊁たる。やすんず。
廿う[諾](感) 承諾の意の發聲、「否も—も」。
ヴァイオリン[Violin](名) 一種の樂器、西洋傳來のものにして、四絃を張る小弓の絃を以て、これを鼓して鳴らす。
う-あいさ[鵜秋沙](名)【動】あきさの一種、嘴甚だ長し。
(う-い[雨衣](名) 雨中用のころも。あまぎ。
(う-い[雨意](名) あめもやう。
(う-い[羽衣](名) ㊀天人の着るといふ衣。㊁鳥の羽毛のつきたる皮にてつくりたる衣。
(う-いう[烏有](名)(烏(イヅクン)んか有らんの義) ㊀其物事あらざること。㊁火災にかゝりて皆無となること。「燼に—となる」。
う・う ゑ・ゑ・う・うる・うれ・ゑよ[飢,饑](自、わ下二) ㊀食物を得ずして、胃空虛となる。はらへる。㊁凶作にして食料乏しくあり。
う・う ゑ・ゑ・う・うる・うれ・ゑよ[植](他、わ下二) ㊀物を地上にうめ立つ。㊁種子をまく。㊂はめこむ。いれこむ。

(う-えん[有緣](名)【佛】佛門に緣あること。
ヴォルト[Volt](名)【理】電壓の單位の稱にして、一「オーム」の抵抗の導線に一「アンペーア」の電流を通過せしむる電壓をいふ、攝氏十五度に於ける「クラーク」電池の兩極の電位の差の〇・六九〇四に當る。
(う-か-うか[浮浮](名、副) ㊀心落ち着かざるさまにいふ語。㊁思慮なきさまにいふ語。
(う-かく[羽客](名) せんにん。神仙。
うかがひ[伺](名) ㊀うかゞふこと。㊁票を具して、政府又は上官廳の指令を請ふこと。(申票)。——しよ[伺書](名) 官府などの指令を請ふために提出する文書。(呈票)。——ずみ[伺濟](名) 官府などより指令をうけをはりたること。(票准)。
うかが・ふ[窺](他、は四) ㊀のぞき見る。ひそかに見る。(覗)。㊁ひそかになりの至るをまつ。(候)。㊂すこしく知る。すこしく試みる。㊃ひそかに得んとのぞむ。ねらふ。
うかが・ふ[伺](他、は四) ㊀たづぬ。たゞす。㊁おとづる。とぶらふ。
(うかさ・る[浮](自、ら下二) 物に氣を取らる。
(うか・す[浮](他、さ四) うかしむ。
(うか・せる[浮](他) 「うかす」の訛。
うが・つ[穿](他、た四) ㊀おなをあく。ほる。㊁つらぬく。ぬきとほす。つきぬく。㊂道理をきはむ。秘密をせんさくす。㊃おしわけて行く。つきぬき通る。「林をうがちて進む」。
(うか-と[浮](副) 心つかずに。うつかりと。
うが-の-かみ[宇賀神](名) 「うがのみたま」に同じ。
うが-の-みたま[宇伽御魂](名) 稻婆など人の食物となるものを司どる神、即ち、稻荷に祀りこめたる神の名。(倉稻魂)。

うかは[鵜河](名) 鵜を使ひて、鮎など捕ること。
う-かひ[鵜飼](名) ㊀鵜を飼ひならし、これをつかひて魚を捕らしむること。㊁うかひを業とする漁夫。——び[鵜飼火](名) 鵜をつかふときにたく火。——ぶね[鵜飼船](名) 鵜をつかふとき用ふる船。
うがひ[嗽](名) 水などを含みて口をそゝぐこと。——ぐすり[嗽藥](名) うがひに用ふる水藥。(含嗽劑)。——ぢやわん[嗽茶碗](名) うがひに用ふる茶碗。
廿うがふ[嗽](自、は四) うがひをなす。くちそゝぐ。
うか・ぶ[浮](自、は四) ㊀水の上にあり。沈まずしてあり。㊁着處なくて存す。動きて定まらず。㊂志を得て世に出づ。㊃思ひ出づ。「心に—」。㊄死者の靈が、妄執を脫して成佛す。
うか・ぶ[浮](他、は下二) ㊀水の上などにうかばしむ。㊁想ひ出す。㊂出世せしむ。㊃そらよみす。あんしようす。
(う-がふ[烏合](名) 紀律なきよりあつまり。
(うかぶ-せ[浮瀨](名) 出世する志ほ。
う-がふ-の-しゆう[烏合衆](名) 紀律なき國。
(うかべる[浮](他) 「うかぶ」の訛。
廿うか-み[窺見](名) うかゞひ見ること。間諜。
うか・む[浮](自、ま四) 「うかぶ」に同じ。
うか・む[浮](他、ま下二) 「うかぶ」に同じ。
う-がも[鵜鴨](名)【動】鴨の一種、體色稍や赤色を帶び、嘴細く尖りて、足赤し。
う-から(名) 血脈のつゞきたる親族。えんぞく。みよりやから。(親族)。
(うかり[浮](名、副) 心つかずぼんやりしてあるさまにいふ語。

うか・る[浮](自、ら下二) ㊀心そらになりたつ。㊁ふかく興に入りて、魂を奪はる。㊂うつかりしてあり。㊃薄情なり、心定まらず。
うかれ-がらす[浮鴉](名) ㊀月夜にうかれて、鳴くからす。㊁夜うかれあるく人の稱。
うかれ-づま[浮妻](名) うかれめ。
うかれ-びと[浮人](名) ㊀らうにん。㊁だうらくもの。
うかれ-ぶし[浮節](名) 「なにはぶし」に同じ。
うかれ-め[浮女](名) 歌舞吹彈して人をたのしましむるを業とする女。人の枕席にはんべるを業とする女。うかれづま。(遊女)。
(うかれる[浮](自) 「うかる」の訛。
う-かんむり[宇冠](名) 漢字の冠りの名、即ち、定・安などの如き字の上にある宀の形の稱。
うき[浮子,泛子](名) (い)魚の餌(エ)につくを知るために、釣絲につけ水に浮かす木片。(ろ)網を水中にうきて其所在を知るために、網綱につくる木片。
廿うき[浮](名) 「さかづき」の古名。
廿うき[泥](名) 「どろ」の古名。
(う-き[雨季](名) 一年の間特に雨多き時期の稱、我國梅雨の季節の如し。
うき[憂](名) うれひ。かなしみ。
(う-き[右揆](名) 右大臣の異稱。
(う-ぎ[雨儀](名) 古昔、宮中の儀式を雨天のときは、省略して擧行ありしこと。
(う-ぎ[羽儀](名) (易經に其羽可用爲儀とあるに出づ)儀表となること、「天朝に—す」。
うき-あが・る[浮上](自、ら四) ㊀底より上にうかび出づ。㊁くるしき所をたすかる。
うき-あげ-ぼり[浮上彫](名) 模樣などを、高くほり上げたる彫刻。

うき-いし［浮石］（名）火山の噴出したる熔岩の一種、粗鬆にして夥多の小孔あり、水に浮ぶ、輕石。㊀うきいしに同じ。

うき-いはウキイハ［浮石］（名）水上に浮べるが如く見ゆる石。

［うき-うき］［浮浮］（名,副）心うかれてあるさまにいふ語。

うき-おり［浮織］（名）うきおりにしたる織物。——**もの**［浮織物］（名）こまかき模様を地の上にうかし織るもの。又、其織物。

うき-かはたけウキカハタケ［浮河竹］（名）（水にうかぶ河竹の意）浮沈定めなき身に譬へいふ語、特に、遊女の身の上にいふ語。

うき-ぎ［浮木］（名）㊀水の上に浮べる木片。㊁いかだ。ふね。舟筏。「—に乘りて、われかへるらん」。㊂盲龜の浮木。盲龜がうきゝにあへるとの譬へあるより、逢ひがたき幸福にいふ語。

うき-ぎ［浮木槎］（名）【動】圓頸類中まんぼう科に屬する魚、體は卵圓形をなし、皮膚は粗糙にして革の如く、背鰭は短くして高く、尾部に臀鰭と相合す、胸鰭なし、遠洋に産す、腹の白色なる部分を取り、鹽漬け又は粕漬けとなし食用とす。うきゝまんぼう、まんぼうざめ。（浮海魚）。——**まんぼう**（名）【動】うききに同じ。

うき-くさ［浮草］（名）【植】浮萍科に屬する草、池沼などの水面に浮生する扁平の小植物にして、各地に産す、扁平體の下面は通常數條の根を垂す。（浮萍）。

ちうき-ぐつ［浮沓］（名）「うきぶくろ」に同じ。

うき-ぐも［浮雲］（名）定めなく風にまかせひて、空中にうかぶ雲。

うき-こ［浮粉］（名）米を細粉とせるもの、菓子などを製するに用ひ、又、紅を凝結せしむるにも用ふ。

うき-しま［浮島］（名）島の水上に浮びたるが如く見ゆるもの。又、水上に浮べる島。

うき-ぬ［浮沼］（名）㊀うくとゐづむと。㊁栗ゆると衰ふると。

うき-す［浮巣］（名）㊀にほ鳥の巣、此鳥は、多く蘆の枯れ葉などにて巣を作るが故に、水增せど浮びて水に浸されずといふ。㊁住處の定めなきに譬へいふ語。

うき-す［浮洲］（名）沼などに、泥炭材木・泥などあつまり、其上にいつとなく草木生ひ出でゝ、浮びたる洲の如く見ゆるもの。

［うき-せ］（名）【動】めだか。（尾張の方言）。

うき-せ［憂瀬］（名）うき場合。

うき-た［浮田］（名）【動】めだか。（大阪の方言）。

うき-たつ［浮立］（自,た四）うかれてこゝろそぞろとなる。

うき-どうだい［浮燈臺］（名）燈臺の一種、船の檣上に燈明を設け、洲の附近に碇置して、航路を示すもの。

うき-どり［浮鳥］（名）水にうかびて居る鳥。

うき-な［浮菜］（名）【植】「かぶらな」の一名。

うき-な［浮名］（名）よからぬ名。又、いろごとなどのひやうばん。

うき-ね［浮寢］（名）㊀船中にねぬると。㊁寢所の每夜かはると。㊂寢ぬれど心安からぬと。

うき-はうだいウキハウダイ［浮砲臺］（名）港灣防禦又は砲擊攻擊のために、特別なる艙構をなしたる戰艦。堅牢なる艦舷を設けて、特に許多の砲を備置したるもの、今時は其使用を見ざれど、時に殘敗の戰艦を以て、これに充つるとあり。

うき-はし［浮橋］（名）數多の舟を浮べて、其上に板を亘したる橋。ふなばし。（舟梁）。

うき-びやうしウキビヤウシ［浮拍子］（名）浮きたるひやうし。うかれびやうし。

うき-ぶくろ［浮袋］（名）㊀魚の鰾（ふえ）。㊁水に游泳するとき、溺れざるために身體に着くるもの、革などにてつくり、中に空氣を滿たす。

うき-ふし［憂節］（名）かなしきこと。つらきこと。

うき-ふね［浮舟］（名）水上にうかべるふね。——**の**（枕）「こがる」に係る詞。

うき-ぼり［浮彫］（名）模樣をたかく彫りたる彫刻。うきあげぼり。

うき-まくら［浮枕］（名）㊀うきね。ひとりね。㊁船中にねると。

うき-み［憂身］（名）うきふし多き身。——**をやつす**　或物事に熱心して、うきふし多きにいふ。

うき-め［憂目］（名）つらきこと。「—の對」。

うき-もん［浮紋］（名）浮きおりにしたる紋。固紋の對。

［うき-やう］ウキヤウ［右京］（名）古昔、朱雀大路を界として、京都を東と西とに分ちたる其西方の稱。左京の對。西の京。長安。——**しき**［右京職］（名）古昔、右京の事をつかさどりし職名。

うき-よ［憂世］（名）うきふし多き世。つらき世。「—の中」。

——**ぐるひ**ウキヨグルヒ［浮世狂］（名）浮世の事に心を奪はるゝと、酒色にふけるなど。名利に熱するなど。

——**ざうし**ウキヨザウシ［浮世草紙］（名）元祿時代に行はれし一種の小說、當時の世態を書き綴りしもの「八文字屋の—」。——**のあみ**［浮世網］（名）うきよの迷ひの脫れがたきと。——**のや**み［浮世闇］（名）人間の迷ひ。——**ばなし**［浮世話］（名）せけんばなし。ぞくだん。——**ぶ**

し［浮世節］（名）世俗のはやりうた。（下俚）。——**ぼん**［浮世本］（名）「うきよざうし」に同じ。——**ゑ**［浮世繪］（名）うき世の風俗を畫きたる繪、土佐繪より分れ、岩佐又兵衞の創めし畫風。

［う-きよく］［紆曲］（名）㊀くねりまがると。㊁とほまはり。とほまはし。

うく［浮］（自,か四）㊀水上にありて沈まず、うかぶ。うかむ。（泛）。㊁水中より水上へ出づ。うかぶ。うかむ。㊂香氣なくして存す、動きて定まらず。㊃陽氣にてたましひ身にそはず。心酒色に奪はれて仕事につかず。㊄酸味のため又は不快なる音のために、齒のゆるみ動くが如き感起る。

うく［浮］（他,か下二）うかしむ。うかす。

うく［受,承］（他,か下二）㊀迎へ取る。㊁迎へ防ぐ。「矢兵を—」。㊂蒙る。かうむる。「風を—」。㊃もらふ。「野猪怜—用三人」。㊄いる。をさむ。㊅うけたまはる。聽す。「命を—」。㊆うけて行く。㊇つぐ。うけつぐ。㊈うぞべなふ。きいる。㊉むかひあたる。

うく［請］（他,か下二）其ものに對するあたひをはらひて、取りもどす。「質物を—」。

うぐ［穿］（自,か下二）あなあく。

うぐひウグヒ［石斑魚］（名）【動】喉鰾類中うぐひ科に屬する魚、體は狹長にして側扁す、鱗は圓滑にして細し、頭部は黑くして微綠を帶び脣は紅なり、背部は淡黑色にして淡黑色の斑紋を帶び、腹部は紅色を帶びて底面は白色なり、體長大なるものは一尺許、我國到る處の河川湖沼等に產す。あかはら。

うぐひすウグヒス［鶯］（名）㊀【動】燕雀類中うぐひす科に屬する鳥、形はめじろに似て肥え、體色は背部綠褐色にして腹部灰白色なり、嘴は細くして尖る、氣管の分岐部に鳴管を有し、聲きはめてうるはし、初春より鳴く、この鳥、人家に飼ひ聲を珍重す、糞は洗粉に代用す。あうぐひ、はるとり、はつねどり、にほひどり、きゃうよみどり。㊁「せっかひ」（飯匙）の異稱。㊂香をたくに、香の包紙を刺し又は火加減を見るに用ふる具、長さ四寸餘にして形鶯の如し、銀又は赤銅にてつくる。

［——がひ］ウグヒスガヒ［鶯貝］（名）【動】あこやがひの一種、長さ三寸許、殼は鳥の翅の形をなす。——**だけ**［鶯茸］（名）【植】春末に生ずる紅茸の稱。（竹茹茸）。——**ちゃ**［鶯茶］（名）染色の名、綠に茶と黑とのまじりたる色、うぐひすの羽色に似たれば名づく。——**な**［鶯菜］（名）【植】（い）あぶらなの變種、一年生或は二年生の栽培草本にして、種子は一列に並べり、葉は食用とすべく、種子よりは油を採るべし。（ろ）小さきこまつな。「鶯花菜」。——**のみ**［鶯香］（名）酒の飲み方、二人が十杯づゝ引きうけ、早く呑むと遲く呑むとにより描きしとぞ。いとまゆ、やなぎまゆ。——**まゆ**［鶯眉］（名）古昔、奧女中の描きし眉、眉を上下より細く剃りつけ、中にこれぞみ色を施しゝもの、十六七歲の頃より描きしとぞ。いとまゆ、やなぎまゆ。——**もち**［鶯餠］（名）餠菓子の一種、餠に餡を包み兩頭を尖らせて、靑き粉をまぶしたるもの。

うぐら［鵜俣］（名）【動】「うぐらもち」に同じ。（三河、周防の方言）。（豐後の方言）。——**もち**（名）【動】「むぐらもち」に同じ。

［う-くわ］ウクワ［羽化］（名）㊀【動】幼蟲の羽を生じて成蟲となると。㊁人間の體に羽を生じて、仙人となると。——**とうせん**［羽化登仙］（名）人間に羽生じ、天に登りて仙人となると。「りみち」。

［う-くわい］［迂回］（名）とほみちをまはると。まはりどほきと。

［う-くわつ］［迂濶］（名）まはりどほきと。心の行きとゞかぬと。事情にうときと。——**に**［迂濶］（副）ふかく考へずに。うっかりと。

うけ［食］（名）くひもの。よくこゝろ。け。

うけ［泛子］（名）「うき」に同じ。

うけ［笯箭］（名）（空虛の義）魚の飼ひ桶の稱。うけ「ふね」。

うけ［受］（名）㊀うくると。㊁うくる器。㊂うつばり。さゝへ。㊃ふみると。こたへ。㊄おもはく。このもち。きぬひ、世間の—わるし。

うけ［有卦］（名）陰陽家にて、人の生年の干支に配して定めたる幸運の年まはりにして、此年まはりにあたりし人は、七年間吉事つゞくといふ。

うけ-あひウケアヒ［請合］（名）うけあふと。ひきうけ。はしよう。

うけ-あふウケアフ［請合］［受合］（他,は四）㊀身に引き受く。㊁たがひなきとを保證す。

うけ-あゆみ［浮步］（名）足音極めて靜かにあるくと。柔かにあるくと。

うけう（名）【植】「うけうさ」に同じ。

うけうさ（名）【植】紅色藻門に屬する海草、ところてんぐさに似て、細長く紫色なり、からに筑前に產す。海苔の如くに製し食用に供す。おもに筑前に產す。

うけ-うり［請賣］（名）問屋より卸し賣りの物を取り次ぎて賣ると。㊁自家の考定によらず、他人の意見又は學說等を其まゝ述ぶると。

うけ-おひウケオヒ［請負］（名）㊀當事者の一方が或仕事を完成せんとを約し、相手方が其結果に對して報酬を與へんとを約すると。㊁國債募集の一方、銀行をして引き受け組合を組織して、國債を引き受けしめ、便宜債券の發賣を許すと。——**にん**［請負人］——**し**［請負師］（名）うけおひ仕事を引き受くる人。う

うけおい【請負人】(名) うけおうにん。
うけおいしごと【請負仕事】(名) うけおうしごと。
うけおいにん【請負人】(名) うけおうにん。
うけ-おさ・ふ【請取】(他ハ四) ❶うけとる。❷引き取る。
うけおり【浮織】(名) 「うきおり」に同じ。
うけおりもの【浮織物】(名) 「うきおりもの」に同じ。
うけ-かた【受方】(名) ❶うけとるほう。❷うけとるほうの人。❸うけとるほうの方角。「ひがし。」
うけ-おび【請】(名) ことばどおりにすること。
うけ-おふ【請】(他ハ四) うけおう。
(うけ-ぎ【有職】(名) 身に官位を有する職業、又其官にある人をいふ。「公の字を加へて公卿よりいふ。
†うけ-ごう【穿者】(名) 穴などのうがたれたる者。
うけ-ごたく【受答】(名) 言ひかけられて返辞すること。問ひにおよぶこと。ものいひ。おうたい。
うけ-こみ【受込】(名) ひきうけること。
うけ-こ・む【請込】(他マ四) ひきうける。
うけ-ざま【請状】(名) 引き受くる旨を記したる文書。ばあひによりては請書。
うけ-しょ【請書】(名) うけあひ。
†うけ-しょう【請状】(名) 「うけざま」に同じ。
うけ-だち【受太刀】(名) ❶切りつけられたるを受け止むる太刀。❷議論などして力おとらずうけとむること。
うけ-たま・ふ【承】(他ハ四) ❶あはれを受け留く。❷愛子をさづく。「うけたまはりぬ」に同じ。
うけ-つ・く【受附】(他カ下二) ❶ものを受けとること。❷うけとりぶみ。❸うけつけ。
うけ-つ・ぐ【受継】(他カ四) 受け取りて引き継ぐ。
うけつけ【受附】(名) ❶取りつぎ。❷官府が他官府又は私人よりの訴訟・請願等を受くること。官府・官邸などにて書状・来客等のとりつぎをなす所。——おかり【受附掛】(名) うけつけの処在。
うけつけがり【受附】(他ラ四) 「うけつけ」の訛。
うけ-とり【請取】(名) ❶うけとること。❷うけとりたる旨を記あたる文書。うけとりぶみ。(領収書)——しょ【請取書】(名) 「うけとり」の二に同じ。——にん【請取人】(名) うけとる者。うけとりて。
うけ-ざ・る【請取】(他ラ四) 手にとりこむ。とりうける。
うけ-なは【浮縄】(名) 海手(沖)につけて水になげいれおく釣り縄をうけたる縄。
うけ-にん【請人】(名) 其人又は其事をひきうけて保証する人。「ようにん」(中略)。
うけ-はり【受張】(名) かぶとの一部分。かぶとの上を包む布のあたるを忙しくもの。
うけばり【浮張】(名) 屋根屋などにて下ぢかに葺くやうに張ること。
†うけばり【誇】(名) うぬぼれ。
†うけ-ばる【誇】(自ラ四) 「うぬぼる」に同じ。
†うけ-ばる・る【誇】(自ラ四) ❶ひきうく。❷「我」一日に引き受けて非を遂げず。
†うけ-ばん【座】(名) 「おり」に同じ。
うけ-ぶみ【知行】(名) 領地に施行して、政の吉凶を判物によりて知らしむるをいふ。
†うけ-ぶみ【受引】(他カ四) 「うけとりぶみ」に同じ。
†うけ-ふ・る【請】(他ハ四) ❶うけとる。❷師匠の力を借りて我が心人をなやますこと。❸訴訟の判決を受くること。
うけ-ぶみ【請文】(名) 引き受けたる旨を記したる書状。
うけ-まき【有職振舞】(名) 身の礼儀に入りたるを認して、人を敬ひ尊ぶこと。
うけ-もり【浮刻】(名) 「うかしもり」に同じ。
うけ-もの【受身】(名) ❶他よりの働きを受くること。❷【文法】はたらきかけ即ち動詞の動作を受くること。所相ともいふ。つねに助動詞により作れども受身には、これを表はす。
うけ-もち【受持】(名) うけもつこと。又引き受けた事務又は責務。
うけもち-あ・つ【受持】(他タ四) 自分に引き受けてなす。たんたうす。ひきうく。
うけもの-どし【請度】(名) 我と人とあたたる物件を取りもどすこと。
うけもの-どり【請度】(他サ四) うけもどす。
†うけやう【尤】(名) 「もっとも」の古名。
†うけやう【仁】(他) 「うんけん」の訛。
†うけやう【雲】(名) 「うんけん」の訛。
†うけやう【雲】(名) 「うんけん」の訛。
†うけやう【雲】(名

うし-あはせ(ウシアハセ)[牛合](名) 牛と牛とをたゝかはせて勝負せしむること。

うじ-うじ[名,副] ㊀ためらひてぐづぐづするさまにいふ語。㊁うごめくさまにいふ語。うぞうぞ。

うし-うま[牛馬](名) ㊀牛と馬と。㊁[動]大隅國種子島に產する一種の獸。身は牛に似て頸は馬に似たるもの。

うし-おふ-もの(ウシオフ—)[牛追物](名) いぬおふものの類。牛を追ひて射るあそび。「人」

うし-かた[牛方](名) 牛をつかふ人。牛車を扱ふ

うし-かひ(—カヒ)[牛飼](名) 牛を飼ふ人。牛をつかふ人。特に、御所車の牛をつかふ人。うしかた。うしつかひ。(牧夫,牧童)。

うし-ぐさ[蛆草](名)[植]豆(マメ)科に屬する草。葉は羽狀複葉にして數個の小葉より成り、花は帶黃色、莢は木質、苞は脫落し花序は頂上に生ず。葉は味噌の蟲を殺すに用ふ。みぞくさ。(山馬蝗,木藜蘆)。

うし-ぐるま[牛車](名) ㊀牛を付けて挽かす大なる荷車。㊁牛を付けて挽かすやかた車。

うし-ごろし[牛殺](名) ㊀牛をころす職業のもの。とさつにん。(屠牛人)。㊁[植]薔薇科に屬する木。高さ一丈餘、葉はうめもどきに似て長し。夏の頃枝梢に五瓣の白花を開き、赤き實を結ぶ。——ば[屠牛場](名) 牛をころす所。とさつば。

うし-ざき[牛裂](名) 古昔の刑罰の一、極めて殘酷なるものにして、手足を牛四疋に緊束し、牛に柴を負はせ火を點じて驅馳せしめ、其勢によりて罪人の身體を四つさきにするをいふ。

ウシチ[烏瑟](名)[佛](梵語、烏瑟膩沙の略言) 佛の三十二相の一、頭上の肉高く起りて髻(モトドリ)の如ききさまをなすもの。(肉髻)。

うし-つかひ(—ツカヒ)[牛使](名) 「うしかひ」に同じ。

うし-つき[牛附](名) 「うしかひ」に同じ。

うし-とら[丑寅](名) 方角の名。東と北との中間。即ち、鬼門。(艮)。

うじ-な(—ナ)[貉](名)[動]「むじな」の古名。

うしな-ふ(ウシナフ)[失](他,は四) ㊀ものを無くなす。㊁すてゝおく。「機を——ふべからず」。㊂おとす。㊃見えぬやうにす。「圖面として——所あるがごとし」。㊄死なす。「愛子を——」。㊅冥途の人となす。

うし-ぬすびと[牛盜](名) ㊀牛をぬすみたるもの。㊁古昔、人を罵りていひし語。㊂[動]「いしもち」の一名。

うしの-とぢの(名) 牛の角の中にあるかたき骨。藥料に供せらる。(牛角鰓)。「しかづら」に同じ。

うしの-さうめん(—サウ—)[牛索麪](名)[植]「ねなしかづら」の一名。

うしの-した[牛舌](名) ㊀[動]「したびらめ」の一名。㊁[植]「いぬびは」の一名(東國の方言)。

うしの-たま[牛玉](名) 牛の額に生ずる毛のかたまりたるもの、形丸くして大きさ一寸餘、其中にかたきもの有り、「牛玉」の字を充てたるを「ごわう」と讀み誤り、寺院などの寶物とせり。(牛寶)。

うしの-ち[牛乳](名) 牛の乳房より搾り取る乳汁。ぎうにう。うしのちゝ。「ミルク」。

うしの-つのつき[牛角突](名) 「うしあはせ」に同じ。

うしの-つのもじ[牛角文字](名) 延政門院の御歌に「二つもじ、うしのつのもじ、直ぐな文字、ゆがみ文字とぞ君は覺ゆる」とあるより出づ。「い」の字の異稱。其形牛の角に似たる故にいふ。

うしの-はなぎ[牛鼻木](名) ㊀牛の鼻につらぬきとほす木片。(牛桊)。㊁[植]「かまつか」の一名。

うしの-ひたひ(—ヒタヒ)[牛額](名)[植]とうしんぐさの一種。莖は細長くして四稜を有し、葉は殆んど無く、雄蕊は通常三個あり、莖を席につくり、其心を燈心とす。(石龍芻)。

‡うし-はく(ウシハク)[領](他,か四) 主宰となりて、土地を占領す。

うし-はこべ[牛繁蔞](名)[植]はこべの一種。莖は一尺許、上部にあるものは殆んど葉柄なし。花柱は通常五個あり、はこべ屬の何れよりも大なり。又、小鳥の飼料とし或はまた物として食用とす。

うし-ばへ(—バヘ)[牛蠅](名)[動]雙翅類中蠅科に屬する蟲。全體黑毛を密生し、處々黃白色なり。牛の皮下に寄生し、其皮膚に瘡瘍を生ぜしむ。

うし-べや[牛部屋](名) 牛を飼ひおくところ。うしごや。(牛欄)。

うし-ほ(ウシホ)[潮](名) ㊀海水の定時の漲落の稱。日月殊に月と地球に近きゆゑにその引力の作用が、地球に及ぼすによりて、これに面する方及背する方の海水は漲昇す。これを高潮といふ。又、それと直角なる側面の海水は低落す。これを低潮といふ。昇漲するものを、さしほ・あげしほ・みちしほと稱し、低落するものを、ひきしほ・さげしほ・おちしほと稱す。㊁海水の稱。——に[潮煮](名) 一種の料理。鯛などの肉又は骨を水煮にし、鹽にて味をつけたるもの。「鯛の——」。

うし-ほほづき(—ホホヅキ)[牛酸漿](名)[植]「こなすび」に同じ。

うし-まつり[牛祭](名) 山城國太秦(ウヅマサ)の廣隆寺の祭事。陰曆九月十二日の夜に、摩陀羅(マダラ)神となづけ、奇異の服裝に扮したる僧侶が、牛にのりて社をめぐり祭文をよむ。

うし-みつ[丑三](名) ㊀古昔の時刻の名、丑の時を五つに分ち、其第三にあたるとき。㊁轉じて、よなか。深夜。

うし-むし[牛蟲](名)[動]「あとびさり」の一名。

うじ-むし[蛆蟲](名) ㊀[動]「うじ」に同じ。㊁人をさげしみ罵りていふ語。

うし-や[牛屋](名) ㊀牛を飼ふ小屋。㊁牛肉を賣る家。

うし-やう(—シヤウ)[右相](名) 右大臣の異稱。

うし-やう(—シヤウ)[羽觴](名) さかづき。——をとばす[飛羽觴] さかもりをなす。さけをくむ。

うし-やう(—ジヤウ)[有情](名) 生活して情を有するもの。即ち、一切の動物の稱。

うしやう-こく(—シヤウ—)[右相國](名) 右相に同じ。

うじや-うじや(名,副) ㊀「うじうじ」に同じ。㊁わけもなきことをくどくどしくのぶるさまにいふ語。

うしよう-しやう(—ジヨウシヤウ)[右丞相](名) 右相に同じ。

うじやく[烏鵲](名)[動]「かささぎ」に同じ。「——南に飛ぶ」。

うしゆ-きつ[雲州橘](名)[植](い)うんしうみかんに同じ。(溫州橘)。(ろ)たちばなの變種、實はみかんより大きく、味ひきはめて酸くにがし。

うしろ[後](名) ㊀せなか。せ。背後。㊁顏の反對の方。まうしろ。あと。㊂見えぬ處。

うしろ-あし[後脚](名) ㊀あとあし。㊁足を後にして逃ぐること。にげあしすること。

うしろ-あたま[後頭](名) 頭の後部。

うしろ-あはせ(—アハセ)[後合](名) ㊀互にうしろとうしろとをむけあふこと。㊁かれとこれと相反すること。「がた」。

うしろ-かげ[後影](名) 行き去る人のうしろすがた。

うしろ-がみ[後髮](名) 後頭部の髮。——ひかるゝ 心後に殘りて、思ひ切りがたきにいふ。

うしろ-ぐらし[後暗](形,二) ㊀見えぬ所又は後の方心もとなし。うしろめたし。㊁人を欺きたる所爲などありて、心安からず。㊂ふたごころあらし。疑はし。

うしろ-ざし[後挿](名) うしろにさすかんざし。

うしろ-すがた[後姿](名) 背面の姿。

うしろ-だて[後楯](名) ㊀うしろ(へだて)に取るもの。後方の防禦。㊁うしろみ。こうけん。(後援)。

うしろ-で[後手](名) ㊀うしろの方。㊁兩手を背中にまはすこと。「——にいましむ」。

うしろ-べたし(—ベタシ)[後目痛](形,二) 「うしろめたし」に同じ。

うしろ-まき[後卷](名) 戰國時代に、城を圍み攻むる軍を、更に其後より圍みしこと。

うしろ-み[後見](名) ㊀うしろに居て人の身の上をたすくること。うしろだて。㊁未成年者又は不能力なる戶主のこうけん。

‡うしろ-みる(ウシロミル)[後見](自,ま上一) うしろみをなす。こうけんをなす。「みる」。

‡うしろ-むき(—ムキ)[後向](名) うしろを見せてゐること。まへむきの對。

‡うしろ-めたし(—メタシ)[後目痛](形,一) 「うしろぐらし」に同じ。

‡うしろ-めたなし(—メタナシ)[後目痛](形,一) うしろめたし。

‡うしろ-やすし(—ヤスシ)[後安](形,一) 後の邪心にかゝらず。安心なり。うしろめたしの對。

うしろ-ゆび[後指](名) あざけり若しくはうたがひて、かげにて其人の非をさしいふこと。——をさす かげにてそしる。

うす[臼](名) (い)穀物などをつき又は碎き又はねらす道具。なかくぼくして其處に穀物などを入れ杵にてつく。からうす。ふみうす。つきうす。(舂)。(ろ)上下二個の圓形の石を合せ、其相接する面に齒を刻み、其處に穀粒をいれ上なる石を廻轉して、これを粉末にするもの。ひきうす。(磨)。

うす(ウス)[失](自,さ下二) ㊀なくなる。㊁死亡す。まかる。㊂消滅す。きゆ。㊃ほろぶ。あつ。「威うせて位危し」。

うす-[薄](接頭) 成語に冠してうすき意を表す。「——むらさき」(淡)。

‡うず[髻華](名) 古昔、冠又は髮の上にかざしたるかざり。草木の枝又は造花などを用ひたり。(釵)。

うず[雲珠](名) ㊀唐鞍をかくるとき、鞍のうしろなる鞦がいの辻の上につくるかざり。形寶珠の如し。㊁うずくらの略言。

うす-あかり[薄明](名) ㊀ほのかにさすひかり。びめい。㊁日出前若しくは日沒後あかるきこと。地平線下の太陽の光線が、空氣のために屈折して起る現象。

うす-あばた[薄痘痕](名) 目に立たぬほどのあばた。うすいも。(淡痘痕)。

うす-いし[臼石](名) ㊀うすに似たる形の石。㊁自然にうすに似たる形の石。うすになる一種の玉。

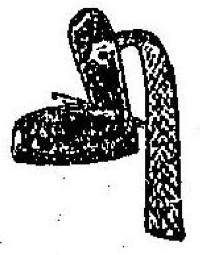
うす-いた[薄板](名) ㊀織物の名、うすき地合ひのもの。あついたの對。㊁花瓶をおく方形の板。㊂經木の巾ひろきもの。

うす-いちご[臼苺](名)[植]「うすのき」に同じ。

うすいも[薄疱瘡](名) うすあばた。
うすいろ[薄色](名) ㊀織色の名、經は紫にて緯は白にて織りたるもの。㊁かさねの色目、表は薄花田色に赤色を帶び、裏は薄むらさきなるもの。㊂薄むらさきの稱。
うすうす[薄薄](副) いくぶんか。ほのかに。
うすえふ[薄葉](名) 「うすやう」に同じ。
うすかは[薄皮](名) ㊀膜(マク)に同じ。㊁婦人などの皮膚の色白くきめこまかなるにいふ語。
うすがみ[薄紙](名) うすき紙。あつがみの對。
うすぎ[薄着](名) 着物をうすくきること。
うすぎぬ(名) ㊀寒冷紗の如きうすききぬ。(薄絹)。㊁薄ききぬの衣服。「牛若は—ひきかつぎて」。(薄衣)。
うすぐも[淡雲](名) ㊀うすくたなびきたる雲。㊁【動】どぶかひの一種、介殼は長楕圓形にして長さ二寸許、白色にして黑き斑點あり。
うずくら[雲珠鞍](名) 雲珠を付けたる鞍。「からくら」の一名。「三歲駒に、—おかせ」。
うすぐらし[薄暗](形、二) 光りうすくして物色ほのかなり。ほのぐらし。微明なり。
うすげしやう[薄化粧](名) あっさりとほどこす化粧。あつげしやうの對。
うすこうばい[薄紅梅](名) ㊀【植】紅梅の一種、花の色うすきもの。㊁染色の名、うすこうばいの花の如き色。
うすさ[薄](名) うすき度合ひ。
うずざくら[雲珠櫻](名) 【植】櫻の一種、蕊は長く、花は一重なり。——**もえぎ**[雲珠櫻萌黃](名) かさねの色目、表は萌黃、裏は櫻色。
ウスサマ[烏瑟沙摩](名) 【佛】(梵語、汚穢を轉じて、清淨ならしむる德) 廁を守る明王、眞言宗にて祭る。

うすし[薄](形、一) ㊀厚みすくなし。厚からず。㊁すくなし。あさし。「情—」、「縁—」、「色—」。㊂ゆたかならず。とぼし。「手當—」。㊃濃くあらず。㊄愛情少なし。誠意少なし。「味噌汁—」。
++**うすじほ**[薄鹽](名) うすき鹽加減。
++**うすずく**(自、か四) そゞろに走る。おどろきはしる。あはてはしる。
++**うずすまる**(自、ら四) むれよる。群集す。
うすずみ[薄墨](名) ㊀墨色の淡きこと。㊁「うすずみがみ」の略言。㊂そばがき。(女房詞)。——**がみ**[薄墨紙](名) あゆくあ。宿紙。——**のりんじ**[薄墨綸旨](名) うすゞみ紙に書き認めて給はれる綸旨。
うすぞめ[薄染](名) ㊀色を薄く染むること。㊁「うすぞめごろも」の略言。——**ごろも**[薄染衣](名) 淡紅色に染めたる着物。(秋羅)。
うすだたみ[薄疊](名) 春又は夏の候に用ふるたゝみ。うすべりなどの類。
うすちや[淡茶](名) ㊀ひきちやの一種、臼にて粉にひき、薄く湯にたて、飲む、香氣はげし。こいちやの對。㊁うすき茶色。——**いろ**[薄茶色](名) 「うすちや」の㊁に同じ。
うすぢり[薄塵](名) 漆うすき梨地ぬり。むらなしぢ。
うすづく[舂](自、か四) ㊀日影、西に沒せんとす。㊁物を臼に入れてつく。
うすで[薄手](名) ㊀かろき手疵。けいきやう。(微傷)。㊁物の拵へ方のうすきこと。「—の茶碗」。
うすねずみ[薄鼠](名) うすき鼠色。
うすのき[臼木](名) 【植】石南(シャクナゲ)科に屬する木、高さ三四尺、黑色の漿果を生ず、葉は卵形にして互生す、蕚は半圓形の裂片を有す、果實は食すべし。

うすのみ[臼實](名) 【植】「うすのき」に同じ。
(**うすのろ**)[薄鈍](名) 才能すこしく普通より劣りたるを。又、其人。
うすば[臼齒](名) 中の臼の如く凹みたる齒。
うすば[薄刃](名) 刃をうすく鍛ひたる庖丁。
(**うすばか**)[薄馬鹿](名) 「うすのろ」に同じ。
++**うすはく**(他、か四) 「うしはく」に同じ。
うすはた[薄機](名) 「うすもの」に同じ。
うすびたひ[薄額](名) かんむりの一種、磯の低きもの。
うすべ[臼邊](名) 【動】「おすめどり」に同じ。——**どり**[臼邊鳥](名) 【動】「にはとり」の一名。
うすべうし(名) 矢のはねの一種、黑き所の少きもの。「二十四さいたる—の矢負ひ」。(源田爲毛)。


[ひたびやう]

うすべり[薄縁](名) へりを付けたるござ。
うすみ[薄](名) うすくある度合ひ。
うすみどり[薄綠](名) うすきみどり色。
うすみの[薄美濃](名) 透きとほるほどに、薄く抄(ス)きあげたるみのがみ。
うすむらさき[薄紫](名) うすきむらさき色。
うすめ(名) 【動】「おすめどり」に同じ。
うすもの[薄物](名) 薄く織りたる織物、紗·絽の類。うすはた。うすぎぬ。(羅、綾、紗)。
うすやう[薄樣](名) (い)薄く漉きたる鳥の子紙。(ろ)極めてうすくすきたる雁皮紙。
うすやくそく[薄約束](名) 深からぬやくそく。假りのけいやく。
うすゆき[薄雪](名) ㊀少しばかり降り積もりたる雪。(微雪)。㊁一種の菓子、芳しく燒きて、砂糖のころもをかけたるもの。——**こんぶ**[薄雪昆布](名) 甚だ薄くけづりたる昆布、大阪の名產。

うすら[薄](名) 「うすらか」に同じ。
うすらか[薄](名) うっすりとしてあるさまにいふ語。
うすらぐ[薄](自、か四) ㊀時を過ぐすに從ひて、漸く薄くなる。うすろぐ。㊁かろくなる。あはくなる。おとろふ。
うすらひ[薄氷](名) 薄く張りたる氷。
うする[薄](自、ら下二) 自然にうすくなる。うすらぐ。
うすろぐ[薄](自、か四) 「うすらぐ」に同じ。
うすわた[薄綿](名) 着物にうすく入れたる綿。——**いれ**[薄綿入](名) 綿をうすくいれたる衣服。
++**うすわらふ**[薄笑](自、は四) すこし笑ふ。ほゝゑむ。(微笑)。
(**うすゐ**)[雨水](名) ㊀あまみづ。㊁二十四氣の一、陰曆にて、正月の中、陽曆の二月の十八日。
(**うずゐ**)(名) うづくまること。(蹲踞)。
(**うせい**)[迂生](名) 自家の謙稱。やつがれ。わたくし。
++**うせうしやう**[右少將](名) 右近衞府の少將。「條を見よ。
++**うせうべん**[右少辨](名) 古昔の官名、辨の一。
うせびと[失人](名) うせたる人。逃亡人。
うせもの[失物](名) ㊀紛失したる物品。ふんしつもの。㊁うせびと。逃亡人。
(**うせる**)[失](自、さ下二) ㊀「うす」の訛。㊁「來る」「行く」「去る」などを罵りていふ語。
うそ[獺](名) 【動】肉食類中鼬鼠科に屬する獸、體細長にして、指趾五つありて蹼を張る、尾長し、水邊に住し、時々水中に潛行して魚類等を捕へ食ふ。をそ。
うそ[鸒](名) 【動】燕雀類中すゞめ科に屬する鳥、

嘴短くして黑く、頭は深黑にして頸のあたり深紅なり、尾黑し、其外の體色は灰青色にして赤色を帶ぶ、人家に飼養して鳴聲を愛づ。うそどり。うそひめ。
++**うそ**[嘯](名) 口をつぼめて氣を吹くこと、又、口をつぼめて聲を出だすこと。「或は—を吹き」。
うそ[噓](名) 事實ならざる言。虛構したる言。いつはりのことば。そらごと。(虛言)。——**つき**[噓吐](名) よくうそをつく人。(浮詐人)。
うそかへ[鸒替](名) 筑前太宰府及東京龜井戶の天滿宮にて、參詣人が互に木にてつくりたる鸒をかへあふ神事、太宰府のは、正月七日の夜の酉の刻頃に行ふ、龜井戶のは、一月二十四·二十五の兩日の中これを行ひ、後には參詣人が持參のものを神主受け取りて、別のものを替へ渡すこととなれり。
(**うそはっぴやく**)[噓八百](名) うそいつはりの多きこと。
うそどり[鸒鳥](名) 【動】「うそ」に同じ。
うそひめ[鸒姬](名) 【動】「うそ」に同じ。
うそぶき[嘯](名) ㊀うそぶくこと。うそ。㊁うそぶく形をしたるめん相。
うそぶく[嘯](自、か四) ㊀口をつぼめて音を出だす。口をつぼめて氣を吐く。㊁詩歌を吟ず。㊂長くして大なる聲を發す。
うそむく[嘯](自、か四) 「うそぶく」に同じ。
++**うそゑむ**[微笑](自、ま四) 少しくわらふ。うすわらふ。ほゝゑむ。びせうす。
うた[歌](名) ㊀聲にふしを付けてうたふこと。音律に合はしてうたふこと。㊁うたふやうに作りたる詞の總稱、即ち、かぐらうた·さいばら·今樣·淨瑠璃·琵琶うた等。(唄、謠)。㊂詩調を整へて諧みつゞる韻文、五·七·五·七·七の五句、即ち、三十一音を正格とし、

始めの三句を上の句、末の二句を下の句といひ、詩を「からうた」と稱するに對して、「やまとうた」といふ。——**あはせ**[歌合](名) 歌を詠むものを左右に分れ、判人を立てゝ、詠みたる歌のよしあしを評して、勝負をさだむるを。「三十六番—」。
(**うだい**)[宇內](名) あめのした。天下。
++**うだいし**[右大史](名) 古昔の官名、文書·勘例などの事をつかさどりしもの。
++**うだいべん**[右大辨](名) 古昔の官名、辨の條を見よ。
++**うだいしやう**[右大將](名) 右近衞の大將。
うだいじん[右大臣](名) 大政官の上官の名。
うだいまつ[鵜松明](名) 雨中に點ずるたいまつ、かばの木の皮にてつくり、鵜飼に用ふ。
++**うだいも**(名) 【植】「つくねいも」に同じ。
++**うたうたし**(形、二) いよいよ甚し。又、展轉の意なりともいふ。
うたうたひ[歌唱](名) うたをうたふ人。又、うたをよくうたふ人。
++**うたうら**[歌占](名) 和歌にて、運命の吉凶を占ふを。
++**うたがき**[歌垣](名) 古昔の一種の遊戲、男女相あつまりて、歌をうたひかはして舞踏す。
++**うたかた**[泡沫](名) ㊀水の上に浮ぶ泡。㊁泡の消えやすきより、はかなき事に譬へいふ語。——**ぐさ**[泡沫草](名) 【植】菖蒲の一名。
++**うたかた**(副) おぼし。暫時。「—人にあはで」。
うたがたり[歌語](名) 歌のはなし。歌についてのものがたり。
うたがはし[疑](形、二) うたがふべし。いぶかし。不確なり。あやし。
うたがひ[疑](名) ふあん。あやしみ。ぎねん。

うた-がひ[歌貝](名) 蛤の殼のうちに、歌をかきたるもの、「うたガルタ」の如くに取りて遊ぶ。

うたが-ふ[はひふへ][疑](他、は四) ㊀ふしんに思ふ。あやしむ。いぶかる。㊁決する能はず。まどふ。まよふ。㊂惑る。あやぶむ。「死を―」。――らくは[疑](副) うたがふには。おそらくは。

うた-ガルタ[歌骨牌](名) 「カルタ」の一種、歌の下の句のみをふだに書きたるもの、今時行はるゝものは、多くは小倉百人一首を書きたるものとす、これを撒(マ)き、一人が上の句を讀むに先だち、數人にて其下の句を合はせて拾ひ取り、取りたる數の多寡によりて、勝負を決するなり。

十うたき[忿](名) 猪などの怒りたる樣子。

うた-きりぎりす(名) 【動】「こほろぎ」の一名。

十うた-ぐ[げげぐぐぐるれげよ][踞](自、か下二) あぐらをかく。又、胝をかく。

十うた-く[かきくくけけ][忿](自、か四) いかり叫ぶ。ほゆ。

十うた-く[かきくくけけ][懷](他、か四) いだく。だく。

うた-ぐち[歌口](名) ㊀歌のよみぶり。㊁うたを上手によむと。「―にて、おはしけん」。㊂歌謠を巧みにうたふと。㊃笛・尺八などの口にあてゝ吹く孔の稱。

うた-くづ[歌屑](名) 最も拙き歌。

うた-くらべ[歌競](名) 歌をたゝかはすと。うたあはせ。

十うた-ぐり[疑](名) うたがふと。うたがひをかくると。

十うた-ぐる[らりるるれれ][疑](他、ら四) うたがふ。

うた-くわい[歌會](名) 「うたのくわい」に同じ。

十うた-げ[讌](名) 酒宴を張ると。宴會。

うた-ことば[歌言葉](名) 歌又は謠曲などに多く用ひ、普通の文にはあまり用ひぬ詞の稱。

うた-さいもん[歌祭文](名) 一種の俗曲、山伏のうたへる祭文の節にもとづきたるもの。

十うた-た[轉](副) ㊀うつり進みて。甚しくなりて。㊁いよ〳〵。ますます。「興―多し」。㊂あやしくよからずして。穩かならずして。常ならずして。「―あるさまの名にこそありけれ」。――ごころ[轉心](名) そゞろなるこゝろ。移りやすきこゝろ。――ね[轉寐](名) ころびね。かりね。(假臥)。

十うた-ぢ[梲](名) うつばりの上にたつるはしら。うだつ。十――があがる 立身す。出世す。

うだつ[梲](名) 「うだち」に同じ。十――があがる うだちがあがる。

十うた-づかさ[雅樂寮](名) 「うたのつかさ」に同じ。

うたて[轉](副) ㊀けしからぬ意にいふ語。㊁あまりに。㊂物憂(ウ)くして。㊃いよ〳〵甚しく。――し[くしきけれ][轉](形、二) ㊀はなはだし。あまりなり。輕韻なり。㊁忌むべし。いとはし。うるさし。㊂興なし。おもしろみなし。

十うた-ながめ[歌詠](名) 歌をかんがふると。歌をよむと。

うた-ねんブツ[歌念佛](名) ふしをつけてうたふ念佛。

十うた-の-かみ[雅樂頭](名) 古昔の官名、うたれうの長官、相當は從五位上にして、唐名は大樂令。

うた-の-くわい[歌會](名) 人々相集まりて、歌をよみあふと。

十うた-の-つかさ[雅樂寮](名) 「うたれう」に同じ。

うたひ[謠](名) 能にあはせてうたふ謠曲、其番歌を概稱して內百番外百番とす、寶生・觀世・金春・金剛・喜多の五派あり。

うた-びくに[歌比丘尼](名) 歌念佛の導師たる尼。

うたひ-ぞめ[謠初](名) 德川幕府の頃、每年正月二日、殿中にてうたひ初めて奏せし式。

うたひ-て[謠手](名) うたふ人。又、たくみにうたふ人。

十うた-びと[歌人](名) 歌をたくみによむ人。うたよみ。かじん。

うた-ひめ[歌姬](名) 歌をうたふとを業とする女。げいしや。歌妓。

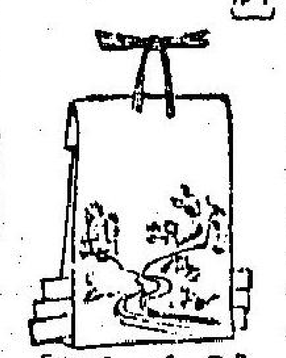
うたひ-め[歌女](名) げいしや。歌妓。

うたひ-もの[歌物](名) 節づけして歌ひ得る文句の總稱。

うた-ふ[はひふへ][歌](他、は四) ㊀聲に節を附けて歌詞を唱ふ。㊁歌詞につくり述ぶ。吟詠す。

十うた-ふ[へへふふれへよ][訴](他、は下二) うつたふ。

うた-ぶくろ[歌袋](名) 歌の緣草などを入れておく袋。


[うたぶくろ]

十うたへ[訴](名) うつたふると。訴訟。

十うたへ-ただす-つかさ[刑部省](名) 古昔、八省の一、刑律一切の事をとりあつかひし官廳。

うた-まくら[歌枕](名) 歌によみいれて雅なる地名。めいしよ。

十うた-まひ[歌舞](名) がくにん。れいじん。

十うたまひ-の-つかさ[雅樂寮](名) 「うたのつかさ」に同じ。

十うた-め[歌女](名) 歌をたくみにうたふ女。うたひめ。(妓女)。

うた-よみ[歌詠](名) 歌をたくみによむ人。

十うた-る[らりるるれれ][茹](自、ら四) ゆだる。

十うた-れう[雅樂寮](名) 古昔、治部省に屬し、伎樂の事をつかさどりし官廳。

うた-ゑ[歌繪](名) 繪の中に歌の文字をかきいれて、繪と字とを讀ましむるもの。あしでの類。

十うた-を[歌男](名) 歌をよくうたふ男。うための對。

うち[內](名) ㊀うら。なか。裏面。㊁くみ。なかま。㊂あひ。あひだ。㊃禁裏。內裏。㊄主上の敬稱。㊅いへ。へや。家室。㊆我家、我住居。㊇我妻又は我夫。㊈侍妾又は宮人。「―を好めば、女これに死す」。㊉こゝろ。心意。「敬以て―を直くす」。⑪體腔。臟腑。⑫われ。おのれ。⑬我國、我黨、我親族。

うち-―[打](接頭) 或動詞に冠して其意を強むる語。「―案じ」「―ふさぐ」。

うぢ[氏](名) ㊀古昔、家々の血統に從ひて、朝廷よりたまはりたる苗字、源・平・藤・橘の類。㊁各個の家を表彰する苗字。楠木・德川の類。㊂人の苗字の下に添へ用ふる敬稱。「某―には、如何おぼしめす」。

うち-あか-す[さしすすせせ][打明](他、さ四) 隱さずに語る。うちあく。

うち-あ-く[けけくくくれけよ][打明](他、か下二) ㊀明くの意を強めていふ語。㊁事を隱さずして、ありのまゝを語る。

うち-あ-ぐ[げげぐぐぐれげよ][打上](他、か下二) ㊀あぐの意を強めていふ語。㊁打ちてあぐ。㊂波荒れて陸を浸(ヒタ)す。波物を漂(タダヨ)はして陸へ上ぐ。㊃十うたげをなす。酒宴す。㊄興行を終ふ。

うち-あげ[內揭](名) 衣服のあげを外面の見ゆる所にせずして、內部にかくして縫ふと。そとあげの對。

うち-あげ[打上](名) ㊀はなびの一種、筒よりうちあぐるもの。㊁十うたげ。酒宴。㊂興行を終ふると。「相撲―の後」。

十うち-あける[明打](他) 「うちあく」の訛。

うち-あは-す[せせすすするれせよ][打合](他、さ下二) ㊀あはすの意を強めていふ語。㊁雙方互に打ちあふ。㊂かねて相談しておく。

十うち-あはせ[打合](名) うちあはすと。

十うち-あはせ[內合](名) ふともゝ。(髀)。

十うち-あはせる[打合](他) 「うちあはす」の訛。

十うち-あはび[打鮑](名) 鮑の肉を細長く切りて干(ホ)したるもの。のしあはび。のし。

うち-あひ[打合](名) ㊀銃砲などを放ちあふと。㊁雙方打ちあふと。たゝかひ。ぶちあひ。

うち-あ-ふ[はひふへ][打合](他、は四) ㊀互に相打つ。㊁互に銃砲などを放つ。

うち-あみ[打網](名) 「とあみ」(投網)に同じ。

うち-いり[打入](名) 攻め入ると。「義士の―」。

うち-いり[內入](名) ㊀負債などの一部分を償ふと。㊁まうけ。收入。

(うちう)[宇宙](名) ㊀天地四方と古往今來と。空間と時間と。天地古今。㊁轉じて、空中又は世界。――いんりよく[宇宙引力](名) 【理】萬有引力に同じ。

うち-うち[內內](名) ないないの事。うちわ。ひみつ。――に[內內](副) おもてだゝずに。

(うち-うち)(名、副) ためらひてぐづぐづするさまにいふ語。(逡巡)。

うち-うみ[內海](名) ㊀みづうみ。湖水。㊁いりうみ。江灣。㊂陸と陸との間に挾まれたる海水。㊃四國と中國との間にある海の泛稱、其中に、播磨灘・水島灘・備後灘・燧灘・伊豫灘・周防灘等の區分あり、我國にて降雨稀なる處にして雨水の混入少なく、從ひて其沿岸は最も製鹽に適せり。

うち-うら[內裏](名) ㊀うちわ。うち。㊁夜着などの裏につくる布。

(うちう-ろん)[宇宙論=Cosmology](名) 【哲】宇宙即ち天地萬物の根本的原理を論ずる哲學。――てきしようめい[宇宙論的證明=Cosmological proof](名) 【哲】宇宙の巧みに合一して正しく進步するは、神の目的に從ふものなりとして、神の存在を說くと。

うち-おと-す[さしすすせせ][打落](他、さ四) たゝきおとす。斬りおとす。

うち-おき[打置](名) 婚禮のとき、嚴盞にのせたる小袖をおさふるに用ふるもの。

うち-かぎ[打鉤](名) 古昔、水戰に用ひし鉤、敵船をひきかくるに用ふるもの。

うち-かけ[打掛](名) ㊀古昔、武官の節會(セチヱ)などの儀式のときに用ひし服、前と後とにあてゝ著る袖なしの如きもの。(裲襠)。㊁近古の婦女の禮服の一、帶びしたる上に打ちかけて著る小袖。かいどり。――よろひ[挂甲](名) 一種の鎧、武官の儀式に列せしときかざりに著けしもの。

[うちかけ(二)]

うち-がひ[胛](名) かひがらぼね。

うち-がし[內貸](名) 報酬又は賃錢などの幾部分を、前拂ひとしてかしあたふると。

うち-かた[內方](名) ㊀他人の妻の敬稱。れいけい。おくさま。れいふじん。(令閫)。㊁我家。うち。㊂枡などのうちのさしわたし。

うち-かた[打方](名) ㊀銃又は砲を放射すると。㊁ものをうつしかた又はものを切るしかた。

十うち-かた(名) はやうちかた。けんぺき。(拔辟)。

十うち-がたな[打刀](名) おびとりなく腰にさす刀。太刀に對していふ。

うち-か・つ[打勝](他、た四) かつの意を強めたる語。
うち-がね[打金](名) 前裝の鐵砲の火門の上に、裝置しあるはじきがね。これをはじき雷管を打ちて發火せしむ。(火鷄、鷄頭)。
うち-がは[内側](名) うちのかは。内面。
うち-がひ[打違](名) ㊀うちちがひ。ゆきちがひ。㊁食をいれて腰に帶ぶる底なき袋。うちちがへて帶ぶるより名づく。こしぶくろ。(纏)。
うち-かぶと[内冑](名) ㊀かぶとのうら。うつり。(裏兜)。㊁うちわのやうす。内情。——を・みすかす 内情をよく察知するにいふ。
うち-か・ふ[打更](他、は下二) ㊀更にあらためて打つ。㊁金屬器の具をさらにきたひかふ。
うち-かへ[打更](名) うちかふること。
うち-かへし[打返](名) うちかへすこと。
うち-かへ・す[打返](他、さ四) ㊀打ちて、先方へかへす。㊁人に打たれたる報いとして其人を打つ。㊂くりかへす。反覆す。㊃ふるき綿を更に綿弓にてはじきうつ。㊄墾きし跡再び鋤き返す。
{うちかへる[打更](他) 「うちかふ」の訛。
うち-がみ[打紙](名) 木づちにてうちて、つやを出だし滑かにしたる紙。
うぢ-がみ[氏神](名) ㊀氏の先祖として祭る神。藤原氏の春日、源氏の八幡の類。㊁人々の住む所の鎮守の神。うぶすな。(産土神)。
うち-がり[内借](名) 俸又は賃錢などの幾部分を前拂ひにて借り受くること。ないしやく。
うち-き[内氣](名) 物事に遠慮ぶかきこと。ひかへめがち。

うちき[袿](名) 古昔の婦人の衣服、袖廣く裾模樣などありて、裝束の下に着しもの。
うち-ぎき[打聞](名) ㊀聞くこと。㊁聞きて書きつけたるもの。
うち-ぎぬ[打衣](名) 古昔の婦人の衣服の一、ひとへの上又はあこめの上に着しもの。
うち-ぎぬ[打杵](名) 「きぬた」に同じ。
うち-きん[内金](名) 契約したる金高の幾部分の金。
{うち-きん[打金](名) 廉價なる品を高價なる品と易ふるとき、不足だけの金額をつぐなふこと。
うち-くだ・く[打碎](他、か四) 碎くの意を強めていふ語。
うち-くつろ・ぐ[打解](自、が四) ㊀心にわだかまりを懷(む)かず。㊁心に憂苦をとゞめず。
うち-くび[打首](名) 古昔の重刑の一、罪人の首を斬ること。ざんざい。(斬首)。
うち-ぐもり[内曇](名) ㊀鳥の子紙の一種。上下に雲形をすき出だしたるもの。㊁一種の砥石。山城國鳴瀧より出づ。玉子色に紫色の模樣あるもの。㊂かはらけの一種。内に黒きあやあるもの。
うち-ぐり[打栗](名) かちぐりを蒸して、甘味を付けたるもの。又、これに紙をあてゝ打ちつぶし扁平にしたるもの。又、細く切りたる栗。
うち-くるぶし[内踝](名) 内面へ向へるくるぶし。
うち-ぐるま[内輪](名) 器械の内側に車輪の装置しあるもの。
{うち-ぐるま[内車](名) 自家の人力車。
うち-ぐるわ[内郭](名) 城の内部のくるわ。そとぐるわの對。
うち-けし[打消](名) ㊀うち消すこと。㊁[文法] はたらきの然らざる意を表はすこと。「ず」「あらず」等の助動詞によりて其意を表はす。(否定)。

うち-け・す[打消](他、さ四) ㊀消すの意を強めていふ語。㊁皆無にす。遮る。きやす。㊂其事實を否認す。
うぢ-こ[氏子](名) ㊀氏神の末裔。うぢびと。㊁うぶすなの守護の下にある人。——-ぢゆう[氏子中](名) 同一の氏神を祀るもの。
うち-ころ・す[打殺](他、さ四) ㊀殺すの意を強めていふ語。㊁たゝきころす。㊂彈丸にて射殺す。
うち-しき[打敷](名) 古昔、多く用ひし布帛の敷き物。今時多くは佛壇などの机にかく。(蓋裱)。
うち-じに[討死](名) 敵と戰ひて、其場にて死ぬること。せんし。
うち-す・う[打据](他、わ下二) ㊀据うの意を強めていふ語。㊁うちたふす。
‡うち-すが・ふ[打過](他、は四) うちすぐ。引き續く。「雅」
うち-すずめ[内雀](名) [動]火とりむしの雛の異名。
‡うち-ずみ[内住](名) ㊀古昔、内裏に住居せしこと。㊁御召しによりて、常に宿直(とのゐ)に供奉せし藏人女房。
{うちすゑる[打据](他) 「うちすう」の訛。
うち-ぜん[内鎖](名) 鞍側の彎曲したる所をかける飾。
うち-だし[打出](名) ㊀うちいだすこと。㊁ものの模樣などを、裏より打ちて表へ出だすに用ふる型。㊂芝居などのはね。
うち-だ・す[打出](他、さ四) ㊀うちて出だす。㊁うち始む。㊂芝居などにて、終りの合圖に、

太鼓をうちて見物人を去らす。㊃裏より打ちて、表へ模樣を出だす。㊄土地を測量して、除地を出だす。
うち-だち[打太刀](名) ㊀實用の太刀。かざりにする太刀に對していふ。㊁太刀を打つこと。
うち-たふ・す[打倒](他、さ四) ㊀たふすの意を強めていふ語。㊁たゝきたふす。
‡うち-たれがみ[打垂髮](名) 婦人又は小兒の髮の結はずして垂れたるもの。「うなゐこが、一をふりわけて」
うち-ちがひ[打違](名) すぢかひ。ゆきちがひ。
うち-ちが・ふ[打違](他、は下二) ㊀交叉せしむ。すぢかひになす。㊁ゆきちがはす。
うち-ちが・ふ[打違](自、は四) ㊀互に交叉す。すぢかひになる。㊁ゆきちがふ。
{うちちがへる[打違](他) 「うちちがふ」の訛。
うち-ちら・す[打散](他、さ四) ㊀ちらすの意を強めていふ語。㊁追ひちらす。攻めちらす。
うち-つ・く[打付](他、か下二) ㊀うちあつ。なげあつ。㊁さしあつ。㊂臆面にものす。
‡うち-つ-くに[内國](名) ㊀古昔、地方に對して、都に近き所の稱。㊁外國に對して、我國の稱。
うち-つけ[打付](名) ㊀なげうつ。㊁そつじ。だしぬけ。㊂無作法。むきだし。——-がき[打付書](名) ㊀はしりがき。なぐりがき。㊁手紙の見舞ひの部などを略して、用事のみを書きたるもの。——-ごころ[打付心](名) 俄に思ひ立つこゝろ。
{うちつける[打付](他) 「うちつく」の訛。
うち-で[打出](名) 古昔、儀式の折りに、御簾(み)の下より衣物をだしゝこと。——-の-こづち[打出小槌](名) 寶の名。飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ槌。——-の-たち[打出太刀]

(名) 舉身の料に、夜間枕邊にそなへおく太刀。
うち-でし[内弟子](名) 師匠の家に寄宿して居る弟子。塾生。
うち-てふつがひ[内蝶番](名) よろひの胴にあるてふつがひ。
うち-と[内外](名) ㊀うちとそと。㊁内國と外國と。
うち-と・く[打解](自、か下二) ㊀心をうちあけて睦(むつ)じくす。へだてなく親しむ。㊁心にをやかなくなる。ゆるやかになる。
‡うちとけ-ごと[打解言](名) 打ちとけて語ることば。むつごと。
‡うちとけ-ごと[打解事](名) へだてなきたはむれ。みだらなるあそび。
‡うちとけ-ぶみ[打解文](名) うちあけて事情をいふ手紙。
‡うちとけ-わざ[打解業](名) うちとけごと。
{うちとける[打解](自) 「うちとく」の訛。
うち-とねり[内舍人](名) ㊀古昔、中務省に屬せし官。公家の子弟を登庸して、禁裏殿上の事をならはしたるもの。㊁現今は、宮內省及主殿寮の屬下級の官職。
うち-どの[打殿](名) 古昔、裝束につやをいだすために設けられし所。
‡うち-と-の-ふみ[内外典](名) 佛教の經典と儒道の經書と。ないてんとげてんと。
‡うち-と-の-みや[内外宮](名) 伊勢の内宮と外宮と。
うち-と・む[打留](他、ま下二) ㊀物をうちてとめおく。㊁斬り殺す。㊂彈丸を放ち中てて取る。㊃興行の終りとす。
{うち-とめ[打留](名) をはり。けっきょく。どんづまり。

{うちとめる[打留](他) 「うちとむ」の訛。
うち-どり[内取](名) ㊀古昔、角力の節會におこなはれし儀式。㊁親方の内にてするけいこ相撲。
うち-なび・く[打靡](自、か四) なびく。またがふ。
うち-なびく[打靡](枕) 「くろかみ」「くさかの山」「春」「くさなぎ」に冠らする詞。
うち-ならし[擊鳴](名) 一種の樂器。平たくして曲がり、ものにかけて鳴らすもの。けい。(磬)。
‡うち-ならし[内習](名) うちにてならはすこと。したげいこ。
うち-なら・す[打鳴](他、さ四) たゝきてならす。ならす。(拍)。
うち-には[内庭](名) 家の内の室と室との間にある庭。
うち-ぬき[打拔](名) ㊀うちぬくこと。㊁地を深く穿ちて、井をつくること。
うち-ぬ・く[打拔](他、か四) つらぬく。ぬく。
うち-ね[擊根](名) 一種の兵器。敵になげうつものの、形まゆみけんに似て、ふとく短し。
‡うち-の-うち[家内](名) 家のうち。かない。「一ては兄弟多し」
‡うち-の-おとど[内大臣](名) 「うちのおほいまうちぎみ」に同じ。
‡うち-の-おほいまうちぎみ[内大臣](名) 內大臣の一名。大織冠鎌子連をこれに任じたりしより始まる。
‡うち-の-かしはで-の-かみ[内膳正](名) うちのかしはでのつかさの長官。
‡うち-の-かしはで-の-つかさ[内膳司](名) 古昔、宮内省の被管にして、天子の食物をつかさどりしつかさ。
‡うち-の-かにもり-の-かみ[内掃部頭](名) うちのかにもりのつかさの長官。

うちの-かにもり-の-つかさ[内掃部司]（名）古昔、宮中のさうぢをつかさどりしつかさ。

うちの-かみ[氏上]（名）同氏族中にて正系をひきたる家の長、これを上として、一族の事をつかさどらしめしもの。うぢのちやうぢや。うぢのをさ。

うちの-くすり-の-かみ[内薬正]（名）うちのくすりのつかさの長官。

うちの-くすり-の-つかさ[内薬司]（名）古昔、中務省の被管にして、宮中の醫藥に關する事をつかさどりしつかさ。

うちの-くら-の-かみ[内蔵頭]（名）うちのくらのつかさの長官。

うちの-くら-の-つかさ[内蔵寮]（名）古昔、中務省の被管にして、宮中の金銀・珠玉・寶物・穀錦其他一切の財貨に關したる事務をつかさどりしつかさ。くられう。

うちの-ぬるすつかさ[内記]（名）古昔、中務省の被管にして、詔勅をつくり、御書の記錄の事を司どりしつかさ。即ち、今の文事祕書官の如きもの。ないき。

うちの-たくみ-の-かみ[内匠頭]（名）うちのたくみのつかさの長官。たくみのかみ。

うちの-たくみ-の-つかさ[内匠寮]（名）古昔、中務省の被管にして、宮中の修繕其他營繕などの裝飾の事をつかさどりしつかさ。たくみれう。

うちの-つちやうおやカヂヨ[氏長者]（名）「うぢのかみ」に同じ。德世、平氏・源氏・藤原氏・橘氏にのみたまはりし號。

うちの-つはものの-くら-の-かみクラ[内兵庫正]（名）うちのつはものくらの長官。

うちの-つはものの-くらクラ[内兵庫]（名）古昔、朝廷の兵器をつかさどりしくら。

うちの-ざねり[内舎人]（名）「うちとねり」に同じ。

うちの-べ[打延]（名）うちのぶるもの。ナーのさせる。

うちの-みこ[内御子]（名）㊀柱などの、内面に向かへるしわたし。㊁すべて中空體の中空部の縱・橫・深の稱。例せば、一升枡の内法は、縱・橫各四寸九分にして、深さ二寸七分といふが如し。

うちの-みやの-かみ[内禮正]（名）うちのみやのつかさの長官。

うちの-みやの-つかさ[内禮司]（名）古昔、中務省の被管にして、宮中の禮儀をつかさどりしもの。

うちの-もん[門]（名）「うぢのかみ」に同じ。

うちは—**ふぐアウチ**[團扇河豚]（名）[動]ふぐの類、體、扁圓にして、尾鰭なく、背鰭・腹鰭くしてよくのぶるもの。

うちは-はへエ[打延]（名）ながびきて、いつ終るとも分きがたきこと。

うちは-はらひハイ[打拂]（名）㊀うちはらふこと。㊁塵をはらふ具。もりはらひ。

うちは-はら-ふラハ[はべべ]ふ[打拂]（他、は四）㊀はらひきよむ。㊁逐ひあらひぞく。㊂小銃・大砲などを打ちて、敵を追ひちらす。

うちは-ばん[打盤]（名）物を打つに用ふる盤。

うちは-び[打火]（名）燧にて鑽り出す火。きりび。

うちは-ひきすし[打日差]（枕）「みやこ」に冠らする詞。

うちは-ひも[打紐]（名）二筋以上の絲にて組みたる紐。

うちは-ぶ[打歩]（名）㊀兩替にて、呼び價（値）の等しき通貨の價格の差。㊁送金人が實際に銀行に拂込みたる金額と、爲替手形の額面高との差。

うちは-ぶそころ[内懐]（名）㊀胸部と衣服との間。㊁人のないそのやうに。

うちは-ぼり[内堀]（名）内部のほり。そとぼりの對。

うちは-ぶみ[氏文]（名）先祖よりの由緒をまたためたる文書。けいづ。

うちは-べんけい[内辨慶]（名）家人抔のものに對しては卑屈なれど、家人に對しては暴慢なるものをあざけりていふ語。

うちは-まかす[打任]（他、さ下二）㊀事物を擧げて委任す。㊁放任す。其まゝにす。㊂普通にてあり。ありふれたり。

うちは-まく[打撒]（名）㊀まじをひのためふりまく米。㊁米の異稱。又、米苞にもいふ。「幡。

うちは-まく[内落]（名）うち一への事。ないらの實

うちは-まく[打幕]（名）幕の一種、まんまくに似て、上に横に一布を張りて、下は縫はざるもの。

うちは-また[内股]（名）うちもゝ。十——がうやくは[内股膏藥]（名）自家に確たる主義定見なく、かれにつきこれにつくものをもざゆりていふ語。十——もの[内股者]（名）うちまたかろやくの人。

うちは-まだがるもちりさる[打跨]（自、ら四）またがる。

うちは-またび[打跨]（名）うちまたがること。

うちは-まつ[打松]（名）「たいまつ」に同じ。

うちは-まめ[打豆]（名）大豆を少し聲て乾し、槌にて打ちひらめたるもの。多く汁などに入れて食ふ。

うちは-まる[宇治丸]（名）鰡を酢にし又はひものとなしたるもの。山城宇治の產物。

うちは-まゐり[内參]（名）宮中へ參内すること。さんだい。

うちは-み[打身]（名）身體にうち傷などを受けて、其後をり〳〵痛みを感ずること。

うちは-みす[内御簾]（名）芝居にて舞臺の方より八間の間のゑたさしき。そとみすの對。

うちは-みだり[打亂]（名）うちみだりのはこの略言。——のはこ[打亂箱]（名）櫛其他の化粧道具を入るゝ匣。

うちは-みづ[打水]（名）地を濕し塵を鎭め、或は夏涼氣をとるために、大地に撒きて水。

うちは-むらさき[内紫]（名）㊀[動]「むらさきがひ」の一名。㊁[植]「ザボン」の一種、果實の内部は淡き紫色を帶ぶ。

うちは-むろ-づくり[内室造]（名）屋根の裏を見せたるまゝにて、天井を張らぬ造り方。

うちは-もの[打物]（名）㊀うち切るための武器。即ち、太刀・刀の類。㊁うちきたひたる金具。㊂一種の乾菓子。みぢん粉に砂糖を加へ、型にいれてうちかためたるもの。㊃槌にてうちならすと。つゞみの類。——業[打物師]（名）刃物をきたふ職人。（刀工）。

うちは-もも[内股]（名）股のうちがは。うちまた。

うちは-やうてんヂヤウ[有頂天]（名）㊀[佛]九天の中の極高所。㊁好む所に熱中して、他事にうはのそらなること。

うちは-や-るもちりさる[打遣]（他、ら四）やる。すてゝおく。ほかしておく。

うちは-ゆう[雨中]（名）雨のふるなか。

うちは-ゆう[雨注]（名）矢・鉄丸などが、雨のごとくにそゝぐこと。

うちは-ゆうおやうシヤウ[右中將]（名）古昔、正月の御齋會の結願の日などに御前にて佛數の問答をしゝとき、家内。㊁贓内。國内。

うちは-わ[内曲]（名）㊀うち、家内。㊁ないそよう事。

うちは-わけ[内分]（名）本家の知行の中を、末家に分ち與ふること。

うちは-わけ[内譯]（名）金錢又は物品の總額を記し、其部分の目を小わけして記載すること。

うちは-わけ[打分]（名）圍碁にて、一取一勝してつ

うちは-へエ[打延]（名）ながびきて、いつ終るとも分きがたきこと。

うちは-はらひハイ[打拂]（名）㊀うちはらふこと。㊁塵をはらふ具。もりはらひ。

うちは-はら-ふラハ[はべべ]ふ[打拂]（他、は四）㊀はらひきよむ。㊁逐ひあらひぞく。㊂小銃・大砲などを打ちて、敵を追ひちらす。

うちは-ばん[打盤]（名）物を打つに用ふる盤。

うちは-び[打火]（名）燧にて鑽り出す火。きりび。

うちは-ひきすし[打日差]（枕）「みやこ」に冠らする詞。

うちは-ひも[打紐]（名）二筋以上の絲にて組みたる紐。

うちは-ぶ[打歩]（名）㊀兩替にて、呼び價（値）の等しき通貨の價格の差。㊁送金人が實際に銀行に拂込みたる金額と、爲替手形の額面高との差。

うちは-ぶそころ[内懐]（名）㊀胸部と衣服との間。㊁人のないそのやうに。

うちは-ぼり[内堀]（名）内部のほり。そとぼりの對。

うちは-ぶみ[氏文]（名）先祖よりの由緒をまたためたる文書。けいづ。

うちは-べんけい[内辨慶]（名）家人抔のものに對しては卑屈なれど、家人に對しては暴慢なるものをあざけりていふ語。

うちは-まかす[打任]（他、さ下二）㊀事物を擧げて委任す。㊁放任す。其まゝにす。㊂普通にてあり。ありふれたり。

うちは-まき[打撒]（名）㊀まじをひのためふりまく米。㊁米の異稱。又、米苞にもいふ。「幡。

うちは-まく[内落]（名）うち一への事。ないらの實

うちは-まく[打幕]（名）幕の一種、まんまくに似て、上に横に一布を張りて、下は縫はざるもの。

うちは-また[内股]（名）うちもゝ。十——がうやくは[内股膏藥]（名）自家に確たる主義定見なく、かれにつきこれにつくものをもざゆりていふ語。十——もの[内股者]（名）うちまたかろやくの人。

うちは-まだがるもちりさる[打跨]（自、ら四）またがる。

うちは-またび[打跨]（名）うちまたがること。

うちは-まつ[打松]（名）「たいまつ」に同じ。

うちは-まめ[打豆]（名）大豆を少し聲て乾し、槌にて打ちひらめたるもの。多く汁などに入れて食ふ。

うちは-まる[宇治丸]（名）鰡を酢にし又はひものとなしたるもの。山城宇治の產物。

うちは-まゐり[内參]（名）宮中へ參内すること。さんだい。

うちは-み[打身]（名）身體にうち傷などを受けて、其後をり〳〵痛みを感ずること。

うちは-みす[内御簾]（名）芝居にて舞臺の方より八間の間のゑたさしき。そとみすの對。

うちは-みだり[打亂]（名）うちみだりのはこの略言。——のはこ[打亂箱]（名）櫛其他の化粧道具を入るゝ匣。

うちは-みづ[打水]（名）地を濕し塵を鎭め、或は夏涼氣をとるために、大地に撒きて水。

うちは-むらさき[内紫]（名）㊀[動]「むらさきがひ」の一名。㊁[植]「ザボン」の一種、果實の内部は淡き紫色を帶ぶ。

うちは-むろ-づくり[内室造]（名）屋根の裏を見せたるまゝにて、天井を張らぬ造り方。

うちは-もの[打物]（名）㊀うち切るための武器。即ち、太刀・刀の類。㊁うちきたひたる金具。㊂一種の乾菓子。みぢん粉に砂糖を加へ、型にいれてうちかためたるもの。㊃槌にてうちならすと。つゞみの類。——業[打物師]（名）刃物をきたふ職人。（刀工）。

うちは-もも[内股]（名）股のうちがは。うちまた。

うちは-やうてんヂヤウ[有頂天]（名）㊀[佛]九天の中の極高所。㊁好む所に熱中して、他事にうはのそらなること。

うちは-や-るもちりさる[打遣]（他、ら四）やる。すてゝおく。ほかしておく。

うちは-ゆう[雨中]（名）雨のふるなか。

うちは-ゆう[雨注]（名）矢・鉄丸などが、雨のごとくにそゝぐこと。

うちは-ゆうおやうシヤウ[右中將]（名）古昔、正月の御齋會の結願の日などに御前にて佛數の問答をしゝとき、家内。㊁贓内。國内。

うちは-わ[内曲]（名）㊀うち、家内。㊁ないそよう事。

うちは-わけ[内分]（名）本家の知行の中を、末家に分ち與ふること。

うちは-わけ[内譯]（名）金錢又は物品の總額を記し、其部分の目を小わけして記載すること。

うちは-わけ[打分]（名）圍碁にて、一取一勝してつ

ひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

うちは-わけ[内譯]（名）金錢又は物品の總額を記し、其部分の目を小わけして記載すること。

うちは-わけ[打分]（名）圍碁にて、一取一勝してつ

うちは-わけ[内分]（名）本家の知行の中を、末家に分ち與ふること。

うちは-わけ[内譯]（名）金錢又は物品の總額を記し、其部分の目を小わけして記載すること。

うちは-わけ[打分]（名）圍碁にて、一取一勝してつ

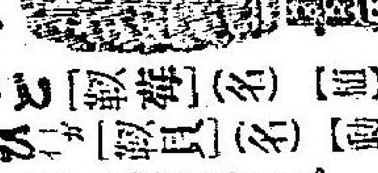
うつ―［空］（接頭）或語に冠して中の空虚なる意を表はす語。「―せみ」（虛）。
うづ［渦］（名）㊀水勢の輪の如くめぐること。又、其水。㊁すべて渦の形したるもの。
十うづ［珍］（名）「うつ（珍）」に同じ。「に供せらる。
十う-づ［烏頭］（名）とりかぶとの根、毒あり、藥料
十うづ［堆］（名）むつくり高きさまにいふ語。
（うつ-あうオウ［鬱怏］（名）むしあつきこと。
十うつ-あし［內足］（名）足のそれかゞむ內面の所。ひつかゞみ（國）。
（うつ-い［鬱伊］（名）氣ふさがること。
（うつ-うつ［鬱鬱］（名、副）㊀氣分のはれ〴〵せぬさまにいふ語。㊁草木などのしげれるさまにいふ語。㊂雲氣などのさかんなるさまにいふ語。㊃物事のふさがりとゞこほるさまにいふ語。
う-づかひガイ［鵜役］（名）鵜をつかひて魚を捕ること。又、其職業の人。
（うつかり（名、副）茫然として心のそらなるさまにいふ語。十――ばうりボウ（名）心うつかりしやすき人。
うつ-ぎ［空木］（名）【植】虎耳草（ユキノシタ）科に屬する灌木、高さ四五尺、枝と莖とは共に對生す、葉は兩面とも粗糙なり、四月頃花開く、花は一瓣にして、花絲は有翼扁平なり、觀賞用として栽培せられ、木材は木釘などに用ひらる（搜疏）。
（うつ-き［鬱氣］（名）㊀氣散ぜざること。心晴れやかならざること。㊁こもりふさがる氣。㊂たちのぼる氣。
う-づき［卯月］（名）（「うのはな」の咲く月の義）陰曆四月の稱。十――のいみ［卯月忌］（名）四月八日の稱、卽ち、釋迦の入滅したりといふ日。――のはな［卯月花］（名）【植】「うのはな」の一名。

――ばな［卯月花］（名）（四月にさく花の義）【植】「おやくなげ」の一名。
うづき［疼］（名）うづくこと。いたみ。
十うつ-くゆくけくくる［虛］（自、か下二）㊀中うつろとなる。㊁心茫然としてあり。
うづ-くくかきけけ［疼］（自、か四）時々刻々に痛みを感ず。ちく〳〵いたむ。
十うつくしししくしきしけれ［愛］（形、二）愛すべし。あい「らし。
うつくしししくしきしけれ［美］（形、二）㊀うるはし。うつくしかなり。あでやかなり。みめよし。きれいなり（麗、艶、妍）。㊁心いさぎよし。行いやしからず。うるはし。
十うつくしみ［愛］（名）うつくしむこと。いつくしみ。
十うつくし-むまみめめ［愛］（他、ま四）いつくしむ。あいす。あはれむ。
（うつ-くつ［鬱屈］（名）㊀氣のふさぐこと。㊁物事のふさがりとゞこほること。
うづくま-るらりるれ［蹲］（自、ら四）㊀膝を折り腰をおとしてゐる。㊁獸など、前足をたてゝすわる。
うつけ［空］（名）㊀から。あき。空虛。㊁うはのそら。ぼんやり。うつかり。（呆痴）。
（うつ-けつ［鬱結］（名）氣のむすぼるゝこと。
うつけ-もの（名）ばかもの。たわけもの。（呆痴漢）。
（うつ-さん［鬱散］（名）きばらし。うさばらし。
うつし［寫］（名）㊀うつしとること。㊁原形になぞらへてつくること。模造。㊂うつしたる文書又は圖畫。㊃とうほん。謄本。㊄模造品。
うつし［映］（名）影をうつすこと。
うつし［移］（名）㊀うつすこと。㊁のりかへの乘馬。㊂うつしばなの略言。――ぐさ［移草］（名）【植】「つゆくさ」の一名。
十うつ-ししくしきしけれ［現］（形、二）現在なり。うつゝなり。あらはなり。たしかなり。（顯）。
十うつし-ごころ［現心］（名）あらはなるこゝろ。たしかなるこゝろ。「すき心。
うつし-ごころ［移心］（名）うつる心。かはりやすき心。
十うつし-さま［現樣］（名）常の様。たしかなるさま。「に用ふる灰。
うつし-の-はひハイ［移灰］（名）紅をおろすとき
うつし-ばな［移花］（名）一種の繪具。つゆくさの花を摘み、紙にうつして染料とす。
十うつし-びと［現人］（名）此世に生活せる人。
うつし-ぶみ［移文］（名）くわいぶん。まはしぶみ。「―」
うづ-しほシオ［渦潮］（名）うづをまく潮。「鳴門の
十うつし-み［現身］（名）現在せる身。いきながらふる身。
うつし-ゑ［映繪］（名）暗所にて、光線の作用を以て、繪の形をあらはし出だすもの。かげゑ。
うつ-すさしせせ［移］（他、さ四）㊀これをかれにかふ。かれをこれにひきなほす。「風をうつし、俗を易ふ」。㊁處を變ず。かふ。「居を―」。㊂及ぼす。「禍を餘に―」。㊃過ごす。「時を―」。㊄おくる。あたふ。㊅傳染せしむ。㊆文書にえたゝめてかゝる。「―し病」。「免職」。
うつ-すさしせせ［寫］（他、さ四）㊀原物のとほりにかきとる。㊁原物になぞらへて造る。模造す。㊂光線の作用により、物の形を繪畫にとる。
うつ-すさしせせ［映］（他、さ四）照らして影をあらはす。「鏡に―」。
うつ-すせしすする［鬱］（自、さ變）㊀むすぼる。つもる。㊁伸びず。散らず。とゞこほる。㊂氣むしのぼる。㊃心思結ぼる。うれふ。ふさぐ。

うつ-すせしすする［鬱］（他、さ變）㊀とぢ。かさむ。ふさぐ。㊁むす。ねかす。「麴を―」。
（うつすら［薄］（名、副）「うつすり」の轉。
うつすり［薄］（名、副）うすく。ほんのり。
うつせ-がひガイ［虛背貝］（名）攝津などに産する貝なる介殼。
（うつ-せき［鬱積］（名）とゞこほること。つもること。
十うつ-せみ［現身］（名）此世に現在する身。うつしみ。
うつ-せみ［空蟬］（名）㊀蟬のぬけがら。せみがら。㊁轉じて、蟬。「―の聲」。――の［空蟬］（枕）「人」「いのち」「世」「殊」に冠らする詞。
（うつ-ぜん［鬱然］（名、副）草木のしげ…さま又は物事のさかんなるさまにいふ語。
（うつ-そう［鬱蒼］（名）むしのぼる氣のさかんなるさま又は草木のしげれるさまにいふ語。
十うつそ-み［現身］（名）「うつせみ」に同じ。
うづ-だいこん［渦大根］（名）【植】「さんごぢゆな」の一名。
（うつ-たう［鬱陶］（名）心むすぼるゝこと。ふさぎ。――しししくしきしけれ（形、二）㊀心ふさぎてはれず。㊁うるさし。わづらはし。
うづたか-しくしきけれ［堆］（形、一）もりあがりて高し。「うづたかきまで飯をもりて」。
うった-ふフウ［訴］［うつたふる］（他、は下二）㊀官府に申し出でゝ、是非曲直の判決を請ふ（訟）。㊁不平などを人に告ぐ。㊂或物事によりて其解決を求む。「遂に兵火に―るに至る」。
うった-へエ［訴］（名）「そしよう」に同じ。
十うった-へ-にエニ（副）㊀ひたすらに。ひとへに。㊁うちつけに。やがて。

十う-づち［卯槌］（名）古昔、卯杖と同じく、正月上の卯の日に兵衛府より奉りし槌。
（うつちやらか-すさしせせ［打遣］（他、さ四）すてゝおく。
（うつちや-るらりるれ［打遣］（他、ら四）すてゝおく。
うつつ［現］（名）㊀此世に現在してあること。現實。㊁心神のさだかならぬ境。まぼろし。――をぬかす 迷ひて心をうしなふ。
十うつ-つつてつるつれ［打捨］（他、た下二）うちすつ。
うつ-て［討手］（名）（「うちて」の音便）敵・賊又は罪人などをうちむかふる人。捕手。
うつて-がへエガ［打手替］（名）㊀いりかはりたちかはりすること。㊁碁の手の名、打つて敵の石をとり、直ちに敵に其の部分に於ける我石を取らるゝこと。
（うつて-つけ［打附］（名）其儘よく適合すること。
うつとり（名、副）心を惑（マド）ふさまにいふ語。（恍惚）。
十うつ-なしくしきけれ［疑無］（形、一）うたがひなし。
十うづなひナイ［諾］（名）うべなふこと。ゆるすこと。
十うづな-ふフウ［諾］［はうふゝ］（他、は四）まようちす。うべなふ。うけいる。
うつはワ［器］（名）㊀中に物をいるべきもの。うつはもの。いれもの。㊁器具器械の總稱。㊂物事を適當し得る才能度量。きりやう。㊃其物事を適當し得る人物。「廊廟の―」。――もの［器物］（名）物を入るゝ具。いれもの。
十うつはりバリ［僞］（名）うつはること。いつはり。
うつばり［梁］（名）棟をうくるはり。はり。
十うつはり-ごとバリ［僞言］（名）うそ。そらごと。
十うつは-るバル［るれれる］［僞］（他、ら四）いつはる。
うつ-ぶき［俯向］（名）うつむき。
うつ-ぶ-くくかきけけ［俯向］（自、か四）うつむく。

うつ-ぶ-くくけけくる［俯向］（他、か下二）うつむかす。
うつ-ぶし［俯伏］（名）うつぶすこと。うつむき。――め［俯目］（名）顔稍や下向きとなりあること。
うつ-ぶ-すさしせせ［俯伏］（自、さ四）うつむく。
うつ-ぶ-すせせすする［俯伏］（他、さ下二）うつむかす。
うつぶるひ-のりイノリ［十六島海苔］（名）【植】出雲國うつぶるひ島より出づる一種のあまのり、色紫黑にして味美なり。
（うつ-ぶん［鬱憤］（名）つもり〳〵しうらみ。宿怨。「―晴らす」。
（うつ-ぺい［鬱閉］（名）㊀ふさぐこと。とぢこもること。「きよ」から。㊁物を一處にとぢこめること。
うつほオ［空］（名）中の空虛なること。うつろ。くう
うつぼ［洞］（名）中の空虛なる處。
うつぼ［靫］（名）矢を入るゝうつはの名。（箙、靫）。



［ぼつう］

――いちご［靫苺］（名）【植】「いちご」の一種。――がひガイ［靫貝］（名）【動】螺の一種、介殼かたつぶりに似て、褐茶色なり。
十うつぼ-かもん［空聯文］（名）女敍位の名目、敍位すべき人なく、たゞ名目のみを存しおくこと。
うつぼ-ぎ［空木］（名）中の朽ちてうつろになりたる木。
十うつぼ-ぐさ［空草］（名）【植】「ねぎ」の古名。
（うつ-ぼつ［鬱勃］（名）㊀雲などの盛んに起るさまにいふ語。㊁ものゝ內にふさがるさま又は意氣起りあがるさまにいふ語。
うつぼ-づけ［空穗附］（名）相撲の四十八手の一、いきはひつよく振りあげて投ぐる手。

＋うつぼ-ばしら[空柱](名) 古昔、あまだれをうくるためにたてし柱。たてどひ。

うつぼ-ぶね[空船](名) 大木の中をうつろにして造りたる船。まるきぶね。(獨木舟)。

うづ-まき[渦卷](名) 〇うづまくこと。うづをまく水流。(渦狀)。〇一種の菓子、うどん粉に卵を和したるものを延べ、これを燒き餡をつゝみまきて、輪切りにしたるもの。

うづ-まく[渦卷](自、か四) うづになりてまふ。

うづ-まる[埋](自、ら四) うづもる。

うづみ-ひ[埋樋](名) 土中にうづめて、水をとほすとひ。かくれどひ。

うづみ-び[埋火](名) 灰の中にうづめたる炭火。

うづみ-もん[埋門](名) うらてにある小門。

うづ-む[埋](他、ま四) 〇物の内に入れかくす。〇土中に入れ沒す。〇粗末なる葬りをなす。

うづ-む[埋](他、ま下二) 前條に同じ。

うつ-むき[俯向](名) うつむくこと。うつぶし。

うつ-むく[俯向](自、か四) 〇下へ向く。〇頭を垂る。たる。

うつ-むく[俯向](他、か下二) 下へ向かす。

うつ-むけ[俯向](名) うつむくること。

(うつむける)[俯向](他) 「うつむく」の訛。

(うづむし)[渦蟲](名) 【動】「みづすまし」の一名。

(うつむろ)[空室](名) 四方をぬりたるむろ。

(うづめる)[埋](他) 「うづむ」の訛。

＋うつ-もも[內股](名) うちもゝ。

うづ-もる[埋](自、ら下二) 物の中にかくれ掩(オホ)はる。うづまる。うまる。

(うつ-もん)[鬱悶](名) 心むすぼれもだゆること。

＋うつ-ゆふ[空繭](名) 中の空虛になれる繭。

うづら[鶉](名) 〇【動】鶉雉類に屬する鳥、形はにはとりの雌に似て首小さく尾短し、全身茶褐色にして黑白の斑點あり、多くは原野に棲む、肉は味美なり。〇芝居の下棧敷。(東京の方言)。〇椶櫚の毛と加賀苧とをあはせなひたる船綱。 ——いし[鶉石](名) 小さき圓き瑪瑙(メナウ)。つがるめなう。

うづら-ごうし[鶉格子](名) 遊女屋の格子(カウシ)の一種、形うづらかごに似る。 ——かご[鶉籠](名) うづらをかひおく方形の籠。 ——がひ[鶉貝](名) 【動】前鰓類中鶉貝類に屬する貝、介殼圓くして、うづらの羽の斑に似たる模樣あり。 ——ごろも[鶉衣](名) 敝(ヤ)れて短くなりたる着物。敝衣。 ——たけ[鶉茸](名) 【植】莖の上の斑色が鶉の毛色に似たる松茸。 ——のとこ[鶉床](名) 〇うづらの臥すところ。〇轉じて、いぶせき臥床(フシド)の稱。 ——ふ[鶉斑](名) 茶色に黑白の斑文あるもの。 ——まめ[鶉豆](名) 【植】さゝげの一種、莖は纏繞せず、羽狀複葉にして三箇の小葉より成る、花は白色にして、種子に渦紋あり、種子及嫩莢は食用に供せらる。ちりめんまめ。 ——もく[鶉木](名) 【植】「やくすぎ」の一名。 ——やき[鶉燒](名) 食物をあぶらもていりつけ、鶉色としたるもの。又、其食物。

＋うつら-うつら(名、副) 〇よく念を入るゝさまにいふ語。〇ねむりを催すさまにいふ語。うとうと。

うつり[映](名) 〇うつること。〇色と色との取り合はせ。

うつり[移](名) 〇うつること。〇他よりのおくり物の器に、其返禮としているゝ品の稱。 ——が[移香](名) 物にうつりて殘る香。 ——かはり[移代](名) 次第にかはること。かうたい。へんせん。 ——かはる[移變](自、ら四) 漸々にかはりゆく。へんせんす。かうたいす。 ——がみ[移紙](名) 他よりおくり物の器に、返禮のため入れてかへす紙。 ——ぎ[移氣](名) うつりやすき性質。うはき。 ——やまひ[移病](名) はやりやみ。でんせんびやう。

うつ-る[移](自、ら四) 〇所かはる。〇變ず。かはる。かはりゆく。〇及ぶ。延(ヒ)く。〇色づく。そまる。〇過ぎゆく。〇感染す。でんせんす。〇ふところへかはる。おとろふ。

うつ-る[映](自、ら四) 〇こゝの光り又は影が、かしこに現はる。〇色と色とよく出合ふ。〇よく適應す。

(うつるゐ-まんと)[鬱壘神荼](名) 支那にて百鬼を支配する兄弟の神にして、東海の度朔山の桃樹の下にありといふ。

うつろ[空](名) うつほ。うろ。から。(虛)。

＋うつろは-す[移](他、さ四) うつろふやうにす。變化せしむ。おとろへしむ。

＋うつろ-ふ[移](自、は四) 〇場所をかふ。〇うつりかはる。〇おとろふ。

うつろ-ふ[映](自、は四) 影又は光りなどうつる。「朝日に—山」。

うづ-わ[渦輪](名) 【動】「うづわがつを」の略言。 ——がつを[渦輪鰹](名) 【動】硬鰭類中さば科に屬する魚、背部蒼黑色にして、後方に雲紋あり、體長一尺に達す、東海に多く、習性かつをに似る。

＋うづ-ゐ[蹲居](名) うづくまりて居ること。(蹲踞)。

＋う-づゑ[卯杖](名) 古昔、正月上の卯の日に、兵衛府より奉りしつゑ、五色の絲にて卷きたるもの。

うつを[靫](名) 「うつぼ」の轉。

＋うつを-ばしら[空柱](名) 「うつぼばしら」の轉。

＋うつて[討手](名) 「うつて」に同じ。

うで[腕](名) 〇臂(ヒヂ)と手頸(テクビ)との間の稱、下膊骨即ち尺骨と撓骨とより成り、これに諸種の筋肉附着す。たゞむき。かひな。〇轉じて、肩と手頸(テクビ)との間の稱。上膊骨一對及下膊骨とより成り、諸種の筋肉附着して上肢の運動をなす。〇うでまへ。伎倆。〇ちから。腕力。「―立て」。〇「うでぎ」などの稱。 ——おし[腕押](名) 一種の遊戲。兩人腕をたて掌を握(ニギ)りあひて、互に押しあふこと。 ——ぎ[腕木](名) 一端に於てのみ支へて、横に突出せしめ、其上に物をおき、しむる材。(桁)。 ——くび[腕首](名) てくび。たゞむき。(手頸)。 ——ぐみ[腕組](名) 兩の腕を胸のあたりにて組むこと。 ——くらべ[腕競](名) うでずまふ。又は、ちからをくらべあふこと。 ——こき[腕扱](名) 伎倆の特にすぐれて居ること。又、其人。 ——[illegible](名) 腕力によりて、人とわざなどに、腕をくらべあふこと。 ——だて[腕立](名) 〇ちからを恃み居ること。 ——だめし[腕試](名) ちからをためすこと。 ——づく[腕盡](名) 〇腕のかぎりをつくすこと。

うで-ぬき[腕貫](名) かひなに付くる裝飾、環狀をなし腕をつらぬき入るゝもの。うでわ。(釧)。

うでの-つかひ[討手使](名) 討手にさしむくる使者。つかひざう。

うで-び[腕引](名) 一種の遊戲、互にうでのかがみに、一本の手拭などの端を挾みて、これを引きあふこと。

うで-まくり[腕捲](名) 腕を露ふ若物の袖口をまき上ぐること。(擐臂)。

うで-まへ[腕前](名) てなみ。わざまへ。

うで-まもり[腕守](名) うでぬきに神佛の守り札を入れたるもの。

うで-わ[腕輪](名) うでの裝飾にはむる環。うでぬき。

(うてる)(自、た下一) 〇氣をまるる。けおさるる。まく。〇くさる。すゆ。

(うでる)[茹](他) 「ゆでる」の訛。

うてん[雨天](名) 雨の降るそら。あめふり。あまぞら。「日々―續くし」。 ——じゅんえん[雨天順延](名) 集會などにて、かねて期したる當日雨天なれば其翌日にのばし、其翌日また雨天なれば其翌々日にのばすこと。

(うと)[烏兎](名) (金烏即ち日と玉兎即ち月との義)日月。光陰。としつき。

うど(名) 【植】(い)五加(ウコギ)科に屬する草本、葉は通常二回羽狀複葉をなす、春の頃、嫩(ワカ)き莖を採りて食用に供す。(土當歸)。(ろ)「うどめ」の略言。

うと-うと(名、副) 〇ねむりを催すさまにいふ語。〇心物事に疎くなれたるさまにいふ語。

うと-うと-し(形、二) きはめてうとし。えたしく無し。

うとう-やすかた(名) 【動】游水類中海鳩類に屬する鳥、小鴨大にして頸長く色蒼黑、嘴根部に赤色の瘤狀物あり、嘴脚共に茶褐色を帶ぶ、腹部は白色なり、北國の海濱に産す。(善知鳥)。

(うとく)[有德](名) 〇徳あること。〇いうふく。ぶげん。

うと-し[疎](形、二) 〇久しく交通せず。〇むつましからず。〇したしからず。〇ふあんないなり。まはりどほし。くらし。

うど-ねり[內舍人](名) 〇古昔、中務省に屬せし帶劍侍衞の職。〇今時は、東宮職及主殿寮の最下級の官屬。

うどの-あし[鵜殿葦](名) 【植】葦の一種、攝津鵜殿に生ず、此葦を篳篥(ヒチリキ)の簧(シタ)に用ふ。

(うどの-たいぼく)[獨活大木](名) 身體人にすぐれて大なるも、役に立たざるものをあざけりていふ語。

＋うと-ぶ[疎](他、は四) 「うとむ」に同じ。

＋うと-ま-し[疎](形、二) うとむべし。きらはし。

うと-み[疎](名) うとむこと。

うと-む[疎](他、ま四) 〇きらふ。〇忌みきらふ。〇遠ざく。つれなくす。

うど-め(名) 〇うどの萌芽、食物のあへしらひに用ふ。〇【植】五加(ウコギ)科に屬する木、多數の太き刺を有し、葉は二回羽狀複葉なり、嫩枝は食用に供せらる。たらのき。(楤木)。

うど-もどき[獨活擬](名) 【植】「うどめ」の(二)に同じ。

うどん[饂飩](名) うんどん。(切麵)。 ——こ[饂飩粉](名) 「うどんのこ」に同じ。 ——どうふ[饂飩豆腐](名) 「はちはいどうふ」に同じ。 ——のこ[饂飩粉](名) 小麥の粉、おもにうどんを製するに用ふる故に此名あり。 ——ぶるひ[饂飩篩](名) うどんのこをふるふ篩(フルヒ)。

ウドン-げ[優曇華](名) ㊀(「ウドン」は梵語 Udumbara (優曇跋羅)の略、靈瑞又は瑞應と譯す)想像上の植物、芽出て、一千年、蕾をふくみて一千年、花開きて一千年、都合三千年に一たび花を開くものにして、此花の開くとき、金輪王出現すといふ。㊁菩薩の花の異稱。㊂[動]くさかげろふ蟲の卵が、他物に附着したるもの、稈、莖部ありて恰も花の咲きたる如きが故に此名あり。

うぜん・ず[疎](他、さ變) うとむ。

[うな](名)【動】(い)「うなぎ」の略言。(ろ)「ふな」の訛。

うな—[頸](接頭) 或語に冠してうなじの意を表はす。「—垂る」

うな—[海](接頭) 或語に冠してうみの意を表はす。「—原」。

サうな-がけ・る[項掛](自、ら四) ㊀うなじに手をかく。㊁共たしみあふ。

うな-がし[促](名) ㊀うながすと。㊁卄收稅吏。

うな-が・す[促](他、さ四) ㊀もよほし立つ。さいそくす。いそがす。せつく。㊁租稅を取り立つ。

サうな-が・す[項掛](他、さ四) うながける。

サうな-かぶし(名) うなかぶすと。

サうな-かぶ・す(自、さ四) ㊀うなじをたれかたむく。㊁憂慮す。しんぱいす。

サうな-がみ[項髮](名) たてがみ。うしろがみ。

うな-がみ-ど[海上砥](名) 一種の砥石、北賀祖し、下總國銚子邊より出す。

う-なぎ[鰻](名)【動】無腹鰭類中うなぎ科に屬する魚、淡水に産す、形蛇に似て腹白し、多く蒲燒きにして食ふ。むなぎ。をなぎ。うなまろ。うなと。(鰻、鱺)。——かき[鰻鉤](名) 鰻を捕るに用ふる漁具、長き柄に「て」の字形の鉤をつけたるもの、水底をかきて、鰻を鉤にかけ捕る。——ざる(名) うなぎをいるゝざる。——どんぶり[鰻丼](名)「うなぎめし」に同じ。——の-かばやき[鰻蒲燒](名) 一種の料理、鰻を背開きにして、たれをつけて燒きたるもの。——のぼり[鰻登](名) 物の多く倍數となりて、殖(フ)え行くと。——めし[鰻飯](名) 丼(ドンブリ)に飯を盛り、其上にうなぎの蒲燒きをのせたるもの。

サうな・ぐ(他、か四) 項(他、か四) うなじにかく。

うな-こぶ[項瘤](名) 牛の項にある肉塊、犂を受くるところ。

サうな-ざか[海境](名) 海の限界。「—をすぎ」

うな-さ・る[魘](自、ら下二) 夢の中に恐ろしき物事に魘はれて、おぼえず聲を立つ。

[うなされる][魘](自)「うなさる」の訛。

うな-じ[項](名) 頭の後方なる下部、ぼんのくぼ。えりくび。くびすぢ。(頸)。

うな-だ・る[項低](自、ら下二) うなじをたる。頭を垂る。(低頭)。

うな-づ・く[頷](自、か四) 承諾の意を表して、頭を前へ動かす。首肯す。(點頭)。

サうな-で(名) 田にひく用水の溝。(池溝)。

う-なは[鵜繩](名) ㊀鵜飼ひ人の鵜をあやつるために、鵜の首へつくる繩。㊁一種の漁具、鵜の羽又は艦褸(ボロ)などを繩につけて、魚を驅(カ)るに用ふるもの。

うな-ばた[海邊](名) うみのへり。

うな-ばら[海原](名) ひろびろと見えわたる海上。(滄海)。

うなひ[耕](名) たがやすと。

うな-ふ[耕](他、は四) 鋤鍬を以て田畠を起しうねをこしらふ、種子をおろして土を覆ふ。たがへす。たがやす。

うな-べ[海邊](名) うみのほとり。

うな-め[畦目](名) よろひのおどし絲の並びて、田畠のうねの如く目をあらはしたるもの。

サうな-や[檻](名) こうや。ひとや。ごくや。

うなり[唸](名) ㊀うなると。うめくと。(呻吟)。㊁[理]高低浮沈の音響、即ち、音波が濃厚なる部と稀薄なる部と錯綜交錯して、耳に高低浮沈ある音の感覺を起すもの。「鐘の—」。㊂紙(タコ)につけて風にうならするもの、多くは鯨の鬚又は籐の皮を薄くして、小さき弓に掛けてはる。(風箏)。——ごゑ[唸聲](名) うなる聲。うめきごゑ。

うな・る[唸](自、ら四) ㊀なやみて聲を發す。くるしみうめく。㊁高低浮沈ある音響を發す。

サうな-わ・く[瞑沸](自、か四) 股(モヽ)出づ。

サうなゐ[髫髮](名) ㊀幼少なる男女の結びたる髮を後へ垂れたるもの。㊁うなゐにむすびたる子供。㊂こども。幼童。——ばなり[髫髮放](名) うなゐ髮をあげず、雖々と散らしておくと。——こ[髫髮子](名) うなゐご。子供。——まつ[髫髮松](名) 墓の標に植うる小さき松の稱、幼兒の髮の如く、松葉の不規律に雖々たるより名づく。——をとめ[髫髮小女](名) 髮をうなゐにむすびたる少女。

うに[海栗](名)【動】海膽類に屬する棘皮動物、圓形幅狀の介殼は黑紫色をなし、長棘叢生す、海濱の岩礁上に多く見る所なり、其卵巣を鹽藏して雲丹(ウニ)と稱し珍重す。(海膽)。

ウニウ(名)【動】(「アイヌ」語 Uneu)「もっとせい」の稱。

ウニコール[Unicorn](名)【動】「いっかく」(一角)に同じ。

うに-つぼ[海栗壺](名) うにの介殼。「んぢ」。

[うぬ][汝](代) 輕蔑の意を含む對稱の代名詞。なんぢ。

うぬ-ぼ・る[自惚](自、ら下二) わけもなく自ら慢じ自ら恃む(タノ)。自ら多とす。

うぬ-ぼれ[自惚](名) うぬぼるゝと。(自多)。——かがみ[自惚鏡](名) 其容貌を實際のものよりよく見する鏡。

[うぬぼれる][自惚](自)「うぬぼる」の訛。

[うぬ-ら][汝等](代) 輕蔑の意を含む對稱の代名詞、なんぢら。

うね[畦](名) 田畑の中に土をもりたてゝ長くつゞけたるもの。(隴)。

ウネウ(名)(「アイヌ」語 Uneu)「おっとせい」の稱。

うね-うね[畝畝](名) 各所のうね。

うね-うね[畝畝](名、副) 高低屈曲のさま又は波のよせくるさまにいふ語。

うね-おり[畝織](名) 織物の名、畑のうねの如く凸に絲をあらはして織りたるもの、羽後國秋田の名産なり。(白羅布)。

うね-くね(名) ㊀うねくると。㊁彼是交錯して、凸凹をなすと。

うね-く・る(自、ら四)「うねる」に同じ。

[うねくれる](自)「うねくる」の訛。

うね-ざし[畝刺](名) 絲を浮かべて、恰も田畑のうねの如く縫ひ刺すと。——たび[畝刺足袋](名) うねざしにしたる足袋。

サうね-べ(名)「うねめ」に同じ。

サうね-め[采女](名) 古昔、後宮にて、御膳の事に預かりし女官の稱、郡の少領以上の姉妹の容貌端正なる者より采(ト)られたり。——のかみ[采女正](名) うねめのつかさの長官。——のかみ[采女正](名) 前條に同じ。——のつかさ[采女司](名) 古昔、宮内省に屬し、采女の檢校をつかさどりしもの。

うねり(名) うねると。「波の—」。(蜿蜒)。

うね・る(自、ら四) 或は上下に或は左右に彎曲す。うねくる。うねくれる。(蜿蜒、紆行)。

うの-あし-がひ[鵜脚貝](名)【動】よめがさらの類、介殼陣笠狀にして螺旋部なく、多く海濱の岩石に附着す、形鵜の脚に似たれば此名あり。

う-の-け[兎毛](名) ㊀うさぎの毛。㊁極めて小なる物事にいふ語。「—ほども知らず」。(秋毫)。

う-の-はな[卯花](名) ㊀うつぎの花。(水晶花)。㊁かさねの色目、表は白く、裏は青し。㊂とうふのかす。きらず。——おどし[卯花威](名) 白き絲にておどしたる鎧。——くたし[卯花腐](名) 春雨と梅雨との間にふりつゞく雨。——づき[卯花月](名) 陰曆、四月の異稱。——づきよ[卯花月夜](名) 卯の花の白くさきみちたるさまを、月の影になずらへていふ語。——なます[卯花膾](名) 上に湯びきの魚肉又はもろし大根をふりかけたるぬたなます。——やき[卯花燒](名) 鯛を燒き酢をかけて、豆腐のからをふりかけたるもの。

う-の-ふえ[竽笛](名)「う」(竽)に同じ。

うのまねをするからす 人を眞似(マ)て、がらにもなき事をなすもの、末は失敗に終るを、鳥が鵜をまね水に入りて溺るゝにたとへていふ。

[う-のみ][鵜呑](名) 鵜の如く、物をたやすく呑み込むと。まるのみ。をのみ。

うのめ-たかのめ[鵜目鷹目](名) 鵜又は鷹の魚をあさるにたとへて、人の熱心に物をさがし出さんとするさまにいふ語。

うのめ-ゆわう[鵜目硫黃](名) 硫黃の一種。

うは—[上](接頭) 或語に冠して「うへ」「はじめ」などの意を表はす。「—ずみ」。

うば(名) ㊀おほば。祖母。㊁老いたる女、らうぢよ。(嫗、姥)。㊂めのと。乳母。

うば[豆腐皮](名) 一種の食品、豆腐の汁に灰汁を入れ、これを煮て、上に生じたる薄皮を採りて乾したるもの。ゆば。

うば-あいさ[姥秋沙](名)【動】あきさの一種、目の上に黑線あり。

(う-ばい)[烏梅](名) ふすべ梅、染料或は藥料に供せらる。

ウバイ[優婆夷](名)(梵語 Upasika)佛道に入りたる在家の女。優婆塞の對。(信士女)。

(うはら-どうじ)[雨寶童子](名) 天照大神の垂跡にいふ。

うは-うは[上上](名、副) 氣の逆上して、落ちつかぬさまにいふ語。

サうは-おそひ[上襲](名) 中の着物をよごさぬためにきるおほひのうはぎ。

うは-おほひ[上覆](名) 物の上にかけて、其物をおほふもの。うはっぱり。(外被)。

うは-がき[上書](名) 書狀・はこ・書物などの外面に書く文字。

うは-かすみ[上霞](名) 薄くたなびきて見ゆる「うかすみ」。

うはが-ねさう(名)【植】「うばがねもち」に同じ。

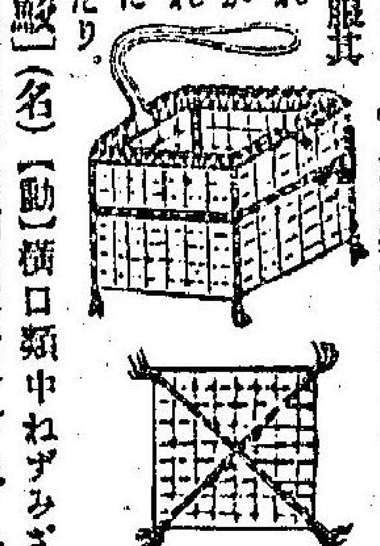
うばが-ねもち(名)【植】紫金牛(ヤブカウジ)科に屬する灌木、葉細く、長さ三四尺、實圓し。(杜莖山)。

うは-かは[上皮](名) ㊀皮の上にある皮、あまかは。㊁上のおほひ。㊂うはべ。そとがは。

うは-かは[上側](名) へうめん。うはつら。

廿うは-がひ ウワガイ [上交](名) うはがへ。うはまへ。
うば-がひ ウバガイ [姥貝](名) 【動】あかゞひの一種、肉は食用に供せらる、多く常陸より產出す。
うは-がへ ウワガエ [上換](名) 「うはっぱり」に同じ。
うは-がみ ウワ [上紙](名) 書冊などのへうし。
〔うは-き ウワ [浮氣](名) うつりやすき氣性。
うは-ぎ ウワ [上着](名) 表面に着る服。(表着、上衣)。
廿うはぎ(名) 【植】「よめな」の古名。
〔うはき-もの ウワ [浮氣者](名) 心のうつりやすき人。
うは-ぐすり ウワ [上藥](名) 陶器の上にぬり、燒きてつやを出す藥。つやぐすり。(釉)。
うば-くち [姥口](名) 老女の口の如くに、物の蓋がよく合はざると。又、器物の口の大なるもの。
廿うは-ぐみ ウワグミ [憫](名) うはぐむと。
廿うは-ぐ-む ウワ [まみむめ](自、ま四) あきる。(憫)。
うは-こと ウワ [譫言](名) ㊀熱病などに罹り、心混亂して、あるにもあらぬ言をいふと。㊁事柄をわきまへぬ放言を罵りていふ語。
うは-さ ウワサ [噂](名) ㊀世間のいひふらし、せへうふうぶん。風說。㊁其物事につきての談話。はなし。「―をすれば影。
うは-ざうり ウワゾウリ [上草履](名) 廊(ユ)下又は椽などに履(ハ)く草履。
うば-さぎ [姥鷺](名) 【動】渉禽類中鶴科に屬する鳥、嘴長くして角質なり、面部は羽毛を生ぜずして裸出せるを常とす。
うば-ざくら [姥櫻](名) ㊀【植】さくらの變種、花は八重、瓣大し。㊁年よりたる女。
うは-ざし ウワ [上差](名) ㊀古昔、えびらの左の方にさしゝ二筋の矢、鏑箭(カブラヤ)又は雁股(カリマタ)なるを規定とせり。㊁直垂(ヒタヽレ)・狩衣(カリギヌ)の袖などに、九緒・組緒などにてほどこすかざりぬひ。(上刺)。

うはざし-ぶくろ ウワ [上刺袋](名) 古昔、人の出で行くとき、衣服其他の要具を入れて從者にかつがせたる袋、破れざる樣に、糸にて其上をさしたり。



[うはさしぶくろ]

うば-ざめ [姥鮫](名) 【動】横口類中ねずみざめ科に屬する魚、體は延長し、齒は微小にして多く、皆圓錐狀にして尖頭なし、前脊鰭は大にして胸腹兩鰭の間に對す、體長六七尋、海洋を横行し、他の魚群を趁ひ、時には人類を犯すとあり。うばぶか。
うは-じき ウワ [上敷](名) ㊀鞍の上に敷く布。くらしき。㊁すべて物の上にしくもの。
うば-しぎ [姥鷸](名) 【動】しぎの一種、全身は淡灰紫色にして黑き斑點あり。

[うばまぎ]

うは-しる ウワ [上液](名) うはずみ。
〔うは-すべり ウワ [上滑](名) うはくしして物事に注意のたらぬと。
うは-ずみ ウワ [上澄](名) 流動物の上方のすみたる部分。うはしる。
〔うは-ずる ウワ [らりるれ][上擦](自、ら四) ㊀かろ〲しく浮くやうにあり。「調子が―」。㊁言のみ親實らしくして心淺薄なり。
ウバソク [優婆塞](名) (梵語 Upasaka)俗家にありて、佛門に入りたる男子の稱。優婆夷の對。(信士男)。
うば-たま [烏羽玉](名) 一種の菓子、餡を包みたるぎうひの上に砂糖をかけたるもの。
うば-たま-の [烏羽玉](枕) 「ぬばたまの」に同じ。
うは-ちどり ウワ [上千鳥](名) 【動】「みやこどり」の一名。
〔うは-つ-く ウワ [かきくけけ][上付](自、か四) うはきになる。うはうはす。
うは-づつみ ウワ [上包](名) 物の上のおほひ。うはおほひ。
〔うはっ-ぱり ウワ [上張](名) 衣の汚るゝを防ぐために、其上に被ひ着る衣服。
〔うは-つら ウワ [上面](名) うはべ。うはかは。へうめん。
うは-て ウワ [上手](名) ㊀上の方。㊁風の吹き來る方。かざかみ。㊂技藝・智力などの優りたると。
――すかし [上手透](名) 相撲の四十八手の一、敵の腕をだきこみ、頭を敵の胸にあてゝひねると。
――なげ [上手投](名) 相撲の四十八手の一、うはてより敵の廻しのみつをとり、身をひねりながらなげをうつと。
〔うは-てうし ウワチョウシ [上調子](名) ㊀おちつかぬてうき。うはてうき。㊁性質浮薄なると。言葉のみ巧みにて其質無きと。
〔うは-でうし ウワヂョウシ [上調子](名) 「うはてうき」に同じ。
うは-なみ ウワ [上波](名) 水面にたつ波。
廿うは-なり ウワ [後妻](名) 後に娶れるつま。こうさい。ごさい。――うち [後妻打](名) 古昔、夫が妻を離緣して、直に後妻を迎へたるとき、先妻が親族どもと諸共に、後妻の家をおそひしと。
うは-に ウワ [上荷](名) ㊀馬の上に付くる荷。㊁運送する荷物の上部のもの。――ぶね [上荷船](名) 埠頭(ハト)に着くときに、荷物のみを積みて岸につくる小舟。はしけぶね。
うは-ぬり ウワ [上塗](名) ㊀中ぬりしたる壁の上

に更に土をぬると。㊁物事のある上に更に添へ加ふると。「恥ぢの―」。
うは-の-そら ウワ [上空](名) うちやうてん。
うは-のり ウワ [上乘](名) 舟につみたる荷につき添ひて、其荷を守りて送ると。又、其人。
うは-は ウワ [上端](名) 上になれる餘分の端數、一圓十五錢といへば、十五錢は一圓のうははなり。
うは-ば ウワ [上齒](名) 上の齒ぐきにつきたる齒。
うは-ば ウワ [上葉](名) 上方にある木葉。
うは-はげ ウワ [上剝](名) ぬりものなどの上のはげたると。
うは-ばひ ウワバイ [上這](名) 表面に出でゝ這(ハ)ひあるくと。
うは-ばみ ウワ [蟒](名) 【動】(上蛇(ヘミ)の轉なりといふ)(い)蛇類中闊口類に屬する爬蟲、印度に產す、形大にして口を鉛大に開く、肛門の兩側に後肢の痕跡あり、無毒なり。(ろ)巨大なる蛇の汎稱。をろち。だいじや。(巨蟒)。
うは-はれ ウワ [上腫](名) 上部のはれ。
廿うは-ひ ウワ (名) 一種の眼病。そこひの對。(外障眼)。
〔うは-ひげ ウワ [上髭](名) 脣の上にあるひげ。
うば-ふ ウバウ [はひふへ][奪](他、は四) ㊀掠(カス)め取る。ぬすみとる。㊁沒收す。剝奪す。とりあぐ。「官を―」。㊂君を除きて其位に卽く。(簒)。㊃心氣を失せしむ。「膽を―」。
うば-ぶか [姥鱶](名) 【動】「うばざめ」に同じ。
うは-ぶち ウワ [上扶持](名) 扶持に同じ。
廿うは-ぶみ ウワ [上文](名) へうだい。だいもく。
うは-べ ウワ [上邊](名) ㊀表面になりたる所。おもて。へうめん。ぐわいめん。㊁あらは。みえ。
うば-ほほ [姥頰](名) 具足に屬する頰あての一種。
うは-まへ ウワマエ [上前](名) ㊀着物などの前を合はして、其表の方になる部分。㊁取り次ぐ代金などの幾分。「―をはねる」。
廿うは-み ウワ [裮](名) 古昔、袴の上に着したる一種の裳(モ)の如きもの。
うは-みぞ-ざくら ウワ (名) 【植】櫻の一種、樹は平滑なり、木材は種々の用に供せらる。
うは-みづ ウワ [上水](名) うはずみの水。――ざくら(名) 【植】「うはみぞざくら」に同じ。
うは-むき ウワ [上向](名) ㊀上に向ひたると。あをむき。㊁うはべ。ぐわいけん。
うは-むしろ ウワ [上蓆](名) ねどこの上に敷くむしろ。ござ。
うは-め ウワ [上目](名) ㊀瞳(シ)を上へ向けたる目。「―に人を見る」。㊁秤竿に記したる點を標準とすると。むかふめの對。
うば-め [姥目](名) 【植】殼斗科に屬する木、葉は潤くして鋸齒を有す、夏の頃黃色の花を垂れひらく。――がし [姥目樫](名) 【植】「うばめ」に同じ。――がしは シワ [姥目柏](名) 【植】「うばめ」に同じ。
廿うは-も ウワ [上裳](名) 裳(モ)の上に更に着くる裳。
廿うは-もり ウワ [上盛](名) きはめて上になるべきもの。第一流。
うは-やく ウワ [上役](名) 上に立つ役人。
うば-ら [荚](名) 【植】「いばら」に同じ。――たつわ [茨蒺衡](名) 唐鞍を用ふるときの馬の轡。
うは-ゑ ウワエ [上繪](名) 布帛などの染色の上に、更に繪の具もて書き添へたる繪。「半襟の―」。――かき [上繪書](名) うはゑを描くと。又、其人。――や [上繪屋](名) 上繪をする家。うはゑや。
廿うは-を ウワオ [後夫](名) のちのをっと。うはなりの對。
〔うはん-まへ ウワンマエ [上前](名) 「うはまへ」の訛。
うひ ウイ [初](名) はじめ。「―の子もち」。
うひ― ウイ [初](接頭) 成語に冠してはじめての意を表はす。「―孫」。
廿うひ-うひ-し ウイウイ [しくしきしけれ][初初](形、二) はじめてらし。初心らし。物なれぬさまなり。
廿うひ-かうぶり ウイコ [初冠](名) げんぶくして、始めてかんむりを着くると。
うひ-ご ウイ [初子](名) 始めて生まれたる子。うひざんの子。(初生子)。
うひ-ざん ウイ [初產](名) 始めての出產。はつざん。
廿うひ-だち ウイ [初立](名) うひだつと。
廿うひ-だ-つ ウイ [たちつてて][初立](自、た四) 始めて起つ。
うひ-たび ウイ [初旅](名) 始めての旅行。はったび。
うひたひ-の-むま ウイ [兎額馬](名) 額白き馬。
廿うひ-ぢ ウイ [泥土](名) どろ。
うひ-ぢん ウイ [初陣](名) 始めて戰場に出づると。「若武者の―」。
うひ-まご ウイ [初孫](名) はじめてのまご。
うひ-まなび ウイ [初學](名) ㊀學問を修めはじむると。㊁未熟のがくもん。志よがく。
廿うひやう-ゑ-の-かみ ウヒョウエ [右兵衞督](名) うひやうゑふの長官。
廿うひやう-ゑ-ふ ウヒョウエフ [右兵衞府](名) 衞府の一、兵衞を檢校し、車駕の出入などを主(ツカサ)どりし府。
(う-ふ [右府](名) 右大臣の異稱。
〔うぶ [初](名) ㊀うひ〲しきと。㊁婦人の初心なると、未だ男子に從せざると。「―のきむすめ」。
うぶ-がみ [胎髮](名) うぶげ。
うぶ-がみ [產神](名) うぶすながみ。

うぶ-ぎ[産衣](名) 生まれたる子に、始めて著するきもの。
うぶ-ぎぬ[産衣](名) 「うぶぎ」に同じ。
うぶ-げ[産毛](名) 子の生まれたるときはへある髮。(産髮)。
うぶ-ごゑ[産聲](名) 子の生まれて始めて出す聲。
うぶ-すな[産土](名) ㊀人の生まれたる本土。㊁「うぶすながみ」の略言。 ――-がみ[産土神](名) うぶすなを鎭護する神。 ――-まゐり[産土神詣](名) 子生まれて百ケ日にあたる日、うぶすなの神に參詣すること。みやまゐり。
うぶ-ち[産血](名) 婦人が小兒を生むときに出づる血。
う-ぶね[鵜舟](名) 鵜がはにつかふ小舟。うかひぶね。
+うぶ-の-かみ[産神](名) 「むすぶのかみ」に同じ。
うぶ-め[産女](名) (生女の義) ㊀はらみをんな。㊁さんぷ。產をする女。 ――-どり[産女鳥](名) 想像の鳥、鵼(ヌエ)天のもの、又は鷺に似て其聲小兒の泣き聲の如しともいふ。
+うぶ-や[産屋](名) 古昔、子を產むために、新につくりし家。さんおや。
うぶ-ゆ[産湯](名) うまれたる子に、はじめて入浴せしめ、けがれを洗ひおとすこと。(洗兒湯)。
+うぶ-やしなひ[産養](名) 古昔、子を生みてより三日目及五日目の晩などに、いはひをなしゝこと。
うぶ-ゐ[産井](名) うぶゆの水をくみとる井戸。
(うぶん-ぼく[烏文木](名)【植】「こくたん」の唐名。
うへ[上](名) ㊀高き所。高き位。㊁へうめん。うはつら。㊂いたゞき。かしら。㊃かたはら。ほとり。㊄おもて。まへ。㊅すぐれたること、たふときこと。㊆加ふること。そふること。「其―」。㊇至尊。主上。㊈朝廷。宮禁。㊉將軍。公方。⑪貴人又は其内室。⑫政府。官廳。⑬仰ぎいたゞくものゝ汎稱。めうへ。⑭貴婦人の稱號に添へ用ふる語。「奚の―」。⑮めうへの稱號に添へ用ふる語。「父―」「兄―」。⑯其物事につきていふ語。「身の―話」。
+うへエウ[筌](名) 魚をとる道具、ほそき竹をあみてつくりたるもの。(笥)。
+うべ(名)【植】「むべ」の古名。
+うべ[宜](名) 實に然ること。さもあるべきこと。むべ。
+――-うべ-し しくしくしきしけれ[宜宜](形、二) ㊀もっともらし。㊁尊貴めきてあり。おつらし。
うへ-さまウエ[上様](名) 德川時代に、其幕下のもの、將軍をさしていひし語。
+うべし-とそ[宜](副) もっともにて。だうりて。
うへだ-おほぢウエ[上田縞](名) 信濃國上田地方より產するつむぎ縞。
うへ-つ-かたウエ[上方](名) 身分貴き人。(貴戚、貴紳)。
+うへ-つぼねウエ[上局](名) 殿上の局の稱。
うへ-な-しウエ[上無](形、一) ㊀それより上のものなし。それにこゆるものなし。㊁きりなし。かぎりなし。
うべな-ふ[諾](他、は四) うけこむ。まようちす。うけがふ。(肯)。
+うべな-む[諾](他、ま四) うべなふ。
うへ-の-きぬウエ[袍](名)
うへ-の-はかまウエ[表袴](名) 束帶のとき上につくる袴、地質は絹・綾、表は白色にして、裏は赤色、表に模様あるは、位高き人の著しもの。

[うへのはかま]

+うへ-びとウエ[上人](名) てんじやうびと。
+うへ-ぶしウエ[上臥](名) 禁中のとのゐ。
+うへ-わらはウエワラハ[上童](名) 殿上にてつかはるる女子。
(う-ぼく[烏木](名)【植】「うぶんぼく」に同じ。
ウボン-さい[盂盆齋](名) 「ウラボン」の一名。
うま[馬](名) ㊀【動】奇蹄類に屬する大形の獸、第三趾中にて中指のみ發達し、指趾の半端は蹄を被り、これを以て地を踏む、鬣あり、前齒は上下各六枚あり、これを數へて其老少を知る、從來高さ四尺を通例とし、それ以上は寸を以てはかる、力ありて足はやく、主要なる家畜の一なり、物をはこび車をひく等用最も多し。㊁雙六の駒(サ)の名。㊂將棊のこまの名、けいま。㊃遊女屋などにて、遊興費の支拂不足なる嫖客にしたがひ行きて、其不足額を受取るもの。
うま[午](名) ㊀十二支の一、第七位。㊁巳と未との間、南の方。㊂古昔の時刻の名、今の晝の十二時。(敦祥)。
うま―[馬](接頭) 或語に冠して其種族の中にて大なるもの、意を表はす。「―びる」「―ぜり」。
うま―[甘](接頭) 或語に冠して味うまき意を表はす。「―ざけ」。
うま-あぶ[馬虻](名)【動】「うまばい」に同じ。
+うま-い[熟寢](名) よくねること。こゝろよくねむること。おゆくすゐ。
うま-いくさ[馬軍](名) 騎馬兵のたゝかひ。(騎戰)。
うま-いしや[馬醫者](名) 馬の病をなほす醫師。うまくすし。ばい。(馬醫)。

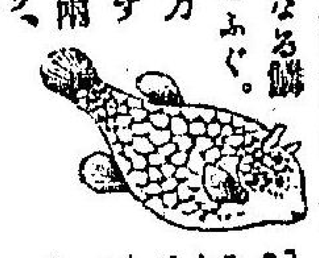
(うまい-しる[甘汁](名) ㊀味よき汁。㊁他人の陰によりて受くる利益。
(う-まうウモ[羽毛](名) 鳥のはねと毛と、即ち鳥の皮膚に生じて皮膚を被へる表皮の化成物、羽は中央に軸ありて下部は皮膚に入り上部は羽枝分叉し、其末端は鉤ありて相絡連す、毛と共に體溫の散を防ぐもの。
(うま-うど[馬獨活](名)【植】「おしうど」に同じ。
(うま-うま[甘甘](名) うまきもの。(小兒の語)。
(うま-うま[甘甘](副) たくみに。おやうずに。
うま-おひオヒ[馬逐](名) ㊀駄馬をつかふこと、又、其人。㊁【動】「うまおひむし」の略言。 ――-むし[馬追蟲](名)【動】直翅類中螽蟖(コホロギ)科に屬する小蟲、夏日燈火を慕ひて家屋に來り、特有の鳴聲を發す、形やぶきれに似て小なり。
うま-かけ[馬駈](名) けいば。
うま-かた[馬方](名) 駄馬を曳(ヒ)くを職業とする者。まご。ばくらう。
うま-かひカヒ[馬飼](名) 馬をかふ人。
(うま-がほガホ[馬顏](名) 長き顏を嘲りていふ語。
(う-まき[鵜巻](名) 鵜の多くあつまりて、魚をとりまき漸次に岸へおしよすること。
うま-ぎぬ[馬衣](名) 馬にきする著物、多くは、紺又は萠黃(モエギ)の木綿に、其家の定紋を染めぬきたるもの。(馬衲)。
うま-ぐし[馬櫛](名) 馬の毛をすく櫛。うまはけ。
+うま-くすし[馬醫](名) うまいしや。ばい。
うま-ぐはクハ[馬鍬](名) 農具の一、下部の橫木に數箇の齒ありて、田を掘き返したる後に、地を攪(カ)きならすに用ふ。まぐは。
うま-げた[馬下駄](名) 「こまげた」に同じ。
うま-けむり[馬烟](名) 馬荒り地をけりて起す塵ほこり。(馬塵)。
+うま-ご[孫](名) まご。
うま-ごやし[馬肥](名)【植】荳(マメ)科に屬する草、托葉は細裂し、花柄は短く少數の黃花を生ず、果實は螺旋狀にして毛狀の突起を具す、肥料及馬の食料に供ぜらる。(苜蓿、連枝草)。
+うま-ごり-の[美織](枕) (うまくおりの義)「あや」に冠らする詞。
+うま-ざくり(名) どろなどの中にのこる馬のあしあと。
うま-ざけ[甘酒](名) うまき酒。
うま-ざし[馬差](名) 宿驛にて人馬を差圖する者。(傳吏)。
うま-し くしくしきしけれ[甘、美](形、二) ㊀感じて快し。このまし。こゝろよし。㊁味好(ヨ)し。㊂たくみなり。おゆくれんしてあり。てぎはよし。
+うま-し-くに[美國](名) (美なる國の義) 古昔、大和國をほめていひたる語。
うま-じるし[馬章](名) 古昔の武具の一、大將の馬の側にたてゝ、軍中の目じるしとしたるもの、「記號」。
+うま-ずめ[不産女](名) 子をうまぬ女。「石女」「石嫗」。
+うま-ぜみ[馬蟬](名)【動】「くまぜみ」に同じ。
うま-ぜり[馬芹](名)【植】「やまぜり」に同じ。
うま-ぞひソヒ[馬添](名) 馬に乘りたる人のともびと。馬のくちとり。うまつき。(馬丁)。
うま-だし[馬出](名) 城門外に更に一廓をなす處。(副城)。
うま-たて[馬立](名) うまつなぎ。(廐)。
うま-だらひダライ[馬盥](名) ばだらひ。
うま-つき[馬付](名) うまぞひ。
うま-つぎ[馬繼](名) 道中にて馬をつぎかふる所。うまや。(驛)。
うま-つなぎ[馬繫](名) 馬をつなぐもの。うまたて。とつなぎ。 ――-ば[馬繫場](名) 馬を繫ぐところ。
(うま-づら[馬面](名) 「うまがほ」に同じ。
+うま-に[馬荷](名) 馬につくる荷物。
うま-に[旨煮](名) 一種の料理、肉と野菜類とを味醂・砂糖・醬油・鰹節などにて、風味よく煮つけたるもの。
うま-ぬすびと[馬盜人](名) ㊀馬をぬすむ賊。㊁【動】「あかめだひ」の一名。
(うま-の-あし[馬脚](名) 下等の役者を嘲りていふ語。
+うま-の-かみ[右馬頭](名) 古昔の官名、みぎのうまのつかさの長官、馬の飼養等をつかさどりしもの。
+うま-の-かみ[馬頭](名) 古昔、うまのつかさの長官、又、皇太子の馬をつかさどりしもの、名。
+うま-の-きぼね[馬牙骨](名) 馬の下あごの稱。
+うま-の-くぼ-がひガイ[馬陰貝](名)【動】「こゝすがひ」に同じ。
うま-の-す[馬尾](名) 馬の尾の毛。
うま-の-すずくさ[馬鈴草](名)【植】馬兜鈴科に屬する上昇木本、鍾頭長心形の全邊葉と、上部黑紫色にして下部綠色なる萼とを有す、花は不整齊なり。(馬兜鈴)。
+うま-の-たま[馬玉](名) 馬の腹中に生ずる石塊の如きもの、鼠色又は茶色にして、これを斷ち截れば涸の模樣あり。「ヘイサヲパサラ」「ドウサラパサラ」、せきふん。(馬糞)。

十**うまのつかさ**[馬寮](名) 古昔、兵衛府に屬し、馬の飼養其他馬に關係したる一切の事をつかさどりし寮。めれう。
うまのつめ[馬爪](名) ばづ。
十**うまのはなむけ**[餞別](名) 旅に行く人を送りて、其人に物をおくるを。古昔は、其人の乘れる馬の鼻に向けて、物をおくりしよりいふ。はなむけ。
十**うまのほね**[馬骨](名) 素性不分明なる人を嘲りていふ語。
[**うまのみみ**[馬耳](名) 人に意見などせられても、更にとりあはぬと。——**にかぜ** 馬は耳に風を受くとも感ぜぬを、人の意見に少しも感ぜざるにたとへいふ。——**にねんぶつ** 馬は念佛を聞くとも更に感ぜぬを、人の意見に少しも感ぜざるにたとへいふ。
うまのめ[馬目](名) [植]泡吹科に屬する灌木、綠色の枝を有し、花瓣は黃色にして五個あり、雄蕊は五個ありて皆完全なり、觀賞用として栽培せらる。
うまのり[馬乘](名) ㊀馬に乘ると。又、其人。㊁馬に乘るが如きさまに、物にまたがると。——**ぞめ**[馬乘初](名) 新年などに、始めて乘馬するを。ひめはじめ。——**ばおり**[馬乘羽織](名) 馬に乘るとき着する羽織、多くは、うしろをぶつさきにしたるもの。——**ばかま**[馬乘袴](名) 馬に乘るときの袴、十番の袴よりはまち高く襠ひろきもの。
うまば[馬場](名) ㊀馬に乘る場所。ばゞ。㊁良馬の出づる土地。「奥州は日本の—」。
十**うまはだけ**[馬刷](名) 馬の毛をはくに用ふる刷毛。うまぐし。

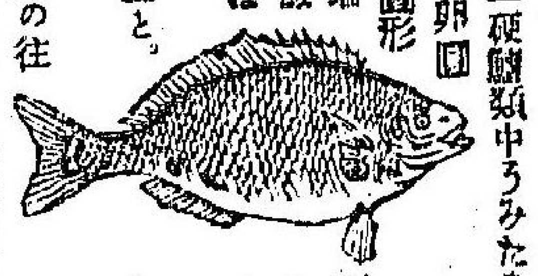
十**うまは・る** ワル(らりるる)(るれれ)[殖](自、ら四) ふえてひろがる。はんしよくす。
十**うまひと**[美人](名) 德高き人。位ある人。身分いやしからざる人。(君子、縉紳)。
うまびる[馬蛭](名) [動]環蟲類中蛭類に屬する蠕形動物、池沼溪流等に產す、體軀大にして一見恐怖を起すが如くなれど、動物の血液を吸ふものにあらず、植物質を食として生活す。
十**うまは・ふ** ウ(はひふふ)(ふへへ)[殖](他、は四) はんしよくせしむ。ふやす。多くす。
うまぶね[馬槽](名) ㊀秣(マグサ)を入るゝ桶。かひおけ。㊁大いなる桶。
十**うまふぶき**[馬蕗](名) [植]「ごばう」の古名。
うまへん[馬偏](名) 漢字の偏の名、駒・騎・驅などの字の左方にある字の稱。
うままはり サリ ーマ[馬廻](名) 昔時、武家にて、主の馬のまはりにつき添ひし武士の稱。
うまや[馬屋](名) ㊀馬を飼ひ置く小屋。(廐)。㊁旅路の便利をはかり馬又は人足などを備へ置きて、旅客の求めに應じつぎたてをなしゝ所。しゆく。うまつぎ。(驛)。——**ごえ**[馬屋肥](名) 肥料の一種、家畜を飼ひ置く假屋の中に、たまりたる糞尿と布藁との相混じたるもの、多くは先づ堆積して腐熟せしめて使用す。——**ぢ**[驛路](名) うまやのある所。えきろ。(驛馬路)。「しや。
十**うまゆみ**[馬弓](名) 馬に乘りて弓を射ると。き
うま・る らりるる るれれ[埋](自、ら四) うもる。うづもる。
うま・る るれれ るるれよ[生](自、ら下二) 子、母の腹より出づ。出生す。(誕)。
うまれ[生](名) ㊀生まるゝと。たんじやう。㊁生まれ出でし處。生國。生地 ㊂うぢ、そだち、すぢやう。

うまれあは・す (さしすす)(すせせ)[生合](自、さ四) ㊀世を同じうして生まる。㊁其時に生れ出づ。「—じ。
(**うまれうり** ロウ ーリ[右馬寮](名) 「うまのつかさ」に同じ。
うまれがはり ワリ ーガ[生變](名) 生まれかはると。又、生まれかはりたるもの。再生。(後身)。
うまれかは・る ワル ーカ(らりるる)(るれれ)[生變](自、ら四) 死にたるもの、こんぱく、再び他のものに生を變へて此世に出現す。「—と。
うまれどころ ロウ ーキャ[生故郷](名) 生地。ふるさと。
うまれつき[生付](名) 生まれつくと。生まれつきたる性質。しやうとく、せいしつ。てんせい。てんしつ。(生得、天資)。
うまれつ・く かきくく くけけ[生付](自、か四) おのづと其性に具はる。うまれながら身に受く。「び。
うまれび[生日](名) 生まれたる日。たんじやうび。
[**うまれる**[生](自) 「うまるる」の訛。
うみ[海](名) ㊀地球上陸にあらざる部分の潮水をたゝへたるところの專稱。㊁湖水など大水をたゝへたる所にもいふ。㊂水のたゝへたる所にもたとへいふ。「硯の—」。㊃物事のたゝへあつまりたる所にも假りいふ。「許下は、人物の—」。
うみ[膿](名) はれもの又はきず其他疾病によりて、皮膚筋肉の腐爛して出づる汁。うみしる。
うみ[生](名) 生むと。生みたると。「—の親」。
うみうさぎ[海兎](名) 「あめふらし」(雨虎)の(一)に同じ。
うみうし[海牛](名) [動]「うみうさぎ」に同じ。
うみうそ[海獺](名) [動]「ラッコ」の一名。
[**うみうなぎ**[海鰻](名) [動]「あなご」の一名。
うみうま[海馬](名) [動]「たつのおとしご」に同じ。(九州地方の方言)。

うみおと・す (さしすす)(すせせ)[產落](他、さ四) 子を生む。ぶんべんす。
十**うみが**[海所](名) (「が」は、所の義) 海の邊。海のあたり。
十**うみがつき**[產月](名) うみづき。りんげつ。「—もすぎ給ひて」。
うみがめ[海龜](名) [動]龜鼈類に屬する爬蟲、長さ七尺に達す、赤褐色にして甲紋十五あり、我國近海に產す。しやうかくばう。(玳瑁)。
うみがも[海鴨](名) [動]「うがも」に同じ。
うみがや[海萱](名) [植]「なぎ」に同じ。
うみがらす[海鴉](名) [動](い)「いがひ」の一名。(ろ)「うぬ」の一名。(安藝の方言)。
うみぎし[海岸](名) うみに沿ひたるきし。
うみぎは ワ ーキ[海際](名) うみべ。かいへん。
うみくちなは ワ ーナ[海蛇](名) [動]蛇類中海牙類に屬する爬蟲、有毒にして牙の前面に縦溝を有し、尾は側扁にして游泳に適す、南海に產し、琉球諸島中殊に永良布島に多く產するより「えらぶうなぎ」ともいふ。
うみごめ[海米](名) [植]「こうぼふむぎ」に同じ。
うみさうめん ウ ーソ[海索麵](名) [植]紅色藻門に屬する海草、形さうめんの如く細長く、うるはしき紅色を帶ぶ、鹽漬けにし又は乾して食すべし。
十**うみさち**[海幸](名) すなどりの利あると。
うみしか[海鹿](名) [動]「あめふらし」に同じ。
うみしじみ[海蜆](名) [動]蜆(シジミ)の一種、海に產す、介殼は黑褐又は茶褐なり。
うみしる[膿汁](名) うみ。のうじふ。
うみすぎ[海杉](名) [動]珊瑚蟲類中八放線類に屬する腔腸動物、八腕手を有し、群體をなして生活し羽狀に生長す、共有肉の中軸に角質の骨軸を生し、周圍に石灰質の皮を成す、一見植物かと疑はる、海底の岩礁等に着生す。うみひば。
うみすずき[海鱸](名) [動]海に產するすゞきの稱。かはすゞきの對。
うみすずめ[海雀](名) [動](い)固顎類中硬皮類に屬する魚、海產にして堅牢なる鱗甲を被り、頭に二角を有す。すゞめふぐ。(ろ)「かはごふぐ」の一名。(阿波の方言)。(は)水禽類中短翼類に屬する鳥、嘴は堅硬にして尖銳なり、兩翼短小にして脚は殆ど尾端にあり、鳩大にして巧みに游泳し、又、水中に潛伏す。


[うみすずめ(い)]

うみすひいし イス[膿吸石](名) 一種の小石、圓くひらたきもの、膿をすふ特效あり、罷骨の類。
うみそ[績麻](名) うみたる麻いと。
うみたけ[海竹](名) [動]九州邊の泥海に生ずる一種の貝、殼はどぶがひに似て、肉を上に出だす、肉は長さ一尺許にして色黑し、腸を捨て、食用に供し、又、鹽漬けにして貯へもく。
うみだ・す (さしすす)(すせせ)[生出](名) ㊀胎兒を產出す。㊁かせぎて金錢を增殖す。
うみたなご[海鰱](名) [動]硬鱗類中うみたなご科に屬する魚、體は楕圓又は卵圓形にして側扁し、鱗は小にして圓形なり、頭部短く、口小にして吻端にあり、背部は銅靑色にして腹部は銀白色なり、體長大なるは一尺許に達する近海魚なり。


[うみたなご]

うみち[膿血](名) ㊀膿と血と。㊁血の混じたる膿汁。
うみぢ[海路](名) 海上の船の往來道。ふなぢ。

うみづき[產月](名) 妊娠してより約十ヶ月目にあたる月、即ち、胎兒の一定の發達を遂げて、やがて產出すべき臨月。(臨月)。
うみつ・く けけくくる くれけよ[產付](他、か下二) ㊀生みて物に附着せしむ。㊁天性其性を受けしむ。生みて其質を得しむ。「愚鈍に—」。(稟賦)。
十**うみつぢ**[海路](名) うみぢ。海路。
うみづら[海面](名) うみのおも。かいめん。
うみて[海手](名) 海の方。
十**うみてふ** ヨウ ーザ[海蝶](名) [動]「とびのうを」に同じ。
うみどらがめ(名) [動]「かぶとがに」に同じ。
うみどぢやう ジヤウ[海泥鰍](名) [動]「ぎんぼう」に同じ。
十**うみのおきな**[海翁](名) [動]「えび」の異稱。「世の人は、—と、いふめれど」。
うみのおや[生親](名) おのれを生みたる父母。かりのおやの對。
うみのこ[生子](名) おのれが生みたる子。かりの子の對。
うみのちち[生父](名) おのれを生みたる父。かりの父の對。
うみのはは[生母](名) おのれを生みたる母。かりの母の對。
うみのふすま[海襖](名) 海のくもりたるさまを、襖にたとへいふ語。
十**うみのみやこ**[海都](名) 龍宮。
[**うみばうず** ボ ーウ[海坊主](名) ㊀[動]「しやうがくばう」の一名。(筑前の方言)。㊁海上に現はるといふ變化(ヘンゲ)。
うみばた[海端](名) うみべ。(海畔)。
うみひば[海檜葉](名) [動]「うみすぎ」に同じ。
うみべ[海邊](名) 海のほとり。うみばた。

うみへちま[海絲瓜](名)【動】一種の海產動物、我國沿海に多く生ず、有生の時は淡紫色を帶ぶれど、乾燥したる骨骼は淡黄色にして強直なり。わたとり。
うみへび[海蛇](名)【動】「うみくちなは」に同じ。
うみほほづき[海酸漿](名)赤辛螺(アカニシ)などの卵囊、形は長刀(ナギナタ)又は巾着に似る、中の液を出だし孔をあけて、女子供の吹き鳴らすもの。
うみホッス[海拂子](名)【動】「ホッスがひ」の一名。
うみまつ[海松](名)㊀海邊にある松。㊁【動】うみすぎの一種、其角質骨骼は黒色にして、裝飾具に製せらる。くろさんご。

[うみまつ(二)]

うみやなぎ[海柳](名)【植】「あまも」に同じ。
うみわた[海綿](名)【動】「かいめん」に同じ。
うみを[績苧](名)うみたる麻。
うみをそ[海獺](名)【動】「あしか」に同じ。
(う-む)[有無](名)㊀あるとなきと。㊁いやとおうと。然ると然らざると。㊂【佛】有に執着すると無に執着すると。――をいはせず　他を押しつけて事をなさしむるにいふ。
う・む(まみむむめめ)[倦](自、ま四)㊀あく。たいくつす。いやになる。㊁力疲る。氣弱る。つかる。「國人内に―」。
う・む(まみむむめめ)[熟](自、ま四)㊀果物充分に熟す。うゆくす。㊁腫物熟してうみまる出づ。つゆ。
う・む(まみむむめめ)[生](他、ま四)㊀子を產す。ぶんべんす。㊁增殖す。ふやす。
う・む(まみむむめめ)[績](他、ま四)麻又は苧の類を、細くつむぎて長くのばす。
う・む(めめむむるるれめよ)(他、ま下二)㊀埋む。㊁水を混じて、湯をぬるくす。
††うむが・し(しくしきけれ)(形、二)「おむかし」に同じ。
††うむかし・む(まみむむめめ)(他、ま四)「おむかしむ」に同じ。
††うむがつき[產月](名)うみづき。りんげつ。
††うむぎ(名)蛤の類の古名。「―をなますとして」。
うめ[梅](名)【植】薔薇科に屬する木、花は春に開く、五瓣又は六瓣、香甚だ高し、色は白・紅・淡紅・しぼりなど種々あり、葉は楕圓形或は卵形にして尖頭を有し、果實の肉は核に密着す、果實は食用に、木材は種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。
うめ-あは・す(せせすするすれせよ)[埋合](他、さ下二)㊀これとかれとを平均す。㊁つくなふ。
うめあはせ[埋合](名)うめあはすこと。
〔うめあはせる〕[埋合](他)「うめあはす」の訛。
うめうつぎ[梅楊櫨](名)【植】うつぎの一種、蘂短く、花うめに似る。
うめがえ[梅枝](名)梅の枝。――でんぶ[梅枝田夫](名)刻みするめを酒と醬油とにて煮て、これに山椒の粉をふりかけたるもの。
うめがか[梅香](名)うめの花のかをり。
うめがさね[梅襲](名)かさねの色目、表は濃き紅、裏は紅梅なるもの。
うめがへし[梅返](名)元祿の頃行はれし染色、紅梅色に染め、主に、羽織の裏などに用ひたり。
うめき[埋木](名)板などの間隙に木をうむること。――ざいく[埋木細工](名)うめきにて、人物花鳥等いろいろの形をこしらへ出だす細工。又、其細工物。よせぎざいく。
うめ・く(かきくくけけ)[呻](自、か四)㊀苦しさのあまりにうなる。わめく。㊁をめきさけぶ。なめく。
〔うめ-くさ〕[埋草](名)かけたる部分又はあきたる所を滿さんための物。「時間の―」。「借金の―」。
うめ-ず[梅酢](名)梅の實を鹽漬けとしたる汁、多くは紫蘇の葉を加ふ、鍍金其他金屬の細工などに用ふ。(梅漿)。
うめ-ぞめ[梅染](名)㊀かさねの色目、表は白く、裏は濃き蘇芳なるもの。㊁梅の木の皮の汁にて染めたる色、茶色に似る。
うめ-た・つ(てててつつるつれてよ)[埋立](他、た下二)うめたてをなす。
うめ-たて[埋立](名)㊀埋(ウヅ)めふさぐこと。㊁海を埋めて陸となすこと。――こうじ[埋立工事](名)海を埋めて陸となす工事。――しんち[埋立新地](名)うめたてによりて出來たる場所。
〔うめたてる〕[埋立](他)「うめたつ」の訛。
うめ-だな[梅棚](名)四十八棚の一。
うめ-づけ[梅漬](名)㊀梅の實を鹽漬にしたるもの。㊁うめずにつくること。又、うめずにつけたる野菜ものなどの稱。
うめ-つぼ[梅壺](名)古昔、禁中につくられありし五舍の一。(凝華舍)。
††うめ-つ-みち[梅道](名)東海道の古名。
うめ-どひ[埋樋](名)ふせどひ。うづみひ。(水竇)。
うめ-ばたけ[梅圃](名)梅をうゑたる圃。うめぞの。(梅花海)。
うめ-ばち[梅鉢](名)紋所の名、單瓣の梅花を正面より見たるかたちにゑがけるもの。――さう[梅鉢草](名)【植】「いちりんさう」の一名。
うめ-はつづき[梅初月](名)陰曆十二月の異稱。
うめ-びしほ[梅醬](名)一種の食品、梅の實にて製したるひしほにて、梅干の肉をよくすり、砂糖を混じて味をつけたるもの。梅醢。

うめ-ぼし[梅干](名)㊀一種の食品、梅の實を鹽に數日つけおき、これを取り出して、數日間日にさらし、後更に紫蘇の葉を加へたる梅酢に漬けたるもの。(乾梅)。㊁梅干に似たるあめ製の菓子。――ばば[梅干婆](名)皮膚しわよりたる老嫗。
うめみ-づき[梅見月](名)(此月に梅よく咲く故、梅を見るべき月との義)陰曆二月の異稱。
うめ-みぞ[埋溝](名)うめどひ。
うめ-もどき[梅擬](名)【植】冬青(モチ)科に屬する木、高さ一丈許、夏、淡赤色の五瓣の小花を開く、冬に近づくに從ひ實熟して赤色に變ず。らくさうこう。(落霜紅)。
うめる[埋](他)「うむ」の訛。
††うも(名)【植】「さといも」の古名。
うも・る(れれるるるるれれよ)[埋](自、ら下二)うづもる。
うもれ[埋](名)うもるゝこと。――ぎ[埋木](名)㊀太古より木の幹の水中又は土中などにうづもれて、稍や化石の如くなれるもの。(陰杪)。㊁世に捨てられて顧るものなき身にたとへいふ語。
〔うもれる〕[埋](自)「うもる」の訛。
††うや[禮](名)禮識。さはふ。ゐや。
(う-や)[烏夜](名)やみのよ。やみ。
うや-うや・し(しくしきけれ)[恭](形、二)うやまふ狀にてあり。つゝしむさまなり。いんぎんなり。――く・す(せしすするすれせよ)[恭](自、さ變)うやうやしく行ふ。つゝしむ。
(う-やく)[烏藥](名)一種の藥品、色は黑く、特異の臭氣あり。(矮脚樟)。
うや・す(さしすすせせ)[飢](他、さ四)空腹にす、うゝるやうにす。(餓)。
うや-な・し(しくしきけれ)[禮無](形、二)さはふなし。れいぎなし。
うやまひ[敬](名)うやまふこと。
うやま・ふ(はひふふへへ)[敬](他、は四)たつとびてゐやを盡くす。つゝしみてつかふ。そんけいす。
うや-むや[有耶無耶](名)あいろの分明ならざるさまにいふ語。
〔うゆ〕[飢](自)「うう」の訛。
〔うゆ〕[植](他)「うう」の訛。
(う-よ)[雨餘](名)雨のはれたる後。
(う-よ)[紆餘](名)㊀まがりくねること。㊁まはりどほきこと。㊂器量にものせざること。
(う-よく)[羽翼](名)㊀羽とつばさと。㊁輔佐。たすけ。
(う-よく)[右翼](名)中軍の右方にある軍隊。
うら[裏](名)㊀おもての對。うち。なか。ないぶ。㊁うしろ。はいご。「山の―」。㊂すゑ。はし。㊃こずゑ。(梢頭)。㊄胸中の思ひ。ないしん。(心)。㊅うらうへ。うらはら。㊆衣の内面につくる布帛。㊇一の定理の假說及終結を否定して得たる定理、即ち、元の定理の逆なる對偶なり、「甲が乙なれば丙は丁なり」に對して、「甲が乙ならざれば丙は丁ならず」といふが如きこれなり、元の定理は眞なれど、裏は一般に眞理ならず。――をかへす　同一なる事をかさねてなす。
うら[占](名)物の形又はしるしなどに依りて、未來の吉凶を豫想すること。うらなひ。
うら[浦](名)㊀海又は湖などの灣曲して陸地へ入りこみたる部分。㊁うみべ。海邊。
うら-いた[裏板](名)㊀やねうらに張り付けたる板。㊁天井。
うら-うち[裏打](名)㊀裏をつけたるきもの。㊁物の裏面に、糊などもて他の薄きものをはりつくること。うらつけ。(裝背)。
うら-うづがひ[裏渦貝](名)【動】にしの一種、大きさ一寸許、底にうづの狀をなす細紋あり。
うら-うへ[裏表](名)㊀うらとおもてと。㊁表裏を異にすること。うらはら。はんたい。
うら-うめ[裏梅](名)紋所の名、梅の花を裏面より見たる形。
うら-うら(名、副)のどか。ほがらか。うらゝか。
うら-えり[裏襟](名)着物の襟の裏に縫ひつくるきれ。
うら-がき[裏書](名)㊀紙の裏に文字を書くこと。㊁卷き物などの裏に書きつくる文章。㊂借金證書の裏に、表書の金額を受け取りたる旨を記すること。㊃爲替手形等の讓り渡し又は質權設定を證するため、一定の方式に從ひ、其面必ず裏面と限らずに其旨を記載すること。――きんし[裏書禁止](名)爲替手形等の發行人若しくは其所持人が、爾後の裏書を禁示する旨を記載すること。かくて該手形等は更に他に讓り渡すことを得ざるものとなる。――にん[裏書人](名)うらがきをなす人。――ゆづりうけにん[裏書讓受人](名)裏書によりて、其債權を他よりゆづりうくる人。――ゆづりわたしにん[裏書讓渡人](名)裏書によりて、其債權を他にゆづりわたしたる人。
うら-か・く(かきくけ)[裏缺](自、か四)㊀矢中りて、戎服の裏につきとほる。㊁敵の謀の反對に出づ。
††うら-が・す(さしすせ)(他、さ四)心をうきたゝしむ。獻む。
うら-かぜ[浦風](名)浦に吹く風、海濱にたつかぜ。――ぐさ[浦風草](名)【植】「うらおろ」に同じ。
††うら-かた[占象](名)占にあらはれたる象。

十うら-がな・し[心悲]（形、二） 心中にかなしく思ふ。

うら-がね[裏曲]（名）「うらまがく」に同じ。

うら-がへし[裏返]（名） うらがへすと。

うら-がへ・す[裏返]（他、さ四） 裏をおもてにす。てんたうす。ひっくりかへす。

うら-がへ・る[裏反]（自、ら四） ㊀裏と表とかはりあふ。ひっくりかへる。㊁味方が敵となる。（反逆）。

うら-が・る[末枯]（自、ら下二） 草木の「うら枯る。

うら-がれ[末枯]（名） 草木のうらの枯るゝと。

十うら-がれる[末枯]（自）「うらがる」の訛。

うら-き[末木]（名） こずゑ。木梢。

うら-ぎく[裏菊]（名） ㊀菊花を裏より見たる形の圖樣。㊁鐔に付くる菊花形のかざり。㊂【植】「はましをん」の一名。

うら-ぎり[裏切]（名） 味方にそむき敵に通ずると。内通。（翻城）。

十うら-ぐ・し[嬉]（自、か下二） 愉快きはまる。興(キョウ)に入り我を忘る。うきたつ。

うら-ぐち[裏口]（名） 家のうしろの出入口。表口の對。（背戶）。

うら-こし[浦越]（名） ㊀浦を越すと。㊁浦の方より陸へふきあげて來る風。

十うら-こひ・し[心戀]（形、二） 心のうち戀し。

十うら-こ・ふ[心戀]（他、は上二） 心のうちにて戀ひしたふ。

十うら-さだめ[占定]（名） うらなひもて、物事を決定すると。

うら-ざと[浦里]（名） 浦近くある里。漁村。

十うら-さぶ・し[心寂]（形、二） 心さびし。

十うら-さ・ぶ[心寂]（自、は上二） 心さびしくあり。

うら-じやく[裏尺]（名） 曲尺(サシガネ)の裏にありて、表の曲尺にともなひ、物の形をはかるに用ふるもの。

うら-じろ[裏白]（名） ㊀【植】裏白科に屬する羊齒、葉は通常叉狀に分岐して芽を有し、芽胞は被包を有せず、葉柄を種々の用に供し葉は正月のかざりに用ふ。しだ。ほなが。もろむき。㊁紙を横に二つに折りて、表の方のみに文字を書きたる手紙。 ――いちご[裏白苺]（名）【植】薔薇科に屬する植物、葉は三箇の小葉より成り、莖と共に長き帶褐色の腺毛を有す、果實は食用に供せらる。えびかづらいちご。さるいちご。 ――の-き[裏白木]（名）【植】薔薇科に屬する木、葉は邪翁にして下面に白毛密生す、五月頃、小花叢(ムラガ)りひらく、實はさくらんぼうに似て赤し、熟すれば甘味あり、食用に供すべし。

うら-だな[裏店]（名） うらながや。うらや。（下戶）。

うら-ぢ[裏地]（名） 裏に縫ひつくべききれぢ。

うら-ぢ[浦路]（名） うらのみちすぢ。

うら-づけ[裏附]（名） うらうち。

うら-づたひ[浦傳]（名） 浦に沿ひて道を行くと。

うら-て[裏手]（名） 裏の方面。りめん。はいご。

うら-て[占手]（名） 相撲又は歌合せなどにて、最初第一番のつがひの稱。

うら-どほり[裏通]（名） うらての道路。

十うら-と・く[心釋]（自、か下二） 心とく、服從す。「るると。

うら-なぎ[浦和]（名） 浦によせくる浪の靜かなると。

うら-なし[裏無]（名） ㊀うらをつけざると。㊁うらをつけざる草履。

十うら-な・し[心無]（形、二） 心につゝみかくす所なし。

うら-なひ[占]（名） ㊀うらかたを考へて、吉凶を判斷すると。うらなふと。㊁うらなひをする人。うらなひしや。（卜筮）。 ――しや[占者]（名） うらなひを業として生活する人。はっけみ。ばいぼくしや。（賣卜者）。

うら-な・ふ[占]（他、は四） うらに依りて、吉凶を考へ定む。（陳卦）。

ウラニウム[Uranium]（名）【化】「ウラン」に同じ。 ――ガラス[Uranium-glass]（名）「ウラニウム」の鹽類を混ぜるガラス、黄色を帶びよく燐光を放つを以て、「ガイスレル」管を製するに用ふ。

十うら-の-かみ[陰陽頭]（名） うらのつかさの長官。

十うら-の-つかさ[陰陽寮]（名）「おんやうれう」に同じ。

うら-ば[裏葉]（名） 草木のうらの葉。「藤の―」。「くずの―」。

うら-はず[末筈]（名） 弓づるをかくる所の上の部分。もとはずの對。

十うら-はづか・し[心恥]（形、二） 心の中にて恥づかし。

十うら-はひ[兆]（名） うらかた。

十うら-はみ[占食]（名） 龜の甲を灼(ヤ)きてするうらの其裂け目。

〔うら-はら[裏腹]（名） うらうへ。はんたい。あべこべ。

うら-はん[裏判]（名） 文書の裏に保證として捺印すると。又、其印跡。

うら-びと[浦人]（名） 浦のほとりに往む人。

十うら-び・る[心詫]（自、ら下二） つらくありわびしくあり。（快快）。

十うら-・ふ[占]（他、は四） うらなふ。「あふべしとうらへる君を」。

十うら-・ふ[占]（他、は下二） うらなふ。

十うら-ぶ・る[心詫]（自、ら下二） 憂(ウ)くおもふ。うらびる。

十うら-へ[占]（名） うらなふと。うらなひ。

十うら-べ[占部]（名） 古昔の官名、神祇官に屬し、占ひの事をつかさどりしもの。（卜官）。

うら-べ[浦邊]（名） うら。うみ。

うら-ぼし[裏星]（名）【植】筑前に生ずる一種の草、葉のうらに金色の星あり、冬も枯れず、中には葉の三つまたに分裂したるものあり。

ウラボン[盂蘭盆]（名）（梵語 Ullambana、倒懸と譯す）陰暦七月十五日に行ふ佛事、食器にいろ〳〵の食物を盛りて、十方の佛僧に施し、以て七世及現世の父母の倒懸の苦を救はんとなり。おやうりやうまつり。たまゝつり。ボン。 ――ゑ[盂蘭盆會] 前條に同じ。

十うら-ま[浦曲]（名） 海ばたの曲り入りたる所。

うら-まさり-の-こうばい[裏優紅梅]（名） かさねの色目、表は紅梅にして裏は紅なるもの。

うら-まち[裏町]（名） うら通りの町。とほり町のうしろ。（後街）。

うら-み[怨]（名） うらむると。うらむる思ひ。（恨）。 ――こつずゐに とほる[怨徹骨髓]（うらみは骨の心にまでとほる義）うらみを懷くとの極めて深きにいふ。

うら-み-うた[怨歌]（名） うらみのこゝろをふくめてよみたる歌。「―を、はやくよみかけよ」。

うら-み-じに[恨死]（名） うらみを懷きて死ぬると。

うら-みち[裏道]（名） ㊀裏口より通行する路。㊁ぬけみち。間道。

うら-・む[恨]（他、ま上二） ㊀不滿足又は不平の心を持つ。（悵）。㊁他のおもむけを不快に思ふ。他の行爲をにくみいきどほる。㊂後悔す。くやむ。「自ら機を失したるを―」。 ――らくは[怨]（副） うらむには。恐めしきとには。「―大學せざりしとを」。

うら-むらさき[裏紫]（名）「むらさきご」に同じ（おもに、歌などに用ふる語）。

うら-め・し[怨]（形、二） うらみに思はる。殘念なり。

うら-もやう[裏模樣]（名） 物のうらにあるもやう。

うら-もん[裏門]（名） 家屋などのうらてのもん。裏木戸の門。（後門）。

うら-もん[裏紋]（名） 正式の紋所のかはりに用ふる紋所。かへもん。

うら-や[裏屋]（名） 人家のうらに建てたる家。うらの中にたてたる家。うらだな。うらながや。

十うら-やす・し[心安]（形、二） こゝろやすし。あんおんなり。

十うら-やす-の-くに[浦安國]（名） 日本國の古稱。

うら-やま・し[羨]（形、二） うらやむべし。

うら-やまぶき[裏山吹]（名） かさねの色目、表は黄色にして、裏は萌黄(モエギ)なるもの。

うら-や・む[羨]（他、ま四）（心(ウラ)病む義） ㊀人のすぐれたる狀を見て、其如くならんと思ふ。㊁人のすぐれたる狀を見て、其人をにくゝ思ふ。

十うら-ら[朗]（名） くもりなくのどやかなるさまにいふ語。ほがらか。（麗）。 ――か[朗]（名） ほがらか。うらゝ。 ――け・し[朗]（形、二） うらゝかにてあり。

うら-わ[浦曲]（名） 浦の屈曲したる處。「―の千鳥あともとゞめず」。

うら-わか・し[末稚]（形、二） ㊀草木のうらみづ〳〵しくわかし。㊁心わかし。氣わかし。

ウラン[Uranium]（名）【化】「クロム」族に屬する金屬、甚だ稀なるものにして其主なる鑛石は「ウラン」鑛なり、黄色の酸化物は、美麗なる黄色の燐光を放ち、黑色の酸化物は、磁器の着色料に用ひらる。

うり[瓜]（名）【植】（い）葫蘆科に屬する植物の總稱、古昔は「ふり」と稱したり、まろうり・きうり・まくはうり・すゐくわ・たうぐわ・へちま・かぼちや・ゆふがほ等の種類あり。各其條を見よ。（ろ）まろうり又は胡瓜(キウリ)の專稱。 ――を とうじて たま を う[投瓜得瓊]（瓜をおくりて其返禮に瓊を得たる義）人に些少のおくりものをして、多大の返禮を受けたるにいふ。

うり[賣]（名） うると。うりひさぐと。

うり-あ・ぐ[賣上]（他、か下二） ㊀品物を賣りきる。うりつくす。㊁賣りたる錢を收む。

うり-あげ[賣上]（名） うりつくすと。賣りきると。又、其あがり高。 ――かんぢやう[賣上勘定]（名） ㊀うりあげて、其あげ錢をとりをさむる勘定。㊁品物を請け賣りするに、前金を納めずして、一定の時期に賣り高の勘定に從ひて納むると。 ――ちやう[賣上帳]（名） うりあげたる品物の價を記入するための帳簿。

うり-あり・く[賣行]（他、か四） ものをうらんとて方々へ行く。

うり-いへ[賣家]（名） うるべき家。うりや。

うりかけ［賣掛］（名）ものを賣りて其代金を未だ收めざると。又、其代金。かけ。「あきなひ」

うりかひ［賣買］（名）賣ると買ふと。ばいばい。

うりきる［賣切る］（他、ら四）賣りつくして、品物拂底す。「しまふ」

うりきれ［賣切］（名）うりはてたると。うり盡くしたると。

（**うりきれる**）［賣切れる］（他）「うりきる」の訛。

うりぐすり［賣藥］（名）かねて調合しおきて賣る藥品。ばいやく。

うりぐち［賣口］（名）うりさき。さばけぐち。「路」。販路。

うりぐひ［賣食］（名）所有の道具などを賣り、其ゑきによりて、日々の生活をたつると。

うりけんじやう［賣券狀］（名）うり渡すべき事を契約して認めたる證狀。（賣券狀）

うりこ［賣子］（名）商家にて賣りあるくにつかふ雇ひ人。品物を擔がしめて行商せしむる者。

うりことば［賣言葉］（名）他の怒りを招く言葉。けんくわをもとむることば。（惡言）。――**にかひことば** 惡言をうけて惡言をかへすと。

うりごゑ［賣聲］（名）商人が商品の名を呼ぶ聲。

うりこみ［賣込］（名）うりこむと。うりはむると。

うりこむ［賣込む］［賣込］（他、ま四）❶賣り入る。

うりさき［賣先］（名）品物を賣り付くべきあて。うりくち。さばけぐち。

うりさぐ［賣下ぐ］［賣下］（他、か下二）官より物を民間に賣る。

うりさげ［賣下］（名）うりさぐると。

うりざね［瓜核］（名）瓜のたね。（瓣）。――**がほ** ＋［瓜核顏］（名）（瓜のたねに似たるかほの意）色白くなかなかにて、稍や長き顏の稱。瓜子面。

うりさばき［賣捌］（名）❶賣りさばくと。賣りひろむると。❷賣りさばく所。

うりさばく［賣捌く］［賣捌］（他、か四）うりひろむ。うる。はんばいす。

うりしろ［賣代］（名）品物をうりたる代金。――**なす**［賣代爲］（他、さ四）うりはげて錢とす。

うりすゑ［賣据］（名）❶あき据ゑのまゝ賣却する物。❷賣るべき建物。

うりだし［賣出］（名）❶賣りだすと。うりそむると。うりはじめ。❷商賈の景氣をつけんために、日を撰び、特別にやすく賣りなどして、客をひくと。❸名望あらはれゆくと。

うりだす［賣出す］［賣出］（他、さ四）❶うりだしをなす。❷名望を露はす。

うりて［賣手］（名）貨物を賣る人。かひての對。

うりぬし［賣主］（名）❶貨物を賣る人。❷［法］賣買契約により、相手方に對し或財產權を移轉する義務を負ふもの。

うりね［賣値］（名）賣品の價。もとねの對。

うりのき［瓜木］（名）［植］山茱萸科に屬する木。葉は瓜に似る。みきの皮を剝ぎて、荷縄に用ふ。

うりばかへで［瓜葉楓］（名）［植］うりのき。（八角楓）

うりばへ［瓜蠅］（名）［動］鞘翅類中金花蟲科に屬する蟲。全體黃褐色にして細長く、前胸に深き横溝あり、瓜の葉を食ふ。

うりはらひ［賣拂］（名）うりはらふと。「手ばなすと」

うりはらふ［賣拂ふ］［賣拂］（他、は四）❶賣り盡す。❷賣りてなくす。うりきる。

うりひろむ［賣弘む］［賣弘］（他、ま下二）❶賣りてひろむ。❷賣りひろぐ。あまねくうり出す。「ゆくし」

うりひろめ［賣弘］（名）賣りひろむると。「ー」に

（**うりひろめる**）［賣弘める］（他）「うりひろむ」の訛。

うりもの［賣物］（名）賣るべき品物。ばいひん。はんばいひん。

うりもみ［瓜揉］（名）一種の料理。きうり又はしろうりを薄くきざみ、これに鹽を少しかけもみやはらげ、さんばいずにて味をつけたるもの。

うりや［賣家］（名）うりいへ。

うりやう［雨量］（名）雨雪などの降れる分量。雨雪などの降下して地面を被ひたる容積。――**けい**［雨量計］（名）雨量を計る具。圓筒にして漏斗狀の蓋にて被ひ、其中央に小孔を穿ち、筒内に溜りし水の深さによりて雨量を計る。通常「ミリメートル」を用ふ。

うりよね［賣米］（名）米を賣り出すと。又、其米。かひよねの對。（糶）

うりわたし［賣渡］（名）うりたる物品を渡すと。

うりわたす［賣渡す］［賣渡］（他、さ四）うりわたしをなす。

（**うりん**）［羽林］（名）近衞府の唐名。――**け**［羽林家］（名）古昔の公卿の家格。侍從より近衞の少將及中將を經て、次第に昇進する家柄。

う・る［賣］（他、ら四）❶價の金を受けて物品を渡す。ひさぐ。はんばいす。さばく。❷名聞を求む。❸あざむく。「友を賣る」。❹自ら媒介す。てらふ。（衒）

うるあは ＋［粳粟］（名）粘力少く粒子の粟。もちあはの對。

うるか（名）鮎の腸又は子を鹽づけにしたるもの。「鹽鯎」

＋**うるき**（名）［植］いてふにひとへの古名。

「どぶくりやう」の古名。

うるきび［粳黍］（名）粘力少く粒子の黍。

うるけ・る（自、か下一）うるほふ。ふやける。

うるさき・し［煩］（形、一）わずらはし。いとはし。（五月蠅）

（**うるごめ**）［粳米］（名）うるしね。（粳）

うるし［漆］（名）❶［植］うるしのきの略言。❷一種の塗料、うるしの木より取りたる灰色の樹液。水分を去れば黑褐色のものとなり、薄く塗れば光澤ありて、乾燥する性質を有し、ぬりものを製作するに必要のものとす。――**いし**［漆石］（名）❶一種の石。黑き光澤ありて、漆をぬりたる如し。北國に多し。❷うるしせきたんの一名。――**かき**［漆搔］（名）うるしの木より漆をかき取る人。其方法は、樹幹を切傷し、滲出する樹液を箆にて搔き採集するなり。――**かぶれ**［漆感］（名）うるしの毒に感じて生ずる皮膚病。――**こし**［漆漉］（名）うるしを漉すに用ふる紙。主に吉野紙を用ふ。――**ざいく**［漆細工］（名）器物に漆をぬりて、いろいろの細工をなすと。又、其器物。うるしぬり。――**ぬり**［漆塗］（名）❶器物にうるしを塗ると。又、其器物。❷うるしを使用する人。――**のき**［漆木］（名）［植］漆樹科に屬する木。葉は多數の小葉より成れる羽狀複葉にして、小葉は中肋の兩側に十五個内外の脈を有す。果實は平滑なり。樹幹より汁液を採りて漆を製し、果實より蠟を製し、又、木材は種々の用に供す。（漆樹）――**ばけ**［漆刷毛］（名）漆を塗るに用ふるはけ。（髹筆）――**まけ**［漆負］（名）うるしかぶれ。――**むろ**［漆室］（名）うるしを塗りたる器物を入れて、かわかしする所。――**ゑ**［漆畫］（名）器物の上に、色漆にてゑがきたる繪。

うるしきび［粳稷］（名）「うるきび」に同じ。

うるしね［粳稻］（名）米の粘力少く、飯に炊きて常食となすもの。「くましね」

＋**うるせ・し**［麗］（形、一）❶うるはし。❷たしかなり。うまし。

うるち［粳］（名）うるしね。

うるはし・し［麗］（形、二）❶いちよし。つややか。うつくし。❷みめよし。❸あいらし。❹きよし。

＋**うるはし・む**［麗］（他、ま四）かはゆがる。むつましくす。

＋**うるひ**［潤］（名）うるほひ。

＋**うるふ**［閏］（名）閏（ウル）の古言。

うるふ［閏］（名）❶太陰曆にて、一年を三百六十日と定め、これを十二ケ月に分かてど、月の運行と少差ありて、端數を出すが故に、其端數積りて一ケ月に滿ちたる年を、一年に加へたるものをいふ。大抵五年に二度のうるふを生ず。十九年間にうるふ七を重ねて、殆ど余分全く盡く。名づけて一章といふ。現今我國に行はる、太陽曆即ちグレゴリー曆にては、前者と異にして三百六十六日の年をいふ。即ち一年を三百六十五日とすれど、地球の回歸年は三百六十五日五時四十八分四十六秒なるが故に、此端數を積みて、每四年に、一日を二月の末に加ふ。かくせば百年の後には、殆んど一日の超過のみなるを以て、百年目にはうるふを置かずして、四百年目にこれを置く。

＋**うる・ふ**［潤］（自、は四）うるほふ。

＋**うる・ふ**［潤］（他、は下二）うるほす。

うるふづき［閏月］（名）閏のある月。

うるふどし［閏年］（名）閏のある年。

うるほ・す［潤］（他、さ四）❶ぬらす。ひたす。❷たすく。めぐむ。❸利益を受けしむ。恩徳を施す。

うるほひ［潤］（名）❶ぬめり。ぬれ。しめり。❷濕氣。水分。❸まうけ。りえき。めぐみ。利徳。

うるほ・ふ［潤］（自、は四）❶水氣をもつ。ぬめる。ぬるむ。❷めぐまる。そまる。❸利益恩澤を受く。まうかる。

＋**うるま・の・しま**［宇留馬島］（名）琉球國の古稱。又、朝鮮の濟州島の稱なりともいふ。「ーの人なれや」

うるみ［潤］（名）うるむと。にごり。くもり。かすみ。――**しゆ**［潤朱］（名）うるしぬりにて、黑色を帶びたる朱。

うる・む［潤］（自、ま四）❶透明ならず。曇る。❷くもりて光澤うすし。あざやかならず。❸泣聲となる。❹打たれて肌に色を生ず。

うるめ［潤目］（名）［動］「うるめいわし」の略言。――**いわし**［潤目鰯］（名）［動］喉鰾類中にしん科に屬する魚。鱗は極めて剝げ易く、口は斜仰し齒は短小なり。體形は多少延長し腹面は圓く、背部は淡碧色にして腹部は白色に黄色を含む。體長は六寸餘に達す。我國西南海に多し。常に遠海に棲息す。脂すくなく味淡泊なり。多く干物として食す。

＋**うれ**［末］（名）木の末端。うら。こずゑ。

うれ［賣］（名）うれゆくと。うれ口。「ーがよい」

うれ-くち［賣口］（名）うるゝみち。はんろ。

うれ-こみ［賣込］（名）うるゝ口の付くこと。

うれ-さき［賣先］（名）うれくち。

うれ-し しく しき しけれ［嬉］（形、二）よろこばし。こゝろよくたのし。（怡）。――げ［嬉氣］（名）うれしきさま。――なみだ［嬉涙］（名）うれしさのあまりに出る涙。かんるゐ。

十うれし-む まみむむめめ［嬉］（自、ま四）うれしくおもふ。

うれ-だか［賣高］（名）貨物の賣れたる高。

十うれた-し くしき けれ［憂］（形、二）うれはし。なげかはし。（慨慨）。

うれ-だ-す さしすすせせ［賣出］（自、さ四）㊀漸々販路ひろがる。うれはじむ。㊁名望あらはれゆく。

十うれ-は［末葉］（名）すゑの端。うらは。「槇の―」。「草の―」。

十うれは-し シッ しくしくしき しけれ［憂］（形、二）うれふべし。なげかはし。

うれひ イウレ［憂］（名）㊀うれふること。うれふべき事。㊁もふく。居中。「父の―にあたる」。

うれ-ふ ウレ はひふふへへ［憂］（他、は四）次條に同じ。

うれ-ふ ウレ へへふふるれ へよ［憂］（他、は下二）㊀うれはしくおもふ事を他に告ぐ。なげきうったふ。㊁病む。わづらふ。（患）。㊂かなしむ。なげく。（愁）。㊃おもんぱかる。かんがへる。「國家の前途を―」。㊄害ふ。惡む。㊅不安心にてあり。心もとなくあり。

うれへ ウレ エ［憂］（名）㊀なげきうったふること。愁訴。㊁びやうき。わづらひ。㊂なげき。かなしみ。㊃わざはひ。害患。㊄ふあんしん。しんぱい。――ぶみ［愁文］（名）歎願書。愁訴狀。

〔う・れる れれるるれれ れよ［賣］（自、ら下一）あきなひ繁昌す。

うろ［虚］（名）㊀うつろ。（空）。㊁あな。（洞）。

（う-ろ［雨露］（名）㊀あめとつゆと。㊁うるほひ。「―のめぐみ」。

（う-ろ［有漏］（名）【佛】色界无色界に於ける見思の煩惱のために、業を續生して、色界无色界を出離する能はざること。轉じて、人間又は凡夫界。

（う-ろ［紆路］（名）まはりみち。とほきみち。

（う-ろ［烏鷺］（名）㊀からすとさぎと。㊁黑と白と。――の あらそひ［烏鷺爭］碁を圍むこと。

うろ-うろ（名、副）まどひて方向の定まらぬさまにいふ語。（彷徨）。

うろ-おぼえ［空覺］（名）記憶の確實ならぬこと。

十うろ-くづ［鱗］（名）㊀うろこ。㊁魚類の異稱。うろこ。

うろこ［鱗］（名）（いろこの轉）㊀【動】爬蟲類特に魚類の皮膚を蔽へる薄片。爬蟲のは表皮の化成したるものなれど、魚類のは眞皮の化成したるものにして、其表面に透明なる薄膜をのこせり。形狀種々あれど、魚類のは多く屋瓦狀に列ぶ。こけ。いろこ。㊁物の外表にありて魚類などのうろこに似たるものの稱。㊂【動】「もろこ」の一名。――がた［鱗形］（名）模樣の名。うろこ形にこしらへたる模樣。即ち、三角形。

（う-ろ-だう ウド［有漏道］（名）【佛】布施・持戒・忍辱・精進等によりて、有漏生死の果を成就すること。

〔うろた・へる ヘル―エ［狼狽］（自、は下二）あわてまどふ。ろうばいす。

（う-ろ-ぢ［有漏路］（名）【佛】此世。「シヤバ」。

〔うろ-つ・く かきくくけけ（自、か四）㊀まよひ歩く。さまよふ。㊁あわてゝ物事手につかず。

うろ-ぬ・く かきくくけけ［虚拔］（他、か四）多くあるものゝ中より、あの〳〵間をへだてゝ引きぬく。まびく。「人參を―」。

うろ-の-み［有漏身］（名）【佛】凡夫の身。

ウロン［胡亂］（名）（字の唐宋音なりといふ）あやしく疑はしきこと。合點のゆかぬこと。（渉疑）。

（うわう-さわう ワウ ワウ［右往左往］（名）㊀右へゆきまた左へゆくこと。㊁不秩序に散りゆくこと。「皆々―にかへる」。

〔うわ・る らりるるれれ［植］（他、ら四）植ゑらる。「稻が―」。

（う-ゐ［有爲］（名）【佛】人生の生滅無常なること。三界輪廻の境界。

ウヰウヰ-けう ヨウ-キ［回回教］（名）「フヰフヰ」教に同じ。

ウヰ-きやう キ ヨウ［茴香］（名）（「ウヰ」は字の唐音）【植】繖形科に屬する栽培草本。特異の香氣を有す。葉は多數の線狀片より成り、花は黃色小形にして複繖形花序に排列す。果實は長楕圓形にして藥用及食用に供せらる。くれのおも。（八月珠）。

ウヰスキー［Whisky］（名）酒精分強き一種の酒。

うゐ-てんぺん［有爲轉變］（名）【佛】うきよの物事は、うつりかはりて須臾(シバラク)も住まらざること。

ウヰラウ ロウ［外郎］（名）（字の唐音にして、明の歸化人陳外郎の賣り始めたるより此名ありといふ）「ウヰラウぐすり」又は「ウヰラウもち」の略言。――ぐすり［外郎藥］（名）相模國小田原より出す有名なる賣藥。諸病に効ありといふ。トウチンかう。――まめ［外郎豆］（名）【植】「たんきりまめ」の一名。――もち［外郎餠］（名）一種の菓子。米の粉に砂糖を加へ蒸して製したるもの。周防國山口の產最も有名なり。

うゑ［飢］（名）うゝること。食足らざること。

うゑ-［植］（接頭）或語に冠して植うる意を表はす。「―木」。

うゑ-き［植木］（名）㊀移し植ゑたる木。㊁鉢などに植ゑたる小さき花木。ぼんさい。――ばち［植木鉢］（名）うゑ木をうゑおく鉢。（石盆）。――むろ［植木室］（名）冬季に寒を畏るゝ花木又は早く花を開かせんとする花木を入れおくための室。陸室・唐室等の稱へあり。――や［植木屋］（名）庭園の植物に手を入れ又は庭などを作ることを職業となすもの。（園丁、蒔眠師、花匠）。

うゑ-こみ［植込］（名）庭園に草木を繁げく植ゑたる所。「杉の―」。

うゑ-じ［植字］（名）活版に用ふる活字、又、活字を組み立つること。しよくじ。

うゑ-じに［餓死］（名）飢ゑて死ぬること。（殍）。

うゑ-つ・く けけくくるれ くれけよ［植付］（他、か下二）草木をうつして生ひ立たす。「稻を―」。「五月の―」。

うゑ-つけ［植付］（名）㊀植ゑつくること。㊁たうゑ。

（うゑつけ・る［植付］（他）「うゑつく」の訛。

うゑ-はうさう ソウ ポウ［植疱瘡］（名）天然痘の感染を防がんために、疱瘡の膿漿をうつして人のからだにうゝること。今は專ら牛に移して、再びこれを人にうゝることとなれり。（種痘）。

十うゑ-め［植女］（名）田に苗を植うる女。「さなへとる、みたの―もいろ〳〵の」。

う-ゑ-もの［植物］（名）㊀しよくぶつの總稱。㊁田畝にうゝる蔬菜の特稱。

十うゑもん-ふ［右衞門府］（名）古昔、禁裏の諸門の警護にあたりし武官の府。

〔うゑる［飢］（自）「うう」の訛。

〔うゑる［植］（他）「うう」の訛。

（う-ゑん［迂遠］（名）㊀まはりどほきこと。つたなきこと。㊁道路屈曲して遠きこと。

うを［魚］（名）【動】魚類の總稱。形は概ね紡錘形にして、且多少側扁なるを常とすれど、中には球形のものあり。體軀は、頭・軀幹及尾の三部より成り、頸といふ部分なし。移動器は水中生活に適したる鰭にして、胸腹の二偶鰭と脊・尾・臀の三奇鰭とを有す。――え て うへを わする［得魚忘筌］（莊子の言に出づ）學問の眞意を會得して、言文の形跡に拘泥せざるにたとへいふ。

うを-あみ［魚網］（名）うをゝ捕るあみ。さかなあみ。

うを-いち［魚市］（名）魚をうりかひする市場。

うを-うり［魚賣］（名）魚を賣りて活計をたつる人。いをうり。さかなや。

（うを-がし［魚河岸］（名）うをいちのある河岸。

うを-ぐし［魚串］（名）魚を燒くに用ふる串。竹又は鐵銅などにてつくる。いをぐし。（炙串）。

うを-たか［魚鷹］（名）【動】「みさご」の一名。好みて魚を取るより此名あり。（王雎）。

うを-だな［魚棚］（名）㊀魚を置く棚。㊁魚を賣るいへ。うをや。さかなや。

うを-の-たな［魚店］（名）さかなやの多くある町。（魚戸）。

うを-の-め［魚目］（名）手足などに生ずる神經の乳嘴突起の發育せるもの、かたくなりて恰も魚の目に似たるより此名あり。

うを-や［魚屋］（名）魚を賣る家。さかなや。

（うん［運］（名）人の身にめぐりて來る命數。天命のまはりあはせ。うんめい。

（うん（感）承諾の意を表する發聲。（諾）。

（うん（感）氣絶など又ははげしく驚くときなどに發する聲。「―とばかりに」。

（うん-あう ウ―オ［蘊奧］（名）學問技藝などのおくそこ。おく。

（うん-う［雲雨］（名）㊀くもとあめと。㊁男女の共寢。

（うん-うん［云云］（名）連續したる言文を中途にて斷ち、後の意をかく〳〵といひとゞむるに用ふる語。しか〳〵。これ〳〵。

（うん-うん（感）くるしみにたへざるなる聲。

（うん-えん［雲烟］（名）㊀くもとけむりと。㊁山水の名畫などにいふ。「壁間に―を掛く」。――くわがん［雲烟過眼］（名）其場のみ目をとむるばかりにて、これに心の執着せざるにいふ。

（うん-か［雲霞］（名）㊀雲とかすみと。㊁ものゝおびたゞしく群がるにたとへいふ語。「―の如く集まり寄る」。㊂【動】有吻類中蟬類に屬する小蟲。種類多し、體長多くは二分許、頭は突出す、前翅は鱗狀にして毛なく、後肢は長くして脛節に毛刺あるを常とす、葉脈を吸收し農家に有害なり、殊に多數群をなして稻田に來り、吮漿又は花の汁液を吸收して稻を枯らすに至る。（浮塵子）。

（うん-が［運河］（名）荷物を運送せんがために、陸地を堀り割りて設けたる河。ほりわり。

（うん-かう ウ―コ［芸香］（名）【植】「ヘンルウダ」の一名。

（うん-かう ウ―コ［運行］（名）㊀運り回りて進行すること。㊁【天】遊星・彗星・衛星等の、其軌道上を運動すること。又、公轉ともいふ。

（うん-かく［雲客］（名）雲のうへびと。てんじやうびと。

（うん-かく［芸閣］（名）藏書の室。ふよもつぐら。

（うん-かん［雲漢］（名）あまのがは。天河。

（うん-き［雲氣］（名）㊀氣象變化のため雲の動くありさま。㊁空に立ちのぼる一種異様の氣。「上有―」。

（うん-き［溫氣］（名）㊀あたゝまり。㊁暑氣蒸すが如きこと。

(うん-げい[雲霓](名) くもとにじと、即ち、雨のふらんとするをきざしにいふ語。

(うん-げん[繧繝](名) ❶染色の名、色と色との間をぼかし染めにしたるもの。❷織物の名、縞と縞とのさかひをくまどりて、織りたるもの。(暈繝)。——べり[繧繝縁](名) うんげんの織物を緣につけたる疊。

(うん-こ(名) 「むと」。

(うん-ごゐ[雲臥](名) 世をさけて深山などに棲

(うん-こん[雲根](名) (雲は石より生ずとの傳說よりいふ)石の稱。

(うん-さい[雲齋](名) 「うんさいおり」の略言。——おり[雲齋織](名) 一種の織物、地粗く文斜に織りたる厚き木綿布、雲齋と云ふ人、織り出だしたるといふ。

(うん-さう[運漕](名) 船にてものをはこびおくること。——てん[運漕店](名) 運漕の事を取り扱ふ店。

(うん-ざり(名) 物事に厭き果つるさまにいふ語。

(うん-ざん[運算](名) 【數】式の示す規則に從ひ、加・減・乘・除又は移項等を行ひて、要する數値を算出すること。

ウン-しう[溫州](名) (溫州は支那の地名)【植】「ウンしうみかん」の略言。——みかん[溫州蜜柑](名) 【植】蜜柑の一種、赤色を帶ぶ、味最も美なり。うんゆきう。

(うん-しふ[雲集](名) くもの如く多くよりあつまること。——むさん[雲集霧散](名) あまたのものが、よりあつまり又はちり〴〵になる狀にいふ語。

(うん-じやう[運上](名) 商人の營業又は運送の物品に課する租稅。(雜稅)。

(うん-じやう[雲上](名) ❶雲の上。❷禁中。——びと[雲上人](名) 禁中に伺候する公卿などの稱。くものうへびと。殿上人。

(うん-しゆ[運輸](名) 荷物をはこびおくること。——えいげふ[運輸營業](名) 運賃又は手數料を受けて、もの、はこびおくりの業を營むこと。

(うん-じやう-りようへん[雲蒸龍變](名) (雲わきのぼりて龍とかはる意) 有爲の士が、機會に遭遇して立身出世するを、雲起こりて池中に潛みし蛟龍の龍となるにたとへいふ語。

(うん-しん-げつせい[雲心月性](名) 利慾の念なきにいふ語。

†うん-ず(他)(自、さ變) ❶倦む。いやになる。❷つらく思ふ。

(うん-すゐ[雲水](名) ❶雲と水と。❷行脚(ギャ)僧の異稱、其雲にまかせ水にまかせて、あてどころなく遊歷するよりいふ。(遊僧)。

(うん-そう[運送](名) ❶物をはこび送ること。うんぱん。うんゆ。❷【法】陸上又は湖川・港灣(海外は省く)にて、物品又は旅客のはこびおくりをなすこと。——えいげふ[運送營業](名) 運賃又手數料を受けて運送の業を營むこと。——けいやく[運送契約](名) 【法】當事者の一方が相手方に物を運送せんことを約し、他の一方がこれに對して運送賃を拂ふことを約したること。——じやう[運送狀](名) ❶【法】荷送人が運送人に對して物品の運送につき交付する證書、商法三三二條に規定の要件を具すべきものとす。❷運送人が荷受人に對して、物品と共に發送する通知狀。——せん[運送船](名) 軍事の輸送に用ふる船。——ちん[運送賃](名) 物品又は旅客の運送に對して受くる報酬。——とりあつかひ[運送取扱](名) 物品又は旅客運送の取り次ぎを爲すこと。——とりあつかひ-えいげふ[運送取扱營業](名) 自己の名を以て、運送の取り扱ひを營業となすこと。——とりあつかひ-にん[運送取扱人](名) 自己の名を以て運送營業をなす者。——にん[運送人](名) 自己の名を以て運送業を營む人。——ひん[運送品](名) 運送の目的たる物品。——ほけん[運送保險](名) 運送する物品に對し、荷主が生ずべき損害を塡補するために爲す保險。——れう[運送料](名) 「うんそうちん」に同じ。

(うん-ちゆう[雲中](名) くものなか。——の-はくかく[雲中白鶴](名) 俗に拔け離れたる氣字ある人にいふ。

(うん-ちん[運賃](名) 運送人が、物品又は旅客をうんそうするに對して、受くる報酬。うんそうちん。(運搬費)。

(うん-てい[雲梯](名) 高き梯子、古昔、城攻めなどに用ひしもの。

(うん-でい[雲泥](名) (天上の雲と地上の泥との意) 相違の甚しきものにたとへいふ語。「—の差」。——ばんり[雲泥萬里](名) 雲と泥との如き非常なる懸隔あるにいふ。

(うん-てん[運轉](名) ❶めぐりころばること。くるくるまはること。❷ころばすこと。まはすこと。うごかしはたらかすこと。❸繰りまはし。運用。——しゆ[運轉手](名) 汽車・汽船などの機關の運動をつかさどる人。

(うん-どう[運動](名) ❶めぐりうごくこと。❷衛生のためにからだを動かすこと。❸散步、遊行。❹位置の變化。❺奔走盡力すること。周旋。——き[運動器](名) 【動】動物が自體の移動を行ふための機官、高等動物及節肢動物のは、骨と筋肉とより成りたる肢部にして、軟體動物及蠕形動物などの如き骨なき下等動物のは、單に筋肉より成り、又、原生動物の如きものゝは、纖毛若しくは原形質の伸縮なり。——しや[運動者](名) 或物事のために奔走盡力する人。「議員選擧の—」。——しんけい[運動神經](名) 興奮を中樞より末梢部に傳ふる神經。遠心性神經。——ちゆうすう[運動中樞](名) 總て運動に關する遠心神經を出す神經細胞の運動の中樞、大腦は此中樞の最高府なり、其他延髓・脊髓等もまた中樞となる場合あり。——のエネルギー[運動の—=Kinetic energy]【理】物體が運動するとき有する「エネルギー」、質量と速度との平方の相乘積の半を以てこれを測る。——のていりつ[運動の定律]【理】物體の運動に關する定律、「イギリス人」「ニユートン」氏の創說にして三則あり。(第一)物體は外力の作用を受けざれば、常に靜止するか、或は一直線上に等速の運動をなすものなり。(第二)運動量の變化は、其作用したる力に比例し、其方向に起る。(第三)作用あればこれに等しき反作用あり。——りやう[運動量](名) 【理】物體の質量と速度との相乘積、質量及速度の何れも大なるほど、物體の慣性大なり、故に慣性の量、即ち、運動の量なりとす。

(うん-どん[饂飩](名) 一種の食品、小麥粉に鹽を加へ水にてかため、薄くのばし細く切りたるもの。

(うん-ぬん[云云](名) 「うん〳〵」の音便。

(うん-ぱん[運搬](名) ❶物品又は旅客の輸送。もちはこび。うんそう。❷【地】河水又は海水若しくは風が、土砂又は礫等を流轉せしむること。

(うん-ばん[雲版](名) 一種の樂器、かねかねの板にてつくり、まはりに雲がたの模樣を付けたるもの、禪式のとき寺にて用ふ。

(うん-ぴつ[運筆](名) ふでのはこび方。かき方。

(うん-ぷ-てんぷ[運否天賦](名) 運の吉凶は、自然の天命なりといふこと。

(うん-ぼ[雲母](名) 【礦】「うんも」に同じ。

(うん-めい[運命](名) 人の身にめぐり來たる善惡吉凶の事柄。——ろん[運命論=Fatalism](名) 【哲】人生の貧福又は浮沈等すべて先天的に定まるものにして、人力の如何ともすべからずといふ說。

(うん-めん[饂麪](名) つゆに煮たるうどん。

(うん-も[雲母](名) 【礦】板狀又は片狀の硅酸鹽礦物、白雲母と黑雲母とあり、花崗岩中に存在す、薄くして剝離すれど、片々彈力性を有し光澤あり、扇子などの地紙に粉色するに用ひらる。

(うん-ゆ[運輸](名) 「うんそう」の訓。

(うん-よう[運用](名) はたらかし用ふること。活用「—の妙は一心に存す」。

(うんりよう-せいあ[雲龍井蛙](名) (雲にある龍と井に棲む蛙との意) 賢愚・地位の互に懸隔することの極めて大なるものにたとへいふ語。

(うん-ゐ[云爲](名) いふとなすと。言行。

え

え 「あ」と「い」との中間母音、「い」の場合よりも、口を稍々廣く舌稍々低くして發す、五十音圖に於て、等行第四に位し、衣列の衣・世・天・禰・閉・女・江・禮・惠の頭(頭)となる。

†え[兄](名) 「あに」に同じ。「大—」「—君」。

†え[枝](名) 草木の枝。えだ。「うめが—に、きゐる鶯、春かけて」。

†え[肢](名) 身體の枝、手足。「四の—」。

†え[胞](名) 「えな」に同じ。

†え[宴](名) 「えん」の略言。さかもり。うたげ。

え[柄](名) 器物の手に把る所の長く出でたるもの。把手。「斧のふる—」(把)。

え[榎](名) 【植】「えのき」に同じ。

え[荏](名) 【植】「えごま」に同じ。

え[江](名) 陸地に深くいりこみたる湖海の一部分。「なにはー」「すみの—」。

え[能](副) 能く。あへて。「—聞かず」。

え(感) 疑問の意の發聲。「—どうだね」。

え(感) 然諾の意の發聲。「—さうです」。

(えい[穎](名) ❶はさき。のぎ。❷【植】禾本科植物の花、即ち、蕊花の外部にある二苞片の稱。❸秀出せるもの。「—を脫ぐ」。❹才氣。——だつす[脫穎] はさきをあらはす。才氣をあらはす。

(えい[纓](名) ❶古昔の禮服の冠りの後方に垂れしもの。(羅尾) ❷かんむりのひも。「冠—」。

(えい[營](名) 陣屋。「陣—」「軍—」。

(えい[詠](名) 詩歌などを咏ずること。又、其詩歌。

(えい[裔](名) 先祖よりこのかた連續せる血族の關係。子孫。「平氏の後—」。

(えい[翳](名) ❶くもり。❷かげ。おほひ。❸はたぼこ。きぬがさ。❹古昔、貴人の面を覆ふに用ひし

古語十二　一個語方言　一字一音

具、形は柄の長き團扇の如きもの。さしは。

えい【鋭】(名)㊀するどきこと。㊁するどきはもの。㊂よりすぐったる兵士。「—を鋭くして求り戰ふ」「—を執る」

えい(感)力を入るゝときなどの發聲。

えい-い【鋭意】(名)心をはげましふるふこと。

えい-えい【營營】(名,副)往來するさま。又はいそがしきさまにいふ語。

えい-えい【曳曳】(感)力を入るゝときの發聲。

えい-か【詠歌】(名)㊀歌を詠ずること。又、よみたる歌。㊁巡禮又は淨土宗の信者がうたふ一種の歌。

えい-がい【嬰孩】(名)ちのみご。みどりご。

えい-かう【影向】(名)神佛が其姿を現じたまふこと。

えい-かん【叡感】(名)主上の御感。「—特に深かりき」

えい-がく【英學】(名)「イギリス」國の語學。

えい-かく【鋭角】(名)【數】一直角より小なる角。——**さんかくけい**【鋭角三角形】(名)【數】三つの角が皆な鋭角より成りたる三角形。

えい-き【英氣】(名)人にすぐれたる才氣。

えい-き【鋭氣】(名)㊀するどき氣象。㊁するどきこと。「—を挫く」

えい-き【盈虧】(名)【天】天體の光りが其位置によりて増減すると、月の影が漸次變形するが如きこれなり。

えい-きう【永久】(名)ながく久しきこと。久しく變ぜざること。(永遠)——**ちくじやう**【永久築城】(名)永久防禦の目的を以て築きたる築城。

えい-きやう【影響】(名)關係を及ぼすこと。さしひびき。

えい-きよ【盈虛】(名)みつることと缺くること。又「えいき」に同じ。

えい-きよく【郢曲】(名)いまやうぶりのうたひもの。俗なる音曲。(巴調)

えい-ぐ【影供】(名)神佛又は古人などの肖像に供物をそなふること。

えい-くわ【穎果】(名)【植】果實にして果種子を有する閉果。聚合雌蕊にて成る。果皮は種子に密着す。稻麥等の禾本科植物に見る所なり。

えい-ぐわ【榮華】(名)ときめきさかゆること。さかえ。「一門—盡きて」

えい-けつ【英傑】(名)多くの人にすぐれたる人。すぐれびと。(英雄)

えい-けつ【永訣】(名)ながきわかれ。もにわかれ。

えい-げつ【盈月】(名)新月より滿月に至る間の稱。此間に於て、月の形は漸次圓くなるよりいふ。

えい-くわだん【曳火彈】(名)發射したるものが、火を曳くの狀態をなしたる榴霰彈又は榴彈。

えい-げふ【營業】(名)生計を立つるため又は收入を得るために、繼續の目的を有して營む事業。特に、商業上の關係を有する事業。なりはひ。すぎはひ。——**くわいしや**【營業會社】(名)營利の目的を以て或行爲を常業となす會社。——**くみあひ**【營業組合】(名)同營業者が、共同の利益を圖り又は取り締りをなすために、設立したる公共團體。——**しや**【營業者】(名)營業の名前主。——**しようにん**【營業使用人】(名)營業者が營業のために使用する者。——**ぜい**【營業稅】(名)㊀直接國稅の一種。其課稅標準は、賣り上げ・資本・請け負ひ・報償等の金額又は賃貸價格・從業者の員數等の中何れかにして、營業の種類によりこれを異にす。㊁國稅又は工業を營むものに賦課する地方稅。——**ひ**【營業費】(名)營業上直接に要する費用。即ち、使用人の給料又は原料の購買の如きこれなり。

えい-こ【榮枯】(名)さかゆることと衰ふること。

えい-ご【穎悟】(名)さとくかしこきこと。すぐれてかしこきこと。

えい-ご【英語】(名)「イギリス」國のことば。

えい-こく【英國】(名)附庸の國。ぞくこく。

えい-こさく【永小作】(名)【法】小作料を拂ひて他人の土地に耕作又は牧畜をなすこと。——**けん**【永小作權】(名)【法】物權の一種。即ち、永小作をなす權利。存續期間は二十年以上五十年以下なり。——**にん**【永小作人】(名)【法】永小作權を有する人。

えい-ごゑ【曳聲】(名)力を入れて發する聲。

えい-さい【穎才】(名)すぐれたる才智。又、其人。(英才)

えい-さう【詠草】(名)歌のさうかう。歌のてびかへ。(歌稿)

えい-ざう【營造】(名)㊀家屋倉庫などをつくること。㊁「えいざうぶつ(二)」に同じ。「官立諸—の收支」——**ぶつ**【營造物】(名)㊀つくりたる家屋・倉庫など。㊁【法】直接に公衆の利益に供する目的の用をなす建設物。例へば、道路・鐵道・學校・病院の如きこれなり。「私個人にて取り使用する—あるときは」

えい-ざう【映像】(名)光線の屈折又は反射によりて、物像の現出すること。又、其現出したる物像。

えい-さん【叡算】(名)主上の御年齡を申し奉る語。

えいざん-かたばみ【叡山酢漿】(名)【植】かたばみの一種。葉は大形にして尖頭を有す。花は白色又は淡赤色なり。

えいざん-すみれ【叡山菫菜】(名)【植】菫菜科に屬する草本。不整齊なる花冠を有し、花瓣は五個あり。葉は複葉にして小葉は通常分裂す。(胡菫草)

えいざん-ゆり【叡山百合】(名)【植】百合科に屬する草本。雄蕊は丁字狀の葯を有し、花蓋は漏斗狀にして甚だ長く白色なり。觀賞用として栽培せらる。やまゆり。よしのゆり。

えい-し【英資】(名)すぐれたるうまれつき。

えい-し【英姿】(名)すぐれたる雄々しき姿。

えい-し【瑩死】(名)たふれしぬること。

えい-し【叡旨】(名)主上の仰せ。主上の御旨。

えい-じ【嬰兒】(名)みどりご。ちのみご。

えい-じつ【永日】(名)ながき日。春日。

えいじ-はつぱふ【永字八法】(名)永の一字にて運筆の八法をあらはせるもの。漢の蔡邕の創定する所といふ。

[えいじはつぱふ]

えい-しやく【榮爵】(名)高貴なる爵位。

えい-しゆ【贏輸】(名)かちまけ。

えい-しゆん【英俊】(名)多くの人よりすぐれてある人。

えい-しよ【營所】(名)ぢんや。兵營。

えい-しよ【英書】(名)「イギリス」語の書物。

えい-じよく【榮辱】(名)ほまれとはづかしめ。

えい-しん【鋭進】(名)するどく進むこと。

えい-しん【詠進】(名)歌を詠みて朝廷などにたてまつること。

えい-じん【英人】(名)「イギリス」國の人。

えい-ず【詠ず】(他サ變)㊀詩歌の類を歌ふ。㊁詩歌の類を製作す。高くうたふ。

えい-ず【映ず】(自サ變)㊀影を現す。うつる。「花の影、水に—」㊁はんえいす。かゞやく。さす。「日にえいじて光彩陸離」

えい-せい【叡聖】(名)主上のすぐれて賢明にましますを申し奉る語。

えい-せい【營生】(名)㊀生命力を保存永續せしむること。㊁なりはひ。とせい。くちすぎ。すぎはひ。

えい-せい【永世】(名)長く年月の經過すること。ながいき。——**ちゆうりつ**【永世中立】(名)【法】國際上に於て、國家が永世に、他國間の戰爭に關係することを得ず、他國の保護を受くるを得ず、他國と同盟するをなすを得ず、又國際間の關係を生ずるおそれある行爲をなすを得ざる等の義務を負擔すること。此地位は條約によりて生じ又は數國が其獨立を擔保する條約に伴ひて生ず。——**ちゆうりつこく**【永世中立國】(名)【法】永世中立の義務を負擔せる國家。白耳義・瑞西等の如きこれなり。——**むきゆう**【永世無窮】(名)世のあらん限りつきてたゆることなき。

えい-ぜん【營繕】(名)建築物のえいぜん。(修理)

えい-せん【永錢】(名)「えいらくせん」の略言。

えい-ぞく【永續】(名)ながく保ちつゞくこと。つゞきて絶やさぬこと。(繼續)

えい-そつ【鋭卒】(名)するどく強勇なる兵卒。

えい-たい【永代】(名)えいせい。ながよ。——**どきやう**【永代讀經】(名)寺院にて、永代に亡者のため讀經すること。

えい-だう【影堂】(名)祖先などの靈を祭りたる堂。

えい-だん【英斷】(名)すみやかに決斷すること。決行にためらはざること。

えい-ち【英智】(名)すぐれてかしこき才智。

えい-ち【叡智】(名)㊀最も深遠なる智識。㊁【哲】[Intellect]宇宙の本體たる理性。時空の制限を受けず因果律に支配せられざる自由なるものにして、吾人認識の形式に獨立し、思惟すべけれど認識すべからず。それ自身にして眞の存在即ち本體なり。——**せかい**【叡知世界】(名)【哲】吾人が宇宙本體の一部として存在せる位置。超感覺的即ち現象世界の對。[Intellectual world]

えい-ちう【營中】(名)㊀ぢんやの中。㊁將軍の城中。

えい-ぢう【永住】(名)ながく同じ所に住みつくこと。「—の志」

えい-ちう【裔冑】(名)すゑのちすぢ。子孫。

えい-てつ【英哲】(名)さときこと。かしこきこと。又、其人。

えい-てん【榮典】(名)㊀名譽なるためし。㊁人の名譽を表章するために設けある制度。

えい-てん【榮轉】(名)在來よりまさりたる官職又は位置にうつること。

えい-はく【曳白】(名)(白紙を曳く義)詩歌の會などにて、句を成すを得ず、徒らに料紙などを持ちて退くこと。

えい-びん【鋭敏】(名)するどくさときこと。又、感じの甚だするどきこと。

えい-ねん【永年】(名)ながき年月のあひだ。

えい-ぶん【英文】(名)「イギリス」國の言語を以て記載せる文章。

(えい-ぶん[叡聞](名) 主上の聞こしめし給ふこと。
(えい-まい[英邁](名) すぐれたること。いとまさりたること。
(えい-みん[永眠](名) 死ぬること。
(えい-や(感) 力を入るゝときの發聲。
(えい-やう[營養](名) 動植物が體質の消耗を補ひ生活力を維持すること。其作用は養料の攝取・消化・吸收又は呼吸・排泄・循環等なりとす。——えき[營養液](名) 血液の稱。
(えい-ゆう[英雄](名) 才智・能力などの拔群なる人物。
(えい-よ[贏餘](名) あまり。のこり。
(えい-よ[榮譽](名) 世にほまれあること。はえあるほまれ。——けん[榮譽權](名) 【法】榮譽の表章を享有し得る權利。爵位を稱するなどの如きこれなり。
(えい-らう[永牢](名) 徳川時代の刑罰の一、一生のあひだ牢に監禁すること。(長囚)。
(えいらく-せん[永樂錢](名) 支那明朝の永樂年中に鑄たる錢。中古より多く日本に輸入せり。
えいらく-やき[永樂燒](名) やきもの丶一種、永樂年中の製作に係るやきものを模擬して、燒きはじめたるもの。
(えい-らん[叡覽](名) 主上の御覽あそばすこと。
(えい-り[銳利](名) するどきこと。「才鋒—」。
(えい-り[營利](名) 財產上の利益をはかること。かねまうけ。えやうばい。「—の業」。——かうゐ[營利行爲](名) 【法】營利を目的とする行爲。
(えい-りよ[叡慮](名) 主上の思召(オボ)し。
(えい-ゐき[塋域](名) はかば。墓所。
(えい-ゑん[永遠](名) ながきあひだ。世のあるかぎり。「—の大計」。

(えう[要](名) ㊀かなめ。かんぢん。㊁えうよう。ひつえう。㊂ちかひ。やくそく。
(えう[妖](名) ㊀あやしきこと。㊁わざはひ。
(えう[曜](名) ㊀かゞやき。ひかり。㊁日・月・星の稱。㊂日・月・火・水・木・金・土を、日に配したる稱。
(えう[幼](名) ㊀をさなきこと。をさなきとき。㊁をさなきもの。こども。「老を扶け—を携へ」。
(えう-えう[夭夭](名、副) 年わかくみめよきさまにいふ語。
(えう-えう[杳杳](名、副) はるかなるさまにいふ語。
(えう-えき[徭役](名) 官府が人民を強制的に公用に使ふこと。ぶやく。えだち。
(えうえき-ち[要役地](名) 【法】地上權の行使によりて、利益を受くる土地。
(えう-えん[妖艷](名) つやつやしくなまめきたること。うつくしきこと。
(えう-おん[拗音](名) 熟音の一種、子音と半母音と相合して成る、清濁の二樣ありて、假名二字を連ねてこれを表はす、即ち、ちや・ちゆ・きや・くわ等の如き音。
(えう-がい[幼艾](名) 年少くみめよき女。
(えう-がい[幼孩](名) みどりご。をさなご。
(えう-がい[要害](名) 地勢險難にして敵を防ぐに適當なる所。(阨塞)。——の-いた[要害板](名) 兜の附屬品、まびさしと鉢と續く處の内部に、あてたる鐵板。
(えう-がく[幼學](名) をさなき時の學問。うひまなび。
(えう-きう[要求](名) ㊀乞ひ求むること。㊁他人に對し、或行爲を爲さんことを求むること。
(えう-きよく[謠曲](名) うたひ。

(えう-くわい[妖怪](名) へんげ。ばけもの。えうま。
(えう-くん[幼君](名) 年齡はわかき主君。
(えう-げき[要擊](名) ㊀ねらひうち。㊁まちぶせして擊つこと。
(えう-けつ[要訣](名) かんぢんの奧義。おくのて。かなめ。
(えう-げつ[妖孽](名) わざはひ。もの丶け。
(えう-けん[要件](名) ㊀すておきがたき用事。㊁或行爲に必要缺くべからざる條件。必要條件。
(えう-かう[要港](名) 軍事上重要なる所と指定せられたる港、要港部を置き其守備を掌らしめ、兼ねて軍需品又は艦船・兵器等の小修理をなさしむ。「竹敷—」。
(えう-こつ[腰骨](名) 【生】腸骨一對・坐骨一對・恥骨一對より成る骨盤。こしぼね。
(えう-さい[要塞](名) ㊀くにざかひ。邊界。㊁國防上必要なる地に設置したる永久築城、陸地要塞と海岸要塞との二種あり。——ちたい[要塞地帶](名) 國防上の必要より建設したる防禦營造物の周圍に於ける一定の區域。——はうへい[要塞砲兵](名) 要塞の衞戍として屯在せる砲兵。
(えう-し[要旨](名) かんえうなる主旨。
(えう-じ[要事](名) えうようなる事がら。
(えう-しき[要式](名) 一定の法式に從ふ事を要すること。——けいやく[要式契約](名) 【法】其成立若しくは完全なる效力に關して、法律上一定の方法に從ふを必要條件とする契約。
(えう-しや[幼者](名) ㊀をさなきもの。こども。㊁二十歲以下の者。

(えう-しやう[要償](名) 損害のつくなひをもとむること。
(えう-しゆ[幼主](名) えうくん。わかぎみ。
(えう-じゆつ[妖術](名) あやしき術。まほふ。
(えう-しよう[要衝](名) 物事のあつまり又は必ず通過すべきかなめの場所。
えう-す[夭](自、さ變) わかじにす。
えう-す[要](他、さ變) ㊀ひつえうにてあり。いりようにてあり。㊁まちぶせす。まちうく。「敵を道に—」。㊂もとむ。ねがふ。
(えう-せう[幼少](名) ㊀をさなくいとけなきこと。年齡はわかきこと。㊁わかもの。こども。
(えう-せき[遙昔](名) おほむかし。
(えう-せつ[夭折](名) わかじに。
(えう-そ[要素](名) 或事物の成立效力等に必要なる元素。もと。ねもと。
(えう-たい[拗體](名) 詩に定めたる平仄の格に合はぬ一種の詩體。
(えう-たう[夭桃](名) ㊀うつくしき桃の花。㊁よめいりどき。むすめざかり。
(えう-ち[幼稚](名) をさなきこと。えうせう。又、こども。——ゑん[幼稚園](名) 學齡以下の小兒を敎育する校舍。
(えう-ちゆう[幼蟲](名)【動】卵子より孵化して未だ成蟲とならざるもの。
(えう-ぢよ[幼女](名) いとけなき女子。
(えう-つう[腰痛](名) 腰のいたみ。腰のいたむ疾。
(えう-てう[窈窕](名) うるはしきこと。おくゆかしきこと。たをやか。しなやか。
(えう-てん[要點](名) かんえうなる個處。
(えう-どう[幼童](名) わらべ。こども。

(えう-ねん[幼年](名) をさなき年齡。いとけなきこと。——ろう[幼年囚](名) 十六歲未滿の囚人。
(えう-はい[遙拜](名) はるかにはなれたる所にありて、神佛などを禮拜すること。——じよ[遙拜所](名) えうはいする所。「神武天皇の—」。
(えう-ふ[徭夫](名) にんぷ。にんそく。
(えう-べう[杳渺](名、副) はるかなるさまにいふ語。
(えうぶつ-けいやく[要物契約](名) 【法】契約の成立條件が、たゞ當事者雙方の意思表示の合致のみならず、更に目的物の引渡しを要するものなること。
(えう-ま[幺麼](名) ちひさきこと。(微小)。
(えう-ま[妖魔](名) ㊀えうくわい。へんげ。㊁すべて人にわざはひをなすもの丶稱。
(えう-みやう[幼名](名) をさなき時の名。をさなな。
(えう-む[要務](名) 必要缺くべからざるつとめ。
(えう-めい[杳冥](名) はるか。ほのか。
(えう-や[妖冶](名) うつくしくなまめかしきこと。
(えう-よ[腰輿](名) 手にて舁(カ)き行く輿(コシ)。
(えう-よう[要用](名) ㊀ひつようなること。かんえう。㊁重大なる用事。
(えう-らん[搖籃](名) ㊀小兒を入れてつるしおくかご、時々これをうごかして、中の小兒を慰め又は眠らしむるもの。小兒のつりねだい。㊁物事發展の端緒。「文明の—」。
(えう-りやう[要領](名) 事がらのおもなる部分又はおもなる主意。えうてん。
(えう-りやく[要略](名) 必用なる所のみを取りて、他をはぶきたること。あらまし。およそ。

(えう-れい[要領](名) 「えうりやう」に同じ。
(えう-ろ[要路](名) ㊀肝要なるみちすぢ。㊁政治上の樞機に參する地位。「—の顯官」。
(ええ(感) おどろき又はなげくときなどの發聲。
(ええう[榮耀](名) ㊀さかえ。えいぐわ。㊁奢侈なる生活をなすこと。
エークル[Acre](名) 英國の地積の單位、我國の四段二十四步にあたる。
エーテル[Ether](名) ㊀【理】光・熱・電氣・磁氣の現象の想像的媒體、極めて輕微にして且彈性に富み、宇宙至る所に擴布し、彈性學等にて固體の性質を有するものと假定せらる。㊁【化】一種の香氣を有する無色の液體、「アルコホル」に硫酸を混じて蒸溜すればこれを得、流動し易く發揮し易く、又、燃燒し易きものなり、有機化合物の溶劑として用ひ、又、外科手術の際に痲醉劑として用ひらる。
エール[Ale](名) 淡色の麥酒。
卄えが[垣下](名) 「ゑんが」の略言。「—の公達」。
えがうろ[柄香爐](名) 一種の佛具、把手のつきたるかうろ。手爐。
えがち[得勝](名) こゝろえ顏なること。承知したる體にてあること。
(ええき[易](名) ㊀支那及我國に行はるゝ一種の哲學、陰陽變化の原理に基因し、神人交感の神秘に信賴し、蓍(メド)をかぞへ卦を施き、以て天地萬物の消長吉凶を說くもの、支那の古聖人伏羲氏の創始にかゝるといふ、夏の時代にも殷の時代にも、これに就きて演繹推論せし所のものありたりといへど、今は傳はらず、今傳はるは、周時代の演繹推論せし所のものにて、即ち、文王のものし、象と周公のも

のし、象と、孔子のものし、繋辭・說卦・文言となりといふ。(卦及辭の條參照)。㊁單に、蓍をかぞへ卦を施きて、人事の吉凶を說くもの、稱。うらなひ。
(えき[益](名) りえき。りやく。りとく。まうけ。
(えき[液](名) 流動する物質。しる。(汁)。
(えき[疫](名) はやりやみ。流行病。
(えき[驛](名) うまや。しゆくば。又、停車場。
(えき[役](名) ㊀人民を徵發して公用に使ふこと。えだち。ぶやく。㊁官府の工事又は國家の戰爭、其人民を徵發使用するよりいふ。「明治二十七八年の—」。
(えき-いう[益友](名) 我に利益を與ふる友人。
(えき-えふ[奕葉](名) だいだい。よゝ。
(えき-か[腋下](名) わきのした。わき。
(えき-が[腋芽](名) 【植】莖枝の側部に出づる芽。
(えき-くわ[液化](名) 氣體又は固體の變じて液體となること。
(えき-くわ[液果](名) 【植】「しやうくわ」(漿果)に同じ。
(えき-ぎう[驛驢](名) 人馬などの繼ぎ行くこと。
(えき-さく[易簀](名) (曾子が死に臨みて簀(さく)を易へたりとの故事に出づ)身分あるものゝ死去又は臨終にいふ。
(えき-しう[腋臭](名) わきが。わきくさ。
(えき-しや[易者](名) うらなひしや。賣卜者。
(えき-しや[驛舍](名) しゆくばのはたごや。
(えき-しや-さんいう[益者三友] 正直なる人・まことある人及多く物事を知れる人を、友とすれば我に益あること。
えき-す[役](他、さ變) ㊀人民を公用に使用す。えだつ。㊁もちふ。つかふ。
えき-す[役](自、さ變) ㊀ぶやくにあたる。ぶやくにあたりて行く。㊁もちひらる。つかふ。

(えき-たい[液體](名) 一定の體積を有すれど、一定の形を有せずして流動する物質、水又は油の如きこれなり。
(えき-ちやう[驛長](名) ㊀しゆくばのをさ。㊁鐵道停車場の長。
(えき-ちゆう[益蟲](名) 吾人に利益を與へ植物などの害蟲を驅除する効能ある蟲。
(えき-てい[掖庭](名) 後宮の女官などの居るつぼね。又、後宮をもいふ。
(えき-てい[驛遞](名) ㊀しゆくつぎ。うまつぎ。㊁運送遞信の事務、即ち、現制度の郵便。——きよく[驛遞局](名) 驛遞の業務をつかさどりし局。現制度の郵便局。
(えき-てう[益鳥](名) 肉・卵は食用に供せられ、羽毛は用具に、糞は肥料に供せられ、又は植物の害蟲を驅除する等の鳥類の稱。
(えき-でん[驛傳](名) しゆくつぎ。又、其車馬。
(えき-びやう[疫病](名) はやりやまひ。
(えき-ふ[役夫](名) にんぷ。つかひをとこ。
(えき-ふ[驛夫](名) 驛に雇ひつけのにんぷ。
(えき-れい[驛鈴](名) 古昔、官吏が遠路を行くとき、朝廷より賜はりし鈴、驛路の人馬を出すに用ふる公の證據となしゝもの。驛路の鈴。

[いれきえ]

(えき-れい[疫癘](名) やくびやう。えやみ。
(えき-ろ[驛路](名) うまやぢ。しゆくば。——のすず[驛路鈴](名)「えきれい」(驛鈴)に同じ。
(え-こ[依怙](名) かたびいき。へんぱ。——ぢ[依怙地](名) かたいぢ。いこぢ。執拗。——ひいき[依怙贔屓](名) 一方にのみ力をそへてやること。かたびいき。

えご-ま[荏胡麻](名) 【植】唇形科に屬する草本、葉は淡綠色にして花は白色なり、全部甚だ紫蘇に似たれど、これと異なる香氣を有す。種子は食用に供せられ、又、油を搾(しぼ)るべし。
エスペラント[Esperanto](名) (希望ある人の義、其發明者が、始めて雜誌にこれを發表せしときの匿名に出づ)一種の萬國共通語、「ポーランド」の醫師「ザーメンホフ」の創意に出で、「フランス」國人「ボーフロン」の修正せしもの、近時盛に行はる。
えせ[似非](名) ㊀似て非なること。㊁いやしきこと。笑ふべきこと。——ごと[似非事](名) 似て非なる事。又、いやしき事。——もの[似非物](名) 似て非なるもの。又、いやしく笑ふべきもの。
えそ[鯆](名) 【動】喉鰾類中えそ科に屬する魚、口は濶く齒は細鋭なり、背部淡赤黑色、腹部は銀白色、體側に二三條の碧條あり、體長三尺餘に達す、西南東海諸州に產す。(鰧魚)。
えぞ[蝦夷](名) ㊀古昔、關東より奧羽及北海道にかけて蔓延して王化に服せざりし人種。㊁北海道の古稱。——ぎく[蝦夷菊](名) 【植】菊科に屬する草、夏の末、花開く、形菊に似て、心に筒の如き細き瓣あり。あづまぎく。さつまぎく。——にしき[蝦夷錦](名) 支那產の錦の一種、模樣は多く紺地に玉をつかみたる龍を織り出だしゝもの。——まつ[蝦夷松](名) 【植】まつの一種、冬落葉す、葉長し、材は檜に似る、北海道に產す。——みそはぎ[蝦夷溝萩](名) 【植】みそはぎの一種、北海道に產す。
えだ[枝](名) ㊀植物の莖又は其支出部に更生して越年したる芽即ち冬芽の中軸部の生長したるもの。㊁手又は足、即ち、軀幹の支出。(肢體)。㊂す

べて本より分出したるもの、稱。「—河」。
えだ-あふぎ[枝扇](名) 古昔の禮式に、草木の枝を扇に代用せしもの。
えだ-がき[枝柿](名) ㊀枝につきたるまゝの柿の實。(柿餅)。㊁「くしがき」に同じ。
えだ-がは[枝川](名) 一つの河より分れ出でたる流水。(支流)。
えだ-がみ[枝神](名) 本社に附隨してまつる末社。
えだ-ざし[枝差](名) 草木の枝などの、さしいでたるありさま。「—よし」。
えだ-ずみ[枝炭](名) つゝじの小枝を燒きたる炭、上に石灰を塗る。まらずみ。よこやまずみ。
えだ-ち[役立](名) 國民を徵發して、公務に使用すること。ぶやく。へいえき。(徭)。
えだ-つ[役立](自、た四) 夫役にあたる。
えだ-つ[役立](他、た下二) 夫役にあつ。徵發す。
えだ-は[枝葉](名) ㊀えだと葉と。㊁事物の端末。すゑ。「—の議論」。
えだ-まめ[枝豆](名) 大豆の莢實の枝につきたるまゝの稱。(芋頭)。
えだ-みち[枝道、岐路](名) ㊀本道よりわかれ出でたる支路。よこみち。㊁轉じて、正路をはなれたること。「論が—に入る」。
えたり かしこし[得賢] 我ののぞむ所に、折りよく出であひて、喜び迎ふる意にいふ。
えたり やおう[得應] 物事の到來を迎へて、これに應ずる意にいふ。
えだ-る[柄樽](名) 一種の樽、大きく高き柄を付けて、朱塗りとせるもの、酒を人に贈るときなどに用ふ。つのだる。

(えつ[謁](名) おめみえ。えつけん。「—を賜ふ」。
えつ-ぎ(名) 租稅として、政府に上納するもの。
エッキス[越幾斯＝Extractum](名) 植物質又は動物質の浸液を蒸發濃厚ならしめたるもの、蒸發の度に應じて、流動のものと乾燥のものとの別あれど、何れも其物質の主要成分を包有するが故に、小量にても充分の効力を有す。
エッキス[X](名) ㊀「アルファベット」の一、未知數の符號に用ふ。㊁轉じて、未知數若しくは未知の物事にいふ語。——くわうせん[—光線＝X ray](名)「エッキス」輻射線に同じ。——ふくしやせん[—輻射線＝X ray](名)「クルークス」管内にて放電するとき、管内より發出する一種の輻射線、目に見えざれど、能く發光物をして發光を放たしむる性あり、暗體をもよく通過し得(但し金屬は不透明體なり)、該「クルークス」管の前に包封物をおき、發光板を隔てゝ見るときは、板上に現はるゝ影により、包封內の物を歷々指摘するを得べく、又、よく寫眞用感光板を侵す性あるが故に、封包物の下に感光板をおくときは、封包內の物品の影像を得べし、醫師往々これを利用して、患者の體內の模樣を檢す。
えづ-く[嘔](自、か四) へどつく。はく。もどす。
(えつ-けん[閱檢](名) とりしらべ。ぎんみ。「—す」。
(えつ-けん[謁見](名) めうへの人にまみゆること。
(えつ-さい[悅哉](名) 【動】猛禽類中たか科に屬する鳥、大きさひよどりの如し、よく小鳥を捕る。すずめだか。(雀、鷂)。
(えつ-しや[謁者](名) ㊀とりつぎ。まうしつぎ。㊁えつを求むる者。
(えつ-ぷく[悅服](名) よろこびしたがふこと。

(えつ-らん[閱覽](名) しらべみること。
えつり(名) 茅葺屋根の上に、細き竹を並べ繩にてこれを結び、其上を葺くもの。又、壁の下地をもいふ。
(えつ-れき[閱歷](名) けいれき。「よ」(攫)。
えて[得手](名) ㊀最も得意なること。殊に巧(たく)なること。㊁「えてもの」(三)に同じ。——にほをあげる 得意なる事に機(をり)を得て、其事を行ふをいふ。
えて[得](副) ともすれば。やゝもすれば。「る」、「—忘れたがる」。
えて-かつて[得手勝手](名) 我思ひに任せて、事をなすこと。わがまゝ。
えて-もの[得手物](名) ㊀我得意なるもの。㊁猿の稱。(東京地方の方言)。㊂戸のさる、即ち栓。
えて-る[得居](自、た下一) 最も得意にてあり。得てゐる。「繪に—」。
え-と[兄弟](名) 陰陽家にて、木・火・土・金・水の五行を各別に兄弟に分ちて、甲(きのえ)・乙(きのと)・丙(ひのえ)・丁(ひのと)・戊(つちのえ)・己(つちのと)・庚(かのえ)・辛(かのと)・壬(みづのえ)・癸(みづのと)に配したるもの、一にこれを十干と稱す、又、子(ね)・丑(うし)・寅(とら)・卯(う)・辰(たつ)・巳(み)・午(うま)・未(ひつじ)・申(さる)・酉(とり)・戌(いぬ)・亥(ゐ)の十二の生物に配したるものを十二支と稱し、十干と十二支とを合配したるものを稱す、これを年・月・日にあて用ふ。
えぞら-ひしくひ(名) 【動】ひしくひの一種、目の上に淡白色の筋ありて、嘴も脚も黑色なり。
えど-じだい[江戸時代](名) 德川時代に同じ。
えど-ばくふ[江戸幕府](名) 德川幕府に同じ。
えど-ばらひ[江戸拂](名) 德川時代に行はれし一種の刑罰、江戸の市中より退去せしめしこと。
えど-ぶし[江戸節](名) 俗曲の一種、おはざつま節より分れ出たるもの。

えどむらさき【江戶紫】(名) 染色の名、藍がちの紫色。(深紫)。

えどもも【江戶桃】(名)【植】「さきわけもゝ」の一名。

えどゑ【江戶繪】(名)「にしきゑ」の一名。

えな【胞衣】(名) ❶胎兒を包める膜。(胎包)。❷胎兒の胎盤の稱、其一部は母體の子宮壁に附着し、胎兒は、臍帶を以てこれと連接し、これにより營分を母體より受け又は代謝を營む。たいばん(胎盤)。――をけ【胞桶】(名) えなを入れて、土中にうづむるまげもの。おしをけ。

えならず いふにいはれず。得もいはれず。

†えに【緣】(名) えん。ゆかり。「通ふばかりの―」。

えにし【緣】(名) ゆかり。えん。

エニシダ (名)(もとオランダ語より出づといふ)【植】荳(マメ)科に屬する小灌木、葉は一個或は三個の小葉より成り、綠色なる枝は時に無葉なることあり、花は黃色にして美麗なり、觀賞用として栽培せらる。(金雀枝)。

エネルギー [Energy](名) ❶【理】仕事をなし得る能、此能は其爲し得る仕事を以て測る。「エネルギー」に二種あり、運動の「エネルギー」及位置の「エネルギー」これなり、「エネルギー」には熱・音・光・電氣・磁氣等の諸體あれど、要するに此二種の外に出でず。❷人生の精力。事を爲す元氣。――のほぞん【―の保存】=Conservation of energy【理】宇宙間にある諸物質の有するエネルギーは種々其態を變じ、或は一體より他體に移行すといへど、其總量は常に一定すといふこと。

えのあぶら【荏油】(名) えごまより取りたる油、桐油などに用ふ。

えのき【榎木】(名)【植】楡(ニレ)科に屬する喬木、葉は橢圓形にして、夏の初、葉もえぎ色の花を開く、花蕊は短五瓣に排列せる片より成り、花柱は子房の頂上の中央に位し、果實は球形なり、木材は種々の用に供せらる。(朴)。――だけ【榎茸】(名)【植】えのきに生ずるきのこ。

えのど【痃】(名) 股の下又は股の付き根の脹れ痛む疾。「むまた」

えのしまに【江島煮】(名)「うしほに」の一名。

えのみどせう【榎實胡椒】(名)【植】「こせう」に同じ。

えはう【吉方】(名)「あきのかた(明方)」に同じ。

えハチ【衣鉢】(名)(袈裟と鐵器(鉢)との稱にして、始祖即ち達磨が、二祖即ち惠可に正法眼藏を付囑せしとき、其證として袈裟と鐵器とを授けたりといふ故事に出づ) ❶【佛】沙門が其師より受けつたへたる佛教の妙義。❷轉じて、受けつたへたる學問技藝などの妙義。――をつたふ【―を傳ふ】師より其道の妙義をうけたるにいふ。

†えばやし【江林】(名) 江のほとりの林。

えひ【鱝】(名)【動】横口類に屬する魚、體は扁平にして菱形又は團扇形をなす、尾は薄く狹くして背上に附着し、鰭は擴張して體幹の周緣をなす、鰓孔は口と共に下面に開く、種類少からざれど、多くは定着魚にして、近海に棲息し通常沙底に伏す。(海鷂)。

えび【葡萄】(名) 染色の名、熟せるえびかづらの實に似たる色。赤色を帶びたる紫色。

えび【海老】(名)【動】十脚類中長尾類に屬する節足動物の總稱、體は延長し外皮は甲殼をなす、長き二對の觸角を有す、腹部はまた能く發達して頭胸部より長し、胸肢は五對ありて且尾扇あり、其種類多し。(蝦)。

†えび (名)(葉皮香の義なりといひ、又、衣服にたきしむるより衣被香の義なりともいふ) 一種の香料、せんだんのきの葉と皮とを、細末になしたるもの。(裹衣香)。

えびいろ【葡萄色】(名)「えび(葡萄)」に同じ。

†えびかづら【葡萄】(名)【植】(此類の植物に、蝦の鬚の如きものあれば、此名あるか)。(一)「ぶだう」の古名。(二)【植】「えびづる」に同じ。――いちご【葡萄苺】(名)【植】「くさいちご」の一名。

えびがに【蝦蟹】(名)【動】「ざりがに」に同じ。

えびぐさ【蝦草】(名)【植】「いぶきとらのを」の一名。

えびごし【蝦腰】(名) えびの如くに曲りたる腰。

えびざこ【蝦雜魚】(名) 小蝦の中に、小さき魚の混ぜるもの。(雜蝦)。

†えびす【夷】(名) ❶えみし(蝦夷)の訛。❷都に遠き所の蠻民。❸野蠻なる人民。

えびす【惠比須】(名) 七福神の一、其像は狩衣(カリギヌ)、指貫(サシヌキ)に、風折烏帽子を着て、鯛を釣る狀をなす、一に夷(エビ)三郎といふ。――あふぎ【惠比須扇】(名) 伊勢國山田邊より、春の始めに出す粗造の扇、注連(シメ)飾りなどにつくるもの。――かう【惠比須講】(名) 惠比須神をまつる祭禮、陰曆十月二十日、商家にてこれを行ふ。――がみ【惠比須紙】(名) 多くの紙を重ねて裁ちたるとき、角の內へ折れこみて、裁ち殘りとなりたるもの。(內折紙)。――ぐさ【惠比須草】(名)【植】荳(マメ)科に屬する草、夏より秋にかけて、葉間に花を開く、けつめい(決明)。†――ぐすり【惠比須藥】(名)【植】「きやくや」の古名。

えびすごころ【夷心】(名) 猛惡なる心。未開にしておもしろくしき心。

えびすぜに【惠比須錢】(名) 歌人等寄り合ひ協定の上、分配の出來ざる餘錢。

えびすぜん【夷膳】(名)(えびすの如く、禮を知らずといふ義か) 膳の向面を人に向けて据うるをいふ。

†えびすね (名)【植】「われもかう」の古名。(地楡)。

†えびすだひ【夷鯛】(名)【動】「あかめだひ」に同じ。

†えびすぶな【夷鮒】(名)【動】鮒の一種、肩に節の如きものあり。

えびすまつり【惠比須祭】(名)「えびすかう」に同じ。

†えびすめ【夷布】(名)【植】「こんぶ(昆布)」の古名。

えびぞめ【葡萄染】(名) ❶うすむらさき。❷織色の名、經(タテ)赤にして、緯(ヌキ)紫のもの。❸襲の色目、表は蘇芳にして、裏は花田のもの。

えびちや【葡萄茶】(名) 茶を帶びたるえび色。

えびぢやう【海老錠】(名) ❶魚形につくりたる錠。(魚鑰)。❷大なる門のくわんぬきなどにかくる錠。

えびちやしきぶ【葡萄茶式部】(名) 女學生の異稱、多くえびちや色の袴をつけしよりいふ。

えびづる【蘡薁】(名)【植】葡萄科に屬する蔓草、多く山野に生ず、春宿根より發芽す、莖・葉共に小さく、葉は掌狀に分裂し下面に淡赤色の毛を密生す、又、果實は紫黑色にして球形をなし、食用とすべく、又、以て酒を醸すべし。(野葡萄)。

えびね【海老根】(名)【植】蘭科に屬する草、葉は長くして濶く、花は總狀の穗狀花序に排列し一箇の唇瓣を有し、花瓣は帶褐紫色を呈す、觀賞用として栽培せらる。

†えびのか【蕙衣香】(名)「えび」に同じ。

えびむし【海老蟲】(名)【動】「やまめ」の一名。

†えひめ【兄姬】(名) 第一のむすめ。「―弟姬」。

えびら【箙】(名) ❶矢を盛りて背に負ふ器。❷蠶を入れて繭を作らしむる器。(蠶箔)。

［えびら(一)］

えびを【海老尾】(名)【動】さんぎよの一種、其尾蝦に似る。

えふ【葉】(名) ❶草木の葉。❷紙などの如く扁くして薄きものを數ふる語。「一―」「二―」。

えぶ【服舞】(名)「えんぶ」の略言。

えふえき【葉腋】(名) 葉と莖との間。

えふさい【葉菜】(名) おもに葉を需用する菜類。

えふしん【葉鍼】(名)【植】葉の變形にして針狀をなすもの、さぼてん・めぎ等の葉は全部變形して、ひいらぎ等の葉は下枝に若生せる葉は、葉緣變じて鍼狀の突起となる。

えふせう【葉鞘】(名)【植】平行脈葉の下部に、管狀の葉柄ありて莖を包めるもの。

えぶな【江鮒】(名)【動】「すばしり」の一名。(京阪地方の方言)。

えふたく【葉托】(名)【植】葉柄の脚部の左右にある一雙の子葉の稱。

えふにく【葉肉】(名)【植】葉の骨骼を成す部分、即ち、葉脈の部分を除きたる他の部分の總稱。

えぶり【柄振】(名) ❶さすまたの一名。(扠)。❷たなの、柄。(穢)。

えふへい【葉柄】(名)【植】葉片の下端より細長き柄を生じて、枝に附着せる部分。

えふへん【葉片】(名)【植】葉の開展して扁き部分。

えふみやく【葉脈】(名)【植】葉片の骨骼をなす脈の稱、纖維即ち維管束にて成り、莖の維管束に接續す。

えふりよくそ【葉綠素】(名)【植】葉綠體內に含有せる綠色の物質、葉の綠色を帶ぶるは、これを含有するによる。

えふりよくたい【葉綠體】(名)【植】葉肉の中にある綠色の小顆粒。

エボナイト [Ebonite](名) 彈性「ゴム」に高き溫度にて、多量の硫黃を吸收せしめたるもの、彈性を失ひて黑色の角の如し、電氣の絕緣體にして、電氣器械に廣く用ひられ、又、種々の製作に用ひらる。

えみ (名) 鎧のきはめてよく縫ひたる狀の製作。

†えみじ【蝦夷】(名) 蝦夷(エゾ)の古稱。

エム (名)(Money の頭字を取る) 金錢の隱語。

えもの【獲物】(名) ❶獵りなどして得たる鳥獸の類。(得物)。❷自分の手に得たる武器。「―をひつさげて。」

えもり【柄漏】(名) 傘の柄の上部より雨の漏ること。

えもん【衣紋】(名) ❶衣服裝束の着方。❷着物の襟を合はすこと。

えやみ【疫】(名) ❶流行性の惡病。はやりやまひ。❷おこり。(瘧)。†――ぐさ【疫草】(名)【植】「りんだう」の古名。

†えよぼろ【役丁】(名) 役(エ)に出づる男丁。

えら【鰓】(名)【動】魚類の呼吸器、數對の櫛齒狀又は板狀の鰓より成り、鰓骨に支へられて口腔の左右にある鰓室內にあり。

えらしい (形一) ❶勝れてあり。非凡なり。❷仰山(ギヤウサン)なり。大層なり。

えらび【選擇】(名) えらぶこと。せんたく。――て【選手】(名) えらびをなす人。

えら・ぶ[選擇](他,は四) ❶多き中より拔きとる。見分けて採る。えらむ。❷擧げて其職に任ず。
えらぶ・うなぎ[永良部鰻](名)[動]「うみくちなは」に同じ。
えらみ[選](名) えらむこと。えらび。
えら・む[選](他,ま四) えらぶ。(擇)
えり[襟](名) ❶頸にまとふべき衣服の部分。(衿) ❷えりに當たる頸筋。うなじ。(領) ❸カラー。
えり[魞](名) 魚を捕る具。湖などに竹を插べて、細長く屈曲したる袋状にして、魚の入るに易くして出づるに難きやうに作りたるもの。(簄)
えり・あし[領脚](名) えりの邊の髮のはへぎは。
えり・あて[襟宛](名) 衣服の襟の裏にあてて、其汚れを防ぐ布片。
えり・かざり[襟飾](名) 洋服の襟につくるかざり。絹紗・緞子・絹などにて作る。其形種々あり。
えり・ぎらひ[選嫌](名) このみきらふこと。すききらひ。
えり・くび[領首](名) えり。うなじ。(項)
えり・くづ[選屑](名) ❶えらびとりたる後に殘りたるもの。❷不用物。廢物。
えり・さき[襟先](名) 衣服の襟の下端の腰の邊にあたれる部分。
えり・しん[襟心](名) 衣服の襟に入れたる芯。又、此えんとする粗麁なる木綿。
えり・つき[襟付](名) ❶襟のやうす。❷えりもと。
えり・とり[選取](名) 好むままにえらび取ること。
えり・ぬき[選拔](名) えりぬくこと。又、えりぬきたるもの。
えり・ぬ・く[選拔](他,か四) 多くの中よりえらみ出だす。よりぬく。(甄,選)

えり・びと[選人](名) 衆人中よりえらび出だしたる人。選にあたれる人。
えり・まき[襟卷](名) 首の周圍に纏ひて、寒氣を防ぐもの。毛皮・毛布・絹又は木綿などを用ふ。
えり・まはり[襟周](名) ❶襟の周圍。❷襟のあたり。
えり・もと[襟元](名) うなじ。えりのもと。——につく 勢よき方に追從するにいふ。
えり・わ・く[選分](他,か下二) 多數の中より、えらびて善惡邪正を分つ。(甄別)
えり・わけ[選分](名) えりわくること。せんたく。
エル[呎](名) 布匹を測る西洋尺度の名。各國異同あり。
え・る[得](他,ら四)「う」の訛。
え・る[選](他,ら四) えらむ。
エルグ[Erg](名)[理]「ダイン」の力が、物體に作用して、これを「サンチメートル」だけ動かす仕事。
エレキテル(名)(Electricity の訛み誤り) 電氣。
えれき・わう(名)「えれいさう」の略言。
えん[緣](名) ❶ゆかり。ちなみ。たより。てづる。❷人倫のくわんけい。❸原因をして結果をなさしむる作用。特に、夫婦のくわんけい。「ーを結ぶ」
えん[椽](名) ❶母屋の端。❷えんがはの略言。
えん[掩](名) ❶おほふ。おほひ。❷[Occultation][天] 一の天體が他の天體をおほふこと。殊に日が惑星又は衛星をおほふこと、又は遊星が其所屬衛星をおほふこと。
えん[宴](名) 酒食を設け人を饗するとき。さかもり。

えん[艶](名) ❶つや。いろ。❷うるはしきこと。つや、か。
えん[炎](名) ❶ほのほ。ひさき。❷もゆること。❸筋肉又は臓等が、赤色・腫脹・發熱・疼痛等を起すこと。
えん[鹽](名)[化] 酸の水素を金屬元素にて置換したる化合物。鹽化ナトリウム又は硫酸銅の如きこれなり。中性の化合物にして「リトマス」液の色を變ぜず。
えん・あん[宴安](名) 身心を勞せざること。あそびたのしむこと。「ーは酖毒」
えん・いう[奄有](名) おほひたもつこと。「天下をー」
えん・いん[讌飲](名) さかもり。さかえん。
えん・いん[延引](名) 豫定の期限よりおくるること。えんにん。(遲延)
えん・えき[演繹]=Deduction(名) ❶一事より他事に及ぼしつつけて論ずること。推論。❷[論] 推論の二大法の一。既知の原理より漸次論下して、現前の事實に到達し、其理由を説明すること。歸納の對。
えん・えん[焱焱](名,副) 火のもえあがるさま。
えん・えん[奄奄](名,副) 氣息のたえだえなるさまにいふ語。
えん・か[燕下](名) のみくだすこと。
えん・か[煙霞](名) けむりとかすみと。——のへき[煙霞癖](名) 山水の跋涉を好む性質。
えん・か[緣家](名) 姻族の關係ある家。みうち。つづきあひ。えんつづき。(親戚)
えん・か[垣下](名)(「えん」は「ゐん」なるべければ、姑く從來の慣例に從ふ) 人を饗應するときの陪

侍人、主人を助けて饗應の取り持ちする人。かいもと。かいぞへ。
えん・かい[緣海](名)[地] 半島及列島にて圍繞せらるる海。日本海又は「ベーリング」海の類。
えん・かい[沿海](名) ❶海に沿ひたる陸の部分。うみべり。❷陸に沿ひたる海の部分。沿岸海。——かうかい[沿海航海](名) 沿海の諸港の間を航通すること。——ぼうえき[沿海貿易](名)「えんがんぼうえき」に同じ。
えん・がい[掩蓋](名) おほひ。
えん・かく[沿革](名) うつりかはり。へんせん。
えん・がく[緣覺](名)[佛] 十二因緣を觀じて道を悟る地位。——じよう[緣覺乘](名)[佛] 緣覺に至るのり。
えん・がは[緣側](名) 家の座敷外にある板敷。
えん・が・る[艶](自,ら四) あだくしきさまする。
えん・がん[沿岸](名) ❶水流又は海洋に沿ひたる岸。❷水流又は海洋の陸地にそひたる處。——かい[沿岸海](名) 海洋の陸地にそひたる部分。沿岸地の繼續と見做され、其國の主權の下に屬す。——ぼうえき[沿岸貿易](名) 沿岸に於ける貿易。沿岸國の主權の下に服從すべきもの。
えん・き[延期](名) 期限を延ばすこと。のびのべ。
えん・き[鹽基](名)[化] 酸を中和すべき水酸化物。即ち、水酸化「カリウム」水酸化銅などの如きこれなり。
えん・ぎ[緣起](名) ❶[佛] 因と緣と相應じて萬法の起ること。❷神社佛閣などの沿革又は利益功德などの傳説。(瑞相) ❸きざし。前兆。「ーが惡い」
えん・ぎ[演戲](名)「えんげき」に同じ。

えん・ぎ[演義](名) 事實を敷延して、つぶさにおもしろく言ひなすこと。「三國志ー」
えんき・さん[鹽基酸](名)[化] 酸の稱。其分子式の水素が、金屬に置換せらるる故に名づく。水素原子の數に從ひ、一鹽基酸・二鹽基酸・三鹽基酸等の別あり。硝酸は一鹽基酸、硫酸は二鹽基酸、燐酸は三鹽基酸なり。
えんきせい・さんくわぶつ[鹽基性酸化物](名)[化] 酸に溶解し中和して鹽を生ずる酸化物。酸化亞鉛又は酸化銀などの如きこれなり。
えんきせい・えん[鹽基性鹽](名)[化] 水酸根一部を含む鹽。
えん・きょ[燕居](名) 安息して家にあること。
えん・きり[緣切](名) 親子・兄弟又は夫婦の關係を絶ちて、他人の關係となること。「夫婦のー」(離緣)
えん・ぐみ[緣組](名) ❶えんをむすびて姻族となること。(結婚) ❷[法] 血統上親子にあらざるものが、法律上親子の關係を結ぶこと。やうえんぐみ。
えん・くわ[鉛華](名)「おしろい」の一名。
えんくわ・アンモニウム[鹽化——]=Ammonium chloride(名)[化] 白色の固體。「アンモニア」と鹽化水素との等容積を混じて製す。水に溶解し易く、其溶液は中性の反應を呈す。硇砂。
えん・くわい[宴會](名) 相會して酒のみするとさかもり。
えんくわ・カリウム[鹽化——]=Kalium chloride(名)[化] 白色立方體の結晶物。水に溶け易く、加里石鹽として天然に産す。
えんくわ・ぎん[鹽化銀](名)[化] 白色の粉末。水及酸に溶解せず、日光にふるれば紫黑色に變ず。
えんくわ・すゐそ[鹽化水素](名)[化] 鹽素と水素との直接化合によりて生ずる無色の氣體。刺戟性の臭氣を有す。食鹽に硫酸を加へてこれを製することを得。水に溶解し易く、其溶解は、鹽酸なり。
えんくわ・ナトリウム[鹽化——]=Natrium chloride(名)[化] 普通に鹽又は食鹽と稱するもの。
えんくわ・マグネシウム[鹽化——]=Magnesium chloride(名)[化] 苦味を有する潮解性の結晶體。粗製の食鹽の潮解し易きは、これを含むによる。
えんくわ・ぶつ[鹽化物](名)[化] 鹽素と他の元素との化合物。
えん・げ[艷氣](名) なまめきたるすがた。
えん・げい[演藝](名) 公衆の前にて、落語・講談・演劇又は踊りなどの遊藝をなすこと。
えん・げき[演劇](名) 役者が脚本により、種々の扮裝をなして、種々の事を演ずるもの。しばゐ。
えん・けん[延見](名) 呼びよせて對面すること。ひき入れて會見すること。
えん・けん[偃蹇](名) ❶おごりたかぶるさま又は高くそびゆるさま。❷かがりくねるさま又は舞ふさまにいふ語。
えん・げん[艷言](名) なまめきたることば。
えん・げん[延言](名) 音をのべひきていふ語。
えん・こ[緣故](名) ❶ゆかり。たより。よしみ。ちなみ。❷つづきあひ。えんつづき。
えん・ご[掩護](名) おほひまもること。
えん・ざ[宴座](名) 儀式のとき、正しくしてつく席。穩座の對。
えん・ざう[鹽藏](名) しほに漬(つ)けたるもの。しほづけ。

(えん-さん[鹽酸](名)【化】鹽化水素の水に溶けたるもの、酸性強くして能く種々の金屬を溶解し水素を發生せしめ、其金屬の鹽化物溶液を生ず、工藝上の用に供し又は藥劑として用ひらる。——かり[鹽酸加里＝Kalium chloride](名)【化】「えんそさんカリウム」に同じ。
(えん-ざん[演算](名)「うんざん」に同じ。
(えん-ざん[鉛槧](名)(支那の古昔に、鉛を以て槧(フダ)に文字を書せしより出づ)。㊀紙と筆と。㊁文詩を草すること。「—に從事す」。
(えん-じ[臙脂](名)㊀べに。㊁一種の繪具。えやうえんじ。(燕支)。
(えん-じ[衍字](名)語句の中に、あやまり入りたる不必用の字。
(えん-しつ[燕室](名)休息の室。
(えん-しふ[沿襲](名)以前の物事にまたがひ行くこと。
(えん-しふ[演習](名)㊀演じならふこと。けいこ。㊁軍隊が野外に於て、實戰的動作に熟せんためになす假設的動作。
(えん-じや[緣者](名)みうちのひと。緣家の人。
(えん-じやう[炎上](名)㊀火の气。㊁城郭殿閣など、大なる建築物の燒くること。
(えん-じやう[艶狀](名)けさうぶみ。いろぶみ。えんしよ。
(えん-じやく[燕雀](名)㊀つばめとすゞめと。㊁小人物に譬へいふ語。「—安知鴻鵠之志」。——るゐ[燕雀類](名)【動】鳴禽類に同じ。
(えん-じゆ[延壽](名)壽命の長くなること。ながいき。「—層壽散」。
(えん-しよ[炎暑](名)あしきあつさ。夏の時候。

(えん-しよ[艶書](名)戀情のほどを書きおくるふみ。けさうぶみ。いろぶみ。
えん-す[燕巢](名)雨燕(アマツバメ)の巢、色白く透明なり、支那人はこれを食用として珍重す。(燕窩菜)。
(えん-ずゐ[延髓](名)【生】後頭窩底部の斜凝下にありて下部は脊髓に連るもの、錐狀體・橄欖體・網狀體の三部分より成る、其中央菱狀窩底は諸種の神經を發出す、其作用は腦命令の傳達路となり反動路となり、又、獨立中樞(呼吸中樞・心搏中樞等)となる、生命に最も必須なるものなり。
(えん-すゐ[鹽水](名)水に食鹽を和したるもの。しほみづ。——せん[鹽水撰](名)稻・麥等の種籾を撰ぶ一方、しほみづに種子を入れて浮べるものを取り去り、更に攪(カ)きまぜてまた浮べるものを取り去り、斯くすると數回にして、沈みたるものを採りて種籾とす。
(えん-せい[延性](名)【理】物質の具有する性質の一、引き伸ばし得ること。
(えん-せい[炎精](名)㊀ほのほ。(火焰)。㊁かげろふ。(陽炎)。
(えん-せい[厭世](名)世をうきものとなすこと、世の中をいとふこと。樂天の對。——くわん[厭世觀](名)㊀世界に對する悲觀。㊁自家の希望は破れ進取の意氣沮喪し、萬事に對して興味を有せざること。——しゆぎ[厭世主義＝Pessimism](名)【哲】此世界は苦惱を以て充たされ、決して滿足に到達するものにあらずとし、現世を脫離して以て滿足を得べしとなす主義。悲觀主義。
(えん-せう[延燒](名)火災などのもえひろがること。
(えん-せう[焰硝](名)㊀硝石の一名。㊁發火

藥の一名。——び[焰硝火](名)芝居にて妖怪などの出づるときなどに使用する焰硝の火。
(えん-せき[宴席](名)えんくわいの席。
(えん-ぜつ[演說](名)公衆の前にて、意見を陳述すること。「政談—」。——くわい[演說會](名)えんぜつの會合。
(えん-そ[鹽酢](名)㊀鹽と酢と。㊁酒と醬油と。㊂味噌の異稱。
(えん-そ[鹽素](名)【化】氣體元素の一、二酸化「マンガン」を鹽酸と共に熱すれば發生す、綠黃色にして惡臭を有す、空氣より二倍重し。
†えん-ぞ[艶書](名)「えんしよ」に同じ。——あはせ[艶書合](名)歌あはせの類、えんぞを作り、左右を合はせてかちまけを爭ふもの。
(えんそく-こ[堰塞湖](名)【地】せきとめられたる水のたゝへてなりたる湖。
(えんそさん-カリウム[鹽素酸——＝Kalium chloride](名)【化】水酸化「カリウム」の溶液を沸騰して鹽素を通ずるとき生ずる無色板狀の結晶體、熱すれば分解して酸素を遊離するを以て、可燃物に混ぜば點火し易からしむ、醫藥・燐寸(マッチ)・花火又は爆發物等に用ふ。
(えんそぞく-げんそ[鹽素族原素](名)【化】「ハロゲン」元素に同じ。
(えん-たい[延滯](名)のびとゞこほりてはかどらざること。「事務の—」。
(えん-だい[緣臺](名)こしかけだい。
(えん-だい[演題](名)えんぜつの題目。
(えん-たう[鉛糖](名)【化】白色の結晶體、酸化鉛を醋酸に溶解して得、通常の溫度にては一[illegible]半の水に溶解す。醋酸鉛。

(えん-だう[羨道](名)天子などの通りみちに布などをまきたるもの。
(えん-だう[沿道](名)行路に沿ひたる處。みちぞひ。
†えん-だ-つ[艶立](自、た四)艶にあだ〳〵しきさまをなす。
(えん-たん[鉛丹](名)【化】酸化鉛を空氣中にて徐かに熱するとき生ずる赤色の粉末、顏料に用ひ、又、工藝用に供せらる。たん。
(えん-だん[緣談](名)夫婦又は養子の緣をむすばしめんとする相談。
(えん-ちやう[延長](名)㊀長く延ぶること。又、長く延ばすこと。「鐵道線路の—」。㊁ひろがり。はゞ。㊂【數】有限直線の一端より外へ引きのばしたる部分。——せん[延長線](名)ひきのばしたる線。又、のびたる線。「海岸—」。
(えん-ぢん[烟塵](名)㊀ちりほこり。㊁世の中の煩はしき俗事。
えん-づき[緣附](名)嫁入りすること。よめいり。
えん-づく[緣遠](名)緣の都合。緣次第。
えん-づ-く[緣附](自、か四)結婚す。妻となる。とつぐ。よめいる。
えん-づ-く[緣附](他、か下二)夫婦の緣を結ばしむ。とつがしむ。よめいらす。
(えんづける[緣附](他)「えんづく」の訛。
(えん-てん[炎天](名)㊀夏の頃の極めてあつき空。㊁夏の頃の日の照るところ。
(えん-でん[鹽田](名)しほはま。
(えん-とう[煙筒](名)㊀屋上などに、高く設けあるけむりだし。えんとつ。㊁きせる。煙管。
(えん-どく[鉛毒](名)なまりの含有する毒。

(えん-とつ[烟突](名)屋上などに、高く築きあげたるけむりだし。えんとう。
えん-どほ-し[緣遠](形、一)然るべき夫婦の緣を結ぶべき期遲し。良緣の到來遲し。
えん-に[艶](副)㊀あだ〳〵しく。あだめきて。㊁優美に。上品に。「—盗ちらひたまひて」。
(えん-にち[緣日](名)(有緣日の略言)神佛などの祭日。「北野の—」。(香期)。
(えん-にん[延引](名)えんいん。
(えん-ねつ[炎熱](名)夏のあつさ。
(えん-ねん[延年](名)㊀よはひを延ばすこと。長壽。㊁比叡山興福寺などにて行ひし一種の舞ひ、歌人歌をうたひて舞ひたりといふ。——さう[延年草](名)【植】百合科に屬する草、地上莖は其頂上に一箇の花を生じ、萼は三個あり輪生して綱脈を具す、花瓣は帶紫色にして鈍頭を有し萼より短かし。たちあふひ。えんれいさう。
†えん-の-ざ[宴座](名)古昔、大嘗のとき公卿にたまはりし座席。
(えん-ばい[鹽梅](名)㊀鹽漬けのうめぼし。㊁食物の味ひ又は調理。あんばい。㊂政事を調へ民心を和ぐること。又、事務の整理。
(えん-ぱく[鉛白](名)【化】顏料に用ふる白色の粉末、鉛板を醋に浸して後、空氣及炭酸に作用せしむるか、若しくは酸化鉛を醋酸に溶解して、無水炭酸と通ずればこれを得、人身に害あり。
(えん-ばん[鉛版](名)組みあげたる活字を紙型にとり、これに鉛を鑄込みて作る印刷版。「ステロ」
(えん-び[燕尾](名)纓(エイ)に同じ、古昔の製作は、殆んど、燕尾に似たりしより此名あり。——がた[燕尾形](名)つばめの尾の如く、細長くして二つ

にわかれたるもの。——ふく[燕尾服](名)今日の通常禮服、上着の下服のあたりより前をかきおとし、後は割れて燕の尾の如し、故に此名あり。
(えん-び[燕飛](名)擊劍にて、燕の飛ぶ如く、輕にちうがへりすること。
(えん-びき[緣引](名)關係あること。(緣故)。
(えん-ぴつ[鉛筆](名)一種の筆、普通の筆把(フデヅカ)大の木の中に、鉛墨を入れたるもの。もくひつ。
†えん-ぶ[厭舞](名)舞樂の始めに奏する舞ひ、邪鬼を降伏し災殃を消する姿なりといふ。
エンブ[閻浮](名)【佛】(い)「エンブダイ」の略言。(ろ)「エンブダごん」の略言。——ダイ[閻浮提](名)【佛】(梵語 Yambu-dvipa)印度大陸の稱、一に南贍部州といふ。——ダ-ごん[閻浮提金](名)【佛】閻浮提に大林ありて、中に樹あり、其果の汁物に點ずれば金を成す、流れて河に入り河底の石を染めて金となす、其色赤黃にして紫焰を帶ぶといふ。(勝金)。†——の-み[閻浮身](名)【佛】凡夫の身。現世の人。
(えん-ぶん[艶文](名)えんしよ。けさうぶみ。いろぶみ。
(えん-ぶん[艶聞](名)色めきたる風聞。
(えん-ぶん[鹽分](名)しほけ。
(えん-ぺん[緣邊](名)㊀緣故ある家。㊁ふち。まはり。
(えん-ぽう[延袤](名)ひろさ。ひろがり。
エンマ[閻魔](名)【佛】(梵語 Yama, 閻魔又は琰羅闍 Yama-raja(閻魔羅闍)の略言にして、雙王と譯す)兄妹あり地獄の主にして、人の死後、其生前の善惡を判じて賞罰を加ふといひ傳ふ、又、苦樂並び受くる義なる故に雙といふともいふ、其像もと普通の佛像に似て、左に人頭をつけたる幢(ハタ)を持ちて水牛に乘れるものを描

きしが、近時のものは、支那風の衣服にて、忿怒の相をなす。——がほ[閻魔顏](名) ゑかみづら。ぶすづら。——だいわう[閻魔大王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。——てん[閻魔天](名)【佛】前條に同じ。——てんく[閻魔天供](名)【佛】「エンマ」天をまつるわざ。——ラ[閻魔羅](名)【佛】(梵語閻魔羅闍の略。「エンマ」の條を見よ。)「エンマ」に同じ。——わう[閻魔王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。

(えん-む)[煙霧](名) けむりと霧と。「——濛々」。

えん-むすび[緣結](名) ㊀えんぐみ。結婚。㊁遊女などのする一種の遊戲、數多の男女の名を紙片に記して捻り、これを無心に結びて配合をうらなふこと。

(えん-めい)[延命](名) いのちの長く延ぶること。——ぎく[延命菊](名)【植】「ひなぎく」の一名。——さう[延命草](名)【植】「えんれいさう」の一名。——そくさい[延命息災](名) いのちながくして災難なきこと。——ぶくろ[延命袋](名) 俗間に唱ふる寶の一、錦の袋の腹を脹らせ口を括りたる形を畫けるもの。

(えん-ゆ)[緣由](名) ゆかり。たより。てづる。

エンラ[閻羅](名)【佛】(梵語閻魔羅闍の略。「エンマ」の條を見よ)「エンマ」に同じ。——にん[閻羅人](名)【佛】地獄の獄卒。——わう[閻羅王](名)【佛】「エンマ」の尊稱。

(えん-らん)[延攬](名) 我味方にとりこむこと。「英雄を——す」。

(えん-り)[厭離](名) いとひてはなれ去ること。——ゑど[厭離穢土](名)【佛】極樂に生まるゝため、此世を厭うて離れ去ること。

(えん-るゐ)[緣類](名) 結婚に因るつゞきあひ。

(えん-るゐ)[鹽類](名)【化】おもに鹽基及酸の化合物。——せん[鹽類泉](名) 鹽類を含む鑛泉。

(えん-れい)[艷麗](名) つやつやしく麗しきこと。

(えん-れい)[延齡](名) 「えんめい」に同じ。——さう[延齡草](名)【植】「えんねんさう」に同じ。

(えん-ろ)[沿路](名) えんだう。みちぞひ。

(えん-を)[厭惡](名) いとひにくむこと。いやに思ふこと。

†えんをん-の-ざ[宴穩座](名) 宴座と穩座と。

お

お 「あ」と「う」との中間母音「う」よりも唇を稍や廣く舌を稍や低くして發す、五十音圖に於て、安行の第五に位し、於列の古・曾・登・乃・保・毛・與・呂・遠の假名となる。

お——[御](接頭) ㊀(「おほ」の約)或語に冠して尊敬又は鄭重の意を表はす語。「——ふみ」「——つくゑ」。㊁中古以來、婦人の名に冠する語。「——梅」「——秋」。

(お)(感) 俄かなる物事に驚きたるときの發聲。「——これは——」。

オーヴァーコート[Over-coat](名) 外套。

オーム[Ohm](名)【理】電氣抵抗の單位、卽ち起電力一「ヴォルト」にて電流一「アンペーア」の通ずるときの抵抗にして、横斷面一平方「ミリメートル」長さ一〇六・三「センチメートル」の水銀の抵抗に同じ。——のていりつ[——の定律]=Law of Ohm]【理】電流の強さは、起電力に正比例し抵抗に逆比例すといふこと。

(おあし)[料足](名) 錢の異稱。

(お-あひだ)[御間](名) 物事の中間に在りて、何方にも適當せざるさまにいふ語。

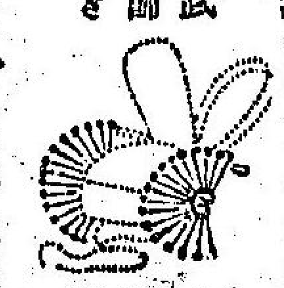
おい[老](名) ㊀多くの年を身に積むこと。年つもりて身體衰ふること。老ゆること。㊁年よりたる人。としより。「——もわかきも」。——をやしなふ[養老]老體の養生をなす。又、老人によくしてあてをなす。

(おい)(感)(同輩又は下位のものに對して用ふ)㊀呼びかけられて答ふる聲。㊁他人をよびかくるに發する聲。「——どこへゆく」。——おい(感)㊀前條に同じ。㊁泣きて發する聲。「——と泣く」。

†おい-おい-し(形、二) 老人らし。

†おい-かがまる[老屈](自、ら四) 年老いて腰曲がる。年老いて體衰ふ。

おい-かけ[老懸](名) 古昔、武官のかぶる冠の左右に着けし飾り、菊花を半切にしたるが如きもの。ほゝすけ。(綏、類助)。



[おいかけ]

†おい-がる[老嗄](自、ら下二) 年老いて聲枯る。

おい-がれ[老嗄](名) おいがれたること。

おい-き[老木](名) 年を積みて、幹枝などの垂れ屈(カ)まりたる木。

†おい-さた(感) 身構へして待つときの發聲。

(お-いくつ)[御幾歲](名) 人の年齡を問ふにいふ語。

おい-くつ[老朽](自、た上二) 老いて無用の人となる。

おい-くづる[老頹](自、ら下二) 老いて元氣なくなる。

おい-こみ[老込](名) おいておとろへたること。らうする。「——姿の旅どの」。

おい-こむ[老込](自、ま四) おいておとろふ。らうすゐす。

†おい-さぶ[老進](自、は上二) 年を積みて老いかさなる。

†おい-さらぼふ(自、は四) 極めて老衰す。年よりてよわりはつ。

おい-し[甘](形、二) 美味なり。うまし。

おい-つむ[老積](自、ま四) 年つもる。老いの身となる。「忍に——」。

(おいて)[於](接)(「おきて」の音便)ありて。にて。

(お-いで)[御出](名) ㊀出づの敬語。「御門を——になる」。㊁「居る」の敬語。「奥に——あそばす」。——おいで[御出御出](名) 手まねて人を呼ぶこと。

(おいてきぼり)(名) おきざり。(東京地方の方言)。

(お-い-でる)[御出](自、た下一) ㊀行く又は去るの敬語。㊁「居る」の敬語。㊂「來る」の敬語。㊃「出づ」の敬語。

(お-いど)[臀](名) 尻の異稱。

†おい-なみ[老次](名) 老の加はること。

†おい-の-なみ[老波](名) ㊀老の加はるを、波のよするにたとへいふ語。㊁老いて額に皺よるを、波の皺にたとへいふ語。

おい-はつ[老果](自、た下二) 甚しく老いおとろふ。

†おい-ばむ[老](自、ま四) 老人めく。

(お-いへ)[內室](名) 人の妻の稱。

お-いへ[御家](名) 貴人の一家の敬稱。——さうどう[御家騷動](名) 貴人の一家が、嬖臣愛妾などのために騷動を起せること。——ほほ[御家頰](名) 兜の附屬品、めんぽほの皺なく滑かに作りたるもの。——もの[御家物](名) 御家騷動を脚色(シグ)としたる芝居。——りう[御家流](名) 書體の一、尊圓法親王の筆法を傳へたるもの、德川時代の公文書は此書體に限れり。

†おい-ぼく[老耄](自、か下二) 老いて心おろかになる。らうまうす。

†おい-ぼる[老耄](自、ら下二) 年老いて心にぶくなる。おいぼく。らうまうす。

†おい-ぼれ[老耄](名) おいほれたること。又、其人。

おい-ぼれ[老耄](名) ㊀「おいほれ」の訛。㊁老人をのゝしりていふ語。

(おい-ぼれる)[老耄](自) 「おいはる」の訛。

(おい-まつ)[老松](名) ㊀年を積みたる松。㊁俗謠の小唄の名。

†おい-ゆく[老行](自、か四) 次第に年よる。

†おい-ら[己等](代) われら。(東京の方言)。

おいらか(名) おとなしきこと。おんおんやう。

(おいらく)[老](名) 老い行くこと。

(おい-らん)[花魁](名) ㊀東京の遊郭にて、姉女郎の稱。(粉頭)。㊁轉じて、娼妓の稱。

おい-り[御入](名) 人來の敬稱。「上使の——」。

(お-いる)[老](自) 「おゆ」の訛。

(お-いろ)[御色](名) 「べに」の異稱。(德川時代の御殿女中の語)。

(おう-あ)[歐亞](名) 「ヨーロッパ」洲と「アジア」洲と。「——の天地」。

(おう-うつ)[蓊鬱](名) 樹木の茂げれるさまにいふ語。

(おう-か)[謳歌](名) ㊀衆人聲をそろへてうたふこと。㊁衆人其德をほめたゝふること。

(おう-き)[應器](名) 「ハチ」(鉢)の異稱。

(おう-きふ)[應急](名) 急場のまに合はすること。

(おう-ぐ)[應供](名)【佛】(人天の供養をうくる意)佛の尊稱、如來十號の一。

(おう-くわ)[歐化](名) 「ヨーロッパ」洲の諸國の風俗思想などをまねて其如くなること。

(おう-げ)[應化](名)【佛】佛が時機に應じ、本體を改變して假體を現ずること。

(おう-けつ)[甌穴](名)【地】急流の激するために、淺間に生じたる凹處。

(おう-さい-や)(感)(「おうさりや」の音便にして、おう然りやの義)三番叟を舞ふときの掛け聲。

(おう-しやう)[毆傷](名) ㊀人に暴行を加へて傷(キズ)をおはすこと。㊁うちきず。うたれきず。

(おう-しよう)[應鐘](名) ㊀十二律の一。㊁陰曆十月の異稱。

(おう-じん)[應身](名)【佛】如來の三身の一、如來が機に應じ物に接し、釋迦と現じ彌勒と現じ色身を現じて、法を說き衆生を度すといふこと。——ブツ[應身佛](名)【佛】色身を現じたる如來。

おう-ずる[應](自、さ變) ㊀人の言に答ふ。こたふ。㊁仕向けに隨ふ。したがふ。「指揮に——」。㊂適當す。かなふ。「分に——」。㊃和して起る。つれて生ず。「天下響の如く——」。

(おう-せつ)[應接](名) ㊀あひしらひ。もてなし。㊁めんくわい。であひ。——しよ[應接所](名) おうせつをなす場所。

(おう-せん)[應戰](名) 敵の攻擊に應じて戰鬪すること。

(おう-そ)[應訴](名) 原告の提起したる訴訟に對して被告となること。

(おう-だ)[毆打](名) 人の身體に暴行を加ふること。

(おう-たい)[應對](名) 人に面會して、其問ひにこたふること。うけこたへ。

(おう-だ-さうしやう)[毆打創傷](名)【法】人に暴行を加へ又は詭計を用ひて、其身體を傷害す

こと。——ざい[毆打創傷罪](名)【法】暴行又は謀計を以て、故意に他人の身體を傷害し、若しくは故意なくして死に致したる犯罪。

(おうだ-ちし[毆打致死](名)【法】人を殺すの故意なきに、毆打して死に致したること。

お-うた-どころ[御歌所](名) 宮中に置かれたる一局、陛下の御詠歌に關する事を掌り、且つ臣民の詠進を管理する所。

(おう-たふ[應答](名) あうたい。うけこたへ。

十おう-ぢ[首](名)「おびと」の音便。

(おう-と[嘔吐](名) へどつくこと。はき。

十おう-な[女](名) をんな。め。

十おう-な[老女](名) おいたる女。(嫗)。

十おう-な・し(形、一)「おくなし」の音便 おく深からず。あさはかなり。

(おう-はう[應報](名) 善惡の作業に對して、現ずる吉凶のむくい。

(おう-ぶん[應分](名) 身のほどにかなふこと。

(おう-ぶん[歐文](名)「ヨーロッパ」洲諸國に行はるゝ綴音文字。横文字。

(おう-へん[應變](名) 不慮の場合には、それに應じて事を行ふこと。「臨機—」。

(おう-ぼ[應募](名) つのりに應ずること。——かかく[應募價格](名) 公債又は株式等の募集に應じて、其額面に對する實際の拂ひ込み金額、例へば、公債額面百圓に對して、九十五圓を拂ひ込まんとするときは、其九十五圓をいふ。——しや[應募者](名) つのりに應ずる者。

(おう-よう[應用](名) ㊀其場合に應じて其物事をはたらかし用ふること。㊁其原理を實際にはたらかし用ふること。「—化學」。「—植物學」。「—經濟學」。

十おう-よ・る[奥寄](自、ら四)「おくよる」の音便 奥の方へよる。

(おう-ろう[甌窶](名) 高くして狹く傾きたる土地。

(おう-えん[應援](名) たすけ。かせい。すくひ。えんぺい。すけぜい。

(お-えつ[嗚咽](名) 悲愁にさへぎられてむせぶこと。又、むせびなき。

おお(感) ㊀古昔、貴人の出行あるとき、先驅が行人を戒めし聲。警蹕(ケイヒツ)の聲。㊁俄かなる異變にあひ又はわすれたる事を思ひ出しゝときなどの發聲。

{お-おさへ[御押](名) 人よりさゝれたる杯を押さへて、更に重ねて飲ましむること。

お-が[大鋸](名) 大なるのこぎり。

お-かう[御講](名)【佛】我國佛教の各宗にて、其開宗の命日などに行ふ佛事。

お-かがみ[御鏡](名)「おかがみもち」の略言。——もち[御鏡餅](名) 圓く扁く鏡の如き餅、神事・祝賀等に用ふるもの。

おが-くづ[大鋸屑](名) 大鋸(おが)にて材木をひきたる屑。ひきくづ。

お-かげ[御蔭](名) たすけ。みやうが。かご。(庇蔭)。——まゐり[御蔭參](名) 諸國より多人數のもの打ち揃ひて、或時期に、伊勢の大神宮に參詣すること。

おか・す[犯、侵](他、さ四) ㊀法度(ハット)又は徳義にそむきたる事をなす。「法律を—」。㊁人を陵ぐ。人を凌(シノ)ぐ。㊂攻め入る。奪ひとる。㊃觸れ難き事を敢て爲す。「白刃を—」(冒)。㊄姦淫す。㊅關係をつく。わづらはす。「兵事を以て諸侯を—」。

おか・す[冒](他、さ四) 他人の姓を稱す。

十お-かず[御數](名) 種々調理して、數を具ふるもの、(菜)飯のさい。

お-かた[御方](名) ㊀人の敬稱。㊁人の妻女の敬稱。——ごしよ[御方御所](名) 古昔、將軍家又は大臣家などの男子の部屋住みの稱。——すまゐ[御方住居](名) 前條に同じ。——ばうちやう[御方庖丁](名) 和泉國堺より出す庖丁、其庖丁をつくり出しゝものが、事に工夫を補助せしめたる事あるより此名ありといふ。——めく(自、か四) 貴人の妻らしくあり。

お-かちん(名) 餅の異稱。かちん。

お-かど[御門](名) 門の敬稱。{——ちがひ[御門違](名) めざす所の正を失すること。

(お-かは[御厠](名)「おかはや」の約)小兒の便器。おまる。(虎子)。

おが-ひき[大鋸挽](名) のこぎりにて、材木を挽くことを職業となすもの。こびき。

{お-かひと[御蠶](名) ㊀かひこ。㊁絹。——ぐるみ[御蠶括](名) 上より下まで絹物の衣服を身に纏ひたること。

十お-かべ[御壁](名)「とうふ」の異稱。(女房詞)。

おかま-こほろぎ[御竈蟋蟀](名)【動】直翅類中螽斯科に屬する蟲、全體赤色にして後肢頗る長く、長刺あり、翅と聽器とを缺き、跗節は側扁なり、晝間は床下に棲み、夜間は多く竈に來る。えんのしたこほろぎ。えびこほろぎ。(竈馬)。

お-かみ[御上](名) ㊀みかど。朝廷。主上。(官家)。㊁政府。官廳。「—の御無理は御もつとも」。㊂貴族の敬稱。

(お-かみ(名) 料理屋又は下宿屋の女主人。——さん(名) 中流以下の人の妻の敬稱。

{お-かめ[阿龜](名) ㊀面頰にして低鼻なる婦人の顏の假面。㊁お龜の假面に似(ニ)たる顏の女をあざけりていふ語。㊂「おかめそば」の略言。——ざさ[阿龜笹](名)【植】「ごまいざさ」に同じ。——そば[阿龜蕎麥](名) つゆそばの一種、かまぼこ又は松茸などをいれたるもの。

{お-かん[御燗](名) 酒を煖むること。又、酒の煖り。

おかん-あげ[御髮揚](名)「かんは、かみの音便」貴人の髮を結ふ人。

十おき[息](名)「いき」に同じ。

おき[沖](名) ㊀海のはるか岸を離れたる處。㊁湖の底深き處(澳)。㊂田畠原野の遠く開けたる處。

おき[燠](名) ㊀紅熱せる炭火。㊁薪のもえはてゝ、炭火の如くなれるもの。(熾)。

おき[置](名) おくこと。「一日—」「二日—」。

{おきあがり-こぼふし[起上小法師](名) 達磨(ダルマ)人形の底に錘(ツモリ)をつけたる小兒の玩具、これを倒すも、底の錘の重さにより直ちに起き直るやうに造る。おきやがりこぼし。(不倒翁、起居還字)。

おき-あが・る[起上](自、ら四) 臥したるものがおきたつ。

おき-あげ[置揚](名) 高蒔繪などをなすに、地に漆胡粉を盛りて高くすること。「佛物をおくこと。

おき-あげ[置上](名) 器物を高くふくために、下に

{おき-あさり[沖淺蜊](名)【動】あさりの一種、殼厚く毛多く、種々の斑紋あり。「ひ。

{おき-あはせ[置合](名) とりあはせ。あしらひ。

十おき-あみ[置網](名)「まちあみ」に同じ。

おき-かき[燠搔](名) ㊀おきをかきたて又はかきよする鐵器。㊁おきを持ちはこぶ鐵器、形ひのしに似たるもの。(熾鼻)。「くぬこ。

{おき-がけ[起掛](名) 臥床より起きいでし、ほど

おき-がた[置形](名) 布に模樣を染めずして、絹の具を置きたるもの。そめがたの對。

おき-かへ[置換](名) ㊀かれとこれとをとりかへおくこと。㊁【化】一物質が或化合物にあひて、これを分解し、其一成分と交換してこれを析出すること、例せば、水に「ソヂウム」を投ずれば、水の成分なる水素の一部は、瓦斯となりて發散し、「ソヂウム」は殘餘の部分と結合して、苛性曹達を生ずる如きこれなり。㊂【數】代數式中の文字を其數値に替き改むること、又、聯立方程式にて、一の未知數を他の未知數にて表はして代ふること。

おき-かへ・る[起返](自、ら四) 起きなほる。おきあがる。

オキクルミ(名)「アイヌ語 Okikurumi」㊀蝦夷地をひらきたる神。㊁源義經の尊稱。

おき-ごたつ[置炬燵](名) 行火(アンクワ)の如く、匣の内に爐を設けて、坐上におくこたつ。(火閣)。

おき-ざより[沖鱵](名)【動】「だつ」の一名。

おき-ざり[置去](名) 他を打ち捨てゝ、おのれ一人立ち去ること。「妻を—にす」。

{おき-しな(名) おきがけ。おきながら。

おき-ずみ[置墨](名) 墨を用ひて頭髮の生へ際にぬり又は眉を描くこと。又、其墨。

十おき-そ[沖](名) おき。「—の風」。

十おき-つ[掟](他、た下二) 定む。きむ。

十おき-つ-かぜ[沖津風](名) 沖よりふきくる風。

おき-つけ[置附](名) 其處へすゑおきて、他へ移さぬこと。

十おき-つ-しまね[沖津島根](名) 沖にある島。

十おき-つ-しまもり[沖津島守](名) しまもり。今の島司の如きもの。

十おき-つ-しまやま[沖津島山](名) 海中にある島の山。「えうしなか」

十おき-つ-しらなみ[沖津白波](名) 沖に立つ

十おき-つ-すたへ[奥津棄戸](名) 棺を地にうずめ、石をつみかさねて、其上に土を盛りたる墓。

おき-つ-だひ[興津鯛](名) ㊀【動】「あまだひ」の一名。㊁あまだひを鹽乾しにしたるもの、駿河國興津の名産。

おき-つち[置土](名) 更にあき添へたる土、又、本地の上に高くおきたる土。

十おき-つ-どり[沖津鳥](名) 沖に居る水鳥。

十おき-つ-なみ[沖津浪](名) 沖にたつ波浪。

十おき-つ-ふね[沖津舟](名) 沖をこぎゆく舟。

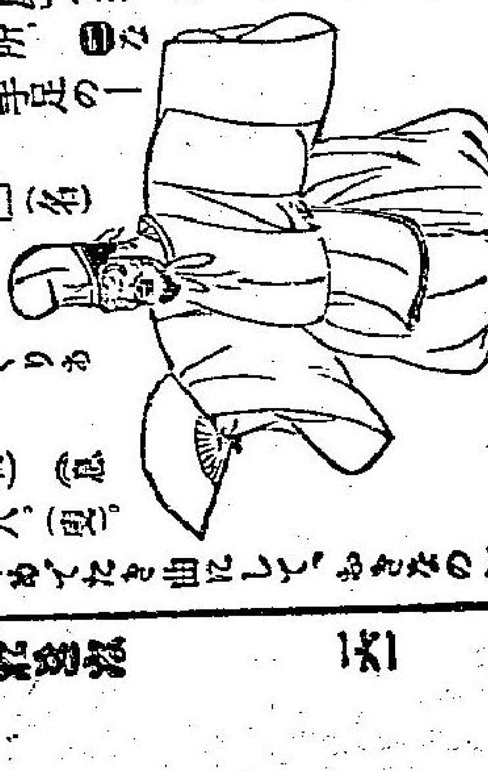
おき-て[掟](名) ㊀さだめ。きまり。㊁法制、規定。㊂田畠の小作。

おき-てがみ[置手紙](名) 面談のかはりに、用向きをかきたゝめ置く手紙。

{おき-てぬぐひ[置手拭](名) 頭又は肩などに手拭をおくこと、又、其手拭。

おき-どころ[置處](名) ㊀ものを置くべき所。又、物を置きたる所。㊁なすすべ。ほうやう。「手足の—を知らず」。

おき-どこ[置床](名) 處を移し得べき床の間、即ち、床の間のさまにつくりある臺。



おきな(二)

おき-な[翁](名) (息長の略) ㊀老人。(叟)。㊁能樂の一、翁めくたる曲にして、おきなの假面

をかぶりて行ふ。——アンドウ［翁行燈］（名）古昔、芝居の顔見世の時に掛けし方形のアンドウ。——がひ（ーガイ）［翁貝］（名）【動】どぶがひの一種、色白し。——ぐさ［翁草］（名）【植】

［（い）おきなぐさ］

（い）菊科に屬する宿根草、葉互生、紅色の小花を開く。花瓣は六個あり。えびやまさいど。うなゐひなど。（白頭翁）。（ろ）菊の異稱。（は）松の異稱。

おきな・さ・ぶ［翁さぶ］（自、は上二）年稍もりて老人めく。

おきな・びと［翁人］（名）老人。おきな。

おぎな・ふ［補］（他、は四）❶不足をたす。かけたるをふさぐ。❷ぬぎなひ、ひゞぞうりを用ふ。

おぎなひ［補］（名）おぎなふこと。——ぐすり［補藥］（名）身體滋養のための藥劑。

おきな・はゝ（ーナハ）［水繩］（名）魚を捕るに用ふる繩。

おきな・わたし［翁渡］（名）昔時、芝居の顔見世のとき、祝儀として式三番を舞ひしを。

おきな・ほ・る（ーナホル）［起直］（自、ら四）ふしてありしより起きて坐す。

おきぬけ［起拔］（名）寢起きたるまゝなると。

おぎぬ・ふ（ーヌウ）［補］（他、は四）「おぎなふ」に同じ。

おきの・たいふ（ータユウ）［沖大夫］（名）【動】あはうどりの一名。

おきの・ゐる（ーイル）［除］（他、ら四）價をかりて、物品を購買す。かけにて買ふ。

おきび［置火］（名）拔火。

おき・ふし［起臥］（名）❶起くるとふすと。❷居常の意にもいふ。

おき・ぶみ［置文］（名）書きのこしおきたる文書。かきおき。おきてがみ。

おき・まどは・す（ーマドワス）［置惑］（他、さ四）見わけがたきまでにおく。

おきまり［御決］（名）其れに定まりてあると。——もんく［御決文句］（名）つねに口にする文句。いひぐさ。

おき・みやげ［置土産］（名）立ち去るときに、居遺れる人に留めて與ふるもの。（留遺）

おき・めばる［沖目張］（名）【動】「あかめばる」の略言。

おき・もの［置物］（名）❶床の間などに据ゑ置きて、かざりとする器物。「獅子の—」❷其位地に立てども其權能なく、物事すべて配下のものゝ手に成る人をあざけりていふ語。

おきやがりこぼし（名）「おきあがりこぼし」の訛。

おきやく［御形］（名）【植】「ごぎやう」の一名。

おきやん（名）妙齢の女子の擧動かろ〴〵しくして臆面なきこと。又、其人。

おきよ（名）下女。かひ。（京阪地方の方言）

おき・よどころ［御淸所］（名）❶古昔、貴人の膳部を取り扱ひしところ。❷もの忌みの中に居りし所。

おきる［起］（自、か上一）「おく」の訛。

おき・ろく［隱岐綠］（名）【鑛】「おきろくしやう」の略言。——しやう（ーロクショウ）［隱岐綠青］（名）【鑛】

ろくしやうの一種、繪の具に用ふ。昔時、おもに隱岐より出でし故に此名あり。

おきろ・なし（おきろなく、き、し）（形、一）宏大無量にて、はかり得られぬほどなり。

おき・ゑ［置餌］（名）鷹を飼ふ餌。

おく［奥］（名）❶室の隅。すみ。❷外面〔遠き内部〕。内へ入りこみたる所。「—庭」❸物のつめ。最末。「卷の—」❹貴人の妻の稱。❺貴族などの妻女の起居する所。「—づとめ」「—家老」❻物事の秘密。「心の—」❼深くして知り易からざる意義。❽陸奥（みちのく）の略言。「—の海」

おく［置］（他、か四）❶一定の場所にすゆ。❷埋葬す。はうむる。❸間ひだ。〳〵に立てず（措）❹豫め爲す。「取て—」「見て—」❺手許に留む。「預り—」❻家内に雇ふ。「亭夫を—」❼預く。「質を—」❽隔つ。「一日をおきて」。

おく［置］（自、か四）露、霜などおる。くだる。

おく［起］（自、か上二）❶目さむ。❷臥したるより立ちあがる。

おく［億］（名）數の名、萬の萬倍。

おく・い［奥意］（名）❶おくのて。おくぎ。「學問の—」。❷まことのこゝろ。

おく［億］（名）數の多きにいふ語。「—兆」。

おく・いん［奥印］（名）事實の眞正なると明かにするため、本文の終りの方になす印證。

おく・か［奥處］（名）もの、至極せる部分。「—も知らず」。

おく・がき［奥書］（名）書物の終りに書きつけたる記。「文章」（跋）。

おく・がた［奥方］（名）おくさま。貴人の妻、夫人、令閨。

おく・ぎ［奥義］（名）おくのて。

おく・くふ（ークフ）［億劫］（名）「おくコフ」の訛。

おくけん（ーケン）［憶見］（名）例證によらず推論によらず、たゞ自家の想像によりてのみの意見。

おくこ（ーコ）［奥庖從］（名）おくづとめの小姓。

おくコフ（ーゴウ）［億劫］（名）❶【佛】一劫の萬々倍。❷かぞへ盡しがたき數にいふ語。❸なすに手重きこと。ひまどること。

おく・ざしき［奥座敷］（名）奥の方の座敷。

おく・さん［奥様］（名）「おくさま」の音便。「おくさま」よりは敬意輕し。

おく・さま［奥様］（名）「おくがた」に同じ。

おくし［御髪］（名）他人の頭髮の敬稱。

おくしま［奥縞］（名）織物の名、紺色と鳩茶色との竪縞。さんとめじま。（縦縞）

おく・じやうるり（ージョウルリ）［奥淨瑠璃］（名）德川時代に奥羽地方に流行せしじやうるり、扇子拍子にてかたりしもの。

おく・すぢ［奥筋］（名）「奥州の方」

おく・す［憶］（自、さ變）氣おくれして恐怖す。おそる。

おく・せつ［憶説］（名）❶事體を極めず推測していふ意見。❷［Hypothesis］事物の原因を説明せんがために、假定したる意見。

おく・そく［憶測］（名）よき程に推測すること。「—をたくましうす」

おく・だん［臆斷］（名）おしはかりにてきだむること。

おくだか・し（ーだかく、き、し）［臆高］（形、一）おくびやうなり。

オクタント［Octant］（名）物の角度を測るに用ふる器、三百六十度の周圍を八分したるもの。（八分儀）

おくちやうば（ーチョウバ）［奥帳場］（名）奥にある帳場、番頭・支配人などの居る所。

おく・つき［奥津城］（名）「はか」の古名。

おく・づけ［奥附］（名）書冊の末尾に著者の姓名などを記載しある紙。

おく・づとめ［奥勤］（名）貴人の奥向きにつとめること。

おく・つま［奥妻］（名）鍾愛する妻。

おく・て［晩稻］（名）【植】おそく成熟する稻。（遲稻）

オクテーブ［Octave］（名）【理】或振動數を有する音に對し、二倍の振動數を有する音。原音の對。

おく・てう（ーチョウ）［億兆］（名）❶限りなき大數にいふ語。❷人民。衆庶。「君は—の心を心とす」

おく・てう（ーチョウ）［億兆］（名）【數】億の數と兆の數と。

おく・どこ［奥床］（名）奥の方にある臥床。

おくに・かぶき［阿國歌舞伎］（名）慶長年中、出雲の神子（巫）阿國なるものが、神樂を變じて演じ始めし舞曲の名、現

［おくにかぶき（慶長年中の繪）］

今の芝居の濫觴なりといふ。

おくに・もの［御國者］（名）ゐなかざむらひ。ゐなかもの。

おく・の・て［奥手］（名）❶おくい。ひけつ。「—の手段」。

おく・の・ゐん［奥院］（名）佛刹の本堂より奥の方に、佛などを安置しある處。

おく・ば［奥齒］（名）口腔の左右の奥にある齒。（臼齒）

おく・び［枉］（名）「おくびやう」の略言。おくみ。

おくび［欠］（名）胃にたまりたる瓦斯の、口に逆ひて出づるもの。——にも・ださず　或言語を決して口にせざるにいふ。

おく・びやう（ービョウ）［臆病］（名）膽力なくして、僅かなる物事にもおぢおそるゝこと。（怯懦）——かぜ［臆病風］（名）おくびやうの心。おくびやうの心のうすく、「—に吹かる」。——がみ［臆病神］（名）おくびやうの心を生ぜしむる神。「—にとりつかる」。——ぐち［臆病口］（名）芝居の本舞臺の下方にある出入り口。——もの［臆病者］（名）臆病なる性質の人。（怯夫）

おく・ぶか・し（ーぶかく、き、し）［奥深］（形、一）❶奥ふかくあり。奥まで遠し。❷意味ふかくして、容易に知りがたし。

おく・ま・る［奥隱］（自、ら四）奥深くあり。

おくみ［衽］（名）衣服の前の左右にありて、上は衿（えり）につゞき下はつまに至る半幅のきれ。——さき［衽前］（名）おくみの端末。——なり［衽形］（名）なゝめなること。

おく・むき［奥向］（名）家の奥の方、勝手のかた。「—の用事」。

おく・めん［臆面］（名）氣おくれしたる容貌。「—が無い」。

おくやく［奥役］（名）芝居にて、一切の事務の要にあたる役。

おくやま［奥山］（名）奥深くして、人里はなれたる山。「深山」

おくゆか・し［奥床しい］（形、二）◎奥ふかくして知らまほし。◎奥ふかし。◎輕浮又は野鄙ならずして、思慮深げに見ゆ。おくふかし。

おくゆき［奥行］（名）地面家屋などの表より後への長さ、即ち、間口に直角なる一邊。

おくよこめ［奥横目］（名）德川時代の奥づとめの監察吏。

おくら［後］（名）もの〻終止。おはり。

おくらか・す［後］（他、さ四）おくる〻やうになす。おくれしむ。

おくらかせる［後］（他）おくらかすの訛。

おくり［送］（名）◎おくること。◎物品を人に托して送るときの目錄書。——がな［送假名］（名）漢字の和讀に便ずる爲め、其の下に附したる語尾又はてにをは。——こみ［送込］（名）おくりこむこと。——こ・む［送込］（他、ま四）おくりいる。「荷物を—」——さかな［送肴］（名）饗應にて、人に肴などをおくること。——じやう［送狀］（名）おくる物品に添へて、其貨物品目などをかきあらはしておくる文書。（送狀）——ぜん［送膳］（名）招きて饗應する代りに、膳部を人に贈ること。——てがた［送手形］（名）物品を送るに添ふる手形、即ち、おくりじやうの類にして、發送者の記名捺印あるもの。（案文）——び［送火］（名）七月十六日即ち盂蘭盆の最終日の夕に、祖先の御魂をおくるため、又、葬式の出棺後に、死者の亡靈を送るため、門前にて焚くかゞり火。——むかへ［送迎］（名）おくるとむかふると。（迎將）——な［諡］（名）人の死後、其徳を稱して追贈せる號、烈公、靖公などの類。——もの［贈物］（名）人に贈與する進物。れいもつ。はなむけ。つかひもの。（饋送、遺貢）——ゐ［贈位］（名）人の死後に贈る位階。ぞうゐ。

おくる［送］（他、ら四）◎此所より彼所にやる。つかはす。いたす。（遣）◎旅立ちする人を見おくる。◎行く者のあとに從ひ行く。「おくりて門に到る」◎經過す。すごす。「年を—」◎むくゆ。かへす。「恩を—」（報）

おくる［贈］（他、ら四）◎つかはす。やる。たまふ。きぼう。◎死者に官位をさづく。「從二位を—」

おくる［後］（自、ら下二）◎人の後になる。あと。◎人より劣る。◎及ばず。とゞかず。◎おそる。おくる〻こと。あとになること。

おくれ［後］（名）おくる〻こと。あとになること。◎おそれ。◎怯くれ、心。——げ［後毛］（名）婦人の結髪に、おくれて生じたる毛の髪に及ばずして、垂れ下がるもの。——ざき［後咲］（名）花の時節におくれて開くこと。はやざきの對。「—の來年花」——ばせ［後馳］（名）おくれてかけつくること。「—の年始」「—の時機」◎時機におくれたること。

おくれる［後］（自）「おくる」の訛。

おけら［螻蛄］（名）「けら」に同じ。「婦人の語」

おこ［痴］（名）かひこ。（關東の方言）

おこ［海髪］（名）「おご」に同じ。

おこし［御越］（名）來ると又は行くとの敬語。

おこし［粔籹］（名）「おこしごめ」の略言。——ごめ［粔籹米］（名）一種の菓子、糯米の蒸したるものに砂糖を加へ、これを乾し固めたるもの。又、其粉と、したるもの。［炒米］

おこしび［熾火］（名）火勢を盛（さか）んにせる火。

おこ・す［起］（他、さ四）◎臥してあるものを立たしむ。◎開始す。はじむ。「亂を—」◎目さめしむ。◎興す。さかんにす。◎盛んにす。

おこ・す［熾］（他、さ四）◎炭（たきもの）を盛（さか）んにす。◎開く。

おこ・す［致］（他、さ四）他方より此方におくりいたす。

おこぜ［膃肭］（名）一種の魚。

おこそか［嚴］（名）威儀正しく畏憚すべきさま。いかめしきこと。げんぢう。

おこそづきん［御高祖頭巾］（名）日蓮宗の高祖日蓮上人の像の頭巾に似たればいふ一種の頭巾、目ばかり出して他をつゝみかくすもの。今時もに、婦人冬季にかぶる。

おこたり［怠］（名）◎なまけ。ぶしやう。◎つかれ。やむ。◎病氣の快復にむかふこと。

おこた・る［怠］（自、ら四）◎つとめず。はたらかず。◎油断をなす。◎疾病やゝ癒ゆ。

おこづり［誘］（名）おこづること。

おこづ・る［誘］（他、ら四）おかる、いへる。◎人を欺く誘ふ。

おこと［御事］（代）あなた。そなた。

おこともおもおる［御事汁］（名）古昔、御事始及御事納の日に調製せし味噌汁。

おことはじめ［御事始］（名）◎古昔、十二月八日に、來る正月の儀式の調度の用意なしゝこと。◎古昔、關東にて陰暦二月八日に農事を始めしこと。

おことをさめ［御事納］（名）古昔、十二月八日に農事を終へしこと。

おこなは・る［行］（自、ら下二）◎行なはる。◎障りなく出來る。◎使はる〻。◎世間に用ひらる〻。◎人々使ふやうになる。流行す。はやる。

おこなはれる［行］（自）「おこなはる」の訛。

おこなひ［行］（名）◎おこなふこと。ふるまひ。わざ。◎品行。行状。みもち。◎佛道の修行を修する、つかひ。——びと［行人］（名）佛敎又は道敎の戒を修むる人、又、其行をなす人。（修士）

おこな・ふ［行］（他、は四）◎爲す。ふるまふ。◎務む。あつかふ。◎佛道を修す。

おこのり［海髪］（名）［植］紅色藻門に屬する海草、色紅にして長さ一二尺、おもに刺し身のつまなどに用ふ。おご。

おこは［御强］（名）こはめし、せきはん。

おこり［起］（名）おこること。おこる所。はじまり。もと。たかぶり。

おこり［瘧］（名）間歇熱の一種、隔日又は每日の定めて、始めは寒く後には熱の起るもの、多くは蚊の媒介によりて傳染す。わらはやみ。

おごり［奢］（名）溫度のつひえ又はかざり。

おこりき・め［發歎］（名）身體の熱氣の或はふこと。

おご・る［起］（自、ら四）◎發作す。◎きやうこる。◎起きあがる。うごきだす。◎盛んになる。さかる。◎盛んに發す。ひらく。「暑氣—」◎熱の起る。◎（人）となる、ふくる。◎嚴しき氣質をなす。起る。

おご・る［奢］（自、ら四）◎勢盛になる。さかる。◎ふる。ふくる。「士氣大に—」◎疫に世界に熱發す。「れつが—」

おご・る［驕］（自、ら四）いかる。（怒）

おご・る［驕］（自、ら四）◎人をあなどりて自ら尊大にす。たかぶる。◎無禮をなす。◎ほしきまゝにおごりて驕るまひをなす。

おこる（奢）（自、ら四）◎身分に過ぎたる虚飾をなす。溫度に金銭をつひやす。◎人を饗應す。

おさ［御座］（名）座席の敬稱。

おさがり［御下］（名）◎神佛の供物、又などを下げたるもの。

おさき［御先］（名）◎さきの敬稱。◎人の手先となり、そのもとに佛くもの。——つかひ［御先使］（名）先見なること。

おさげ［御下］（名）◎女帝の結ぶ方、髪の字にして結びとめずに、かけと端とを垂れておくもの。——まつくら［御先眞暗］（名）先見なきこと。

おさし［御差］（名）大名の子に、乳をのますまする女、などの敬稱。（お〻ざし）

おざ・し［御坐］（名）古昔、將軍家又は大名などの侍臣。ござてんい。

おさじ［御匙］（名）◎匙の如き細長き顔を嘲りていふ語。

おざしき［御座敷］（名）◎座敷の敬稱。◎酒宴の席。（藝妓などの出る場合にいふ）

おさだまり［御定］（名）いつも同じ樣なること。

おさつき［御座附］（名）藝妓の座に招かれて、初めに三味線を彈きて唄をうたふ。

おさなり［御坐形］（名）其場かぎりにものする事。

おさ・ふ［押抑］（他、は下二）◎上より壓す。◎とめる。◎とりしづむ。◎捕ふ。「盜人を—」

おさへ［押抑］（名）◎おさふること。◎おさふるもの。おもし。しづめ。「紙に—をおく」◎後陣。しんがり。殿。

——ば（名）八重齒の一名。——もとゆひ［押元結］（名）頭の上より掛けて左右へ分け、耳のうしろよりさげて、髪を結ぶに用ゐるもとゆひ。

おさへる［押］（他）「おさふ」の訛。

おさゆ［押］（他）おさふに同じ。

おさらば（感）さらばを強くいふ語。

おし［壓］（名）◎おすこと。◎おもし。◎おしの敬稱。◎人を壓すべき勢あること。「—になる」

おし［啞］（名）ものいはぬ人。おふし。

おし［押］（名）◎おすこと。◎人を服すべき勢あること。◎押し强き。

おし［御師］（名）◎先達（せんだち）の稱。◎格式高き神官。

おし［鴛鴦］（名）をしどり。

おし（感）◎おゝ、しい、しつの約言。古昔、警蹕の時に、「—」といひて、つなぎの聲。

おしあげポンプ［押揚—］（名）Force pump。

おしあけがた［押明方］（名）あけがた。

押水を押し揚げて低所より高處へ送る喞筒、ポンプ、喞筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く瓣ありて、活塞には瓣なし、又、喞筒の底に上方に開く瓣あるが故に、活塞を引き上ぐるときは、水喞筒内に入り來り、これを押し下ぐるときは、水管中に入る、故に管を長くして、活塞の引き上げ押

し下げを願行せば、水を任意の高さに迄押し揚ぐるを得。（押揚唧筒）。

おし‐あ・つ［押當］（他、た下二）㊀おしあて、おはみ。「袖を顔に―」。㊁すゐりやうす。

〔**おしあてる**［押當］（他）「おしあつ」の訛。

おし‐あひ［押合］（名）おしあふこと。おしつけあひ。

おし‐あ・ふ［押合］（他、は四）雙方より押す。たがひにおす。

十**おし‐あゆ**［押鮎］（名）しほづけの鮎、古昔、元日の儀式などに用ひたり。

おし‐いた［押板］（名）書院の床の間。

おし‐いり［押入］（名）がうたう。おしこみ。（劫盜）。

おし‐い・る［押入］（自、ら四）無理にはいる。強ひて入りこむ。

おし‐い・る［押入］（他、ら下二）無理におしやりて入る。おしこむ。

おし‐いれ［押入］（名）財物などを入るべき戸棚。（壁廚）。

おし‐うつ・る［推移］（自、ら四）年月又は時勢と相伴ひてうつり行く。「世と共に―」。

おし‐うり［押賣］（名）強ひて賣りつくること。（強賣）。

おし‐おくり［押送］（名）風に頼せずして、ひたすら櫓（ロ）を以て船をこぎやること。又、其船。

おし‐か・く［押掛］（自、か下二）㊀進撃す。進取す。㊁人の招待をうけずして強ひて行く。此方の勝手におしてゆく。

おし‐かけ［押掛］（名）㊀おしかくること。㊁馬の頭・胸・尾よりかけて、鞍までつなぐ組み緒の稱。（鞦）。㊂先方の都合に頓せず、強ひて進みゆくこと。

――**にようばう**［押掛女房］（名）強ひて、夫の家に入りたる妻。

〔**おしかける**［押掛］（他）「おしかく」の訛。

おし‐かた［押方］（名）射術にて、「おして」に同じ。

おし‐かへ・す［押返］（他、さ四）㊀おして退く。㊁はなはだしく押しあふ。

おし‐がみ［押紙］（名）㊀主意などを認めて、文書に張り付けたる別紙。つけがみ。㊁すひとりがみ。

おし‐がり［押借］（名）無理に、人より財物又は金錢などを借り入るゝこと。

おし‐きり［押切］（名）すさ又はまぐさなどをきざむ器。（剉刃）。

おし‐きり［押切］（名）割判。契印。――**ばん**［押切判］（名）おしきり。（契印）。

おし‐き・る［押切］（他、ら四）㊀押して切り斷つ。㊁一意專心に目的をはたす。㊂絶えず櫓（ロ）を押して船を行（ヤ）る。

おし‐くらべ［押競］（名）一種の遊戯、互におしあひて、倒れ若しくは退きたるを負けとす。

おし‐こみ［押込］（名）㊀おしこむること。㊁とだな。おしいれ。㊂強盜。

おし‐こ・む［押込］（自、ま四）㊀敵營に進入す。㊁強ひて入る。

おし‐こ・む［押込］（他、ま下二）㊀無理におしやりて入る。㊁閉居せしむ。禁錮す。

おし‐こめ［押込］（名）㊀おしこむること。㊁德川時代の刑罰の一、閉居せしめ又は禁錮すること。（幽禁）。

〔**おしこめる**［押込］（他）「おしこむ」の訛。

おし‐だし［押出］（名）㊀おしいだすこと。㊁多人數の中へ出でたる態度。やうす。

おし‐だ・す［押出］（自、さ四）㊀多人數打ち揃ひて出掛く。㊁多人數の中へ出て行く。

〔**おしした‐の‐わかしゆ**［御下若衆］（名）ぺい〜役者の異稱、「いなりまち」の一名。

おし‐しちや［御七夜］（名）㊀「はうおんかう」に同じ。㊁「おしちや」の敬稱。

おし‐つ・く［押付］（他、か下二）㊀はげしく押す。㊁強ひて人にかづく。

〔**おしっくら**［押競］（名）「おしくらべ」に同じ。

おし‐つけ［押付］（名）おしつくること。強ひて人にかづくること。「―につかはす」。――**わざ**［押付業］（名）おしつけてする仕業。

おし‐つま・る［押詰］（自、ら四）事態又は時日切迫す。さしはまる。つまる。「年―」。

おし‐しづま・る［御靜］（自、ら四）寢ぬの敬語、

おし‐つ・む［押詰］（他、ま下二）㊀押して入れこむ。みたす。㊁つめよる。㊂つめちゞむ。

〔**おしつめる**［押詰］（他）「おしつむ」の訛。

おし‐て［押］（副）無理に。おひて。「―たのむ」。

おし‐で［押手］（名）㊀古昔の印章の式、掌に墨・朱などを塗り、これを押して印章となしゝこと。㊁證據となるべき印章。㊂射術にて、左手の稱。ゆんて。㊃絃をおして音を變せしむること。

十**おし‐て・る**［押照］（枕）「なには」に冠らする詞。

おし‐とほ・す［押通］（他、さ四）㊀おしてとほす。㊁なしとぐ。つらぬき行ふ。

おし‐どり［押取］（名）無理に取ること。強奪。

おし‐なぶ・る［押並］（他、は下二）とりすべて同列となす。おしならぶ。

おし‐なべて［押並］（副）おしくるめて。なべて。

おし‐なら・す［押均］（他、さ四）平かにす。ひとしくす。

おし‐ね［晩稲］（名）おそいね。おくて。

おし‐の・く［押退］（他、か下二）㊀おしてまりぞく。（排）。㊁他人をして其位置を失はしむ。

おし‐は［押羽］（名）鳥の羽のもとの方にある、うぶげの如く極めて短き毛。

おし‐はかり［推測］（名）おしはかること。すゐりやう。

おし‐はか・る［推測］（他、ら四）此事を推して他事を考ふ。すゐりやうす。（臆度）。

おし‐ひら・く［推開］（他、か四）推しあく。「排す」。

おし‐ひろ・ぐ［推擴］（他、か下二）おしてひろくす。

〔**おしひろげる**［推擴］（他）「おしひろぐ」の訛。

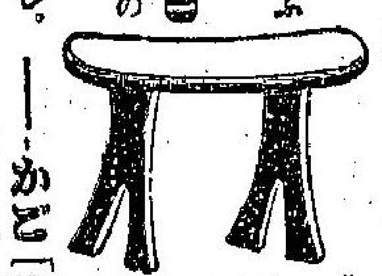
おし‐ひろ・む［推弘］（他、ま下二）ひろく行きわたらす。ひろめおよぼす。擴張す。

〔**おしひろめる**［推弘］（他）「おしひろむ」の訛。

おし‐ぶち［押緣］（名）物のおさへに打ちつくる物。「屋根の―」。

おし‐へ・す［押壓］（他、さ四）むりにおしひしぐやうにす。

十**おし‐まづき**［几］（名）㊀けふそく。㊁よりかゝるべき机。



［おしまづき（一）］

〔**おし‐しまひ**［御仕舞］（名）㊀婦人の化粧。「朝湯で―かすむ」。㊁しまひの敬語。おはり。

〔**おし‐しめ**［御襁褓］（名）おむつ。――**かご**［御襁褓籠］（名）中に火をおきて、おしめのぬれたるを乾すべき料に作りたる籠。

おし‐しも［御下］（名）㊀古昔、内侍の次の女官の稱。㊁貴族などのはしため。

おし‐しやく［御酌］（名）㊀客の盃に酒をつぐこと。㊁未だ一人前とならざる藝妓。はんぎよく。（雛妓）。

おし‐しやと（名）婦人の髮の結（ユ）ひ方、おばこに似たるもの。

〔**おし‐しやべり**（名）よくしやべること。又、其人。

〔**おし‐しやま・す**［被仰］（他、さ四）おはせらる。

〔**おし‐しやらく**（名）身なりを飾ることを好む性質。又、其人。

おし‐シヤリ［御舍利］（名）㊀「ブッシヤリ」の尊稱。㊁病死して白くなりたるかひこ。

おし‐や・る［押遣］（他、ら四）㊀おして進む。㊁おして退く。

〔**おし‐しやる**［御座］（自、ら變）「ござる」に同じ。

〔**おし‐しやん**（名）むしまひ。

おし‐しよく［御職］（名）㊀同輩の中にて頭立つ身分の人。㊁同輩の中にて最も頭立つ遊女。（東京の方言）。

おし‐よ・す［押寄］（自、さ下二）多人數群れをなしておしかく。

〔**おしよせる**［押寄］（他）「おしよす」の訛。

おし‐しろい［白粉］（名）一種の化粧品、顔其他身體の白く見すべき部分に塗るべき白色の粉末、多くは鉛を原料として製す。「みづ―」。「ねり―」。（鉛粉）。

――**しした**［白粉下］（名）おしろいをぬる前にまづ肌にぬりおく料。

――**ばな**［白粉花］（名）〔植〕紫茉莉科に屬する草、高さ二三尺許、莖圓く節高く、葉は圓形にして緑色、秋の頃の夕方、梢頭に小花簇（ムラガ）り着く、其色種々あり、實の中に白粉を含む。いふにしき。（紫茉莉）。

［おしろいばな］

おし‐わ・く［押分］（他、か下二）前後左右へ分く。

〔**おしわける**［押分］（他）「おしわく」の訛。

おし‐ゑ［押繪］（名）花鳥・人物・禽獸などの形を厚紙にて作り、これを布にて包み、物に貼り附けて製したる繪。――**さいく**［押繪細工］（名）おしゑの細工。又、其細工物。

おし‐をけ［壓桶］（名）㊀えななけ。㊁つけものを壓す桶。

おし・す［押］（他、さ四）㊀力を入れて進めやる。㊁せまる。すゝむ。㊂強ひて稱す。「おして行ふ」。㊃犯して稱す。「病を―」。㊄櫓をあやつりて舟を行（ヤ）る。㊅印章の面に墨などをつけて、其形を紙などにおさへうつす。（捺）。

おし・す［推］（他、さ四）㊀いたゞく。あふぐ。㊁すゐきよす。あぐ。㊂うつす。なづらふ。おしおよぼす。「己が心をおして人に及ぼす」。㊃思想をおよぼす。究め考ふ。

おし・す［壓］（他、さ四）㊀上よりおもみを以ておさへつく。㊁あつむ。をさむ。㊂寄り迫る。㊃己の下風に立たしむ。㊄あへたぐ。あつせいす。

十**おし‐ずし**［鈍］（形、二）おぞし。にぶし。

十**おし‐ずし**［悍］（形、二）おぞし。強し。

十**おし‐ずまし**［鈍］（形、二）おぞまし。

十**おし‐ずまし**［悍］（形、二）おぞまし。おぞろし。

〔**おし‐すわり**［座］（名）㊀すわるとの敬語。㊁すわりもち。（供餅）。

おし‐すゑ［御末］（名）役官又は奥向きにて婢女（ハシタメ）の居る所。又、其婢女。

おし‐せち［御節］（名）御節供の略言。――**く**［御節供］（名）五節句などのせちゑの日に製する食

物の菜。

おせん[御膳](名)㊀食器の並の敬稱。㊁飯の敬稱。——**ぶ**[御膳部](名)㊀おぜんに同じ。㊁貴族方の膳部の事をつかさどる所。又、其人。

オゾーン[Ozone](名)[化]無色にして僅かに鹽素の如き臭ある瓦斯。放電の際殊に雷鳴のときによく發生す。酸素の變質したるものにして、酸化作用甚だ強し。

おぞ[鈍](名)おぞきこと。おぞましきこと。

おぞけ[恐氣](名)おそろしさ。こはさ。——**だつ**[恐氣立](自、た四)ぞっとして身の毛たつ。そうけだつ。——**ふるふ**[恐氣ふるふ](自、は四)恐ろしくて身の毛立ちふるふ。

おそかれ・はやかれ[早晩](副)おそきかはやきか。其うちには。つひにはいつか。

おそざき[遲咲](名)おそく咲くこと。おくれざき。はやざきの對。「—の櫻」(晩花)。

おそざくら[遲櫻](名)普通のさくらよりおくれて咲く櫻。(晩櫻)。

おそし[遲](形、二)㊀速かならず。㊁のろし。㊂ながびきたり。ひさし。㊃時機すでに後れたり。

おぞし[鈍](形、二)にぶし。のろし。

おぞし[悍](形、二)こはし。おそろし。

おそなはる[遲](自、ら四)㊀延引す。ながびく。㊁おそくなる。おくる。

おそなへ[御供](名)そなへもちの敬稱。

おそば[遲齒](名)おそく生(は)ゆる齒。やへば。

おそば[御側](名)㊀主君のそば。「—づとめ」㊁主人のそばにつかふる人。侍臣。近臣。(內臣)。

おそはる[魘](自、ら下二)うなさる。

おそふ[襲](他、は四)㊀敵の不意に攻めかゝる。㊁衣服をかさねて着る。㊂承(う)く。うけつぐ。つぐ。「天祿を—」。

おそま[遲時](名)㊀時期におくれて種子をおろすこと。㊁時機におくれて事を爲すこと。

おぞまし[鈍](形、二)おぞし。にぶし。

おぞまし[悍](形、二)おぞし。こはし。

おそらくは[恐](副)たぶんは。おほかた。「—それ然らん」。

おそり[恐](名)おそるゝこと。おそれ。

おそる[恐](自、ら下二)先方のつよきに心ひるむ。我に對するものゝために氣ろうす。おづ。

おそれ[恐](名)恐るゝこと。おそり。——**いる**[恐入](自、ら四)㊀過ちをさとりて謝罪す。わびをなす。㊁あまりにもったいなく感ず。いたみいる。「君を勞するは—」(恐縮)。

おそれおほし[恐多](形、二)もったいなし。かしこし。

おそれながら[恐](副)おそろしとは思へども。もったいなしとは思へども。「—申し上ぐ」。

おそれる[恐](自)「おそるる」の訛。

おそろし[恐](形、二)㊀おそるべし。㊁甚し。

おだい[御臺](名)飯又は膳の異稱。「婦人の語」。——**がひ**[御臺匙](名)「めしかひ」の古名。——**びつ**[御臺櫃](名)㊀めしびつ。いひびつ。㊁ちびつ。(京阪地方の方言)

おだいこ[御太鼓](名)㊀おたいこむすびの略言。㊁たいこもちの略言。——**むすび**[御太鼓結](名)女の帶の結び方。かけを結び目の中に入れてまろく結ぶもの。

おたがおやくし[御多賀杓子](名)「おたまじやくし」の一名。近江國多賀神社のおまもりに出だしゝより此名あり。

おたから[御寶](名)㊀一月二日の夜に、枕の下にしく寶船の畫の稱。㊁金錢の異稱。

おたくら(名)役者の用ふる翳(かざし)の一種。

おだし[穩](形、二)心やすらかなり。おだやかなり。「—き人」。

おだち[御立](名)㊀發足の敬語。㊁客の歸るを敬語。

おだつ[煽](他、た下二)たぶらかしきそふ。そゝのかす。すゝむ(煽動)。

おたづね[御尋](名)たづぬることの敬語。——**もの**[御尋物](名)官府よりたづぬる犯罪人。

おだて[煽](名)おだつること。そゝのかし。すゝめ。「—にのる」。

おだてる[煽](他)「おだつ」の訛。

おタバコぼん[御烟草盆](名)㊀烟草盆の敬稱。㊁七八歲ぐらゐの少女の髮の結(ゆ)ひ方。左右に分けたる髮を雙方より折せて結ぶもの。

〔おたバコぼん(二)〕

おだひ[穩](名)おだやか。

おたび[御旅](名)「おたびしよ」の略言。——**しよ**[御旅所](名)祭禮のときに、神輿の暫くとゞまる所。

おたふく(名)㊀婦人の顏の圓くして鼻低く頰肉豐かなるもの。㊁醜婦。おかめ。おたふく。㊂婦人をのゝしりていふ語。——**あめ**[阿多福飴](名)細長くしたる飴の中に、阿多福の形あるもの。——**づら**[阿多福面](名)㊀おたふくの面相。㊁婦人をのゝしりていふ語。「あの—が」。——**まめ**[阿多福豆](名)そらまめの異稱。

おたま[御玉](名)「おたまじやくし」の略言。——**じやくし**[御玉杓子](名)㊀あたまたる形の杓子。㊁[動]蛙類の卵子より孵化して後、水中にて棲息せる未變態のときの稱。蛙の子。(蝌斗)。

おたまや[御靈屋](名)死者の靈を祭りておく所。「身分重き人に用ふ」(廟)。

おため[御爲](名)㊀ための敬語。㊁もうつりに同じ。——**ごかし**(名)其人のためになる如く見せて、却て害をなし若しくは自身の利益をのみ計畫すること。

おだやか[穩](名)㊀事なきこと。おだやか。やすらか。㊁ゆったりとして落つきたること。心のおだやかなること。

おたらひ[御盥](名)女の髮の結(ゆ)ひ方。髷を[illegible]。

おち[落](名)㊀さがること。くだること。㊁ぬけ。もり。㊂にぐること。のがるゝこと。「七騎—」。㊃落語の結び。

おぢ[祖父](名)「おほぢ」の略言。

おちあひ[落合](名)川と川とのおち合ふ所。(落合)。

おちあふ[落合](自、は四)同じ所に出て會ふ。

おちいる[陷](自、ら四)㊀深く凹(くぼ)む。くぼまる。㊁落ちて中に入る。はまる。おちこむ。㊂謀計にかゝる。㊃城など陷落す。

おちうせる[落失](自、さ下二)のがれかくる。にぐ。

おちうど[落人](名)人目を忍びて逃ぐるもの。かけおち。だっそうにん。

おちえん[落緣](名)雨戸の外に、座敷より一段低く設けたるえんがは。

おちおち[落落](名、副)こゝろ安らかなるさまにいふ語。

おぢおぢ[怖怖](名、副)恐怖の念を懷きつゝあるさま。

おちがみ[落髮](名)拔けたる髮の毛。ぬけ毛。

おちぐり[落栗](名)㊀落ちたる栗の實。㊁黒色を帶びたる紅色。くりいろ。——**いろ**[落栗色](名)「おちぐり㊁」に同じ。

おぢけ[怖氣](名)おづる心。おそれをいだくけはひ。おそれ。おびえ。「—が付く」。

おぢける[怖氣](自、か下二)おづ。おくす。

おちご[御童](名)㊀高貴なる僧に侍(はべ)る小童。㊁祭禮などの隊列に、美服をかざりて加はり行く小童。㊂ちごの敬稱。

おちこむ[落込](自、ま四)㊀はまる。おちいる。㊁來たる。「金が懷中に—」。

おちしほ[落潮](名)ひきしほ。

おちつき[落着](名)㊀安心す。やすまる。㊁鎭定す。きまる。——**はらふ**[落着拂](自、は四)極めて平氣にかまへる。あわてずしてあり。

おちつく[落着](自、か四)㊀居所さだまる。㊁勤務永くつゞく。㊂安心す。やすまる。㊃調和す。かなふ。「—いた色」。㊄物事に動ぜず。言行かるがるしからず。

おちつける[落着](他、か下二)おちつくやうにす。さだむ。「心をおちつけて聞け」。

おちつける(他)「おちつく」の訛。

おちなし(形、二)[illegible]

おちのひと[御乳人](名)貴人の子をはぐゝむ乳母。(乳母)。

おちば[落葉](名)㊀地に落ちて散りたる木葉。らくえふ。㊁枯れたるおちばの色。——**いろ**[落葉色](名)て赤みばしりたる色。

おちびと[落人](名)「おちうど」に同じ。

おちふだ[落札](名)入札にあたりたるもの。らくさつ。

おちぶる[落魄](自、ら下二)貧しくなる。富みてありしもの貧しくなる。

おちぶれる[落魄](自)「おちぶる」の訛。れいらくす。零落。

おちぼ[落穗](名)地に落ちたる五穀(特に、稻)の穗。(落穗)。

おちま[落間](名)㊀古昔、京阪地方の芝居にありし棧敷(さじき)の前にある所。㊁家の中に、一段低く設けある所の稱。今の「さじきおとし」に同じ。

おちむしや[落武者](名)戰に敗北して、にげ落つる武者。(敗兵)。

おちめ[落目](名)おちぶれかゝり。かたむく運命。

おちや[御茶](名)茶の敬稱。——**をひく**遊女などの客なくしてひまなるをいふ。

おぢやう[御孃](名)身柄よき家の處女の敬稱。——**さま**[御孃樣](名)前條に同じ。

おちやちやら(名)口さきばかりの親切。

おちやどころ[御茶所](名)神社又は佛閣などに附屬して、其神佛に茶を奉り、又參詣人をやすませる所。

〔おちやや〕［御茶屋］（名）㊀茶の湯の座敷。㊁かけ茶屋。料理店。
〔おちやれ〕（名）（「來れ」の俗語）旅人に淫をひさぐ旅店の下婢の稱。
おち・ゆ・く［落行］（自、か四）㊀逃げ行く。㊁なり行く。
〔おちる〕［落］（自）「おつ」の訛。
〔おぢる〕［怖］（自）「おづ」の訛。
おち・ゐ・る［落居］（自、わ上二）おちつきゐる。
〔おつ〕［乙］（名）㊀十干の一、きのと。㊁甲に對して、第二位の稱。㊂さげて低くする音調。甲(カン)の對。㊃奇なること。異なること。「―な事」。
お・つ［落］（自、た上二）㊀高きより低きへくだる。さがる。㊁おちこむ。はまる。「術中に―」。㊂漏る。殘る。㊃沈む。入る。「日西山に―」。㊄のがる。亡(に)ぐ。㊅死ぬ。たふる。「命―」。㊆衰ふ。㊇へる。「名聲―」。㊇あたる。きまる。「入札が―」。㊈うすし。劣(ゑ)く。「垢―」。㊉止む。去る。「風―」。⑪全快す。なほる。⑫了解す。わかる。「心に―」。⑬性行くづる。墮落す。⑭劣る。くだる。⑮城陷る。ぬく。⑯もの離る。とれる。⑰罪に服す。はくおやうず。⑱手に入る。「中原の鹿、誰の手に―るを知らず」。
お・づ［怖］（自、た上二）おそる。ひるむ。
おづ・おづ［怖怖］（名、副）おづおづ・あるさまにいふ語。
〔おつら〕［乙］（副）きたいに。
〔おっ〕（感）急なる場合に發する聲。「―とおめいて斫りかゝる」。「の俚言」。
〔おっかあ〕［阿母］（名）母の稱（關東地方下等社會の俚言）。
〔おっかけ〕［追掛］（名）㊀おひかくること。㊁物事をひきつゞけてなすこと。㊂人力車夫の辻待ちをして、客を引くこと。――おっかけ［追掛追掛］（副）

更におひかけて。
〔おっかける〕［追駈］（他）「おひかく」の訛。
〔おっかなし〕（形、二）おそろし。こはし。
おっ・クアウ（名）億劫(オクコウ)の轉。
おっ・つけ［御浸］（名）㊀麵類のつけ汁。㊁すべての汁の稱。おもに味噌汁。
オッコ（名）【植】「オンコ」の一名。
〔おっとち〕（名）㊀夫又は情婦。（東京の方言）。
〔おっとちる〕（自）「おちる」の訛。（東京の方言）。
〔おっとどす〕（他）「おとす」の訛。（東京の方言）。
〔おっぱやる〕（他）「おほせらる」の訛。
〔おつだい〕［乙第］（名）㊀第二等。
〔おったてる〕（他）「おひたつ」の訛。
〔おっちょこちょい〕（名）かろがろしきこと。たしか「ならぬこと。
〔おっつけ〕［追付］（副）ほどなく。まもなく。
〔おっつける〕［押附］（他）「おしつく」の訛。
〔おっつめる〕［追詰］（他）「おひつむ」の訛。
おって［追手］（名）人の跡を追ふ人。うって。
おって［追而］（副）㊀遠からず。やがて。㊁つけ加へて。なほなほ。（手紙に用ふ）。――がき［追而書］（名）なほなほがき。つけ加へがき。
〔おっと〕（感）急激なる場合の發聲。「―こなたへ」。
おっと［脇】［膃肭］（名）【動】「おっとせい（一）」に同じ。
――せい［膃肭臍］（名）㊀【動】鰭脚類あざらし科に屬する海棲動物、軀幹は長く頭部は圓し、唇は薄く上唇に剛き疎毛ありて牡は殊に長し、四肢は短小にして鰭狀をなす、體は厚き毛を以て覆はれ、體色は、稍や生長したるものは灰白色なれど、

［おっとせい（一）］

十分生長したるものは紫褐色なり、體長牡は六尺餘にして牝は其半なり、北海に產し常に獨色を帶びたる潮流に從ひて洄游し、時々上陸す、水中の動作は活潑なれど、陸上の動作遲鈍なり、聽官嗅官共に鋭敏なり、肉味は美にして毛皮殊に貴重せらる。㊁おっとせいの陰莖と睾丸とを臍(へ)に連ねて切り取りたるものにして、滋養の藥用とす。
おっ・とり［押取］（副）すぐ。そのまゝ。「―役に立つ」。――がたな［押取刀］――かうがい［押取笄］（名）なはざりに差したるかうがい。
〔おっとりこむ〕（名）急激の場合に、早速にかたなを取ること。
〔おっとりこむ〕［追取込］（他、ま下二）追ひつめてかこむ。「の訛」。
〔おっとりこめる〕［追取込］（他）「おっとりこむ」
おっ・とり・まく［追取卷］（他、か四）追ひつめて取りまく。「りあぐ」。
おっ・と・る［追取］（他、ら四）速かに手にとる。
おっ・ぺ・す［押壓］（他、さ四）おしつく。
おっ・つぼ［御壺］（名）膳部の壺に入れある盛り物。
〔おつむ〕［頭］（名）つむり。あたま。（小兒の語）。――てんてん（名）赤兒が兩手にて、わがあたまを輕くうつこと。
〔おつもり〕（名）酒宴のをはりの酒。「切ること。
おて・うち［御手打］（名）主人の手づから其臣下を「切る」こと。
〔おでこ〕（名）額の出でたるものをあざけりいふ語。（東京の俚語）。
〔おてだま〕［御手玉］（名）女童の玩具、小さき布帛の袋に、赤小豆などを入れて縫ひとぢ、これを投げ受けなどして遊ぶもの。
おでまし［御出座］（名）出で行くとの敬語。
おてまへ［御手前］（名）てなみ。うでまへ。

おてまへ［御手前］（代）德川時代に、武士のあひてを呼びし稱。なんぢ。あなた。
〔おでん〕［御田］（名）㊀「でんがく」の略言。㊁こんにやく・芋などを串(クシ)にさして、煮込みにしたるもの。――や［御田屋］（名）おでんを賣る人。又、其店。
〔おてんば〕［御轉婆］（名）女のかるはづみなると又はとりとめなく騷ぐ性質。又、其女。
おと［音］（名）㊀ひゞき。こゑ。ね。おん。㊁おとづれ。いんしん。
おと［弟］（名）「おとうと」の古言。
おと［乙］（名）すゑ。つぎ。「こ」の異稱。
〔おと〕［於菟］（名）【動】（い）「とら」の異稱。（ろ）「ね」
おとうと［弟］（名）㊀同じ親に生まれたる年下の男子。――でし［弟弟子］（名）同師の許に、後に來りたる弟子。あにでしの對。
――ぶん［弟分］（名）假りにおとうとと定めたるもの。ぎてい。（義弟）。――よめ［弟嫁］（名）おとうとの妻。おとよめ。（娣）。
〔おどおど〕［怖怖］（名、副）「おづおづ」の訛。
〔おどかし〕［威］（名）威を示して先方を恐らすること。おどし。
〔おどか・す〕［威］（他、さ四）おどかしをなす。おどす。（恐嚇）。
おと・がね［音金］（名）弓のうらはずのすこし下にあたる處の弓弦(ユツル)の中に、入れたる銅又は鉛をいふ、射てひゞきの出づるもの。（響鐵）。
おとがひ［頤］（名）下のあぎと。あご。――を・とく［解頤］いたく笑ふ。
おとき［御齋］（名）佛事の食物、精進の食物。俗の食物、非時の對。

おとぎ［御伽］（名）㊀とぎの敬稱。㊁妾の稱。――ばなし［御伽噺］（名）㊀人のつれづれを慰むるためのはなし。㊁兒童の面白がるやうなはなし。――ばうず［御伽坊主］（名）㊀弥式の前に來りて、おとぎをし經などをよむ僧。
おとぎり・さう［弟切草］（名）【植】金絲桃科に屬する草、高さ二三尺、傷は鐵とし切り傷を治する効あり。せうれんげう。おときりす。（小連翹）。

［おとぎりさう］

おとぎりす（名）【植】「おとぎりさう」に同じ。
廿おど・く（自、か下二）㊀（大隈の諺）㊁とりまり無くあり。やりばなしなり。㊂ふざける。たはむる。ふざける。（諧）。
おどけ［諧謔］（名）ざれ。たはむれ。たはぶれ。（滑稽）。――ぐち［諧謔口］（名）おどけたる口のきゝやう。ざやうだんぐち。（冗口）。――ばなし［諧謔噺］（名）おどけたる話。
〔おどける〕（自）「おどく」の訛。
おとご［弟子］（名）末子。
〔おとどせ〕［音沙汰］（名）おとづれ、音信。
〔おとどせ〕［弟御前］（名）おたふく。
おとし［落］（名）㊀おとすこと。㊁鳥獸などをおとし入れて捕ふる裝置。「鼠―」。㊂はなしのおち。㊃木製の火鉢の灰をいるゝ所、銅鐵などの薄き板にて造りたるもの。㊄戸の棧に付けて、閉づるとき、敷居に設けある穴に差しこむもの。
おどし［威］（名）おどすこと。おどかし。
おとし・あな［陷穽］（名）㊀穴を掘り人又は獸な

どを欺きておとし入るゝ穴。（坎阱）。㊁人をあざむきおとし入るゝ詭計。
おとし・い・る［陷］（他、ら下二）㊀さそひおとす。欺きおとす。「おとし穴に―」。㊁たばかりて引きいる。「罪に―」。㊂城塞を攻め取る。
〔おとしいれる〕［陷］（他）「おとしいる」の訛。
おとし・かけ［落懸］（名）㊀らんまの下などにあるはりもの。㊁元祿の頃、やゝ行はれたる元結ひの一種。㊂峽崖の落つるが如きところ。「がみ」。
おとし・がみ［落紙］（名）かはやに用ふる紙。ちり
おとし・ぎんちやく［落巾着］（名）紐を付けて着物の襟(エリ)などにかくる巾着。
おとし・ざし［落插］（名）腰刀をこじりさがりに佩(オ)ぶること。「なの類」。
おとし・だな［落棚］（名）四十八棚の一、ちがひだなの類。
おとし・だね［落胤］（名）貴人の私生兒の世にうづもれてあらはれざるもの。
おとし・たまご［落卵子］（名）吸物などに、生たまごをわりているゝこと。
おとし・ちがひだな［落違棚］（名）「おとしだな」の一名。
おとし・ばなし［落語］（名）おとしを面白くいひて、聽者を興ぜしむる談話。おどけばなし。（諢話）。
おとし・ぶた［落蓋］（名）ふたの一種、箱の上の緣にかゝらず、中におちこむやうに作りたる蓋、さしぶたに似たるもの。（插蓋）。
おとし・ぶみ［落文］（名）あらはにいへぬ事を、かくし名なもて認め、道路などにおとして置くふみ。（匿名書）。
廿おとし・む［貶］（他、ま下二）みさぐ。みくだす。みくびる。さげしむ。

おちやや[御茶屋](名) ㊀茶の湯の座敷。㊁かけ茶屋。料理店。

おちやれ(名) (「来れ」の俗語)旅人に淫をひさぐ旅店の下婢の稱。

おちゆく[落行](自、か四) ㊀逃げ行く。㊁なり行く。

おちる[落](自) 「おつ」の訛。

おぢる[怖](自) 「おづ」の訛。

おちゐる[落居](自、わ上一) おちつく。

おつ[乙](名) ㊀十干の一、きのと。㊁さげて低くする音調。甲(かう)の對。㊂甲に對して、第二位の稱。㊃奇なる。異なる。「―な事」

おつ[落](自、た上二) ㊀高きより低きへくだる。さがる。㊁ふちこむ。はまる。「術中に―」 ㊂漏る。殘る。㊃沈む。入る。「日西山に―」 ㊄死ぬ。たふる。「命―」 ㊅衰ふ。へる。「名聲―」 ㊆あたる。きまる。「入札が―」 ㊇うす。脱く。「垢―」 ㊈止む。去る。「風―」 ㊉至快す。なほる。⑪了解す。わかる。「心に―」 ⑫性行くだる。墮落す。⑬劣る。⑭城陷る。ぬく。⑮罪に服す。はくじやうす。⑯手に入る。「中原の鹿、誰の手に―るを知らず」

おづ[怖](自、た上二) おぢる。こはがる。

おつう(副) いやに。へんに。

おつかあ[阿母](名) 母の稱(關東地方下等社會に用ゐる)。

おつ(感) 急なる場合に發する聲。「―とあめいて斬りかかる」

おつかけ[追掛](名) ㊀おひかくること。㊁人力車夫の辻待をして、客を引くこと。㊂物事をひきつづけてなすこと。――**おつかけ**[追掛追掛](副) 頁にもかけて。

おつかける[追駈](他) 「おひかく」の訛。

おつかなし(形、く) おそろし。こはし。

おつくう[億劫](名) 億劫(おくこふ)の轉。

おつけ[御汁](名) ㊀みそ汁。㊁すべての汁の稱。おもに味噌汁。

オッコ(名) 〔植〕オンコの一名。

おつことす(他) 「おとす」の訛。(東京の方言)

おつこちる(自) 「おちる」の訛。(東京の方言)

おつさへる(他) 「おさへる」の訛。

おつだい[乙第](名) ㊀おもやしき。㊁第二等。

おつたてる(他) 「おひたつ」の訛。

おつちよこちよい(名) かるはづみなる人。

おつつけ[追付](副) ほどなく。まもなく。やがて。

おつつける[押附](他) 「おしつく」の訛。

おつつめる[追詰](他) 「おひつむ」の訛。

おつて[追手](名) 人の跡を追ふ人。うつて。

おつて[追而](副) ㊀遠からず。やがて。㊁つけ加へて。なほ。(手紙に用ふ) ――**がき**[追而書](名) なほなほがき。つけ加へがき。

おつと(感) 急速なる場合の發聲。「―こなたへ」

おつとせい[膃肭臍](名) 〔動〕「おつとせい(一)」に同じ。――**せい**[膃肭獸](名) 〔動〕哺乳類海狗科に屬する海獸。軀幹は長く頭部は圓し。唇は薄く上唇に剛き毛髭を有す。四肢は短小にして蹼狀をなす。牡は殊に長し。體は厚き毛を以て覆はれ、體色は稍や生長したるものは灰白色なれど、

〔おつとせい(一)〕

十分生長したるものは紫褐色なり。體長牡は六尺除にして牝は其半なり。北海に産し常に羣をなして回游し、時々上陸す。水中の動作は活潑なれど、陸上の動作は遲鈍なり。肉は美にして毛皮殊に貴重せらる。㊁おつとせいの陰莖と睾丸を臍(ほぞ)に連れて切り取りたるものにして、強壯の藥用とす。

おつとり[押取](副) すぐ。そのまゝ。「―役に立つ」。――**がたな**[押取刀](名) 急遽の場合に、早速にかたなを取ること。

おつとりこむ[追取込](他、ま四) 「おひとりこむ」の訛。

おつとりこめる[追取込](他) 「おつとりこむ」の訛。

おつとりまく[追取卷](他、か四) 追ひつめて取りまく。

おつぺす[押壓](他、さ四) おしつく。

おつぼ[御壺](名) 腰部の壺に入れある盛り物。

おつむ[頭](名) つむり。あたま。(小兒の語) ――**てんてん**(名) 赤兒が兩手にて、わがあたまを輕くうつこと。

おつもり(名) 酒宴のをはりの酒。

おでこ(名) 額の出でたるものをあざけりいふ語。(東京の俚語)

おてうち[御手打](名) 主人の手づから臣下を切ること。

おてだま[御手玉](名) 女童の玩具。小さき布帛の袋に、赤小豆などを入れて縫ひとぢ、これを投げ受けなどして遊ぶもの。

おでまし[御出座](名) 出て行くことの敬語。

おてまへ[御手前](名) てなみ。うでまへ。

一四〇

おてまへ[御手前](代) 徳川時代に、武士の互に呼びし稱。なんぢ。あなた。

おでん[御田](名) ㊀でんがくの略言。㊁こんにやく・芋などを串(くし)にさして、煮込みにしたるもの。――**や**[御田屋](名) おでんを賣る店。

おてんば[御轉婆](名) 女のかるはづみなるもの。又はとりとめなく騒ぐ性質。又、其女。

おと[音](名) ㊀ひゞき。こゑ。ね。㊁おとづれ。いんしん。

おと[弟](名) 「おとうと」の古言。

おと[乙](名) すゑ。つぎ。「こ」の異稱。

おと[於菟](名) 〔動〕「とら」の異稱。

おとうと[弟](名) (「おとひと」の音便)同じ親に生まれたる年したの男子。――**でし**[弟弟子](名) 同師の許に、後に來りたる弟子。あにでしの對。――**ぶん**[弟分](名) 假りにおとうとと定めたるもの。ぎてい。(義弟) ――**よめ**[弟嫁](名) おとうとの妻。おとよめ。

おどかし[威](名) 「おびやかし」の訛。

おどかす[威](他、さ四) 威を示して先方を恐らすこと。おどす。(恐嚇)

おどおど[怖怖](名、副) 「おづおづ」の訛。

おとがね[音金](名) 弓のうらはずのすこし下に入れたる鋼又は鉛をいふ。射てひゞきの出づるもの。

おとがひ[頤](名) 下のあぎと。あご。――**を とく**[解頤] いたく笑ふ。

おとき[御齋](名) 佛事の食物。精進の食物。僧の食物。非時の對。

おとぎ[御伽](名) ㊀とぎの敬稱。㊁妾の稱。――**ばなし**[御伽噺](名) ㊀人のつれづれを慰むるためのはなし。㊁兒童の面白がるやうなはなし。――**ばうず**[御伽坊主](名) 近世武家の前に來りて、はなしなどをしたる坊主。

おとぎりさう[弟切草](名) 〔植〕金絲桃科に屬する草。高さ二三尺。葉は藥として切り傷を治する効あり。せうれんげう。おとぎりす。(小連翹)

〔おとぎりさう〕

おとぎりす(名) 〔植〕「おとぎりさう」に同じ。

おどけ[諧謔](名) ふざけ。たはむれ。(滑稽) ――**ぐち**[諧謔口](名) おどけたる口のきゝやう。ざれぐち。――**ばなし**[諧謔噺](名) おどけたる話。

おどける(自) 「おどく」の訛。

おとご[乙子](名) 末子。

おとごぜ[弟御前](名) おとうとの敬稱。

おとさた[音沙汰](名) おとづれ。音信。

おとし[落](名) ㊀おとすこと。㊁鳥獸などをおとし入れて捕ふる裝置。㊂はなしのおち。㊃木製の火鉢の灰をいるゝ所に入れたる銅鐵などの箱。㊄戸の棧に付けて閉づるときの敷居に設けある穴に差しこむもの。

おどし[威](名) おどすこと。おどかし。

おとしあな[陷穽](名) ㊀穴を掘り人又は獸

などの陷るやうにしたるもの。㊁人をあざむきておとし入るゝ計。

おとしいる[陷](他、ら下二) ㊀おとして穴に入る。㊁攻め落す。「城を―」 ㊂だまして罪におとす。

おとしいれる[陷](他) 「おとしいる」の訛。

おとしがけ[落懸](名) 床の間の上に設けたる横木。

おとしがみ[落紙](名) かはやに用ふる紙。

おとしきんちやく[落巾着](名) 紐を付けて帶の間などにかくる巾着。

おとしざし[落挿](名) 腰刀をさげて下りさがりに佩くこと。

おとしだね[落胤](名) 貴人の私生兒。

おとしだな[落棚](名) 四十八棚の一。

おとしたまご[落卵子](名) 吸物などに、生たまごをわりいれたもの。

おとしちがひだな[落違棚](名) 「おとしだな」の一名。

おとしばなし[落語](名) おとしを面白くいひて、聽者を興ぜしむる談話。おどけばなし。

おとしぶた[落蓋](名) ふたの一種。箱の上の縁に入らずして中におちこむやうに作りたる蓋。

おとしぶみ[落文](名) あらはにいへぬ事を書き、道路などにおとして置くふみ。(匿名書)

おとしむ[貶](他、ま下二) みさぐ。みくだす。みくびる。さげしむ。

一四一

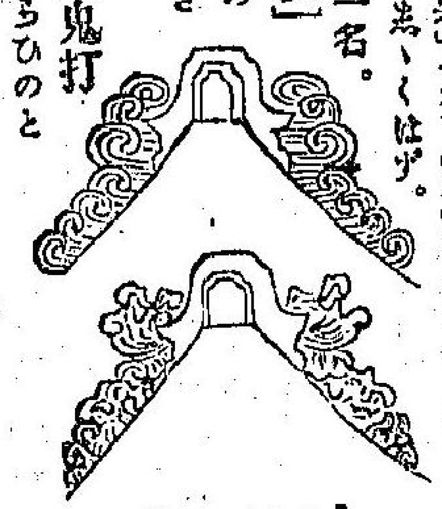
〔おとしめる[貶](他)「おとしむ」の訛。
おとしもの[遺物](名) 心付かず落したるもの。ゐぶつ。
おとしゑ[落餌](名) 既に飼ふ餌。
おと・す[落](他、さ四) ㊀高き上り低きへやる、くだす。さぐ。㊁紛失す。遺失す。㊂おちいらす。はまりこます。「術中に—」。㊃もらす。のこす。㊄へらす。損す。「人望を—」。㊅いやす。なほす。「おこりを—」。㊆所有とす。手に入る。㊇攻め取る。おとしいる。㊈のぞく。去る。㊉脱(ヌ)かす。無くす。⑪罪に服せしむ。「おちらべ—」。⑫逃れしむ。にがす。「主人を—」。
おど・す[威](他、さ四) おどかす。おどろかす。おそれしむ。(嚇)。
おど・す[縅](他、さ四) 鎧のさねを綴る。
おとづき[弟月](名) 十二月の異稱。
おとづつみ[弟鼓](名) こつゞみ。をつゞみの對。
おとづ・る[訪](自、ら下二) ㊀人のもとをたづぬ。とぶらふ。はうもんす。㊁書狀を以て安否をとふ。みまふ。(音)。
おとづれ[訪](名) ㊀はうもん。たづね。㊁せうそく。たより。(音信、消息)。
〔おとづれる[訪](自)「おとづる」の訛。
〔おとど[大殿](名) 貴人のやかたの敬稱。
おとど[大臣](名) だいじん。
おとどい[弟兄](名)「おとゝえ」に同じ。
おとゝえ[弟兄](名) はらから。きやうだい。
おとな[大人](名) ㊀十分に生長したる人。一人まへの人。元服したる人。(成人、長者)。㊁小兒のおとなしきを、となしきと。

おとな[乙名](名) ㊀一族のをさ。㊁をさ。ゐちやう。(男酋)。
〔おとなくさ・し[大人臭](形、二) 少年の大人らしき擧動あるにいふ。
おとなげ[大人氣](名) おとならしきさま。——な・し[大人氣無](形、一) 大人にして大人らしき擧動なし。
おとな・し[大人風](形、二) ㊀おとなの如く、諸事おちつきてあり。㊁おだやかにてありすなほにてあり。おんたうなり。——やか[大人風](名) おとなしきさまにいふ語。
おとなだ・つ[大人立](自、た四) おとなの如く、擧動おだやかにあり。おとなぶ。
おとなひ[音](名) ㊀おとづること。はうもん。ひゞき。「水の—」。
〔おとなびる[大人風](自)「おとなぶ」の訛。
おとな・ふ[音](自、は四) ㊀音發す。ひゞく。㊁はうもんす。おとづる。「なだつ」。
おとな・ぶ[大人風](自、は上二) おと
〔おとなぶ・る[大人風](自、ら四) ㊀大人のふりをす。㊁大人なるを誇る。
＋おとね[乙子](名) 正月下旬の子の日。
おとひめ[弟姫](名) ㊀妹にあたるひめ。㊁龍宮にゐるといふ仙女の名。——のかんざし[弟姫簪](名)【植】「うみやなぎ」の一名。
〔おとぼね[頤骨](名) おとがひの骨。「轉」。
＋おどま・し[疎](形、二)「うとまし」の
おとみつはり[弟身惡阻](名) 婦人が、ちのみ子ある中に、又子をはらみてつはりとなると。
おとめ[處女](名) 未だ嫁せざる少女。未だ男子に接せざる婦女。きむすめ。うぶ。

＋おども(名) 前にたちて行く舟。
おとも[御供](名) おゆう老や。ともびと。
おとや[弟矢](名) 一手二本の矢の第二番目に射る矢の稱。はやの對。
おとよめ[弟嫁](名) 弟の妻。おとうとよめ。(娣)。
おとり[劣](名) おとること。品のさがること。——ばら[劣腹](名) 妾腹の子。
おと・る[劣](自、ら四) ㊀及ばず。まさらず。㊁等位降る。さがる。
〔おどれ[已](代) 人を罵りて呼ふ稱。「—、なにやつなれば」。
＋おどろ(名) ㊀草木のいりまじりて茂りたる處。(荊棘)。㊁物のみだれたるさまにいふ語。
＋おどろおどろ・し(形、二) おそろし。おどろくべし。
おどろかし[驚](名) おどろかすこと。
おどろか・す[驚](他、さ四) おどろかしむ。おどす。おどかす。(駭、愕)。
おどろき[驚](名) おどろくこと。
おどろ・く[驚](自、か四) 思ひの外なる事に遇ひて心搖(ウゴ)く。びつくりす。ぎやうてんす。(駭、愕)。
おとろ・ふ[衰](自、は下二) いきほひ減(ヘ)る。ちから弱る。すゐじやくす。すゐびす。「すゐび。へる。よわる。」
〔おとろへる[衰](自)「おとろふ」の訛。
おとろへ[衰](名) おとろふること。すゐじやく。
おとをぢ[弟小父](名) 父のおとうと。しゆくふ。きふ。(叔父、季父)。
〔おないどし[同年](名)「おなじとし」の音便。
おなか[御中](名) ㊀食事。(女房詞)。㊁腹の異稱。(婦人の語)。

〔おながれ[御流](名) ㊀やがて行はるべき事の廢止となること。殘てもくろみし物事のやぶれたること。「梅見の相談、雨で—になる」。㊁人の盃に殘れる飲みあまりの酒のおさがり(貴人より盃を、頂戴するときなどにいふ)。「—頂戴」。㊂目上の人の所有物の不用なるを與へらるゝこと。又、其頂戴物。
おな・じ[同](形、二) ㊀かれとこれと一樣なり。ひとし。㊁ながくもとのまゝに殘る。かはらず。
おなじく[同](副) ともに。ならびに。および。——ば[同](副) 同じことであるならば。
〔おなで[御撫](名)「はうきぎ」の異稱。(御殿女中の語)。
〔おなべ[阿鍋](名) 下女の稱。(西京の方言)。
〔おなら[屁](名)「へ」の異稱。(轉失氣)。
おなり[御成](名) 出で行くことの敬稱(古昔、宮方、攝家、將軍などにいふ)。
おなんど[御納戸](名) ㊀貴人の衣服調度などを入れおく部屋。㊁「おなんどやく」の略言。㊂鼠色の名、ねずみ色をおびたる藍色。——やく[御納戸役](名) 德川時代の納戸のかゝり、即ち貴人の衣服調度の出納にあづかりしもの。
おに[鬼](名) ㊀死人の靈魂。いうれい。幽魂。㊁祟(タヽリ)をなす幽靈。ものゝけ。㊂想像上の動物、人類の形をなし、頭に角あり、裸體にして虎皮の褌(シタ)を著す、相貌獰惡にして怪力ありといふ。ラせつ。「ヤシヤ」。㊃おにごっこにて、人を捕ふる役となるもの。㊄借金とり。債鬼。
おに—[鬼](接頭) ㊀或語に冠して猛勇なるものゝ意を表はす。「—少將」。㊁或語に冠して無慈悲なるものゝ意を表はす。「—婆」。㊂或語に冠して異形なるものゝ意を表はす。「—ほたる」。

おにあさ[鬼麻](名)【植】「いらくさ」の一名。
おにあざみ[鬼薊](名)【植】「やまあざみ」の一名。(大薊)。
おにあは[鬼粟](名)【植】(い)おほあはの一種、穗長く粒粗し。あゝくはず。(ろ)「おほあは」の一名。
おにいた[鬼板](名) 家の棟(ムネ)の兩端につけてかざりとなす板。



[おにいた]

おにうちまめ[鬼打豆](名) おにやらひのとき、鬼を去りぞくとて、打ち投ぐる豆。
〔おにおに[鬼鬼](名)「おにごっこ」(仙臺の方言)。
＋おにおに・し[鬼鬼](形、二) 殘酷なり。鬼のやうなり。おそろし。
おにがしま[鬼島](名) 古昔、鬼の住めりといひ傳へし無人島の稱。
おにガハラ[鬼瓦](名) 屋根の棟(ムネ)の端におく瓦、能く鬼の面などに似せて製す、惡魔降伏のためなりといへり。(鴟吻)。
おにがみ[鬼神](名) ㊀荒き神。きじん。㊁其國にて最もすぐれたる勇士の稱。
おにがらやき[鬼殼燒](名) 一種の料理、蝦を殼のまゝ、醬油をつけて燒きたるもの。
おにぐこ[鬼枸杞](名)【植】くこの一種、刺多くして葉小く、實は細長にして苦味あり。
おにご[鬼子](名) おにごと。おにごっこ。
おにごっこ[鬼子事](名) 子供の行ふ一種の遊戲、群衆の中より、一人のもの鬼となり、他を追ひ捕ふれば、捕へられたるもの代りて鬼となり、また他を追ひ捕ふると。おにご。おにごと。おにんぶくろ。おにわたし。

おにごと[鬼事](名) おにごっこ。おにご。
おにころし[鬼殺](名) 酒精(アルコホル)分の強き酒即ち粗惡なる酒の異稱。「かな」。
＋おに・し[鬼](形、二) 鬼の如し。「—き人」。
おにしだ[鬼羊齒](名)【植】水龍骨(カウリウコツ)科に屬する羊齒植物、葉は莖に叢生し冬も凋まず、秋の頃、裏面に胞子を生ず。おにやぶそてつ。
おにしぼり[鬼絞](名) しぼりぞめの一種、大くくゝりよせて絞りたるもの。
おにすぎはらがみ[鬼杉原紙](名) すぎはらがみの一種、版ひろし、播磨國より出づ。すぎはら。はんすぎはら。はんのりいれ。
おにたで[鬼蓼](名)【植】「いぬたで」の一名。
＋おにたらし[御多羅枝](名)(「みたらし」の訛)天子の御弓。
おにどころ[鬼萆薢](名)【植】薯蕷科に屬する上昇草本、山野に自生す、單性花と、三個の翼を具へたる蒴と、網狀脈葉とを有す、根及肉芽は食用に供せらる。きどころ。(鬼野老)。
〔おにのさら[鬼皿](名) ㊀「おにごっこ」の一名。(常陸の方言)。㊁左右の手をよせて戯ふる子供の遊戲。
＋おにのしこぐさ[鬼醜草](名)【植】「しをん」の古名。
おにのま[鬼間](名) 淸涼殿の中西南の方の一間の稱、壁に白澤王鬼を切る繪ある故に名づく。
おにばす[鬼蓮](名)【植】睡蓮科に屬する水草、葉は圓形をなし、裂片は厚く內面は紫赤色外面は濃綠色にして、花瓣は深紫色なり、地下莖・種子及嫩き葉柄は食用に供せらる。みづぶき。(芡)。

〔おに-ばば〔鬼婆〕(名) 無慈悲なる老女を嘲りていふ語。
おに-び〔鬼火〕(名) 濕氣ある場所より雨夜などに燃え出る一種の青光、卽ち、燐素の發光なり。いうれいび。りんくわ。いんくわ。(燐火、陰火)。
おに-ふすべ〔鬼燻〕(名)〔植〕「ほこりだけ」に同じ。
おに-へゴ〔鬼桫欏〕(名)〔植〕桫欏科に屬する羊齒植物、木本狀にして芽胞房叢の下部より生ずる球形の鞍包を有す、觀賞用として栽培せられ、又、種々の用に供せらる。
おに-ぼし〔鬼星〕(名) 二十八宿の一。(鬼宿)。
＋おに-みそ〔鬼味噌〕(名) ㊀やきみその一種、鹽氣の極めてつよきもの。㊁弱き人。弱みそ。
〔おに-むし〔鬼蟲〕(名)【動】「かぶとむし」の一名。(仙臺の方言)。
おに-むしや〔鬼武者〕(名) 猛き武者の稱。あらむしや。
おに-やらひ〔追儺〕(名) 古昔は、十二月の末日に、人を疫病の鬼に擬して、これを追ひはらひし式。後世は、節分の夜に、大豆を炒(イ)りこれをおにうちまめと名付け、「福は內、鬼は外」と高く呼びて撒(マ)く式。
おに-やんま〔鬼蜻蜓〕(名)【動】蜻蛉科に屬する大形の蟲、體色は黃にして黑色の條あり、雙眼は頭上に相接し、尾端に葉狀の片なし、性あらし。
おに-ゆり〔鬼百合〕(名)【植】百合科に屬する宿根草、莖は葉腋に珠芽を生じ、花は秋開く、花蓋は赤黃色にして暗紫色の斑點を有し、其各片は大いに反捲す、觀賞用として栽培せられ、鱗狀根は食用に供せらる。いぬゆり。やまゆり。(卷丹)。

〔おにゆり〕

おに-よけ〔鬼除〕(名) 酒の異稱。
おに-わたし〔鬼渡〕(名)「おにごっこ」に同じ。
おに-わらび〔鬼蕨〕(名)【植】わらびの一種、深山に生ず、葉は細長にして鋸齒を有し、一莖にむらがり着く。(貫衆)。
おにん-ぶくろ〔鬼袋〕(名)「おにごっこ」に同じ。
お-ぬし〔御主〕(代) やゝめしたにつかふ對稱の代名詞。おまへ。そなた。きさま。おのし。
お-ねば〔御粘〕(名)「にぬき」の一名。(婦人の語)。
おの〔己〕(代)「おのれ」の略言。
おの-おの〔各〕(名、副) めい〳〵。り〴〵。それ〴〵。(各自)。
おの-おの〔各〕(代) 同班以下に用ふる對稱の代名詞。おまへ。たち。なんぢら。
＋おの-が-おの〔己自身〕(副) めい〳〵の心まかせに。めい〳〵に。(各自)。
＋おの-が-よよ(副) めい〳〵に。別々に。(夫婦離別したる時などにいふ)。(各自)。
〔おの-し〔御主〕(代)「おぬし」の轉。
おの-づから〔自〕(副) (己之從の義)其まゝに。自然に。有りしまゝに。じねんに。てんねんに。
＋おの-づさ〔副〕(自) おのづから。
＋おの-づま〔己妻〕(名) おのれの妻。
〔おの-ぼれ〔己惚〕(名)「うぬぼれ」に同じ。
＋おの-も-おのも〔各〕(名、副) おの〳〵。めい〳〵。
〔おの-ら〔己等〕(代) おのれら。なんぢら。
おのれ〔己〕(名) ㊀其人みづから。ぢぶん。自身。㊁其物みづから。自體。「岩打つ波の―のみ」。

おのれ〔己〕(代) ㊀自稱の代名詞。われ。おれ。㊁人を罵りいやしむる意の對稱の代名詞。うぬ。
おば〔祖母〕(名) ㊀「おほば」の略言。㊁年老いたる女。らうぢよ。
おば-いけ(名) 鯨の身と尾との間の肉。
＋おはぎ(名)【植】「よめな」の古名。(莪蒿)。
〔お-はぎ〔御萩〕(名)「はぎのもち」(萩餅)に同じ。
お-はぐろ〔御齒黑〕(名) ㊀婦人などの齒を黑く染むること。かねつけ。(染牙)。㊁齒を黑く染むるに用ふる液、鐵を酒に浸(ヒタ)してつくる。はぐろめ。(鐵漿)。――とんぼ〔御齒黑蜻蛉〕(名)【動】「かねつけとんぼ」の一名。
〔お-ばけ(名) ㊀へんげ。えうくわい。ばけもの。㊁【動】「おばけがひ」の略言。――がひ(名)【動】「やどかり」の一名。
おば-と〔祖母子〕(名) 女の髮の結(ユ)ひ方、兩方に小さき綰(ワ)をつくり、笄を橫にさしたるもの。
＋おばしま〔欄〕(名)「らんかん」の古名。
おはし-ます(自、さ四) おはすに、ますを添へたる敬語。
お-は-す〔在〕(自、さ變) ㊀居るの敬語。㊁來るの敬語。㊂行くの敬語。
お-ハチ〔御鉢〕(名) 飯を入るゝ桶。めしびつ。おひつ。――がまはる 順番が來る。
お-は-もじ〔御は文字〕(名) はづかしきこと。(婦人の語)。――さま〔御は文字樣〕(名) 前條に同じ。
お-はらひ〔御祓〕(名) 神社などの神號を書きたるおふだ。――ばこ〔御祓箱〕(名) ㊀おはらひを入るゝ箱。㊁やとひ人を解傭すること。
お-はらへ-たて〔御祓立〕(名) 鬼(ドウ)のまへだてを立つる所。

おはら-め〔大原女〕(名)「おほはらめ」の略言。
〔お-はり〔御針〕(名) ㊀雇はれて、針しごとする女。(針線姬)。㊁はりしごと。さいはう。
おひ〔笈〕(名) つゞらの類、四隅に脚ありて、開閉すべき戶を設く、修行者又は行脚(アンギヤ)僧などが旅中背に負ふもの、中には衣服書籍などを納る。「辨慶の―」。

〔おひ〕

おび〔帶〕(名) ㊀衣類を身に纏ひ着くるために、其上より腰のあたりにまとひ結ぶもの。㊁すべておびの如き狀態をなすものゝ稱。「―封」。㊂〔數〕一つの球を二つの平行せる平面に切りたるとき、其間にある球面の部分。――あげ〔帶揚〕(名) 女の帶のむすびのさがらぬためにむすぶひも。
〔おひい-さま〔御姬樣〕(名)「おひめさま」に同じ。
おひい-だ-す〔追出〕(他、さ四) ㊀おひはらふ。おひだす。
おひ-い-づ〔生出〕(自、た下二) ㊀はえいづ。㊁うまれいづ。
おひ-うち〔追擊〕(名) おひうつこと。ついげき。
おひ-う-つ〔追擊〕(他、た四) 追ひかけて擊つ。ついげきす。
おびえ〔怯〕(名) おびゆること。恐怖。
〔おび-える〔怖〕(自)「おびゆ」の訛。
おひ-おとし〔追落〕(名) ㊀おひおとすこと。㊁おひはぎ。㊂圍碁にて、つぎ目多き石が敵に追はれ、これを續(ツ)ぐも到底いきの路なきこと。
おひ-おと-す〔追落〕(他、さ四) ㊀おひておとす。
おひ-おひ〔追追〕(副) だい〳〵に。ひきつゞきて。順序を追ひて。

おひ-か-く〔追掛〕(他、か下二) あとより追ふ。
おび-かけ〔帶掛〕(名)「おびどめ」に同じ。
おひ-かける〔追掛〕(他)「おひかく」の訛。
おひ-かぜ〔追風〕(名) ㊀うしろより吹く風。㊁吹き入る風。㊂船を吹きおくり來る風。おひて。(順風)。㊃衣袖の動くによりて起る風。
おび-がね〔帶金〕(名) 刀劍の鞘に附きたる鐶、これに緒を貫きて刀劍を腰に佩(オ)ぶ。
おひ-かは〔追川〕(名)【動】「はぜ」に同じ。
おび-かは〔帶革〕(名) 革にて拵(コシラ)へたる帶。かはおび。(鞢)。
おび-かは〔帶側〕(名) 帶地の片側。
お-ひき〔御引〕(名)「ひきでもの」に同じ。
おひ-ぎ〔笈木〕(名) ㊀古昔、婚禮のときに、女を乘せて負ふに用ひし具。㊁婚禮のときの引出物。
〔お-ひきずり〔御引摺〕(名) ㊀衣の裾長くして、步むに地を曳(ヒ)くこと。又、其しだての衣服。㊁婦人の物事にぶしやうなること。
おび-く〔誘〕(他、か四) あざむきいざなふ。だましさそふ。
おひ-くづ-す〔追崩〕(他、さ四) 敵陣などを追ひうちてやぶる。おひかけて衝きやぶる。
お-ひげ〔御髭〕(名) ㊀ひげの敬稱。㊁ひげをのばし居るものゝ稱。――を-はらふ 媚びへつらふ。
おひ-ごえ〔追肥〕(名) うゑ物へさきに施しゝ肥料の上に、更に肥料を施すこと。
おひ-こみ〔追込〕(名) ㊀追ひこむこと。㊁芝居の大入り塲。㊂多くの客を一間に入るゝこと。
おひ-こみ〔追籠〕(名) おひこむること。

おひ-こ-む〔追込〕(他、ま四) 追ひ入る。(趕進來)。
おひ-こ-む〔追籠〕(他、ま下二) ㊀おしこむ。㊁病毒を外に發せしめずして、內にこもりをらしむ。
＋おひ-し-る〔生凝〕(自、ら四) 生ひしげる。
おひ-さき〔生先〕(名) 行くすゑ。しやうらい。
おひざもと〔御膝元〕(名) 國君の居城ある所。(轂下)。
＋おひ-し-く〔生茂〕(自、か四) 生ひつく。よくしげる。
＋おひ-し-く〔追及〕(自、か四) 追ひつく、追ひおよぶ。
おび-した〔帶下〕(名) ㊀帶のあたる腰の邊。㊁腰より足までの距離。
おび-しばり〔帶縛〕(名) 腰の少し上の帶をしむべき所。よわごし。
〔おびしろ-はだか(名) 婦女の小帶を帶びしばかりにて、しだらなきさまにいふ。
おひ-すが-ふ〔追次〕(自、は四) おひつく。あとをおふ。
おひ-すが-る〔追縋〕(自、ら四) 追ひおよぶ。
おひ-ずり〔負簏〕(名) 背に負ふ簏(リス)。おひ。
おひ-ずり〔笈摺〕(名) 順禮の背に着る一種の服、袖なし羽織に似る、笈を負ひて背の摺れざるために着けしに起るといふ。
おひ-ずる〔笈摺〕(名) 前條に同じ。
おひ-ずゑ〔生末〕(名) おひさき。
おひ-せん〔追錢〕(名) 一旦拂ひたる上に、更に餘分に拂ふ錢。

おひ-だし オ[追出](名) おひだすこと。——ぐすり[追出藥](名) 病氣の内攻をふせぐ藥。
おひ-だ-す オ[追出](他,さ四) ㊀外へ追ひやる。はらひのく。
おひ-だ-し [生立](名) ㊀そだつこと。㊁多し。
おひ-たち オ[生立](名) ㊀おひたつこと。㊁むそだつ。おひゆく。せいちやうす。
おひ-た-つ オ[生立](自,た四) 次第にそだつ。おひゆく。せいちやうす。
おひ-た-て オ[追立](名) ㊀おひたつること。㊁かひはらふ。追ひやる。
おひ-た-つ オ[追立](他,た下二) ㊀追ひはらふ。追ひやる。
らうすきの後の方に、網の如く出でたる所。(獵箭)
おひ-たてる [追立](他)「おひたつ」の訛。
おび-ち [帶地](名) 帶にすべき切れ地。
おひ-つ [御櫃](名) おはち。めしびつ。飯櫃。
おひ-つか-ひ オッ[追使](名) おひつかふこと。又、その人。
おひ-つか-ふ オッ[追使](他,は四) 勝手に使役す。きまゝにつかふ。
おひ-つ-く オ[追着](自,か四) おひ及ぶ。
おひ-つ-む オ[追詰](他,ま下二) 逃ぐる所も無きまでに追ひ迫る。おひせまる。
おひ-つ-め-る [追詰](他)「おひつむ」の訛。
おひ-て オ[追手](名) 亡(ニ)ぐる者をおひかけ行く人。おつて。
おひ-て オ[追風](名) おひかぜ。おゆんぷう。(順風。)
おび-と [首](名) 姓(カバネ)の名。おうと。
おび-とき [帶解](名) ㊀女の子の五歳のとき行ふ祝ひの儀式。おびなほし。

おびと-き [帶解](名) ㊁結びたる帶の解けたるさまにあることし。——すがた[帶解姿](名)「紐」
おび-どめ [帶留](名) 婦人の帶のうへに締め結ぶ紐。
おび-とり [帶取](名) ——がは[帶取革](名)「おびとりがは」の略言。
太刀を腰に帶ぶるための革の紐。(緒)
おひ-とり-がり オ[追鳥狩](名) 鳥を追ひたてて捕獲すること。
おひ-な-は オ[追繩](名) 野馬を捕ふるに用ふる繩。長さ三ひろ許。さしなは。かけなは。
おひ-な-ほし オ[帶直](名)「おびとき」(二)に同じ。
おひ-な-ほり オ[生直](名) 運命のなほること。不幸の轉じて幸福に向ふこと。
おひ-な-る [御畫成](自,ら四)「おひんなる」の略言。
おひ-は-ぎ オ[追剝](名) おひはぐこと。又、其人。ひおとし。(劫盜。)
おひ-は-ぐ オ[追剝](他,か四) 旅人などを途におびやかして、其衣服・財物をかすめとる。おひおとす。(行劫。掠奪。)
おひ-ば-ら オ[追腹](名) 古昔、主君の死を傷(イタ)み、臣下が其跡を追ひ切腹せしこと。おゆんし。(殉死。)
おひ-はら-ひ オ[追拂](名) ㊀おひはらふこと。
おひ-はら-ふ オ[追拂](他,は四) 追ひ出す。おひ去らす。
おび-ひき [帶引](名) 古昔行はれし一種の遊戲。多人數集まりたる席にて、各自の帶の端によりたる紙を結び付け、これを集めて、兩人づゝ其中より引き試み、若し雙方とも相手方の帶を引き當てたるときは、其帶を交換したり。

おび-ふう [帶封](名) 郵便物などを全く封じこめずして、ただ其上に帶のみ掛けて封ずること。
おび-ぶくろ [佩袋](名) ㊀佩び袋ともいふやうに作りたるふくろ。おきぶくろ。(腰)。㊁きんちやくの古名。
おひ-まく-る オ[追捲](他,ら四) はげしく追ひかく。おひ散らす。
おひ-まは-す オマ[追廻](他,さ四) ㊀あちこちと追ふ。㊁おひつかふ。ひどく使役す。
おひ-まは-し オ[追廻](名) ㊀あみの一種。鯉方に竹を立て、これに網を張りたるもの。(羅網)。㊁かれこれとおひつかふこと。又其つかひ男。
おひ-め オ[負目](名) 身に負ふ借財。おやくせん。かり。負債。(債)。
おび-もの [佩物](名) ㊀古昔、禮服に用ひたる一種の装飾。玉を絲に貫き、大抵乳の下のあたりより垂れしもの。あんもの。ぎよくはい。(玉佩)。㊁腰にさぐる裝飾品の總稱。
おひ-や [御冷](名) つめたき飲料水。のみみづ。
おびやか-す [脅](他,さ四) ㊀おどろかす。おそれしむ。おどす。㊁おどして財物を奪ふ。(劫)。
おびやく-ど [御百度](名)「ひやくどまゐり」に同じ。
おびや-す [脅](他,さ四)「おびやかす」の訛。
おひ-や-る オ[追遣](他,ら四) ㊀おひてさらしむ。おひて去らしむ。
おびゆ [怯](自,や下二) ㊀おぢおそる。㊁驚く。

おひ-ら [御平](名)「ひらわん」の略言。
おひ-らき [御開](名) 宴をはることを、(多く婚禮の宴などにいふ)。
おひ-る [惚](自,ら上一) あどけ無く振る舞ふ。
おひ-わ-け オ[追分](名) ㊀路の左右に分るゝ處。㊁「おひわけぶし」の略言。
——ぶし[追分節](名) 小唄の一種。聲を永くひきて謠ふもの。
おひ-ん-な-る [御畫成](自,ら四) ねむりさめて起くの敬語。
おふ オ[逐](他,は四) ㊀あとに附く。したがふ。㊁おひかく。おひゆく。㊂おひはらふ。㊃うつる。
おふ オ[追](他,は四) ㊀退き去らしむ。おひはらふ。㊁田に出だし遣(ヤ)る。やらふ。はなつ。㊂驅逐す。㊃觀奔す。
おふ オ[負](他,は四) ㊀身に受く。うく。うける。㊁背にのす。せおふ。
おふ オ[生](自,は上二) 成長す。はゆ。のぶ。そだつ。
おふ オ[帶](他,は四) ㊀腰に擁(?)く。㊁腰にさす。
おふ オ[生](自,は上二) ㊀はゆ。㊁むすぶ。
おぶ [帶](名) 湯の稱。(東京の方言)。
おぶく [阿福](名) 顔の頰骨高く鼻低くして、笑顔したる女の顔の稱。おかめ。おたふく。

おふく [御福](名) 頂戴物などの敬稱。——わけ[御福分](名) 頂戴物などを他に分け與ふること。
おふくろ [御袋](名) 母たる人。(家母)。
おふげ-なし [頁氣無](形,二) 身の分にすぎて、堪へ難し。
おふし [啞](名) おし。あゐや。
おふ-さ-る オ[被負](自,ら四) ㊀背の上にのる。おはれる。㊁たよる。
おふ-す オ[生](他,さ四) 古昔、游泳するとき、溺れぬために脇に挾みて身をかろくするに用ひし具。
おふ-せ オ[負](他,さ四) おほせ。
おふ-て オ[追手](名) ㊀城の表口の稱。
おぶ-ぶ [負](他) 身に負ひ得るだけ負ひて、十分力を盡くして。
おぶ-れ [御觸](名) 德川時代に、幕府又は城主より出でし布告の稱。
おへや [御部屋](名) ——さま[御部屋樣](名) 前條に同じ。
おへ-る [生](自) ㊀ふえの訛。
おほ オ[大](接頭) ㊀或語に冠して大量なる意を表はす。
おほ-あせ オ[大汗](名) 甚しく出づる汗。
おほ-あつ-あつ オ[大熱熱](名) 熱心になりて居ること。
おほ-あな オ[大穴](名) ㊀大いなる穴。

なる缺損。
おほ-あに オ[大兄](名) 第一の兄。
おほ-あね オ[大姉](名) 第一の姉。
おほ-あねは オ[大姐](名) 穗大くして實の粒の粗なるもの。
おほ-あふぎ オ[大扇](名) 古昔、天皇の出御のとき、左右より奉らせる翳。
おほ-あめ オ[大雨](名) はなはだしくふる雨。
おほ-あらめ オ[大荒目](名) 鎧のおどし方の名。
おほ-あれ オ[大荒](名) ㊀暴風雨の甚だはげしきこと。
おほ-い オ[大](名) ㊀古昔、位に冠して用ひし語。「—みつのくらゐ」。
おほ-いき オ[大息](名) ふとく吐く息。
おほ-いぎみ オ[大君](名) 第一のおねぎみ。「大合戰」
おほ-いくさ オ[大軍](名) はげしきたゝかひ。
おほ-いなる [大](副) ㊀甚しく多く。㊁ふとくたかく。
おほ-いぬ オ[大犬](名) いぬの一種。形大きくかつよく、よく狩りにつかふもの。
おほ-いほつ-ぶ オ[大法師](名) 僧の位。
おほ-いまうち-ぎみ オ[大臣](名)「おほきおとゞ」に同じ。
おほ-いまつりごと-の-つかさ オ[太政官](名)「だいじやうくわん」に同じ。
おほうた-どころ オ[大歌所](名) 古昔、諸國の風俗・神樂・催馬樂(サイ)の歌曲を教へ習ふ所。

おほ・うち【大内】(名) だいり。ごしよ。(内裏)。 ──ぎり【大内桐】(名) 五三の桐。 ──びし【大内菱】(名) ひしの花模様の一種。おほうちびりの類。 ──ぼん【大内本】(名) 大内義隆が、明國に紙をやり、摺らせて取り寄し、書物の稱。 ──やま【大内山】(名) (「やま」は、添へたる語)禁中の大庭。おほうちも。

†おほ・うちぎ【大袿】(名) うちぎの大きなるもの。あこめのゆきたけを、大きく仕立てたるもの。

おほ・うみ【大海】(名) 大いなる海。たいやう。

おほえ【覺】(名) ㊀おぼゆること。㊁見聞きしたることを、心に存して忘れぬこと。きおく。(記憶)。㊂技術に熟練したること。㊃信用あること。寵遇せらるゝこと。「君の─めでたく」。 ──がき【覺書】(名) ㊀記憶のために書き付けておくこと。又、其書き付け。㊁[Memorandum] 一種の外交文書、一國政府又は其使臣が、對手國政府又は其使臣に對して、某事件の性質歴史其他これに就きて執るべき態度を明かにし、又は其論斷主張等を證するために發送するもの、長文に渉ると多し。又、別に商議の始末書ありて、其合議の成立せるときのものは、卽ち一種の協定書なり。 ──ちやう【覺帳】(名) おぼえがきするための帳簿。てちやう。てびかえ。(手帳、手扣)。

〔おぼえる【覺】(自)「おぼゆ」の訛。

†おほ・おと【大弟】(名) 皇太弟を申し奉る語。

おほ・おば【大祖母】(名) 祖母の母。ひばゞ。(曾祖母)。

†おほ・おほ・し (形、二) (「おほ」は「おぼろ」の略言)はきとせず。あいまいなり。

おほ・おほぢ【大祖父】(名) 祖父の父。ひぢぢ。(曾祖父)。

†おほ・おみ【大臣】(名) 上代の官職、大連と共に朝政を執りたる者。卽ち、臣の氏の上にして臣の氏を總理したる者。

†おほ・およ・び【大拇指】(名) おやゆび。

おほ・が【大鋸】(名) 大きなる鋸。おが。がんぎ。かゞり。

†おほ・がせ【纑車】(名)「いとくりぐるま」の古名。

おほ・かうむり(名)【動】翼手類に屬する哺乳動物、體は鼠大にして翼廣し、果實を食す、小笠原・琉球等に產す。(蝙蝠蟲)。

おほ・がさ【大笠】(名) 古昔に用ひし大なる笠、柄ありて携帶し得べきもの。(簦)。

†おほ・かしはでの・つかさ【大膳職】(名) 古昔、宮内省に屬し、諸國の調雜物其他膳部に關する一切の事を取り扱ひし所。

おほ・かた【大方】(名、副) 十のうち七八。たぶん。たいてい。あらかた。(約、略)。

おほ・がた【大形】(名) 大きなる形。こがたの對。

おほ・かたびら【大帷子】(名) かたびらの一種、單(ひとへ)の下に着る、古昔は、汗取のため夏のみ用ひしが、後世は、夏冬ともに着用す。色目は夏紅にして冬白なり。(衫衣)。

†おほ・がね【巨鐺】(名)「つりがね」の古名。(鐘)。

おほ・がね【大金】(名) 多額なる金。たいきん。 ──まうけ【大金儲】(名) 大金をまうくること。 ──もち【大金持】(名) 多額の財貨を有する人。財產家。金滿家。

おほ・がひ【頁】(名) 漢字のつくりの名、順・類の如き字の右方にある頁の字の稱。「こがい」(貝)の對。

おほ・かみ【狼】(名)【動】食肉類中犬科に屬する獸、深山に棲む、耳小さく口大きく、頭は細長し、趾行にして前肢に五爪後肢に四爪あり、性質甚だ猛惡なり。 ──ごろも【狼衣】(名) 衣服の身體にそはずして大きなるにいふ語。

[おほかみ]

〔おほ・かめ【狼】(名)【動】「おほかみ」の訛。 ──の・き(名)【植】忍冬科に屬する草、蕚は廣楕圓狀或は圓狀心形にして、雄蕊は花冠より長し、嫩葉は食用に供せらる。

〔おほ・がら【大柄】(名) ㊀身體の通常より大きなること。(魁梧)。㊁縞柄(しまがら)の普通より大きなること。

†おほ・がり【大雁】(名)【動】「ひしくひ」の古名。

おほき─【大】(接頭) ㊀「おほ」に同じ。㊁「おほい」(一)に同じ。(正)。

†おほき・おほとゞ【太政大臣】(名)「だじやうだいじん」に同じ。

†おほき・おほい・まうちぎみ【太政大臣】(名) 前條に同じ。

おほき・さ【大】(名) おほきなる度合ひ。ふとさ。

おほき・さき【大后】(名) 皇太后を稱し奉る語。

おほき・し【大】(形、一) ㊀狹からず。ひろし。㊁少からず。おほし。㊂あまりなし。とりとめなし。㊃輕からず。おもし。「事おほきくして其才に堪へず」。㊄密ならず。あらし。㊅かさ多し。ふとし。㊆聲高し。たかし。㊇年多し。たけたり。

†おほき・に【大】(副)「おほいに」に同じ。

†おほき・まうちぎみ【大臣】(名)「おほいまうちぎみ」に同じ。

おほ・きみ【大君】(名) ㊀至尊の尊稱。㊁親王の御子「某─」。

†おほ・きみ・づかさ【正親司】(名)「おほきんだちのつかさ」に同じ。

おほ・きもいり【大肝煎】(名) おほじやうや。(大保正)。

〔おほ・ぎやう【大形】(名) 實際よりは樣子の方、却ておもく〳〵しくあること。おほげさ。

おほ・ぎり【大切】(名) ㊀大きく切り分けたる切り身。㊁芝居の狂言の終末。おほづめ。けつきよく。(大團圓)。㊂すべて物事の終末。おはり。

†おほ・きんだちの・かみ【正親正】(名) 古昔の官名、おほきんだちのつかさの長官。

†おほ・きんだちの・つかさ【正親司】(名) 古昔、宮内省に屬し、皇族・諸王などの名籍をつかさどりし所。おほきみづかさ。

おほ・ぐけ【大絎】(名) くけ針の大きなるもの。

おほ・ぐち【大口】(名) ──ばかま【大口袴】(名) 古昔、行はれし下袴の一種、束帶のとき上袴の下に穿ちたるもの、裾の口廣くして大きし、すゞし又はひらきぬを用ひて仕立てたり。

[おほくちばかま]

〔おほ・ぐち【大口】(名) ㊀大きく口をひらくこと。㊁みだりがはしきことをきらひなくいふこと。 ──ぎき おほぐちをいふ。

おほ・くび【大領】(名)「おくみ」に同じ。

おほ・ぐひ【大食】(名) たいしよく。ばうしよく。

おほ・ぐも【大蜘蛛】(名)【動】くもの一種、大形にして白斑あり、脚長くして毛多し。

おほ・くら・きやう【大藏卿】(名) ㊀古昔の大藏省の長官。㊁明治十八年官制改革以前における、大藏大臣の稱。

おほ・くら・しやう【大藏省】(名) ㊀古昔の八省の一、太政官に屬し、出納・貢調・權衡・度量・賣買・估價其他金銀・珠玉等に關する事務をつかさどりし中央官廳。おほくらのつかさ。㊁大藏大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、財務行政の事務を取り扱ふ中央官廳、又、大藏大臣が處理する事務の全體の稱。 ──しようけん【大藏省證券】(名) 流動公債の一、會計年度内に一時の歲入不足を塡補するため、大藏省が發行せる短期の公債證書、我國現行法にては、十二ヶ月を以て償還の最長期とし、每年の豫算にて、其發行最高額を定む。

おほ・くら・だいじん【大藏大臣】(名) 各省大臣の一にして、財務行政の單獨官府、政府の財務を總轄し、會計・出納・租稅・貨幣・預金・保管物及銀行に關する事務を管理し、府縣郡市町村及公共組合の財務を監督するもの。

†おほ・くら・の・かみ【大藏卿】(名)「おほくらぎやう」(一)に同じ。

†おほ・くら・の・つかさ【大藏省】(名)「おほくらしやう」(一)に同じ。

〔おほ・げさ【大袈裟】(名) ㊀さほどにも無きことを大きくいふこと。おほぎやう。㊁肩より斜に切りおろすこと。「─に切り拂ふ」。

おほ・け・な・し【頁氣無】(形、二) 不相應なり。力にあまれり。

〔おほ・こ (名) ㊀娘の未だ世に慣れざること。女の未だ男に接せざること。又、其頃の女、處女。㊁末の子。

おほ・ごしよ【大御所】(名) 古昔、隱居せられたる親王の尊稱、又隱居せられたる將軍の稱。

おほ・ごてふ【大蝴蝶】(名)【植】「きんばうげ」に同じ。

〔おほ・ごと【大事】(名) なみ〳〵ならぬ事がら。

おほ・ごゑ【大聲】(名) たかき聲。大きなるこゑ。たいせい。かうおやう。

†おほ・ざう (名) ひとゝほり。おもてむき。

おほ・さか・がうし【大阪格子】(名) 障子の一種、腰を板張りにし上を細き格子にして、裏に取りはづし得る小障子あるもの。

おほ・さか・おやりばん【大阪定番】(名) 德川時代に、大阪の京橋口及玉造口の二ヶ所の守備にあたりし役。

おほ・さか・づけ【大阪漬】(名) 大根の根と葉とを細かくきざみて、これを鹽につけたるもの。

おほ・ざけ【大酒】(名) 酒を多く飲むこと。たいしゆ。ばういん。(豪飲)。 ──のみ【大酒飲】(名) おほざけを飲むもの。

おほ・ざっぱ (名) ㊀小さき事に拘泥せぬ性質。おほまか。しいしく。㊁細密にわたらざること。およそ。あらまし。

おほ・ざつま【大薩摩】(名)「おほざつまぶし」の略言。 ──ぶし【大薩摩節】(名) 一種の俗曲、慶安の頃、大薩摩掃雲太夫より始まる、後分れて、河東・小薩摩など種々の派を生じ、江戸節もまたこれより出づ。

おほ・ざと【大邑】(名) 邑を下としたる漢字のつくり、邸・郊などの如き字の右方にあるものゝ稱。

おほ・さは【多澤】(名) (「さは」は、多くの義) たくさんにあること。

おほ・し (名)【植】翠(テク)科に屬する草、葉は波狀

を兼し、旗柄の上面は平坦なり、驟用［下略］植物なり。からだいわう。（大羊蹄）。

おほし［多］（形、一）❶數又は量十分にあり。すくなからず。たくさんなり。❷求むる所きびし。予に求むる一。

おほし［思］（形、二）おもはし。彼の人と一き戀。

おほしかオホ［大鹿］（名）【動】偶蹄類中麋鹿科に屬する獸。概ね牡のみ有枝の角を生じ其質固形にして每年之を交脫し年々一枝を增す。老成後は每年同形の角を生じ、其枝は末端にて族（ぞく）分る。毛に斑なく、牡は灰黑色にして牝は褐色なり。「を」。

おほしかけオホ［大仕掛］（名）仕掛けの大なること。

おほしばゐオホ［大芝居］（名）❶仕掛けの大なる芝居、又大劇場。❷名優の技藝、又名優にも及ぶべき技藝。

おほしほオホ［大潮］（名）一ケ月内にて最もさしひきの大なる潮。太陽及太陰が、地球に對して同方位にあるとき、或は地球が太陽と太陰との中間にあるときか、即ち、滿月か若しくは新月かのときに起る。

おほしぼオホ［大皺］（名）❶おぼしの紙にあるあらき皺。❷皺の多くよりたるもの。

おほしまオホ［大島］（名）❶砂糖の一種、大隅國大島より出だすもの。❷おほしまつむぎの略言。

——**つむぎ**［大島紬］（名）大隅國大島より產出する飛白（かすり）織りの紬。——**りう**［大島流］（名）砲術の流派の一。大島吉綱を祖とす。

おほしますぢオホ［大縞條］（名）けものゝ毛など、縞になりて大なる筋あるもの。「へ」。

おほしめし［思召］（名）おぼしめすこと。おかんがへ。

おほしめ・す［思召］（他、さ四）おもふの敬語。（所念）。

おほしやうやオホ［大庄屋］（名）多くの庄屋の上に立つ支配區域大きなる庄屋。おほぎもいり。

おほすオホ［生］（他、さ四）❶成長せしむ。はやす。のばす。❷養育す。やしなふ。そだつ。

おほすオホ［遂］（他、さ下二）なしとぐ。はたす。「あふ。圖みー」「卷一」。

おほすオホ［負］（他、さ下二）❶背おはしむ。おはす。おひもたす。❷うけもたす。かづく。

おほすオホ［課］（他、さ下二）❶貢租を納むべきを命ず。❷わりあて、なさしむ。命じてなさしむ。

おほすオホ［仰］（他、さ下二）いふ又はいひつくの敬語。

おほす［思］（他、さ四）おもふの敬語。

おほせオホ［仰］（名）❶いひつけ。めいれい。❷おほせごと。

おほぜいオホ［大勢］（名）あまたの人。たいぜい。「にんず」（大衆）。

おほせいろうだなオホ［大西樓棚］（名）四十八棚の一。「る文書」。

おほせがきオホ［仰書］（名）おほせの事をかきたるもの。

おほぜきオホ［大關］（名）❶相撲の幕のうちにて、最も上に位する身分。せき、せきとり。❷其仲間のうちにて、最もすぐれたるもの、稱にもいふ。

おほせごとオホ［仰言］（名）おほせること。

おほせつきオホ［大節季］（名）一年のをはり。せっきれんまつ。

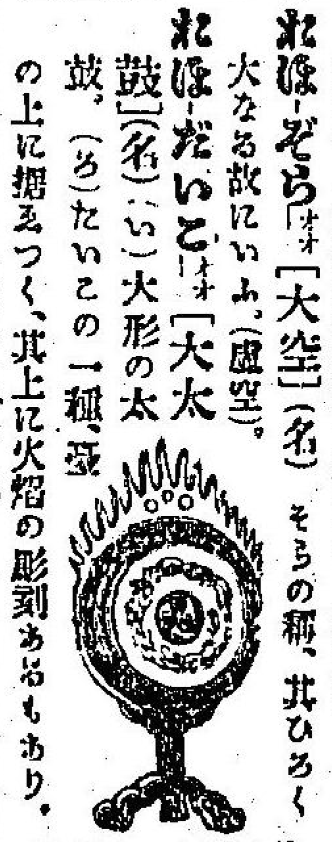
おほせる［遂］（他）「おほす」の訛。

［**おほそ**］［御細］（名）❶あびの一名。（貝女中の語）。❷「いわし」の一名。（婦人の語）。

おほそでオホ［大袖］（名）❶はゞひろきそで。なおきそで。❷保元平治頃に行はれし鎧の袖。

おほぞらオホ［大空］（名）そらの稱。其ひろく大なる故にいふ（虛空）。

おほだいこオホ［大太鼓］（名）たいこの一種。大形の太鼓の上に掲ゐて、其上に火焰の彫刻あるもあり。



（ろ）おほだいこ

おほだうぐオホ［大道具］（名）芝居にて、舞臺に用ひるたてつけ・隊子其他すべての道具の中、普通のものより稍々大なるもの、稱。

おほたかオホ［大高］（名）おほたかだんしの略。——**だんし**［大高檀紙］（名）檀紙の一種、大形にして、地白く厚く皺あり。

おほたちオホ［大太刀］（名）戰場に背負ひ行く大なる太刀。

おほたてあげオホ［大楯揚］（名）すねあての一種。古昔に多く用ひしもの。

おほたてものオホ［大立物］（名）❶芝居にて、其一座の中の技藝最もすぐれたる名題役者。❷其社會にて、推し立てらる人物。

おほぢオホ［大路］（名）幅のひろき交通路。だいだう。こうぢの對。

おほぢオホ［祖父］（名）おほぢ。ぢゝ。

おほぢがふぐり（名）【動】かまきり蟲の幼蟲、秋の終りに樹枝などに着く、初めは唾の如く、後には黑褐色となる。あしがらうじ（螵蛸）。

［**おほつち**］［黃土］（名）「あうど」（黃土）の訛。

［**おほづ**］［大圖］（名、副）おほよそ。たいがい。

おほつかながる［覺束無］（他、ら四）おぼつかなく思ふ。

おほつかなし［覺束無］（形、二）❶判然せず、分明せず。❷心もとなし。たしかならず。

おほつごもりオホ［大晦］（名）一年の最終の日。「いふ」おほみそか。おほはし。

おほつちオホ［大地］（名）地の稱、其廣大なるより、いふ。

おほづゝオホ［大砲］（名）たいはう。（巨熕）。

おほつゞみオホ［大鼓］（名）つゞみの一種、大形にして、膝にもたせてうつもの。

おほつぼオホ［大壺］（名）❶大いなるつぼ。❷ゆびんの古名。

おほつぼりうオホ［大坪流］（名）足利義滿の頃より始まりたる馬術の一流。大坪廣秀を祖とす。

おほづめオホ［大詰］（名）芝居の最終の幕。

——**のき**［大詰木］（名）芝居にて、おほづめに入る、拍子木。

おほつゑオホ［大津繪］（名）❶はじめて走り書きにしたる一種の粗畫、多くは滑稽ゑみたるもの。近江國大津より賣り出したりといふ。❷おほつゑぶしの略言。——**ぶし**［大津繪節］（名）一種の俗謠。

おほてオホ［大手］（名）城の前門。（追手）。「からめて」の對。

おほでオホ［大手］（名）雙手を左右へ張りひろげたること。

おほてゝオホ［大父］（名）祖父の古稱。

おほとオホ［大戶］（名）表口などにある大いなる戶。

おほどうオホ［大胴］（名）胴の大なるつゞみ。

おほどか（名）ゆるやか。おほのか。ゆたか。おほまか。おほぞう。

おほどく（自、か四）取り紛らはしくあり。おほまかにてあり。

おほとこオホ［大床］（名）❶宮の階のそとがこひ。❷ひろき床の間。

おほとしオホ［大年］（名）❶ぐわんねん。❷おほみそか。——**こし**［大年越］（名）「としこし」に同じ。——**より**［大年寄］（名）「たいろう大老」に同じ。

おほとなぶらオホ［大殿油］（名）古昔、宮中にてつけたるともしびの稱。「近くまゐりて」。

おほとねりオホ［大舍人］（名）古昔の官名。宮中の宿直などの事をつかさどりしもの。——**のつかさ**［大舍人寮］（名）古昔、中務省の被官にして、大舍人の出仕せし役所。——**のかみ**［大舍人寮頭］（名）おほとねりのつかさの長官。

おほとのオホ［大殿］（名）❶古昔、宮城の殿舍の稱。❷古昔、貴人の當主の父の尊稱。❸貴人の世子に對して、當主の稱。——**あぶら**［大殿油］（名）「おほとなぶら」に同じ。——**ごもる**

おほとのごもる［大殿籠］（自、ら四）主上の御寢なることの敬語。——**ほがひ**［大殿祭］（名）古昔、宮殿などに、火災其他の災難無からんを禱りし祭事。（大殿祭）。

おほどほりオホ［大通］（名）市中にある廣き通り。おほぢ。だいだう。

おほともひオホ［大辨］（名）古昔の太政官の判官。辨の條を見よ。

おほとりオホ［大鳥］（名）❶莊子に記しある鵬といふ鳥の稱。鯤といふ大魚の化して成りたるものといふ。——**の**［大鳥］（一枕）「羽がひ」に冠らする詞。

おほとる（自、ら下二）❶みだれ散る。ひろがりみだる。❷もはとぬ。

おほないおほな（名）「おふなおふな」に同じ。

おほなごオホ［凡子］（名）普通の人の子。いやしき身分のもの、子、又大名の兒にして女の美稱りともいふ。

おほなだいオホ［大名題］（名）脚本にて名目となるもの。

おほなほびオホ［大直日］（名）❶物忌みより平常にかへること。神事はて、後の宴。なほらひ。なほみ。❷大直日の神の略言。——**のかみ**［大直日神］（名）まが事をなほして吉となしたまふといふ神。

おほなみオホ［大浪］（名）高く大きなる浪。（巨濤）。

おほなめオホ［大嘗］（名）「おほなめまつり」の略言。——**まつり**［大嘗祭］（名）天皇の大位に即きて後、天照大神を始め奉り天神地祇を祭らせたまふ大祀。たいじやうゑ。

おほにへオホ［大嘗］（名）❶おほなめの轉。❷つと。あらまき。（苞苴）。

おほねオホ［大根］（名）❶物事の起源。もと。❷だいこんの古名。（蘿蔔）。

おほねむしオホ［大根蟲］（名）【動】「だいこんむし」の古名。

おほのか（副）ゆるやかにしてこせつかざること。

おほばオホ［祖母］（名）祖母。（祖姑）。

おほばからしオホ［大葉芥子］（名）【植】からしなの變種、葉大にして辛味少し。

おほばこオホ［大葉子］（名）【植】車前草科に屬する草、葉は根生にして、花は穂狀花序に排列し、頭は筒狀す、葉は食用に種子は藥用に供せらる。かへる

ば、おんばこ。〔車前草、鯽魚草〕。

だなに同じ。

おほ-はし-だな ォォ〔大橋棚〕(名)「おほはせいろう」

おほ-はし-りう ォォ〔大橋流〕(名) 和風の書法の一派。石川丈山の門人なる大橋長左衞門の宗隆より始まれるもの。

おほ-はだぬぎ ォォ〔大肌脫〕(名) 肌を多くあらはして脫ぐこと。

おほ-はば ォォ〔大幅〕(名) 布帛の幅の大なること。又、其布帛。

おほ-はらへ ォォハラヒ〔大祓〕(名) 半年の罪穢(ザイヱ)を祓ひ給ふ儀の神事。古昔、六月及十二月の晦日に、百官を朱雀門に會して行はれたり。今時、宮中を始め各神社にて、在來の日を以て行はる。

おほ-はら-め ォォ〔大原女〕(名) 京都附近大原の里より出づる女。頭上に薪を戴き、黒木召せと、呼びて賣りあるく。

[おほはらめ]

おほ-ばん ォォ〔大判〕(名) ❶版の大なるもの。こばんの對。「—の紙」(大版)。❷昔時、通用せし金貨の一、形はこばんに同じく、一枚にて七兩二分にあたりたるもの。

おほ-ばん ォォ〔大鷭〕(名)【動】かはがらすに同じ。

おほ-ばん ォォ〔大番〕(名) ❶鎌倉時代に、護衞として京都に駐在せし諸國の武士の稱。❷おほばんぐみの略言。——がしら〔大番頭〕(名) おほばんぐみの長。——ぐみ〔大番組〕(名) 德川時代に、江戸・京都・大阪の三城を戍(マモ)りし武士の稱。——せき〔大番席〕(名) 德川氏の制にて、はたもとの扶持高二千石未滿より廩米二百俵までのものゝ稱。

おほ-ひ ォォ〔被〕(名) おほふもの。おほふに用ひたるもの。〔蓋、覆〕。

おほ-びき ォォ〔大引〕(名) 家の床下などに横にわたす木。

おほ-びけ ォォ〔大引〕(名) 東京の遊廓にて、午前二時頃の稱。

おほ-ひら ォォ〔大平〕(名) ❶一種の料理、芋、蓮根、蒟蒻(コンニャク)などに鳥の肉などを加へ、汁多く煮たるもの。❷おほひらわんの略言。——わん〔大平椀〕(名) ひらたくして大なる椀。

おほ-びら ォォ(名) あらはにて、他見に頓着せざるさまにいふ語。

おほ-ひる ォォ〔大蒜〕(名)【植】にんにくの古名。

おほ-ひろま ォォ〔大廣間〕(名) ❶德川時代に江戸城内の廣間の稱。即ち、諸侯の列居せし所。❷すべて、通常のものより超えて廣く、衆人會合のために設けられたる間の稱。

おほ-ふ ォォ〔覆、被〕(他、は四) ❶上にかけふさぐ。❷かぶる。きる。❸包み藏す。つゝむ。「徳天下を—」。❹庇護す。かばふ。❺隱蔽す。かくす。

おほ-ふ ォォ〔覆、被〕(自、は四) ❶上にかかる。❷布及す。およぶ。

おほ-ふう ォォ〔大風〕(名) そんだい。おほへい。

おほ-ふく ォォ〔大福〕(名) 歲旦の朝の祝ひに飲むうめぼしを入れたる茶湯。

おほ-ふね ォォ〔大舟〕(名) 大いなる船。

おほ-ふりそで ォォ〔大振袖〕(名) ❶延寶・天和頃迄行はれし大なるふりそで。❷すべて大なるふりそで。

おほ-ぶろしき ォォ〔大風呂敷〕(名) ❶幅ひろき風呂敷。❷自家の事を誇大にいふこと。——をひろぐ 誇大なる言をなす。

おほ-へい ォォ〔大柄〕(名)「たいへい」に同じ。

おほ-へい ォォ〔大柄〕(名) 倣慢。おほふう。

おほ-ほし ォォ(形、二) おぼゝし。

おほ-ほす ォォ〔思〕(他、さ四) おぼしめす。

おほ-ボトケ ォォ〔大佛〕(名) 巨大なる佛像。だいぶつ。「奈良に—」。

おほ-ほる ォォ〔溺〕(自、ら下二) おぼる。

おほ-ま ォォ〔大間〕(名) ❶ひろき室。廣間。❷きやうまの一名。

おほ-まうちぎみ ォォ〔大臣〕(名)「おほいまうちぎみ」の略言。

おほ-まか ォォ〔大〕(名) ゆるやかなること。おほやう。

おほ-まがとき ォォ〔大禍時〕(名) 夕ぐれなどの薄暗くなりたる時の稱。

おほ-まつりごと-の-おほまつきみ ォォ〔太政大臣〕(名)「だいじやうだいじん」に同じ。

おほ-まつりごと-びと ォォ〔太政人〕(名) 參議の古名。

おほ-まどき ォォ〔大禍時〕(名)「おほまがとき」に同じ。

おほ-まはし ォォ〔大回〕(名) まはり道して行くこと。

おほ-まはり ォォ〔大回〕(名) ❶道などを遠くまはりて行くこと。とほまはり。ちかみちの對。❷大いなる立ちまはり。

おほ-まへ ォォ〔大前〕(名) 神前又は佛前などの敬語。「大神の—にまうさく」。

おほ-まめ ォォ〔大豆〕(名) まめ又はだいづの稱。

おほ-まんぢゆう ォォ〔大饅頭〕(名) ❶饅頭の大なるもの。❷おほまんぢゆうあたまの略言。——あたま〔大饅頭頭〕(名) 兜(カブト)のあたまの一種。饅頭の形にかたどり作りたるもの。

おほ-まんどころ ォォ〔大政所〕(名) 攝政又は關白などの母の尊稱。

おほ-み- ォォ〔大御〕(接頭) 或語に冠して物を尊みていふ意を表はす。「—歌」。——あかし〔大御燈〕(名) 神佛などに奉る燈明の敬稱。——あへ〔大御饗〕(名) 宮中にて群臣にたまはる酒饌の敬稱。

おほみ-いつ ォォ〔大御稜威〕(名) 天子の御威德。

おほ-みそか ォォ〔大晦日〕(名) 一年の最終の日。おほつごもり。おほとし。(除日)。

おほみ-たから ォォ〔大御寶〕(名) 國のたから(國民)の義。國民の稱。おほんたから。れいみん。(公民)。

おほ-みち ォォ〔大道〕(名) 幅ひろき道。だいだう。

おほ-みづ ォォ〔大水〕(名) 暴雨などのため、河水溢(アフ)れて陸上を犯(オカ)すこと。こうずゐ。(洪水、巨浸)。

おほ-みね-いり ォォ〔大峯入〕(名) 修驗者が修業のために、大和國大峯山に入ること。又、其修驗者の稱。「—のまぶしの如し」。

おほ-み-の-やり ォォ〔大身槍〕(名) 刃の大なる槍。

おほ-みや ォォ〔大宮〕(名) ❶大なる宮殿。❷おほうち。皇居。❸皇太后の御一名。——づかさ〔大宮司〕(名)「だいぐうじ」に同じ。——びと〔大宮人〕(名) ❶宮中に仕ふる人。❷後宮の女官。

おほ-みら ォォ〔薤〕(名)【植】「らっきょう」の古名。

おほ-むかし ォォ〔大古〕(名) 最も年久しきむかし。たいこ。おほこ。

おほ-むぎ ォォ〔大麥〕(名)【植】禾本科に屬する一年生又は二年生の直立草本。穎果は四列に相排びて並あり、重要なる農作物にして、種子は食用に供せられ、稈(ワラ)は帽子其他麥稈細工の原料に用ひらる。

おほ-むね ォォ〔大旨〕(名、副) だいたいの主意。おほよそ。たいてい。たいりやく。「—皆愚物」。

おほ-むら ォォ〔大村〕(名) 戸數多き村。

おほ-むらじ ォォ〔大連〕(名) 上古、大臣とならびて朝政に參與せしもの。多くは、臣(オミ)又は連(ムラジ)の姓の家のもの任ぜられたり。

おほ-め ォォ〔大目〕(名) ❶二百目を一斤とするもの。❷寬大なること。「—に見てやる」。

おほ-めかし ォォ(形、二) たしかならず。判然せず。

おほ-めかす ォォ(他、さ四) ほのめかす。

おほ-めく ォォ(自、か四) あきらかならず。ほのめく。判然せず。

おほ-めつけ ォォ〔大目附〕(名) 德川幕府の職名。諸大名の藩中の監督をなし、目附け役。

おほ-もと ォォ〔大本〕(名) 物事の第一のもと。

おほ-もとゆひ ォォ〔大元結〕(名) いれもとゆひ。

おほ-ものぐひ ォォ〔大物食〕(名) 大食すること。又、其人。(饕餮)。

おほ-もん ォォ〔大門〕(名) ❶第一のおもてもん。(正門)。❷東京にて、遊廓の入口の稱。

おほ-や ォォ〔大屋〕(名) ❶おもや。ほんけ。❷借家の貸し主。いへぬし。

おほ-やう ォォ〔大樣〕(名) ❶おほかた。たいりやく。❷寬大にして細事にかゝづらはざること。沈着にして悠然のひなびかざること。おほまか。

おほ-や-かず ォォ〔大矢數〕(名) 射術にて、京都三十三間堂のとほし矢の數の稱。

おほ-やけ ォォ〔公〕(名) ❶大宅(オホヤケ)の義。朝廷又は政府。おかみ。❷官廳又は官事。やくしよ。❸世間又は衆人。❹表だちたること。ひそかならぬこと。(公然)。❺私曲なきこと。❻私の占有にあらざること。共同。——ごと〔公事〕(名) ❶宮中の大儀節會など、重だちたる事の總稱。❷すべて、自己の私にあらずして、表だちたる事の總稱。——ばら〔公腹〕(名) ❶わたくしにあらずして、腹を立つること。❷おほやけに關したる物事に就きていきどほり。(公憤)。——びと〔公人〕(名) 朝廷又は政府に事ふる人。くわんり。やくにん。——ざた〔公沙汰〕(名) おもてだちたる政府の手をわづらはすこと。(公判)。

おほ-やしま ォォ〔大八洲〕(名) 大日本國の一名。即ち、本土・四國・九州・隱岐・佐渡・淡路・壹岐・對馬の島々の總稱。

おほ-やすみ-どの ォォ〔大安殿〕(名)「だいあんでん」(大極殿)に同じ。

おぼ-ゆ ォォ〔覺〕(他、や下二) ❶心にうかぶ。おもはる。❷心に悟る。さとる。❸心にとどむ。おぼえる。わすれず。

おほ-ゆび ォォ〔大指〕(名) 手足の指の中の一番ふときもの。おやゆび。(拇)。